

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21

平成16年度発掘調査報告

(第2分冊)

平成17年3月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21

平成16年度発掘調査報告

(第2分冊)

平成17年3月

鎌倉市教育委員会



净妙寺旧境内遗跡



無量寺跡

総 目 次

(第2分冊)

口絵	
目次	I
鎌倉市全図	III
4 浄妙寺旧境内遺跡 (No.408) 浄明寺三丁目126番	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の概要	8
第3章 検出遺構と遺物	12
第4章 浄妙寺境内遺跡の花粉分析	44
第5章 まとめ	44
5 無量寺跡 (No.196) 扇ガ谷一丁目26番27外	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	105
第2章 調査経過とグリッド配置図・基本層序	108
第3章 検出遺構と出土遺物	112
第4章 まとめ	161
6 玉綱城跡 (No.63) 植木字相模陣425番 3外	
第1章 調査地点の諸環境	201
第2章 調査の概要	203
第3章 調査成果	203
第4章 まとめ	213
7 天神山城 (No.384) 山崎字宮廻747番 3	
第1章 遺跡位置と環境	223
第2章 調査の概要	224
第3章 調査成果	224
第4章 まとめ	229
8 感應寺跡 (No.225) 材木座六丁目722番 1	
第1章 環境と立地	234
第2章 調査の概要	236
第3章 遺構と遺物	238
第4章 調査成果	254
9 北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目407番 3 の一部	
第1章 遺跡位置と歴史的環境	263
第2章 調査の概要	269

第3章 検出遺構と出土遺物	275
第4章 まとめ	302
10 坂ノ下遺跡（No.217）坂ノ下53番の一部	
第1章 環境と立地	333
第2章 調査の概要	334
第3章 遺構と遺物	334
第4章 調査成果	338
11 円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字松岡1344番	
第1章 遺跡位置と歴史的環境	347
第2章 調査の概要	350
第3章 発見された遺構と遺物	355
第4章 まとめ	398

鎌倉市全図

1:50,000



じょうみょうじきゅうけいだいいせき
淨妙寺旧境内遺跡 (No.408)

淨明寺三丁目126番地点

例　　言

1. 本報は、淨妙寺旧境内遺跡（No408）の所在する遺跡内の鎌倉市淨明寺三丁目126番地における個人専用住宅（地下室）の新築に伴う緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、平成14年1月15日～同年3月6日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3. 調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原 康志

調査員：須佐直子、太田美智子、須佐仁和、早坂伸市、中川建二、梅岡渙音

調査補助員：宇都洋平、高橋拓也、野崎美帆、山口正紀（鶴見大学生）、銘刈春也、橋本和之、

原 考史（国士館大学生）

調査作業員：石井清司、小川洋輔、小口照男、山崎一男（社）鎌倉市シルバー人材センター

協力機関名：社鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所

4. 本報の執筆は、第1・3章を原、第2章を須佐直子、第4章を鈴木 茂（パレオ・ラボ）がそれぞれ分担執筆し、第5章については調査員協議のもと原が稿を草した。

挿図作成には太田、早坂、中川、梅岡、宇都、野崎、山口、原（考）、橋本が行なった。

5. 本報掲載の写真是、全景、個別遺構を原、須佐（直）・出土遺物を須佐（仁）が撮影した。

6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7. 本報の凡例は、以下の通りである。

・図版縮尺　全圖図：1/80

遺構図：1/20、1/40

遺物図：1/3、1/6（常滑窯の一部）

・遺構図版　　遺構のレベルは海拔標高の数値を示している。

・遺物図版　　- - - - - は釉薬の範囲を示す。黒塗りは澄明皿に付着した油煙煤を表現している。

8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。

秋山哲雄、大三輪龍彦、岡 陽一郎、小野正敏、河野眞知郎、柴川 泉、小林康幸、斎藤慎一、

佐藤仁彦、沙見一夫、宗臺秀明、宗臺富貴子、田代郁夫、玉林美男、塚本和弘、樋 実、手塚直樹、

橋場君男、松尾宜方、馬淵和雄、桃崎佑輔

目 次

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境.....	5
1. 遺跡の位置.....	8
2. 歴史的環境.....	9
第2章 調査の概要.....	8
1. 調査の経過.....	8
2. 測量軸の設定.....	9
3. 層序と生活面.....	9
第3章 検出遺構と遺物.....	12
1. 第1面の遺構・遺物.....	12
2. 第2面の遺構・遺物.....	19
3. 第3面の遺構・遺物.....	24
4. 第4面の遺構・遺物.....	24
第4章 净妙寺境内遺跡の花粉分析.....	44
第5章 まとめ.....	44

挿図目次

図1 調査地点周辺図.....	6	図24 ピット出土遺物.....	32
図2 净妙寺境内古絵図.....	7	図25 第1面下～第2面出土遺物（1）.....	33
図3 調査区設定図.....	11	図26 第1面下～第2面出土遺物（2）.....	34
図4 調査区東・南壁、溝1・3土壌図.....	12	図27 第1面下～第2面出土遺物（3）.....	35
図5 第1面全測図.....	15	図28 第3面全測図.....	37
図6 建物1・2.....	16	図29 建物1・2.....	38
図7 土壌1・2・9～13.....	17	図30 土壌2.....	39
図8 溝1遺物出土状況.....	18	図31 土壌6石分布図.....	40
図9 ピット3～5・12・28.....	18	図32 土壌12.....	41
図10 建物・土壌出土遺物.....	19	図33 土壌出土遺物（1）.....	42
図11 溝1出土遺物（1）.....	20	図34 土壌出土遺物（2）.....	43
図12 溝1出土遺物（2）.....	21	図35 土壌出土遺物（3）.....	44
図13 ピット出土遺物.....	22	図36 土壌出土遺物（4）.....	45
図14 第1面出土遺物.....	23	図37 ピット出土遺物.....	46
図15 第2面全測図.....	25	図38 第2面下～第3面出土遺物（1）.....	47
図16 土壌9.....	27	図39 第2面下～第3面出土遺物（2）.....	48
図17 土壌10・11.....	28	図40 第4面全測図.....	51
図18 土壌出土遺物（1）.....	28	図41 土壌1～3.....	52
図19 土壌出土遺物（2）.....	29	図42 土壌5・かわらけ溜り.....	53
図20 土壌出土遺物（3）.....	30	図43 土壌・ピット出土遺物.....	54
図21 溝2出土遺物.....	30	図44 第3面下～第4面出土遺物.....	55
図22 磁石溜り出土遺物.....	30	図45 净妙寺旧境内遺跡の主要花粉化石.....	82
図23 遺物溜り出土遺物.....	31		

遺物観察表

表1 出土遺物観察表(1)	57	表13 出土遺物観察表(13)	69
表2 出土遺物観察表(2)	58	表14 出土遺物観察表(14)	70
表3 出土遺物観察表(3)	59	表15 出土遺物観察表(15)	71
表4 出土遺物観察表(4)	60	表16 出土遺物観察表(16)	72
表5 出土遺物観察表(5)	61	表17 出土遺物観察表(17)	73
表6 出土遺物観察表(6)	62	表18 出土遺物観察表(18)	74
表7 出土遺物観察表(7)	63	表19 出土遺物観察表(19)	75
表8 出土遺物観察表(8)	64	表20 出土遺物観察表(20)	76
表9 出土遺物観察表(9)	65	表21 出土遺物観察表(21)	77
表10 出土遺物観察表(10)	66	表22 出土遺物観察表(22)	78
表11 出土遺物観察表(11)	67	表23 出土遺物観察表(23)	79
表12 出土遺物観察表(12)	68	表24 産出花粉化石一覧表	83

写 真 図 版

図版1 産出花粉化石の顕微鏡写真	85	図版9 a. 第4面全景(北から)	93
図版2 産出花粉化石の顕微鏡写真	86	b. 溝3	
図版3 a. 調査地近景(北から)	87	c. 溝1・3南側土層堆積	
b. 第1面全景(北から)		d. 溝1・3北側土層堆積	
c. 溝1(東から)		図版10 a. 第4面かわらけ溜り	94
図版4 a. 第1面土壤2遺物出土状況	88	b. 土壌5	
b. 土壌9~11		c. 土壌3	
c. 土壌10土層堆積		d. 土壌1・2土層堆積	
d. 土壌13		e. 調査区東壁土層堆積	
e. P3遺物出土状況		f. 調査区東壁土層堆積	
f. P4・5		g. 調査区北壁土層堆積	
g. P12遺物出土状況 h. P28		h. 調査区南壁土層堆積	
図版5 a. 第2面全景(北から)	89	図版11 a. 建物1	95
b. 莽石出土状況		b. 土壌3・5・7・11・12	
c. 澄戸仏華瓶出土状況		c. 溝1	
図版6 a. 遺物溜り2	90	d. P1・9・14・15・18・20・28・29	
b. 土壌9		e. 第1面上	
c. 土壌9瀬戸入子出土状況		図版12 a. 土壌1・2・5~7	96
d. 土壌10		b. 土壌9	
図版7 a. 第3面全景(北から)	91	c. 土壌10・11	
b. 土壌6・建物1・2(南から)		d. 溝2	
c. 土壌12遺物出土状況		e. P6・14・15	
図版8 a. 土壌2	92	図版13 a. 遺物溜り	97
b. 土壌6		b. 第1面下~第2面	
c. 土壌9		図版14 a. 土壌1・4・5・7	98
d. 土壌12		b. 土壌2・6	
e. 鍋瓦出土状況		c. 土壌9	
f. 鍋瓦出土状況		d. 土壌12	

e.	P 1・3・5・18～20	c.	P 3・5～8
f.	第2面下～第3面	d.	かわらけ滲り
図版15 a.	第2面下～第3面……………99	e.	第3面下～第4面
b.	土壤4・5		

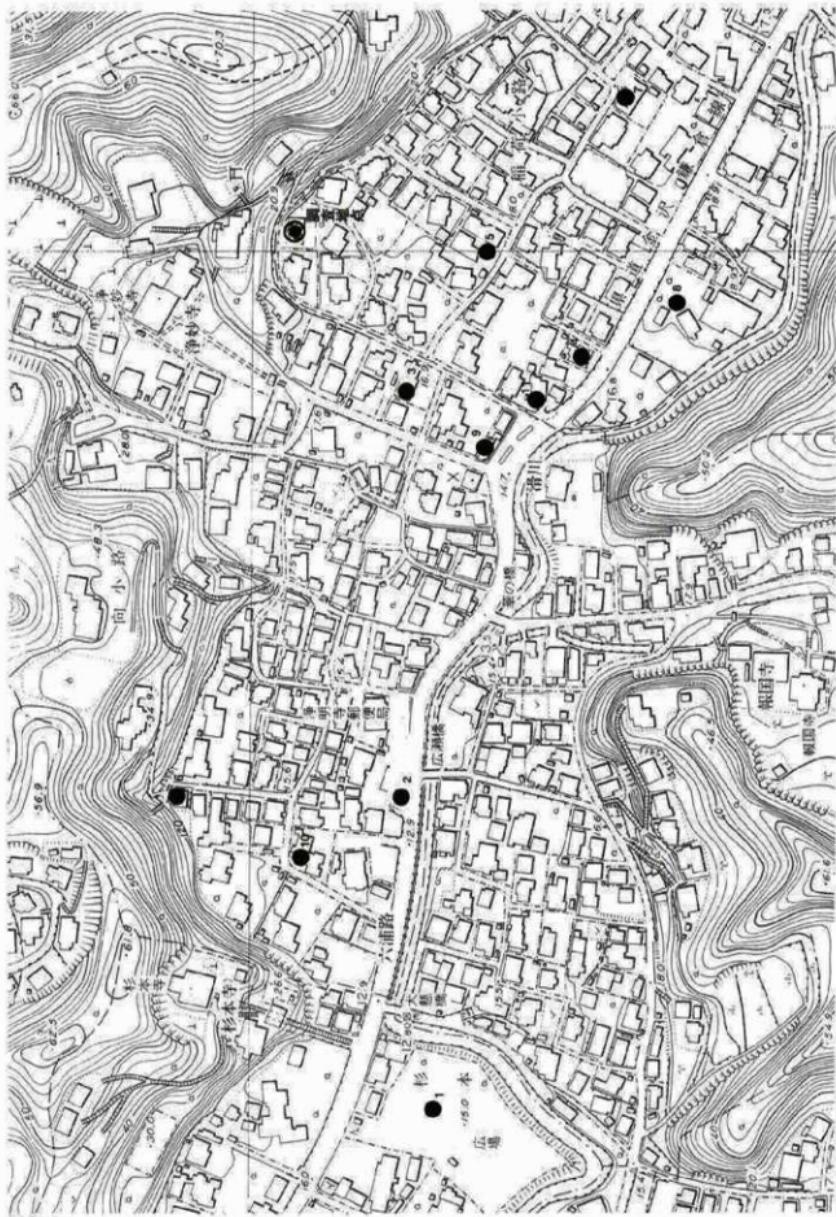


図1 調査地点周辺図

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

本遺跡は、鎌倉市街地の北東部浄明寺地区、JR鎌倉駅から北東に約2.1km程のところにあたり滑川中流域の右岸に位置している。北側と南側には多くの支谷を擁する低い丘陵が形成されており、その谷間を滑川が蛇行して西流している。滑川と並走するように県道金沢鎌倉線（以下では中世の呼称に従い「六浦道」と表記する）が通っている。本調査地点は鎌倉五山の一つ、稻荷山淨妙寺境内の北東域の一角にあたり、鎌倉市浄明寺三丁目126番に所在する（図1）。本調査地点付近に存在する史跡としては、六浦道沿い西方に行基の創建したと言う伝説をもつ天台宗古刹の杉本寺（西へ約400m）や滑川に架かる華の橋を渡ると宅間ヶ谷（宅間上杉氏の屋敷跡という）があり足利氏ゆかりの報国寺（西南約300m）の旧跡が存在しており、北西に大休寺・延福寺跡や本遺跡の東域には、「公方屋敷」や「御所ノ内」の地名が示すように足利氏の屋地が展開していた場所でもある。

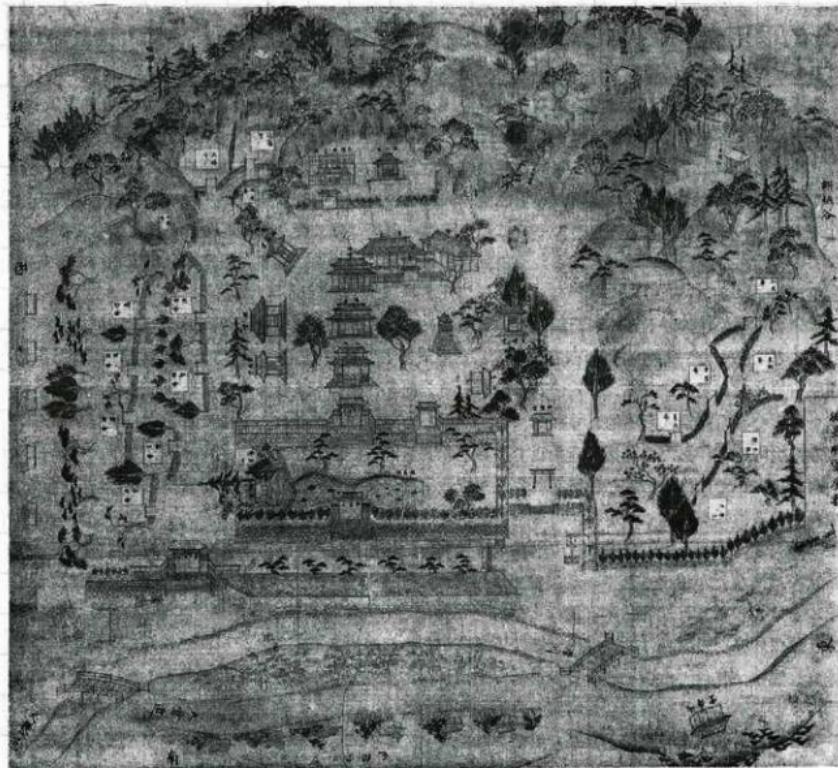


図2 淨妙寺境内古繪図

2. 歴史的環境

淨妙寺は山号を稻荷山という。文治四年（1188）に足利義兼により開創、開山は退耕行勇と伝える。その草創は密教系の寺院で極楽寺と称していた。鎌倉時代中期に蘭渓道隆の弟子月峯了然が入寺してから禅刹に改宗し、寺名も淨妙寺に改められる。その辺の事情については、月峯了然「元享訖書」に「正嘉之元住相之極楽寺今淨改名」と見られるので確かであろう。また改宗した時期については正嘉年間（1257～1259）頃と推定されている。歴代には名僧が多く、約翁徳儉・高峰顯日・竺仙梵懶・天岸慧広などが住寺していたことが知られる。中興開基は足利尊氏の父貞氏であり、鎌倉五山の第五位に列せられたのは延文三年（1358）頃で、その当時に最も繁栄したと考えられるが寺史や伽藍規模など正確にはわからない。淨妙寺東隣には鎌倉御所があるため戦乱のたびに戦場となり被災したことが想像されできる。永享の乱（1438年）の折、三浦時高は大倉犬懸谷付近に火を放っており、その際にも戦火に見舞われた可能性があり、度重なる被災が衰退へと導いていったものと推測される。

現在の寺容は、門・本堂・客殿・庫裡や熊野神社、再興された茶室の喜泉庵などだけが丘陵を背にした谷戸内だけを境内域としているが、盛時には南辺が六浦道まで達する全面の平地部分も擁した広い範囲を占め、諸堂宇や多くの塔頭などにより伽藍が形成されていた。淨妙寺には往古の盛んな寺容を想起して江戸時代に描かれた『淨妙寺境内絵図』（図2）が所蔵されている。この古絵図が14世紀頃の盛時の姿をどこまで正確に描写したものか定かでないが、以下に主要な堂宇や塔頭などを記しておく。

六浦道側に築堤を構えた総門を入れると般若池、中門とその後方に山門・仏殿・法堂が一直線上に並び、法堂裏に方丈・庫裡を配し、その背後に開山塔・大檀那盡廟を描いている。山門・仏殿の西側に文殊堂・禪堂とその北に経堂を置き、東側には鐘楼・浴室・荒神堂、池の西には諏訪社や塔頭の直心庵を描いている。東西の山裾には、靈芝庵・瑞龍庵・法官庵等々の十数庵の塔頭がみられ、裏山の山腹に稻荷社・牛頭社・熊野社の名もみえている。この古絵図の東端には「從是將軍屋敷」と注記されており、鎌倉御所の存在が想起されており、また滑川に架かる東西二つの橋に挟まれた南には報国寺のある宅間谷と記されている。

本調査地点の周辺でも多くの発掘調査が実施されており、以下に各地点の調査成果を簡単に述べることにする。図1で六浦道沿いの西端に位置した地点1（二階堂912番1外：馬淵他2002）にあたる杉本寺周辺遺跡の調査で鎌倉時代初期の薬研堀や道路、掘立柱建物が多数検出された。遺跡は六浦道沿いに居を構えた有力御家人の屋地と思われ、和田一族との関係が想像される地点でもある。地点2～6は淨妙寺旧境内遺跡にあたる発掘調査地点である。六浦道沿いに位置した地点2（淨明寺三丁目6番3外：大河内1996）では後世の著しい搅乱により中世地山まで削平され明確な遺構は検出されていないが、僅少の中世遺物に交じって弥生時代の中期後半～後期前半にかけての宮ノ台期や久ヶ原期の土器が出土した。地点3（淨明寺三丁目90番1：田代・原1991）では13世紀前半～15世紀前半の両側に側溝を伴う道路状の遺構などが検出されている。地点4（淨明寺三丁目115番2：宗臺・松山1999）は13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物・堀・溝などの遺構が検出された。地点5（淨明寺三丁目129番2：大三輪・原・福田1985）の調査は、旧境内東側の塔頭域があった場所と推定され、14世紀から15世紀にかけての掘立柱建物・井戸・土壤・溝などの遺構を検出した。地点6（淨明寺三丁目16番1：宗臺2002）では掘削深度の規制により中世期に帰属する遺構は検出されていないが、調査区南側では中世前半期に遡る遺物包含層の発見により遺構の存在が示唆されている。この他に淨妙寺旧境内遺跡の今年度調査事例として、地点9～11で実施されている。地点7（淨明寺三丁目143番2：橋場・原1994）は公方屋敷跡（No

268)にあたり、関東公方足利氏の屋敷と伝える地域の一角である。調査では13世紀前葉～15世紀前葉の3時期の生活面に伴う道路と側溝、建物・井戸・かわらけ溜りなどの遺構が検出された。本遺跡の南方、六浦道沿いに位置した地点8(浄明寺福荷小路遺跡)は昭和56年(1981)に調査が実施され、鎌倉時代後期～南北朝期に属する六浦道の側溝や武家屋敷跡を想起させる掘立柱建物・井戸・土壙などが検出された。

【引用・参考文献】

- 石井 進 1999「[もののふの都] 鎌倉と北条氏」石井 進編 新人物往来社
大三輪龍彦 1976『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版
河野眞知郎 1995「中世都市鎌倉—遺跡が語る武士の都—」講談社選書メチエ49
三浦勝男 1992『鎌倉の古絵図』鎌倉国宝館図録 第15集 鎌倉市教育委員会
貫 達人・川副武胤 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉魔寺辞典』西講堂
山田邦明 1992「室町時代の鎌倉」五味文彦編『都市の中世』吉川公文館
大三輪龍彦・原 康志・福田 誠 1985「(浄妙寺)境内遺跡(No.408) - 浄明寺三丁目12番2地点-」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
田代裕夫・原 康志・大河内 勉 1991「(浄妙寺)境内遺跡(No.408) - 浄明寺三丁目9番1地点-」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
松山一朗・宗庭宮貴子・宗庭秀明 1996「(浄妙寺)境内遺跡(No.408) - 浄明寺三丁目6番3外地点-」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
横場君男・原 康志・馬渕和雄・岡 陽一郎・鎌治尾勝二・松原康子 1999「(浄妙寺)境内遺跡(No.408) - 浄明寺三丁目11番2地点-」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
1996「(方公屋敷跡)(No.268) - 浄明寺三丁目14番2地点-」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第1分冊)」鎌倉市教育委員会
2002「(杉本寺周辺遺跡)-鎌倉市二階堂杉本912番1ほか発掘調査報告-」鎌倉市教育委員会

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は鎌倉市内北東部、横浜市金沢区方面に向かう県道金沢鎌倉線沿いの浄明寺地区に所在しており、鎌倉五山のひとつ浄妙寺の旧境内域の一角に位置した鎌倉市浄明寺三丁目126番地点における個人専用住宅の建設に伴い実施された。平成13年9月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、当該工事計画に地下室を含む構造であったため、鎌倉市教育委員会により試掘調査の遺構確認を実施したところ現地表下80cm以下に中世遺物包含層及び数時期の遺構を伴う生活面の存在が明らかとなった。これによって当該土木工事の実施による埋蔵文化財に対する損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について事業主との数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法に基づく届出手続きと現地調査の開始時期や実施方法などの話し合いを経て、平成14年1月15日から調査面積85.05m²を対象として発掘調査を実施することとなった。

現地調査は、平成14年1月15日よりまず表土を重機によって掘削することから始められた。調査期間中は多量の湧水に悩ましながらの調査作業ではあったが、鎌倉時代中期～室町時代にかけて4時期の中世生活面と、それに伴う遺構・遺物が多数発見された。同年3月6日までの間に図面作成・写真撮影などの必要な記録保存を行ない、無事に現地調査を終了することができた。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記したので参考されたい。

日誌抄

- 1月15日 調査開始。機材搬入。調査区を設定し、重機による表土掘削。
16日 事務所用テント設営。ベルコン設定。第1面の遺構検出へ向けての荒掘り作業を開始。
19日 第1面の荒掘り及び遺構の検出作業。市4級基準点を基に測量用方眼坑を設定、原点レベルを調査地内に移動。
31日 第1面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
2月1日 第2面の遺構検出へ向けての荒掘り作業を開始。
9日 第2面の精査及び遺構の検出作業。溝中かわらけ溜りの写真撮影。
14日 第2面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図・個別遺構図の作成。
16日 遺物溜り遺構の遺物取り上げ。第3面の遺構検出へ向けての荒掘り作業を開始。
20日 遺物溜り遺構の写真撮影・平面図作成、遺物取り上げ。全測図・個別遺構図作成。
25日 第3面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影。
26日 第4面の遺構検出へ向けての荒掘り作業を開始。
3月4日 第4面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図・個別遺構図作成。
5日 調査区南壁堆積土層から花粉分析用の土壤サンプルを採取。
6日 現地調査終了。関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡し、機材撤収。

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定は、図3に示したように国土座標を用いて実施した。調査地北側の東西に走る道路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点2ヶ所のJ058及びJ060が確認されたので、J058とJ060を結んだ中心軸線上に任意のA点（J060から西方へ5.30m）を設定した後

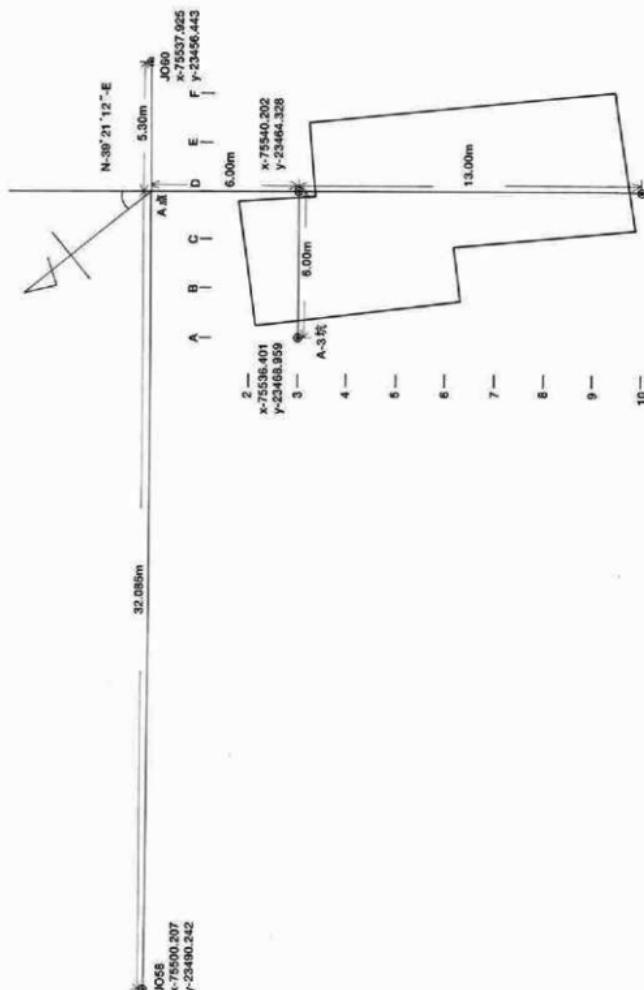


図3 調査区設定図

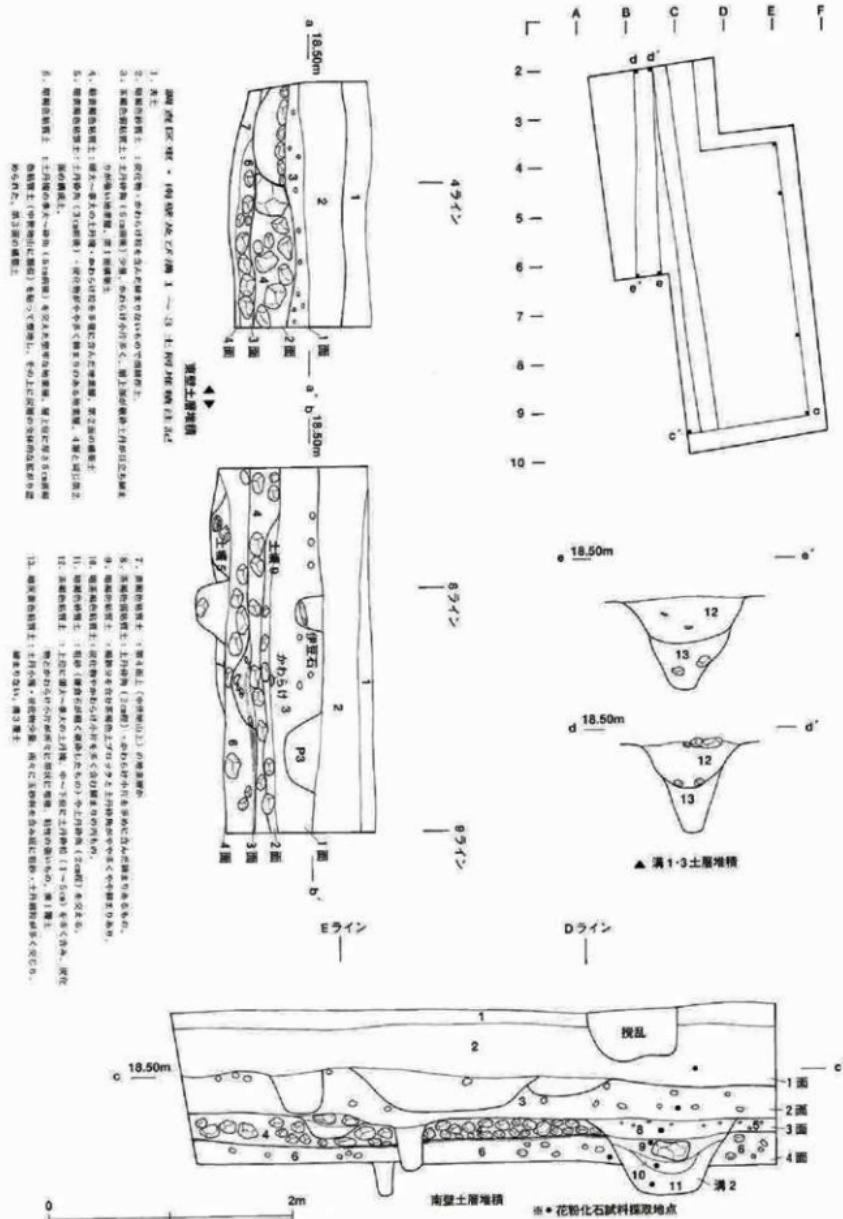


図4 調査区東・南壁、溝1・3土層図

にA点から調査区内の南へ6mの位置に調査基準点にあるD-3杭を設置した。その後、図3のように南北軸にアルファベットを西からA~F、東西軸に算用数字を北から1~10を附し、それぞれ2m方眼によりグリッド設定を行なった。市4級基準点（J058・J060）及びA-3杭・D-3杭における国土座標の数値は、以下の通りである。

J058 [X=-75511.207 : Y=-23490.242] A-3杭 [X=-75536.401 : Y=-23468.989]

J060 [X=-75538.925 : Y=-23456.443] D-3杭 [X=-75540.202 : Y=-23464.348]

図中の方位はすべて真北を採用し、グリッド方眼の南北軸線は真北より東に振れている。さらに調査地点の経緯は以下のようになる。

南北軸線：[N-39° 21'12" -E]

調査地点：東経 [139° 34' 27"] 北緯 [35° 19' 07"]

海拔標高の原点移動については、淨妙寺門前の路地を南方へ直進すると県道金沢鎌倉線に交差しているが、この合流地点の東側歩道に位置する花壇の植え込み中に設けられた鎌倉市3級水準点（所在地：淨明寺三丁目98-3先、BM.326 : L = 15.437m）を使用している。この鎌倉市3級水準点から調査地内のG-3杭上（L=19.641m）に仮水準点を移動した。文章中及び捕図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海拔標高を示している。

3. 層序と生活面

調査地点の堆積土層は概ね7層に区分されたが、その中で少なくとも4時期の生活面が確認され、調査区の南・東壁土層の堆積状態は、図4に示したとおりである。今回は地下室の築造に伴う発掘調査で調査区範囲の掘削深度が3m以上にも及ぶため、周囲にはH鋼が埋設して野板を差し込み土溜とする施工方法を用いている。そのため土層観察が困難になる状況と判断されたので重機による表土掘削を行なった後に調査区南壁と東壁に沿って50cmほどの幅で犬走り状に土層観察用のセクションベルトを設定し、それ以下を掘り下げて調査を実施した。従って、図4の土層堆積図には重機で掘削した約60~70cm前後の表土部分が殆んど含まれていないのはその関係によるものである。

現地表下約110cm前後までは表土（1層）と小片遺物を含んだ畑耕作土（2層）の厚い堆積土が確認された。これを除去すると、小土丹塊（3~5cm大）・かわらけ小片を多量に交えたもので、特に土丹角の混入が上部でやや強くなった茶褐色弱粘質土（3層）の弱い地業層が表出した。さらに上面で遺構も確認することができたので第1面として調査を行なった。この生活面は調査区南壁でみると、東から西に向かって緩やかに下がりながら傾斜しており、海拔標高は18.50m~18.35mである。また調査区東壁の土層観察でも解かるように南北方向は海拔標高18.50m前後ではほぼ平坦な生活面に整地している。4層は茶褐色粘質土で人頭大・拳大土丹を多量に交えた縮まりの強い地業層であり、第2面を構成している。この面の海拔標高18.20m前後で比較的平坦な生活面を構築している。厚さ20~30cmの4層を除去すると、南東城を中心に火災を想わす炭化物と焼土が薄く堆積した抜がりが確認された。この炭化物層を取り除いて表れたのが第3面とした6層にあたる地業層である。黄茶褐色粘質土で厚さ20cm程で拳大・小土丹塊を密に交えた強固な地業であり、海拔標高18.00m前後ではほぼ平坦な面を構築している。7層は暗茶褐色粘質土で土丹粒・炭化物をやや多く含んだ縮まりの強いもので調査区東側域を中心に認められた。さらにその下から検出されたのが中世地山にあたる第4面（明黄褐色粘質土）である。中世地山上面の海拔標高17.80m前後である。

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

この面で検出した遺構は、掘立柱建物2棟、土壙12基、溝1条、柱穴約30口などが確認された。出土遺物には多量のかわらけ、船載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦類、瓦質製品、銅錢、石製品などがみられた。

a. 掘立柱建物（図5・6・10、図版1・2）

建物1・2：調査区中央のB～D-4～6で検出された掘立柱建物であり、ほぼ同位置で2軒が重複して確認されたので建替えられたものと思われる。調査区内での規模は両建物ともに2間四方だけであり、東側は調査区外に拡がっている可能性が考えられる。建物1は、東西2間=368cmを測り、柱間寸法の芯々距離が西から186cm・182cmであり、南北2間=354cmを測り、南から176cm・174cmである。建物2は東西2間=364cmを測り、柱間寸法の芯々距離が西から184cm・180cmであり、南北2間=373cmを測り、南から190cm・183cmである。柱穴掘り方は、径40～60cmの円形または楕円形を呈し、深さ30～45cmほどである。土層観察による重複関係から建物2を壊して建物1が建替えられている。

出土遺物は（図10-1～6、図版）、建物1の柱穴からP25:1が瀬戸入子、P30:2が鉄釘、P34:3・4がロクロ成形の大皿と小皿のかわらけ、5が男瓦である。建物2の柱穴からはP15:5の瀬戸入子がみられた。

b. 土壙（図5・7・10、図版2・9）

土壙1：調査区南端、C-9グリットの位置で調査区外に拡がる形で検出され、土壙2を壊して掘り込まれている。楕円形を呈するものと思われ、確認された規模は東西軸158cm、南北軸73cm以上、深さ37cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色弱粘質土である。遺物は小片かわらけでだけで図示できるものは出土していない。

土壙2：南側は調査区外に拡がっている。確認できた規模は、東西軸約85cm、南北軸62cm以上、深さが20cmを測り、断面が浅い皿状を呈している。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。この遺構に伴う遺物は（図10-7）、7がロクロ成形の大皿のかわらけである。

土壙3：調査区南西域、C-8グリットに位置している。楕円形を呈し、規模は東西軸108cm、南北軸83cm以上、深さは30cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色弱砂質土である。出土遺物は（図10-8～12）、8～11がロクロ成形のかわらけ小・大皿であり、12が瓦質香炉である。

土壙5：調査区中央東端に位置している。長円形を呈し、規模は南北軸約110cm、東西軸55cm、深さが45cmを測り、断面が皿状を呈している。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。この遺構に伴う遺物は（図10-13）、唐草文字瓦である。

土壙7：調査区中央やや東寄りに位置し、建物1を壊して掘られ、また試掘 sondageの掘削により東側一部が不明である。不整円形を呈し、規模は東西軸152cm以上、南北軸135cm、深さは35cmを測る。覆土は炭化物・土丹粒をやや多く含む暗茶褐色弱粘質土である。出土遺物は（図10-14～19）、14が常滑窯底部、15が女瓦、18が砥石、16・17が石硯、19が鉄釘である。

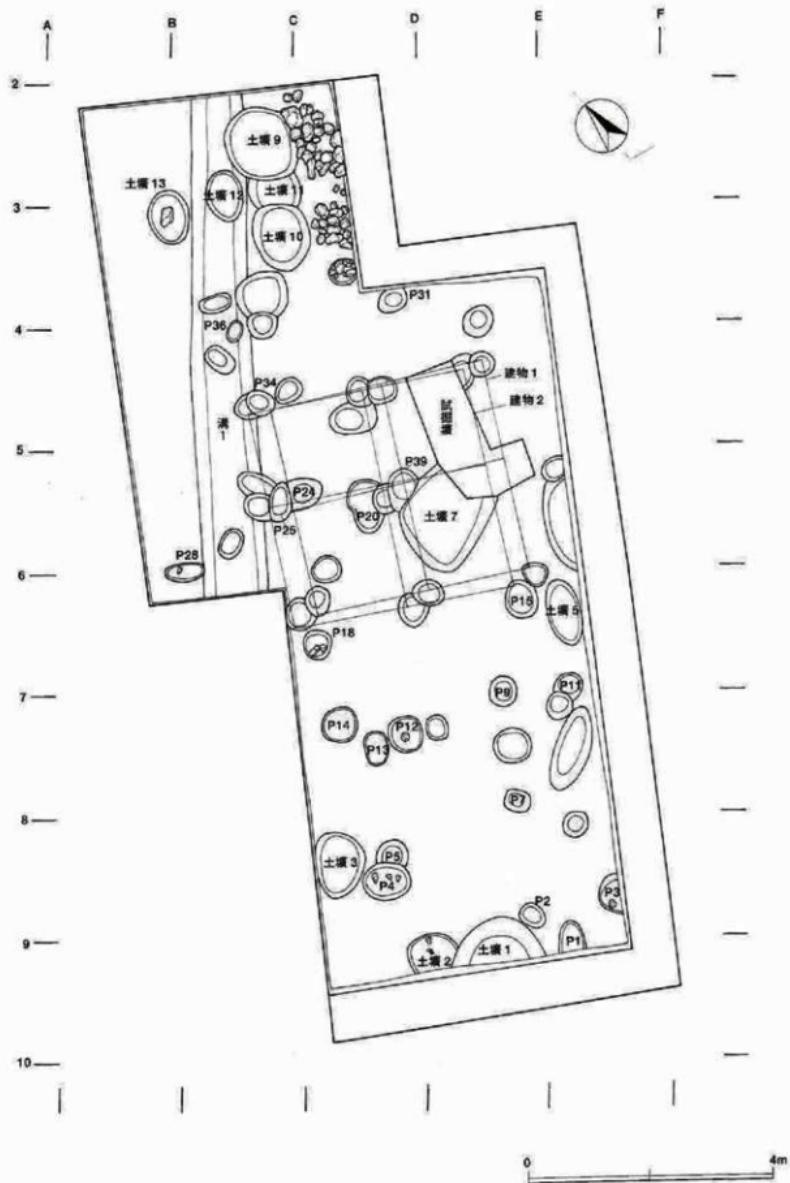


図 5 第1面全測図

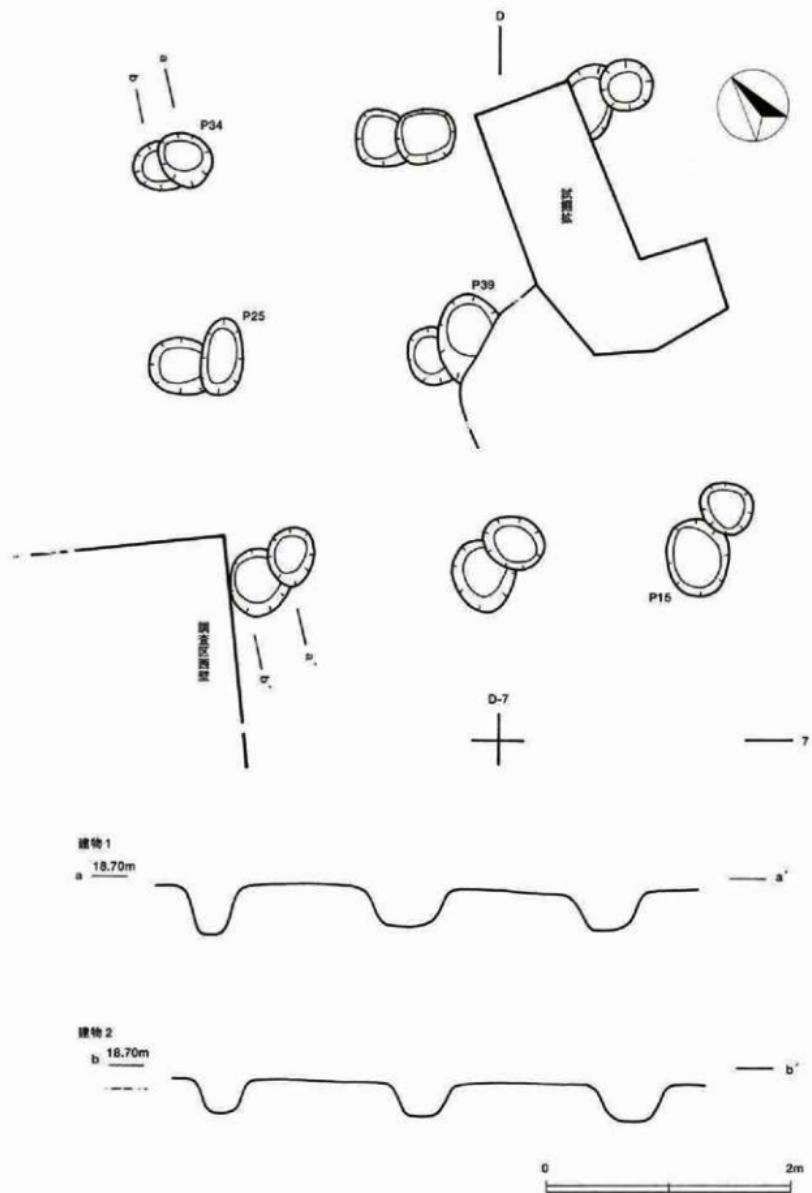


図6 建物1・2

土壤9：調査区北端の中央、B-2・3グリットの位置で土壤9～11が重複する状態で検出された。土壤10を壊して掘り込まれている。椭円形を呈し、掘り方規模は東西軸128cm、南北軸115cm、深さは20cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多く含んだ締まりない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は（図10-20・21）、ロクロ成形の小・大皿かわらけである。

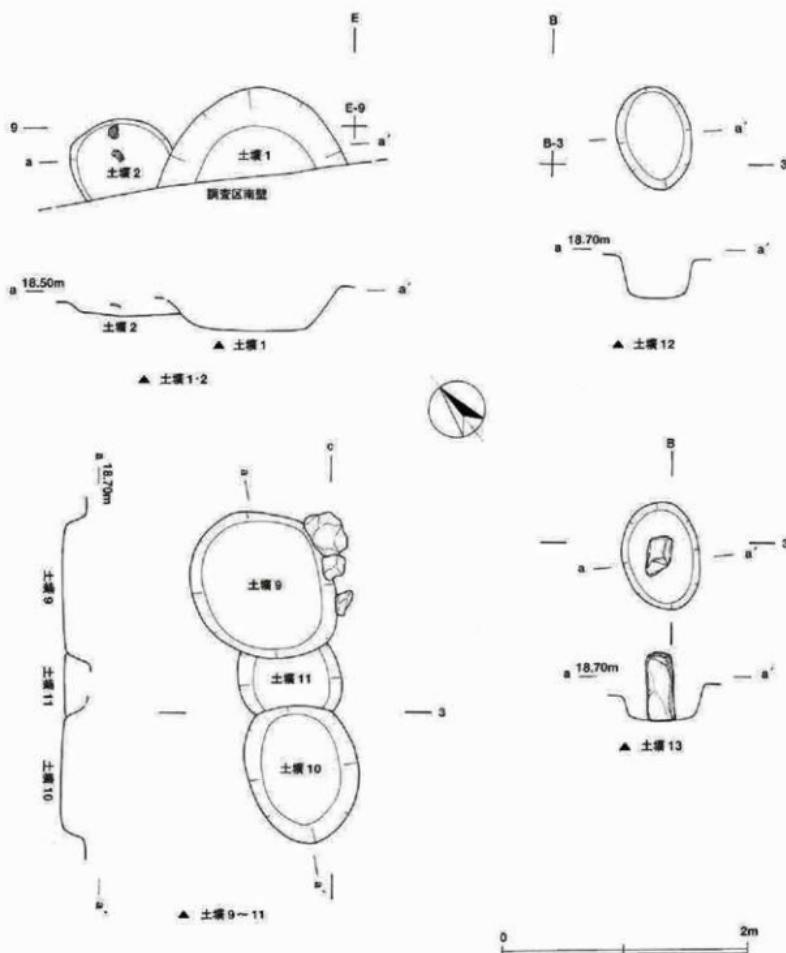


図7 土壌1・2・9～13

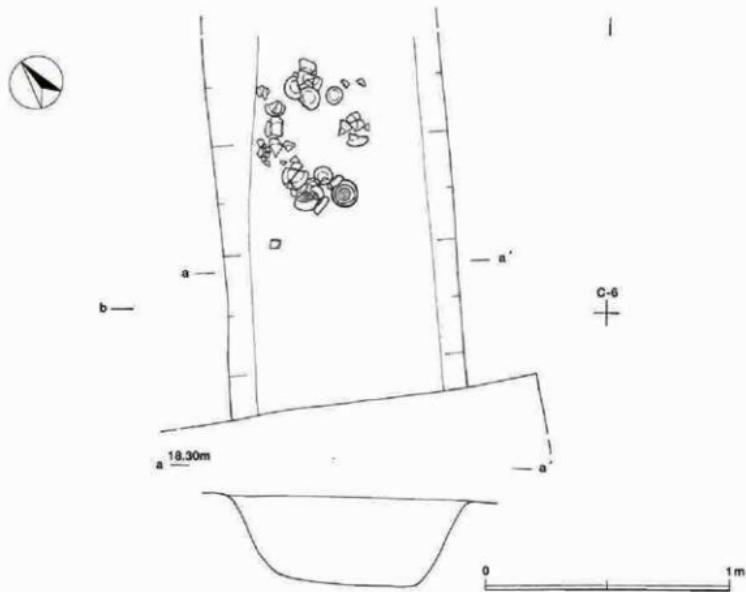


図8 溝1遺物出土状況

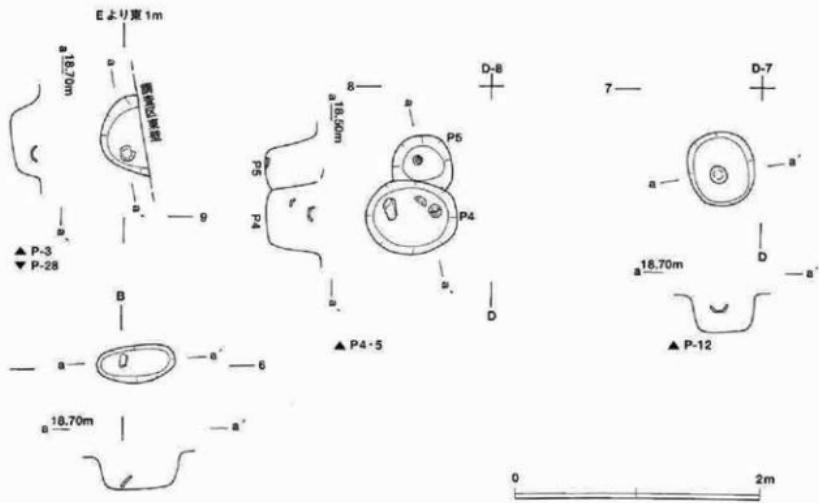


図9 ピット3~5・12・28

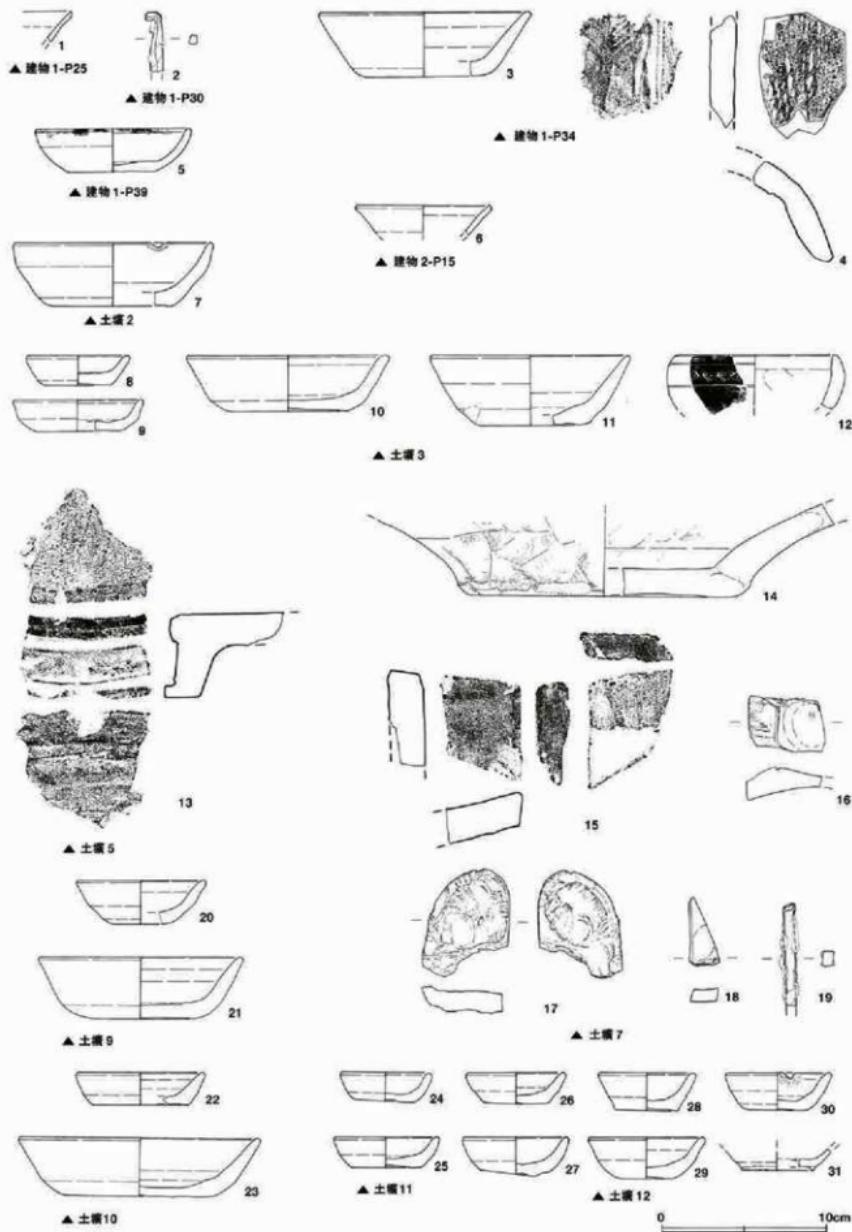


図10 建物・土壤出土遺物

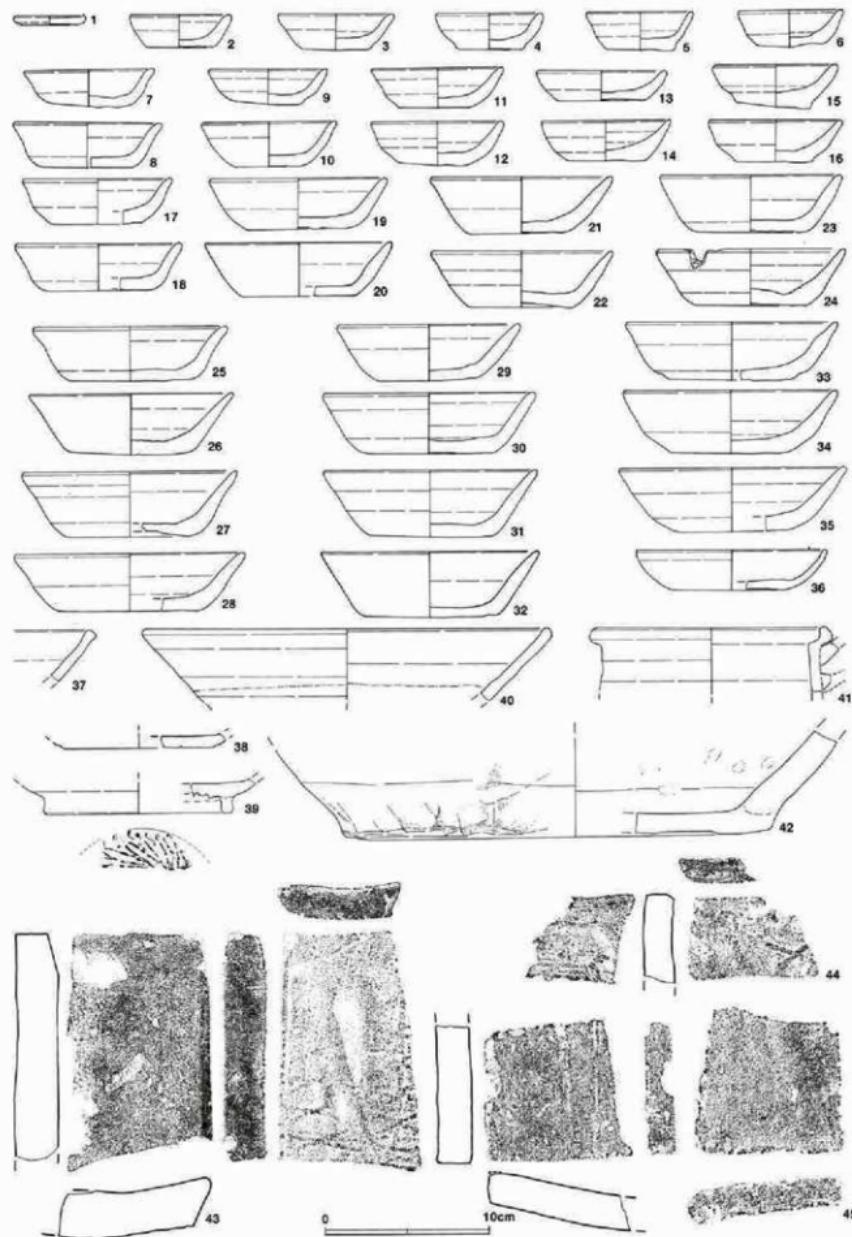


図11 溝1出土遺物(1)

土壤10：調査区北端の中央、土壤10を壊して掘り込まれている。梢円形を呈し、掘り方の規模は東西軸113cm、南北軸92cm、深さは20cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は土丹粒・かわらけ小片が多く含んだ締まりない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は（図10-22・23）、ロクロ成形の小・大皿かわらけである。

土壤11：土壤9・10に壊される形で検出された。規模は東西軸86cm、南北軸57cm以上、深さは20cmほど、形状はほぼ円形を呈すると思われる。覆土は炭化物・かわらけ小片の多い暗褐色砂質土である。出土遺物（図10-24・25）はロクロ成形かわらけ大・小皿だけである。

土壤12：土壤11の西隣で検出された。形状は梢円形を呈し、規模は南北軸85cm、東西軸58cm、深さ38cmである。掘り方断面は逆台形、覆土は上下2層からなり、下層は粘性や締まりの弱い茶褐色土、上層は暗褐色砂質土で土丹粒・炭化物を多めに含み、かわらけ小皿がある程度まとめて出土した（図10-26～31）。

土壤13：土壤12の西側に位置する。土壤中央に方柱状の切石（鎌倉石）を縦位に据えた状態で検出された。掘り方は梢円形を呈し、規模が東西軸90cm、南北軸65cm、深さ28cmである。鎌倉石は高さ56cm、幅23×15cmを測る。図示可能な遺物は出土していない。

c. 溝（図5・8・11・12、図版1・9）

溝1：調査区北西域、Dラインにほぼ沿って南北に走る溝であり、南北端は調査区外に延びている。

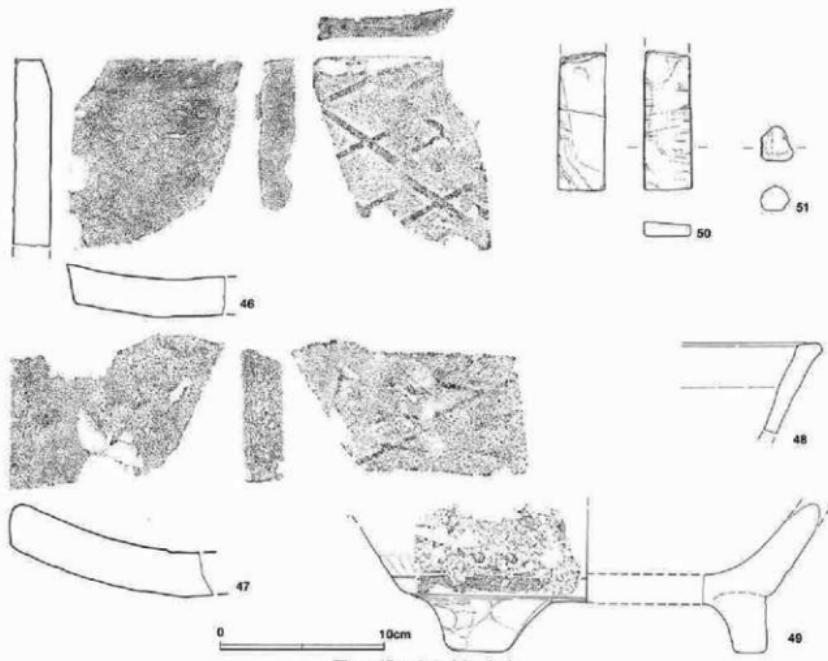


図12 溝1出土遺物（2）

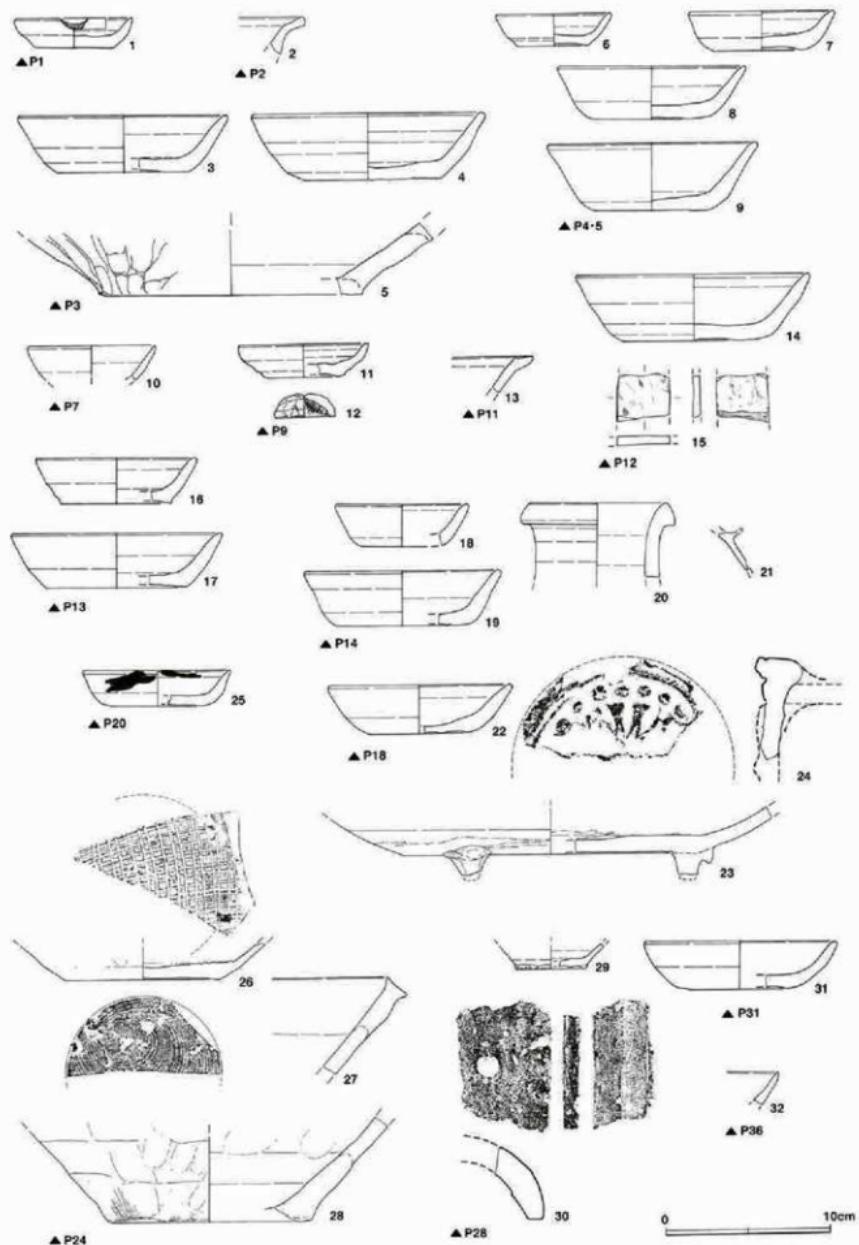


図13 ピット出土遺物

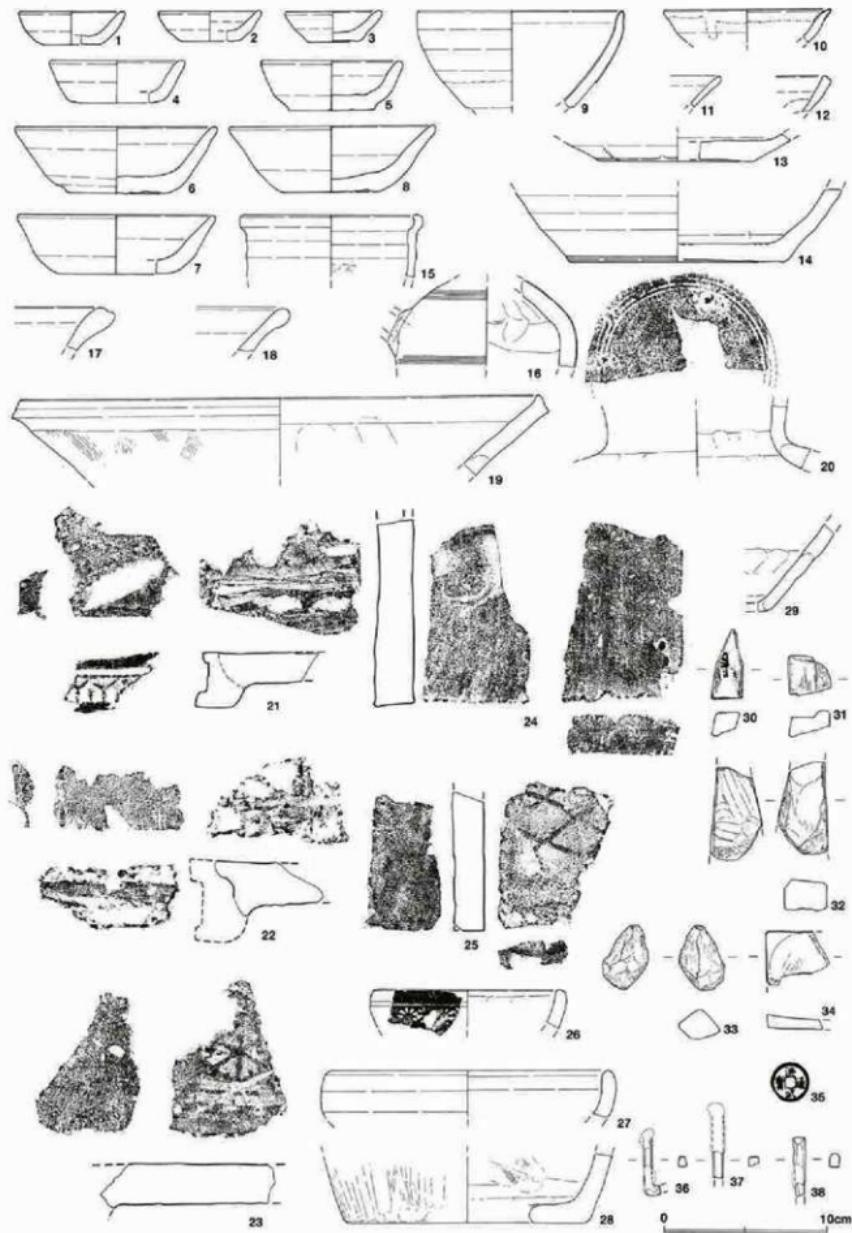


图14 第1面出土物

主軸方位はN-40°-Eを測り、建物1・2の南北位とはやや異なる軸方向を示している。規模は調査区内で長さ6.30mほどが確認され、上幅が90~105cm、下幅が65~75cmを測り、断面は逆台形状を呈している。確認面からの深さ約35~40cmであるが、溝1・3の堆積土層と軸方位を示した図4でも解かるようにほぼ真下に時期の古い溝（第4面検出の溝3）が確認されている。溝底の海拔標高をみると、南端で17.82m、北端で17.92mを測り、北から南に向かって緩やかな傾斜を示している。覆土は大小土丹塊を交えた炭化物やかわらけ小片が所々に層状を成した茶褐色粘質土で締まりが強く、覆土が分層できないことから、この溝は比較的短期間に埋め戻された可能性が想像できる。また南端の溝底面からは、かわらけを主体とした遺物がまとまって出土している（図8）。出土遺物（図11・12-1~51）は、1が極小のコースター状のロクロかわらけ、2~35がロクロ成形のかわらけ大・小皿である。36は白かわらけ、37~41が瀬戸窯の製品、42が常滑窯の壺底部、43~47が女瓦、48~49が火鉢、50・51が砥石である。

d. 柱穴（図9・13、図版2・9）

P3：調査区南東隅に位置する。柱穴掘り方は円形を呈し、径65cm程、深さ28cmと浅い掘り込まれたものである。覆土中からはロクロ成形のかわらけ大皿が2点と常滑窯握鉢の底部片が出土している（図13-3~5）。

P4・5：調査区南西隅に位置し、P5がP4を壊して掘り込まれている。柱穴掘り方はP4が円形を呈し、径約50cm、深さ45cmを測る。P5は梢円形を呈し、長径75cm・短径50cm、深さ47cmであり、底面西側に長さ20cm程の根石と思われる土丹塊が据えられていた。覆土中からの遺物は、P4がロクロ成形のかわらけ小皿（図13-6・7）がみられ、P5にはロクロ成形のかわらけ大皿（図13-8・9）が出土している。

P12：B-7杭の西隣に接した位置で検出された。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し、径80cm程、深さ35cmを測り、断面逆台形の掘り方をもつ。覆土中からはロクロ成形のかわらけ大皿と砥石が出土している（図13-14・15）。

P28：B-6杭に位置する。柱穴掘り方は長梢円形を呈し、長径65cm、短径35cm程、深さ30cmを測る。覆土中からは東濃型の山茶碗と男瓦小片が出土している（図13-29・30）。

その他の柱穴に関しては、各柱穴覆土中から出土した遺物の概略を触れておくことにする（図13-1・2・10~13・16~28・31~32）。

P1：1がロクロ成形のかわらけ小皿、P2：2が瀬戸窯の折縁深皿、P7：10が白かわらけ、P9：11がロクロ成形のかわらけ小皿、12が用途不明の土製品、P11：13瀬戸窯の鉢、P13：16・17がロクロ成形のかわらけ中・大皿、P14：18・19がロクロ成形のかわらけ大・小皿、20が白磁の四耳壺、21が土器、P18:22がロクロ成形のかわらけ大皿、23が瀬戸窯の折縁深皿、24が菊花文風の現当文様をもつ鏡瓦、P20:25がロクロ成形のかわらけ小皿であり燈明皿として使用、P24：26が瀬戸窯の鉢、27・28が常滑窯の握鉢、P31：31がロクロ成形のかわらけ中皿、P36：32が白かわらけである。

また図14（1~38）及び図版9（右下・e写真）に図示した遺物は、造構外の第1面及び面上包含層に伴って出土したものである。遺物の種類には、ロクロ成形のかわらけ大・中・小皿（1~8）、瀬戸窯製品の天目茶碗・縁釉小皿・折縁深皿・水注など（9~16）、常滑窯製品の捏鉢・壺類（17~20）、屋瓦類の宇瓦・女瓦（21~25）、瓦質製品の香炉・火鉢（26~28）、石製品の砥石・火打石、金属製品の銅鏡・鉄釘などがみられた。なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

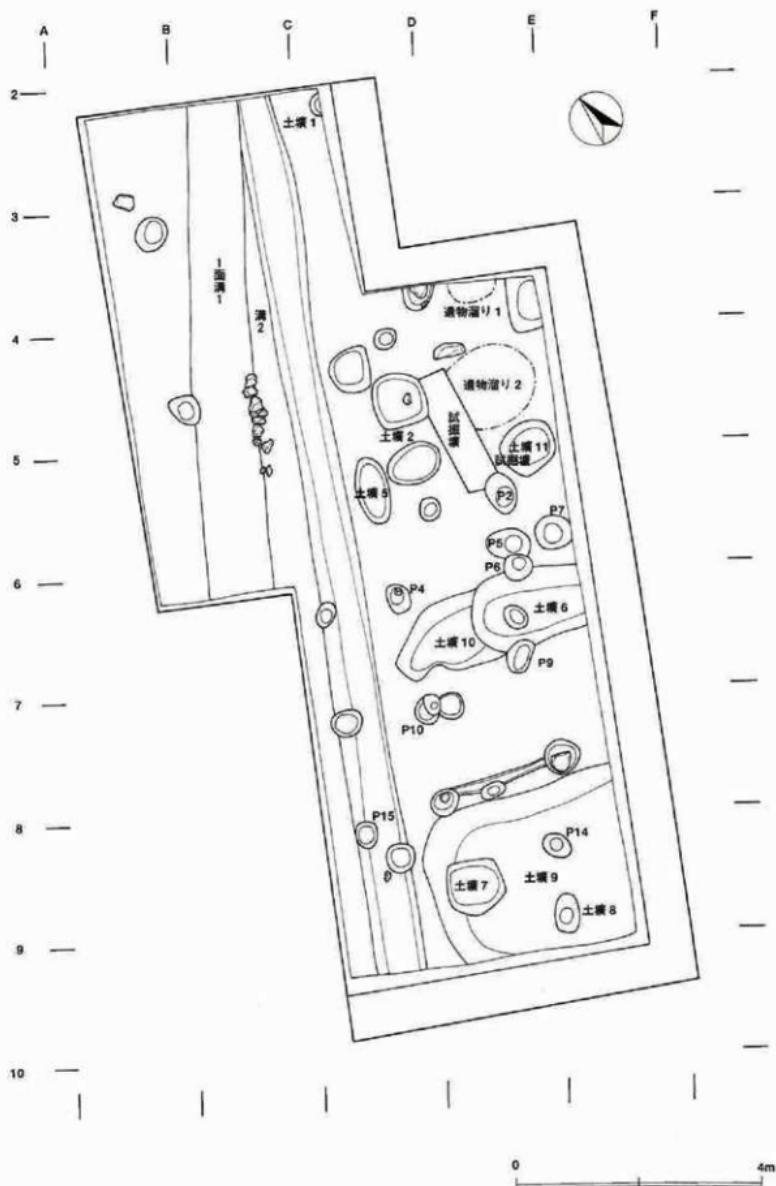


図15 第2面全測図

2. 第2面の遺構・遺物

この面で検出した遺構は、土壙12基、溝1条、遺物溜り2ヶ所、柱穴約20口などが確認された。出土遺物には多量のかわらけの他、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦類、瓦質製品、土製品、金属製品、石製品などがみられた。

a. 土壙 (図15~20、図版3・4・10)

土壙1：調査区北端、C-2グリットの位置で調査区外に拡がる形で検出された。梢円形を呈するものと思われ、確認された規模は東西軸58cm、南北軸33cm以上、深さは37cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色弱砂質土である。

この遺構に伴う遺物は(図18-1~5)、1~3がロクロ成形のかわらけ小・大皿、4が白磁口元皿、5が鉄釘である。

土壙2：調査区北側中央に位置する。規模は、東西約88cm、南北92cm以上、深さが35cmを測り、隅丸方形の形状で断面が浅い皿状を呈している。覆土は炭化物、かわらけ小片を多く含んだ締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。

この遺構に伴う遺物は(図18-6・7)、6がロクロ成形の小皿、7が常滑窯の口縁部片である。

土壙5：土壙2の北西に位置する。長円形を呈し、規模は南北軸113cm、東西軸55cm、深さ30cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色弱砂質土である。

出土遺物は(図18-8・9)、8が青磁折腰皿であり、9が東美濃系の山皿である。

土壙6：調査区中央東端に位置し、調査区外に拡がる大型土壙である。土壙10を壊して掘り込まれている。長円形を呈し、規模は東西軸約186cm以上、南北軸132cm、深さが15cmを測り、断面が浅い皿状を呈する。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く含んだ締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。

この遺構に伴う遺物は(図18-10~16)、10~14がロクロ成形のかわらけ小・中・大皿、15・16が北宋銭「元豊通宝」である。

土壙7：調査区中央南端に位置し、土壙7に上部を壊されている。隅丸方形に近い形状を呈し、規模は東西88cm、南北92cm、深さが20cmを測り、断面が逆台形状を呈している。覆土は小土丹塊を含み、炭化物とかわらけ小片が多い締まりのない茶褐色弱砂質土である。

この遺構に伴う遺物は(図18-17)、瀬戸入子である。

土壙8：土壙9に上部を壊されている。梢円形を呈し、規模は東西軸65cm、南北軸43cm、深さ30cmを測る。掘り方は断面が擂鉢状を呈しており、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色弱砂質土である。

出土遺物は(図10-18・19)、ロクロ成形のかわらけ小皿である。

土壙9：調査区南端に位置した大型土壙で南・東側は調査区外に拡がっている。規模は東西約330cm以上、南北280cm以上、深さ15cmを測り、断面が浅い皿状を呈している。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く含んだ締まりのない暗茶褐色弱砂質土、遺構内からはかわらけを主体に多くの遺物が出土した(図16・図版6 b)。

この遺構に伴う遺物は(図19-1~69)、1~50がロクロ成形のかわらけ小・中・大皿、51が青磁折縁皿、52が青白磁の小壺、53が白磁の口元皿、54~56が瀬戸の入子、57が東美濃系の山茶碗、58・59が

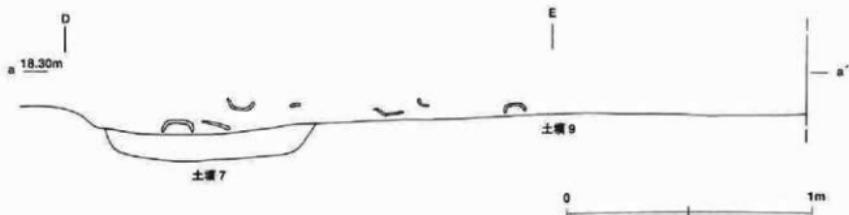
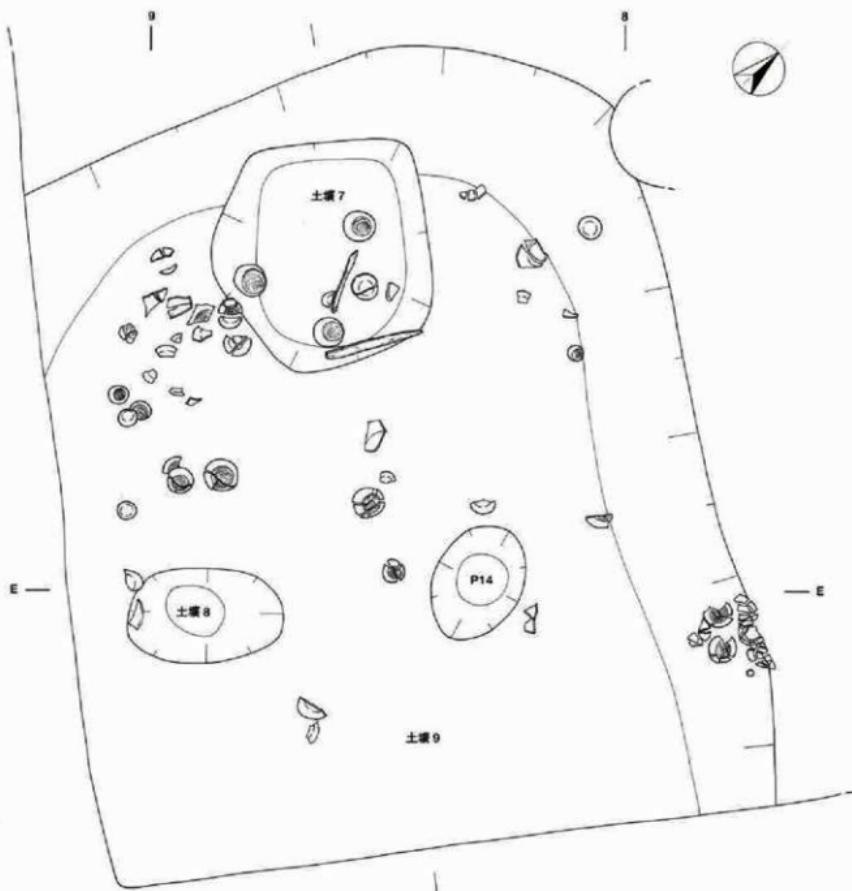


図16 土壙 9

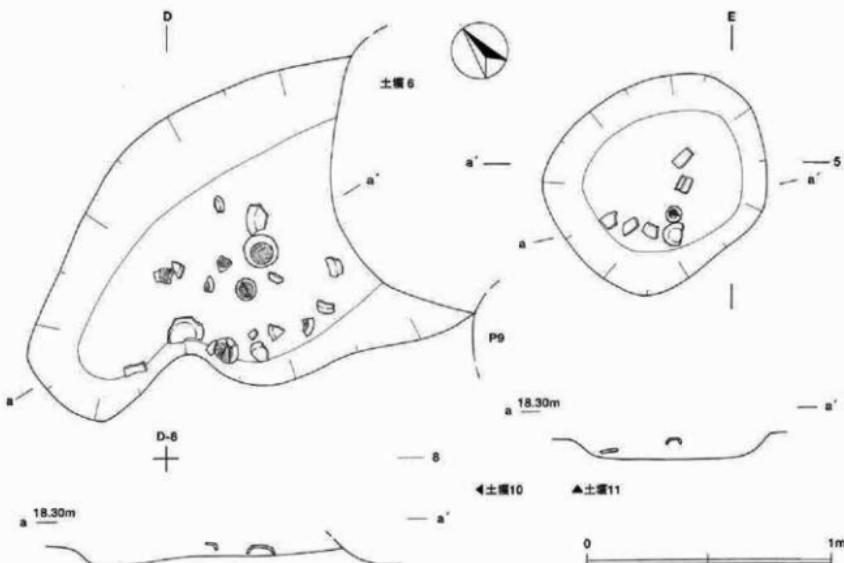


図17 土壌10・11

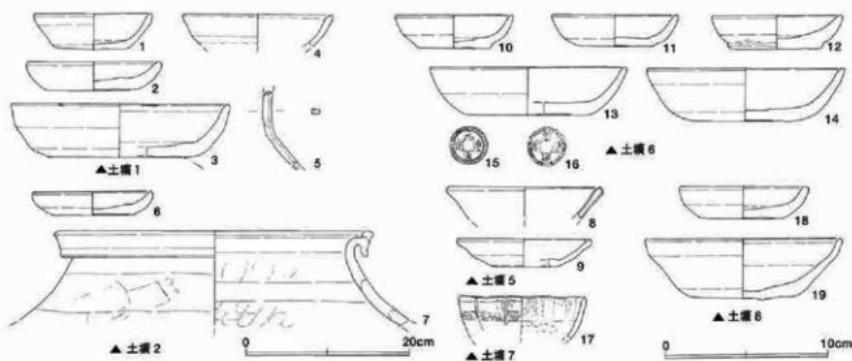


図18 土壌出土遺物(1)

漬戸の洗・四耳壺、60・61が常滑の捏鉢・鳶口壺、62がかわらけ底部片を加工した円盤状製品、63が土器質火鉢、64・65が刀子、66~69が鉄釘である。

土壌10：調査区中央南寄りに位置し、土壌6により東側が壊されている。不整形の掘り方を有しており、規模は東西180cm以上、南北121cm、深さが13cm程と深い掘り方で断面が皿状を呈したものである。覆土は炭化物、小土丹塊がやや多く締まりのある茶褐色砂質土で底面を主体にかわらけがまとまって出土している（図17・図版6 d）。

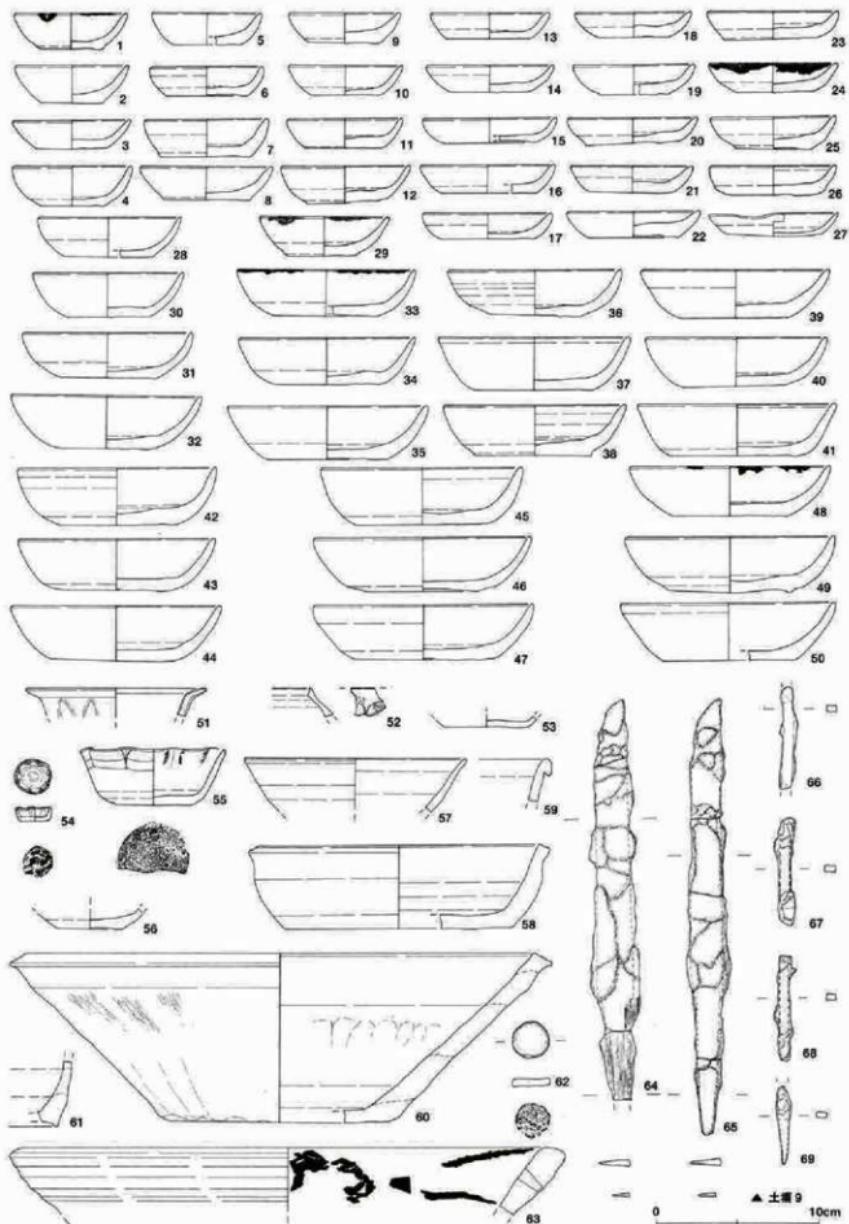


図19 土壤出土遺物 (2)

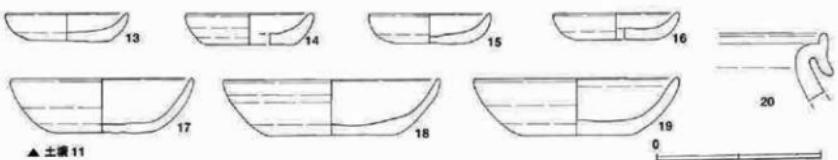
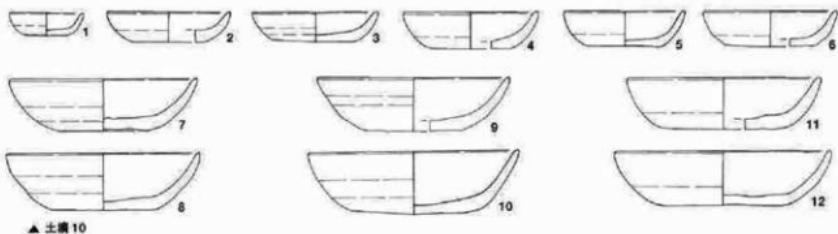


図20 土壌出土遺物（3）

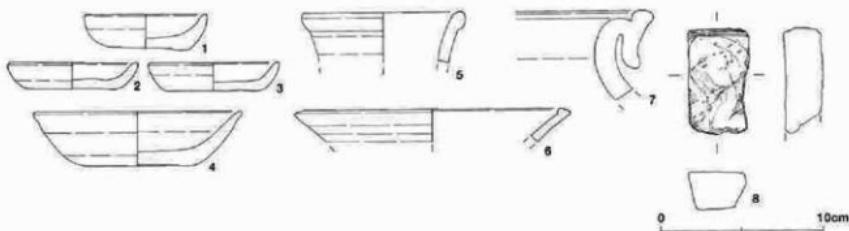


図21 溝2出土遺物

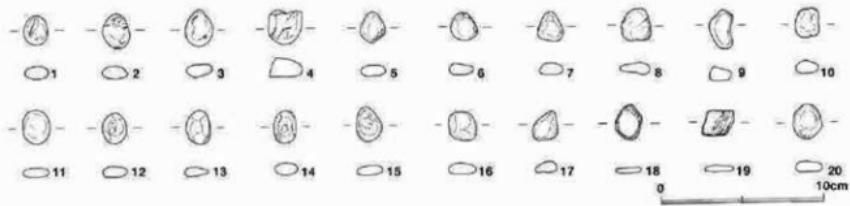


図22 石室埋出遺物

この遺構に伴う遺物は（図20-1～12）、1がロクロ成形の白かわらけ、2～12がロクロ成形のかわらけ小・中・大皿である。

土壤11：調査区中央東端に位置している。掘り方は梢円形を呈し、規模が東西軸約98cm、南北軸85cm、深さが30cmを測り、断面が摺鉢状を呈している。覆土は炭化物、かわらけ小片を含んだ締まりのない茶褐色弱砂質土である。

この遺構に伴う遺物は（図20-13～20）、13～19がロクロ成形のかわらけ小・中・大皿、20が常滑窯

である。

b. 溝（図4・15・21、図版5・12）

溝2：調査区中央西寄りに位置した南北方向に走る溝であり、南北端はそれぞれ調査区外に延びている。主軸方位はN-28°-Eを測り、第1面で検出した溝1の南北主軸方位とは異なる軸方向を示していた。

規模は調査区内で長さ約14.6mほどが確認され、上幅が115~120cm、下幅が45~55cmを測り、掘り方の断面は逆台形状を呈しており、確認面からの深さ約55~65cmである。溝底の海拔標高をみると、調査区南端で17.40m、調査区北端で17.65mを測り、北から南に向かって緩やかな傾斜を示していることが解かる。この溝の堆積土は、図4の調査区南壁土層堆積図に示したとおり、土層観察から覆土を4層に分割することができた。覆土上層は8層の土丹角・かわらけ小片を多めに含んだ茶褐色弱粘質土で締まりがある。中層（9・10層）にあたる9層は鉄分を含んだ茶褐色土ブロックと土丹角がやや多く比較的締まりのある暗褐色粘質土、10層が締まりのない暗茶褐色粘質土で炭化物やかわらけ小片を多く含んでいる。11層は粗砂（鎌倉石が細かく碎かれたようなもの）や土丹角を交えた暗褐色砂質土で締まりの弱いもの。図版5aの全景写真で解かるようにこの遺構は第2面の調査時には確認することができなかった。第2面を構築する地業層はCラインを挟んだ西側が強く、東側全体がやや弱い状況が認められたので地業密度の違いとして捉えていた。しかし第3面検出途中で調査区南・北壁の土層観察から南北位の溝の存在が確認されたので検出を行った。

この遺構に伴なって出土した遺物は（図21-1～8）、1～4がロクロ成形のかわらけ小・大皿である。5・6は瀬戸の四耳壺と卸皿、7が常滑窯の口縁部片、8が砥石である。

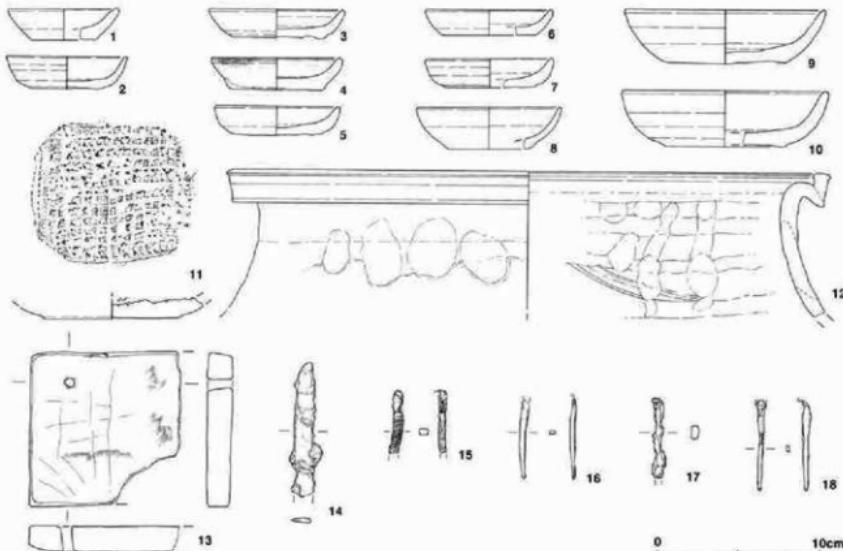


図23 遺物溝り出土遺物

c. 遺物溜まり遺構 (図15・22・23、図版5・11・12)

遺物溜り1：調査区北側、D-4グリッド北東の壁際に位置する遺物溜りは、面上に白黒の碁石が多数集積した状況で確認され（図版5-b）、北側は調査区外に括がっていた。その範囲は東西80cm、南北35cm以上で確認されており、碁石はほとんど加工を施さない自然石を用いており、白石45個、黒石39個の合計84個が認められた。

碁石がまとまって出土した事例には、鶴岡八幡宮に近い若宮大路西側の北条時房・頸時邸跡があり、ここでは浅く掘り込んだ土壌状の中から偏平な自然石の黒石36点と貝製の白石でハマグリ・アワビ類を円形に加工したものが出土している（『北条時房・頸時邸跡』－鎌倉市雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書－同遺跡発掘調査団 1988年）。

遺物溜り2：調査区北側、D-5グリッドの試掘縦際に位置する遺物溜りは、面上に東西130cm以上、南北135cmの範囲で大小土丹塊と共にかわらけを主体とした括がりが確認された（図版6-a）。

出土遺物は（図23-1～18）、1～10がロクロ成形のかわらけ小・大皿、11が瀬戸卸皿、12が常滑甕、13が滑石製温石、14～18が鉄製品小刀・釘である。

d. 柱穴（図15・24、図版12）

この面で確認した柱穴は約20口であるが、掘立柱建物を構成するような配置は認められなかった。ここでは図示可能な出土遺物を伴うものについて述べることにする。

P2:D-5グリッドに位置する。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径65cm、短径50cm程、深さ35cmとやや浅く掘り込まれたものである。覆土中からの遺物は、ロクロ成形のかわらけ小皿が1点が出土している（図24-1）。

P4:C-6グリッドに位置する。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径46cm、短径35cm、深さ40cmを測る。底面に横石と思われる土丹塊が据えられていた。覆土中からは、東美濃産の山茶碗（同図-2）が出土した。

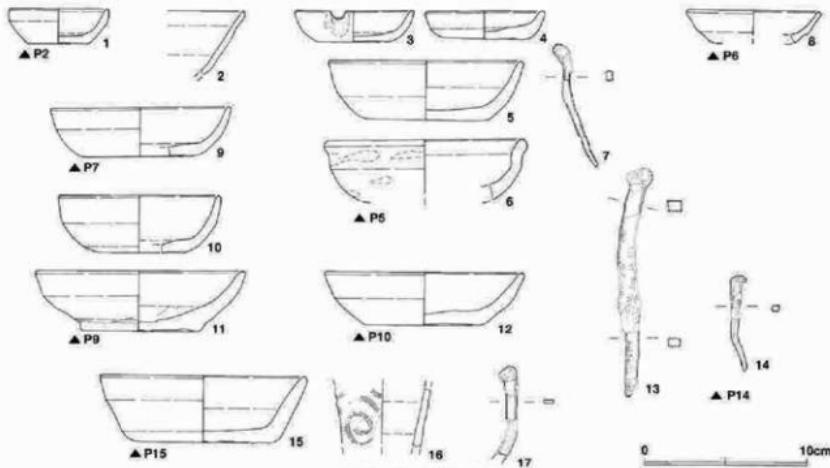


図24 ピット出土遺物

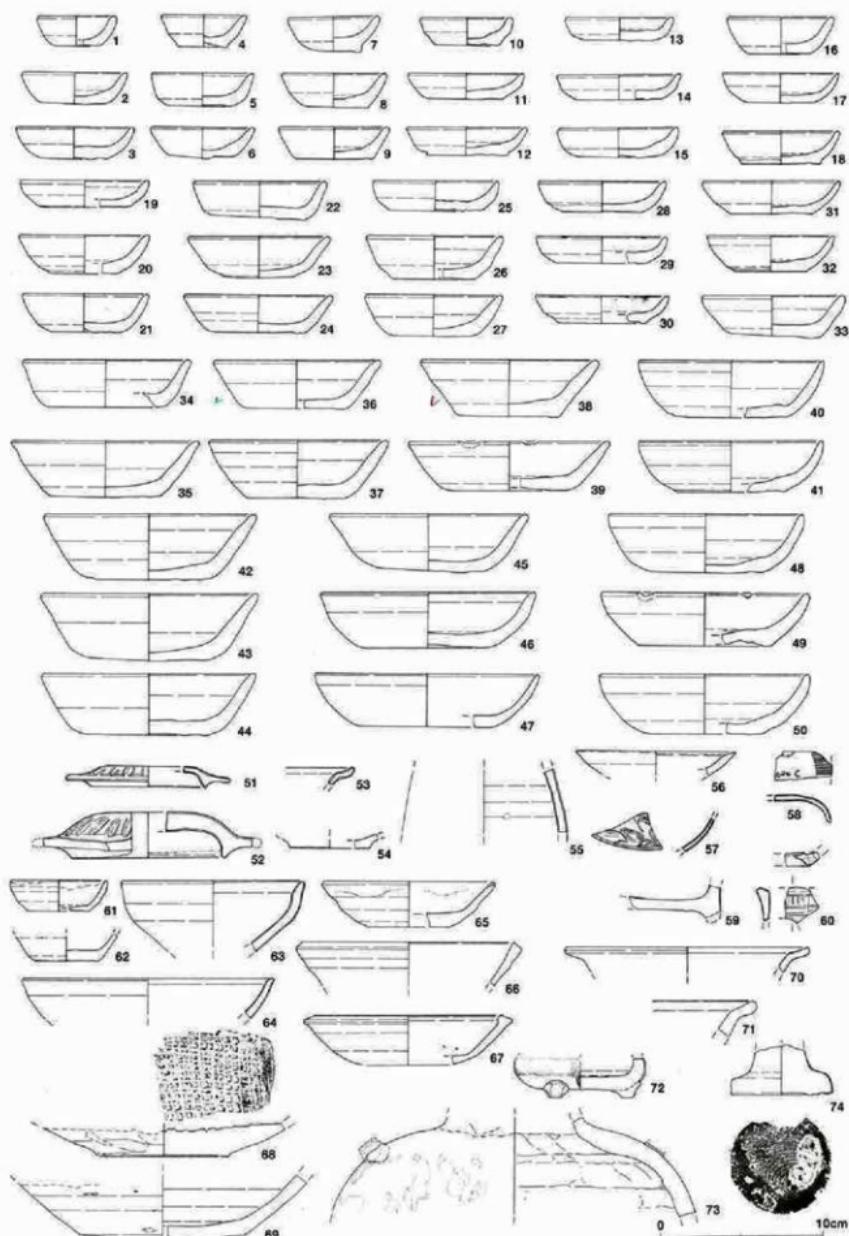


図25 第1面下～第2面出土遺物(1)

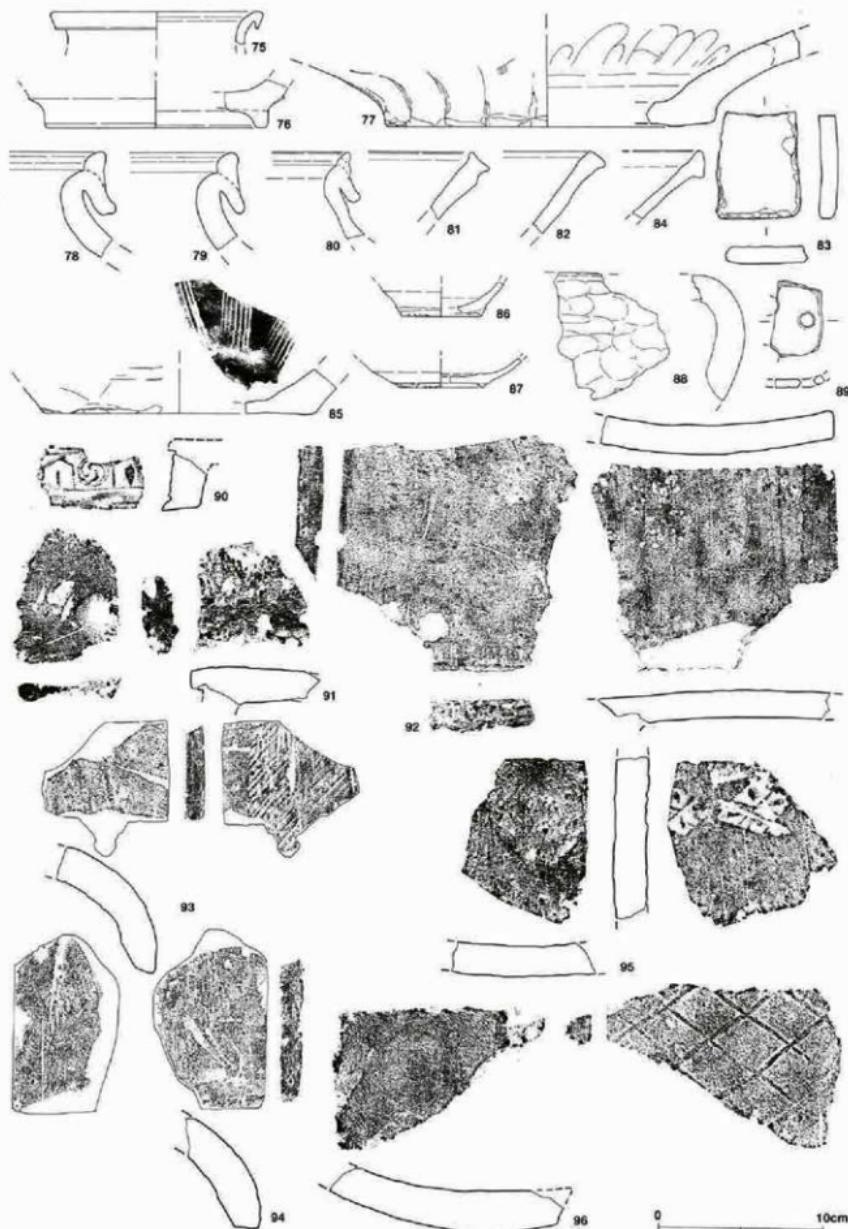


図26 第1面下～第2面出土遺物（2）

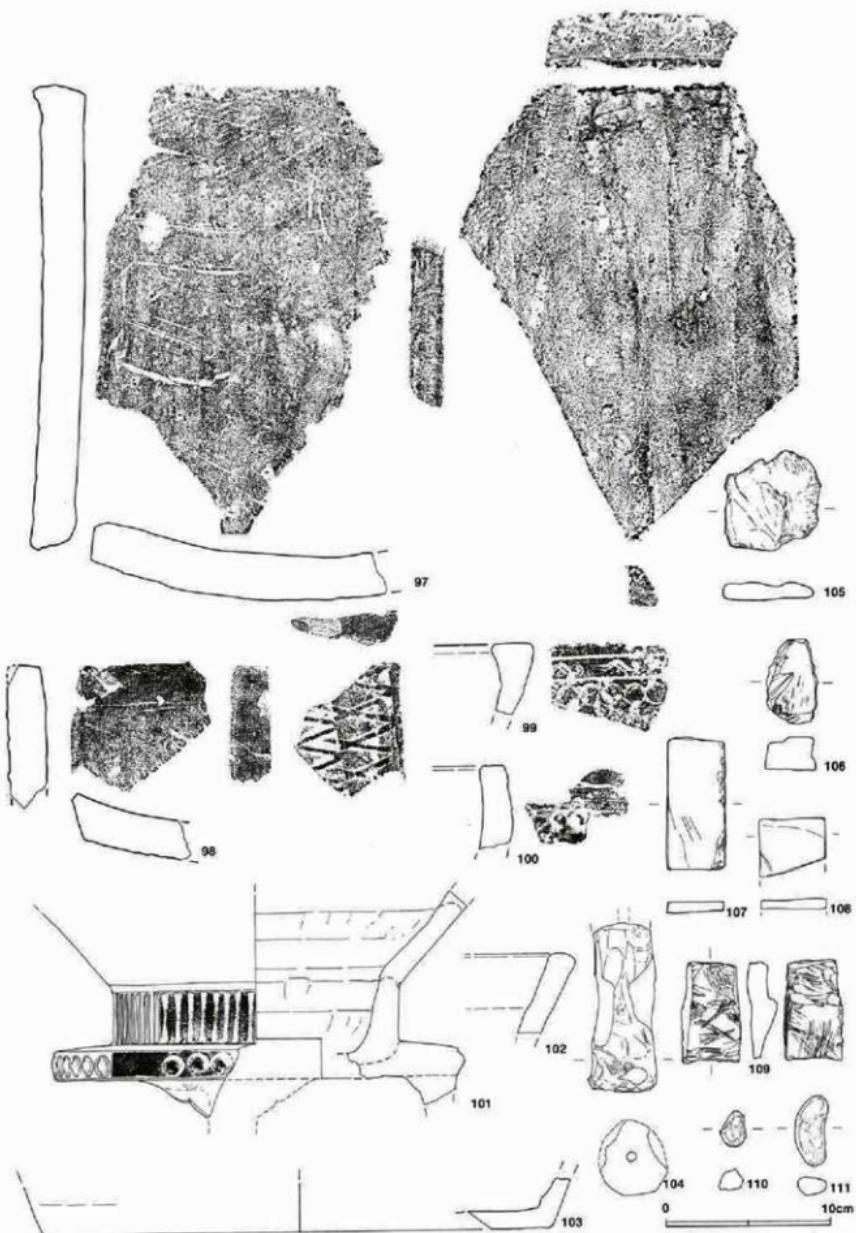


图27 第1面下～第2面出土遺物（3）

P 5 : P 2 南側に接した位置で検出され、P 6 に一部壊されている。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径72cm、短径50cm程、深さ35cmを測り、断面逆台形の掘り方をもつ。覆土中からはロクロ成形のかわらけ大・小皿、瀬戸鉢皿、鉄製品釘が出土した（同図3～7）。

P 6 : P 5 よりも新しい柱穴である。柱穴掘り方は円形を呈し、径45cm程、深さ30cmを測る。覆土中からは東美濃産の山皿（同図8）が出土している。

P 7 : P 5 の東側に位置しており、柱穴掘り方は円形を呈し、径55cm程、深さ38cmを測る。覆土中からはロクロ成形のかわらけ中皿（同図9）みられた。

P 9 : D - 6 グリットに位置し、土壤6の一部を壊して掘られている。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径58cm、短径40cm、深さ30cmを測る。覆土中からはロクロ成形のかわらけ中・大皿（同図10・11）が出土している。

P 10 : C - 7 グリット、土壤10南隣した位置でP 11に一部壊されている。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径48cm、短径40cm、深さ30cmを測る。出土遺物はロクロ成形のかわらけ大皿（同図12）である。

P 14 : 調査区南端の土壤9に上部を壊される。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径52cm、短径38cm、深さ20cmで覆土中から五寸と三寸の鉄釘2点（同図13・14）出土した。

P 15 : C - 8 グリット、溝2を壊して掘り込んでいる。柱穴掘り方は楕円形を呈し、長径45cm、短径35cm、深さ33cmを測る。出土遺物はロクロ成形のかわらけ大皿・青白磁梅瓶・鉄釘（同図15～17）である。

e. 第1面下～第2面出土遺物（図25～27、図版13）

図25～27（1～106）に図示した遺物は、遺構に伴わないもので第1面下から第2面の面上から出土したものである。遺物の種類には、ロクロ成形のかわらけ大・中・小皿（1～50）、舶載陶磁器の青磁酒会壺・折縁皿・瓶、青白磁小壺・梅瓶・香炉、白磁碗皿・合子（51～60）、瀬戸窯の入子・碗類・皿類・香炉・壺・華瓶など（61～74）、常滑窯の捏鉢・甕・壺類他（75～83）、魚住窯の捏鉢（84）、備前窯の摺鉢（85）、山茶碗（86・87）、土製品（88・104）、屋瓦類の宇瓦・男瓦・女瓦（90～98）、土器質製品の火鉢・土風炉（99～103）、石製品の滑石・砥石・火打石など（105～111）がみられた。なお、個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

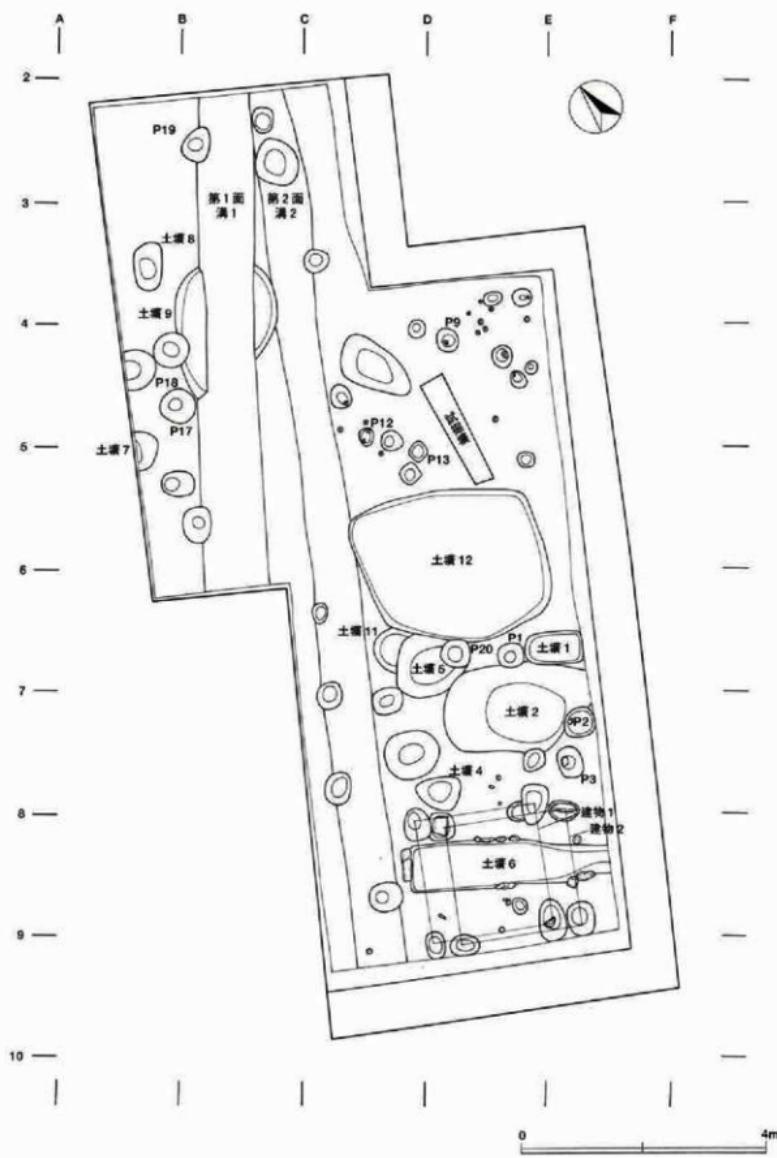


図28 第3面全測図

3. 第3面の遺構と遺物

第2面を構成していた大小の土丹塊を多く含んだ厚い地業層を除去すると、炭化物層に覆われた中世地山に類似した黄褐色粘質土が貼り付けられて整地した生活面が表出した。この炭化物・整地層は厚さ約5cmで調査区のはば全城で確認された。遺構検出の関係からこれを取り除いて検出されたのが第3面である。さらに第3面は小土丹塊を突き固めて版築した堅牢な地業層であり、海拔標高18.0m前後で比較的に平坦な生活面を構築している。検出した遺構は、掘立柱建物1軒、礎石建物1棟、土壙16基、溝、柱穴約40口である。出土遺物は、かわらけ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、土製品、石製品、金属製品などがみられた。

a. 建物 (図28・29、図版7・8)

建物1：調査区南端に位置し、主体は調査区外の南・東側に拡がっていると思われる。建物の柱間規模は東西1間・南北1間以上が確認され、柱間寸法の芯々距離198cmを測る。柱穴掘り方は径40~60cmの楕円形を呈し、深さ35~60cmであり、P15の底面だけに偏平な土丹塊が掘えられていた。確認標高は

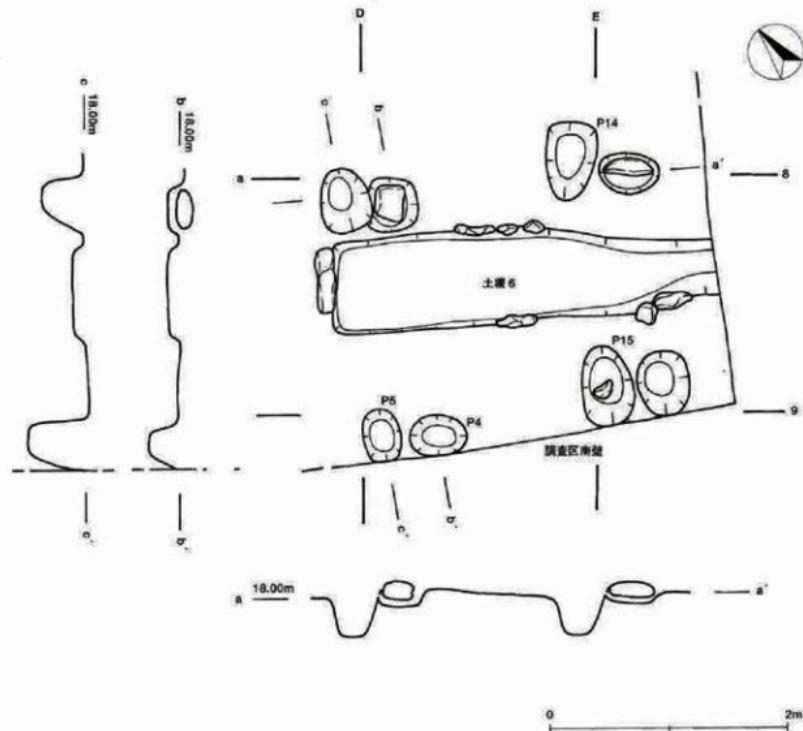


図29 建物1・2

17.97m、建物の軸方位はN-30°-Eである。覆土中からの遺物はかわらけ小片だけである。

建物2：調査区南端に位置した礎石建物である。本建物は建物1と同様に主体が調査区外に拡がっている可能性が高い。建物1と北西隅の掘り方が重複関係にあるが本建物の方が古い。規模は東西1間・南北1間以上が確認され、北側列の2口にのみ礎石が残存しており、礎石間の芯々距離195cmを測る。掘り方は径50cm前後、深さ20cm程、礎石は伊豆石の偏平な川原石を使用している。建物1と同じ軸方位を示している。掘り方内からは図示可能な遺物は出土していない。

b. 土壙 (図21・24・25、図版4・11)

土壙1：調査区南側、E-7杭の北隣して検出された。規模は、東西軸95cm、南北軸56cm、深さ10cm程の断面が浅い皿状、隅丸長方形を呈した土壙である。覆土中は炭化物を多く含んだ茶褐色砂質土の一層からなる。出土遺物は(図33-1~5)、1・2がロクロ成形のかわらけ小皿、3が常滑捏鉢、4が土器質火鉢、5が鉄釘である。

土壙2：調査区南側でD・E-7グリットに位置し、土壙1・P2に一部が壊される状態で検出され東端が調査区外に拡がった大型土壙である。規模は、東西軸245cm以上、南北軸153cm、深さ20cmである。覆土は炭化物・粗砂粒を多く混入した茶褐色土砂質で、土壙底面を中心にかわらけが多量に出土している(図30)。出土遺物のかわらけは(図33-6~43)すべてロクロ成形で6~29が小皿、30・31が中皿、32~43が大皿である。

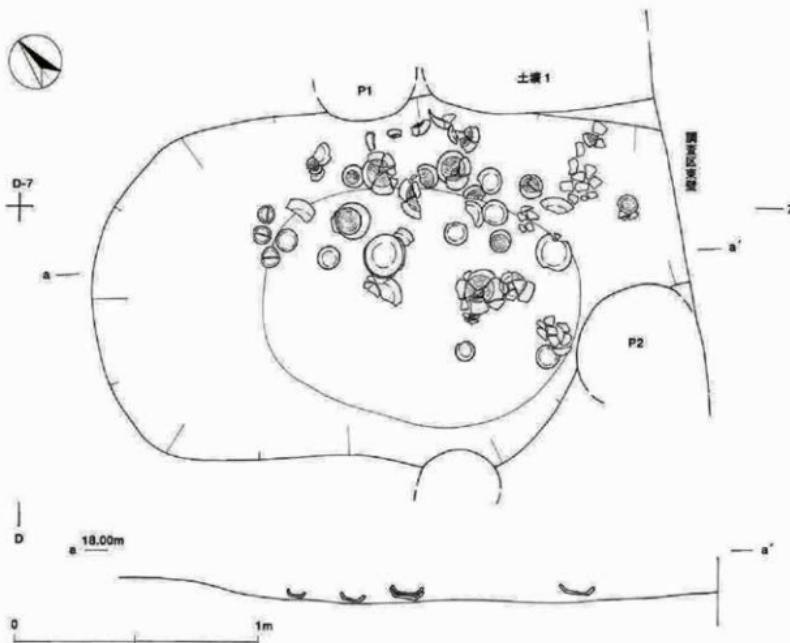


図30 土壙2

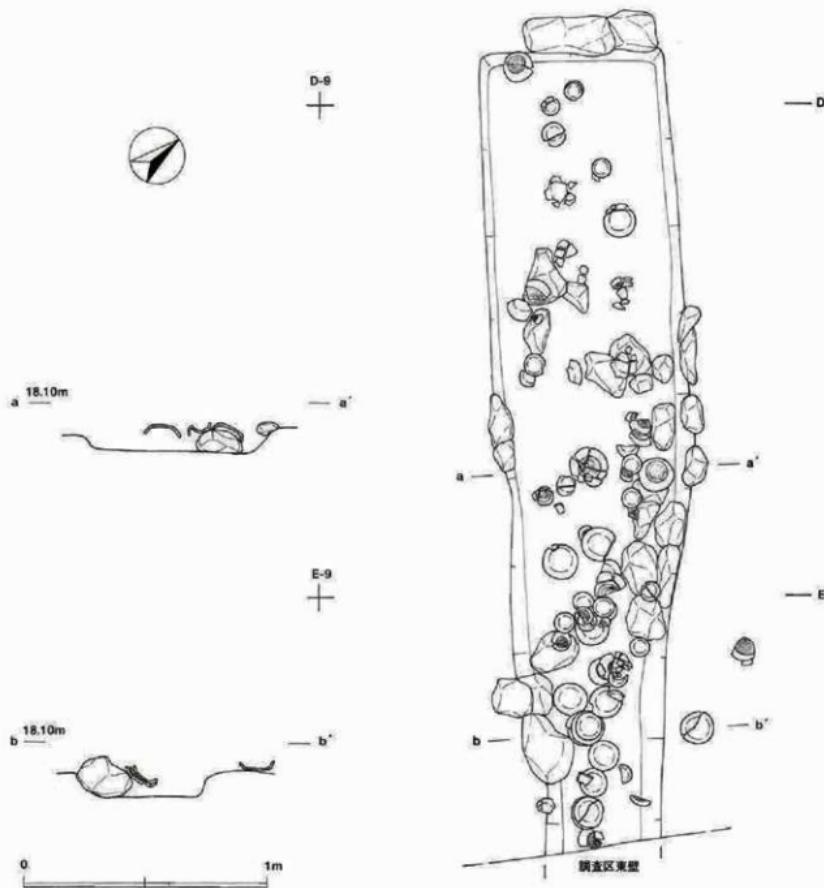


図31 土壌6石分布図

土壤4：調査区南側で建物1・2と土壤2の間に位置で検出された。規模は、南北軸76cm、東西軸58cm、深さ18cm程であり、不整円形を呈した浅い掘り方の土壤である。出土遺物は(図33-44~53)、44~52がロクロ成形かわらけの大・小皿、53が滑石鍋を転用加工した温石である。

土壤5：調査区中央南寄り土壤2・12の間に位置しており、両土壤とP20に一部を壊されて検出された。規模は東西軸約130cm、南北軸115cmの楕円形を呈し、深さ30cm程で掘り方断面が摺鉢状である。覆土は炭化物とかわらけ小片を多く含んだ締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は(図33-54~70)54~66がロクロ成形のかわらけ大・中・小皿、67・68が手捏ね成形の白かわらけ、69が青磁蓮弁文碗、70が滑石製鍋である。

土壤6：調査区南端近くに位置し、建物1・2の柱間内で検出された東西に細長い掘り方を有した土壤である(図31)。東端は調査区外に延びており、全体形は不明である。規模は東西軸325cm以上、南北

軸82cm、深さ12cm程で浅い溝状を呈した土壤であり、覆土中からはやや大型土丹塊に混じって多量のかわらけが認められた。

出土遺物は(図34-1~77)、かわらけがすべてロクロ成形で1~36が小皿、37・38・45・49が中皿、39~44・46~48・50~68が大皿、69がロクロ成形の白かわらけ、70が瀬戸入子、71が土器質火鉢、72~74が砥石、75~77が鉄製品の小刀・釘である。

土壤7:調査区北側西端に位置し、調査区外に拡がっている。規模は、東西軸48cm以上、南北軸65cm、深さ32cmで断面摺鉢形の掘り方をもつ。出土遺物は(図35-1~3)、図示できたのが1のロクロ成形

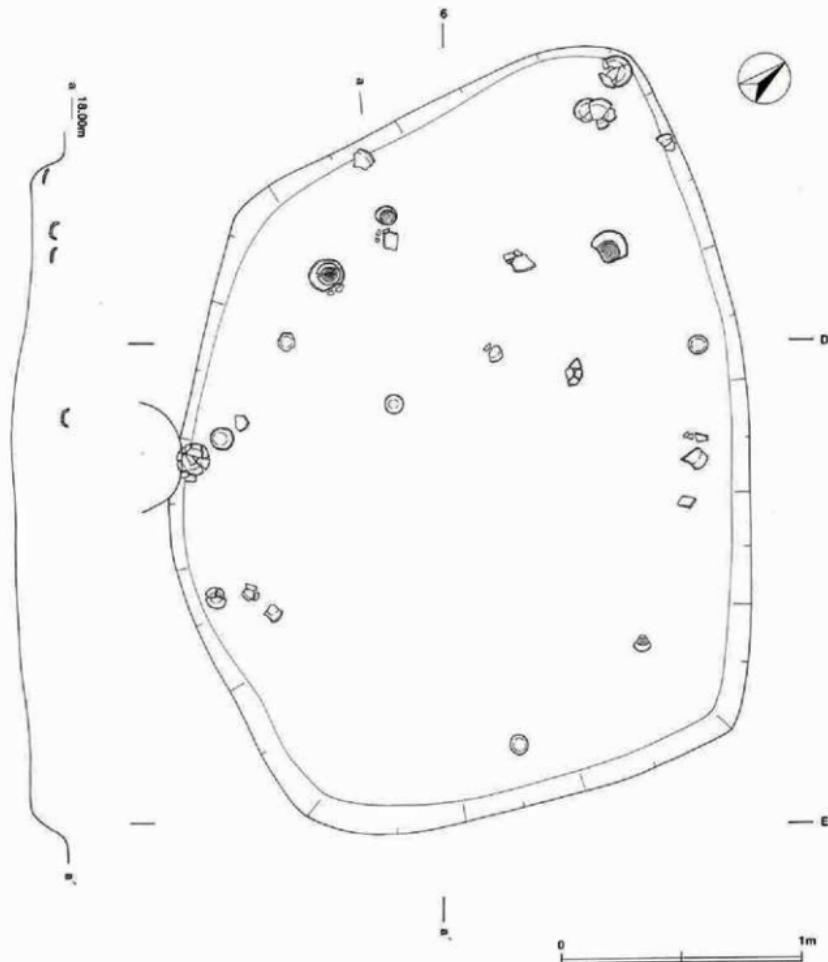


図32 土壤12

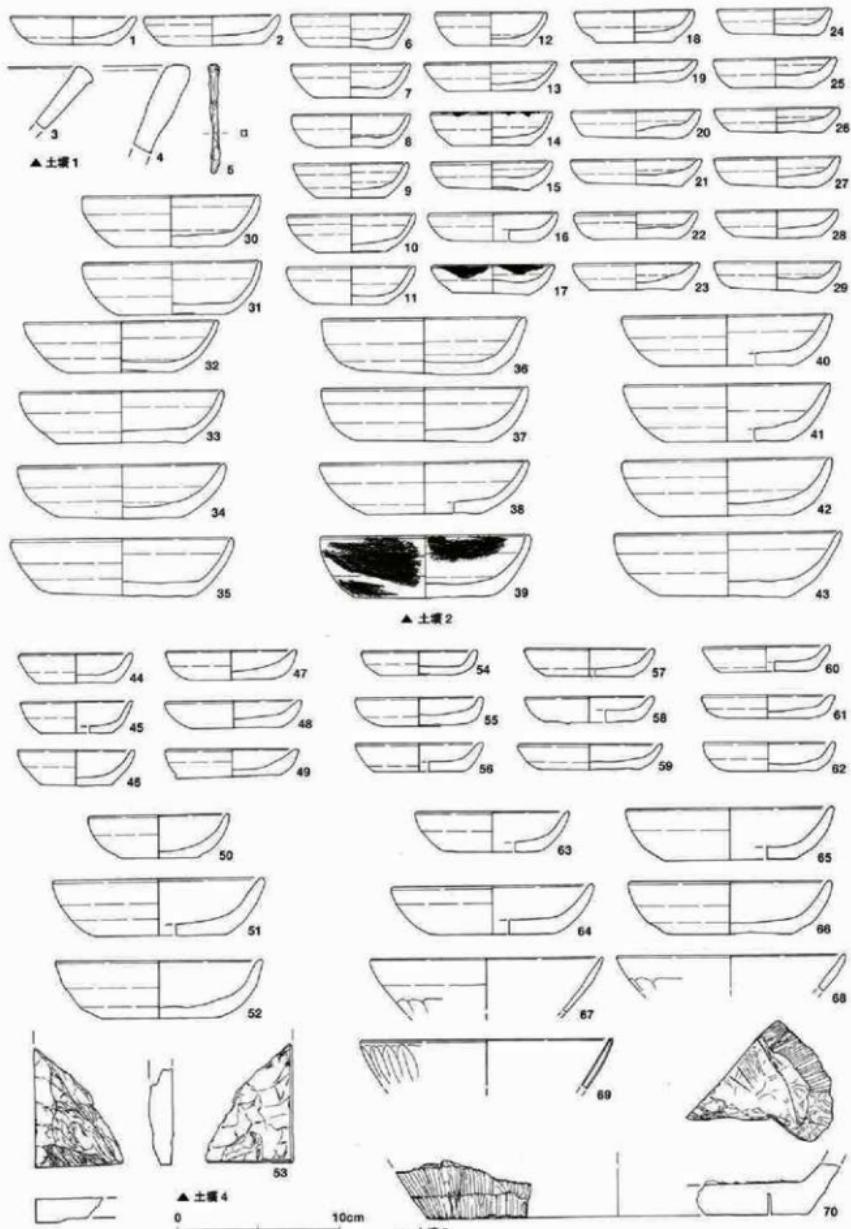


図33 土壌出土遺物（1）

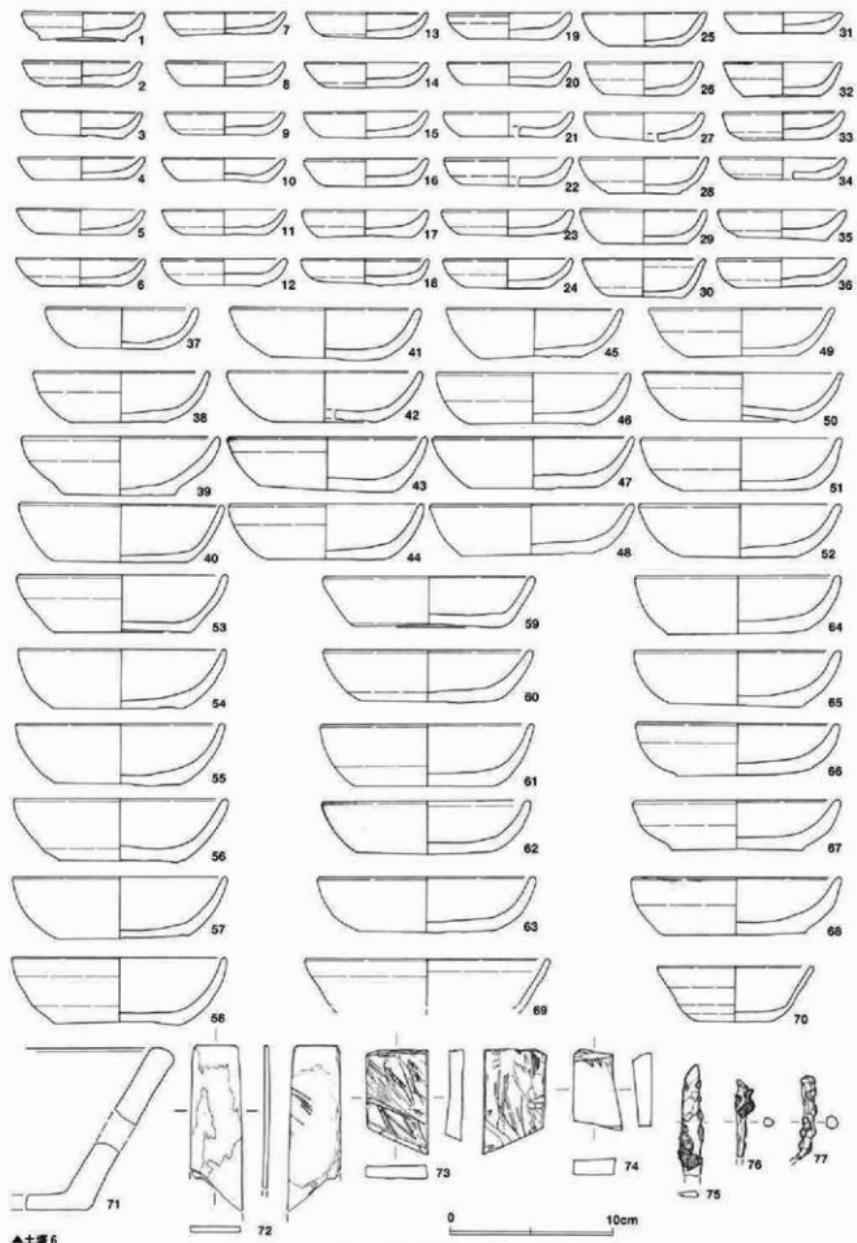


図34 土壤出土遺物(2)

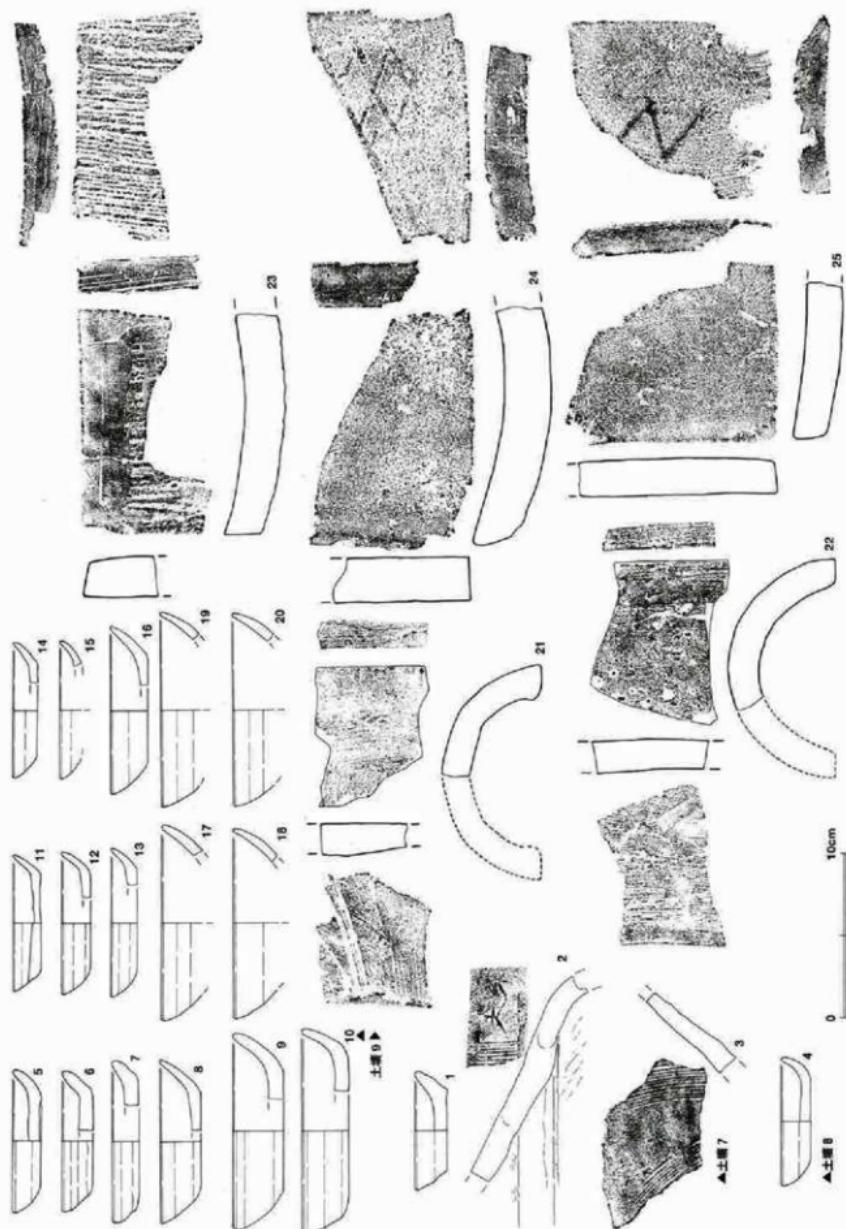


図35 土壤出土遺物（3）

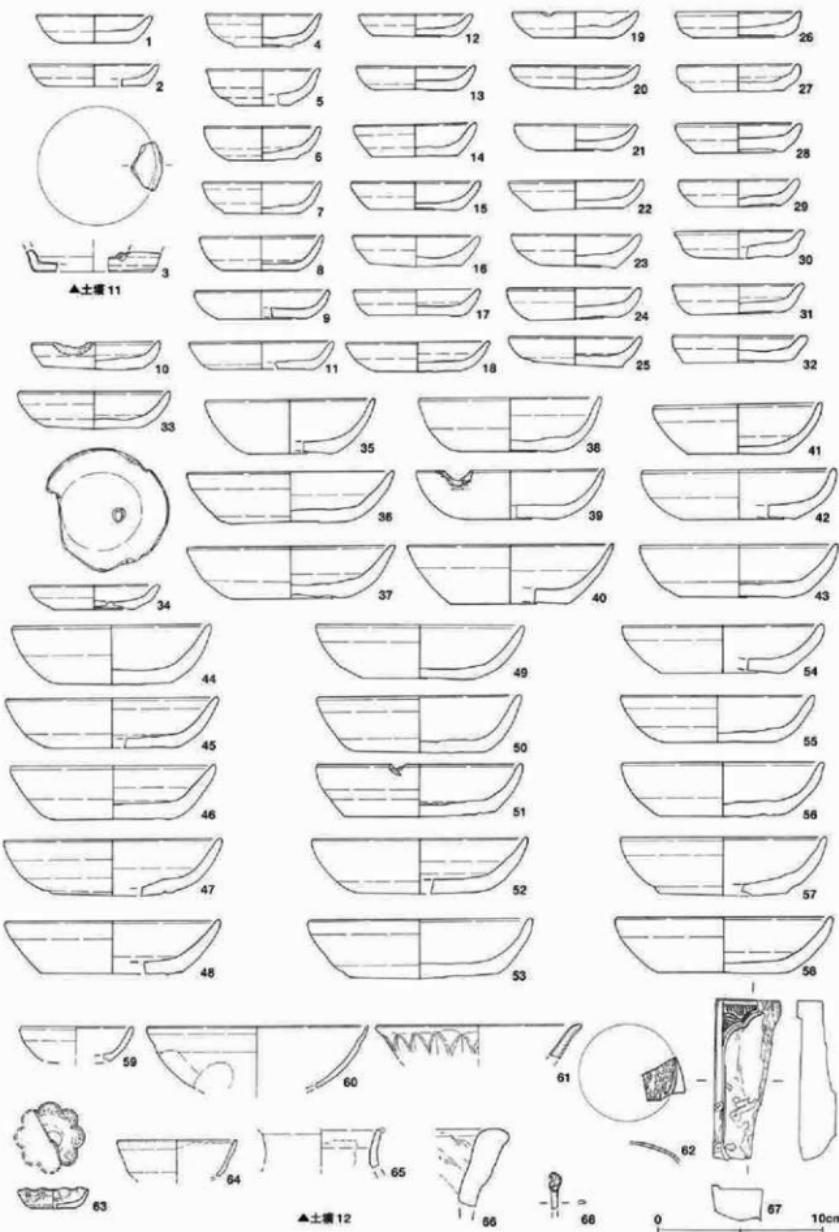


図36 土塗出土遺物(4)

のかわらけ小皿、2が備前摺鉢、3が常滑窯である。

土壤8：調査区北西隅の位置で検出された。規模は、南北軸80cm、東西軸50cm、深さ32cmを測り、楕円形を呈し断面摺鉢形の掘り方である。覆土は炭化物・かわらけ粒を含んだ暗茶灰色砂質土で図示可能な出土遺物は図35-4のロクロ成形かわらけ小皿だけである。

土壤9：調査区北端近く西寄りに位置し、第1面溝1に中央部、第2面溝2に一部を壊される状態で検出された土壤である。推定規模は南北軸216cm以上、東西軸168cm、深さ15cm程度で断面が浅い皿状を呈している。平面形状は楕円形になるものと思われ、覆土は炭化物と焼土が多量に混じった茶褐色弱砂質土である。出土遺物は（図35-5～25）、かわらけのうち5・8～10がロクロ成形の製品、6・7が手捏ね成形の製品、11～20がすべてロクロ成形の白かわらけ、21・22が男瓦（丸瓦）、23～25が女瓦（平瓦）で瓦類はすべて永福寺創建瓦と類似した製品である。

土壤11：調査区中央西寄りに位置し、土壤5に東半分を壊された状態で検出された。規模は南北軸77cm、東西軸44cm以上、深さ12cm程度で断面浅い皿状を呈した土壤である。覆土は炭化物・かわらけ粒・粗砂を混入した茶褐色砂質土である。出土遺物は（図36-1～3）、1・2がロクロ成形かわらけ小皿、3が青白磁の香炉小片と思われる。

土壤12：調査区中央の位置で検出され、規模は東西軸305cm、南北軸255cm、深さ25cm程度で浅い掘り方を呈した大型土壤である（図32）。覆土中からは大型土丹塊に混じって多量のかわらけが認められた。

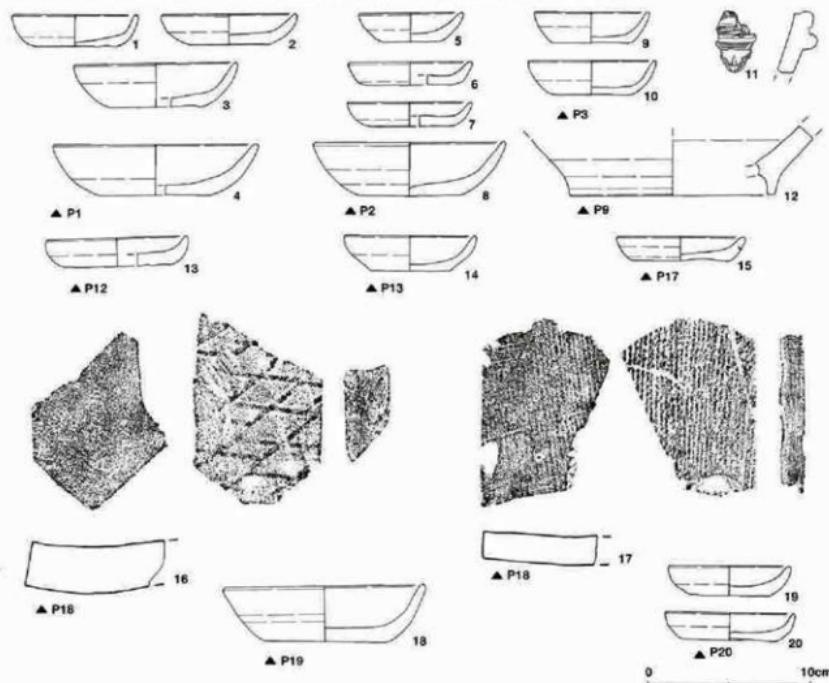


図37 ピット出土遺物

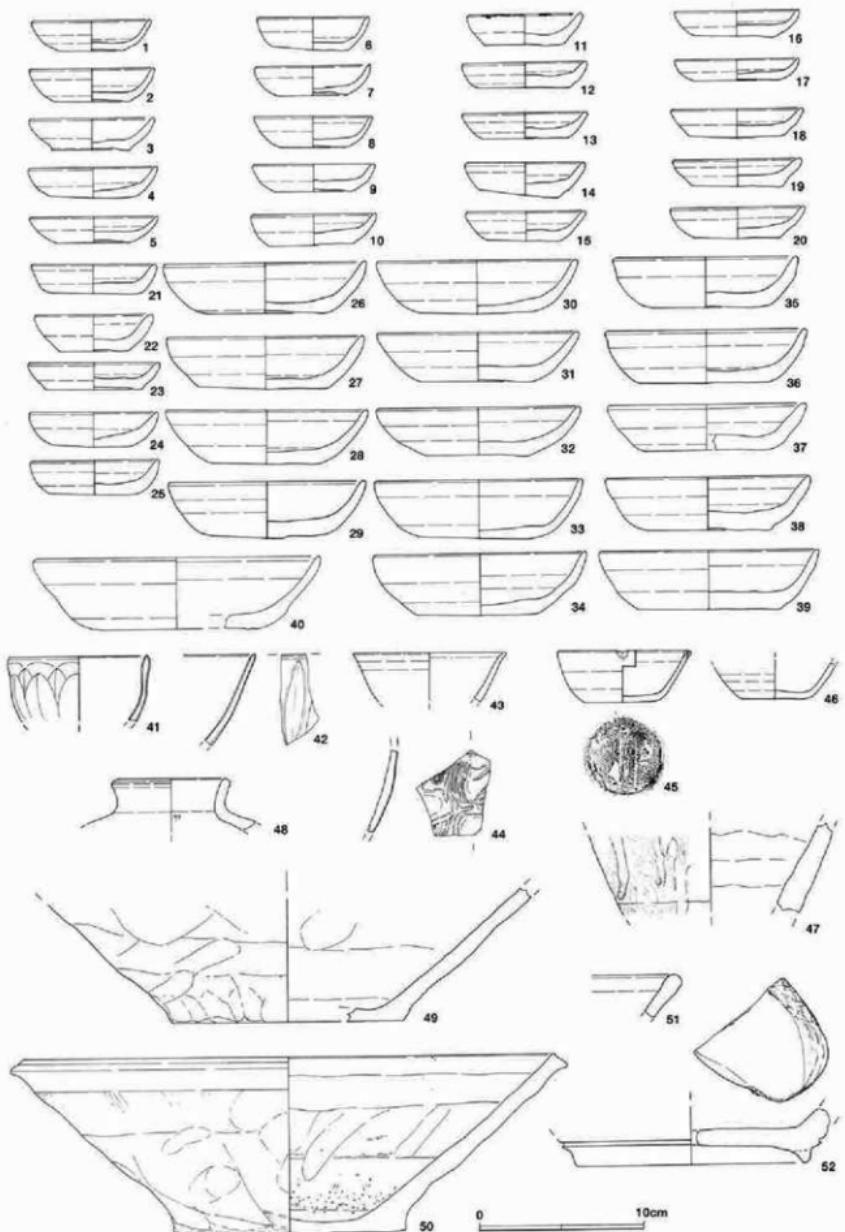


図38 2面下～第3面出土遺物（1）

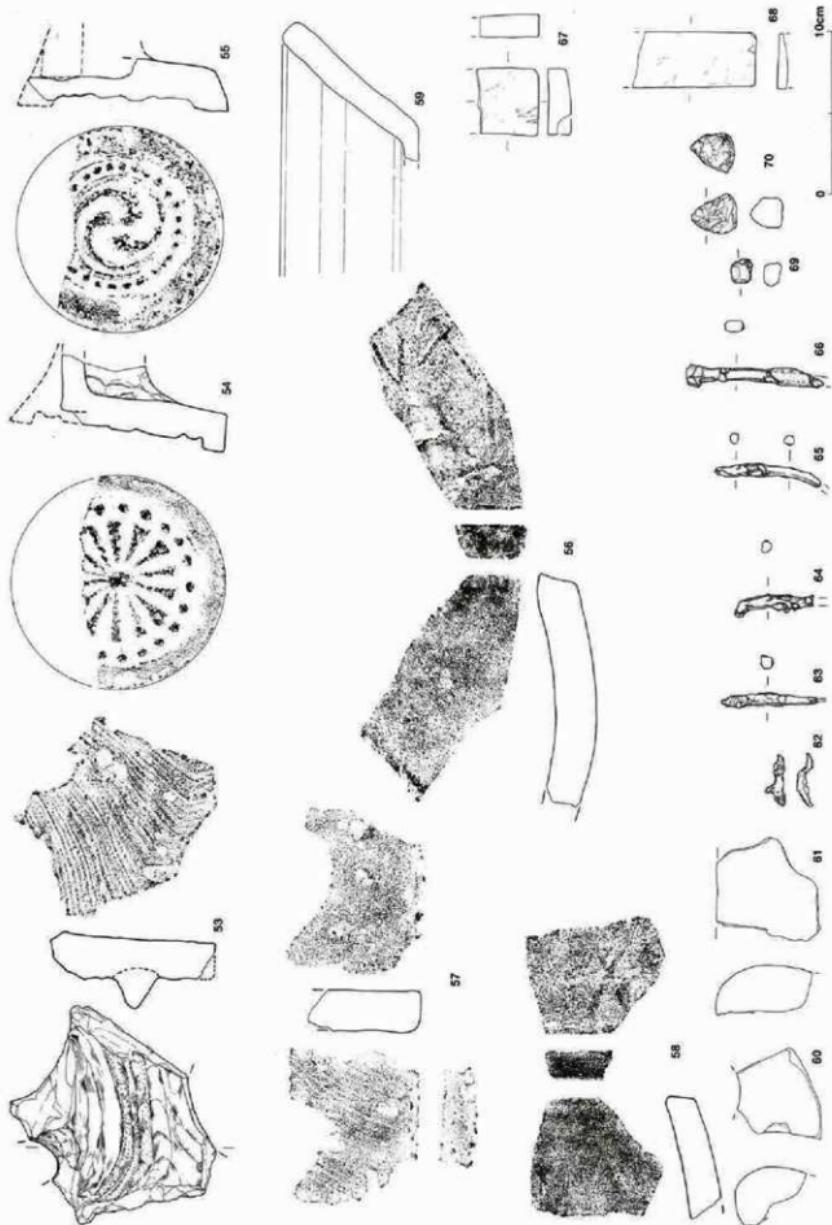


図39 2面下～第3面出土遺物（2）

出土遺物は(図36-4~68)、ロクロ成形かわらけの4~32・34が小皿、33・35・38・39・41~44が中皿、45~58が大皿、59・60がロクロ成形と手捏ねの白かわらけ、61が青磁運弁文碗、62が白磁合子、63~65が瀬戸入子と香炉、66が土器質火鉢、67が石硯、68が鉄釘である。

d. 柱穴(図28・37)

この面で検出した柱穴は約43口であるが、建物1・2以外で建物を構成するような配置は認められなかった。ここでは図示可能な出土遺物を伴う柱穴についてだけ述べることにする(図37-1~20)。

P1:D-6グリットに位置し、土壤2の一部を壊して掘り込んでいる。柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、径約45cm、深さ30cmである。覆土中からは1~4のロクロ成形かわらけの大・中・小皿が出土している。

P2:E-7グリットに位置し、土壤2の一部を壊して掘り込んでいる。柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、径約50cm、深さ35cmである。覆土中からは5~8のロクロ成形かわらけの中・小皿が出土している。

P3:E-7グリットでP2南隣に接した位置で検出した。柱穴掘り方は梢円形を呈し。長径52cm、短径40cm、深さ25cmを測り、底面に常滑壺の胴部片を礎板かわりに据えている。覆土中からは9・10のロクロ成形かわらけ小皿と、11の滑石製鍋が出土している。

P9:D-4グリットで検出した。柱穴掘り方は梢円形を呈し、長径12cm、短径35cm、深さ20cmを測り、底面に径10cm程の小ビットが確認されている。覆土中からは12の常滑鉢が出土している。

P12:C-4グリットで検出した。柱穴掘り方は梢円形を呈し、長径30cm、短径23cm、深さ25cmを測り、底面に径10cm程の小ビット2口が確認されている。覆土中からは13のロクロ成形かわらけの小皿が1点が出土した。

P13:D-5杭に架かる位置で検出した。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し、長さ33cm、深さ32cmである。覆土中からは14のかわらけ小皿が1点出土した。

P17:A-4グリットで検出した。柱穴掘り方は円形を呈し、径約58cm、深さ35cmを測り、底面径の小さなものである。覆土中からは15のかわらけ小皿が1点出土した。

P18:A-4グリットに位置し、土壤9の一部を壊して掘り込まれている。柱穴掘り方は円形を呈し、径約55cm、深さ35cmを測り、底面近くに女瓦2点が礎板代りに据えられていた。出土した女瓦16・17は永福寺II期(寛元・宝治年間)と創建期に類似したものである。

P19:B-2グリットで検出した。柱穴掘り方は不整円形を呈し、長径58cm、短径43cm、深さ35cmである。出土遺物は18のロクロ成形かわらけの大皿1点だけである。

P20:D-6グリットに位置し、土壤5の東側一部を壊して掘られている。柱穴掘り方はほぼ円形を呈し、径約52cm、深さ30cmである。出土遺物は19・20のロクロ成形かわらけの小皿である。

e. 第2面下~第3面出土遺物(図38・39-1~70)

1~40はすべてロクロ成形かわらけである。1~25の小皿は口径6.9~8.1cm(平均7.6cm)、底径3.9~5.9cm(平均5.0cm)、器高1.3~2.3cm(平均1.9cm)の法量を示し、口径8cm以下と小型資料が主体を占めている。11は口径13.0cmの中皿である。26~34・36~39は大皿で口径12.0~13.4cm(平均12.4cm)、底径6.6~8.8cm(平均7.4cm)、器高2.8~3.7cm(平均3.3cm)の法量を示しており、口径13cm以下の小型で器高3cmを超える資料が主体を占めている。40はロクロ成形で口径17.3cm、底径9.7cm、器高4.4cmと特大の特殊な大皿である。

舶載陶磁器は、41・42が龍泉窯系青磁の輪廻弁文碗、43が白磁の口元皿、44が青白磁の牡丹文梅瓶である。

国産陶器は、45～47が瀬戸の入子と四耳壺、48～52が常滑の鳶口壺と捏鉢がみられた。

瓦類は、53が鬼面文鬼瓦、54・55が菊花文と巴文の鏡瓦、56～58が凸面に斜格子叩き目もつ瓦で永福寺Ⅲ期瓦（弘安年間）に類似したものである。

土製品は、59が鉢形火鉢、60・61が鋳造物は不明であるが同一品製作の鋳型である。

金属製品は、62が銅製品だが二次焼成に遭い原形不明である。63～66が鉄釘である。

石製品は、67・68が砥石で京都鳴滝産の仕上砥、69・70が打撃痕を残した火打石である。

4. 第4面の構造・遺物

第4面はすでに工事掘削深度に及んでおり、調査区内の東西方向にあたる5・7・9ライン付近と調査区東壁沿いにそれぞれトレーナーを入れて構造確認を実施した。この面は褐鉄を多く含んだ明黄褐色粘質土の中世地山と、調査区東側域の地山面上に厚さ5～10cmの小土丹塊を突き固めて版築された地業層により構築された生活面である。海拔標高17.80m前後を測る。この面で検出された遺構は、土壙7基、溝1条、かわらけ溜り1ヶ所、柱穴約35口である。出土遺物は、多量のかわらけをはじめ、舶載磁器、常滑窯製品、土製品などがみられた。

a. 土壙（図40～42・43、図版10・15）

土壙1：調査区中央、C・D-6グリットの位置で検出された。土壙2掘り方の東側上部を壊して掘られている。規模は東西軸167cm、南北軸110cm以上、深さ35cmである。掘り方は楕円形と思われるもので、断面が浅い皿状を呈している。覆土は中位に薄い炭化物層を挟んで上下2層からなり、上層に拳・人頭大土丹塊・炭化物を多めに含んだ明茶褐色粘質土、下層が2～4cm角の土丹が多く混入した明茶褐色粘質土である。上面は小土丹塊により埋め戻されていた。出土遺物はかわらけ小片だけで図示可能なものがみられなかった。

土壙2：第2面検出の溝2に西端部分を接されている（図41）。規模は東西軸280cm以上、南北軸113cm以上、深さ80cmである。掘り方は東西に長い楕円形と考えられ、断面が逆台形を呈した大型土壙である。覆土は2～5層に拳・人頭大の大型土丹塊を密に混入した黄茶灰色系の締まりの強い粘質土、6層が締まりの弱い土丹粒を多く含んだ暗茶灰色粘質土からなっている。出土遺物はかわらけ小片が少量みられただけである。この土壙は、遺物や焼土などが含まれておらずゴミ穴的な土壙とは考えられず、大型土丹塊を詰めて埋め戻した痕跡が認められることから粘土採掘場の可能性が指摘できる。調査終了後に土壙壁周辺の粘土サンプルを持ち帰った。調査参加者で陶芸を趣味とされている小川洋輔氏（鎌倉市シルバー人材センター）にかわらけの小皿様の作陶と焼成をお願いしたところ快諾をいただき、焼成温度は800度程に設定して焼き上げてもらった。その結果、色調が橙色で胎土に黒色微砂・赤色粒・白色針状を含み、鎌倉産かわらけと極めて類似した特徴を示しており、土壙3も含め粘土採掘場の可能性が充分考えられよう。

土壙3：土壙1・2の南隣に位置した大型土壙である（図版10c）。第2面で検出した溝2に一部を壊されている。規模は東西軸330cm以上、南北軸155cm以上、深さ65cm前後である。掘り方は東西位の楕円形を呈し、断面逆台形に掘り込まれており、西側は調査区外に延びている。覆土は上下2層からなり、

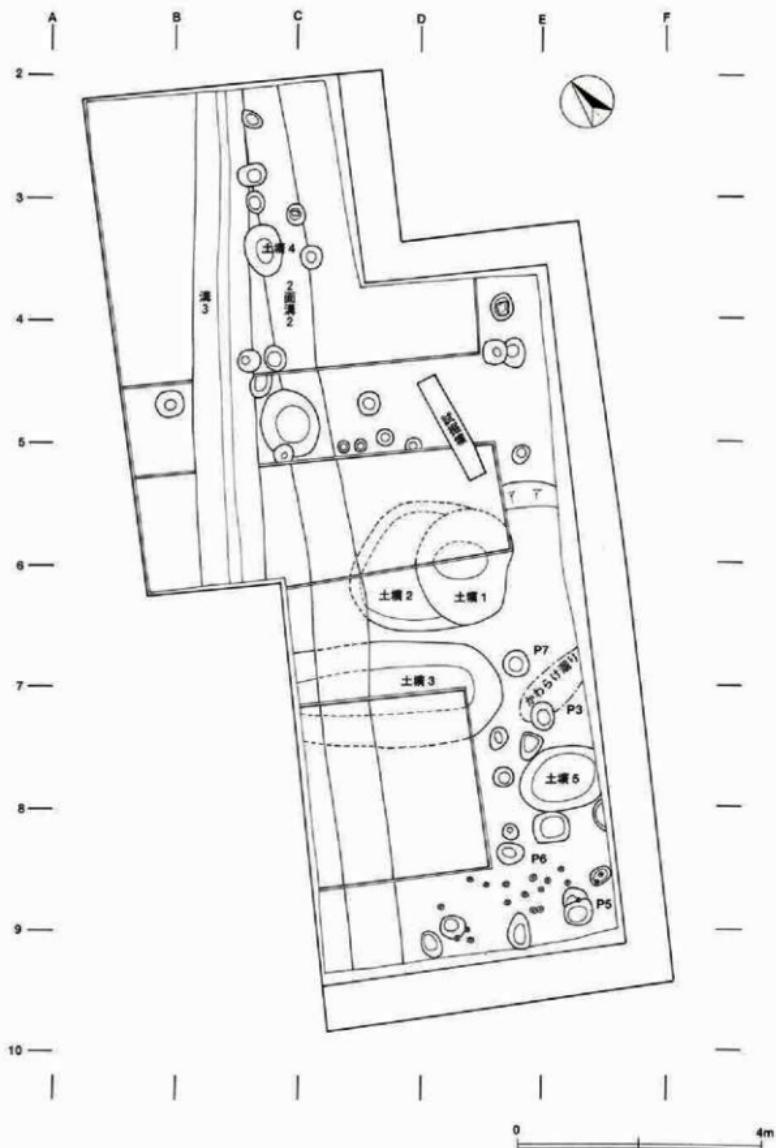


図40 第4面全測図

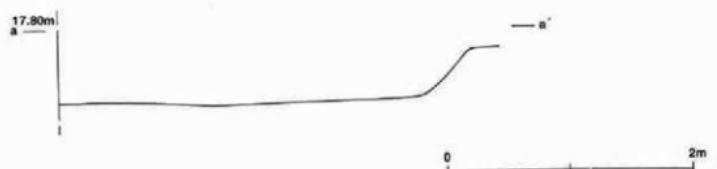
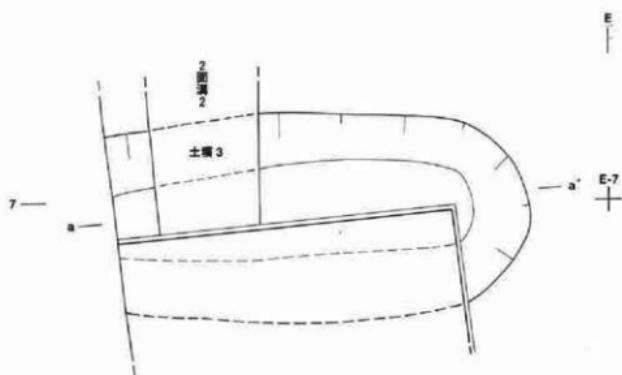
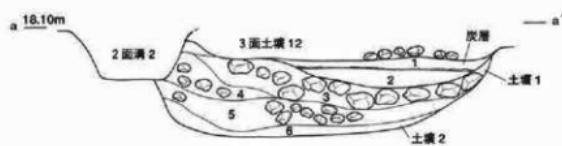
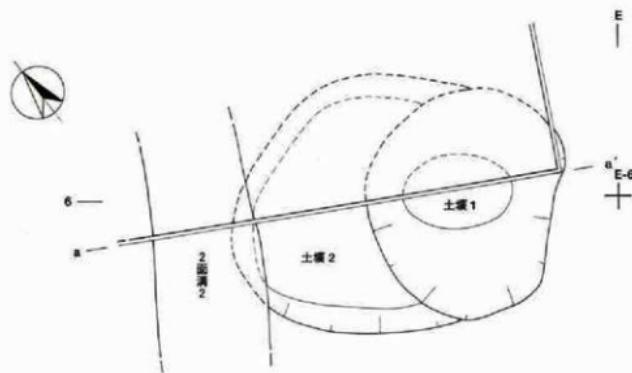
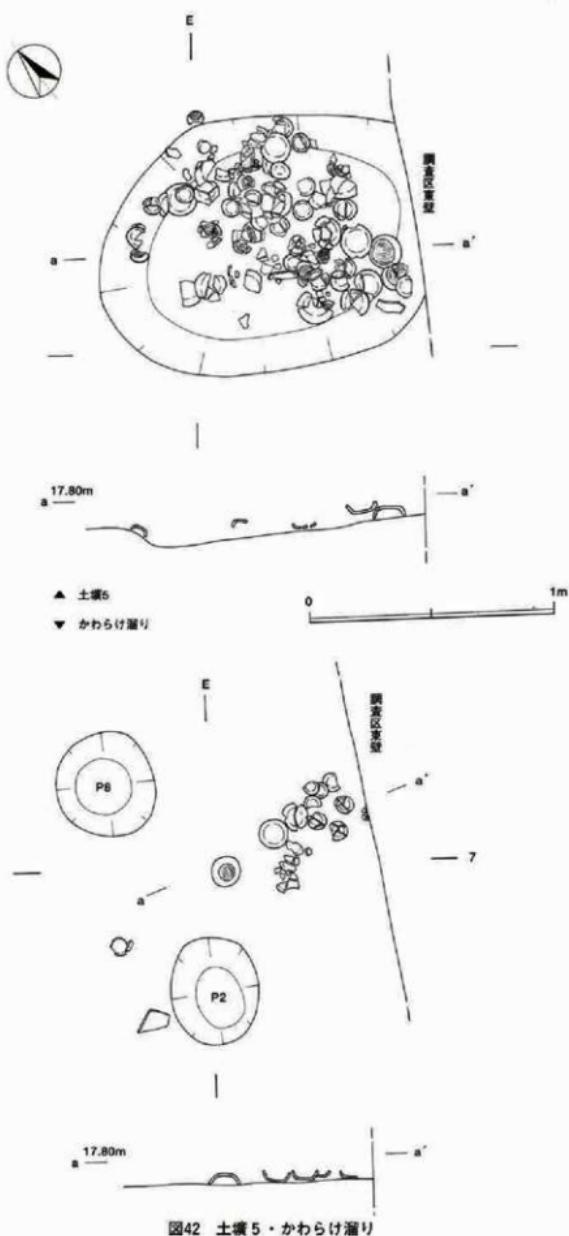


図41 土壤1～3

土層は厚さ10cm程で小土丹塊を多く混入した黄茶灰色粘質土、下層は拳・人頭大の大型土丹塊を多量に投げこんだもので締まりの強い黄茶灰色粘質土である。図示可能な遺物は出土していない。

土壤4：調査区北側でB-3グリットに位置し、第2面で検出した溝2に東半分の一部を壊されている。規模は東西軸62cm、南北軸92cm、深さ50cmである。掘り方は南北位の楕円形を呈し、断面逆台形に掘り込まれている。覆土は小土丹塊と炭化物を多く混入した暗黄灰色粘質土で締まりの弱いものである。図示可能な遺物は図43-1のロクロ成形によるかわらけ小皿が1点出土した。

土壤5：調査区南東側でE-8杭付近に位置し、東側は調査区外に延びている。規模は東西軸140cm以上、南北軸104cm、深さ18cmを測り、掘り方は東西位の楕円形で断面浅い皿状を呈する。覆土は土丹粒・炭化物を多く混入した締まりの弱い暗黄灰色粘質土である。土壤内からは43個体以上のかわらけがまとった状態で出土した（図42上段）。遺物は図43-2～44がすべてロクロ成形の資料である。2～28が小皿で法量は口径6.6～8.1cm、底径3.9～5.7cm、器高1.6～2.3cm、29～33が中皿で法量は口径10.5～11.1cm、底径6.1～7.2cm、器高3.1～3.3cm、34～44が大皿で法量は口径11.8



～13.1cm、底径7.5～8.9cm、器高3.0～3.5cmである。

b. かわらけ溜まり (図40・42、図版10・15d)

かわらけ溜りは、土壤3東側の面上に狭い範囲ながら、かわらけがまとまった状態で確認されたもので調査区東壁外に拡がっていた。かわらけは土圧で潰されていたが接合可能な完形品が主体を占め、合計18個体が得られている(図42下段)。出土遺物は図43-49～65がロクロ成形のかわらけである。49～59が小皿で法量は口径6.8～7.8cm、底径4.0～4.9cm、器高1.7～2.3cm、60～64が中皿で法量は口径9.5

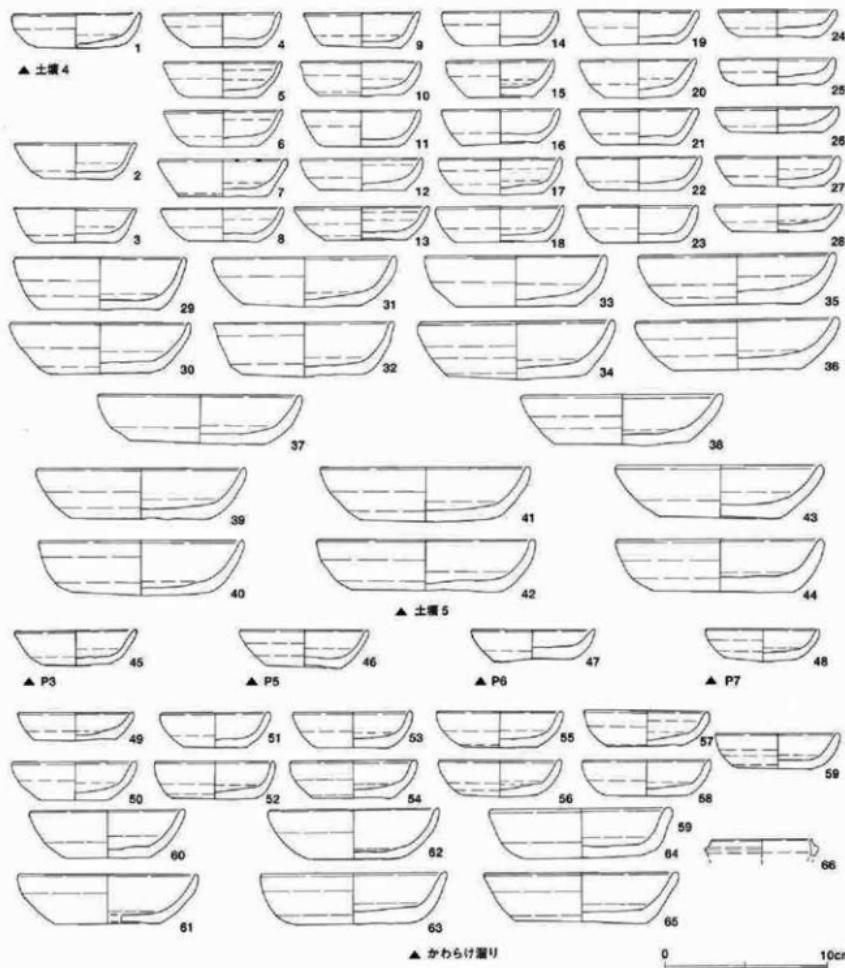


図43 土壌・ピット出土遺物

~11.1cm、底径5.1~7.0cm、器高3.1cm前後、65が大皿である。66が白磁合子の身部である。

c. 柱穴 (図40・42、図版10・15c)

この面に伴う柱穴は、約40口であるが掘立柱建物跡を構成するような柱穴列の配置は認められなかつた。また調査区南東端の面上からは、丸杭状のものが腐蝕して地中の水分中に含まれていた鉄が円形のリング状に固まつてできたと思われる径10cm前後の小ピット19口が確認された。以下には図示可能な出土遺物を伴う柱穴についてだけ触ることにする。

P 3 : D - 7 グリッドで土壤5に接した位置で検出した。柱穴掘り方は、不整円形を呈しており長径45cm、短径34cm、深さ32cmを測り、底面に著しく腐蝕の進んだ礎板の痕跡が確認されている。覆土中からはロクロ成形のかわらけ小皿1点が出土した(図43-45)。

P 5 : E - 9 杖の位置で検出した。柱穴掘り方は、梢円形を呈し、長径47cm、短径38cm、深さ30cmを

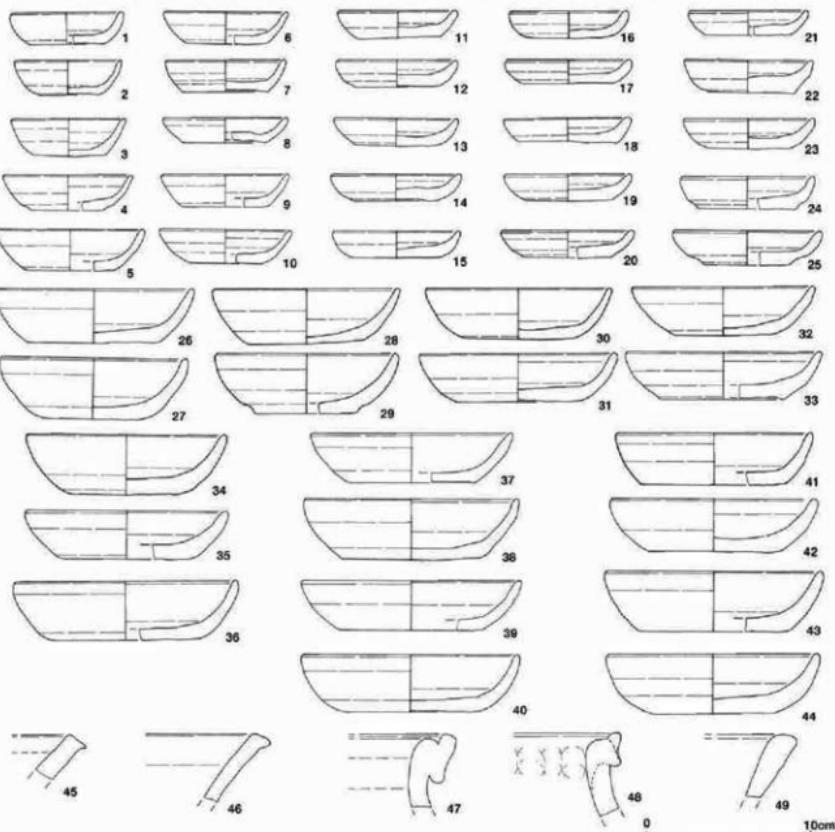


図44 第3面下～第4面出土遺物

測る。覆土中からはロクロ成形のかわらけ小皿1点が出土した（図43-46）。

P 6 : D - 8 グリットの位置で検出した。柱穴掘り方は、楕円形を呈し、長径45cm、短径34cm、深さ35cmを測る。覆土中からはロクロ成形のかわらけ小皿1点が出土した（図43-47）。

P 7 : D - 7 グリットで土壤3東隣の位置で検出した。柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、径43cm、深さ40cmを測り、底面に礎板らしき木質部が腐蝕した痕跡が確認された。覆土中からはロクロ成形のかわらけ小皿1点が出土した（図43-48）。

d. 第3面下～第4面上出土遺物（図44-1～49、図版15e）

1～44のかわらけはすべてロクロ成形の資料であり、1～25の小皿は口径6.5～8.8cm（平均7.7cm）、底径3.8～6.0cm（平均約5.0cm）、器高1.4～2.4cm（平均約1.8cm）の法量を示しており、口径8cm以下で器高2cm以下の資料が主体をしている。26～34・41の中皿は口径11.1～12.0cm（平均11.6cm）、底径5.8～7.5cm（平均6.9cm）、器高3.0～3.7cm（平均3.3cm）の法量である。35～40・42～44の大皿は口径12.3～13.5cm（平均12.9cm）、底径7.3～8.4cm（平均約8.0cm）、器高3.1～3.9cm（平均3.1cm）の口径13cm以下の法量をもつ資料が主体を占めている。

この他、45～48が常滑の捏鉢と甕、49が土器質火鉢である。

表1 遺物観察表(1)

団番号	種類	法量(a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴(文様・模索・施土・素地・施色など)	備考(遺構・その他)
10-1	山茶碗	口縁部小片	灰白色 滑妙・精良土 硬質 東濃型	第1面 建物1 P25
2	鉄製品 斧	長さ3.6cm 幅6mm 厚さ5mm	角鋒	・ 建物1 P30
3	かわらけ	a12.8cm b7.4cm c3.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針	・ 建物1 P34
4	男瓦	厚さ1.6cm	凸面側目押き後ナテ消し 四面目押 縦離型	・ *
5	かわらけ	a9.4cm b5.2cm c2.9cm	外底赤切削 ロクロ 赤褐色 滑妙・青母・赤色粒・白針 施明顔	・ 建物1 P39
6	瀬戸 入子	a9.4cm	ロクロ 黄色 滑妙・精良土 硬質	・ 建物2 P15
7	かわらけ	a10.2cm b5.8cm c3.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒 口縁一部打欠	・ 土壌2
8	かわらけ	a9.1cm b3.9cm c1.8cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒	・ 土壌3
9	かわらけ	a7.8cm b5.0cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・青母・赤色粒	・ *
10	かわらけ	a12.1cm b7.0cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒	・ *
11	小わらけ	a12.0cm b6.0cm c4.3cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・白針・土丹粒	・ *
12	瓦質 香炉	a9.4cm	外面口縁下文と上下1条沈線 横化ナデ・唇多 表面黒灰色 志都灰色	・ *
13	瓦瓦	瓦当部 厚4.7cm 女瓦部厚1.9cm	瓦当貼付側 表草文か 表面・志都灰色・黒灰色 滑妙・赤色粒	・ 土壌5
14	常滑 美	c16.0cm	輪投技法 外赤移日版 外面施墨り 灰色 滑妙・小石粒	・ 土壌7
15	衣瓦	厚さ2.2cm	背面離れ妙 斜位ナデ 上面離れ妙 斜位斜ナデ 表面黒灰色 志都灰色	・ *
16	石枕	長さ3(3.2cm) 幅(4.5cm) 厚1.5cm	凝灰質頁岩 本紫色 上下面に再加工痕有り	・ *
17	石枕	長さ3(6.5cm) 幅(4.8cm) 厚1.2cm	粘板岩系 黒褐色 上下面に再加工痕有り	・ *
18	砥石	長さ3(4.2cm) 幅1.7cm 厚0.7cm	泥岩系 黄褐色 上下面に使用痕	・ *
19	瓦質品 斧	長さ3(6.3cm) 幅6mm 厚さ3.9mm	角鋒	・ *
20	かわらけ	a7.8cm b3.7cm c2.7cm	外底赤切削 ロクロ 赤褐色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒	・ 土壌9
21	かわらけ	a12.4cm b6.2cm c3.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒	・ *
22	かわらけ	a7.9cm b6.0cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 赤褐色 滑妙・赤色粒	・ 土壌10
23	かわらけ	a14.4cm b9.9cm c3.6cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒	・ *
24	かわらけ	a5.5cm b3.8cm c1.8cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・青母・白針	・ 土壌11
25	かわらけ	a6.3cm b6.0cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・雲母・白針	・ *
26	かわらけ	a5.8cm b3.8cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・雲母・白針	・ 土壌12
27	かわらけ	a6.2cm b6.0cm c2.4cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 滑妙・赤色粒・小石粒	・ *
28	かわらけ	a5.7cm b3.8cm c2.3cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・雲母・白針	・ *
29	かわらけ	a7.0cm b3.2cm c2.5cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・雲母・白針	・ *
30	かわらけ	a6.0cm b3.8cm c2.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・雲母	・ *
31	山茶碗	口縁部小片	外底赤切削 精緻高台 灰白色 滑妙・精良土 硬質 東濃型	・ *
11-1	白かわらけ	a4.0cm b3.3cm c0.6cm	外底赤切削 コースター状根木 明灰白色 滑妙・精良	・ 潟1
2	かわらけ	a6.2cm b4.0cm c2.0cm	外底赤切削 ロクロ 明黃褐色 滑妙・赤色粒・白針	・ *
3	かわらけ	a5.9cm b4.2cm c2.3cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・青母・白針・小石粒	・ *
4	かわらけ	a5.4cm b4.0cm c2.2cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・青母・白針・土丹粒	・ *
5	かわらけ	a5.4cm b4.2cm c2.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・青母	・ *
6	かわらけ	a5.1cm b4.0cm c2.2cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒	・ *
7	かわらけ	a7.8cm b4.8cm c2.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒	・ *
8	かわらけ	a9.0cm b5.6cm c2.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 滑妙・赤色粒・白針	・ *

表2 遺物観察表(2)

件番号	種類	法量(a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴(文様・輪葉・施土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
11-9	かわらけ	a8.4cm b4.0cm c2.2cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	第1面 清土
10	かわらけ	a8.2cm b4.2cm c2.7cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
11	かわらけ	a8.0cm b4.4cm c2.4cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	+
12	かわらけ	a8.0cm b4.2cm c2.7cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
13	かわらけ	a7.8cm b5.0cm c1.8cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	+
14	かわらけ	a7.2cm b4.7cm c2.5cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	+
15	かわらけ	a7.4cm b4.2cm c2.6cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
16	かわらけ	a8.1cm b4.8cm c2.6cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	+
17	かわらけ	a9.0cm b5.6cm c2.2cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・白针・土丹粒	+
18	かわらけ	a10.0cm b6.4cm c2.8cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・白针・土丹粒	+
19	かわらけ	a10.6cm b6.2cm c3.2cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・白针・土丹粒	+
20	かわらけ	a11.4cm b6.6cm c3.3cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白针・土丹粒	+
21	かわらけ	a10.8cm b6.7cm c3.4cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白针・土丹粒	+
22	かわらけ	a10.8cm b5.9cm c3.4cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白针	+
23	かわらけ	a11.0cm b6.6cm c3.5cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・小石粒・土丹粒	+
24	かわらけ	a11.2cm b6.8cm c3.4cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・白针・土丹粒 口縁一部打欠	+
25	かわらけ	a11.7cm b7.0cm c3.4cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・小石粒・土丹粒	+
26	かわらけ	a12.3cm b7.4cm c3.8cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白针・小石粒・土丹粒	+
27	かわらけ	a13.0cm b7.2cm c3.4cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白针・小石粒	+
28	かわらけ	a14.0cm b8.0cm c3.5cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・白针・土丹粒	+
29	かわらけ	a11.0cm b3.7cm c3.5cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白针・土丹粒	+
30	かわらけ	a12.8cm b7.8cm c3.7cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白针	+
31	かわらけ	a13.0cm b7.5cm c4.1cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白针	+
32	かわらけ	a13.2cm b8.1cm c4.0cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白针・土丹粒	+
33	かわらけ	a12.8cm b6.9cm c3.6cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白针・小石粒・土丹粒	+
34	かわらけ	a13.0cm b7.3cm c3.9cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・白针・土丹粒	+
35	かわらけ	a13.8cm b6.8cm c3.9cm	外底赤切版 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・白针・土丹粒	+
36	白釉わらけ	a11.4cm b6.7cm c2.4cm	外底赤切版 ロクロ 明灰白色 微妙・精良土	+
37	窓口直線大皿	口縁部	ロクロ オリーブ色一部白釉 黄灰色 微妙 精良土	+
38	窓口折線深皿	c9.3cm	外面部下端～底部黒削り 黄白色刷毛塗り 灰白色 微妙 精良土	+
39	窓口底線目皿	c11.3cm	貼付高台 高台内面凹 オリーブ色 刷毛塗り 高台内露胎 黄灰色	+
40	窓口直線大皿	a24.9cm	ロクロ オリーブ色 刷毛塗り 黄灰色 微妙・精良土	+
41	窓口折線片口	a24.9cm	ロクロ オリーブ色 刷毛塗り 灰白色 微妙・精良土 行平鍋	+
42	常滑 甕	c25.9cm	輪接柱法 外底高目底 表面明褐胎色 黄褐色 直身・小石粒	+
43	女瓦	厚さ2.6cm	凹面布目低 離れ縫 凸面斜格子目印 離れ縫 黄褐色 微妙・小石粒	+
44	女瓦	厚さ1.8cm	凹面離れ縫 対置ナデ 凸面斜格子目印 離れ縫 黄褐色 直身・小石粒	+
45	女瓦	厚さ2.1cm	凹面離れ縫 対置離れ縫 凸面離れ縫 黄褐色 直身・小石粒	+
42-46	女瓦	厚さ2.1cm	凹面丁寧ナデ 凸面斜格子目印 離れ縫 精良陶 直身・小石粒	+
47	女瓦	厚さ2.6cm	凹面丁寧ナデ 凸面斜格子目印 離れ縫 対置ナデ 黄褐色 微妙・小石粒	+

表3 遺物観察表(3)

団・番号	種類	法量 (a.口徑 b.底径 c.器高)	成形・特徴 (文様・軸面・断土・素地・焼成など)	備考 (遺構・その他)
12-48	土器質 火鉢	口縁部	輪錐技法 口縁端部厚唇 明黄褐色 微妙・雲母・精良土	第1面 清1
49	瓦質 火鉢	c22.5cm	脚點材 外面下端三巴文スタンプ 表面灰黑色 灰白色 粗砂・小石粒	* *
50	砥石残存	長8.4cm 幅3.0cm 厚さ0.8cm	凝灰質頁岩 本紫褐色 上面使用痕下面剥離面	*
51	火打石	長3.2cm 幅2.0cm 厚さ1.5cm	両側に打撃痕 石英質 白色	*
13-1	かわらけ	a7.1cm b4.9cm c1.9cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	*
2	漬戸折縁深皿	口縁部	ロクロ オリーブ灰褐色小気泡多し 灰灰色 微妙 精良土	*
3	かわらけ	a12.9cm b8.0cm c3.4cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
4	かわらけ	a14.2cm b8.1cm c4.0cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
5	常滑 振跡	c16.3cm	輪錐技法 内面使用の摩滅 褐色 微妙・小石粒	*
6	かわらけ	a6.9cm b4.2cm c2.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
7	かわらけ	a8.7cm b5.7cm c2.6cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
8	かわらけ	a11.1cm b6.7cm c3.1cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針・小石粒	*
9	かわらけ	a12.9cm b7.2cm c4.1cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 蘭青・赤色粒・雲母・白針・土月粒	*
10	漬戸 入子	a7.6cm	灰白色 微妙 精良土 内面赤褐色の紅付帯	*
11	かわらけ	a8.0cm b4.2cm c2.0cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
12	土製品	a3.2cm c1.5cm	外而凹削り 内面二次焼成で黒変色 薄橙色 かわらけ質	*
13	漬戸折縁深皿	口縁部	灰釉 淡黄色 灰質白色 微妙 精良土	*
14	かわらけ	a14.2cm b8.6cm c4.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
15	砥石	残存長2.7cm 幅3.1cm 厚さ0.5cm	表面使用痕 黄褐色 喜光輝か	*
16	かわらけ	a9.8cm b6.0cm c2.8cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
17	かわらけ	a13.0cm b4.6cm c3.3cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
18	かわらけ	a8.6cm b5.0cm c2.6cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
19	かわらけ	a11.8cm b8.0cm c3.4cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・白針	*
20	白磁 四耳壺	a8.2cm	口縁玉環状 灰色透明 貫入り有り 灰色 精良	*
21	土師質 瓢	瓣扇部分	羽根形 灰色 微妙・雲母良好 南伊勢系所産か	*
22	かわらけ	a10.0cm b5.9cm c3.0cm外底赤切痕	ロクロ 明黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
23	漬戸折縁深皿	c18.0cm	ロクロ 瓢部貼付 灰釉 明黄褐色 微妙 精良土 古漬戸後期(中期)	*
24	踏瓦	瓦当上部斜面直径13.3cm	内区菊花文模 外区珠文模 表面灰黑色 灰白色 微妙・小石粒・白色粘土	*
25	かわらけ	a9.0cm b5.6cm c2.3cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針 内外面摩耗付 傷明瞭	*
26	漬戸 瓢皿	c9.6cm	外底赤切痕 内底即目 灰釉 淡黄色 微妙 灰好	*
27	常滑 振跡	口縁部分	輪錐技法 外口縁下横ナギ 表面赤褐色 灰褐色 微妙・石粒	*
28	常滑 振跡	c12.4cm	輪錐技法 外底即目 内面摩滅 黄褐色 微妙・石粒	*
29	山茶碗	c4.0cm	外底赤切痕 初煅痕 斧付高台 灰白色 微妙 精良 燻質	*
30	男瓦	厚さ1.7cm	凸面模倣ナギ 凹面布目模・雁縫 灰褐色 表面灰黑色 灰白色 微妙・小石粒	*
31	かわらけ	a11.7cm b6.4cm c3.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・小石粒	*
32	白かわらけ	口縁部小片	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
14-1	かわらけ	a6.4cm b3.2cm c2.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・小石粒	第1面上にまたがる層
2	かわらけ	a6.2cm b3.4cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・小石粒	*
3	かわらけ	a6.0cm b3.3cm c1.9cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*

表4 遺物観察表(4)

図・番号	種類	法量(a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴(文様・地巻・胎土・溝跡・焼痕など)	備考(遺構・その他)
14-4	かわらけ	a8.5cm b5.7cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 桜色 微妙・雲母・白鉢	第1面上及び底面層
5	かわらけ	a8.3cm b5.4cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白鉢・赤色粒	*
6	かわらけ	a12.2cm b6.2cm c4.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄色地 微妙・雲母・白鉢・赤色粒・小石粒	*
7	かわらけ	a12.0cm b7.6cm c3.5cm	外底系切削 ロクロ 桜色 微妙・白鉢・赤色粒・小石粒	*
8	かわらけ	a12.4cm b6.6cm c4.0cm	外底系切削 ロクロ 桜色 微妙・雲母・白鉢・赤色粒・小石粒	*
9	漁戸口日茶碗	a12.4cm	ロクロ 内面～外面部中位黒褐色 口縁部茶褐色 実白色 微妙 精良土	*
10	漁戸縫船小瓶	a10.4cm	ロクロ 口縁部内外黒褐色 地色 微妙 精良土	*
11	山茶碗	c4.0cm	ロクロ 口縁部降低 地白色 微妙 精良 瓦質	*
12	漁戸 調理	口縁部片	口縁～体部灰褐色毛塗り 灰黄色 微妙 精良土	*
13	漁戸折枝深皿	c9.5cm	外底系切削 内面灰褐色 油火部分に白濁 灰黄色 微妙 精良土	*
14	漁戸折枝深皿	c14.8cm	外底系切削 内面灰オリーブ色灰釉 灰褐色 微妙 精良土	*
15	漁戸柄付片口	a10.9cm	ロクロ 内外面オリーブ色灰釉 灰褐色 微妙 精良土	*
16	漁戸 水注	肩部11.1cm	肩口5条・胴部3条沈線 外面オリーブ色灰釉 灰黄色 微妙 精良土	*
17	常滑 程跡	口縁部片	輪積技法 地色 微妙・小石粒粗土 涅跡1箇	*
18	常滑 程跡	口縁部片	輪積技法 地色 微妙・小石粒粗土 涅跡1箇	*
19	常滑 程跡	a31.9cm	輪積技法 口縁部楕円ナメ 表面赤褐色 咸褐色、微妙・小石粒 涅跡1箇	*
20	常滑 広口壺	肩～鋸部片	輪積技法 肩部降低解 表面黄褐色 灰白色 微妙・小石粒	*
21	宇瓦	瓦当部厚3.2cm 女瓦部厚1.9cm	瓦当粘付技法 上向き凸縫の剥離瓦 瓦当・凹凸面離れ妙 微妙・石粒	*
22	宇瓦	女瓦部厚2.4cm	瓦当粘付技法 瓦当剥離・凹凸面離れ妙 微妙・石粒	*
23	宇瓦	女瓦部厚2.4cm	瓦当粘付技法 瓦当剥離・凹凸面離れ妙 粉子・花菱文目地 微妙・石粒	*
24	女瓦	厚2.4cm	凹面帯目張・離れ妙・ナデ 凸面離れ妙・離位ナデ 灰黑色 微妙・石粒	*
25	女瓦	厚1.9cm	凹面帯目張・離れ妙・ナデ 凸面離れ妙・斜格子文目地 灰黑色 微妙・石粒	*
26	瓦質 香炉	a10.9cm	外面白口下1条沈線と葉文式スタンプ 表面暗灰色 灰色 微妙・精良土	*
27	瓦質 香炉	a17.0cm	内外面丁寧な模様ナデ 表面灰褐色 灰色 微妙・精良土	*
28	瓦質 香炉	c14.6cm	外底移口直 外面墨衣面紋の帶状軸 表面灰黑色 灰色 微妙・小石粒	*
29	不明 伊器	底部～体部下位	輪積技法 底部移設軸 灰黑色 微妙 精良土 壓縮	*
30	滑石 不明品	長さ4.2cm 幅1.8cm 厚さ1.2cm	滑石製錠の再加工品 用途不明	*
31	滑石 不明品	長さ2.5cm 幅2.6cm 厚さ1.0cm	滑石製錠の再加工品 用途不明	*
32	砥石	残存長5.8cm 幅3.0cm 厚さ1.9cm	4面に使用直 明緑灰褐色 上野産系か	*
33	火打石	長さ4.0cm 幅2.7cm 厚さ1.2cm	全体に打撃痕 石英質 白色	*
34	砥石	残存長3.3cm 幅3.8cm 厚さ0.7cm	上下面に使用直 灰褐色やや赤味 鳴尾産系	*
35	銅鏡	洪武鑄宝	中国明代 初鑄年1368年	*
36	掛金具	残存長4.2cm 幅3mm 厚さ6mm	鉤釘状で中程からL字形に曲げる	*
37	鉤釘	残存長4.5cm 幅6mm 厚さ5mm	角鉤	*
38	鉤釘	残存長3.6cm 幅6mm 厚さ8mm	角鉤	*
38-1	かわらけ	a7.1cm b4.0cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 桜色 微妙・雲母・白鉢・赤色粒	第2面 土埋1
2	かわらけ	a7.9cm b5.6cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 桜色 微妙・雲母・白鉢・赤色粒	* *
3	かわらけ	a13.2cm b8.5cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 桜色 微妙・雲母・白鉢・赤色粒 口縁煤付着 雷明皿	* *
4	白磁 口元皿	a9.0cm	灰白色半透明 口縁部露胎 明灰白色 壓縮	* *

表5 遺物観察表(5)

団・番号	種類	法量(a.口徑 b.底径 c.高さ)	成形・特徴(文様・繪面・臉地・墨地・焼成など)	備考(道標・その他)
18-5	鉢製品 斧	残存長5.2cm 厚3mm 積5mm	角斧	第2面 土器1
6	かわらけ	a7.5cm b1.8cm c1.5cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	* 土器2
7	常滑 茶	a37.9cm	輪削技法 表面暗赤褐色 研灰色 微妙・小石粒・黑色粒	* *
8	青磁 扇葉皿	a9.2cm	無文 オリーブ灰色不透明 厚手施釉 底白色 織妙 聖良土 東濃型	* 土器5
9	山里	a20cm b3.6cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 灰色 微妙 聖良土 東濃型	* *
10	かわらけ	a7.0cm b4.4cm c2.1cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針 焼明道	* 土器6
11	かわらけ	a7.6cm b4.3cm c1.5cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・小石粒	* *
12	かわらけ	a7.8cm b5.4cm c2.1cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・小石粒	* *
13	かわらけ	a11.9cm b7.4cm c2.9cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・小石粒 焼明道	* *
14	かわらけ	a12.1cm b6.0cm c3.3cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	* *
15	倒鉢	元豊通宝(行書)	北宋銘 初銘年1078年	* *
16	倒鉢	元豊通宝(篆書)	北宋銘 初銘年1078年	* *
17	瓶	a7.6cm	ロクロ ロ織謹定で輪花状に成形 黒灰地 微妙 聖良土	* 土器7
18	かわらけ	a7.6cm b4.8cm c2.7cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・白針	* 土器8
19	かわらけ	a7.6cm b4.8cm c2.7cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・白針	* *
19-1	かわらけ	a7.0cm b3.8cm c2.3cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* 土器9
2	かわらけ	a7.0cm b3.8cm c2.3cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
3	かわらけ	a7.2cm b4.3cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
4	かわらけ	a7.2cm b4.0cm c2.5cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
5	かわらけ	a6.7cm b4.0cm c2.0cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
6	かわらけ	a6.9cm b5.0cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
7	かわらけ	a7.6cm b5.6cm c2.3cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
8	かわらけ	a8.2cm b5.4cm c2.1cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
9	かわらけ	a8.8cm b4.8cm c1.9cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
10	かわらけ	a9.9cm b4.2cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
11	かわらけ	a7.0cm b4.8cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	* *
12	かわらけ	a7.8cm b4.8cm c2.3cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
13	かわらけ	a7.3cm b5.2cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
14	かわらけ	a7.8cm b4.6cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
15	かわらけ	a8.0cm b5.4cm c1.5cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
16	かわらけ	a8.2cm b5.8cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針・小石粒	* *
17	かわらけ	a7.9cm b5.8cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・小石粒	* *
18	かわらけ	a7.2cm b4.2cm c1.6cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
19	かわらけ	a7.5cm b4.2cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
20	かわらけ	a7.9cm b6.0cm c1.6cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	* *
21	かわらけ	a7.6cm b4.2cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
22	かわらけ	a8.1cm b5.6cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針・土丹粒	* *
23	かわらけ	a8.0cm b5.8cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・赤色粒・白針	* *
24	かわらけ	a7.8cm b4.9cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・小石粒 焼明道	* *

表6 遺物観察表(6)

図・番号	種類	法量(a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴(文様・施墨・粘土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)	
19-25	かわらけ	a7.7cm b4.6cm c2.1cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・赤色粒・雲母・白灰	第2面 土壌9	
26	かわらけ	a7.8cm b5.6cm c1.8cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 繊維・雲母・白灰	+	+
27	かわらけ	a7.9cm b5.9cm c1.5cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・小石粒・赤色粒	+	+
28	かわらけ	a8.0cm b5.4cm c2.5cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・赤色粒・雲母・白灰	+	+
29	かわらけ	a7.8cm b4.4cm c2.4cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・赤色粒・雲母・白灰・透明膜	+	+
30	かわらけ	a8.2cm b5.6cm c2.9cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・赤色粒・雲母・白灰	+	+
31	かわらけ	a10.4cm b6.0cm c2.8cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・赤色粒・雲母・白灰	+	+
32	かわらけ	a11.7cm b5.7cm c3.3cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰	+	+
33	かわらけ	a11.0cm b6.3cm c2.9cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒・透明膜	+	+
34	かわらけ	a10.9cm b6.4cm c2.9cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰・小石粒・赤色粒	+	+
35	かわらけ	a12.2cm b7.2cm c3.3cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰・小石粒・赤色粒	+	+
36	かわらけ	a10.6cm b5.4cm c2.8cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
37	かわらけ	a11.7cm b7.1cm c3.3cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・小石粒	+	+
38	かわらけ	a11.2cm b7.2cm c3.1cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
39	かわらけ	a11.5cm b6.5cm c3.0cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 繊維・雲母・白灰・赤色粒・小石粒	+	+
40	かわらけ	a11.1cm b6.2cm c3.0cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
41	かわらけ	a12.1cm b8.3cm c3.2cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
42	かわらけ	a12.1cm b7.1cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
43	かわらけ	a12.1cm b6.7cm c3.2cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒・小石粒	+	+
44	かわらけ	a12.8cm b7.6cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒・小石粒	+	+
45	かわらけ	a13.4cm b8.0cm c3.5cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
46	かわらけ	a13.3cm b7.0cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
47	かわらけ	a13.4cm b8.6cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
48	かわらけ	a12.3cm b7.2cm c3.1cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒・透明膜	+	+
49	かわらけ	a12.7cm b7.3cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
50	かわらけ	a13.0cm b7.9cm c3.6cm	外底赤切削 ロクロ 棕色 繊維・雲母・白灰・赤色粒	+	+
51	青磁 斜縁皿	a11.0cm	外面蓮文花 壁オーリーブ透明厚い施釉 灰白色 精良	+	+
52	青白磁 小皿	口縁部少片	外型作り 外面草花文 本青色透明薄い施釉 灰白色 精良・堅致	+	+
53	白磁 口丸皿	c5.2cm	灰白色 不透明薄い施釉 灰色 精良	+	+
54	瀬戸 入子	a23cm b18cm c9cm	外底赤切削 黄灰白色 繊維・精良・土口唇部陥凹・紅付着	+	+
55	瀬戸 入子	a8.8cm b4.6cm c3.4cm	外底赤切削 口縁荒削で輪花形に成形 灰白色 繊維・精良・土口	+	+
56	瀬戸 入子	c4.1cm	外底赤切削 灰色 繊維・精良・堅致	+	+
57	山茶碗	a13.7cm	ロクロ 表面灰黄色 灰色 繊維・精良・堅致・東濃型	+	+
58	瀬戸 洗	a17.2cm b14.0cm c5.3cm	ロクロ 壁オーリーブ色の灰釉墨毛染り再火・一部白澤剥離・淡灰色 精良	+	+
59	瀬戸 四耳壺	口縁部	口縁部玉縁状 灰白色 精良・堅致	+	+
60	常滑 採鉢	a31.3cm b13.6cm c10.5cm	輪枝接合 内面使用痕跡・表面黄褐色 灰色 紗粒・石粒	+	+
61	常滑 鹿口壺	体部・瓶部分	外底赤目痕 内底付近陥凹 表面赤褐色 灰暗色 紗粒・石粒	+	+
62	土器 烧甌	径23cm 厚さ5mm	かわらけ底部を円形に擦り加工 棕色 繊維・雲母・白灰	+	+
63	土器質 火鉢	a31.8cm	口端部肥厚 貫通しない小孔 内面黒漆付着 黄褐色 繊維多量	+	+

表7 遺物観察表(7)

固・番号	種類	法量 (a.口徑 b.底径 c.髙さ)	成形・特徴 (文様・物表・粒土・素地・焼成など)	角考 (遺構・その他)
19-64	鉄製品 刀子	残存長24.6cm 口長18.6cm 厚4mm	腐蝕進むが基部に柄の木片痕跡残す	第2面 土壁9
65	鉄製品 刀子	全長26.8cm 口長18.6cm 厚4mm	腐蝕が進み茎部の目釘穴が不明	× ×
66	鉄製品 刃	残存長6.3cm 幅6mm 厚4mm	角刃	× ×
67	鉄製品 刃	残存長6.6cm 幅6mm 厚4mm	角刃	× ×
68	鉄製品 刃	残存長6.5cm 幅5mm 厚3mm	角刃	× ×
69	鉄製品 刃	残存長8cm 幅6mm 厚4mm	角刃	× ×
20-1	白わらけ	a4.4cm b2.6cm c1.4cm	外底糸切痕 ロクロ 白色 微細・白針	× 土壁10
2	かわらけ	a7.6cm b3.4cm c1.9cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
3	かわらけ	a7.6cm b5.0cm c1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・赤色粒・白針	× ×
4	かわらけ	a8.0cm b3.6cm c2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
5	かわらけ	a7.2cm b4.6cm c2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	× ×
6	かわらけ	a8.0cm b5.5cm c2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・赤色粒・白針	× ×
7	かわらけ	a11.5cm b5.9cm c3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・赤色粒・白針	× ×
8	かわらけ	a11.8cm b6.5cm c3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	× ×
9	かわらけ	a11.8cm b6.1cm c3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母	× ×
10	かわらけ	a12.8cm b8.0cm c3.8cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色粒・雲母・白針	× ×
11	かわらけ	a11.9cm b7.6cm c3.2cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色粒・雲母・白針	× ×
12	かわらけ	a13.2cm b7.4cm c3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
13	かわらけ	a7.4cm b4.8cm c1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	× 土壁11
14	かわらけ	a7.7cm b5.7cm c1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
15	かわらけ	a7.4cm b4.4cm c1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色粒・雲母・白針	× ×
16	かわらけ	a7.5cm b5.2cm c1.8cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	× ×
17	かわらけ	a11.8cm b5.6cm c3.3cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
18	かわらけ	a13.2cm b7.8cm c3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
19	かわらけ	a12.4cm b8.7cm c3.5cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	× ×
20	雷渦 瓢	口縁部小片	輪積技法 口縁部降伏輪 灰褐色 微細・石粒	× ×
21-1	かわらけ	a7.4cm b5.4cm c2.1cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	× 国2
2	かわらけ	a7.8cm b5.3cm c1.6cm	外底糸切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
3	かわらけ	a8.0cm b6.0cm c1.7cm	外底糸切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	× ×
4	かわらけ	a12.5cm b6.0cm c3.4cm	外底糸切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	× ×
5	圓柱 四耳壺	a9.5cm	口縁部玉締状 明灰褐色 精良・堅致	× ×
6	圓柱 刀劍	a15.5cm	灰白色薄く墨縁 淡黄色 精良・堅致	× ×
7	常滑 瓢	口縁部小片	輪積技法 口縁部降伏輪 灰褐色 微細・石粒	× ×
8	砥石	残存長6.4cm 幅3.7cm 厚2.3cm	上・両側面下面再加工面 明黄褐色砂	× ×
22-1	碁石 白	径2.2cm 番径1.7cm 厚9mm	楕円形 磁石系 白色半透明	× 遺物庫り1
2	碁石 白	長径1.7cm 番径1.5cm 厚8mm	楕円形 磁石系 白色半透明	× ×
3	碁石 白	長径2.4cm 番径1.6cm 厚8mm	楕円形 磁石系 白色半透明	× ×
4	碁石 白	長径2.1cm 番径2.0cm 厚12mm	不整円形 一部打欠き加工 長石系 白色半透明	× ×
5	碁石 白	長径1.8cm 番径1.5cm 厚7mm	不整円形 磁石系 白色半透明	× ×

表8 遺物観察表(8)

固・番号	種類	法量(a.口徑 b.底径 c.高さ)	成形・特徴(文様・輪郭・刷毛・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
22-6	磨石 白	長径1.7cm 短径1.5cm 厚さ6mm	指円形 上下面研磨加工 長石系 白色半透明	第2面 磨石面
7	磨石 白	長径1.8cm 短径1.5cm 厚さ7mm	不整円形 長石系 白色半透明	* *
8	磨石 白	長径1.9cm 短径1.8cm 厚さ8mm	不整円形 上下面研磨加工 長石系 白色半透明	* *
9	磨石 白	長径2.4cm 短径1.3cm 厚さ8mm	不整円形 長石系 白色半透明	* *
10	磨石 白	長径1.8cm 短径1.4cm 厚さ8mm	不整円形 長石系 白色半透明	* *
11	磨石 黒	長径2.1cm 短径1.7cm 厚さ6mm	指円形 上下面研磨加工 粘板岩系 青黒色と灰色の斑	* *
12	磨石 黒	長径1.9cm 短径1.5cm 厚さ7mm	指円形 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
13	磨石 黒	長径2.1cm 短径1.4cm 厚さ8mm	指円形 下面研磨加工 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
14	磨石 黒	長径2.0cm 短径1.4cm 厚さ8mm	指円形 上下面研磨加工 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
15	磨石 黒	長径2.2cm 短径1.8cm 厚さ8mm	不整円形 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
16	磨石 黒	長径1.8cm 短径1.7cm 厚さ7mm	不整円形 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
17	磨石 黒	長径1.7cm 短径1.5cm 厚さ6mm	不整円形 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
18	磨石 黒	長径2.1cm 短径1.5cm 厚さ3mm	指円形 上下面研磨加工 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
19	磨石 黒	長径1.5cm 短径1.6cm 厚さ3mm	丸く方角 上下面研磨加工 板岩系 青黒色と灰の斑	* *
20	磨石 黒	長径2.1cm 短径1.8cm 厚さ7mm	指円形 粘板岩系 青黒色と灰の斑	* *
23-1	かわらけ	a6.5cm b4.0cm c1.9cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* 遺物面記2
2	かわらけ	a7.2cm b4.4cm c2.0cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* *
3	かわらけ	a8.1cm b5.7cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	* *
4	かわらけ	a7.5cm b6.1cm c1.4cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針 再火表面灰色に変色	* *
5	かわらけ	a7.5cm b5.5cm c1.3cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	* *
6	かわらけ	a7.6cm b5.8cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	* *
7	かわらけ	a7.7cm b5.5cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	* *
8	かわらけ	a8.7cm b5.1cm c2.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
9	かわらけ	a12.2cm b7.5cm c3.3cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
10	かわらけ	a12.5cm b7.4cm c3.4cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・小石粒	* *
11	瓶口 鉛重	c8.3cm	外底系切痕 内底面で鋸刃削り 斧縫跡毛彫り 明青灰黒 微細	* *
12	常滑 白	a36.2cm	輪枝技法 口縁・肩部に灰白色陶灰斑 表面黒褐色 灰色 微細・小石粒	* *
13	滑石製 薬石	残存長9.3cm 幅9.3cm 厚さ16cm	滑石鍋底加工上面削り・拂り或成形痕 横6mm 空孔有 再火赤變	* *
14	鉄製品 小刀	残存長8.3cm 幅12cm 厚さ2mm	腐蝕が著しいが刃部先端鋒片	* *
15	鉄製品 刃	残存長39cm 幅5mm 厚さ4mm	角刃 頭部残存 鋼に伴い本質部残す	* *
16	鉄製品 刃	残存長43cm 幅3mm 厚さ2mm	角刃 頭部微少に欠失	* *
17	鉄製品 刃	残存長45cm 幅5mm 厚さ8mm	角刃 頭部残存 腐蝕が著しい	* *
18	鉄製品 刃	残存長58cm 幅2mm 厚さ3mm	角刃 頭部残存 鋼に伴い本質部残す	* *
24-1	かわらけ	a6.0cm b3.8cm c2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色・雲母・白針	* P.2
2	山茶碗	口縁～全体片	ロクロ 灰白色 微細・精良・堅緻 丸型	* P.4
3	かわらけ	a7.1cm b4.8cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色・雲母・白針	* P.5
4	かわらけ	a7.1cm b5.4cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色・雲母・白針・小石粒	* *
5	かわらけ	a11.7cm b7.4cm c3.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・赤色・雲母・白針・土丹粒	* *
6	瓶口 鉛重	a2.0cm	ロクロ内底に豊の線目 豊黄色の灰縫跡毛彫り 微細 精良	* *

表9 遺物観察表(9)

団・番号	種類	法量 (a.長径 b.底径 c.高さ)	皮形・特徴 (文様・施墨・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
24-7	瓦製品 瓦	残存長9.0cm 幅4.0cm 厚6mm	角打 施墨かなり進むがほぼ定形	第2面 P5
8	山皿	a3.0cm	ロクロ 底白色 微妙 施墨土	* P6
9	かわらけ	a10.8cm b5.7cm c3.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	* P7
10	かわらけ	a9.8cm b5.0cm c3.5cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	* P9
11	かわらけ	a12.6cm b7.2cm c3.8cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白粉・土丹粒	* *
12	かわらけ	a12.1cm b7.0cm c3.2cm	外底赤切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白粉・土丹粒	* P10
13	瓦製品 瓦	残存長14.0cm 幅9.0cm 厚6mm	角打 施墨かなり進む 先端部を欠失	* P14
14	瓦製品 瓦	残存長9.0cm 幅4.0cm 厚6mm	角打 施墨かなり進むがほぼ定形	* *
15	かわらけ	a12.5cm b7.5cm c4.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	* P15
16	青白磁 梅瓶	最大径6.0cm	外腹渦巻文 水青色透明 薄い施墨 底白色 施墨・堅墨	* *
17	陶製品 瓦	残存長5.4cm 幅5mm 厚2mm	角打 施墨かなり進むが頭部残存	* *
25-1	かわらけ	a16cm b3.0cm c19cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・小石粒	第1面下～第2面
2	かわらけ	a6.3cm b4.3cm c19cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉	*
3	かわらけ	a7.2cm b4.0cm c19cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・土丹粒	*
4	かわらけ	a5.1cm b2.9cm c2.6cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
5	かわらけ	a6.0cm b4.1cm c2.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
6	かわらけ	a6.2cm b4.1cm c19cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
7	かわらけ	a5.4cm b2.8cm c2.2cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
8	かわらけ	a6.3cm b4.1cm c2.1cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
9	かわらけ	a6.6cm b4.4cm c19cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉	*
10	かわらけ	a5.5cm b3.8cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉・土丹粒	*
11	かわらけ	a7.0cm b4.6cm c1.6cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉・土丹粒	*
12	かわらけ	a7.3cm b4.9cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・土丹粒	*
13	かわらけ	a6.5cm b4.2cm c1.4cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白粉	*
14	かわらけ	a7.4cm b5.4cm c1.5cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉	*
15	かわらけ	a7.2cm b5.0cm c19cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・土丹粒	*
16	かわらけ	a6.4cm b3.6cm c2.2cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
17	かわらけ	a7.0cm b4.2cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
18	かわらけ	a6.8cm b5.0cm c2.0cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
19	かわらけ	a7.7cm b5.8cm c1.7cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉	*
20	かわらけ	a7.9cm b4.1cm c2.4cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉	*
21	かわらけ	a7.6cm b4.1cm c2.4cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・土丹粒	*
22	かわらけ	a8.0cm b5.8cm c2.2cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
23	かわらけ	a8.4cm b4.5cm c2.5cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・小石粒	*
24	かわらけ	a8.8cm b5.7cm c2.3cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉	*
25	かわらけ	a7.7cm b5.9cm c1.8cm	外底赤切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白粉	*
26	かわらけ	a8.1cm b5.0cm c2.6cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・土丹粒	*
27	かわらけ	a8.1cm b5.0cm c2.6cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白粉・土丹粒・小石粒	*
28	かわらけ	a7.8cm b4.9cm c1.9cm	外底赤切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白粉・小石粒	*

表10 遺物観察表 (10)

図・番号	種類	法量 (a.口径 b.底面 c.高さ)	成形・特徴 (文様・釉薬・施土・素地・地成など)	備考 (遺構・その他)
25-29	かわらけ	a7.9cm b5.5cm c1.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	第1面下-第2面
30	かわらけ	a8.2cm b5.2cm c1.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
31	かわらけ	a8.3cm b5.1cm c2.0cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
32	かわらけ	a7.7cm b4.6cm c2.2cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
33	かわらけ	a8.5cm b5.5cm c2.5cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針・小石粒	*
34	かわらけ	a10.0cm b7.1cm c2.9cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
35	かわらけ	a11.2cm b6.7cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
36	かわらけ	a10.0cm b6.1cm c2.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
37	かわらけ	a10.7cm b6.1cm c3.5cm	外底赤切削 ロクロ 明黄色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
38	かわらけ	a10.7cm b6.1cm c3.5cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒・小石粒	*
39	かわらけ	a12.5cm b7.4cm c3.0cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
40	かわらけ	a11.3cm b7.1cm c3.5cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
41	かわらけ	a11.2cm b6.7cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
42	かわらけ	a12.8cm b7.8cm c3.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針	*
43	かわらけ	a13.0cm b7.8cm c4.1cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
44	かわらけ	a13.0cm b7.3cm c3.8cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒・小石粒	*
45	かわらけ	a12.0cm b6.5cm c3.5cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・赤色粒・雲母・白針・小石粒	*
46	かわらけ	a13.0cm b7.0cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
47	かわらけ	a13.5cm b8.3cm c3.3cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
48	かわらけ	a11.9cm b6.8cm c3.5cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・赤色粒・雲母・白針・土丹粒	*
49	かわらけ	a12.7cm b7.9cm c3.2cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・口縁一部打欠 極明脈	*
50	かわらけ	a12.7cm b7.4cm c3.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・土丹粒	*
51	青磁酒会盖兼	a7.1cm	外腹透青文 明オーピー底色不透明 厚い施釉 灰白色 精良・堅緻	*
52	青磁酒会蓋兼	a9.2cm	外腹透青文 明オーピー底色不透明 厚い施釉 灰白色 精良・堅緻	*
53	青磁 斜縞目	口縁部小片	明オーピー灰白色 不透明厚い施釉 灰白色 精良・堅緻	*
54	青白磁 小壺	b5.0cm	小壺底部部外型作り 規況破片では内外面露胎 灰白色 精良・堅緻	*
55	青磁 取子手	銅部片	無文 明オーピー灰白色半透明 灰白色 精良・堅緻	*
56	白磁 口元墨	a9.6cm	口部墨跡 灰白色半透明 灰白色 精良・堅緻	*
57	白磁 瓶	全体部片	内面草花文 白色半透明 薄い施釉 白色 精良・堅緻	*
58	白磁 合子蓋		塑作り 外面草花文・蓮瓣文 口縁部露胎 灰白色不透明 灰白色 精良・堅緻	*
59	青白磁 梅瓶	底部小片	オーピー灰白色半透明 高台内露胎 貫入多い 灰白色 精良・堅緻	*
60	青白磁 香炉	八角香炉の小片か	側面透彫り 本音灰白色半透明 再次表面気泡目立つ 灰白色 精良・堅緻	*
61	瀬戸 入子	a5.8cm b3.9cm c1.9cm	外底赤削り 口縁部オーピー灰白色露灰 灰褐色 精良・堅緻	*
62	瀬戸 入子	b3.9cm	外底赤切削 内底ナデー一部露灰釉 灰褐色	*
63	瀬戸 天目茶碗	a11.0cm	口縁外半 内外面黒褐色鉄釉 口縁部のみ褐色 明灰青色 精良・堅緻	*
64	瀬戸 平碗	a15.3cm	口縁や外半 全面露灰褐色の灰釉 細かな貫入 灰色 微妙・堅緻	*
65	瀬戸 滾毛小皿	a10.4cm b4.9cm c2.8cm	外底赤切削 口縁部のみ灰オーピー灰褐色 明灰褐色 精良・堅緻	*
66	瀬戸 卵巣	a13.0cm	全面灰白色の灰釉墨毛焼り 明灰褐色 微妙・堅緻	*
67	瀬戸 卵巣	a11.4cm c3.1cm	内底近く程に卯印 全面灰白色の灰釉墨毛焼り 明灰褐色 微妙・堅緻	*

表11 遺物観察表(11)

団・番号	種類	法量(寸.口径.高さ.深さ)	或形・特徴(文様・施墨・施土・蓋地・焼成など)	備考(遺構・その他)
25-68	漆口 漆器	b28.0cm	外底系切底 内底瓦の部目 明瞭灰色輪毛巻り 明黄灰色 微妙・堅緻	第1面下～第2面
69	漆戸折縁漆器	b16.0cm	外底逆削り 灰釉 体部下位～外底露筋 明黄灰色 漆跡・堅緻	*
70	漆戸底部目皿	a14.8cm	汚緑口縁 底オリーブ色の底釉 明黄灰色 微妙・堅緻	*
71	漆戸折縁漆器	口径様小片	明緑灰色輪毛巻り 明黄灰色 微妙・堅緻	*
72	漆戸 韶炉	b25.0cm	外底系切底 足部貼付 灰釉部下位～外底露筋 明黄灰色 微妙・堅緻	*
73	漆戸 四耳瓶	底品下位～肩部分	輪積技法 利用に耳付相接する 灰緑色輪毛巻り 明黄灰色 漆跡・堅緻	*
74	漆戸 仏坐瓶	b25.2cm	外底系切底 黒褐色鉄輪 外底露筋 明黄灰色 微妙・堅緻	*
26-75	常滑 甌	a13.5cm	口縁端部折り曲げ 表面赤褐色 明黄灰色 微妙・石粒真土	*
76	常滑 程鉢	b13.5cm	輪積技法 底部貼付高台 内面使用の摩滅痕 灰白色 施粒・石粒粗土	*
77	常滑 甌	b20.2cm	輪積技法 外底移す前 外面削り直し 表面赤褐色 明黄灰色 施粒・石粒	*
78	常滑 甌	口縁部片	縁部底広目 表面赤褐色 明黄灰色 施粒・石粒	*
79	常滑 甌	口縁部片	縁部底広目 表面暗赤褐色 明黄灰色 施粒・石粒	*
80	常滑 甌	口縁部片	縁部底広目 表面赤褐色 増灰褐色 明黄灰色 施粒・石粒	*
81	常滑 程鉢	口縁部片	口縁下強い黒ナダ 表面赤褐色 明黄灰色 施粒・石粒	*
82	常滑 程鉢	口縁部片	口縁下強い黒ナダ 表面赤褐色 増灰褐色 明黄灰色 施粒・石粒	*
83	常滑壺形用品	長さ6.3cm 幅5.1cm 厚さ1.0cm	壺形部片転用 剥口断面の下・右側に擦痕有り	*
84	魚住 程鉢	口縁部片	口縁玉締状・青灰色 明黄灰色 施粒・石粒が多いやや粗土	*
85	備前 拶鉢	b16.5cm	輪積技法 外底掘起し底 内面条溝7条単位 表面茶褐色 明黄灰色 坚緻	*
86	山茶碗	b2.0cm	ロクロ 暗敷紙の貼付高台 明黄灰色 微妙 精良・堅緻 東濃型	*
87	山茶碗	b2.0cm	ロクロ 暗敷紙の貼付高台 明黄灰色 微妙 精良・堅緻 東濃型	*
88	土製品持型か	残存長7.8cm 幅7.3cm 厚さ1.7cm	外底曲半圓輪らか 上部一部に吸形面有り かわらけ輪毛粗土	*
89	かわらけ	残存長4.6cm 幅3.2cm 厚さ1.0cm	ロクロ かわらけ波紋の3ヵ所に穿孔 棕色 微妙・斑母・白針	*
90	瓦芋(軒平瓦)	残存瓦当厚3.6cm	瓦当貼付技法 巴文の剥離 凸面下向網鉢文 表面黒灰色灰 白色 粗土	*
91	瓦芋(軒平瓦)	瓦芋厚2.2cm	瓦当貼付技法 瓦当部剥離 四面布目直 表面黒灰色 灰色 やや粗土	*
92	瓦芋(軒平瓦)	瓦芋厚2.2cm	瓦当貼付技法 瓦当部剥離 四面輪彫れ沙・擬化ナダ 表面黒灰色 灰色	*
93	瓦瓦(丸瓦)	厚2.0cm	凸面ナダ 四面布目板・輪彫跡 明黄灰色 微妙・小石粒粗土	*
94	瓦瓦(丸瓦)	厚2.0cm	凸面輪形印き ナダ 四面布目板・輪彫跡 明黄灰色 微妙・小石粒粗土	*
95	瓦瓦(平瓦)	厚2.0cm	四面一部布目直・輪彫跡 凸面花菱文印き 表面黒灰色 灰色 やや粗土	*
96	瓦瓦(平瓦)	厚2.0cm	四面輪形印き・擬化ナダ 凸面輪形子文印き・擬化ナダ 明黄灰色 やや粗土	*
27-97	瓦瓦(平瓦)	厚2.0cm	四面輪形印き・擬化ナダ 凸面輪形砂・擬化ナダ 明黄灰色 やや粗土	*
98	瓦瓦(平瓦)	厚2.0cm	四面布目直・輪彫跡 凸面斜格子文印き・輪彫面取繋り 明黄灰色 やや粗土	*
99	瓦質 大鉢	口径様小片	輪積技法 外面飛雲文・連珠文 表面黒灰色 明黄灰色 微妙・小石粒やや良土	*
100	瓦質 大鉢	口径様小片	輪積技法 外面飛雲文・連珠文 表面黒灰色 明黄灰色 微妙・小石粒やや良土	*
101	瓦質 土瓶甲	c24.8cm(筒状部)	輪積技法 裁状面連珠文 捺部格子文 表面黒灰色 明黄灰色 微妙・良土	*
102	土器質 大鉢	口径様小片	外面部輪位ナダ 内面横模ナダ 表面黒灰色 赤褐色 微妙・小石粒やや良土	*
103	土器質 大鉢	c20.8cm	体部下位～外底隠削り 内面部輪位ナダ 表面黒灰色 明黄灰色 良土	*
104	土器質	残存長10.3cm 幅4.5cm 孔径5mm	円筒形で中央小孔貫通 表面黒い黄鋼り かわらけ輪粗粘土 大鉢形か?	*
105	滑石製品	長さ6.2cm 幅5.6cm 厚さ1.1cm	滑石圓底部の再加工 小刀・丸盤状の成形痕 用途不明	*
106	砥石	残存長5.2cm 幅5.2cm 厚さ1.0cm	粘板岩質 片面使用痕 淡黄褐色	*

表12 遺物觀察表 (12)

図・番号	種類	法縁 (a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴 (文様・繪画・粘土・素地・焼成など)	備考 (道様・その他)
27 - 107	砥石	残存長8.2cm 幅3.5cm 厚7mm	泥質 上面使用痕 下面剥離側面成形痕 淡灰緑～灰紫色 磨溝産	第1面下～第2面
108	砥石	残存長3.5cm 幅4.0cm 厚6mm	泥質 上面使用痕 下面剥離側面成形痕 明黄褐色 磨溝産	*
109	砥石	長8.6cm 幅2.1cm 厚1.8cm	両面使用的證痕あり 調試紫色 天草産	*
110	火打石	長8.22cm 幅1.8cm 厚1.2cm	使用時の打撃痕あり ナイフ系白色・赤紫色斑状	*
111	石製品	長8.42cm 幅1.8cm 厚1.1cm	曲玉形で中央凹部が摩耗 絆をもいた下振り的な跡か	*
30 - 1	小わらけ	a8.1cm b6.0cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	第3面 土塗
2	小わらけ	a8.1cm b6.2cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
3	常滑 程鉢	口縁部小片	口縁下端い強化ナメ 内面陰灰側 表面赤褐色 淡灰色 砂粒・石粒	*
4	上器皿 火鉢	口縁部小片	外表面強化ナメ内 口縫ナメ 淡灰褐色 砂粒・小石粒	*
5	瓦製品 瓦	残存長6.7cm 幅3cm 厚5mm	角質無機風化が頂部を残存	*
6	かわらけ	a7.2cm b5.2cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
7	かわらけ	a7.2cm b6.1cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
8	かわらけ	a7.2cm b6.4cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
9	かわらけ	a7.3cm b6.2cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
10	かわらけ	a7.9cm b6.2cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
11	かわらけ	a7.9cm b6.4cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
12	かわらけ	a6.9cm b6.2cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
13	かわらけ	a7.9cm b5.3cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
14	かわらけ	a7.5cm b6.8cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針・透明感	*
15	かわらけ	a7.8cm b5.3cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
16	かわらけ	a7.9cm b6.1cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
17	かわらけ	a7.5cm b6.8cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針・透明感	*
18	かわらけ	a7.2cm b6.7cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
19	かわらけ	a7.6cm b5.3cm c1.5cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
20	かわらけ	a7.9cm b5.9cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
21	かわらけ	a7.9cm b5.8cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
22	かわらけ	a7.5cm b5.3cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
23	かわらけ	a7.6cm b5.8cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
24	かわらけ	a7.1cm b5.1cm c1.5cm	外底系切削 ロクロ 明黃褐色 微細・雲母・白針・小石粒	*
25	かわらけ	a7.4cm b6.8cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 明黃褐色 微細・雲母・白針	*
26	かわらけ	a7.7cm b5.6cm c1.5cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
27	かわらけ	a7.6cm b5.4cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	*
28	かわらけ	a7.5cm b5.3cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針	*
29	かわらけ	a7.6cm b5.5cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
30	かわらけ	a10.9cm b6.6cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
31	かわらけ	a10.9cm b6.6cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
32	かわらけ	a11.9cm b6.6cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*
33	かわらけ	a12.4cm b7.7cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	*
34	かわらけ	a12.6cm b7.6cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 棕色 微細・雲母・白針	*

表13 遺物観察表(13)

団・番号	種類	法量 (a. 汎径 b. 厚さ c. 器高)	成形・特徴 (文様・輪郭・断面・素地・施成など)	備考 (遺構・その他)
33-35	かわらけ	a13.4cm b5.8cm c3.4cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	第3面 土壌2
36	かわらけ	a12.5cm b5.2cm c3.4cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
37	かわらけ	a12.6cm b5.2cm c3.4cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
38	かわらけ	a12.8cm b7.2cm c3.2cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
39	かわらけ	a12.8cm b8.4cm c3.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針 透明感	* *
40	かわらけ	a12.8cm b8.4cm c3.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
41	かわらけ	a12.7cm b7.6cm c3.4cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
42	かわらけ	a12.6cm b8.2cm c3.4cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
43	かわらけ	a13.7cm b7.8cm c3.8cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
44	かわらけ	a16.8cm b14.8cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* 土壌4
45	かわらけ	a16.7cm b14.3cm c2.0cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
46	かわらけ	a17.0cm b14.3cm c2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
47	かわらけ	a17.9cm b14.3cm c1.9cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
48	かわらけ	a18.0cm b15.8cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
49	かわらけ	a17.9cm b16.3cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
50	かわらけ	a18.5cm b14.7cm c2.7cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
51	かわらけ	a12.6cm b8.0cm c3.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
52	かわらけ	a12.6cm b7.2cm c3.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
53	滑石 調査	残存長7.4cm 幅5.4cm 厚1.5cm	滑石調底部を軽用加工 小刀の加工・成形	* *
54	かわらけ	a16.8cm b14.6cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* 土壌5
55	かわらけ	a17.6cm b15.4cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
56	かわらけ	a17.7cm b15.2cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
57	かわらけ	a17.8cm b15.4cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
58	かわらけ	a17.8cm b15.5cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
59	かわらけ	a18.7cm b16.1cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
60	かわらけ	a17.8cm b15.6cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
61	かわらけ	a17.8cm b16.0cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
62	かわらけ	a17.8cm b15.7cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
63	かわらけ	a19.4cm b15.7cm c2.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
64	かわらけ	a12.4cm b7.2cm c3.0cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
65	かわらけ	a12.5cm b8.2cm c3.2cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
66	かわらけ	a12.3cm b7.2cm c3.3cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
67	白かわらけ	a14.0cm	手捏ね 体部上半横位ナデ・下半指頭痕 灰白色 微妙 精良土	* *
68	白かわらけ	a13.8cm	手捏ね 体部上半横位ナデ・下半指頭痕 灰白色 微妙 精良土	* *
69	青磁 瓢	a15.3cm	外表面蓮弁 オリーブ灰褐色不透明 手捏ね 灰白色 硬質	* *
70	滑石 調査	b23.4cm	底部折外側に小刀の細かな削り痕 内外底面に再加工の痕跡	* *
34-1	かわらけ	a17.6cm b15.3cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* 土壌6
2	かわらけ	a17.4cm b14.7cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
3	かわらけ	a17.6cm b15.3cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *

表14 遺物觀察表 (14)

出・番号	種類	法量 (a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴 (文様・釉面・胎土・素地・焼成など)	備考 (道場・その他の)
34-4	かわらけ	a2.5cm b3.8cm c1.5cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	第3面 土器6
5	かわらけ	a2.5cm b3.5cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
6	かわらけ	a2.5cm b3.0cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
7	かわらけ	a2.5cm b3.6cm c1.4cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
8	かわらけ	a2.5cm b3.1cm c1.5cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
9	かわらけ	a2.5cm b3.2cm c1.4cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
10	かわらけ	a2.5cm b3.4cm c1.3cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
11	かわらけ	a2.7cm b3.1cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
12	かわらけ	a2.8cm b3.8cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
13	かわらけ	a2.7cm b3.0cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
14	かわらけ	a2.7cm b3.8cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
15	かわらけ	a2.7cm b3.3cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
16	かわらけ	a2.7cm b3.3cm c1.5cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
17	かわらけ	a2.7cm b3.6cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
18	かわらけ	a2.8cm b3.2cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
19	かわらけ	a2.8cm b3.3cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
20	かわらけ	a2.7cm b3.6cm c1.5cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
21	かわらけ	a2.9cm b3.8cm c1.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
22	かわらけ	a2.9cm b3.7cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
23	かわらけ	a3.1cm b3.3cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+
24	かわらけ	a3.0cm b3.1cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
25	かわらけ	a2.8cm b3.8cm c2.1cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
26	かわらけ	a2.8cm b3.0cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	+
27	かわらけ	a2.5cm b3.0cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+
28	かわらけ	a2.9cm b3.5cm c2.2cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+
29	かわらけ	a2.8cm b3.2cm c2.1cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+
30	かわらけ	a2.7cm b3.7cm c2.3cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
31	かわらけ	a2.7cm b3.2cm c2.1cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+
32	かわらけ	a2.7cm b3.7cm c2.1cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
33	かわらけ	a2.7cm b3.8cm c1.7cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+
34	かわらけ	a2.7cm b3.3cm c1.5cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
35	かわらけ	a2.8cm b3.4cm c1.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
36	かわらけ	a3.0cm b3.3cm c1.8cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	+
37	かわらけ	a3.5cm b3.5cm c2.6cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・白针・赤色粒	+
38	かわらけ	a10.9cm b5.9cm c3.1cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・白针・赤色粒	+
39	かわらけ	a3.1cm b6.6cm c3.5cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白针・赤色粒	+
40	かわらけ	a12.6cm b7.9cm c3.5cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白针・赤色粒	+
41	かわらけ	a11.8cm b6.8cm c3.1cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白针・土丹粒	+
42	かわらけ	a12.0cm b6.0cm c3.1cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白针・赤色粒	+

表15 遺物観察表(15)

団番号	種類	法量(φ.口徑.深さ.高さ)	成形・特徴(文様・抽象・施土・表面・焼成など)	備考(遺構・その他)	
34-45	かわらけ	ø12.4cm b8.1cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒 焼成直	第3面 土壁6	
44	かわらけ	ø12.4cm b7.0cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
45	かわらけ	ø11.0cm b6.0cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
46	かわらけ	ø12.0cm b7.7cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
47	かわらけ	ø12.4cm b7.8cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
48	かわらけ	ø12.6cm b7.9cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
49	かわらけ	ø11.5cm b6.6cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
50	かわらけ	ø12.2cm b7.1cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+	+
51	かわらけ	ø12.4cm b7.8cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
52	かわらけ	ø12.4cm b7.1cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
53	かわらけ	ø12.9cm b8.1cm c3.5cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
54	かわらけ	ø12.8cm b8.1cm c3.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
55	かわらけ	ø12.8cm b8.0cm c3.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
56	かわらけ	ø13.1cm b7.3cm c3.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
57	かわらけ	ø13.2cm b7.8cm c3.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
58	かわらけ	ø13.2cm b7.6cm c3.9cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
59	かわらけ	ø13.1cm b8.7cm c3.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
60	かわらけ	ø13.0cm b8.3cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
61	かわらけ	ø13.1cm b8.5cm c3.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	+
62	かわらけ	ø12.9cm b8.4cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・焼成直	+	+
63	かわらけ	ø13.4cm b8.2cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
64	かわらけ	ø12.7cm b8.2cm c3.5cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
65	かわらけ	ø12.7cm b8.2cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	+	+
66	かわらけ	ø12.7cm b8.2cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
67	かわらけ	ø12.8cm b8.1cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	+	+
68	かわらけ	ø12.9cm b8.5cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒 烧成直	+	+
69	白くわらけ	ø14.9cm	ロクロ 灰白色 微妙 精良土	+	+
70	織目 入子	ø9.6cm bø4.6cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 織目-内底に薄い降灰釉 灰白色 微妙 精良・堅致	+	+
71	土器質 火跡	c10.0cm (口縁・底部片合皮)	丸丸跡形 砂目底 口縁部横旋ナギ 稲穀・砂粒・小石粒	+	+
72	砥石	残存長9.8cm 幅3.2cm 厚3.0cm	両面使用上面に刃物研ぎ痕 灰灰白色 机理の細かい泥岩質 喷流痕	+	+
73	砥石	残存長6.5cm 幅3.8cm 厚3.0mm	両面使用 刃物研ぎ痕 贵灰白色 机理の細かい泥岩質 喷流痕	+	+
74	砥石	残存長4.5cm 幅3.0cm 厚1.0mm	両面使用 灰灰白色 机理の細かい泥岩質 喷流痕	+	+
75	鉄製品 小刀	残存長7.4cm 幅1.2cm 厚3.0mm	腐食進むが刃先を含む先端部	+	+
76	鉄製品 打	残存長5.1cm 幅5. 厚4.0mm	腐食進むが頭部から先端部にかけて残存	+	+
77	鉄製品 打	残存長4.7cm 幅5. 厚4.0mm	腐食進むが頭部から中程にかけて残存	+	+
35-1	かわらけ	ø7.1cm bø5.1cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	土壁7
2	櫛痕 摺跡	全体部分	輪縁状 櫛痕条幅は8条 表面赤褐色 深褐色 砂粒・石粒	+	+
3	常滑 瓢箪	底基部	即日製は桔子目、「大」文字セット 表面青褐色 深褐色 砂粒・石粒	+	+
4	かわらけ	ø7.8cm bø5.2cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	+	土壁8

表16 遺物觀察表 (16)

測定番号	種類	法量 (a.正面 b.底面 c.高さ)	成形・特徴 (文様・繪葉・粘土・素地・焼成など)	備考 (道様・その他)
35-5	かわらけ	a85cm b5.6cm c18cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	第3面 土壌9
6	かわらけ	a85cm b6.1cm c19cm	手捏ね 外面上半横ナデ 外面下半→外底系切削 橙色 微妙・雲母・白針	* *
7	かわらけ	a98cm b8.2cm c17cm	手捏ね 外面上半横ナデ 外面下半→外底系切削 橙色 微妙・雲母・白針	* *
8	かわらけ	a10.1cm b5.9cm c2.5cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
9	かわらけ	a12.1cm b7.4cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	* *
10	かわらけ	a12.4cm b8.4cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	* *
11	白かわらけ	a85cm b5.0cm c18cm	外底系切削 ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
12	白かわらけ	a89cm b6.2cm c16cm	外底系切削 ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
13	白かわらけ	a89cm b6.2cm c16cm	外底系切削 ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
14	白かわらけ	a82cm b5.8cm c15cm	外底系切削 ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
15	白かわらけ	a83cm	ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
16	白かわらけ	a10.2cm b6.8cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
17	白かわらけ	a11.7cm	ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
18	白かわらけ	a11.5cm	ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
19	白かわらけ	a11.8cm	ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
20	白かわらけ	a11.7cm	ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
21	男瓦(丸瓦)	確定径13.2cm	凸面端目押き後、振り消し 巴面系切削 布目痕 灰褐色 微妙・小石粒	* *
22	男瓦(丸瓦)	確定径13.3cm	凸面端目押き後、振り消し 巴面系切削 布目痕 灰褐色 微妙・小石粒	* *
23	女瓦(平瓦)	厚2.5cm	凹面端目板 端縁幅広い見削り 凸面端目押き 灰色 微妙・小石粒	* *
24	女瓦(平瓦)	厚2.8cm	凹面離れ跡 切削ナデ 凸面斜格子目押き 灰褐色 微妙・小石粒	* *
25	女瓦(平瓦)	厚2.3cm	凹面離れ跡 切削ナデ 凸面斜格子目押き 磨擦ナデ 黄褐色 微妙	* *
36-1	かわらけ	a7.1cm b4.3cm c20cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* 土壌11
2	かわらけ	a7.8cm b6.3cm c14cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
3	青白磁香炉か	b7.4cm	体部に造りし風成形 緑灰色 不透明厚目の施釉 灰白色 粘良・堅紙	* *
4	かわらけ	a7.0cm b5.4cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* 土壌12
5	かわらけ	a6.9cm b3.0cm c22cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針 磁明器	* *
6	かわらけ	a7.0cm b4.3cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
7	かわらけ	a7.1cm b4.7cm c19cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
8	かわらけ	a7.5cm b4.8cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
9	かわらけ	a8.1cm b5.4cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
10	かわらけ	a7.7cm b6.1cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒 口縁一部打火	* *
11	白かわらけ	a8.3cm b5.6cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 灰白色 微妙 粘良土	* *
12	かわらけ	a7.0cm b5.0cm c19cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	* *
13	かわらけ	a7.2cm b4.3cm c18cm	外底系切削 ロクロ 灰色 微妙・雲母・白針・土丹粒	* *
14	かわらけ	a7.4cm b5.4cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒 磁明器	* *
15	かわらけ	a7.5cm b5.6cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
16	かわらけ	a7.7cm b5.6cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	* *
17	かわらけ	a7.7cm b5.9cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	* *
18	かわらけ	a8.3cm b5.3cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *

表17 遺物観察表 (17)

団・番号	種類	法量 (a.長径 b.横径 c.高さ)	成形・特徴 (文様・抽象・鉢土・壺地・焼成など)	備考 (遺構・その他)	
36-19	かわらけ	a7.6cm b5.3cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・焼明塵 11縫一部打欠	第3面 土模12	
20	かわらけ	a7.8cm b5.4cm c1.4cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
21	かわらけ	a7.5cm b4.6cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
22	かわらけ	a8.0cm b5.4cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒	+	+
23	かわらけ	a7.9cm b4.4cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
24	かわらけ	a7.0cm b5.4cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
25	かわらけ	a7.9cm b5.5cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・土丹粒	+	+
26	かわらけ	a7.7cm b5.6cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
27	かわらけ	a7.5cm b5.4cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
28	かわらけ	a7.7cm b5.3cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
29	かわらけ	a7.3cm b5.1cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
30	かわらけ	a7.8cm b5.6cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針	+	+
31	かわらけ	a8.0cm b5.6cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
32	かわらけ	a8.1cm b6.5cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黑褐色 織紋・雲母・白針 再火による変色	+	+
33	かわらけ	a9.0cm b6.0cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
34	かわらけ	a7.7cm b4.8cm c1.4cm	外底系切削 ロクロ 底部左寄り小穿孔 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
35	かわらけ	a10.2cm b5.0cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針	+	+
36	かわらけ	a12.5cm b7.9cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
37	かわらけ	a12.6cm b7.0cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
38	かわらけ	a11.6cm b6.2cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
39	かわらけ	a11.8cm b5.8cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・焼明塵 11縫一部打欠	+	+
40	かわらけ	a12.4cm b7.4cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針	+	+
41	かわらけ	a10.3cm b6.2cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
42	かわらけ	a11.8cm b7.0cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針	+	+
43	かわらけ	a12.0cm b6.8cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
44	かわらけ	a12.0cm b6.9cm c3.5cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
45	かわらけ	a12.0cm b8.0cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒	+	+
46	かわらけ	a12.5cm b7.9cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
47	かわらけ	a13.1cm b7.5cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針	+	+
48	かわらけ	a13.0cm b8.2cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒・小石粒	+	+
49	かわらけ	a12.6cm b6.9cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針	+	+
50	かわらけ	a12.8cm b7.9cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒・小石粒	+	+
51	かわらけ	a12.5cm b8.2cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒・口縫一部打欠	+	+
52	かわらけ	a13.5cm b7.8cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+	+
53	かわらけ	a13.6cm b8.3cm c3.6cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
54	かわらけ	a12.3cm b7.6cm c2.9cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
55	かわらけ	a12.6cm b7.7cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒・底部縦割裂	+	+
56	かわらけ	a12.3cm b7.5cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+
57	かわらけ	a12.5cm b7.8cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 棕色 織紋・雲母・白針・赤色粒	+	+

表18 遺物観察表 (18)

図・番号	種類	法量 (a.口徑 b.底径 c.器高)	成形・特徴 (文様・施釉・粘土・素地・焼成など)	備考 (遺様・その他)
35-58	かわらけ	a13.0cm b8.0cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒・小石粒	第3面 土壁12
59	白かわらけ	a6.8cm b2.2cm	ロクロ 灰白色 微妙 精良土 空気軋質	* *
60	白かわらけ	a13.5cm	手捏ね 口縁部横俊ナメ 体部下半指面削 灰白色 微妙 精良土	* *
61	青磁蓮瓣文碗	a12.4cm	口縁外葉 外面蓮瓣文 明暦灰色半透明 灰白色 精良・堅緻	* *
62	白磁 丸子	蓋道片	外面草花文 灰白色透明 薄い施釉 灰白色 精良・堅緻	* *
63	瓶口 入子	a12cm b2.7cm c1.1cm	外底赤切削 口縁強押し 八音輪花形 扇白色 微妙 精良・堅緻	* *
64	瓶口 入子	a7.2cm	ロクロ 口縁部強削輪 灰白色 微妙 精良・堅緻	* *
65	瓶口 香炉か	口縁・頸部削	樽形香炉か 灰物削毛彫り 内面一部強削げ 灰白色 微妙 精良土	* *
66	土器質 次鉢	口縁部小片	輪積技法 口縁部肥厚 内外面ナメ 始灰褐色 微妙・小石粒	* *
67	石製品 硬	残存長9.0cm 幅4.1cm 厚2.6cm	降:海部は四葉状加工 轮積浅部を斜に構成して表面に波瀬文細削り 結核岩質質	* *
68	鉄製品 鉗	残存長23.0cm 幅4mm 厚2mm	腐食進むが角釘の頭部	* *
37-1	かわらけ	a7.7cm b5.0cm c2.0cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* P.1
2	かわらけ	a8.0cm b4.6cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
3	かわらけ	a10.1cm b5.6cm c2.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
4	かわらけ	a12.6cm b7.0cm c3.2cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
5	かわらけ	a6.4cm b3.6cm c1.8cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	* P.2
6	かわらけ	a7.5cm b5.5cm c1.5cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
7	かわらけ	a7.6cm b5.5cm c1.5cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	* *
8	かわらけ	a11.7cm b9.4cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
9	かわらけ	a7.0cm b4.8cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* P.3
10	かわらけ	a7.8cm b4.8cm c1.4cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
11	滑石製 砕	口縁部小片	内部含め再加工の痕跡を残す	* *
12	常滑 西鉢	b12.6cm	輪積技法 斜付高台内面使用的摩滅 灰色 施釉・石粒粗土 片口跡・削	* P.9
13	かわらけ	a8.5cm b6.5cm c1.8cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* P.12
14	かわらけ	a8.0cm b5.0cm c2.2cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* P.13
15	かわらけ	a7.8cm b6.0cm c1.5cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* P.17
16	女瓦(平瓦)	厚1.0cm	凹面難れ凸面斜筋子目叩き 明暦灰釉 施釉・小石粒や粗土	* P.18
17	女瓦(平瓦)	厚1.0cm	凹面襷口叩き転写 凹面襷口叩き 凹面斜筋切削 灰色・砂粒・小石粒精良土	* *
18	かわらけ	a12.4cm b7.7cm c3.4cm	外底赤切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* P.19
19	かわらけ	a7.6cm b6.8cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* P.20
20	かわらけ	a7.8cm b5.9cm c1.7cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
38-1	かわらけ	a7.3cm b3.8cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	第2面下～第3面
2	かわらけ	a7.6cm b4.7cm c2.0cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
3	かわらけ	a7.8cm b3.0cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
4	かわらけ	a7.8cm b5.2cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
5	かわらけ	a7.9cm b4.5cm c1.6cm	外底赤切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
6	かわらけ	a6.9cm b4.7cm c2.0cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
7	かわらけ	a7.3cm b4.4cm c1.8cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
8	かわらけ	a7.2cm b4.0cm c1.9cm	外底赤切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *

表19 遺物觀察表(19)

図・番号	種類	法量(a:口徑 b:底径 c:高さ)	成形・特徴(文様・施墨・施土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
38-9	かわらけ	a7.5cm b6.7cm c1.7cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針	第2面下～第3面
10	かわらけ	a7.6cm b6.1cm c1.9cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
11	かわらけ	a7.3cm b6.9cm c1.8cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒 緩明斑	*
12	かわらけ	a7.7cm b6.6cm c1.5cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・土月粒	*
13	かわらけ	a7.7cm b5.2cm c1.6cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
14	かわらけ	a7.3cm b5.0cm c2.0cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
15	かわらけ	a7.2cm b6.6cm c1.9cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針	*
16	かわらけ	a7.6cm b5.0cm c1.6cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
17	かわらけ	a7.6cm b5.9cm c1.7cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・小石粒	*
18	かわらけ	a7.9cm b5.9cm c1.8cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
19	かわらけ	a7.8cm b5.5cm c1.7cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針	*
20	かわらけ	a8.1cm b5.3cm c1.9cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
21	かわらけ	a7.7cm b5.3cm c1.8cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
22	かわらけ	a7.2cm b4.3cm c2.3cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
23	かわらけ	a8.0cm b5.9cm c1.7cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・小石粒	*
24	かわらけ	a7.8cm b4.8cm c2.2cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
25	かわらけ	a7.8cm b5.3cm c2.1cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
26	かわらけ	a12.3cm b7.2cm c3.1cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒・土月粒	*
27	かわらけ	a12.9cm b8.0cm c3.1cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針	*
28	かわらけ	a12.3cm b7.0cm c3.3cm	外底赤切版 ロクロ 明黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
29	かわらけ	a12.9cm b6.6cm c3.5cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒・土月粒	*
30	かわらけ	a12.2cm b7.2cm c3.3cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針	*
31	かわらけ	a12.2cm b7.1cm c3.1cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
32	かわらけ	a12.4cm b6.6cm c3.1cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針	*
33	かわらけ	a12.6cm b7.0cm c3.6cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針	*
34	かわらけ	a7.9cm b7.5cm c3.7cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針	*
35	かわらけ	a11.9cm b6.5cm c3.3cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒・土月粒	*
36	かわらけ	a12.1cm b6.8cm c3.3cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
37	かわらけ	a12.0cm b7.7cm c2.8cm	外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
38	かわらけ	a12.5cm b7.8cm c3.3cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
39	かわらけ	a13.4cm b8.8cm c3.6cm	外底赤切版 ロクロ 黄褐色 施墨・雲母・白針	*
40	かわらけ	a17.3cm b9.7cm c4.4cm	特大 外底赤切版 ロクロ 粉色 施墨・雲母・白針・赤色粒	*
41	青磁蓮瓣文鏡	a8.4cm	外底複有蓮瓣文 明暦灰褐色不透明 灰白色 精良・堅緻	*
42	青磁蓮瓣文鏡	口縁～体部片	外底複有蓮瓣文 明暦灰褐色不透明 灰白色 精良・堅緻	*
43	白磁 口元裏	a5.2cm	口縁外半光面 灰白色不透明 灰白色 精良・堅緻	*
44	青白磁 扇盤	体部片	外底牡丹紋章文が刷る 外面明緑色透明 浅い施釉 灰白色 精良・堅緻	*
45	瀬戸 入子	a7.8cm b4.5cm c3.2cm	外底赤切版 口縁一ヶ所に片口 内壁隕灰釉 淡黃色 施墨・精良・堅緻	*
46	瀬戸 入子	b4.1cm	外底赤切版 内底隕灰釉 灰色 施墨・精良・堅緻	*
47	瀬戸 四耳壺	側面部片	輪郭技法 灰綠色の灰墨刷毛化り 白灰色 施墨・精良土	*

表20 遺物観察表(20)

図・番号	種類	法量(a.口径 b.底径 c.器高)	成形・特徴(文様・施華・施土・素地・焼成など)	備考(焼成・その他)
38-48	常滑 立口壺	a:6.6cm	輪積技法 内面口縁と肩部陥れ灰褐色 砂粒・石粒	第2面下～第3面
49	常滑 探鉢	b:4.4cm	輪積技法 穆日底 内面使用の摩減 表面赤褐色 明顯灰褐色 砂粒・石粒	*
50	常滑 探鉢	a:7.2cm b:4.0cm c:3.0cm	輪積技法 穆日底 内面使用著しく摩減 表面赤褐色 明顯灰褐色 砂粒・石粒	*
51	常滑 探鉢	口縁部小片	輪積技法 灰色 施紋・石粒粗土	*
52	常滑 探鉢	b:4.8cm	輪積技法 外底系切痕 脊付高台内面摩減 灰色 砂粒・石粒粗土	*
53-53	東瓦	厚2.5cm 中央左側のC部～鼻部片	表面赤切痕 亂毛は粘土粘足し成形 表面灰褐色 白灰色 砂粒・石粒粗土	*
54	周瓦(軒丸瓦)	瓦当径13.4cm 男瓦部厚1.8cm	菊花文(14瓣)・珠文離れ紋 表面黒灰色 灰白色 砂粒・赤色粒・石粒粗土	*
55	周瓦(軒丸瓦)	瓦当径12.8cm	三巴文・珠文文様表面が焼れて部分的に剥離 灰白色 砂粒・赤色粒・石粒	*
56	女瓦(平瓦)	厚さ2.6cm	凹面離れ紋 凸面模様線とX字と組合せた叩き目 灰白色 砂粒・石粒	*
57	女瓦(平瓦)	厚さ2.5cm	凹面系切痕 亂毛等凸面斜格子叩き目 灰白色 砂粒・石粒	*
58	女瓦(平瓦)	厚さ2.0cm	凹面離れ紋 凸面離れ紋 斜格子叩き目 黃褐色 砂粒・石粒や良土	*
59	土器質 火鉢	口縁～底部片	輪積技法 丸縁柱形 番口底 内面横線ナメ 外面離れ紋 剛毛目 黃褐色	*
60	土製品 輪型	残存長5.3cm 幅5.6cm 厚2.6cm	外面沿うから強い曲率もつ 向き不明だが中型か 灰色わらけ質	*
61	土製品 輪型	残存長6.3cm 幅6.1cm 厚2.9cm	60と質感類似 60-61は鉢造物不明だが同一輪型と推定される	*
62	銅製品	残存長3.3cm 高9mm	再火で表面欠陥れし裏面・用途不明	*
63	銅製品 刃	残存長5.9cm 幅6mm 厚5mm	角刃・新鋭進むが頭部から先端にかけて残存	*
64	銅製品 刃	残存長4.9cm 幅6mm 厚5mm	角刃・新鋭進むが頭部から中段にかけて残存	*
65	銅製品 刃	残存長6.5cm 幅6mm 厚4mm	角刃・新鋭進むが頭部から下半にかけて残存	*
66	銅製品 刃	残存長3.4cm 幅6mm 厚9mm	角刃・新鋭進むが頭部から中段にかけて残存	*
67	石製品 鉗石	残存長3.7cm 幅4.0cm 厚1.4cm	両面使用の握板・両側面切削痕 浅紫色 磨擦岩鉗 塩漬産	*
68	石製品 鉗石	残存長7.2cm 幅3.4cm 厚6mm	両面使用の握板・両側面切削痕 灰白色 磨擦岩質 塩漬産	*
69	石製品火打石	長1.3cm 幅1.4cm 高1.9cm	白色石英質 横部を中心に打撃痕を残す	*
70	石製品火打石	長2.8cm 幅2.5cm 高2.9cm	白色石英質 後部を中心に打撃痕を残す	*
63-1	かわらけ	a:7.7cm b:4.9cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	第4面 土壁4
2	かわらけ	a:7.4cm b:4.4cm c:2.2cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* 土壁5
3	かわらけ	a:7.5cm b:4.9cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* *
4	かわらけ	a:7.3cm b:4.2cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* *
5	かわらけ	a:7.1cm b:4.1cm c:2.2cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
6	かわらけ	a:7.3cm b:4.4cm c:2.2cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* *
7	かわらけ	a:7.7cm b:5.3cm c:2.3cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・明顯	* *
8	かわらけ	a:7.5cm b:4.2cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
9	かわらけ	a:7.1cm b:4.3cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
10	かわらけ	a:7.7cm b:5.1cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針	* *
11	かわらけ	a:7.2cm b:4.6cm c:2.2cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
12	かわらけ	a:7.4cm b:5.2cm c:2.0cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
13	かわらけ	a:8.1cm b:5.1cm c:2.0cm	外底系切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	* *
14	かわらけ	a:7.1cm b:4.6cm c:2.1cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *
15	かわらけ	a:6.9cm b:3.9cm c:2.2cm	外底系切痕 ロクロ 明黄褐色 微細・雲母・白針・土丹粒	* *
16	かわらけ	a:7.3cm b:4.7cm c:2.0cm	外底系切痕 ロクロ 橙色 微細・雲母・白針・赤色粒	* *

表21 遺物観察表(21)

団・番号	種類	法量 (a.口径 b.底径 c.高さ)	成形・特徴 (文様・軸型・胎土・素地・焼成など)	備考 (遺物・その他)
43-17	かわらけ	a7.6cm b5.9cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	第4面 土器5
18	かわらけ	a7.7cm b5.6cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
19	かわらけ	a7.4cm b4.6cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
20	かわらけ	a7.1cm b4.0cm c2.4cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
21	かわらけ	a7.2cm b4.6cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
22	かわらけ	a7.6cm b5.3cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
23	かわらけ	a7.2cm b4.7cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
24	かわらけ	a7.1cm b4.9cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
25	かわらけ	a7.0cm b5.5cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
26	かわらけ	a7.5cm b5.7cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
27	かわらけ	a7.7cm b5.6cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
28	かわらけ	a7.7cm b5.5cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
29	かわらけ	a10.5cm b7.1cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針	* *
30	かわらけ	a10.9cm b6.1cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
31	かわらけ	a11.1cm b7.2cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
32	かわらけ	a11.1cm b7.2cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒・小石粒	* *
33	かわらけ	a11.0cm b7.1cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
34	かわらけ	a11.8cm b8.4cm c3.5cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒・小石粒	* *
35	かわらけ	a12.0cm b7.6cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
36	かわらけ	a12.2cm b7.9cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・小石粒	* *
37	かわらけ	a12.4cm b8.2cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
38	かわらけ	a12.3cm b8.8cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針	* *
39	かわらけ	a12.7cm b8.4cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
40	かわらけ	a12.5cm b8.6cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
41	かわらけ	a12.7cm b8.2cm c3.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒・小石粒	* *
42	かわらけ	a13.1cm b8.9cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針	* *
43	かわらけ	a12.7cm b7.5cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒・小石粒	* *
44	かわらけ	a12.6cm b8.8cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	* *
45	かわらけ	a12.3cm b8.4cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒	* P 3
46	かわらけ	a12.8cm b8.4cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* P 5
47	かわらけ	a12.6cm b4.7cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒	* P 6
48	かわらけ	a12.3cm b4.3cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 織紋・雲母・白針・土丹粒	* P 7
49	かわらけ	a7.1cm b5.0cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* かわらけ塗り
50	かわらけ	a7.5cm b4.2cm c2.4cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
51	かわらけ	a6.8cm b4.0cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
52	かわらけ	a7.2cm b4.9cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
53	かわらけ	a7.3cm b4.3cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針	* *
54	かわらけ	a7.7cm b4.9cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *
55	かわらけ	a7.7cm b4.5cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 織紋・雲母・白針・赤色粒	* *

表22 遺物観察表(22)

番号	種類	法量(a.上径 b.底径 c.髙さ)	成形・特徴(文様・輪郭・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
43-56	かわらけ	a7.5cm b4.5cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	第4面 かわらけ縁り
57	かわらけ	a7.5cm b4.6cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	* *
58	かわらけ	a7.8cm b4.9cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
59	かわらけ	a7.6cm b4.6cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
60	かわらけ	a9.9cm b6.1cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
61	かわらけ	a10.0cm b6.4cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
62	かわらけ	a10.4cm b5.6cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
63	かわらけ	a11.3cm b7.0cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・小石粒	* *
64	かわらけ	a11.1cm b6.8cm c3.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	* *
65	かわらけ	a11.3cm b7.8cm c3.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	* *
66	白磁 合子	a6.1cm	身部 白色透明 口縁部露胎骨 白色 微妙 精良・緻密	* *
44-1	かわらけ	a6.8cm b4.5cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	第3面下～第4面
2	かわらけ	a6.5cm b3.8cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
3	かわらけ	a6.9cm b4.6cm c2.3cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	*
4	かわらけ	a7.7cm b4.4cm c2.2cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	*
5	かわらけ	a8.8cm b5.3cm c2.5cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
6	かわらけ	a7.5cm b4.6cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	*
7	かわらけ	a7.3cm b5.2cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
8	かわらけ	a7.5cm b5.2cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
9	かわらけ	a7.7cm b6.9cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	*
10	かわらけ	a8.0cm b4.3cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
11	かわらけ	a7.2cm b5.0cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・小石粒	*
12	かわらけ	a7.3cm b5.1cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	*
13	かわらけ	a7.4cm b5.1cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針	*
14	かわらけ	a7.8cm b5.0cm c1.8cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
15	かわらけ	a7.7cm b5.6cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	*
16	かわらけ	a7.1cm b4.2cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	*
17	かわらけ	a7.5cm b5.5cm c1.5cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	*
18	かわらけ	a7.6cm b6.0cm c1.4cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
19	かわらけ	a7.6cm b5.4cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	*
20	かわらけ	a7.9cm b5.5cm c1.7cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
21	かわらけ	a7.2cm b5.1cm c1.6cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
22	かわらけ	a7.8cm b5.3cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針	*
23	かわらけ	a7.8cm b5.0cm c1.9cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	*
24	かわらけ	a8.0cm b5.9cm c2.0cm	外底系切削 ロクロ 明黄褐色 微妙・雲母・白針	*
25	かわらけ	a8.8cm b5.2cm c2.1cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	*
26	かわらけ	a12.0cm b7.5cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 橙色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*
27	かわらけ	a11.4cm b5.8cm c3.2cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・土丹粒	*
28	かわらけ	a11.4cm b6.7cm c3.4cm	外底系切削 ロクロ 黄褐色 微妙・雲母・白針・赤色粒	*

表23 遺物観察表 (23)

ID・番号	種類	法量 (a:口徑 b:底径 c:器高)	成形・特徴 (柱様・輪縁・底土・素地・焼成など)	備考 (造構・その他)
44-29	かわらけ	a11.1cm b5.8cm c3.6cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針・赤色粒	第3面～第4面
30	かわらけ	a11.2cm b5.8cm c3.2cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針	+
31	かわらけ	a12.9cm b7.0cm c3.0cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針・赤色粒	+
32	かわらけ	a11.3cm b5.1cm c3.0cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・赤色粒	+
33	かわらけ	a11.9cm b7.5cm c3.0cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+
34	かわらけ	a12.0cm b6.7cm c3.6cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・赤色粒	+
35	かわらけ	a12.3cm b7.4cm c3.0cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・土丹粒	+
36	かわらけ	a13.5cm b8.4cm c3.6cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	+
37	かわらけ	a12.4cm b7.7cm c3.0cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針	+
38	かわらけ	a13.0cm b8.3cm c3.6cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・赤色粒	+
39	かわらけ	a13.2cm b8.8cm c3.1cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針	+
40	かわらけ	a13.2cm b7.9cm c3.5cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・赤色粒	+
41	かわらけ	a12.0cm b8.7cm c3.2cm	外底余切痕 ロクロ 明黄褐色・繊維・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+
42	かわらけ	a12.5cm b8.3cm c3.2cm	外底余切痕 ロクロ 黄褐色 微細・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+
43	かわらけ	a12.8cm b7.3cm c3.6cm	外底余切痕 ロクロ 粉色 微細・雲母・白針・赤色粒・土丹粒	+
44	かわらけ	a13.2cm b7.8cm c3.9cm	外底余切痕 ロクロ 明黄褐色・繊維・雲母・白針・赤色粒	+
45	常滑 振跡	口縁部小片	輪縁技法 表面暗赤褐色 灰色 砂粒・石粒 粗土 片口跡Ⅱ型	+
46	常滑 振跡	口縁部小片	輪縁技法 内面暗灰褐色 表面赤褐色 灰色 砂粒・石粒 粗土 片口跡Ⅱ型	+
47	常滑 振跡	口縁部小片	輪縁技法 表面暗赤褐色 灰白色 砂粒・石粒 やや粗土	+
48	常滑 振跡	口縁部小片	輪縁技法 外面暗灰褐色 表面赤褐色 灰色 砂粒・石粒 粗土	+
49	土器質 大鉢	口縁部片	輪縁技法 外面褐色ナダ・刷毛目 内面褐色ナダ 粗研褐色 砂粒	+

第4章 浄妙寺旧境内遺跡の花粉化石

1. 試料と分析方法

試料は調査区南壁断面より採取された7試料である。この7試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～4g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行ない、続けてアセトトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣よりプレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉41、草本花粉29、形態分類を含むシダ植物胞子6の総計76である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表24に、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図45に示した。なお、分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基準とした百分率で、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示してある。また表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草木起源のものとがあるがそれに分けることが困難なため便宜的に草木花粉に一括して入れてある。

樹木花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯I・IIを設定した。

I帯（試料6・7）はスギの圧倒的優占で特徴づけられる。その他、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）・コナラ属アカガシ亜属が10%前後、シイノキ属-マテバシイ属（以下シイ類と略す）10%弱の出現率を示している。草本類ではイネ科が30～60%を占め最も多く検出されている。次いでヨモギ属である試料6において、10%を超える程度、イネ科に比べかなり出現率は低くなっている。その他、カヤツリグサ科やアブラナ科が1%を超えて得られており、水性植物（抽水植物）のオモダカ属やイボクサ属なども観察される。また、水性シダのミズワラビ属も産出している。

II帯（試料1～5）：マツ属複雑管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニオウマツ類）最上部を除き上部に向かう急激な増加が特徴づけられる。ツガ属やコナラ属コナラ亜属も下部では増加傾向を示すが、上部では急減し、アカガシ亜属・クリ属・シイ類も上部ではわずかに得られているのみである。一方、I帯で最優占していたスギは出現率を急激に下げるものの上部では回復傾向を示している。草本類ではイネ科が50～60%と圧倒的に多く検出されているが上部ではほぼ半減している。同様に、カヤツリグサ科・アブラナ科・ヨモギ属・タンポポ亜科などが下部において5%前後の出現率を示しているが、上部ではわずかに観察される程度に減少している。その他、水性植物のオモダカ属やマズアオイ属が得られており、上部においてソバ属が観察される。

3. 遺跡周辺の古植生

花粉帯Ⅰの頃の遺跡周辺丘陵部にはスギ林が成立しており、広く林分を広げていた。またアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林も成立していたであろう。さらに落葉広葉樹のコナラ亜属も一部に生育していたであろう。一方、この頃の低地部はすでに水田稲作が営まれ、水田雜草としてオモダカ属(オモダカ)・イボクサ属(イボクサ)・カヤツリグサ科(タマガヤツリなど)・ミズワラビ属(ミズワラビ)などが生育していた。また、畔などにはアカザ科-ヒユ科・オオバコ属・ヨモギ属・他のキク亜科・タンポポ亜科などがみられたであろう。

花粉帯Ⅱの上部の頃はさらにニヨウマツ類の二次林が広がり、スギも勢力を回復し分布域を広げた。このスギの増加は近世において植林が行われた結果と推測される。一方、ニヨウマツ類と二次林を形成していたコナラ亜属は薪炭材などに利用され減少したものと思われる。低地部において依然として水田稲作が行われており、水田雜草と考えられるミズアオイ属が、また、畔などにはシバ属もみられた。しかしながら、オモダカ属・アブラナ科・ヨモギ属・タンポポシ亜科・水性シダ植物などは減少しており、徐草などの整備が行なわれた結果と推測される。

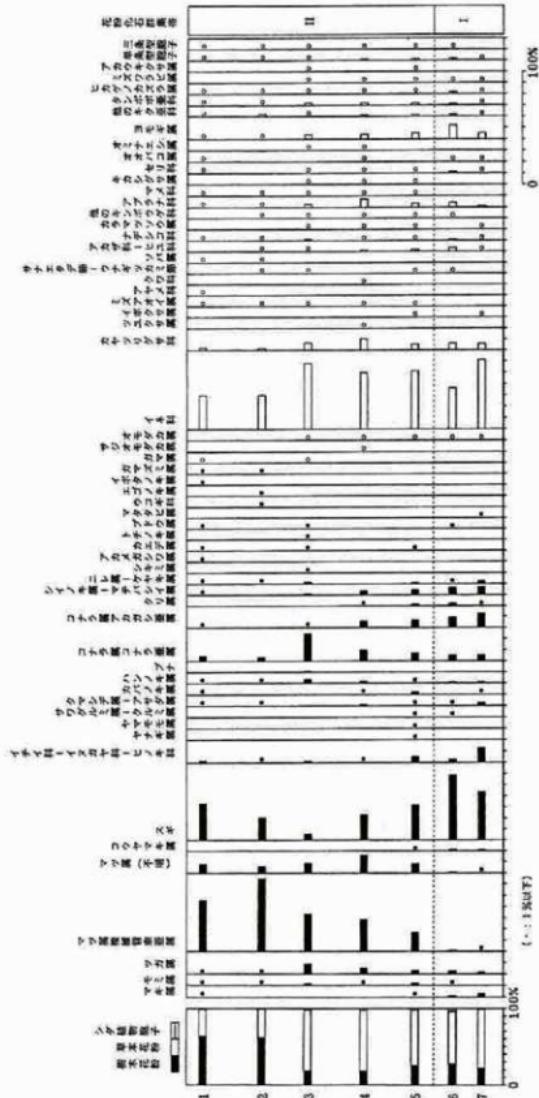


図45 净妙寺旧境内遺跡の主要花粉化石

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・脱子は花粉・胞子总数を基準として百分率で算出した）

表24 產出花粉化石一覧表

科名 属名	学名	1	2	3	4	5	6	7
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	-	-	-	2	2	6
モミ属	<i>Abies</i>	1	1	3	1	5	1	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	1	14	8	8	5	4
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	2	-	-	-	-
マツ属 マツ属(東亞属)	<i>Pinus subgen. Hippoxylon</i>	-	1	-	-	-	-	-
マツ属(東亞属)	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	161	75	2	3	6	2	1
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	28	17	14	24	18	2	1
コウヤマキ属	<i>Sclerodipteryx</i>	-	-	-	-	1	3	3
スギ	<i>Crypypomera japonica</i> D.Don	118	56	9	35	67	95	91
イチイ科-イヌガキ科-ヒノキ科	<i>T. C.</i>	8	2	3	1	12	5	27
サナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	1	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	1	-	-
サザンカ属	<i>Carya</i>	-	-	-	-	-	-	-
タマシマジクア-サダガ属	<i>Aesculus-Juglans</i>	-	-	-	-	2	1	-
カバノキ属	<i>Carpinus- Ostrya</i>	1	1	-	2	1	3	6
ハシノキ属	<i>Betula</i>	-	-	-	-	1	-	-
ブナ	<i>Alnus</i>	3	1	6	3	2	2	3
イスズナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属-コナラ属	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属(カガシ属)	<i>Quercus subgen. Leptobalanus</i>	17	9	28	15	15	8	11
クリ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	1	-	1	9	14	15	27
シノノイ属-マテバシイ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	-	1	5	2
ニレ属-ヤケヤニ属	<i>Castanopsis - parasana</i>	1	-	2	6	10	11	15
エノキ属-ムクノキ属	<i>Ulmus - Zeilkovia</i>	3	2	3	-	3	1	6
シキミ属	<i>Celtis - Aphananthe</i> e	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	<i>Elaeocarpus</i>	-	-	1	-	-	-	-
アカメガシ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Mallotus</i>	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	<i>Acer</i>	1	-	1	-	-	-	-
ブドウ属	<i>Aesculus</i>	-	-	1	-	-	-	-
マタタビ属	<i>Vitis</i>	1	-	1	-	-	-	-
ジンタウゲ科	<i>Actinidia</i>	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	<i>Thymelaeaceae</i>	-	-	1	-	-	-	-
エゴノキ属	<i>Araliaceae</i>	-	-	1	-	-	-	-
イボタキ属	<i>Styrax</i>	-	1	-	-	-	-	-
ニワトコ属似種	<i>Ligustrum</i>	1	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>cf. Sambucus</i>	-	-	-	-	-	-	1
スイカズラ属	<i>Viburnum</i>	1	1	-	-	-	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	-	-	-	-	1	-
日本								
ガマ属	<i>Typha</i>	1	2	-	-	-	-	-
サジョモダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	-	2	-	-	-
マルバモダカ属	<i>Caldesia</i>	-	-	1	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	6	4	5	2	5
イネ科	<i>Gramineae</i>	167	131	489	419	428	211	372
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	13	7	57	88	45	36	53
ツユクサ属	<i>Commenella</i>	-	-	-	1	-	-	-
イボタキ属	<i>Anemone</i>	-	-	-	-	1	-	1
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	1	1	2	1	-	-
アヤメ科	<i>Iridaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	-	-	-	4	-	-	-
キシナシ属	<i>Rumex</i>	-	-	1	-	-	-	-
サンタナデコ-ウナギツカ節	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon</i> -	-	1	1	-	2	1	-
ソバ属	<i>Polygonum</i>	-	1	1	-	-	-	-
アカザ属-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	-	1	6	10	15	21	8
ナシノク科	<i>Caryopteris</i> hupehensis	1	1	9	1	4	7	1
カラマツソウ属	<i>Thalerium</i>	-	-	1	4	4	-	-
他のシボンボク科	<i>other Ranunculaceae</i>	-	2	1	1	2	2	-
ナシノク科	<i>Cruciferae</i>	4	4	23	61	29	24	11
マツ科	<i>Rhamnaceae</i>	2	1	2	3	1	-	-
カキシマサ属	<i>Rosa</i>	-	-	8	3	1	-	-
アリノトウガ属	<i>Hakonefagis</i>	-	-	2	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	1	-	5	3	1	7	4
オオバコ属	<i>Parasitaxus</i>	1	-	-	1	-	1	1
オミナエシ属	<i>Paris</i>	-	-	-	1	-	-	-
ベニバナ属	<i>Carthamus</i>	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	2	2	32	36	43	71	48
他のヨモギ科	<i>other Tubuliflorae</i>	2	9	3	10	6	9	6
タンカガ属科	<i>Liquiritiae</i>	4	2	19	18	16	8	9
シダ植物								
ヒカクノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	1	1	6	2	3	9	1
ミズワラビ属	<i>Ceratopteris</i>	-	-	2	7	1	3	1
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i>	-	-	-	-	-	-	-
アカシキモ属	<i>Azolla</i>	-	-	2	-	1	-	-
单子叶植物	<i>Monodelphaceae</i>	4	1	7	9	12	11	5
三色苔属	<i>Trientalis</i>	1	1	2	3	1	-	-
裸木粉	<i>Arborescent pollen</i>	350	269	150	149	209	158	206
草本粉	<i>Nanoboreal pollen</i>	201	164	670	672	607	400	720
シダ植物孢子	<i>Spores</i>	6	3	19	21	18	24	7
花粉-孢子灰狀	<i>Total Pollen & Spore</i>	557	436	843	842	834	582	933
不明花粉	<i>Unknown Pollen</i>	6	11	34	37	66	65	49

T. - C. 14 Taxaceae-Ce Philotaxaceae-Cu Resaccace を含む

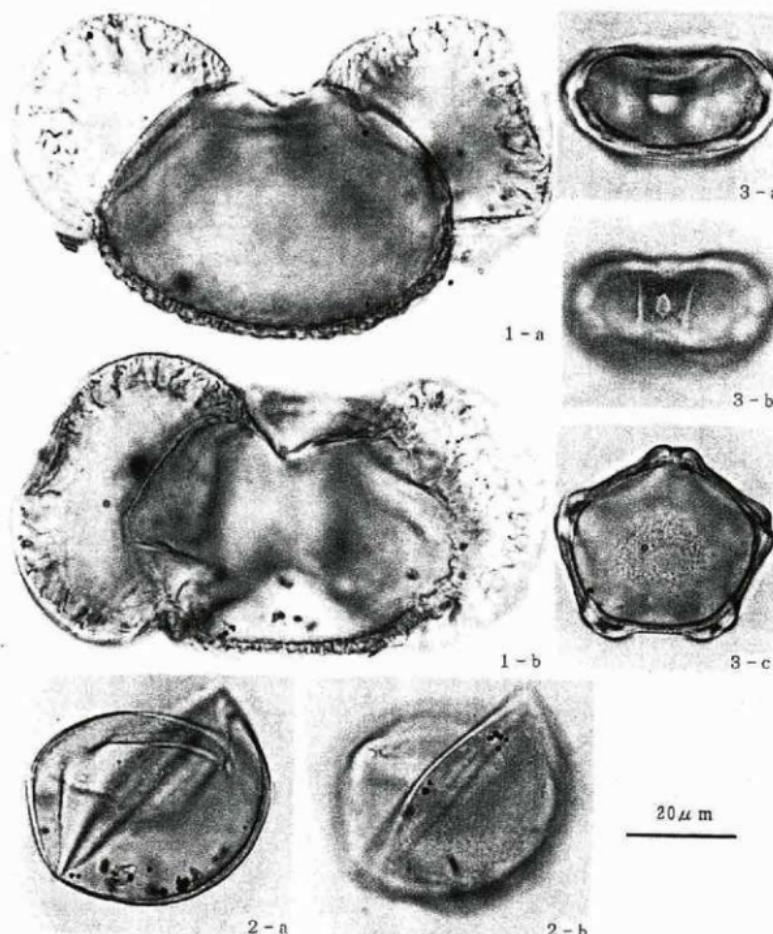
第5章 まとめ

本調査地点では、4時期の生活面が確認された。各生活面の特徴とその様相をみると、第1面と第2面、第4面ではグリットB～C間で区画を構成するとみられる南北方向の溝を検出しておらず、また第1面と第3面からは建物等の一部を構成すると思しきピットを検出しているが、その本体に関しては、ピットの配置から判断して調査区外へ展開するものと推測される。これらとは対照的に第4面では面上に遺物溜り（かわらけが主体）や粘土を採掘したと推測される土壤が検出され、居住空間としての場ではない状況が窺えた。さらに今回の調査では、第4面とした中世地山面（中世基盤層上面）で検出した遺構や面上に伴うかわらけは図示できなかった資料も含めて手捏ねかわらけが殆ど認められず、ロクロ成形による糸切底のかわらけが主体を占め、他からの搬入遺物の出土量を凌駕している点が本調査地点の特徴的な様相の一つとして指摘できる。次に第1面～第4面の各生活面については、検出した遺構に伴う遺物の年代観をみると、およそ13世紀後半～15世紀前半までに帰属する資料として捉えられるが、各生活面の年代的な様相は第1・2面と、第3・4面の時期に大別される。すなわち前者が14世紀後半～15世紀中頃まで、後者が13世紀後半～14世紀前葉頃までの年代観が与えられよう。

調査では遺跡名称が示す通り寺院境内（塔頭域）に関係すると推測できる明確な遺構は確認することはできなかった。しかし、第1・2面からは瀬戸天目茶碗、瓦質土風炉・香炉、瓦類（この時期より古いが）や質の高い舶載器などの遺物からみると、鎌倉市街地では殆どみられないこの時期の遺物資料がある一定量、所持していたことはこの調査地点がやはり足利氏に外護された淨妙寺旧境内域に関連した場であったと推測してよさそうである。

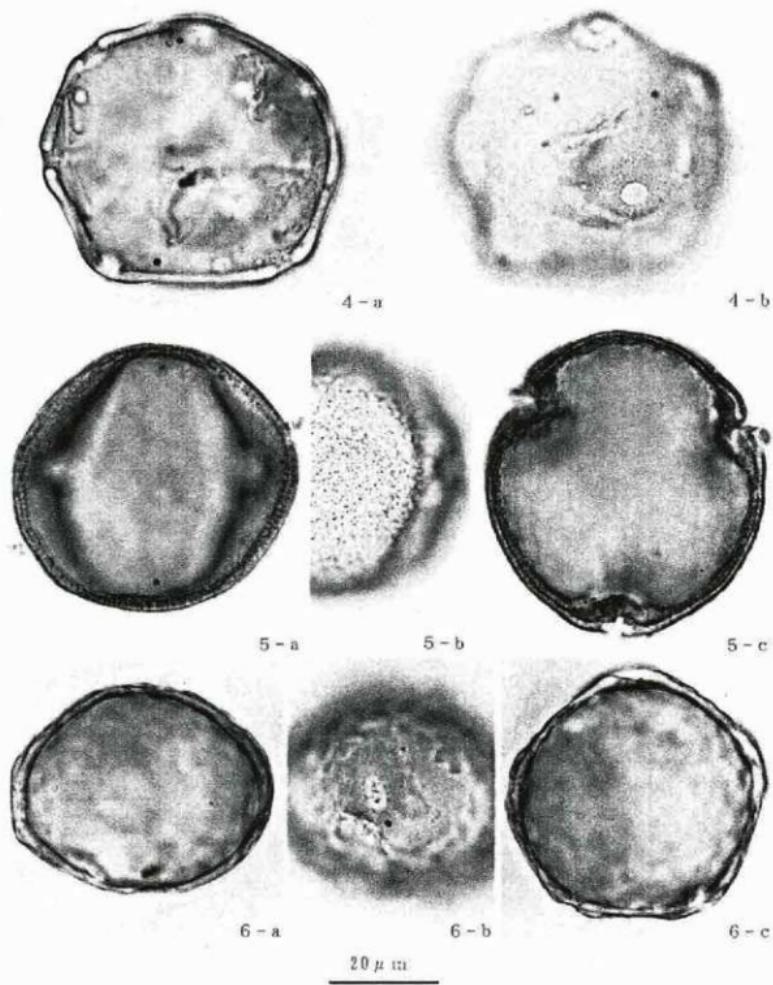
【参考文献】

- 大三輪龍彦・ 1989 「淨妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
根田 誠・ 原 康志
田代部夫・ 1991 「淨妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
原 康志
大河内 勉・ 1996 「淨妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
宗臺富貴子・ 1999 「淨妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
板山敬一朗
宗臺秀明・ 1992 「中世・14世紀かわらけの変遷」『考古論義神奈川』第1集 神奈川考古学会
宗臺秀明・ 2002 「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」「かながわの中世～鎌倉から小田原へ～土器様相を中心として」『神奈川考古学』
宗臺富貴子・ 1996 「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校)の瀬戸窯製品について－古瀬戸前から後期までの出土様相－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4編
脇部実喜・ 1994 「南武藏・相模における中世の食器様相(2)－中世前期－」『神奈川考古』第30号 神奈川考古学会
馬淵和雄・ 2002 「貿易陶磁器と国産陶器」「かながわの中世～鎌倉から小田原へ～土器様相を中心として」『神奈川考古学』



A. 产出花粉化石の顕微鏡写真

- 1: マツ属複維管束亞属
- 2: イマイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科
- 3: ハンノキ科



B. 産出花粉化石の顕微鏡写真

4 : サワグルミ属 - クルミ属

5 : ブナ

6 : ニレ属 - ケヤキ属



▲ a. 調査地点付近（北から）



▲ b. 第1面全景（北から）



▲ c. 溝1（東から）

図版4



▲ a. 土壌2遺物出土状況（北から）



▲ b. 土壌9・10・11（北から）



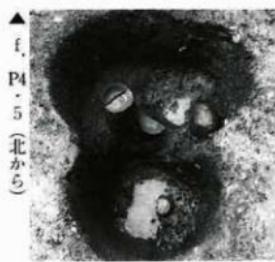
▲ d. 土壌13（北から）



▲ c. 土壌10土層堆積（南から）



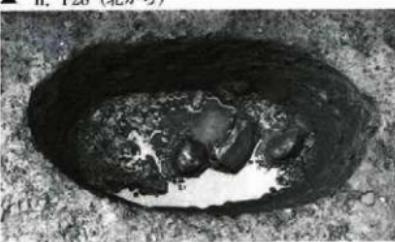
▲ e. P3遺物出土状況（西から）



▲ f. P4・5
(北から)



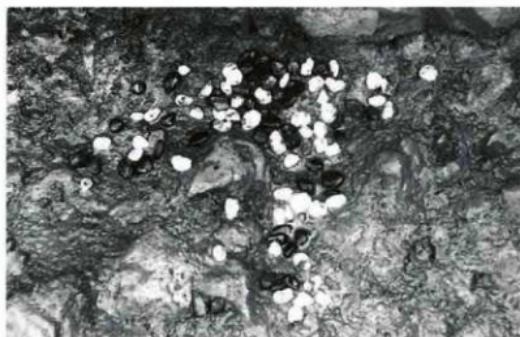
▲ g. P12遺物出土状況（北から）



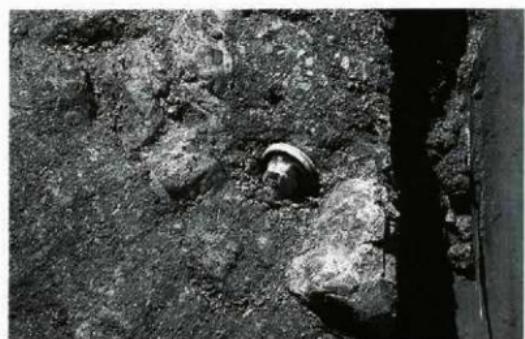
▲ h. P28（北から）



▲ a. 第2面全景（北から）



▲ b. 遺物溜り（碁石出土状況）



▲ c. 第3面 瀬戸仏草瓶出土状況（北から）

第2面(1)

図版6



▲ a. 道物溜り 2 (北から)



▲ b. 土壌9 (南から)



▲ c. 土壌9
瀬戸入子出土状況 (東から)



▲ d. 土壌10 (北から)



▲ a. 第3面全景（北から）



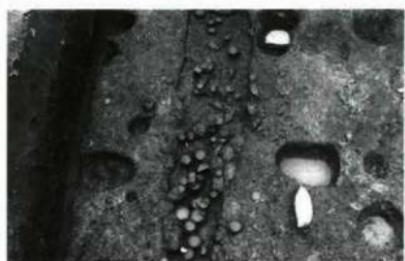
▲ b. 土壌6・建物1・2（南から）



▲ c. 土壌12遺物出土状況

第3面(1)

図版 8



第3面(2)



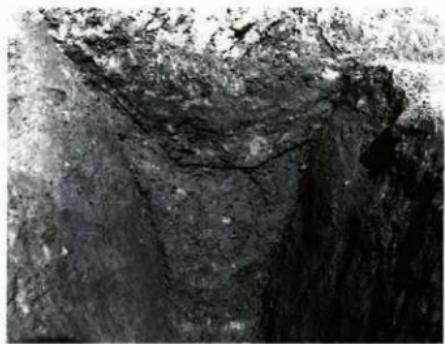
▲ a. 第4面全景（北から）



▲ b. 溝3（北から）



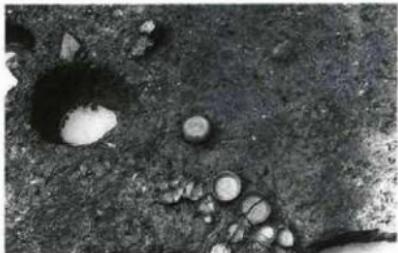
▲ c. 溝1・3南側土層堆積



▲ d. 溝1・3北側土層堆積

第4面(1)

図版10



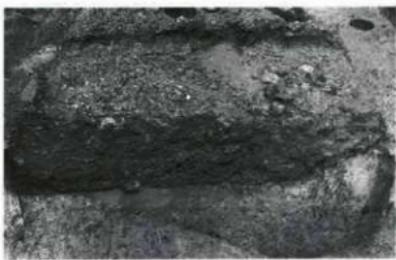
▲ a. かわらけ溜り（東から）



▲ b. 土壌5（東から）



▲ c. 土壌3（北から）



▲ d. 土壌1・2土層堆積（南から）



▲ e. 東壁土層堆積（西から）



▲ f. 東壁土層堆積（西から）



▲ g. 北壁土層堆積（南から）



▲ h. 南壁土層堆積（北から）



▲ a. 建物1



▲ b. 土壌3・5・7・11・12



▲ c. 溝1

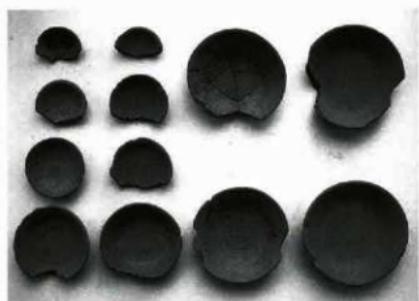


▲ d. P1・9・14・15・18・20・28・29

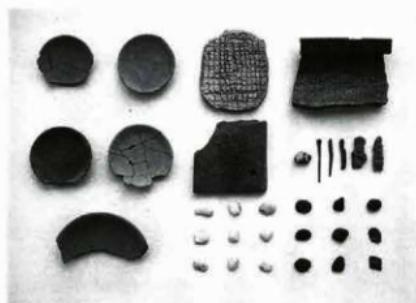


▲ e. 面上

第1面出土遺物



第2面出土遺物(1)



▲ a. 遺物混り

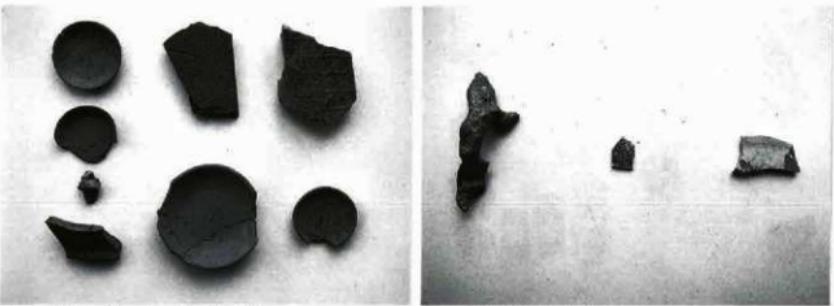
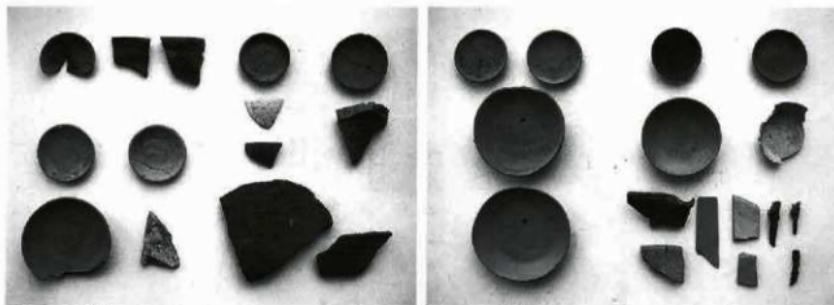


b. 第1面下～第2面



第2面出土遺物(2)

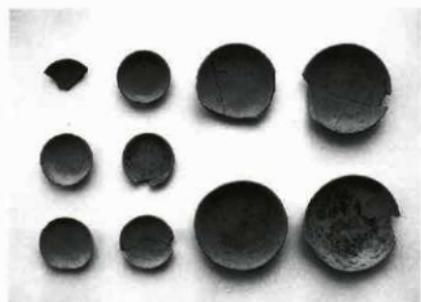
图版14



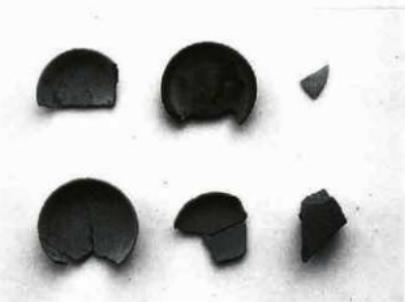
第3面出土遺物



▲ a. 第2面下～第3面



▲ b. 第4面土壙4・5



▲ c. 第4面P3・5・6・7・8



▲ d. 第4面かわらけ溜り



▲ e. 第3面下～第4面

第4面出土遺物

むりょうじあと
無量寺跡 (No.196)

扇ガ谷一丁目26番27外

例　　言

1. 本書は、鎌倉市扇ガ谷一丁目26番27外における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成14年7月15日～同年9月13日にかけて実施され、調査対象面積は360m²である。出土品に関しては鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子（日本考古学协会会员）
調査補助員 安達澄代・古原真知子・宇賀神雅子・渡辺美佐子・坂倉智子・岩沢智和・安藤龍馬
調査協力者 宮崎正二（鶴見大学）、立川明子（駒沢大学）、吉田智哉（大正大学）、蓑田孝善、杉浦永章、奥山利平、吉本脩三、荻野鶴、安西三男（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/100・1/80・1/40（遺構図の水系高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1/3・1/6
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
軸の限界線——— 使用痕の範囲 —————
調整の変化点————— 加工痕の範囲 —————
6. 本書の執筆は第1章を宮田眞、第2～4章は森孝子、編集を森が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
遺構図版 森孝子 河内令子 坂倉美恵子
遺物図版 河内令子 坂倉美恵子 宇賀神雅子
遺構写真 森孝子
遺物写真 森孝子
8. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏・機関に御教示・御協力を賜った。
鎌倉考古学研究所
9. また、発掘調査に際して多大な御協力を頂いた施主及び施工業者に深く感謝の意を表する。

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	105
第2章 調査経過とグリッド配置図・基本層序	108
第3章 検出遺構と出土遺物	112
第4章まとめ	161

図版目次

図1 本調査地点と周辺遺跡	106
図2 調査地点位置図	109
図3 グリッド配置図	110
図4 基本層序	111
図5 かわらけ溜	113
図6 かわらけ溜出土遺物	114
図7 2面遺構配置図	115
図8 溝13	116
図9 溝13出土遺物	116
図10 土壙1~3・6・12~15	117
図11 土壙1~3・6・12~14出土遺物	118
図12 土留め	120
図13 2面出土遺物1)	121
図14 2面出土遺物2)	123
図15 岩盤上検出遺構群	125
図16 やぐら1・2	129
図17 やぐら2出土遺物	131
図18 やぐら3	132
図19 やぐら3出土遺物	133
図20 やぐら4	134
図21 やぐら4出土遺物1)	136
図22 やぐら4出土遺物2)	137
図23 やぐら4出土遺物3)	138
図24 やぐら4出土遺物4)	140
図25 建物1・柵列1	141
図26 溝10~12	142
図27 溝10出土遺物	143
図28 溝1~8・14	144
図29 溝9・15	146
図30 溝2・2・3・4・5・14出土遺物	147
図31 溝16・17	148
図32 土壙4・5・7・方形土壙1・2	149
図33 土壙4・方形土壙1出土遺物	149
図34 土壙8~11・17・18	150
図35 土壙16・20	150
図36 土壙16・20出土遺物	151
図37 土壙19	151
図38 土壙19出土遺物	151
図39 ピット列1・2	152
図40 道路状遺構	152
図41 第1トレンチ・第2トレンチ	153
図42 第2トレンチ出土遺物	153
図43 包含層出土遺物1)	154
図44 包含層出土遺物2)	155
図45 表土層出土遺物1)	157
図46 表土層出土遺物2)	159

写真図版

図版1 A. 調査地点遠景(南東上方から) B. 表土掘削(東から)	やぐら4覆土出土手堀り(南から) 同上観(南から)
図版2 A. 1面かわらけ溜(北東から) B. 2面全景(南東から)	やぐら4全景(南東から) やぐら4奥壁(東から)
図版3 A. 2面全景(北東から) B. 2面土壙3(東から)	やぐら4南壁(北東から) やぐら4北壁(南から)
図版4 A. 2面土留め(東から) B. 同上(北東から)	やぐら4床面(北から) 同上近景かわらけ群(東から)
図版5 A. やぐら1・2全景(南東から) B. 同上近景(南から)	やぐら4近景(東から) 同上曲物内覆土除去後曲物(東から)
図版6 A. やぐら1覆土SNCセクション全景(南西から) B. やぐら1床面近景(南から)	建物1柵列1(南から) 柵列1(西から)
図版7 A. やぐら2覆土SNCセクション(東から) B. やぐら2全景(南東から)	岩盤上検出北部遺構群(西から) 同上(東から)
図版8 A. やぐら2内検出井戸(南から) B. やぐら3(南から)	溝11・12・方形土壙1・2(北から) 溝10(北西から)
図版9 A. やぐら3(西から) B. やぐら3北壁(南から)	溝1~8・14(南から) 同上遠景(南東から)
図版10 A. やぐら3南壁(北から) B. やぐら3奥壁(東から)	溝16・17(西から) 土壙8~11・17・18(南から)
図版11 A. やぐら3入口部(西から) B. やぐら3入口部(東から)	岩盤上検出東部遺構群(西から) 道路状遺構・溝16・17(西から)
図版12 A. やぐら4閉塞石(南から) B. 同上(東から)	道路状遺構(西から) 同上(南東から)

图版25	出土遗物(1)	图版33	出土遗物(9)
图版26	出土遗物(2)	图版34	出土遗物(10)
图版27	出土遗物(3)	图版35	出土遗物(11)
图版28	出土遗物(4)		
图版29	出土遗物(5)		
图版30	出土遗物(6)		
图版31	出土遗物(7)		
图版32	出土遗物(8)		

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡地は、鎌倉市扇ガ谷一丁目26番27外に所在する。遺跡地は地勢的に見ると旧鎌倉市街地を形成する平野部の西端に当たり、また現在のJR鎌倉駅を基点にすると北西約550mの距離を置いた谷戸内に位置する。遺跡地が所在する谷戸は俗に「無量寺谷」と呼称されており、無量寺があったとの伝承が今に残る。

また江戸時代には、相州伝正宗の血を引く刀工綱廣の屋敷があったと伝えられ、「綱廣谷」と称され、後述する図1-2地点付近には「正宗井戸」1基があり、また本調査地点の北方山腹には「正宗相槌稻荷」が近代まで祭られていた。

さらに時代は下る明治から大正頃には、温暖な気候や風光明媚などの理由から、東京や横浜在住の政治家・実業家・文人・学者・華族といった著名人達が次々と鎌倉に別荘を構えた。調査地点を含む本谷戸もご多分に漏れず、大正年間に三菱財閥第四代当主の岩崎小弥太が、病弱だった母早苗（後藤象二郎の娘）のために療養所を兼ねた広大な別荘を建てる。その敷地は谷戸のほぼ全域に亘った。こうした別荘も第2次世界大戦の戦闘を期にほとんどが姿を消した。

<無量寺谷と無量寺>

『鎌倉廃寺事典』は、「新編鎌倉誌」から、調査地のある無量寺谷を無量寺の故地に当てている。新編鎌倉誌では、「吾妻鏡」文永二年六月三日の条に「己巳日中夕立。故秋田城介義景十三年佛也。於無量壽院。自朔日至今日。或十種供養。或一切經供養也。而今迎正日。供養多宝塔一基。導師若宮別當僧正隆弁・布施被物十重。太刀一、南廷五。砂金卅両。錢百貫文。伊勢入道行願。武藤信濃判官入道行一以下數輩。為結縁詣其場。說法最中、降雨如車軸。于時山上所構之聽聞假屋寺顛倒。諸人希有逃。其中男女二人。自山嶺落于路之北、半死半生云々。」とあり、この仏事が行われた無量寿院を上記無量寺と同一寺院の扱いをしている。

甘繩無量寿院の名が現れるのは『血脈類集記第十一』の寛元元年（1243）宏教が北条頼経の推挙によって律師に任じ甘繩の無量寿院に住す、年六十。が初めてである。この記載から同寺院は頼経開基、宏教が開山と推測することもできるのではなかろうか。

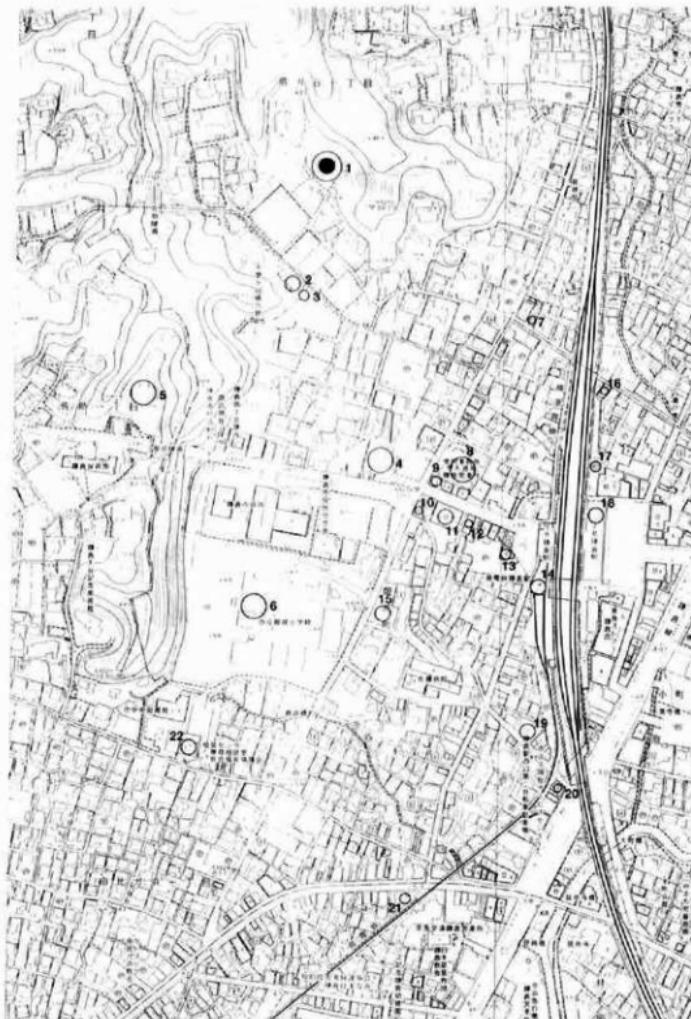
<北京律と無量寿院>

北京律とは、鑑真和尚以来の南都律に対して、京都泉涌寺開山後_律師を中心に京都に提唱された律を言う。甘繩無量寿院は、鎌倉における北京律布教の前進基地としての重要な役割を有したらしく、先述した宏教以来、泉涌寺北京律の先駆者が無量寿院を受け皿に暫時鎌倉へと進出している。

<霜月騒動と無量寿院>

無量寿院の廢絶については、弘安二年（1279）八月二十日無学祖元が北条時宗の招きで来朝し、同五年十二月に圓覚寺開山に迎えられるが、時宗は甘繩の無量寿院の傍らに通常庵を建てて彼を遇した。ところが弘安七年四月四日時宗が歿するや貞時は、亡父のために弘安九年乾明山万寿寺を甘繩無量寿院の跡に建てて無学祖元を開山に迎えており、既に無量寿院は廢絶している。そもそも甘繩無量寿院は弘安八年（1285）十一月十七日霜月騒動に際して焼失したらしい。

霜月騒動は、「保暦間記」によれば、「貞時が内管領平左衛門尉頼綱と申す有り、又權勢の者にて有りけるに、懐を健苦する事泰盛にも劣らず・・・、爰に泰盛頼綱中悪くして互いに失はんとす、共に種種の讒言を成程に、泰盛嫡男秋田城介景豊と申しけるが」の極にや、曾祖父景盛入道は右大将頼朝の



1. 本調査地点
 2. 舞鶴寺跡（御成町39番6）
 3. 小路西遺跡（御成町25番1外1筆）
 4. 千葉地遺跡
 5. 佐助一丁目620番地点
 6. 今小路西遺跡（御成小学校内）
 7. 千葉地一丁目74番8地底
 8. 千葉地東遺跡
 9. 御成町228番2地点
 10. 小町一丁目116番地点
 11. 駒許東遺跡
 12. 御成町806番3地点
 13. 御成町11番5地点
 14. 砂原敷東遺跡
 15. 御成町672番1地点
 16. 小町一丁目120番1地点
 17. 小町一丁目116番地点
 18. 砂原敷遺跡
 19. 御成町860番地点（西口第2自転車駐車場他）
 20. 御成町872番地点
 21. 下馬南辺遺跡
 22. 今小路西遺跡（福祉センター）

図1 本調査地点と周辺遺跡

成りければとて、俄かに源氏に成りけり、其の時頼綱入道折を得て宗景が謀反を起こして將軍に成らんと企て源氏に成る由譲う。誠に左様の氣も有るけるにや、終に泰盛法師子息宗景、弘安八年十一月十七日誅せられけり云々と記されており、平頼綱との政權争いに泰盛の子宗景が屈し安達氏は滅亡する。

また「通知院法印灌頂資記」には、この安達泰盛の邸は無量寿院の隣接地なればこの時「合戦之余炎將軍御所に移り焼失し訖んぬ」とあり、將軍の御所がどの地点かは不明だが、この時、無量寿院も当然焼失したものと考えてよいだろう。

＜滅亡とその後＞

先にも述べたが、無量寿院は再興されず安達氏と共に滅ぶ。そしてその跡地には翌弘安九年に万寿寺が建てられる。さらに10年後の永仁四年（1226）執権北条貞時が大檀那となり、開山智海心慧を迎えて鷺峰山真言院覺園寺が創建され、鎌倉における北京律の拠点としてその活動をスタートする。もちろんこの寺院は現在も二階堂にある覺園寺である。

＜無量寺と無量寿院＞

さて、今回の調査地点がある無量寺谷に仮に無量寺という寺院が存在していたとしても、果たして上記の無量寿院と同一の寺であろうか。少なくとも現代に生きる自分には、扇ヶ谷に位置する無量寺谷は甘繩の範囲には入らない。本地を甘繩の一部とするには飛躍が過ぎると考えるのが道理であろう。無量寺＝甘繩無量寿院という仮説は、今しばらく保留したほうが懸命ではなかろうか。

＜谷戸内の調査＞

無量寺谷内における過去の発掘調査は少なく、図1-2（無量寺跡）・3（今小路西遺跡）地点に限られる。

図1-2地点の調査は、平成3年1月～3月にかけて実施され、山裾から東向きに開口するやぐらが4基検出された。その内の1基から11点（内3点は蓋）の輪轆製の白かわらけがまとまった形で出土しており、内3点には体部外面に同様な墨書が残り、状態の良好なものは「□庚申散」と読むことができる。庚申信仰に関係するものか、あるいは干支年代を表しているのかいずれにしろ興味深い。

2地点の南に隣接する3地点の調査は、平成14年2月～3月にかけて実施され、13世紀末～15世紀前葉に至る合計4枚の良好な土丹地業面が検出された。中でも13世紀末～14世紀初頭頃に時期を置く3面からは、市内でこれまでに見つかった大路側溝と護岸構造を同じくする、断面方形の溝が調査区の北側で、北面する道路と並行して検出されるなど、当時の谷戸内の土木工事の実態を知る上で大きな成果を上げている。

以上本谷戸内の希少な調査例を紹介したが、いずれも谷戸の出口付近でしかも調査規模は小さい。しかし今回の発掘調査は調査地点、調査面積においても本谷戸内の埋蔵文化財の実態解明に、初めて本格的なメスが入れられることになり大きな期待がかかる。

（参考文献）

貴達人・川副武胤 1980年「鎌倉寺事典」有隣堂

大森順雄 1987年「甘繩無量寿院考并北京律闡東弘教序論」有隣堂鎌倉55号

鎌倉市 1959年「鎌倉市史 社寺編」吉川弘文館

田畠佐和子 1991年「無量寺跡」鎌倉市埋蔵

田畠佐和子 1992年「無量寺跡出土の白かわらけについて」鎌倉考古21号 鎌倉考古学研究所

今小路西遺跡発掘調査團・有限会社博通2003年「今小路西遺跡発掘調査報告書（御成町25番1外1筆地点）」

1993年1月「鎌倉朝日」第166号

第2章 調査経過・グリッド配置・基本層序

本調査地点は鎌倉市扇ガ谷一丁目26番27外に所在する。個人専用住宅建築に伴う事前の発掘調査である。発掘調査期間は平成14年7月15日～9月13日、調査対象面積360m²である。

調査経過

- 平成14年7月8日 重機による表土掘削を開始。
7月15日 作業員の参加を得て人力による搅乱の掘り上げを開始。
7月17日 表土層は岩盤直上まで堆積しており、遺構は岩盤上に展開する。北側の岩盤は現地表と同レベル、南側は急激に直立して落ち込んでいる。南側、東地域にて、やぐらを2基確認。また、西地区に土丹地形による遺構面確認。
7月18日 南側東地区→やぐら(やぐら1・やぐら2)の調査開始。同西地区→搅乱の掘り上げ開始。
7月19日 表土掘削終了。調査区北側東地区に岩盤上にやぐら(やぐら3)を確認し、掘り上げ開始。
7月22日 ベルトコンベヤー6台設置。
7月23日 南側東地区→溝群の調査開始。同西地区→遺構面の検出開始。
7月29日 やぐら3調査終了。写真撮影後、測量。
8月1日 北側西地区→かわらけ溜1検出。
8月2日 やぐら1調査終了。
8月8日 やぐら2調査開始。西側東地区→土壌群の調査開始。
8月12日 やぐら4を確認し調査開始。
8月13日 やぐら2調査終了。写真撮影後、測量。
8月22日 調査区西側の平面実測。
8月26日 調査区西側の全景写真。
8月28日 東側溝群実測開始。調査区西側岩盤まで掘り下げ開始→道路状遺構検出。
8月29日 やぐら4調査完了→写真撮影、測量。
9月2日 西側地区南西地区的遺構確認作業、及び岩盤確認のためのトレチ設定。
9月10日 ラジコンヘリによる空撮。個別写真撮影。
9月13日 調査終了。

グリッド配置

南北軸をx軸、東西軸をy軸として1mごとに南から北にx1・x2・x3・・・東から西にy1・y2・y3・・・とふり、各グリッドの名称を北西隅とした。

グリッドと国土座標の位置関係は国土座標X=-75.45・-75.50・-75.55、Y=-25.65・-25.70・-25.75を図示している。また、図2、A地点は本調査におけるx0・y0の位置で、国土座標ではx=-75.580247、y=-25.730195に相当する。また、B地点はx0.510・y39.958で、国土座標ではx=-75.552331、y=-

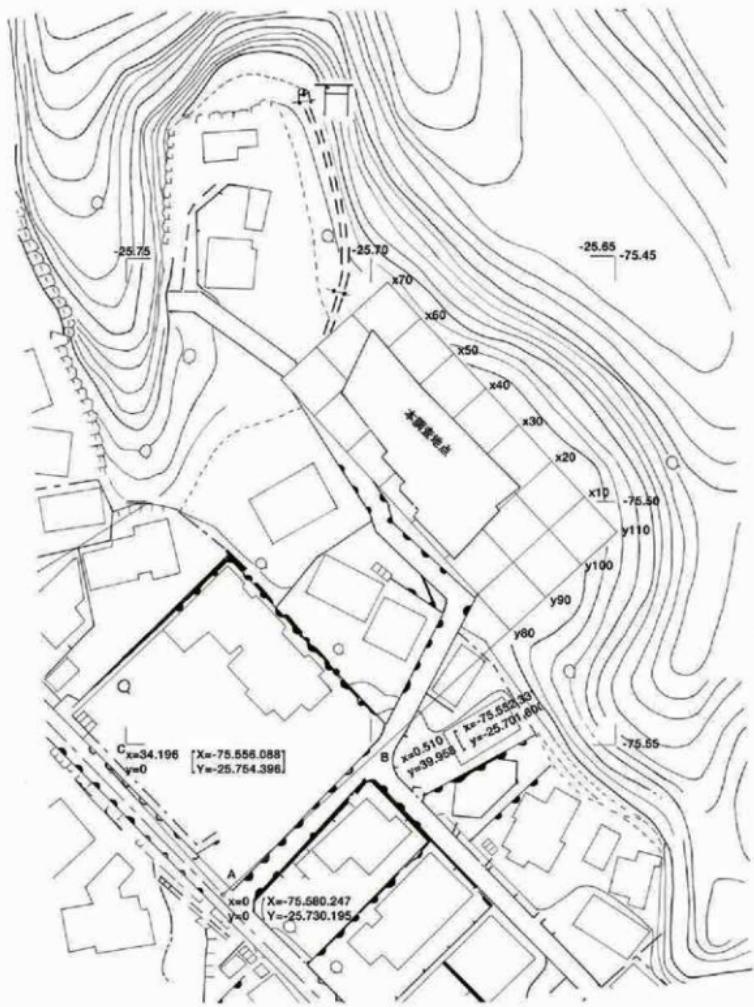


図2 調査地点位置図

25.701600、C地点はx 34.196・y 0で、国土座標ではx = -75.556088、y = -25.754396に相当する。
グリッドのY軸は磁北に対して52° 54' 東に傾く。

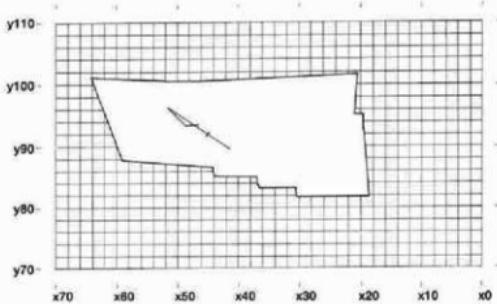


図3 グリッド配置図

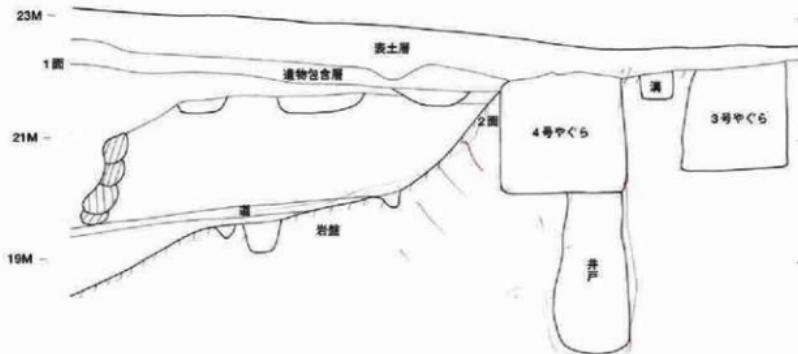


図4 基本層序

基本層序(図4)

調査地点の海拔は23m前後である。西側の海拔は23.1m、東側は22.6mで、現状の地形は西側が高く、東側が低くその比高差は50cmを測る。遺構群は表土層直下の岩盤上に検出されたが、北西地区は岩盤までに2時期の遺構面が確認された。

表土層 現代の盛土。20~50cmの堆積をもつ。

北西地区

1面 海拔22.1m。30cmの堆積をもつ包含層下に検出された。茶色シルト層で、土丹粒子、炭化物、かわらけ碎片を含む。

2面 海拔21.5~21.6m。南端が大型土丹塊で土留された遺構面。茶褐色砂質土層で、10~40cmの鎌倉石塊を含む。

岩盤 北側の海拔は22.3m中央部付近から280cm急激に落ち込む(海拔20.2m)。南側は海拔18.8mと更に落ちる。

第3章 検出遺構と出土遺物

調査地点は谷戸の山裾に位置している。その山裾の岩盤は近代以降の造成のため、垂直に削平されており、また、表土直下の岩盤上に展開する遺構群をもかなり搅乱していた。遺構群は概ね岩盤上に検出されたが、北西部では岩盤までに2時期の遺構面が検出された。今回検出された遺構はかわらけ溜1、土壙20基、溝17条、建物1軒、柵列1、道路状遺構1、やぐら4基である。また、出土遺物はテン箱17箱、かわらけを主体とし、舶載磁器、国内搬入品、土製品、木製品、石製品、金属製品等である。以下、各面の詳細を述べる。

1面の検出遺構と出土遺物

1面は海拔22m前後で検出された。茶色シルトの遺構面はほぼ平坦である。検出遺構はかわらけ溜1である。

かわらけ溜(図5)

調査区西壁際、X63~64-Y99~100グリッドに海拔21.85mで検出された。東西100cm、南北250cmの抜がりを持ち、西側は調査区外西に広がる様相を呈する。上層は茶色シルト層、下層は茶色粘質土層で、粉碎鎌倉石粒子、炭化物を多く含む。

かわらけ溜出土遺物(図6)

1~41は輪輪成形のかわらけである。1~10は大皿、11は中皿、12~41は小皿である。大皿の復元口径は12~13cmである。1~4は復元口径12.8~12.5cm前後で、底径6.6~7.8cm、器高3.1~3.3cmで、腰がすぼまり、口径、底径比の大きいタイプである。1~3の体部は底部から開いて立ち上がり、2/3あたりからやや直進する。8も同様の様相を呈するが、口径が12.2cmと小さめである。4は中央部付近から直進気味である。5~7、9、10は底径8.2~8.6cmと底部が広がり、口径13cm以下で、縮小化の傾向にある。11の復元口径は11.2cm、底径7.3cm、器高3.1cmを測る。口径、底径比が小さく、また、内底面のなでが強く、中央部が僅む。3は灯明皿である。

小皿の復元口径は7~9cm、底径4.2~6.4cm、器高1.3~2.1cmを測る。胎土は淡い燈色、或いは肌色系を呈し、白針、雲母、赤茶色粒子、黒色粒子を含む。12~21は口径8cm以上で、器肉が比較的厚い一群である。14、15は薄手で底部は碁筋底気味である。18の内面底部は、内面の底部脇の回しなでが強く、また、内面見込みのナデが弱いため盛り上がる。22~30は口径8cm前後で薄手、底部が平坦である。概ね側壁があまり開かないタイプであるが、28、29は外側に大きく引き出されており、また、底部が小さい。31以下は口径が7.8cm以下で、薄手化の傾向にある。34は古式様に若干厚みを残すが、口径は7.7cmと小振りである。40、41は口径7cm余りで、このタイプの中でもかなり小さい。

42は舶載の龍泉窯系青磁蓮弁文碗、口縁部の小片である。胎土は灰白色を呈し、粘性を帯び、ガス孔が観察される。釉調は灰味緑色で、光沢は良好である。薄い施釉である。

43は瀬戸の入子である。復元口径7.5cm、底径3.8cm、器高2.5cmを測る。胎土は灰色を呈し、良く焼き締まる。口縁部に降灰している。口縁部にへらで付けた注口状の突き出しがある。

44はかわらけ質の土製品である。復元口径7.6cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、雲母を含む。体部外面の突帶は貼り付けではなく、体部の粘土を引き出して成形されており、蓋受けであ

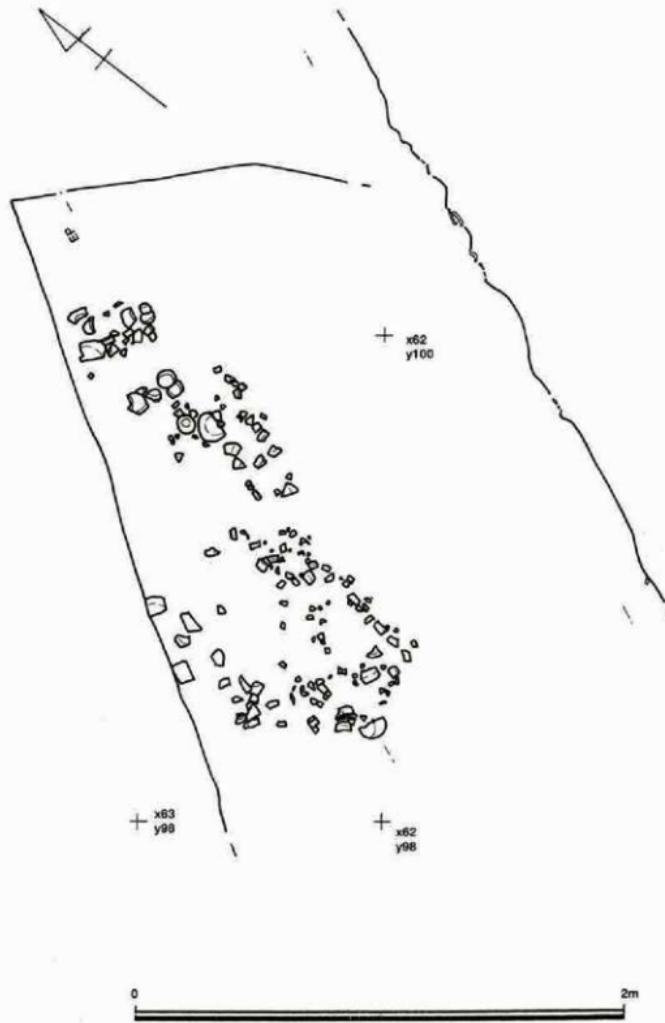


図5 かわらけ灘

ると想定される。

45、46は北宋錢である。共に熙寧元宝である。

47は石製品、碁石である。直径2cm、厚さ6mmを測る。

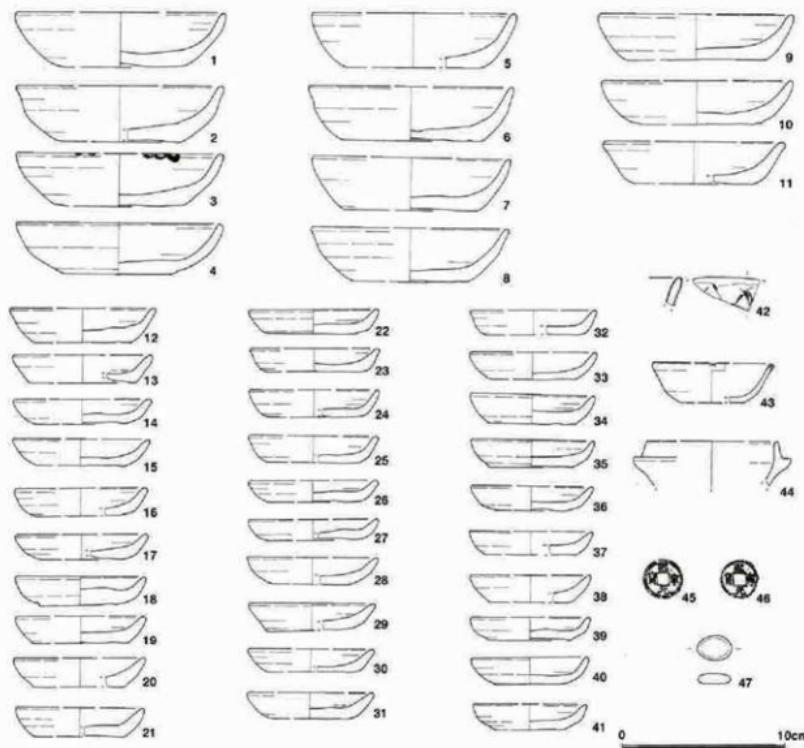


図6 かわらけ溜出土遺物

2面の検出遺構と出土遺物(図7～14)

2面は海拔21.5～21.6mで検出された。検出遺構は土壌8基、溝1条・土留めである。

溝13(図8)

x 60～62・y 98～100グリッドで、海拔21.8mで検出された南北方向に走る溝である。長さ3m、溝幅30～50cm、深さは確認面より20cmを測る。溝は直線的に南北方向に延び、また、断面形はU字型である。覆土は黒灰色粘質土で、炭化物、かわらけ片を含み、しまりはない。この溝は西側に広がる岩盤との境目に位置する。岩盤からの絞り水を溜める水溜めであるとも考えられる。この溝の南北の軸方向はN-17°Wである。

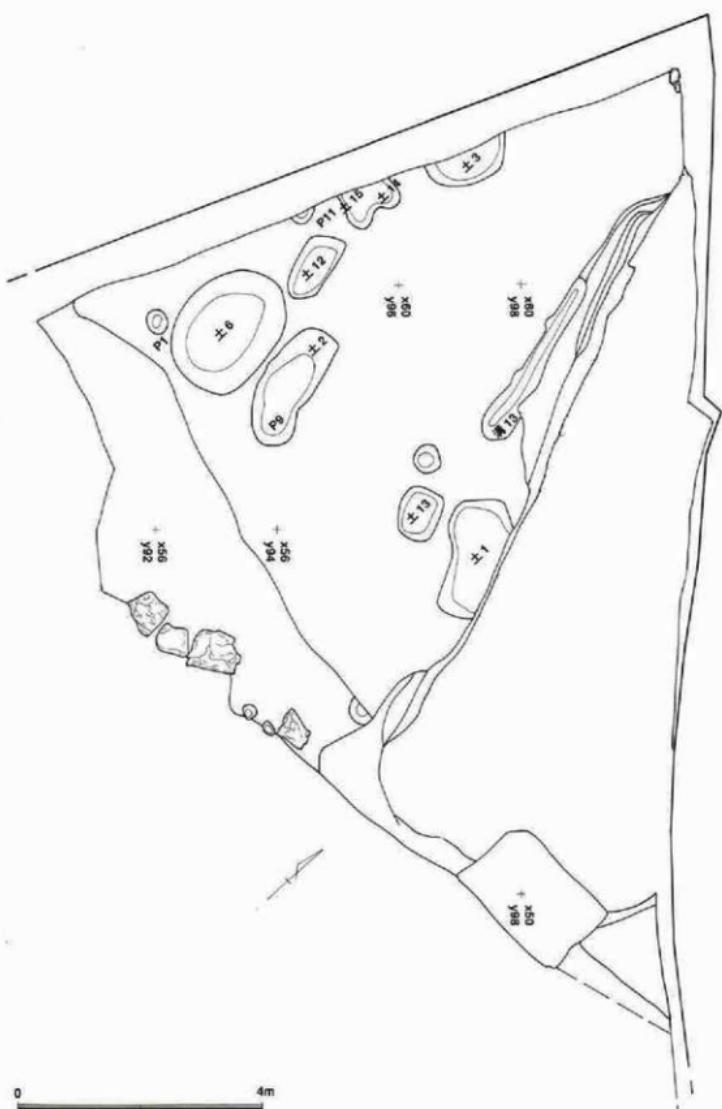


図7 2面造構配置図

溝13出土遺物(図9)

1～4は輪轆成形のかわらけで、1、2は大皿、3は中皿、4は小皿である。胎土は1、4は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、雲母、微砂を交え粗い。2、3は肌色系で、白針、赤茶色粒子、白色軟礫を含み、粉質が強く、キメ細かい。1は復元口径13.2cm、底径7.4cm、器高3.4cmを測る。体部は内湾し、底部は薄く作られ碁笥底氣味である。2は復元口径12.4cm、底径6.8cm、器高3.4cmを測る。1と同様に体部は内湾し、器肉は均一である。3は復元口径11.5cm、底径7.4cm、器高3.1cmを測る。口径、底径の比率が小さい。器肉は均一で、若干薄い。小皿の復元口径8cm、底径5.6cm、器高1.5cmを測る。器高が低く、浅い皿状である。

5は船載の白磁、口丸皿の体部～底部の部位である。底径6.9cmを測る。胎土は白色、釉調は不透明な灰色を呈し、光沢は良好である。

土壤1(図10)

x 55～57・y 97～98グリッド内に海拔21.6mで検出された。長軸200cm、短軸80cm、深さは確認面より30cmを測り、底部の海拔は21.3mである。覆土は黒色粘質土で、炭化物、土丹粒子、かわらけ碎片を含み、しまりがない。

土壤2(図10)

x 58～59・y 94～95グリッド内に海拔21.5mで検出された。南側はP-9と切りあい関係を持つ。長軸130cm、短軸90cmを測り、深さは確認面より28cmを測る。この土壤の覆土は茶褐色粘質土で炭化物、焼土を多く含み、若干鎌倉石碎片、土丹粒子が混入する。

土壤3(図10)

調査区西壁際、x 62～63・y 97～98グリッド内で、海拔21.8mで検出された。遺構の凡そ西半分は調査区外に抜がりを持つと推定される。遺存している堀方規模は長軸140cm、短軸56cmを測り、深さは確認面より34cmを測る。この土壤の覆土は暗茶色粘質土で炭化物、土丹粒子、玉石を含み、ややしまりをもつ。

土壤6(図10)

x 59～61・y 93～95グリッド内で、海拔21.5mで検出された。堀方規模は長軸220cm、短軸156cmを測り、深さは確認面より55cmを測る。平面形は梢円形である。この土壤の覆土は茶褐色土でやや砂質氣味で、炭化物、焼土が多量を含み、また、若干のかわらけ碎片、土丹粒子も見られ、しまりを持たない。また、覆土上層からは一括投棄されたかわらけが出土した。

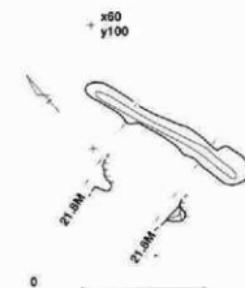


図8 溝13

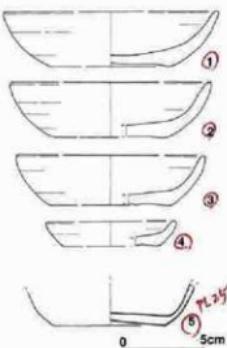


図9 溝13出土遺物

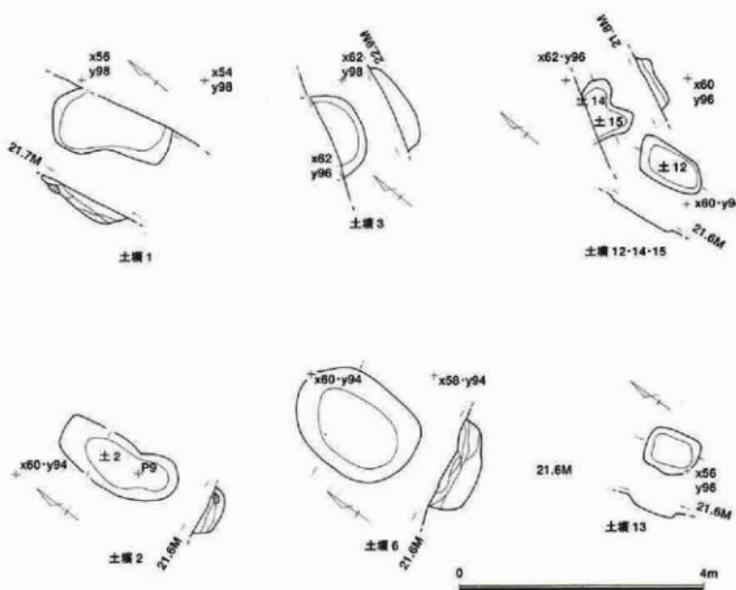


図10 土壌1～3・6・12～15

土壌12(図10)

$x 61 \cdot y 95$ グリッド内で、海拔21.5mで検出された。堀方規模は長軸117cm、短軸60cmを測り、深さは確認面より14cmを測る。浅い落ち込み状を呈する土壌で、側壁は若干開き気味に立ち上がる。平面形は隅丸方形である。

土壌13(図10)

$x 57 \cdot y 97$ グリッド内で、海拔21.5mで検出された。堀方規模は長軸91cm、短軸70cmを測り、深さは確認面より14cmを測る。浅い落ち込み状である。側壁は真っ直ぐに立ち上がるが、北側は若干開き気味である。平面形は隅丸方形である。

土壌14・15(図10)

調査区西壁際、 $x 62 \cdot y 96$ グリッド内で、海拔21.7mできり合い関係を持って検出された。この土壌群の西側は調査区外西に広がる様相である。遺存した堀方規模は長軸98cm、短軸66cmを測り、深さは確認面より20cmを測る。この土壌群の覆土は上層が粉碎土丹層、下層が炭層でしまりは非常に悪い。

土壌1出土遺物(図11-1～5)

1～3は輥轆成形のかわらけの小皿である。復元口径は7.8～8cm、底径4.9～5.9cm、器高1.5～1.9cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、白色軟謫、雲母を含む。器肉は均一で、丁寧な成形である。

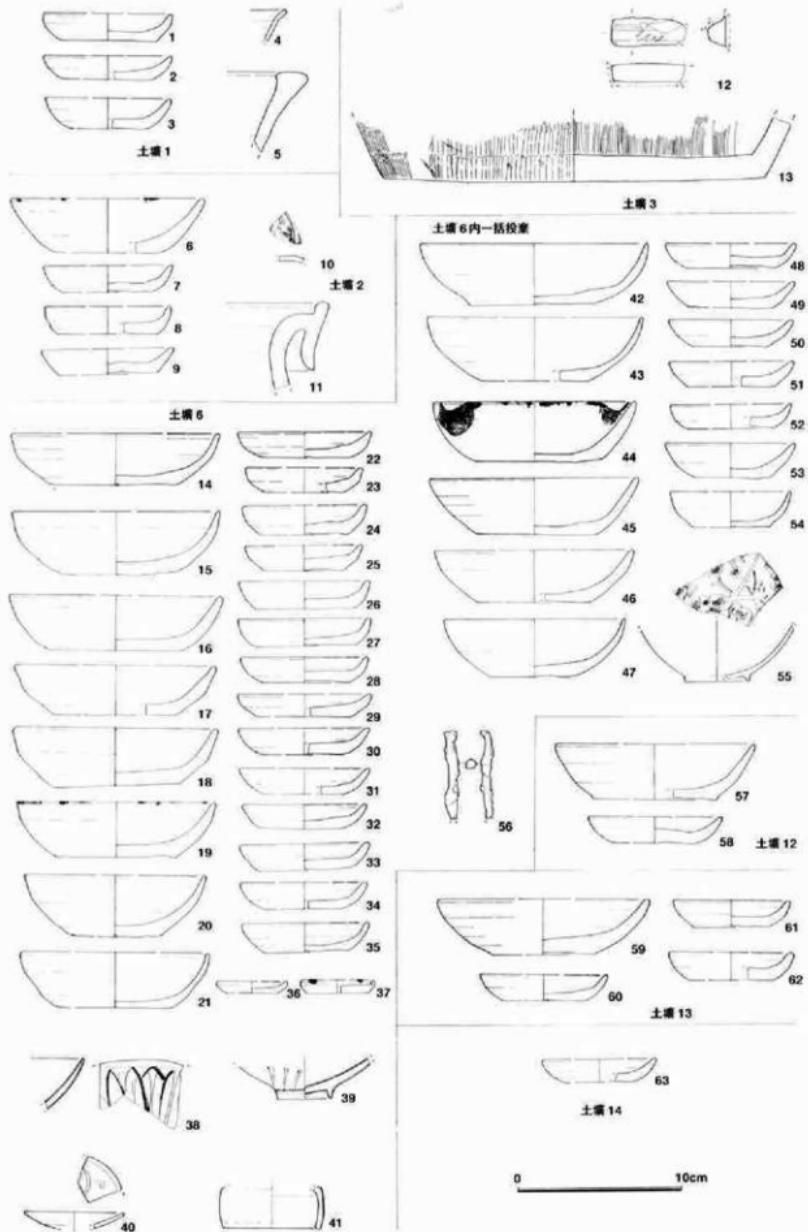


図11 土器1～3・6・12～14出土遺物

4は東濃型山茶碗の口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、堅緻である。口縁部内面に軽く降灰している。

5は瓦質鉢型手焼りの口縁部の小片である。胎土は白桃色を呈し、雲母、赤茶色粒子、黒色粒子を含む。口縁端部は内傾し、鉤型を呈する。

土壤2遺物(図11-6~11)

6~9は轆轤成形のかわらけで、6は大皿、7~9は小皿である。胎土は淡燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、白色粒子、白色軟疊、雲母を含む。焼成は良好である。大皿の復元口径は12cm、底径6.5cm、器高3.3cmを測る。灯明皿である。小皿の復元口径は7.8~8.2cm、底径5.5~6.2cm、器高1.6cmを測る。器肉は均一で、5~7mmと薄手である。8は再火を受け若干火脹れを起こし器肉が厚味をもつ。

10は舶載の青白磁、合子の蓋の小片である。胎土は灰味白色を呈し、黒色粒子を混入する。釉調は濃水青色を呈する。透明度高く、光沢は良好である。頭頂部に印花の草花文を有する。

11は常滑の甕、口縁部の小片である。縁帶幅4.2cmを測る。胎土は淡灰燈色を呈し、長石、小石を含む。器表の発色は暗赤褐色である。中野編年7型式である。

土壤3出土遺物(図11-12、13)

12は滑石鍋の加工品の断片である。鋸部を転用している。遺存した長さは4.6cm、幅1.8cm、厚さ1.2cmを測る。端部に一部、研磨痕が観察される。

13は滑石鍋の底部である。底径23.4cmを測る。体部外面には幅3mmの丸巻の痕跡が顕著である。

土壤6出土遺物(図11-14~56)

14~37は轆轤成形のかわらけで、14~19は大皿、20、21は中皿、22~35は小皿、36、37は内折れの小皿である。胎土は淡燈色を呈し、白針、黒色粒子、雲母、白色軟疊を含む。大皿の復元口径は12.2~13.2cm、底径7.2~8.2cm、器高3.0~3.9cm、中皿の復元口径は11.2~11.6cm、底径5.8~6.4cm、器高3.4~3.8cm、小皿の復元口径は7.2~8.2cm、底径4.6~6.1cm、器高1.4~1.8cmを測る。14、15、20、21は薄手丸深である。16、27は口径、底径比の小さいタイプ、17~19、22~24、27~29は腰がすぼまり、底径が縮小化する。31~35は器肉の薄手化の傾向がみられる。内折れかわらけは36が復元口径4.4cm、底径3.2cm、器高0.7cm、37は復元口径4.3cm、底径3.8cm、器高0.8cmを測る。32は口唇端部が若干内側に折れる。19、37は灯明皿である。

38~41は舶載の磁器である。38、39は龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。38は口縁部である。胎土は灰白色を呈し、ガス孔が観察される。釉調は緑青色を呈し、光沢は良好である。39は底部である。底径3.3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、釉調は緑灰色を呈し、光沢がある。高台置付は露胎である。40、41は青白磁である。40は小皿である。復元口径6.2cmを測る。胎土は灰味白色を呈し、黒色粒子を混入する。釉調は濃水青色を呈し、光沢は良好である。体部外面下半は露胎である。41は梅瓶の蓋である。復元口径6cmを測る。胎土は灰味白色を呈し、黒色粒子を混入する。釉調は青灰色を呈し、光沢はある。体部内面及び、口縁部は露胎である。

42~56は北壁際に一括して出土した遺物群である。42~54は轆轤成形のかわらけで、42~46は大皿、47は中皿、48~54は小皿である。

大皿の復元口径は12.2~14cm、底径6.9~7.7cm、器高3.2~3.9cm、中皿の口径は11.1cm、底径5.4cm、

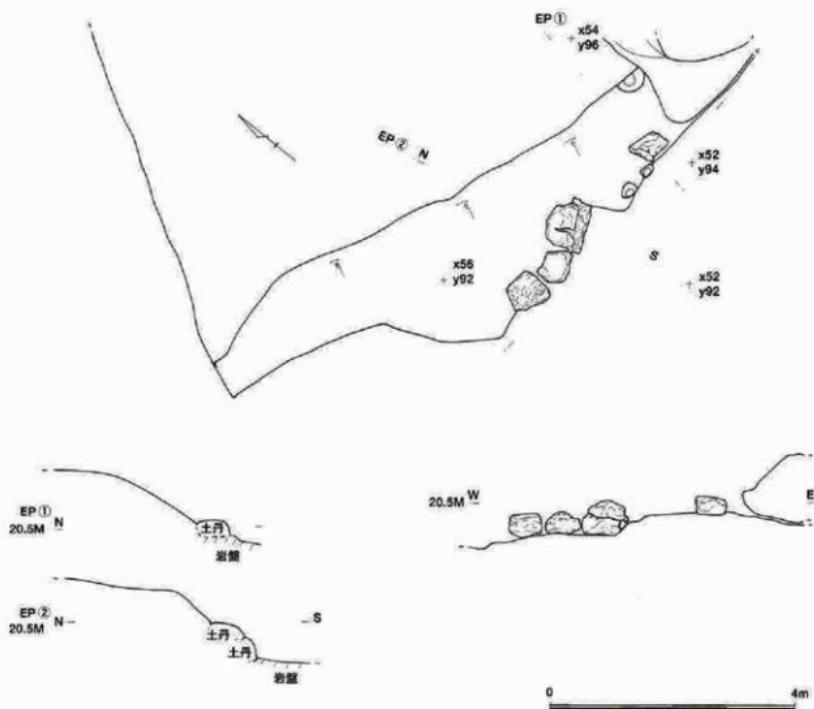


図12 土留め

器高3.5cm、小皿の復元口径は7.4~8cm、底径4.8~5.4cm、器高1.5~2.2cmを測る。胎土は肌色系、或いは燈色系を呈し、白針、白色粒子、黒色粒子、白色軟疊、雲母を含み、焼成は概ね良好である。42、43、47、54は薄手丸深である。44、48は口径、底径比が小さいが、全体的に縮小化の傾向にある。45、46、49~51、53は腰がすぼまり、底径が小さくなる。44は灯明皿である。

55は舶載の白磁の碗である。復元底径4cmを測る。胎土は白色、釉調は青味白色を呈し、光沢は良好である。

56は鉄製品、釘である。端部が欠損しており、遺存した長さは5.4cmである。太さは7×7mmで断面形は方形である。

土壤12出土遺物(図11-57、58)

57、58は輪轉成形の大皿と小皿である。胎土は肌色系を呈し、白針、黒色粒子、白色軟疊、赤茶色粒子を含む。大皿の復元口径は12.2cm、底径7.6cm、器高3.4cmを測る。底部が若干張り出し、体部は底部際に若干の丸みを残して、口縁部に向かって真っ直ぐに開く。小皿は口径8.2cm、底径4.8cm、器高1.7cmを測る。口径、底径比が大きいが器肉が6~8mmと厚く、口唇端部は細く尖り外反する。

土壤13出土遺物(図11-59~62)

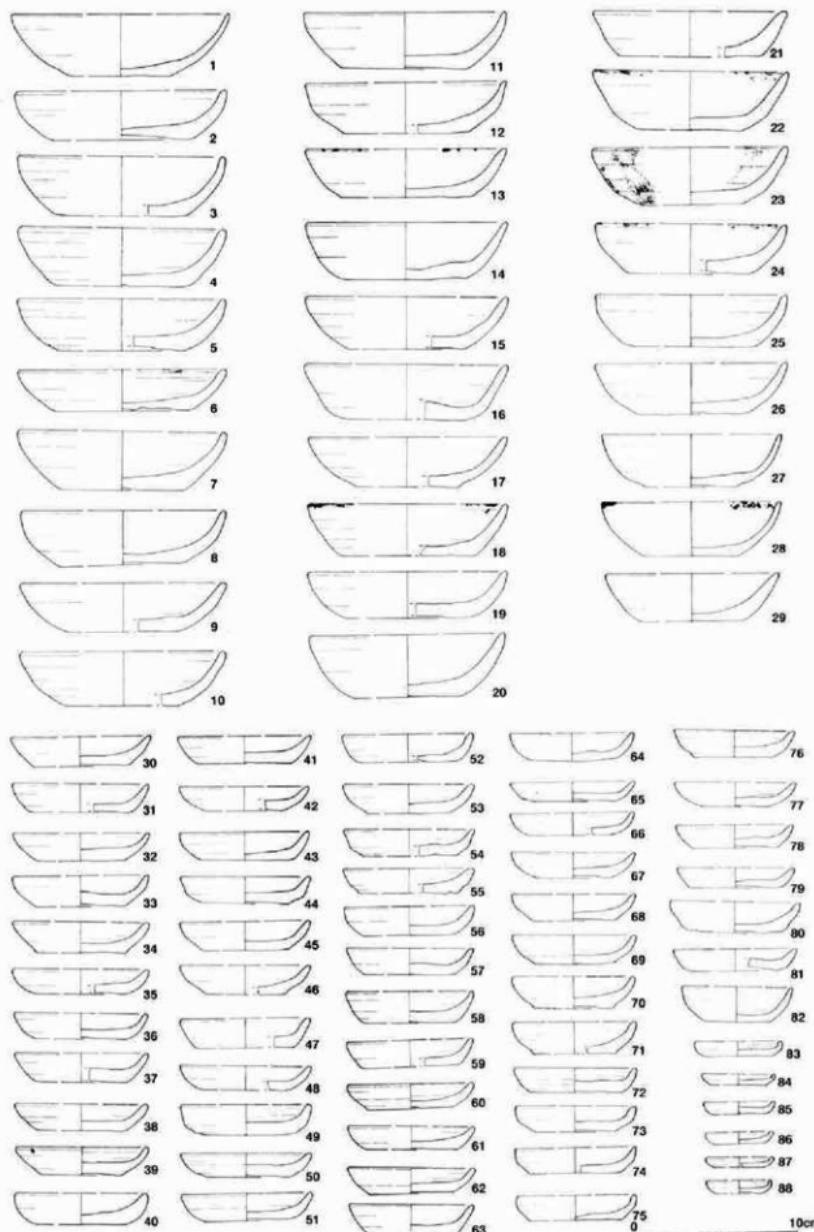


图13 2面出土遗物(1)

59~62は輥輪成形のかわらけで、59は大皿、60~62は小皿である。胎土は燈色系で、白針、赤茶色粒子、黒色粒子、白色軟礫、雲母を含む。61は肌色系で赤茶色粒子を含まない。大皿の復元口径は13cm、底径6.2cm、器高3.4cmを測る。底部内面の横なでが強く、中央は凹み、体部は丸みを保ちつつ開き気味に立ち上がるが、口唇端部は直進気味である。小皿の復元口径は7.2~7.8cm、底径4.5~5.0cm、器高1.6~1.7cmを測る。口径は縮小化し、器肉が薄手化する。開いて立ち上がる体部は中央から若干直進気味に立ち上がる。

土壙14出土遺物(図11~63)

63は輥輪成形のかわらけの小皿である。復元口径は7cm、底径4.4cm、器高1.4cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、雲母、白色粒子、赤茶色粒子を含む。体部は底部際に丸みを残しつつ口縁部に向かって真っ直ぐに立ち上がる。

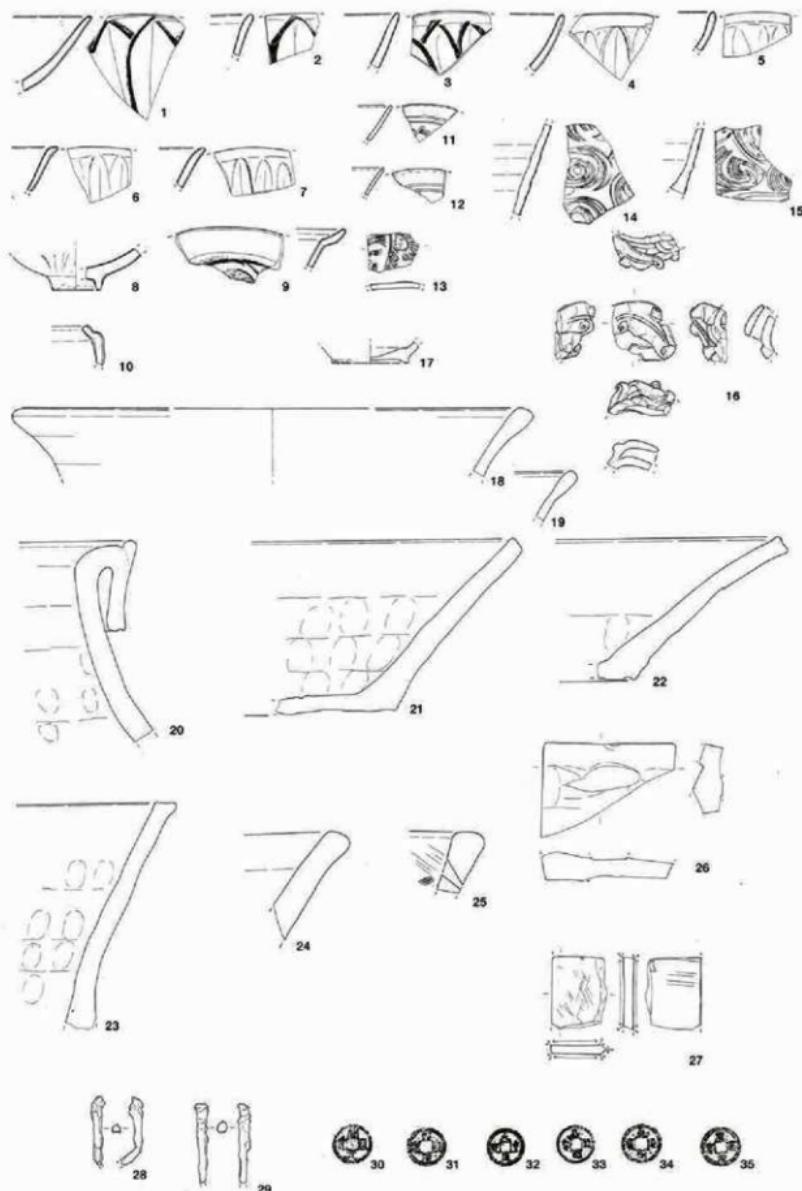
土留め(図12)

2面は直径10~40cmの鎌倉石碎片を密に版築して造成された。遺存したのは南北9.9m、東西8.7m、面積43m²で、平面形は三角形を呈する。版築された鎌倉石碎片は凡そ2mの堆積を持ち、南側と西側はなだらかな斜面となる。南側の裾には土丹塊が5個遺存していた。50~80cm、厚さ30~40cmの土丹塊で、その石塊を石垣状に組んでいる。恐らく、南側、西側の両斜面全体に大型土丹塊を積み上げて土留めとしたと予想される。石塊、及び、積み方に規格性は認められない。遺構面~山裾までの比高差は最高で110cmを測る。

2面出土遺物(図13、14)

図13は輥輪成形のかわらけである。1~26は大皿、27~29は中皿、30~82は小皿、83~88は内折れの小皿である。大皿の復元口径は12~13.4cm、底径6.3~8.8cm、器高2.8~3.8cm、中皿の復元口径は10.6~11cm、底径5.6~6.2cm、器高3.1~3.3cm、小皿の復元口径は6.8~8.6cm、底径4~6cm、器高1.5~2cmを測る。内折れの小皿の復元口径は4~5.4cm、底径2.6~4.1cm、器高0.6~0.9cmである。胎土は肌色、若しくは燈色を呈し、雲母、白色軟礫、白針、赤茶色粒子を含む。大皿は腰がすぼまった器型が主流を占める。1、27、28、82は薄手丸深の器種である。1の胎土は肌色、27、28、82は燈色を呈し、キメ細かい精良土である。28は赤茶色粒子の混入が多い。2、6、13、25は口径、底径比が小さく古様式を留めるが、器肉が薄く、全般的に縮小化の傾向にある。16は体部が内湾せず直線的に開いて立ち上がり新傾向を示し、上層の混入と判断される。小皿の体部は底部から開いて立ち上がり、体部中央から直進するタイプが主流である。40、49は器肉が厚く、側面観は若干異なるが、器型としては同類である。6、13、18、22、23、28は灯明皿である。

図14、1~16は舶載の磁器である。1~10は青磁である。1~8は龍泉窯系の蓮弁文碗である。1~7は口縁部の小片、8は底部である。1の胎土は暗灰色を呈し、白色粒子を若干含む。釉調は不透明な緑灰色を呈し、光沢は若干ある。内面に、斜め、及び横方向の擦過痕が観察される。2、3の胎土は青味白色、釉調は不透明な淡灰緑色を呈する。光沢は良好である。4の胎土は白色で、若干ガス孔が観察される。釉調は青味の灰緑色を呈し、光沢は良好である。内外面共に粗く貫入する。5の胎土は青味白色、釉調は緑青色を呈し、釉調内は白濁しており、光沢は有る。器表の貫入が内外面共に顕著である。口唇部は内湾する。6の胎土は白色を呈し、黒色粒子が混入する。釉調は灰青色、光沢は良好である。



0
10cm
图14 2面出土遗物(2)

器表の内外面は粗く貫入する。口唇端部は端反る。7の胎土は暗灰色を呈し、ガス孔が観察される。釉調は緑灰色、光沢は良好である。表面に粗く貫入する。8の復元底径は3cmを測る。胎土は青味白色を呈し、黒色粒子を混入する。釉調は緑灰色、光沢が若干ある。高台疊付きは露胎である。9は鉢、または皿の口縁部の小片である。胎土は白色、釉調は緑青を呈する。器表に気孔が若干観察されまた、粗く貫入する。内面に文様が観察される。10は小壺の口縁部の小片である。胎土は灰白色、釉調は緑青色を呈する。光沢良い。緩く貫入する。口縁部は露胎であり、蓋受けであると想定される。11～13は白磁である。11、12は碗、または皿の口縁部の破片である。胎土は白色、11の釉調は灰白色、12は緑白色を呈する。共に口唇端部は口兀で、体部内面は印花の、二重線、その下に草花文を配する。13は合子の蓋頭頂部の破片である。胎土は白色で、茶色粒子を含む。釉調は緑白色、光沢は良好である。文様は草花文である。14～16は青白磁である。14、15は梅瓶の体部の破片である。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。釉調は灰味水青色、光沢は良好である。表面は粗く貫入する。文様は唐草文である。16は觀音像あるいは人形等の頭部の一部と考えられる。胎土は白色で粘性がある。釉調は水青色、光沢は若干劣る。カール部分は貼り付けて製作されている。

17は山茶碗の底部である。復元底径は4.8cmを測る。胎土は灰褐色を呈し、若干粘性を帯びる。底部内面の横ナデが強く、中央部が窪む。底部外面には糸引き痕が、観察される。また、高台疊付きには初穀の上に置いた痕跡を残す。

18、19は山茶碗窯系捏鉢の口縁部である。18の復元口径は32cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石粒子を混入する。口唇端部は内面、及び外面の両方向からのナデが強く中央部が窪む。また、口縁部に厚く降灰している。19の胎土は暗灰色を呈し、1mm大の長石粒子を含む。内面に軽く降灰している。

20～23は常滑である。20は甕、21～23は鉢である。20の胎土は茶燈色を呈し、0.1～3cm大の長石、小石、赤茶色軟繩を含む。器表の発色は暗赤褐色を呈する。縁帶幅は5.6cm、中野編年8型式である。21の胎土は暗灰色を呈し、1mm大の長石を含む。器表の発色は暗紫褐色で、口縁部内面に薄く降灰している。口縁部は横なで成形、体部は指頭による調整である。また、底部外面は砂底である。22は注口部付近の部位である。胎土は暗灰色～暗燈色を呈し、1mm大の長石、2mm大の石英を含む。器表の発色は暗紫褐色、内面全体に軽く降灰している。23の胎土及び、器表は燈色を呈する。胎土中には0.1～1mm大の長石が含まれる。口縁部は横なで調整、体部内面は指頭による調整、外面は工具による縱方向の調整である。

24、25は瓦質鉢型手焙りで、共に口縁部の小片である。24は茶褐色を呈し、長石、黒色粒子、雲母を含む。25は灰黒色を呈し、赤茶色粒子、黒色粒子、雲母を含む。口縁部に内側から外側方向に直径1～0.3cmの孔を穿つ。内面は斜め方向のナデ調整である。

26、27は石製品である。26は硯の断片である。側縁～ムコウブチ、海部の部位である。海部の形状は四葉状になると想定される。27は砥石である。鳴滝産の仕上げ砥である。

28、29は鉄製品、釘である。端部が欠損しており、全長は不明であるが、太さは5mm四方の方形である。

30～35は錢である。30は唐錢・開元通宝、31～35は北宋錢・31は天聖元宝、32は元豐通宝、33は景祐元宝、34、35は嘉祐通宝である。

岩盤上検出遺構群(図15)

本遺跡地は、表土を取り除くと、南側地域、東側地域、北側地域では岩盤が検出された。南側地域は

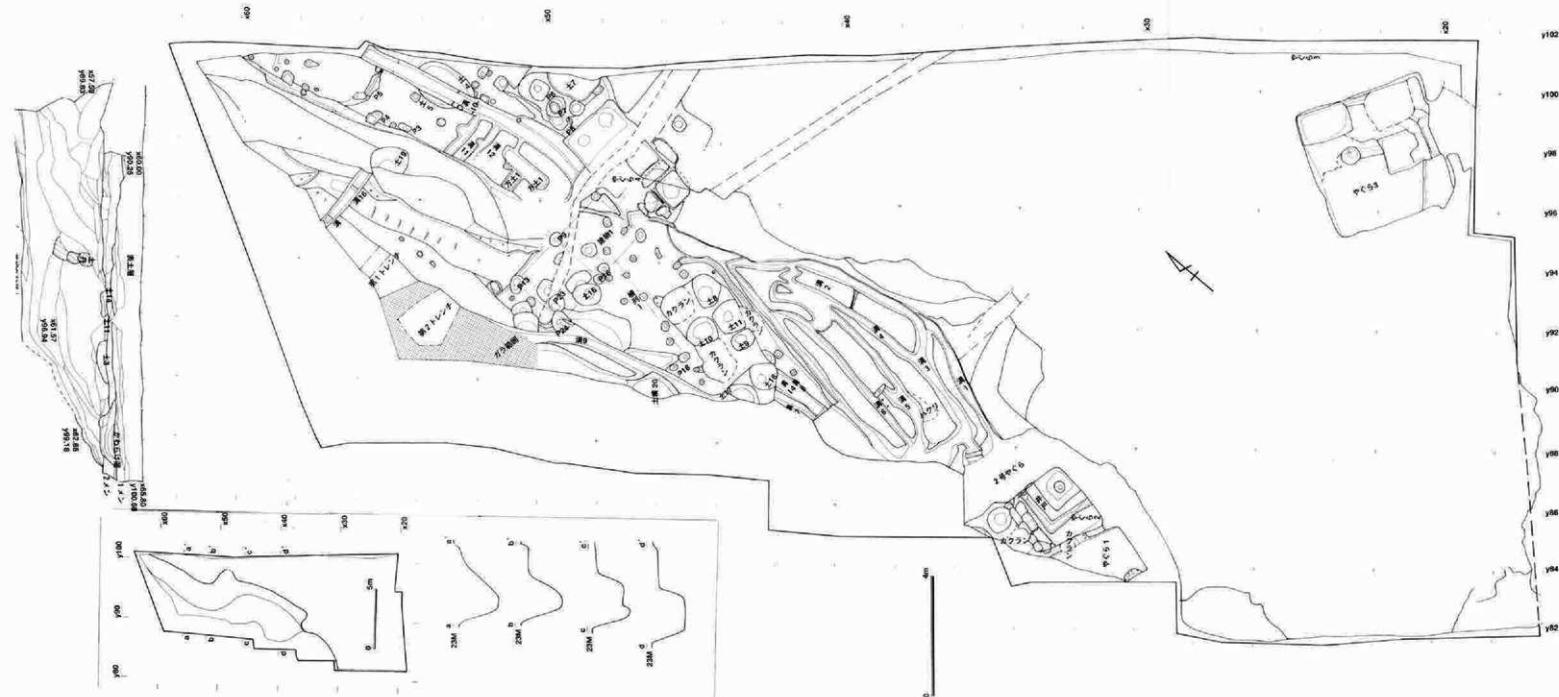


図15 岩盤上検出遺構

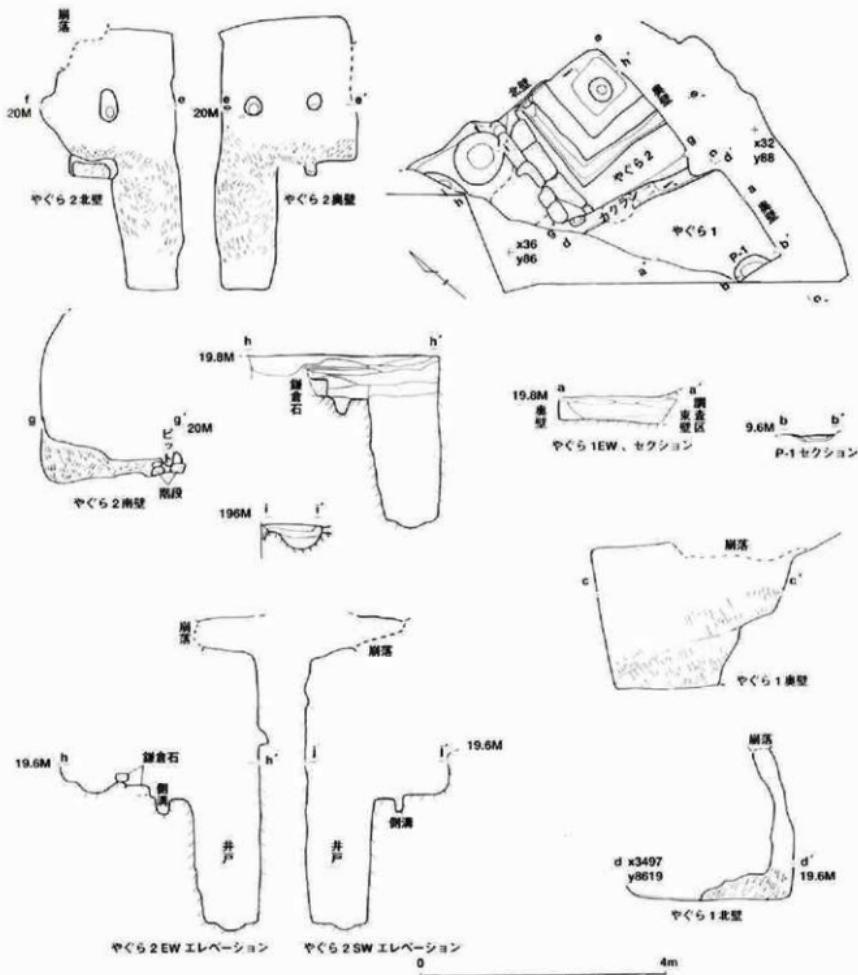


図16 やぐら1・2

2 mの落差を持って、急激に落ち込んで、谷状の地形を形成する。また、前述した北西部においては鎌倉石碎片で版築した2枚の遺構面下に岩盤が検出された。出土遺物は少なく、時期の特定が不可能な遺構もあるが、本節では岩盤上から検出され遺構群をまとめてここに述べる。

検出されたのはやぐら4基、溝12条、土壙12基、方形土壙1基、道路状遺構1である。以下、各々の検出遺構と出土遺物の説明する。

やぐら 1(図16)

x 29~31・y 86~88グリッドに海拔21.4mで検出された、西側に開口するやぐらである。天井、開口部、南壁、北壁、床面の大半が近代以降の掘平を受けており、遺存状態は非常に悪い。奥壁は高さ238cm、幅178cm、また、北壁は幅200cm、高さは200cmが遺存していた。奥壁の高さのみが原状である。奥壁、北壁は中央部から下部にかけて、疊痕が明瞭に観察される。床面の海拔は19.5mである。遺存したのは東西250cm、南北180cmで、床面はさらに西方向に延びる様相である。遺存状況から床面は方形になると想定される。また、床面にはピットの北半分が検出された。直径65cmの円形になると予想され、深さは床面より10cmである。ピットの覆土は上層が黒青色粘土で、土丹を混入し、下層は黄色味を帯びた焦茶色粘土で、鎌倉石碎片を混入し、概ねしまらない。

本やぐらの覆土は概ね近代以降の埋め土で、中世の覆土は下層40cm前後である。中世期の覆土は凡そが茶褐色粘質土で、土丹粒子、炭化物、かわらけ碎片を含み、また、最下層は粘性の強い青灰色粘土で、小石、炭化物が混入する。全般的にしまりをもたない覆土である。

このやぐらの東西の軸方向はN-114°-Eである。

やぐら 2(図16)

x 33~36・y 87~90グリッドに、海拔21.4mで検出された西側に開口するやぐらである。このやぐらの奥壁はほぼオリジナルの様相を留めているが、それ以外は大きく搅乱を受けている。奥壁は幅210cm、高さ240cm、北壁は幅220cm、高さ240cmを測る。奥壁に2口、北壁1口、壁面中央部に直径20~30cm、深さ15cmのピットが穿たれている。

床面は海拔19.1mで最大では東西352cm、南北235cmを測り、平面形は長方形を呈する。床面から井戸、及び井戸を周る溝、及び、階段が検出された。井戸は北東隅に検出され、堀方規模は120×120cm、床面からの深さは210cmを測る。井戸底部は60cmの方形を呈し、また、中央部に水溜めが検出された。直径40cmの円形で、深さは8~10cmである。井戸の覆土は黒青灰色砂質土で、直径2cm大の土丹を含みしまりはない。

井戸から30cm離れて位置する溝は幅16~28cm、深さ22~24cmを測る。井戸の周溝とも思われるが、用途、目的は不明である。覆土は黒青灰色砂質土で直径7cm大の土丹を含みしまりはない。

鎌倉石切石を使用した2段の階段は南北の長さ190cmを測り、各段共に4個の切石が使用されている。鎌倉石切石の大きさは長軸40~70、短軸20~30cm、厚さ15~18cmで、規格性はない。井戸、溝、階段は後世に造作されたものと考えられる。

階段西側からにはピットが東西方向に並んで2口検出された。やぐら床面ではよく検出される桶鉢状のピットが並んでいたものと予想される。ピットは直径80cmの円形を呈し、深さは床面より40cmを測る。階段下から検出されており、階段を構築した時期よりは古い。

本やぐらもやぐら1同様、オリジナルの覆土は下層40cm前後である。上層は黒褐色粘土層、中層は土丹層、下層は暗青灰色砂質土層でしまりはない。このやぐらの東西の軸方向はN-102°-Eである。

やぐら 2出土遺物(図17)

1~13は覆土上層から出土した遺物である。

1は瀬戸、灰釉瓶子類の口縁部の小片である。胎土は灰白色を呈し、比較的粘性があり、精緻である。再火を受けており、器表は爛れている。2は滑石製品の未加工品である。方形に切り出している。

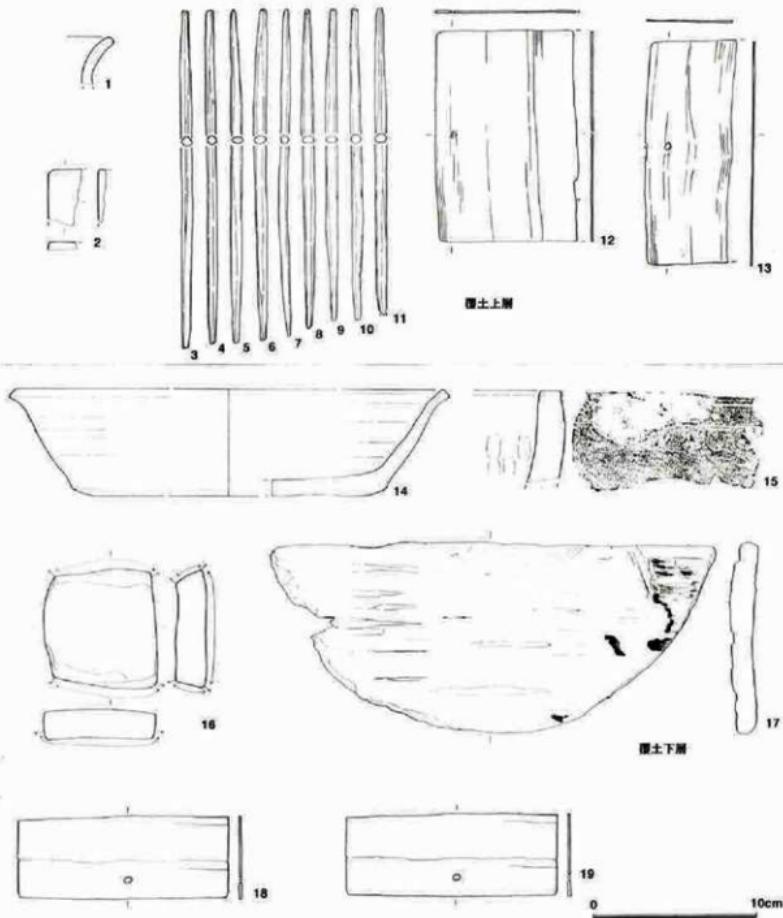


図17 やぐら2出土遺物

3~13は木製品である。3~11は箸状木製品である。全長19.2~21cm、 6×5 mm前後の太さである。12、13は折敷の断片である。長さ13~13.6cm、厚さ1 mm前後である。

14~17は下層(暗青灰色砂質土)から出土した遺物である。

14は漬戸、灰釉折縁深皿である。復元口径27.4cm、底径19.2cm、器高6.6cmを測る。胎土は灰色、釉調は灰緑色を呈する。器表の貫入が顕著である。内底面に重ね焼きの痕跡が2箇所に観察される。

15は瓦質手焼きの口縁部である。胎土は白色を呈し、白色粒子、茶色粒子を混入し、比較的精緻である。器表の発色は白色、横方向の磨きが施されている。8弁の菊花文の上下に沈線を巡らし、その下に、珠文を貼付している。

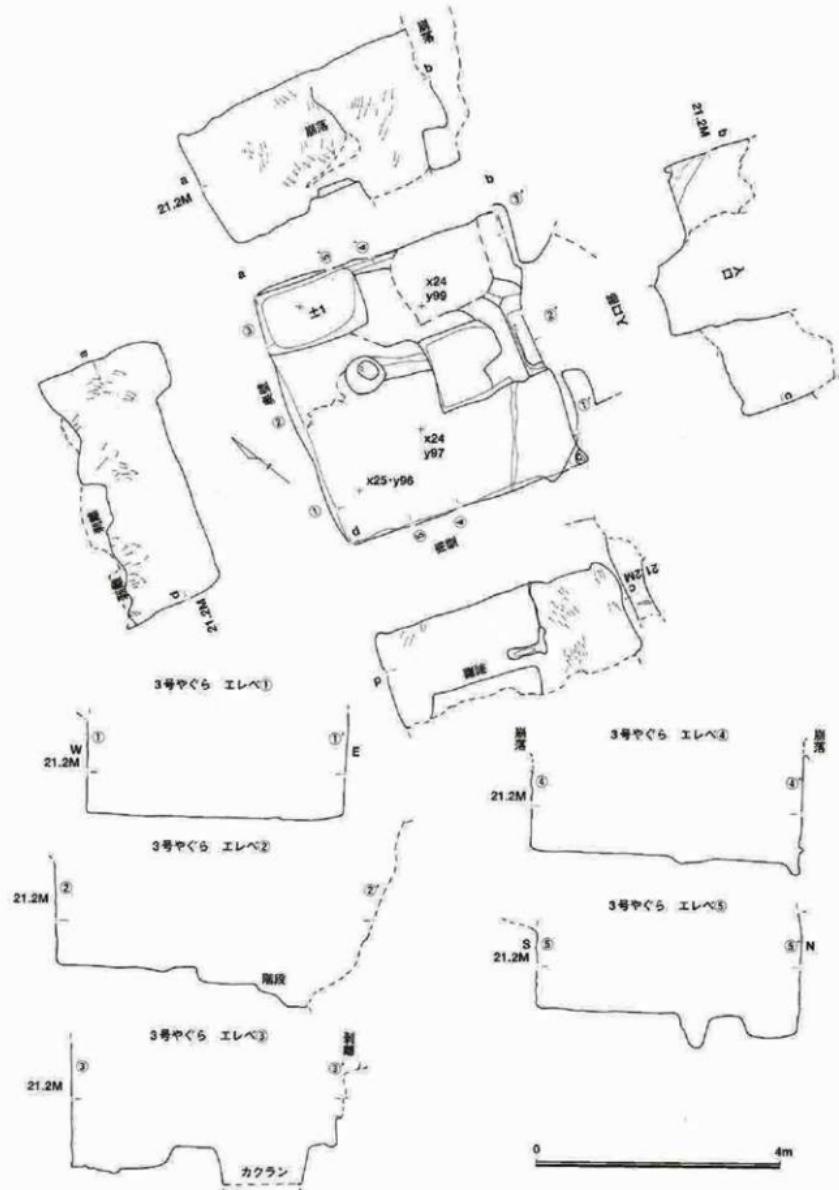


図18 やぐら3

16は研磨された常滑の窓の頭部片である。17~19は木製品である。17は底板である。直径27.4cm、厚さ1.6cmを測る。端部に墨が付着している。18、19は折敷の断片である。長さ13cm、厚さ1mm前後である。

やぐら3(図18)

x 23~26・y 96~100グリッドに、海拔22.2mで、開口部をやや北寄りの東側に向けて検出された。表土直下に検出されており、天井部、開口部は搅乱を受けている。北壁、及び南壁の幅410cm、西壁は幅420、高さは北壁から210cmと判断される。開口部の幅は130~180cmである。玄室、羨道部間には階段が付く。2段が検出され、段差は20cmである。

床面は428×410cmを測り、平面形は正方形に近い。面積は17.5m²である。床面は後世にかなりの搅乱を受けており、原状を留めていない。北西隅に検出された方形の落ち込みは、長軸130cm、短軸110cm、深さ32~42cmを測る。検出状況からは原状か否かは不明である。このやぐらの東西の軸方向はN-120°-Eである。

やぐら3出土遺物(図19)

1は輦輪成形のかわらけの小皿である。復元口径8.1cm、底径5.8cm、器高1.9cmを測る。胎土は肌色を呈し、白針、赤茶色粒子、雲母、黒色微粒子を含む。内底面の横なでが強く、内面は澗曲気味である。

2は船載の青磁の鉢、または皿の口縁部の小片である。胎土は青味の白色、釉調は灰味緑色を呈する。光沢は若干ある。器表の凹入は細かく顕著である。

3は瀬戸、入子の底部である。復元底径は4cmを測る。胎土は灰色を呈し精緻である。内面底部際に若干下降している。底部外面は窓切り調整である。

4は研磨痕のある常滑片である。三角形を呈し、3辺全部使用されている。

5は平瓦である。器厚1.7cmを測る。胎土は白色を呈し、黒色粒子を混入する。器表全体に黒色砂粒が付着しており、凸面に微かに斜め格子叩き文が残る。

やぐら4(図20)

x 46~52・y 96~98グリッドに海拔22mで、開口部を南側に向けて検出された。このやぐらの中央部は近代期の下水溝埋設工事のため分断されており、北側と南側に分かれて検出された。北側は鎌倉石切石を3段重ねて、閉塞石として開口部分を塞いでいた。鎌倉石切石は60~110×40~60×45~60cmを測り、規格性はなく、適当な大きさの廃材の切石を転用して、閉塞石にしたものと予想される。南側はそのような施設は検出されず、直径30cm前後の大型土丹塊を含んだ茶褐色砂質土で埋められていた。近代期の埋設工事時にやぐらは閉塞されたと想定される。

このやぐらは天井部、開口部、西壁は削平されており、原状は掴めないが、x 46~y 96グリッドに検出された溝が、その様相から壁際の周溝と考えられ、そのあたりが西限を示すと推測される。床面の平面形は、開口部から奥壁方向を長軸とする長方形を呈する。遺存したのは長軸480cm、短軸210cmである。

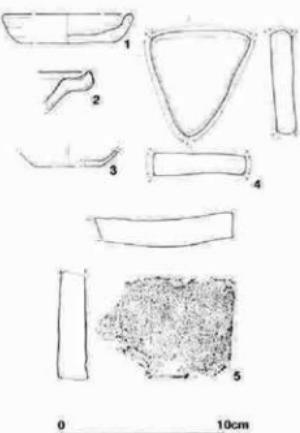


図19 やぐら3出土遺物

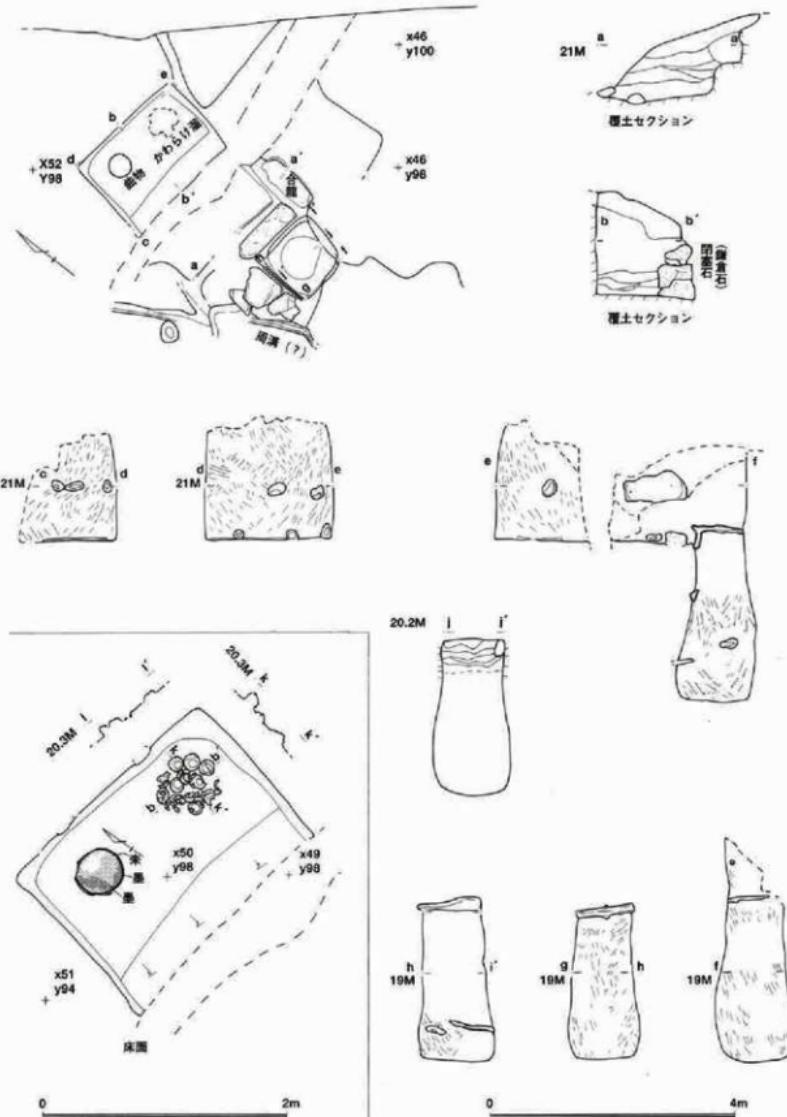


図20 やぐら4

遺存状態の良好な奥壁には墨痕が明瞭である。また、東壁には南北100cm、東西30cm、奥行40cmの龕が遺存する。検出状況から開墾時の施設であろうと想定される。また、奥壁際の床面には、西側に、曲物、東側にかわらけ群が並列して置かれていた。曲物は、直径48cmを測り、検出時は埋土が混入していた。埋土中には特筆すべき混入物はなく、埋土を除くと、底板が確認された。板面は朱に染められ、また、部分的に朱の上に墨を塗った様相であった。東側のかわらけ群は2枚づつ重ねで、底部を上に向けて、直径60cmの円形になるように意図して置かれていた。検出状況からは意図は不明であるがやぐらの埋納儀礼であったと予想される。

また、開口部に近い位置に井戸が検出された。110cm四方の方形を呈し、深さは確認面より260cmを測る。素掘りであるが、最上部には井戸枠があったと想定される木片が、西辺から検出された。また、井戸の北側、及び西側には土丹の切石が敷設されており、水汲み時の足場であったとも推定される。井戸の覆土は上層が黒灰色砂質土、下層は青灰色の粗砂で、直径2~3cmの土丹塊を若干含む。この井戸は出土遺物から15世紀には廃棄されたと想定される。このやぐらの南北の軸方向はN-15°-Eである。

やぐら4出土遺物(図21~24)

1~4は楕円成形のかわらけで、1は大皿、2~4は小皿である。胎土は燈色、または肌色を呈し、白針、赤茶色粒子、白色軟疊を含み、粗い。2は若干の白針、赤茶色粒子、雲母を含むキメ細かい精良土である。大皿の復元口径は12.7cm、底径7.7cm、器高3.7cm、小皿の復元口径は7.2~7.3cm、底径4.7~5.2cm、器高1.5~2.2cmを測る。1、3、4は器高が高く、断面形が逆台形を呈する器型である。2は口径、底径比が小さく器高の低い皿型である。

5は船載の青白磁、碗の底部である。底径4cmを測る。胎土は白色、釉調は水青色を呈する。器表の貫入は細かく顯著である。底部外面は露胎で、削り出し高台である。また、底部内面に文様を刻く。

6~8は瀬戸の灰釉製品である。6は碗の口縁部の小片である。胎土は白褐色、釉調は淡黄灰色を呈する。体部、内面、外面共に器表の貫入は密である。また、気孔が多く観察される。7、8は鉢皿である。7は口縁部の小片である。胎土は暗灰色、釉調は茶灰色を呈する。8は体部の破片である。胎土は白褐色を呈し、軟質である。釉調は剥離しており、内面に若干、灰綠釉が観察される。

9~14は常滑の甕で、9~11は口縁部、12~14は底部である。9の胎土は灰色を呈し、直径1~2mmの大の長石粒子を含む。器表の発色は茶褐色で、また、縁帶幅は4cmを測る。中野編年7型式である。10の胎土は黒灰色を呈し、直径1~4mmの大の長石粒子を含む。器表の発色は暗赤褐色を呈する。縁帶幅5.5cmを測る。中野編年8型式である。11の胎土は黒灰色を呈し、直径1~2mmの大の長石粒子を含む。器表の発色は暗赤褐色を呈し、口縁部外面に厚く降灰している。縁帶幅5.8cmを測る。中野編年8型式である。12の復元口径は23cmを測る。胎土は灰色を呈し、小石、1mmの大の長石粒子を混入する。器表の発色は燈色味灰色で、内面に薄く降灰している。底部外面は砂底である。13の胎土は暗黒色を呈し、小石、砂粒、直径2~3mmの大の長石を混入する。内面の摩滅が顯著であり、捏鉢に転用したものと想定される。底部外面は砂底である。14の復元底径は13.2cmを測る。胎土は暗灰色直径1~5mmの大の長石を含む。器表の発色は赤紫色である。外面の成形は工具による斜め方向のなで上げ、また、底部外面は砂底である。内面は摩滅が顯著で、捏鉢に転用したと考えられる。

15は白かわらけの口縁部の小片である。胎土は白色を呈し、黒色微粒子を若干混入するキメ細かい精良土である。灯明皿である。

16、17は瓦質手焙りである。16の復元口径は41cm、底径33.2cm、器高12.2cmを測る。胎土は白色を呈

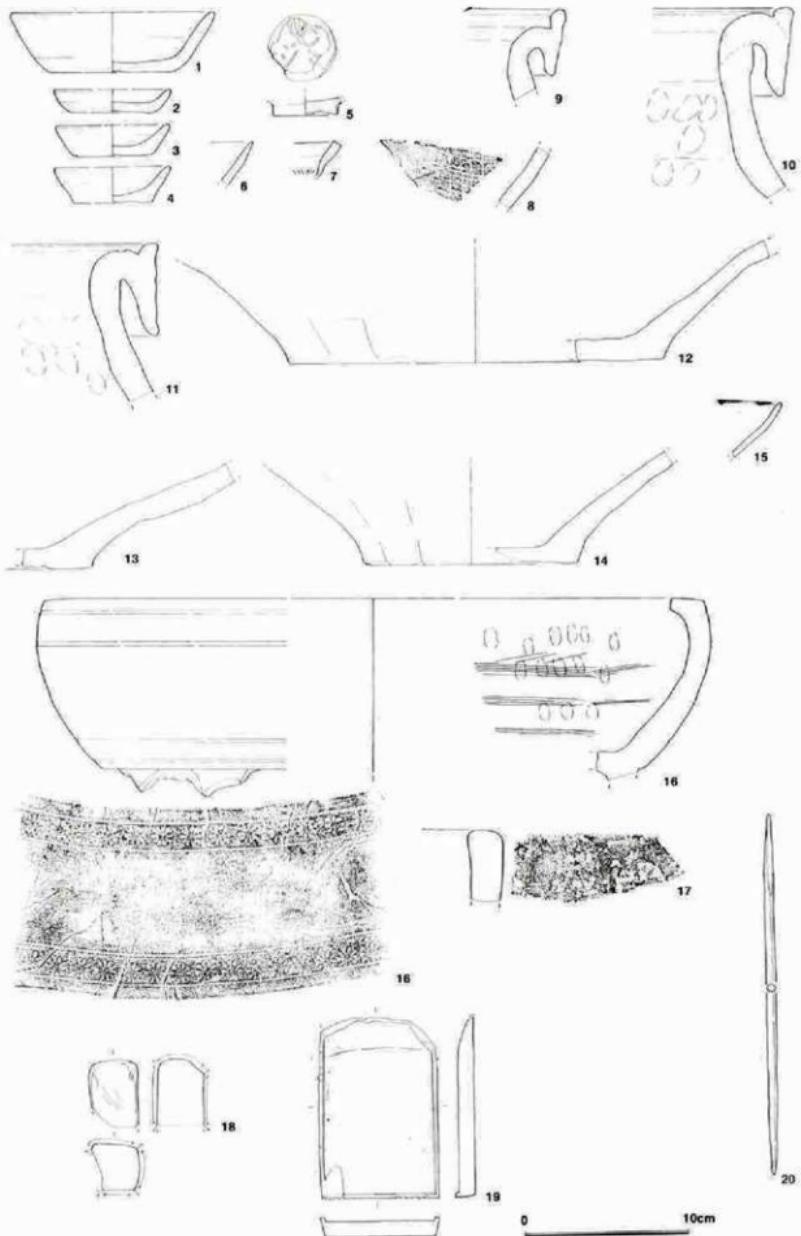


図21 やぐら4出土遺物(1)

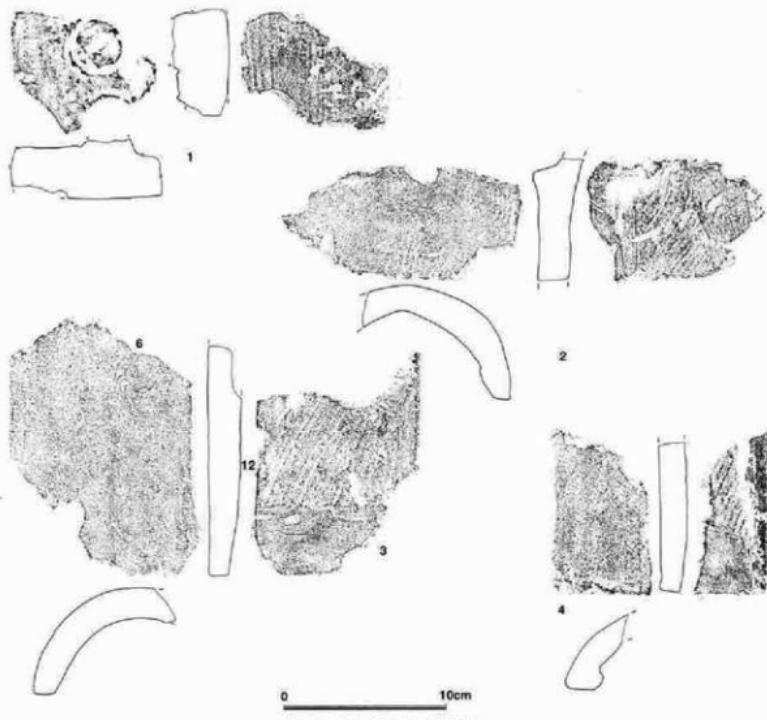


図22 やぐら4出土遺物(2)

し、黒色粒子、白色微粒子を混入する。還元焼成であり、また、口縁部、外面全体は横方向の磨き調整を行う。また、体部外面の上下に、沈線で境界線を設け、中に10弁の菊花文の連続スタンプ文を押捺する。17の胎土は桃灰色を呈し、長石、赤茶色粒子を含む。還元焼成である。器表は剥離、及び摩滅が顕著であるが、横方向の磨きの痕跡、また、16弁の菊花文のスタンプが1箇所に観察される。

18、19は石製品である。18は砥石である。流紋岩質凝灰岩で、灰緑色を呈する中砥である。上野産と予想される。19は硯である。海～ムコウブチが欠損している。幅7.2cm、厚さ1.2cmを測り、逆台形を呈する。赤茶色を呈し、器面全体が丁寧に磨かれている。陸部には墨がかなり浸透している。

20は箸状木製品である。長さ22.2cm、太さ5×4mmを測る。

図22、23は瓦である。図22—1は鬼瓦、2～4は丸瓦である。1は器高3cmを測る。胎土は青味白灰色を呈し、黒色粒子、白色粒子を混入する。直径3.3cmの珠文が1つ観察される。2は段部～筒部で、上端に玉縁部が付く。器厚2cm、高さ7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、白色粒子、黒色粒子、雲母を含み、比較的精緻である。器表は黒色で、凸面には細かい繩目叩き文、凹面には布目の圧痕が明瞭である。3、4は筒部の端部付近である。器厚2cm、高さ6cmを測る。胎土は青灰色を呈し、黒色粒子、茶色粒子、白色粒子を含み、若干粗い。凸面は剥離しており、凹面は布目痕、黒色砂粒が観察される。4の器厚は1.5cmを測る。胎土は桃灰色を呈し、長石、赤茶色粒子、を含み、比較的精良である。凸面は

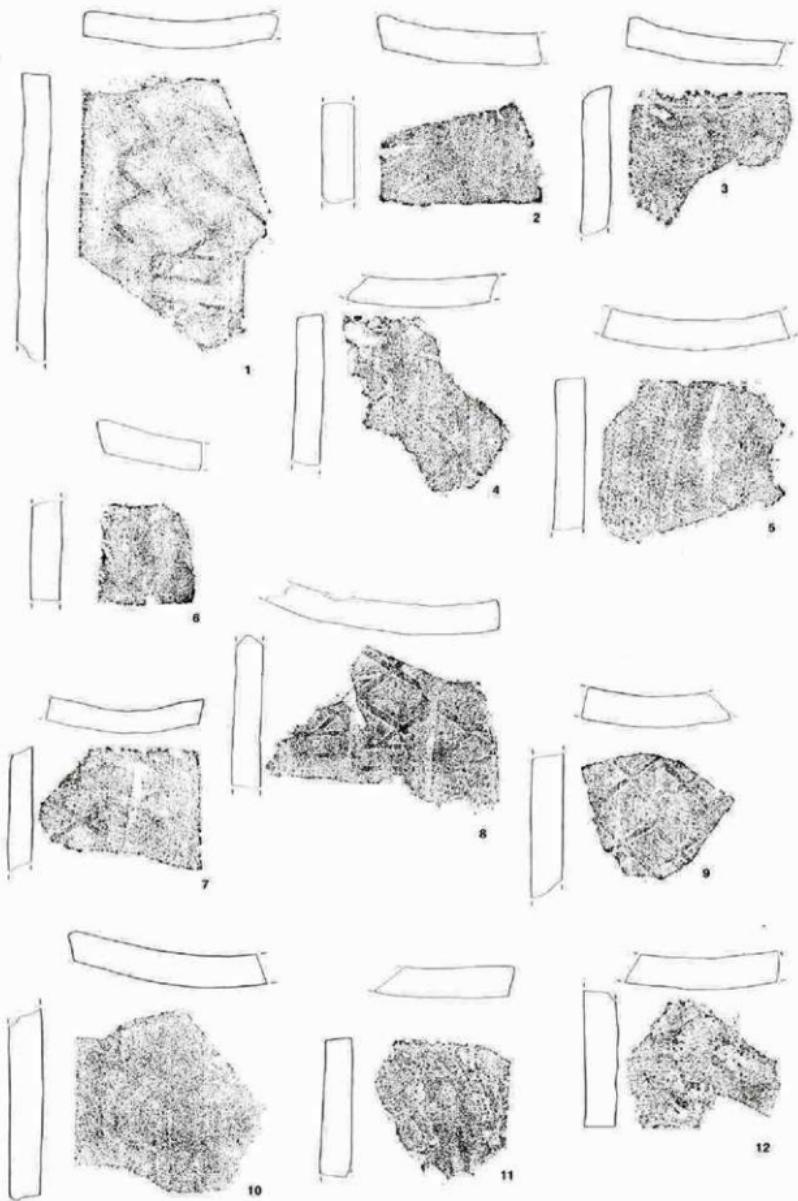


図23 やぐら4出土遺物(3)

撫でられ、凹面は布の圧痕が明瞭である。また、黒色砂粒が付着している。

図23は平瓦である。1は器高2.3cm、器厚1.7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。凸面は横方向の3本の凸線と斜め格子目との組み合わせの叩き目、凹面は撫でられ布目の圧痕はない。また、両面共に砂粒が多く付着している。2の器厚は2cmを測る。胎土は黒灰色を呈し、直径1~2mm大の長石を若干含む。両面共に丁寧な縦方向のなで成形がなされている。凸面に砂粒が多く付着している。3の器厚は1.7cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石粒子、黒色粒子を含む。両面共に縦方向のなで調整で、また、黒色砂粒が多く付着している。4の器厚は1.7cm、5の器厚は1.9cmを測る。4、5の胎土は燈色を呈し、小石、長石、赤茶色粒子を含む。両面共に、斜め、及び縦方向のなで成形がなされているが、凸面には微かに斜め格子叩き目が観察される。また、両面共に部分的に砂粒が付着している。6の器厚は2cmを測る。胎土は灰燈色を呈し、白色微粒子を含む。両面共に縦方向のなで調整、凹面の砂粒の付着が顕著である。7は器高2.2cm、器厚1.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子、白色粒子を含み精良である。凸面に斜め格子叩き文が観察され、また、砂粒が多量に付着している。8は器高3cm、器厚1.8cmを測る。胎土は白色を呈し、黒色粒子を多く含む。凸面は2本の凸線と斜め格子の組み合わせの叩き文、凹面は縦方向のなで調整が観察される。両面共に黑色砂粒が付着している。9は器厚2cmを測る。胎土は暗燈色を呈し、白色粒子を含む。凸面に斜め格子叩き目が明瞭に残る。10は器高3cm、器厚2cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、白色微粒子を含む。両面共に、縦方向のなで調整が施されているが、凸面には微かに斜め格子叩き文の痕跡がある。11は器厚1.7cm、12は2cmを測る。共に胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。両面共に斜め方向のなで調整である。12の凸面には斜め格子叩き文が微かに遺存する。

図24-1~15は井戸の覆土から出土した遺物である。1~3は覆土上層、4~12は下層から出土した遺物である。

1、2は檜轆成形のかわらけの大皿である。1の復元口径は12.8cm、2は12.4cm、共に底径は7.5cm、器高3.3cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、白色軟礫を含む。共に、器肉が厚く、また、体部が直線的に外反する断面が逆台形を呈する15世紀のかわらけである。

3は瓦質手焙りの口縁部である。胎土は灰桃色を呈し、白色粒子、赤茶色粒子を含む。器表を横方向に磨き、還元焼成を行う。体部外面には、口縁部には2本の沈線で境界線を巡らし、その間に10弁の菊花文のスタンプ連続文、連珠文、16弁の大型スタンプの菊花文を1つ押し、その回りに口縁部のスタンプ文と同型の文様を押して、意匠している。

4、5は檜轆成形のかわらけの大皿と小皿である。大皿の口径は12.4cm、底径7.4cm、器高3.5cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子を含む。上層に出土したかわらけと同様の形態であるが器肉は上層より薄い。5の口径は8cm、底径3.9cm、器高2.4cmを測る。体部に若干の丸みを持つが、大皿と同類である。灯明皿である。

6は瓦質手焙りの底部である。胎土は灰桃色を呈し、赤茶色粒子、白色粒子を含む。還元焼成である。外面底部脇に10弁の菊花の連続スタンプ文を配する。

7、8は丸瓦である。7は筒部の断片である。器厚1.6~2.4cmを測る。胎土は白褐色を呈し、黒色粒子、茶色粒子を含む。凸面は縦方向のなで調整、凹面は布目の圧痕が観察される。8は筒部~玉縁部である。器厚1.8~2cmを測る。胎土は灰色を呈し、黒色粒子を混入する。凸面は丁寧になでられ、また、凹面には布目痕が明瞭に観察される。

9~12は木製品である。9~11は板底である。9の遺存率は2/3、直径14.2cm、厚さ7mm前後にな

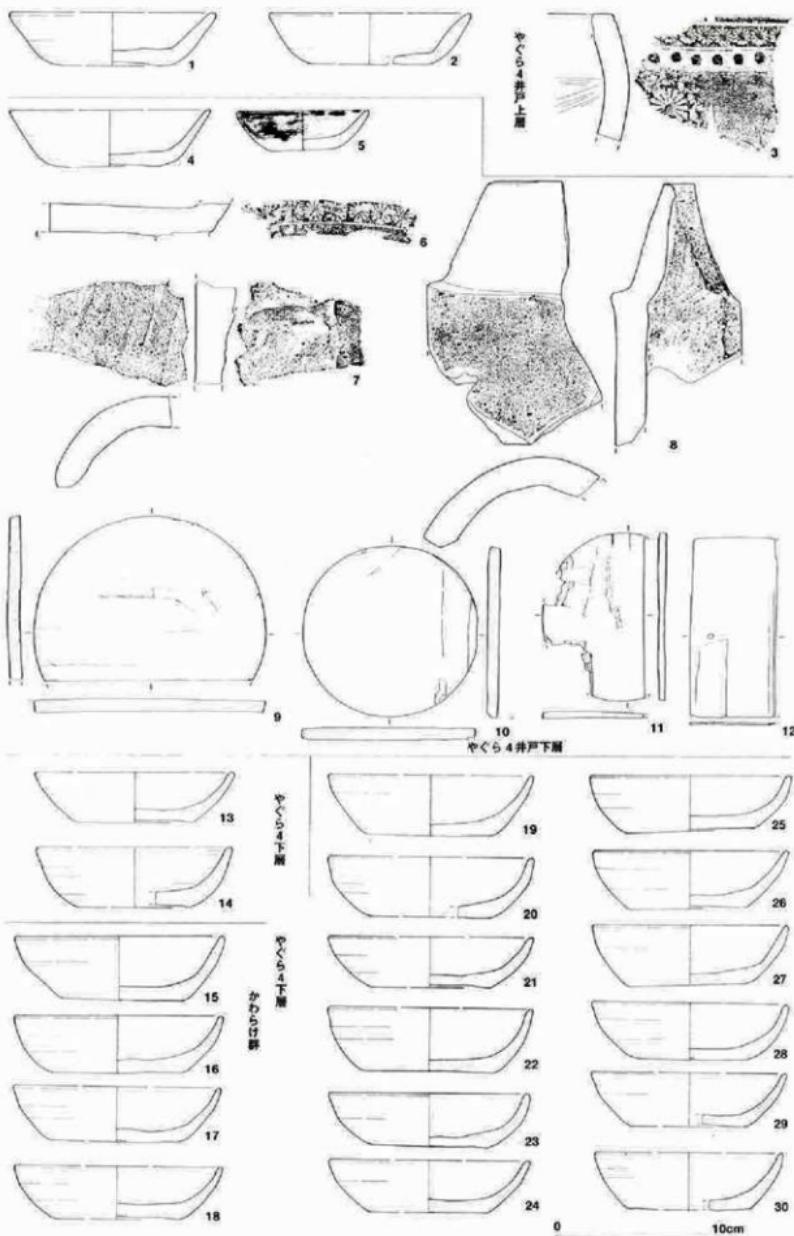


図24 やぐら4出土遺物(4)

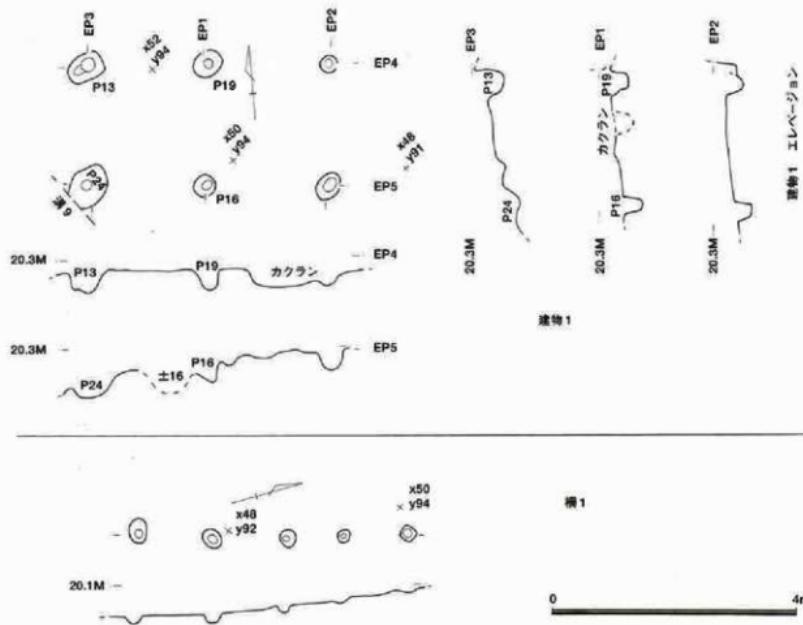


図25 建物1・横列1

ると推定される。10は直径10.5cmの円形である。厚さは7mm前後である。11は半分余りが遺存した。厚さ2~4mmを測り、中央部分が薄い。12は折敷の断面で、縦方向が柾目方向である。厚さ1mmである。13~30はやぐらの下層(13、14)、及び床面直上(15~30)から出土から出土した遺物である。

13、14は輪軸成形のかわらけの大皿である。復元口径は12cm、12.2cm、底径7cm、器高3.1cm、3.7cmを測る。ほぼ同値を示すが、2は器高が高い。13の胎土は肌色、14は淡燈色である。13の体部は薄く、内湾気味に開くが、14は器肉が厚く、余り開かずに立ち上がり、口唇部は直口氣味である。

15~30はやぐら床面の埋納儀礼と想定される円形に置かれたかわらけ群である。すべて輪軸成形のかわらけで、15~29は大皿、30は中皿である。大皿の復元口径は12~12.9cm、底径7~8.1cm、器高3.1~4cmを測る。中皿の口径は11.6cm、底径7.6cm、器高3.6cmを測る。胎土は淡燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、黒色粒子を含む。体部は腰がすぼまり、口縁部が直口氣味に立ち上がるものが主流である。21、26は再火を受けており、器型は歪み、器表の肌荒れは顕著である。

建物1(図25)

x 49~53・y 91~97グリッド内に検出された。東西4m、南北2mを測り、桁行2間、梁間1間の建物である。柱の心は200cmを測る。柱穴の堀方規模は30~60cmの東西方向を長軸とする楕円形を呈する。深さは確認面より30cmである。柱穴の底部は東から西に、北から南に低くなっている。比高差は40

—80cmである。この建物の南北の軸方向はN-6°-Eである。

柵1(図25)

x 48~50・y 91~94グリッドに、海拔20.1mで検出された。南北方向の5口の柱穴からなる。柵列1が建物1を切る。柵列の長さは440cm、心心は120~100cmを測る。柱穴の壠方規模は30cm前後の隅丸方形、または梢円形を呈し、深さは確認面より、10~15cmを測る。底部は北側が高く、南側が低い。その比高差は50cmを測る。柵列の南北の軸方向はN-21°-Eである。

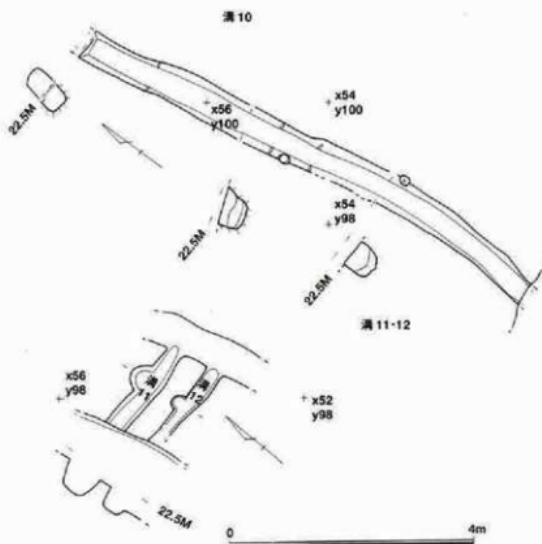


図26 溝10~12

溝10~12(図26)

この3条の溝群は北側の高い岩盤上に検出された。

溝10(図26)

x 51~58・y 97~101グリッドで、海拔22.3~22.4mで検出された南北方向に真っ直ぐに走る溝である。南側は近代以降の下水管埋設工事時に切断され、また、北側は調査区外北方向に延びる様相で全容は不明である。検出された壠方規模は825cm、溝幅は40~62cm、深さ30~46cmを測る。側壁は垂直に立ち上がり、溝の底部はほぼ平坦で、溝の断面は方形を呈する。溝の東西両壁には、同位置に、底部まで貫通した切り込みが検出された。検出状況からは用途・目的は不明であるが、杭を立てる等の付帯施設であると想定される。覆土は褐色シルト層で、直径10cm大の土丹塊、及び鎌倉石碎片が混入する。この溝の南北の軸方向はN-7°-Wである。

溝11・12(図26)

x 54~56・y 98~99グリッドに、海拔22.4mで検出された並行して走る東西溝である。東端は共に溝10と切り合い関係を持つ。溝11の検出された壠方規模は東西120cm、溝幅30~60cm、深さは確認面より40cmを測る。溝12は東西の長さ110cm、溝幅32~48cm、深さは確認面より32cmを測る。共に、側壁は垂直に立ち上がり、また、溝の底部は平坦で、断面は方形を呈する。溝の東西の軸方向はN-90°-Eである。

溝10出土遺物(図27)

1~4は輪轆成形のかわらけで、1は大皿、2~4は小皿である。大皿の復元口径は13cm、底径7.2cm、器高3.6cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、雲母、赤茶色粒子を含む。腰がすぼまり、口唇端部は、外側に引き出され尖る。小皿の胎土は肌色を呈し、白針、雲母、微砂を交える。3、4は粉質の強い精良土である。復元口径は8~8.2cm、底径5~5.2cm、器高1.6~1.9cmを測る。底部から開いて立ち上

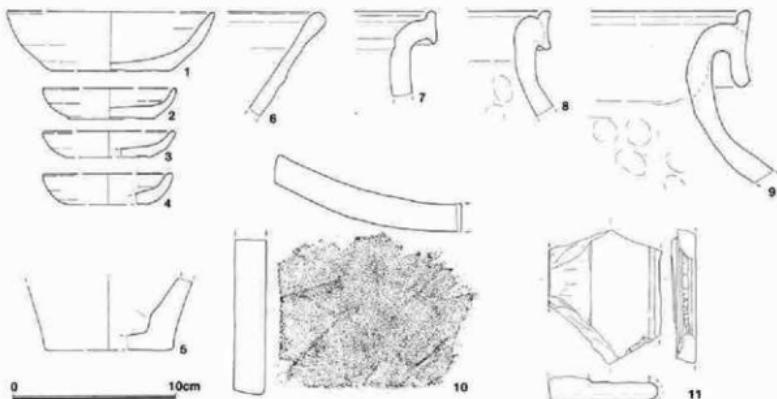


図27 溝10出土遺物

がる体部は中央部から、直進気味に立ち上がる。2は底部を厚く作り出す。4は全体的に肉厚であるが、口径がさほど大きくならない。

5は瀬戸の灰釉瓶の底部である。復元底径8cmを測る。胎土は灰褐色を呈し、長石粒子を若干含む。釉調は灰緑色、斑な施釉である。

6は山茶碗窓系捏鉢の口縁部の破片である。胎土は灰色を呈し、1~9mm大の長石、小石を含む。口端部を丸く収め、口縁部外面に降灰している。

7~9は常滑の甕、口縁部の破片である。7の胎土は赤燈色を呈し、長石微粒子を含む。器表の発色は暗赤褐色である。内面の頸部に紐を押し付けたような痕跡が認められる。縁帯幅は2cmである。8の胎土は灰色~肌色を呈し、焼斑がある。外面全体に厚く降灰している。縁帯幅は2.5cmを測る。9の胎土は暗灰色を呈し、1~3mm大の長石を含む。器表の発色は暗紫褐色である。縁帯幅は4.6cmを測る。中野編年による7は6a型式、8は6b型式、9は7型式である。

10は平瓦である。胎土は灰色を呈し、小石、1mm大の長石を含む。凸面は斜め格子叩き目で、両面とも器表に砂粒が付着している。破片中央部に釘留め穴がある。

11は硯の転用品である。側縁部~陸部分を切り取り加工している。用途は不明である。

溝1~8・14(図28)

この溝群はやぐら4の前面に広がる岩盤上より検出された南北方向に走る溝群である。溝群が検出された岩盤面は東から西へ傾斜を持つ。東側の海拔は20.3m、西側の海拔は19.8mでその比高差は50cmである。溝群はほぼ同軸方向に整然と検出された。

溝1(図28)

x 37~39・y 88~93グリッドで、海拔20.3mで検出された。堀方規模は長さ520cm、溝幅30~44cm、深さは確認面より15~20cmを測る。溝の側壁は垂直気味に立ち上がり、また、底部はほぼ平坦で、断面形は方形に近い。溝は南から北に流れ、比高差は7cmを測る。10cm大の土丹塊で埋められていた。この溝の南北の軸方向はN-25°-Eである。

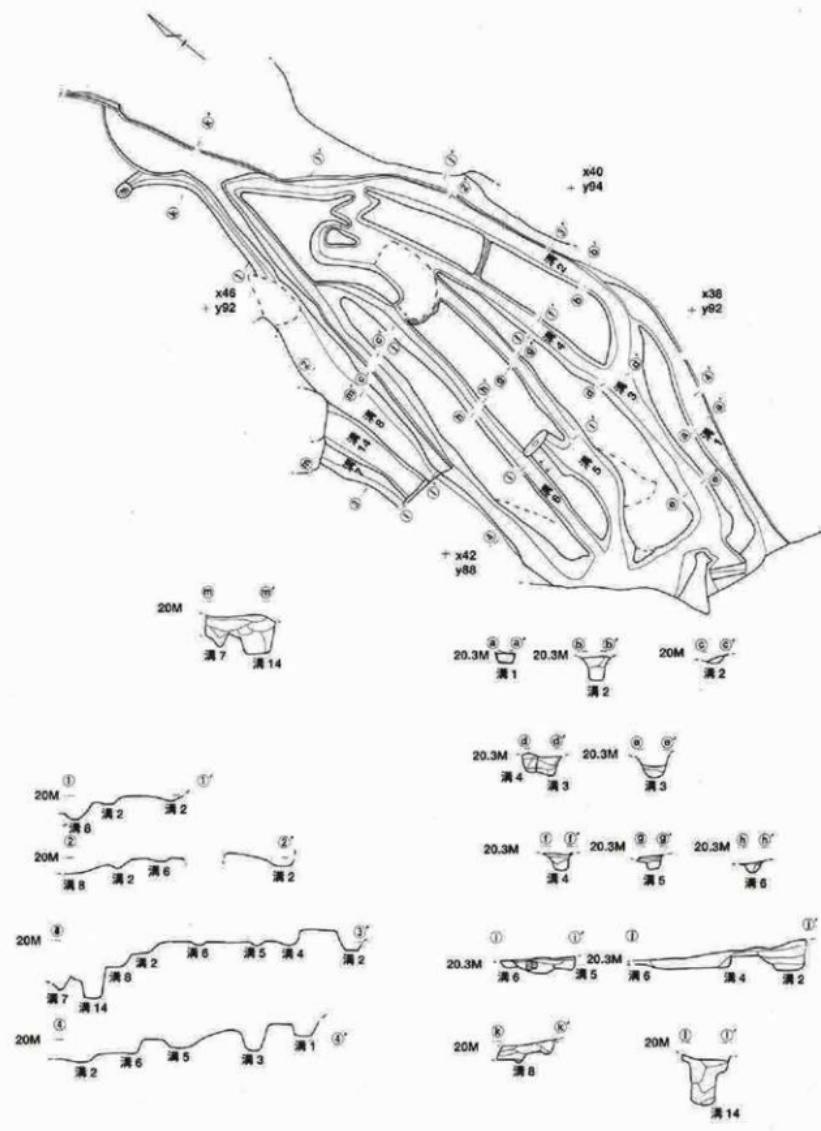


図28 溝1~8・14

溝 2(図28)

岩盤裾際から派生し、溝3～6を外周して走る。検出された堀方規模は長さ17.3m、溝幅30～45cm、深さは確認面より10～40cmを測る。溝は東側の岩盤山裾際が深く、西側の調査区間は浅い。溝の側壁は垂直に立ち上がり、岩盤際の溝は底部が平坦であり断面は方形を呈する。また、調査区間は底部に丸みを持ち、U字型を呈する。溝は南が低く、東側(山裾際)の比高差は5cm、西側(調査区間)は22cmである。覆土は茶褐色粘質土で1cm大の土丹塊が混入し、しまりは無い。また、西側の覆土は褐鉄分が多い。この溝の南北の軸方向はN-11°-Wである。

溝 3(図28)

x 37～40・y 88～92グリッドで、海拔20.2mで検出された。当址は溝4に切られる。堀方規模は長さ382cm、溝幅40～76cm、深さは確認面より30～35cmを測る。側壁はやや開くが垂直気味に立ち上がり、また、底部は丸味を帯び、断面はU字形を呈する。北側が低く、その比高差は10cmを測る。この溝の覆土は茶褐色砂質土層で、上層は褐鉄分が多い。全体的に5cm大の土丹塊を多く含み、しまりをあまり持たない。南北の軸方向はN-19°-Eである。

溝 4(図28)

x 40～44・y 92～94グリッド内に海拔20.3mで検出された。検出された堀方規模は長さ530cm、溝幅30～38cm、深さは確認面より30前後を測る。側壁は垂直に立ち上がり、また、底部は若干丸みを帯び、断面はU字形を呈する。底部は北側が高く、その比高差は5cmである。覆土は灰茶色土で、3～5cm大の土丹塊を含み、しまりはない。南北の軸方向はN-4°-Wである。

溝 5(図28)

x 39～44・y 88～94グリッドで海拔20.15mで検出された。検出された堀方規模は長さ520cm、溝幅20～74cm、深さは確認面より22cmを測る。底部は平坦で比高差も殆どなく、また、断面形は方形に近い。覆土は茶褐色土で、若干褐鉄分を帯び、3～5cm大の土丹塊を含む。南北の軸方向はN-11°-Eである。

溝 6(図28)

x 40～44・y 88～94グリッドで海拔20.5mで検出された。堀方規模は長さ710cm、溝幅30～40cm、深さは確認面より14～16cmを測る。溝の底部は若干南側が低く、その比高差は5cmである。覆土は灰茶色土で、1cm前後の土丹塊を含みしまりはない。底部は丸みを帯び、断面形はU字型を呈する。南北の軸方向はN-12°-Eである。

溝 7・8・14(図28)

この3条の溝は、調査区西壁際に検出され、南北両端に擾乱を受け全体の様相は不明である。

溝7はx 43～45・y 89～90グリッドに、海拔19.3mで検出された。当址の西肩は調査区外西にある。堀方規模は長さ165cm、深さは確認面より30cmを測る。溝の底部は北側が低く、その比高差は30cmを測る。覆土は茶褐色粘質土で3～5cmの土丹塊を含みしまりはない。南北の軸方向はN-10°-Wである。

溝8はx 43～48・y 90～95グリッドに海拔19.9mで検出された。当址は西肩を溝14、また土壤群に切られている。検出された堀方規模は長さ700cm、溝幅22～80cm以上、深さは確認面より15cmを測る。溝の底部は南側が低くその比高差は22cmを測る。覆土は暗茶褐色粘土で、土丹粒子を若干含み、しまりはない。南北の軸方向はN-11°-Eである。

溝14はx 41～45・y 44～45グリッドに海拔19.6mで検出された。検出された堀方規模は長さ184cm、溝幅38～64cm、深さは確認面より50～80cmを測る。底部は平坦で比高差はなく、また、断面形は方形に近い。覆土は上層が茶色シルト層、下層が茶褐色粘質土層で、全体に3cm大の土丹粒子を含みしまりは

ない。南北の軸方向はN-5°-Wである。

溝9・15(図29)

この2条の溝は調査区西壁際、x 46～52・y 90～92グリッド内に海拔19.4mで検出された南北方に走る溝である。両溝共に北端は近代期の下水埋設施設による擾乱を受け、また、溝9の南端は土壌20に、溝15は土壌17に切らされている。また、西肩は調査区外西に位置する。

溝9の検出された堀方規模は長さ

805cm、溝幅45～70cm、深さは確認面より15～45cmを測る。溝の底部は若干丸みを帯び、断面形はU字型を呈する。また、北側が高く、南側が低く、その比高差は30cmを測る。覆土は黄灰色砂で若干の茶色粘土を混入する。溝の南北の軸方向はN-12°-Wである。

溝15の検出された堀方規模は長さ312cm、溝幅80cm以上である。溝の底部は南側が低くその比高差は20cmを測る。この溝の南北の軸方向はN-23°-Wである。

溝2出土遺物(図30-1～3)

1は輥輪成形のかわらけの小皿である。口径8.3cm、底径6cm、器高2.2cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、白色軟繩、赤茶色粒子を含む。器形の断面形が、逆台形を呈する、いわゆる15世紀タイプの皿である。器肉は均一で、口唇端部は丸く收まる。

2、3は瓦である。2は鬼瓦である。器厚3.1cmを測る。胎土は灰色で白色粒子を多く含む。表面には直径4cmの珠文を貼り付けている。また、裏面は工具による、斜め、及び縦方向の調整の痕跡が観察される。3は丸瓦の玉縁部である。器厚1.7cmを測る。胎土は灰色を呈し、裏面には布目の圧痕が観察される。

溝2・3出土遺物(図30-4～7)

4は輥輪成形のかわらけの小皿である。復元口径9.9cm、底径7cm、器高2.6cmを測る。胎土は白味の肌色を呈し、赤茶色粒子、雲母、白針を含む。底部が1.1cmと厚く安定感のある器型である。体部が直進して開く15世紀タイプのかわらけである。

5は常滑の鉢の口縁部である。胎土は濃桃色を呈し、小石、長石粒子を含む。口唇端部は拡張し、中央部は凹む。

6、7は丸瓦である。6は筒部～段部にかけての部位である。器厚1.4～2cmを測る。胎土は青味の灰色を呈し、白色粒子、黒色粒子を含む。凹面は布目痕、黒色砂粒が観察される。7は玉縁～筒部の部位である。器厚1.4～1.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。凸面は丁寧になでられ、また、凹面は布目の圧痕が観察される。

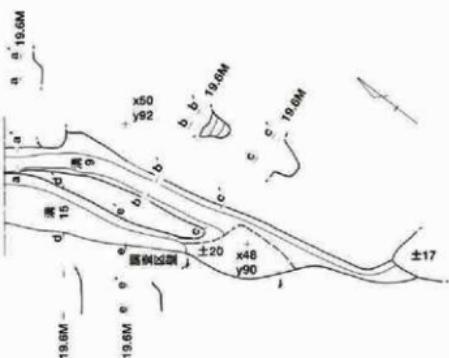


図29 溝9・15

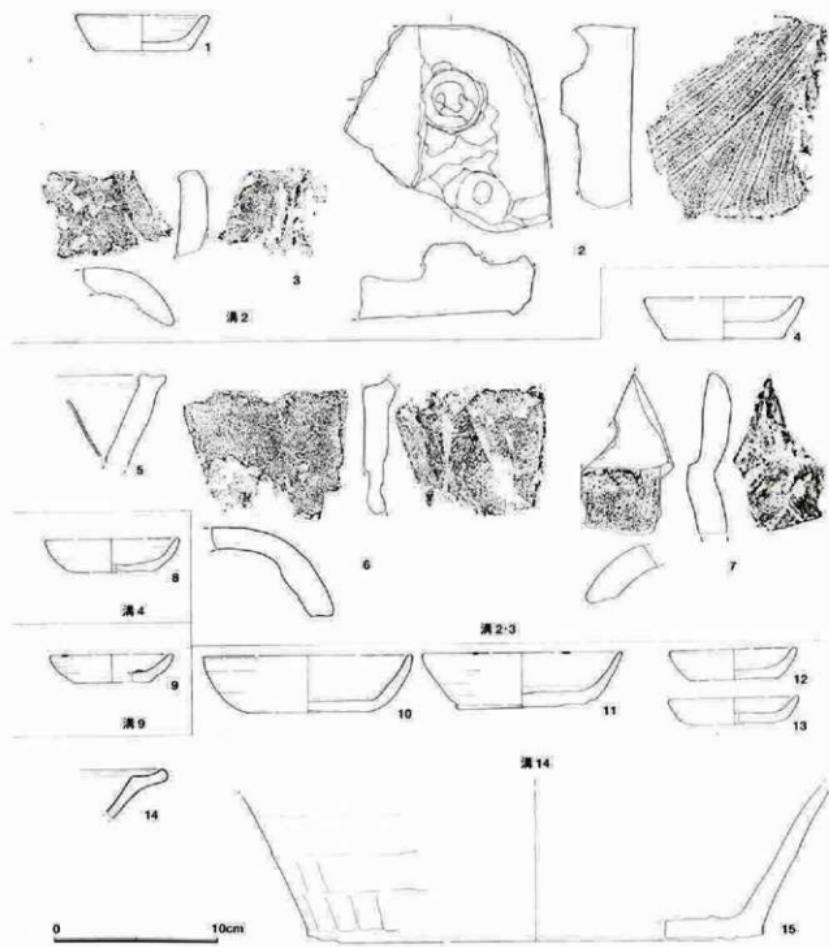


図30 溝2・2・3・9・14出土遺物

溝4出土遺物(図30-8)

8は輥輪成形のかわらけの小皿である。復元口径8.3cm、底径5cm、器高2cmを測る。胎土は燈色を呈し、白色軟繩、赤茶色粒子、雲母、白針を多く含み、かなり扶殖物が多い。

溝9出土遺物(図30-9)

9は輪轆成形のかわらけの小皿である。復元口径7.7cm、底径4.7cm、器高1.8cmを測る。胎土は肌色を呈し、白針、白色軟継を含む。外面底部脇が若干すぼまる。灯明皿である。

溝14出土遺物(図30-10~15)

10~12は輪轆成形の10、11は大皿、12、13は小皿である。大皿の復元口径は12.9cm、12.2cm、底径8cm、器高3.5cm、3.4cmを測る。10の胎土は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子、雲母を含む。焼成は良好で軽量感がある。口縁部は直口する。11の胎土は淡燈色を呈し、白色軟継、赤茶色粒子、白針、雲母を含む。底部は高台状に粘土が残る。小皿の復元口径は7.8cm、8cm、底径5.3cm、器高1.9cm、1.6cmを測る。胎土は肌色を呈し、赤茶色粒子、雲母、白針を含むキメ細かい精良土である。11は灯明皿である。

14は船載青磁の皿、または鉢の口縁部の小片である。胎土は灰色、釉調は暗緑褐色を呈する。光沢は良好で、器表は粗く貫入する。

15は常滑の甕の底部である。復元底径は28cmを測る。胎土は灰色を呈し、1mm以下の大長石を多く含み、僅かに3mmの大長石を交える。体部内面に厚く降灰し、底部外面は妙底である。

溝16・17(図31)

x 57・y 96~97グリッドに、海拔19mで検出された東西溝である。共に調査区外西側に延びる。

溝16の検出された堀方規模は230cm、溝幅30~44cm、深さは確認面より30cmを測る。この溝は東側から西側に大きく傾斜しており、その比高差は86cmを測る。上層の覆土は赤茶色粘土、下層は黒褐色砂質土で、20cm四方の鎌倉石碎片を含みしまりはない。

溝17は溝16の西端部に検出された。深さ70cmを検出したのみで、全容は不明である。覆土は黒茶色粘土で、若干鎌倉石碎片を含むのみである。

溝群の東西の軸方向はN 90° -Wである。

土壌4・5・7・方形土壌1・2(図32)

これらの遺構群は北側の岩盤上から検出された。

土壌4(図32)

x 55~57・y 100~101に海拔21.5mで検出された。当址は西側の大半を溝10に切られる。堀方規模は南北216cm、東西52cm、深さは確認面より20cmを測る。覆土は暗灰色シルトで、底面直上は黒褐色粘土で、共にしまりはない。

土壌5(図32)

x 56~57・y 100グリッドに海拔21.3mで検出された。溝10によりその東側の大半を切られる。検出された堀方規模は南北130cm、東西26cm、深さは確認面より12cmを測る。

土壌7(図32)

x 50~52・y 100~101グリッドに21.2mで検出された。当址の東側のおよそ半分は調査区外東にある。



図31 溝16・17

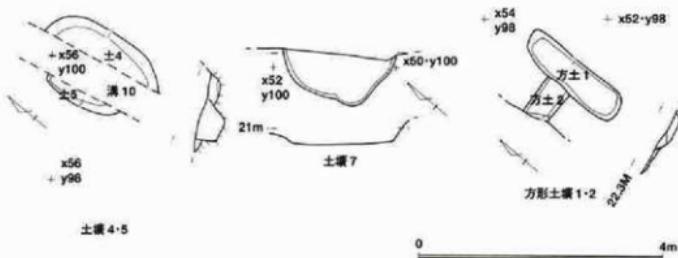


図32 土壙4・5・7・方形土壙1・2

検出された壠方規模は南北180cm、東西80cmを測る。底部は平坦で、深さは確認面より30cm前後である。

方形土壙1・2(図32)

x 52~54・y 97~98グリッドに、海拔22mで検出された。方形土壙1は方形土壙2を切る。

方形土壙1は南北方向に長軸を持つ。検出された壠方規模は南北188cm、東西50cm、深さは確認面より14cmを測る。覆土は茶褐色粘質土で、2~3cmの土丹塊を含み、しまりはさほどない。南北も軸方向はN-2°-Wである。

方形土壙2は東西方向に長軸を持つと予想される。検出された壠方規模は南北44cm、東西70cmを測る。覆土は茶褐色粘質土で、かわらけ碎片、4~5cmの土丹塊を含み、しまりはない。南北の軸方向はN-88°-Eである。

土壙4出土遺物(図33-1)

1は現の転用品である。用途は不明である。マエブチ～側縁部の部位の断片を転用して造作している。陸部に幅5mmのノミ痕が観察される。

方形土壙1出土遺物(図33-2)

2は瓦質手焙りの口縁部である。胎土は燈色を呈し、灰色の胎芯を残す。胎土中には1mmの大の長石粒子を混入する。口唇端部が鉤型に内側に折れる。体部内面～口縁部は横なで成形、体部外面は指頭による成形である。

土壙8~11・17・18(図34)

これらの土壙群は調査区南側の岩盤が急激に落ち込んだ地域、やぐら4の前面に、やぐらの床面レベルで検出された。

この6基の土壙群はx 45~48・y 90~94グリッドに海拔19.7mで検出された。土壙群は南北方向を長軸とする、南北480cm、東西200cmの方形の掘り込み中に東西2列に整然と並ぶ。また、この掘り込み内には2箇所の擾乱喰があり、原状は4基でづづ2列に並んでいたと想定される。壠方規模は一定ではないが、

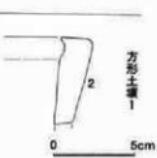
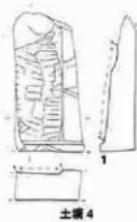


図33 土壙4・方形土壙1出土遺物

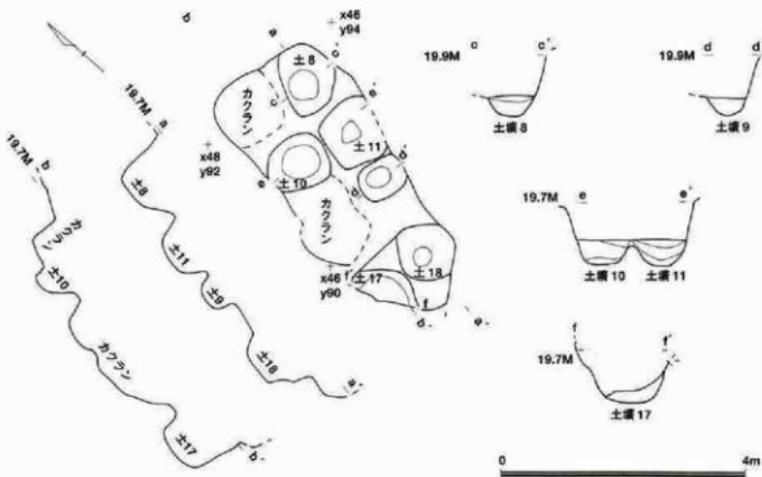


図34 土壌8～11・17・18

深さは確認面より100cm前後、底部の海拔は18.7mと一定である。

土壌8の堀方規模は長径120cm、短径96cmを測り、南北方向に長軸をもつ。平面形は楕円形を呈する。覆土は黄灰色砂で、下層には2～3cm大の土丹が混入し、縮まりはない。

土壌9は長軸80cm、短軸60cmを測り、東西方向に長軸をもつ。平面形は隅丸方形を呈する。覆土は黄茶色粘質土で、大小の土丹碎片を含み、しまりはない。

土壌10は長軸104cm、短軸95cmを測り、東西方向に長軸をもつ。平面形は隅丸方形を呈する。覆土は黄灰色砂質土で、3cm大の土丹を含む。下層は黒色粘質土で混入物が殆どなく縮まりは悪い。

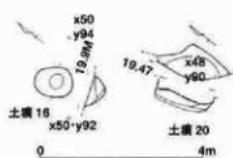
土壌11は長軸104cm、短軸90cmを測り、南北方向に長軸を持つ。平面形は隅丸方形を呈する。覆土は青灰色砂質土で、5cm大の土丹を含む。下層は黒色粘質土で、木器を若干含む。

土壌17の西側半分は調査区外西に在る。検出された堀方規模は南北120cm、東西60cmである。覆土は粉碎土丹層で、褐鉄分が多く、縮まりはない。

土壌18は長軸90cm、短軸90cmを測り南北方向に長軸を持つ。平面形は隅丸方形を呈する。

土壌16(図35)

x 50～51・y 93～94グリッドに、海拔19.75mで検出された。南北方向に長軸を持つ。長軸94cm、短軸74cmを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土は茶褐色土で、2～3cm大の土丹塊、若干の砂を含みしまりはない。



土壌20(図35)

x 48～49・y 90～91グリッドに、海拔19.4mで検出された。土壌の西

図35 土壌16・20

半分は調査区外西に在る。壁際にあるため、壁が崩落する可能性があるため完掘はしていない。検出された堀方規模は南北188cm、東西84cmを測る。覆土は茶褐色粘質土で、錐倉石、かわらけ碎片を含みしまりはない。

土壤16出土遺物(図36-1~4)

1、2は輪轆成形のかわらけの小皿である。胎土は肌色を呈し、白色軟隕、赤茶色粒子、雲母、白針を含み、キメ細かな精良土である。1の復元口径8cm、底径4.8cm、器高1.7cmを測る。2は完形品である。口径7.4cm、底径4.1cm、器高2cmを測る。体部は丸みを帯び、小さい底部を作り出し、また、高台状に粘土が残る。

3は流紋岩質粗粒凝灰岩の供予産の中砥で、中央部に刀痕が観察される。

4は瓦である。器厚1.6cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子が混入する。凸面は斜め格子叩き目、凹面は立て方向のなで成形である。両面に黒色砂粒を多量に付着する。

土壤20出土遺物(図36-5、6)

5、6は輪轆成形のかわらけの大皿と小皿である。胎土は肌色を呈し、雲母、白針、微砂を含み、比較的精良である。大皿の復元口径は12.5cm、底径6.5cm、器高3.5cmを測る。体部は丸みを持ち、底部は小さく、粘土が高台状に残る。小皿の口径は8.4cm、底径5.6cm、器高1.7cmを測る。底径、口径比の小さい器形で、器肉も厚く、どっしりしたタイプである。



図36 土壌16・20出土遺物



図37 土壌19

土壤19(図37)

x 57~58・y 98グリッドに海拔21.5mで検出された。後述の道路状遺構を切った状況で検出された。南北方向に長軸を持つ。検出された堀方規模は長軸126cm、南北82cmを測り、平面形は半円形を呈する。覆土は錐倉石粒子を含み砂質である。2cm大的土丹粒子、かわらけ碎片、炭化物を含みややしまる。

土壤19出土遺物(図38)

1はかわらけの小皿である。口径8.4cm、底径6cm、器高1.4cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、雲母、微砂を含む。口径、底径比が小さく、器肉が薄い。

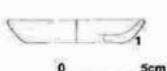


図38 土壌19出土遺物

ピット列1・2(図39)

調査区北側地域の岩盤上段に検出された。X51～53・y99～101グリッドに海拔22.2mで検出された。ピット列1がピット列2を切る。

ピット列1は南北方向に延び、合計3口が検出された。南側のピットはやぐら4に切られる。検出された壠方規模は60×70cmの隅丸方形、または楕円形を呈する。深さは確認面より80～90cmで、北側が高い。心心の間隔は80cmを測る。南北の軸方向はN-10°-Eである。

ピット列2は東西方向に延びる。検出された壠方規模は40×50cmの隅丸方形を呈する。深さは確認面より60～70cmで、東側が高い。心心の距離は80cmを測る。東西の軸方向はN-101°-Eである。

第一平場

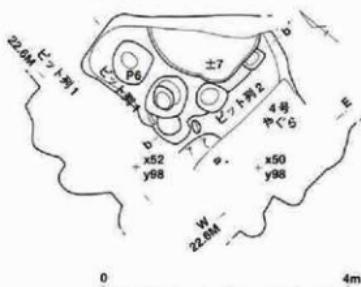


図39 ピット列1・2

道路状造構(図40)

調査区北側の上段の岩盤と南側に広がる下段の岩盤を結ぶ通路の様相で検出された。この道路状造構は南北方向に走り、x53～64・y94～100グリッドに海拔21.7～18.9mで検出された。つづら折り状に折れ曲がっており、比高差2.8mを測る。道幅は20～100cm、全般的に急勾配で、一定の傾斜である。当址

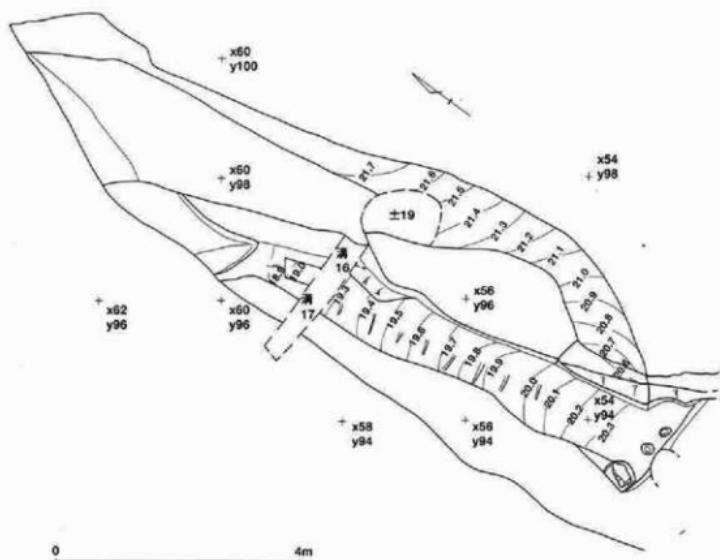


図40 道路状造構

の降下した北端部は、溝16.17に切られている。また、その地域には滑り止め施設として、東西方に向に20~40cmの凹線を埋込んでいる。当時の南北の軸方向はN-15°-Wである。

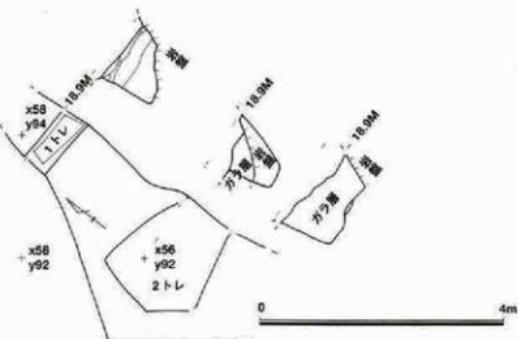


図41 第1トレーニング・第2トレーニング

道路状構造の北側の終点から、南側下段に広がる岩盤までの間は地山である黒色粘土である。その地域に岩盤面を確認するために、2箇所にトレーニングを開いて、調査を実施した。

第1トレーニングは南北50cm、東西100cmである。90cmまで掘り下げたが、岩盤まで到達出来ず、湧き水のためトレーニング壁が崩れ、それ以上の掘り上げが不可能なため断念した。地山である黒色粘土の層が続いている。

第2トレーニングは南北160cm、東西180cmの範囲を掘上げた。80cmまでの土丹ガラ層の堆積を確認した。それ以下はトレーニング壁の崩壊のため、中止とした。

第2トレーニング出土遺物(図42)

1は輪轆成形のかわらけの小皿である。復元口径は8cm、底径5.4cm、器高1.6cmを測る。胎土は肌色を呈し、白色軟疊、白針、茶色粒子を含む精良土である。底部際がすばまり、体部中央部に膨らみをもつ。

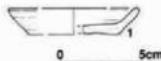


図42 第2トレーニング出土遺物

包含層出土遺物(図43~44)

これらの遺物群は、岩盤上に遺構群を検出時に出土したものである。

図43、1~24は輪轆成形のかわらけで、1~8は大皿、9、10は中皿、11~24は小皿である。大皿の復元口径は12~13cm、底径6.5~8.5cm、器高3~3.6cmを測る。胎土は燈色系で、白針、雲母、白色軟疊を含む。1、5は混入物の粒子が小さく、キメ細かい精良土である。器肉が厚く、体部外面の稜線は密で明瞭である。2、4、8の胎土は混入物の粒子が大きく、また、黑色粒子を交えた粗胎である。3点とも灯明皿である。3、6、7は薄手であるが、3は口唇端部が直口し6、7は体部の傾斜のまま開く。2~5は腰がすばまり、底部を小さく作り出す器型である。中皿の復元口径は11.3cm、11.5cm、底径6cm、7.5cm、器高3.2cm、2.6cmを測る。9は薄手丸深で胎土は精良土で、10は粗胎である。

小皿の復元口径は7.2~8.3cm、底径4~6cm、器高1.5~2cmを測る。胎土は概ね淡燈色系である。11、21~23の胎土はキメ細かい精良土で、器肉は薄手である。11は器高の高い碗型、21、22は器高の低い皿

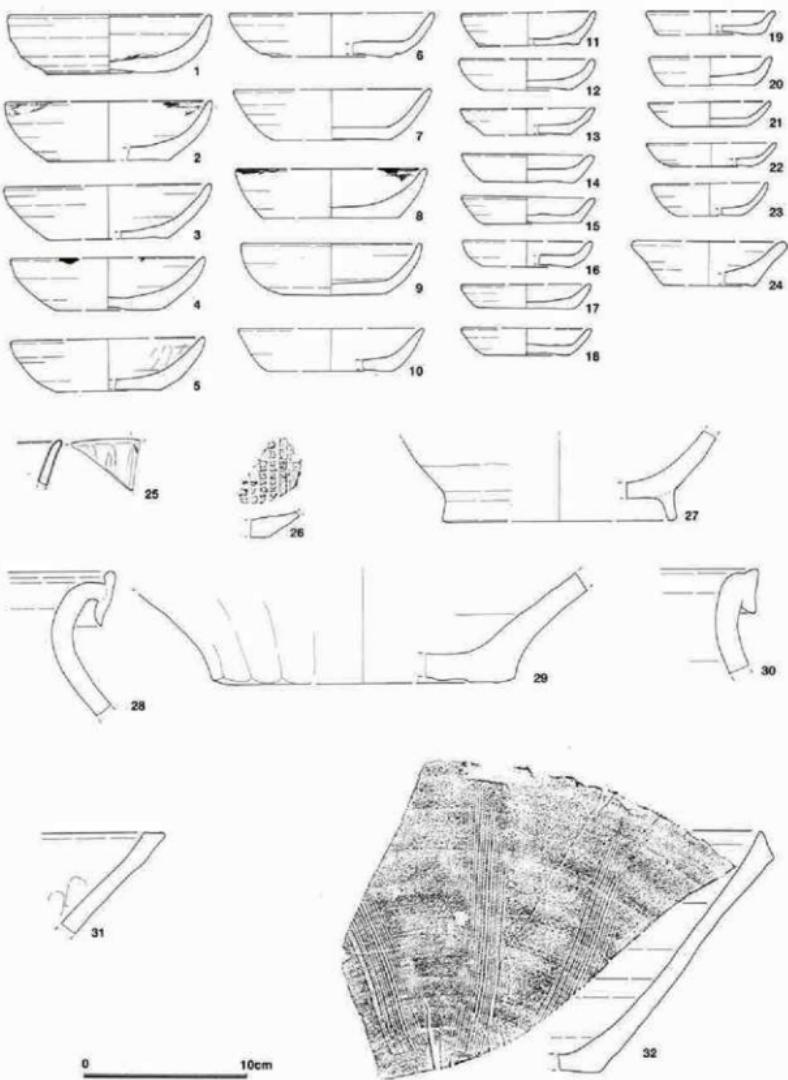


図43 包含層出土遺物(1)

型である。23は薄手丸深である。18は薄手、粗胎で、赤茶色粒子を含む。12、14、16は口唇端部が厚く丸く取まるタイプである。13は体部中央の稜線が強い。24は復元口径9.7cm、底径5.5cm、器高2.7cm、器肉が8~12mmと厚い大型品である。体部が大きく開き、側面観が逆台形を呈する15世紀タイプの小皿で

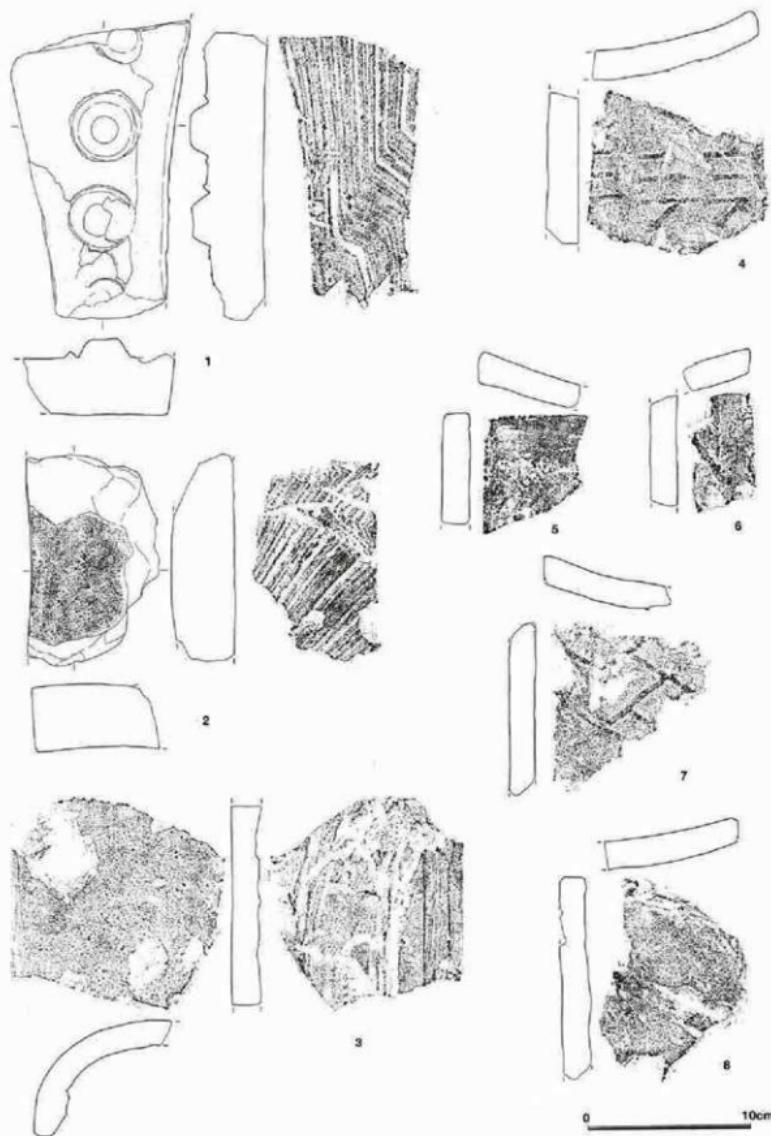


图44 包含层出土遗物(2)

ある。17は灯明皿である。

25は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、ガス孔が観察される。釉調は朽葉色、光沢は良好で、器表は粗く貫入する。

26は瀬戸、灰釉卸皿の底部の破片である。胎土は灰色で、白色粒子を若干混入する。釉調は灰色である。底部外面には糸きりの痕跡が観察される。

27は山茶碗窯系捏鉢の底部である。復元底径14.4cmを測る。胎土は灰色を呈し、1~2mm大の長石、小石を含む。外面底部脇の調整は回転へらけずり、また、内面の摩滅は顕著である。

28~31は常滑である。28、29は甌、30は壺、31は鉢である。28の胎土は灰色を呈し長石を混入する。器表の発色は灰褐色を呈し、縁帯幅は3.4cmを測る。中野編年7型式である。29の復元底径は18.6cmを測る。胎土は黒灰色を呈し、1~2mm大の長石、小石を含む。外面底部脇は斜め方向の工具によるナデ成形である。また、底部外面は砂底である。30は広口壺の口縁部である。胎土は灰色を呈し、白色粒子、灰色礫を含む。器表の発色は暗赤褐色、外面全体に降灰している。縁帯幅は2.8cmである。中野編年6b型式である。31は注口部に近い部位である。胎土は灰燈色を呈し、0.5~3mm大の長石を含む。器表の発色は暗紫~灰燈色を呈し、口縁部に降灰している。口縁部は横なで成形、体部外面は工具による斜め方向のナデ成形である。

32は備前の播鉢である。器高14.5cmを測る。胎土は灰色~燈色を呈し、長石粒子を含む。12条を1単位とする描り目である。描り目は細く浅い。器表の発色は暗赤褐色を呈し、内面全体に薄く降灰している。

図44は瓦である。1、2は鬼瓦である。共に胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含むが1は粒子が細かい。還元炎焼成で器表は黒色を呈する。1の器厚は3.5~3.7cmを測る。珠文は、直径3cmを測る、貼り付け成形で2個遺存している。2は破片で、器厚3.9cmを測る。凸面は若干丸みを帯びる。

3は丸瓦である。器厚1.6~1.9cmを測る。胎土は灰白色を呈し、白色粒子、黒色粒子、赤茶色粒子を含む。凸面は縱方向のナデ成形、凹面は布目の圧痕が顕著で、また、黒色砂粒を多く付着する。

4~8は平瓦である。4の器厚は1.8~2cmを測る。胎土は燈色を呈し、白色粒子、赤茶色粒子を含み、比較的精良である。器表の発色は白灰色を呈する。凸面は3本の凸線と斜め格子の組み合わせの叩き目である。凹面はなでられ、布目の圧痕はない。両面共に、黒色砂粒を多量に付着している。5は器厚1.7cmを測る。胎土は白色を呈し、黒色粒子を含み、粘性がありキメ細かい。器表の発色は灰色である。凹面に砂粒が若干付着している。6~8は還元炎焼成である。6の器厚は1.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を混入する。凸面には太い斜め格子叩き目的一部分が観察される。7の器厚は1.7cmを測る。胎土は白褐色を呈し、黒色粒子を含む。凸面に斜め格子叩き目、凹面に布目の圧痕が微かに残る。両面共に、砂粒が多量に付着している。8の器厚は1.8cmを測る。胎土は白色を呈し、黒色粒子を混入する。両面共にナデ成形がなされており、また、砂粒が多く付着している。

表土層出土遺物(図45~46)

此處に掲載したのは表土層、及び擾乱堆より出土した遺物群である。

1~14は轆轤成形のかわらけで、1は大皿、2~4は中皿、5~14は小皿である。大皿の復元口径は

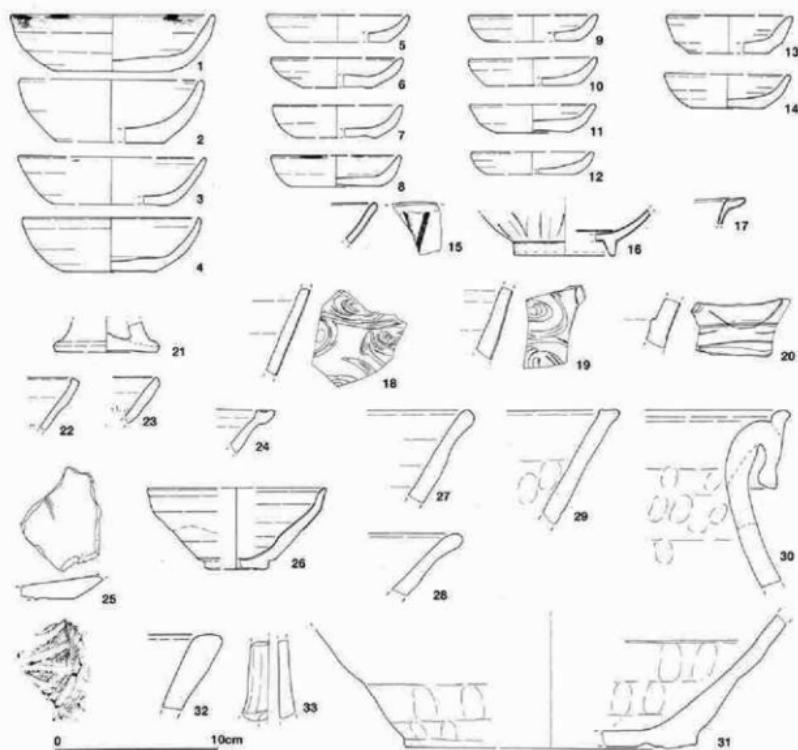


図45 表土層・搅乱層出土遺物(1)

12.7cm、底径7.2cm、器高3.5cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、白針、雲母、白色粒子を含む。口径、底径比が小さく、器肉も厚くどっしりしたタイプである。灯明皿である。中皿の口径は11.1~11.4cm、底径5.5~6.5cm、器高2.9~3.8cmを測る。3、4は薄手丸深で、淡橙色を呈するキメ細かな精良土である。2の胎土は燈色を呈し、雲母、微砂の多い粗胎である。器肉が厚く古式様を残すが、法量は小さい。3は灯明皿である。

小皿の復元口径は7.6~8.8cm、底径4.6~5.6cm、器高1.3~2.3cmを測る。5、6は体部が大きく開く。5は復元口径が8.8cmと大きいが、小片のため歪みも考えられ、6と同口径になることも想定される。

7、9、11は体部中央部に明瞭な稜線を有する。13、14は器高の高い碗型である。胎土は明燈色を呈する。14は薄手丸深である。13は器肉が厚く、粗胎である。

15~20は磁器である。15~17は青磁である。15、16は龍泉窯系蓮弁文碗である。15は口縁部の小片である。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。釉調は灰味緑色を呈する。器表は粗く貫入する。16は底部である。復元底径6.2cmを測る。胎土は白色、釉調は淡い灰味緑色を呈する。光沢は良好である。薄く施釉されており、また、高台疊付は露胎である。17は鉢の口縁部である。口唇端部が直角に外側に曲がる。胎土は白色、釉調は暗緑褐色を呈する。器表内外面ともに細かく、密に貫入する。

18~20は青白磁、梅瓶である。胎土は白色、釉調は水青色を呈する。表面に粗い貫入が観察される。文様は唐草文である。様相から同一個体の可能性がある。

21~26は瀬戸である。21は花瓶の底部である。底径6.5cmを測る。胎土は白褐色を呈する軟質土である。底部外面に糸きりの痕跡が明瞭に残る。22~24は鉢皿の口縁部である。22の胎土は淡橙色、釉調は茶色を呈する。口唇端部は平坦で外傾し、また、鉤型に内側に折れ曲がる。23の胎土は暗灰色を呈し、白色粒子を混入する。釉調は淡い灰緑色で、器表の貫入は微細である。24の胎土は灰色を呈し、堅緻である。釉調は灰褐色、光沢はない。口唇端部の中央は窪む。25は底鉢目皿である。胎土は白褐色、釉調は透明な暗緑色を呈する。器表は気孔が多く、また、貫入が微細で、密である。26は天目茶碗である。復元口径11cm、底径4cm、器高5cmを測る。胎土は灰色~淡褐色を呈し、精良である。釉調は茶味黒色で、光沢は良好である。底部内面に見込みを回るような擦過痕が明瞭に認められる。底部外面は削り出し高台である。藤澤編年後Ⅱ期である。

27、28は山茶碗窯系捏鉢の口縁部である。27の胎土は褐味灰色を呈し、長石粒子を含む。唇端部は角張り、また、端部の中央部分は窪む。内面に若干降灰している。28の胎土は暗灰色を呈し、長石粒子を含む。口唇端部は丸く取まる。内面全体に薄く降灰している。

29~31は常滑、29は鉢、30、31は壺である。29は口縁部である。胎土は燈色を呈し、0.5~1.5mm大の長石、小石を含む。器表の発色は燈色、口唇端部は拡張している。30の胎土は暗灰色を呈し、1mm大の長石を多く含む。器表の発色は暗茶色で、外面全体に薄く降灰している。縁帯幅は4.9cmを測る。中野編年8型式である。31の復元底径は17.9cmを測る。胎土は淡燈色を呈し、長石粒子、黒色粒子を含み、比較的精良である。器表の発色は赤紫色、内面全体に降灰している。

32は瓦質鉢型手焙りの口縁部である。胎土は暗燈色を呈し、雲母、白色粒子を含み、黒色の胎芯を残す。

33は瓦質の燭台の脚部である。遺存したのは長さ5cm、直径2.3~3.3cmを測る。空洞で、器厚7mmを測る。胎土は白色、器表は暗燈色を呈する。

図46-1~11は瓦である。1は宇瓦の瓦当である。瓦当部厚5.3cm、内区2.5cm、女瓦部2cmを測る。胎土は灰桃色を呈し、白色粒子を含む。花弁を中心飾りにして、対称に細い唐草を派生させている。瓦当部、女瓦面に砂粒が付着している。2~8は女瓦である。2の器厚は1.7cmを測る。胎土は灰色~白褐色を呈し、白色粒子、黒色粒子を含む。凸面は一条の凸線と斜め格子の組み合わせ文様、凹面は縦方向のナデ成形がなされているが、微かに布目痕が観察される。両面に砂粒が多く付着している。3の器厚は2.5cmを測る。胎土は黒灰色を呈し、雲母を多く含む。凸面は細かい格子目、凹面は縦方向のナデ成形である。4の器厚は2cmである。胎土は黒灰色を呈し、白色粒子を含み硬質である。両面共に縦方向のなで成形が成されているが、凸面には微かに斜め格子叩き目が観察される。両面共に若干砂が付着している。5の器厚は1.5cmである。胎土は白色を呈し、黒色粒子、白色粒子を含む。凸面に斜め格子叩き目文があり、凹面は縦方向のナデ成形が施されている。両面共に砂粒が多く付着している。6、7の器厚は1.3cmを測る。胎土は白褐色を呈し、白色粒子を含む。凸面は斜め格子叩き目文で、また、砂粒が多く付着している。凹面は縦方向のナデ成形、また、少量の砂粒の付着も観察される。8の胎土は灰燈色を呈し、白色粒子を多く含む。両面共に縦方向のナデ成形がなされており、また、若干、砂粒が付着している。9~11は丸瓦である。9は筒部の端部付近である。器厚1.8cmを測る。胎土は灰色を

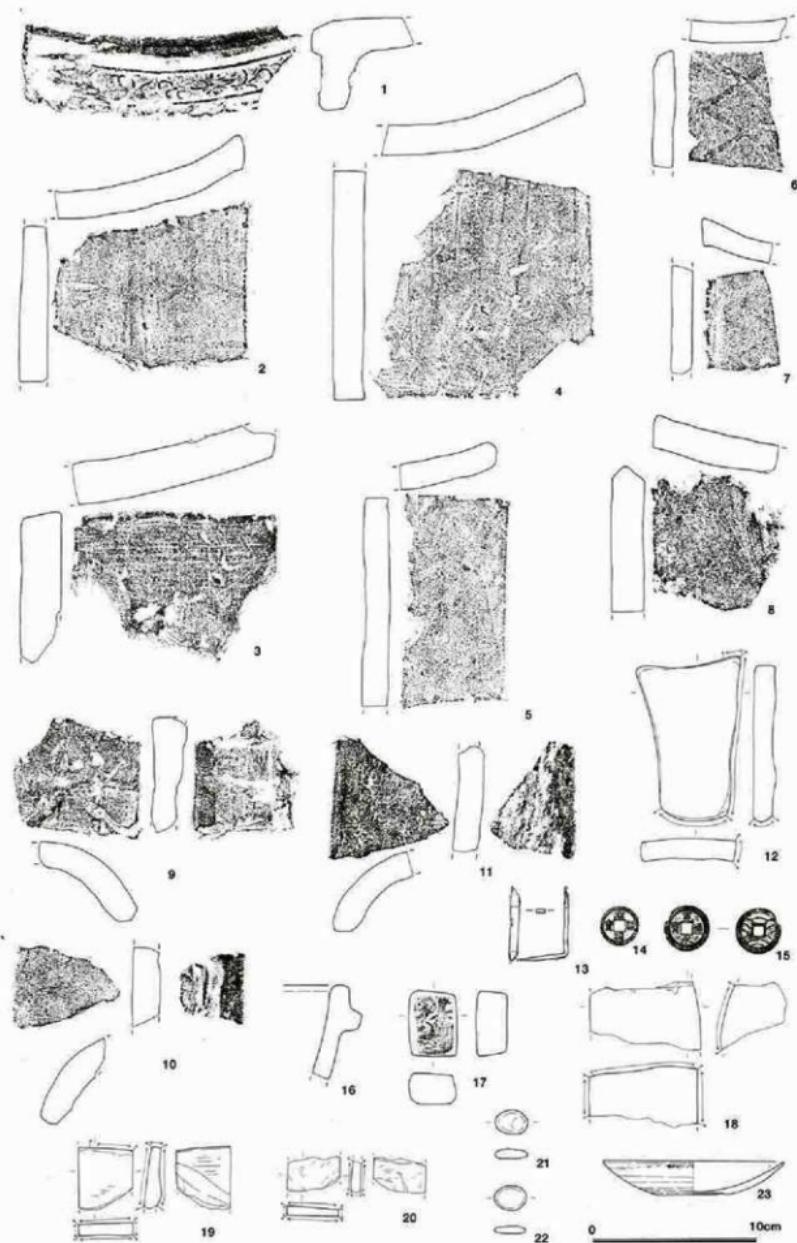


图46 表土层·扰乱层出土遗物(2)

呈し、白色粒子、黒色粒子を含み、淡橙色の胎芯を残す。凸面は横方向のナデ成形である。また、凹面には明瞭な布目の圧痕が観察される。10、11は筒部の小片である。器厚1.6~1.8cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、黒色粒子を含む。凹面に若干布目の圧痕が観察される。11の器厚は1.6cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、白色粒子、黒色粒子、赤茶色粒子を含む。還元炎焼成で、器表は黒色を呈する。凸面には微かに細い縦目叩き目文が観察され、また、凹面には明瞭な布目痕が見られる。

12は研磨痕のある製品である。常滑の体部の破片であり、側面の2箇所に使用痕が認められる。

13は鉄製品、鎌の断片である。

14、15は銭である。14は北宋銭、元祐通宝である。14は寛永通宝、裏面は青海波である。

16~22は石製品である。

16、17は滑石製品である。16は滑石鍋の破片である。全体に煤が付着しており、特に、体部外面の鈍の上下付近は顕著である。17はスタンプである。3×4cmの長方形に切り出し、文様を陰刻している。文様は判別不明である。

18~20は砥石である。18は流紋岩質凝灰岩の中砥である。産地は不明である。19、20は鳴滝産の仕上げ砥である。

21、22は碁石である。直径2cm、厚さ5mmを測る。黒色である。

23は近世の灰釉瀬戸の灯明皿である。口径11cm、底径4.5cm、器高2.1cmを測る。胎土は白褐色、釉調は灰白色である。内面のみの施釉であり、外面は轆轤目が顕著である。また、内面は3箇所に目跡があり、櫛目が2本ある。また、細かく密に貫入する。

第5章 まとめ

今回の調査では、岩盤上に展開する遺構群、また、部分的に土丹版築して造成された2面の生活面が検出された。検出遺構はやぐら4基、道路状遺構、溝17条、方形土壙2基、土壙20基である。出土遺物の様相から、14世紀代全般に展開し、15世紀前半には破棄されたと思われる。また、本地点の調査終了後、本遺跡地に西接する地点においても発掘調査が実施され、13世紀末～14世紀前葉と推定される鎌倉時代の庭園遺構が検出された。これは庭園史及び、考古学史上の大発見であった。本遺跡地は、同敷地内というほどの近距離に位置する。よって、今回は、西側の調査地点の成果をふまえつつ、若干の考察を加えまとめとする。便宜上、本調査地点をI地点、西側地区II地点として報告する。

II地点では、遺跡が存続する間、遺構群の軸方向は概ね磁北方向にあり、これは、I地点にも共通する。検出された道路状遺構は同軸方向を示し、また、さらにII地点内に位置する谷戸最上段の平場へと繋がってゆく様相を呈する。また、本址は岩盤をつづら折りながら南下して、やぐら1・2・4に向かう様相を呈する。やぐらへ向かう墓道であった可能性も指摘出来る。また、道の終点に検出された溝16は道を東西に横断しており、境界線としての役割をもつとも考えられる。或いは、門が存在し、宗教的空間への入り口となっていたのかとも想像出来る。

岩盤上には4基のやぐらが、当時の尾根筋に沿って開口部を穿ち展開する。4基の開墾時期、及び前後関係は不明であるが、やぐら4の床面に儀礼として置かれていたかわらけ群から、14世紀前半にはすでに開墾されていたと推定され、他の3基も様相から、さほど時期差を持たずに穿たれたと思われる。II地点においても、池址の後方(西側)にやぐららしき痕跡が確認されている。池址の存続期間が13世紀末葉～14世紀前葉と考えられていることから、I地点と同様な時期に開墾されたやぐらであるとも考えられる。やぐら4の前面の平場には同軸方向を示す数時期の遺構群が展開する。出土遺物が希少であるため、時期別分類は不能であるが、本来のやぐら前面としての場から、据表を置く等の日常的な場へと変化している様相がみてとれる。それはやぐら内においても同様の傾向を示し、埋葬儀礼に無関係な井戸が穿たれる。また、やぐら4の南側の建物は、検出状況からはやぐらに付随するか否かは判別不能であるが、やぐら前面の構築物ではないので、儀式に関するものではない可能性は高い。

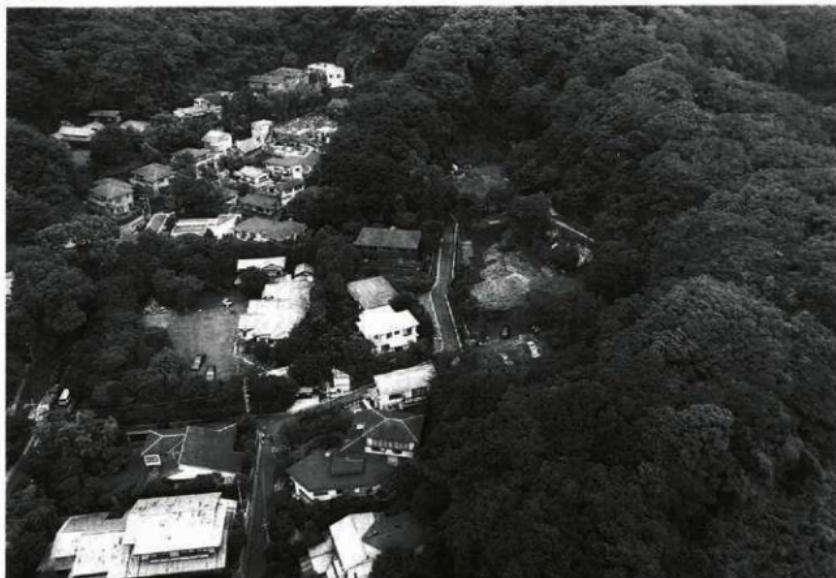
また、やぐら前面に穿たれた溝群は、南北方向に整然と並ぶ。山裾に穿たれた溝2は排水溝としての役割を担っていると思われが、他は検出状況、出土遺物からは目的、用途は判然としなが、前述同様、日常的な場へと変化していく結果の産物と考えられる。

調査区西側の版築された生活面は出土遺物からII地点の2・3面に相当する。廐穴等が検出されており、II地点の裏手に当たるのであろうと想定される。

上記の様相を呈した本遺跡地は15世紀前半には埋められ破棄される。それ以降、本遺跡地の様相は不明である。以後、大正期に至り、三菱財閥四代目岩崎小弥太氏が、母親の療養のための別荘を造成した痕跡が本遺跡地の初見となる。現代に至り、企業の保養施設となり、調査時点での現状は、資材置場等の荒地と化していた。

今回、初めて「無量寺跡」の中心部の調査となったが、残念ながら、無量寺であるという調査結果は得られなかった。しかし、本遺跡地内に検出されたやぐら群の様相、また、遺跡地を巡る岩壁にもやぐらが散見出来、遺跡の存続期間中は、この谷戸に寺が存在した可能性は高く、II地点の成果、及び、今回の調査で、より遺跡地の性格が明確になったと思われる。

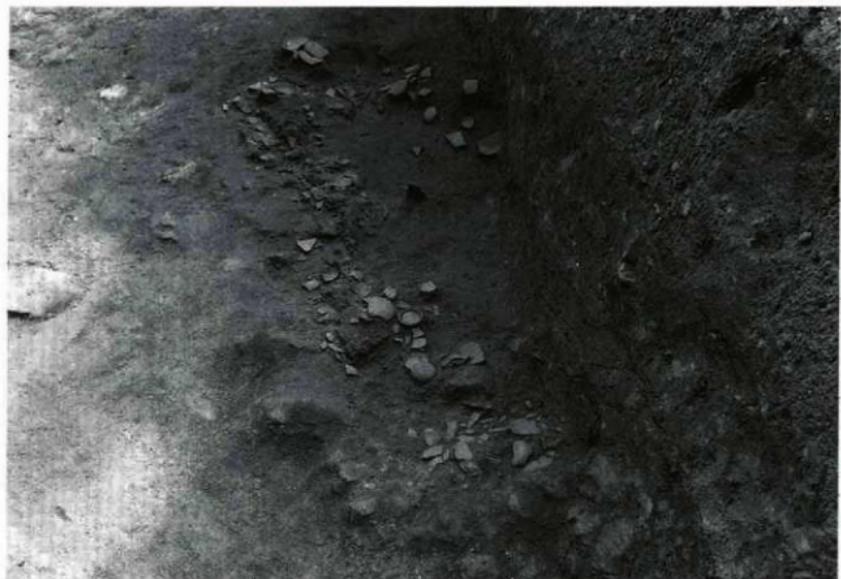
図版 1



▲ A. 調査地点遠景（南東上方から）



▲ B. 表土掘削（東から）



▲ A. 1面からわけ溜（北東から）



▲ B. 2面全景（南東から）

図版 3



▲ A. 2面全景（北東から）



▲ B. 2面土壤3（東から）



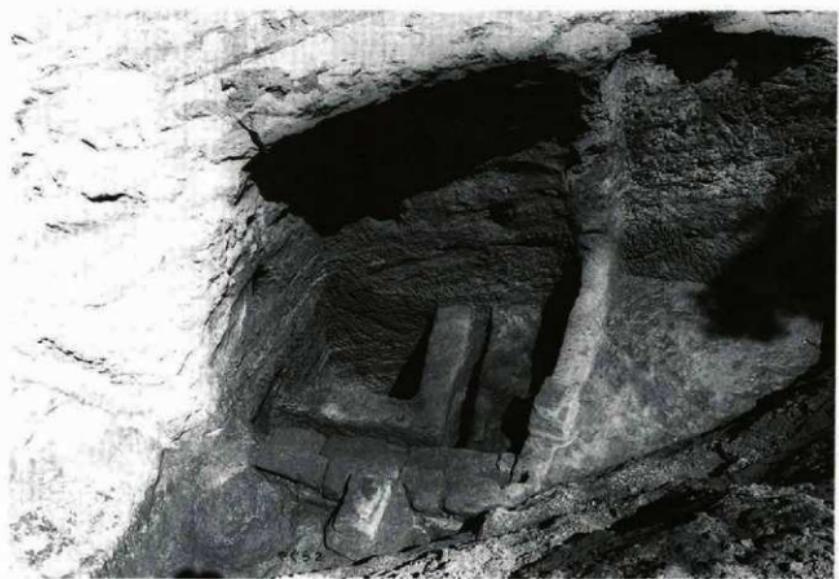
▲ A. 2面土留め（東から）



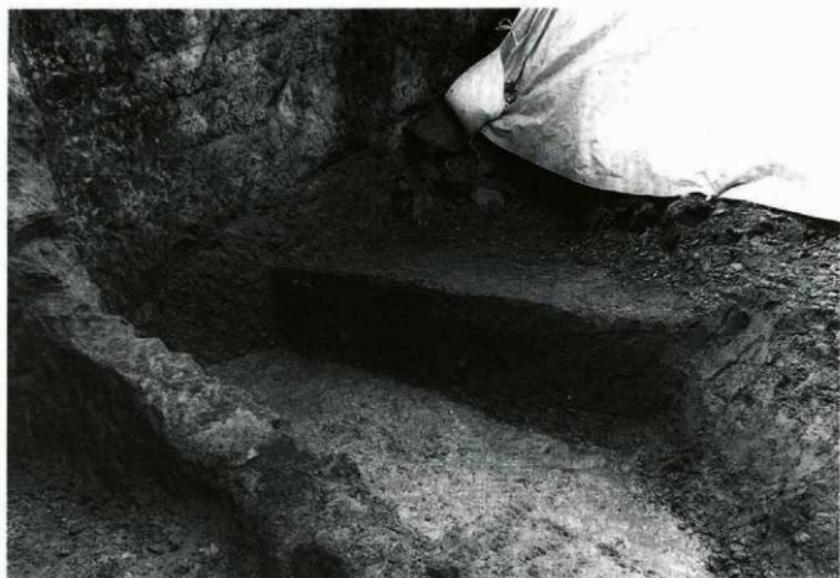
▲ B. 同上（北東から）



▲ A. やぐら1・2全景（南東から）



▲ B. 同上近景（南から）

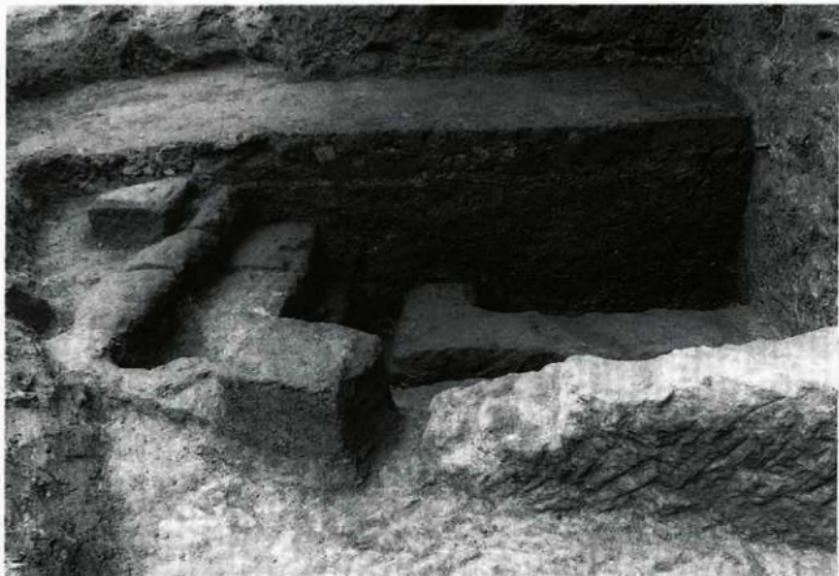


▲ A. やぐら 1 覆土 NS セクション

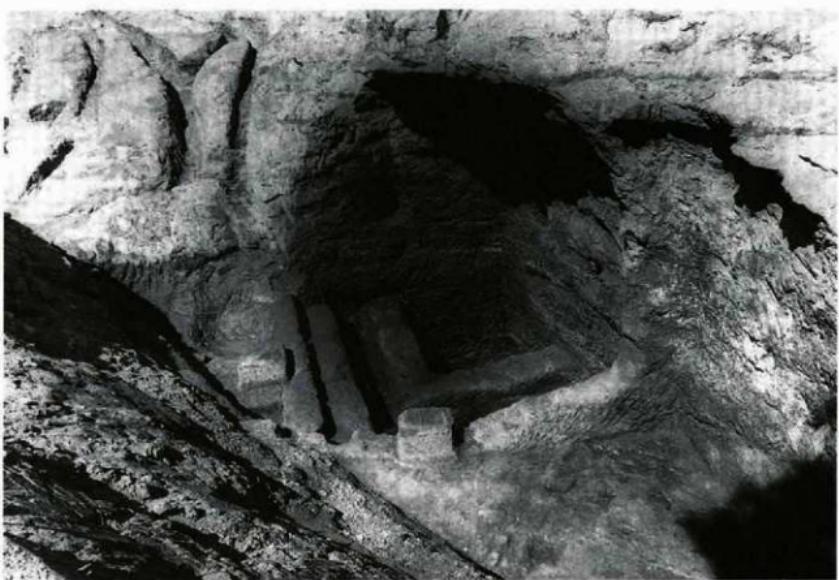


▲ B. やぐら 1 床面近景 (南から)

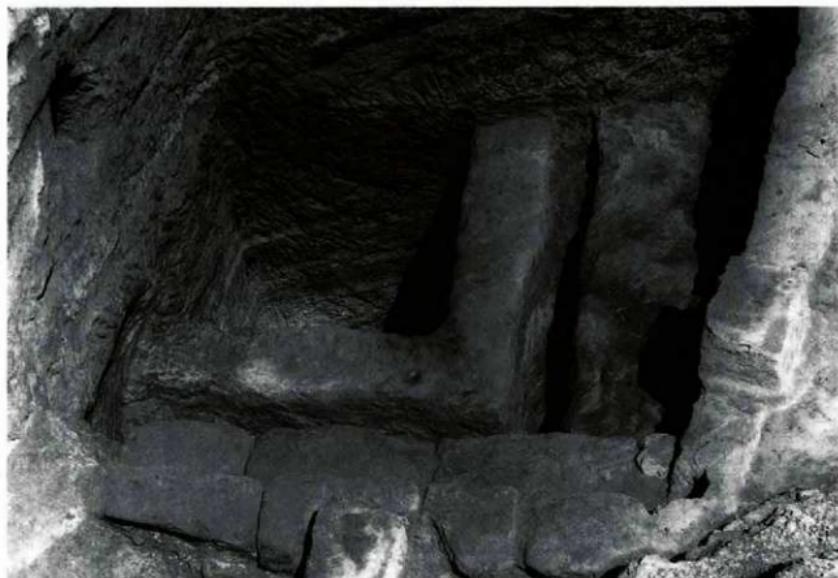
図版 7



▲ A. やぐら2覆土SNセッション（東から）



▲ B. やぐら2全景（南東から）

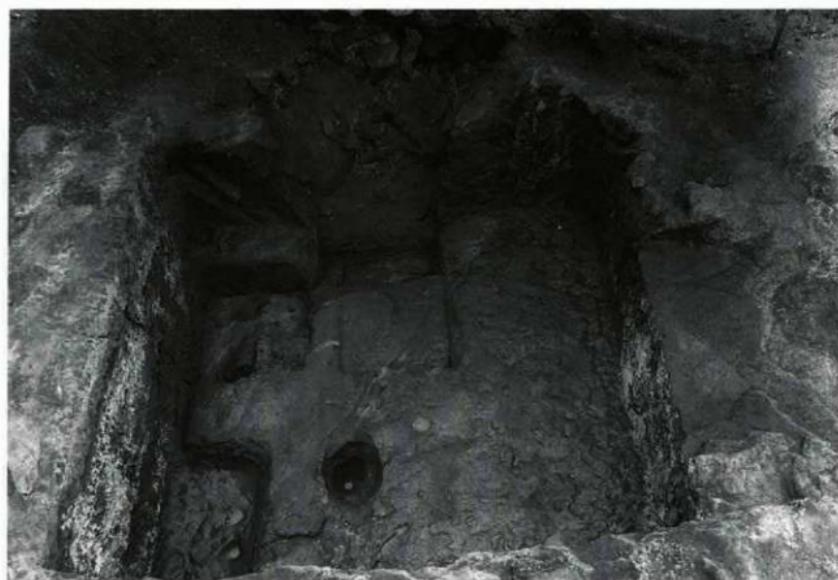


▲ A. やぐら 2 内検出井戸（南から）

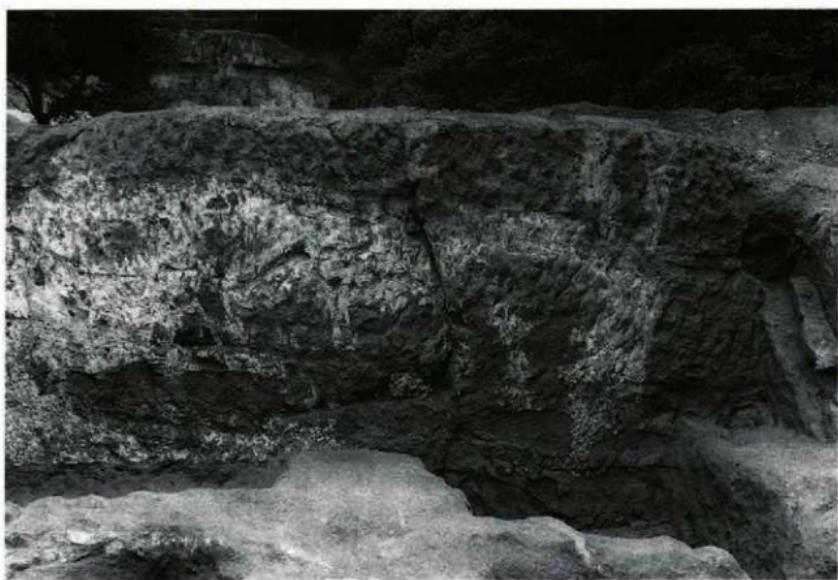


▲ B. やぐら 3（南から）

図版 9



▲ A. やぐら 3 (西から)



▲ B. やぐら 3 北壁 (南から)

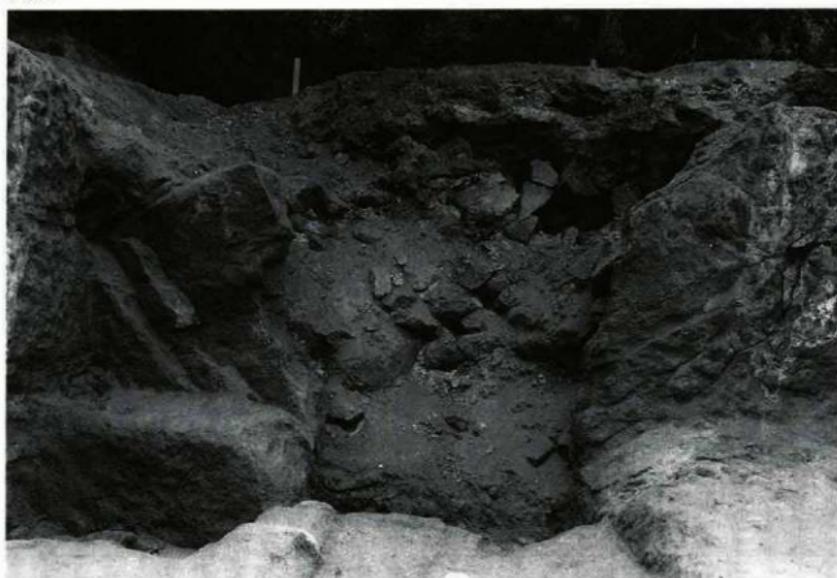


▲ A. やぐら3南壁（北から）

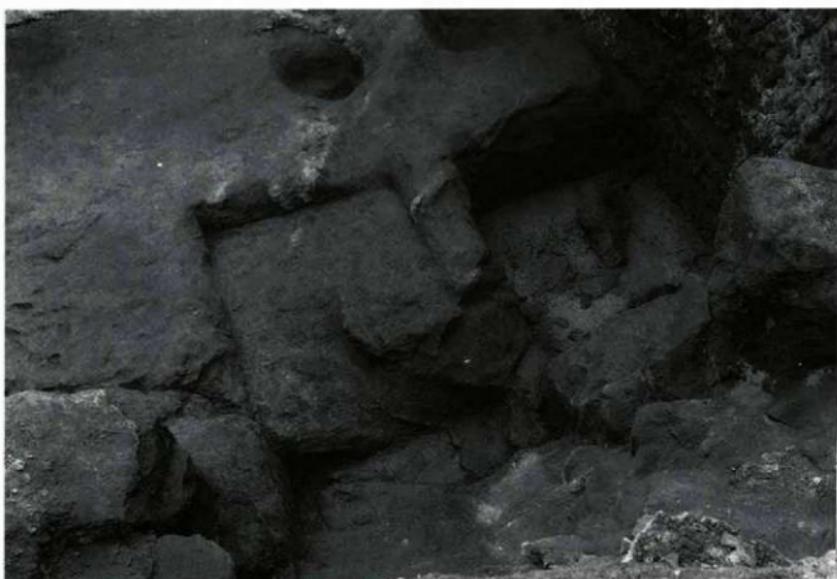


▲ B. やぐら3奥壁（東から）

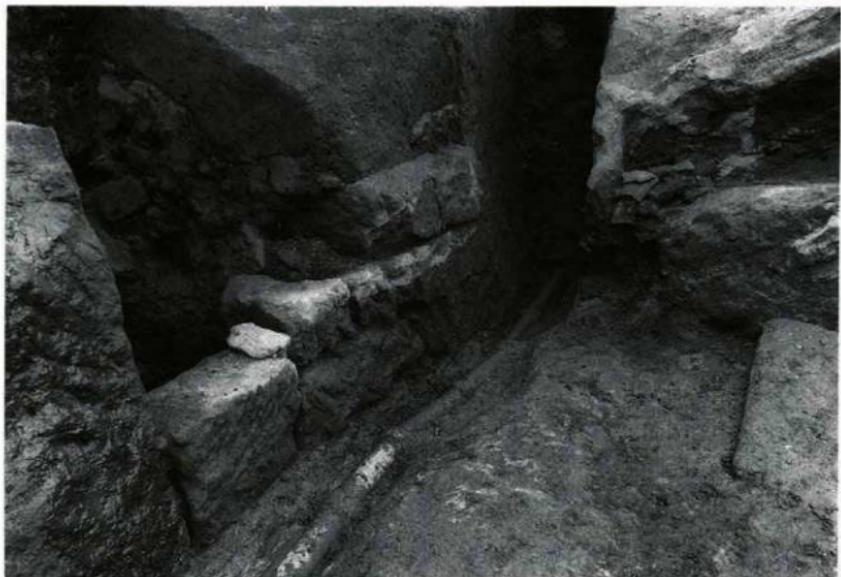
図版11



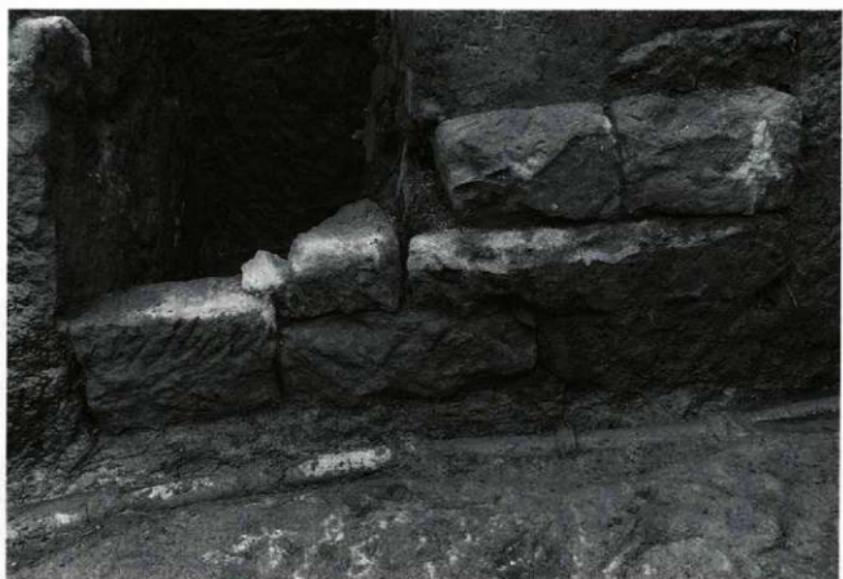
▲ A. やぐら3入口部（西から）



▲ B. やぐら3入口階段部（東から）



▲ A. やぐら4閉塞石（南から）



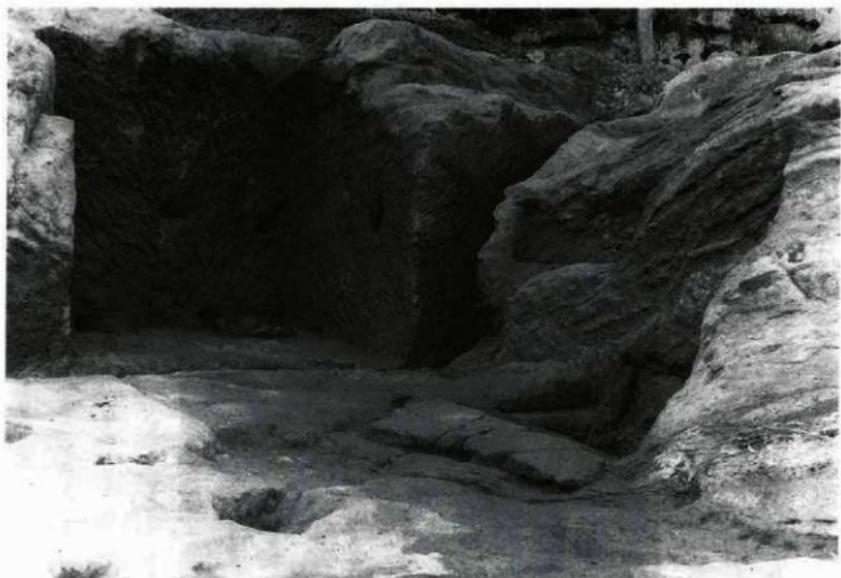
▲ B. 同上（東から）



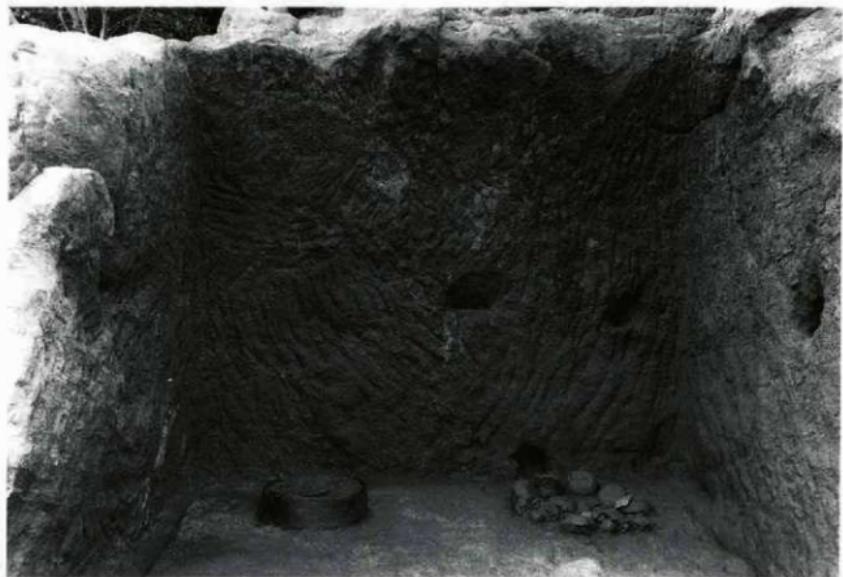
▲ A. やぐら4覆土出土手鏡り（南から）



▲ B. 同上観（南から）



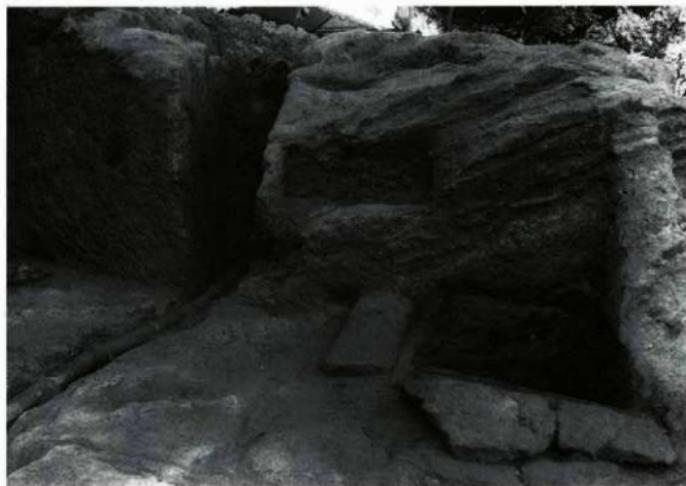
▲ A. やぐら4全景(南東から)



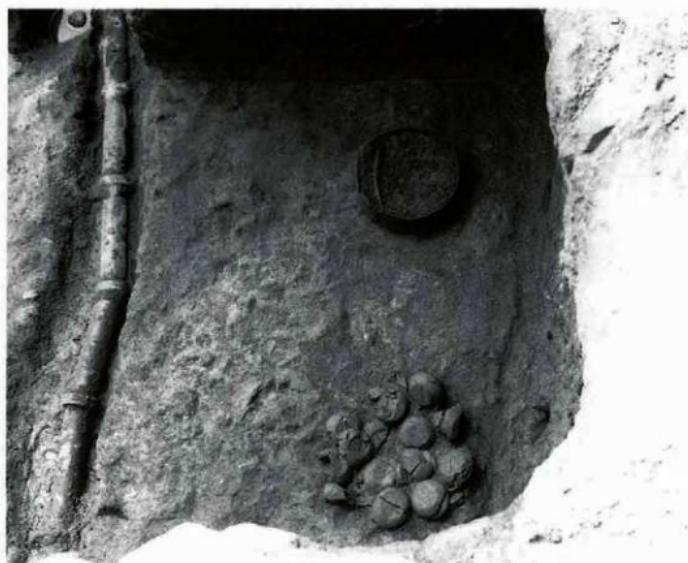
▲ B. やぐら4奥壁(東から)



▲ A. やぐら4南壁（北東から）



▲ B. やぐら4北壁（南から）

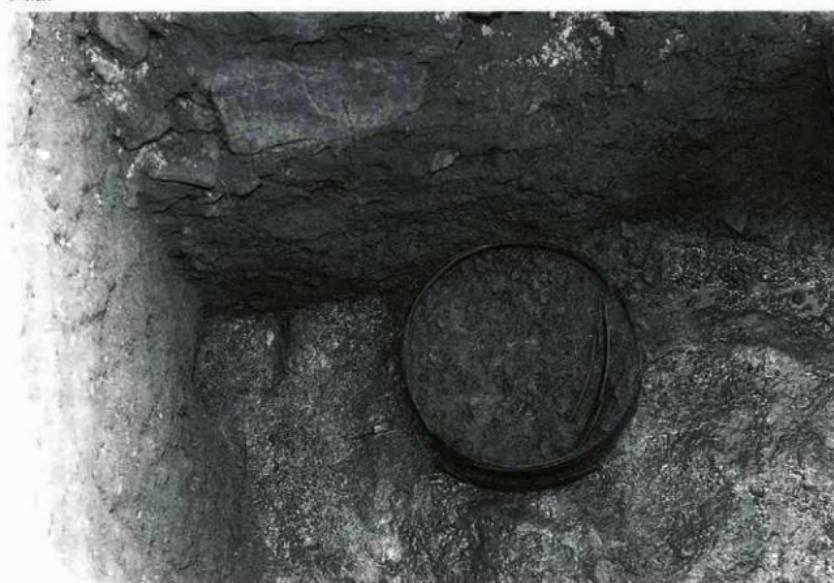


▲ A. やぐら4床面（北から）



▲ B. 同上近景かわらけ群（東から）

図版17



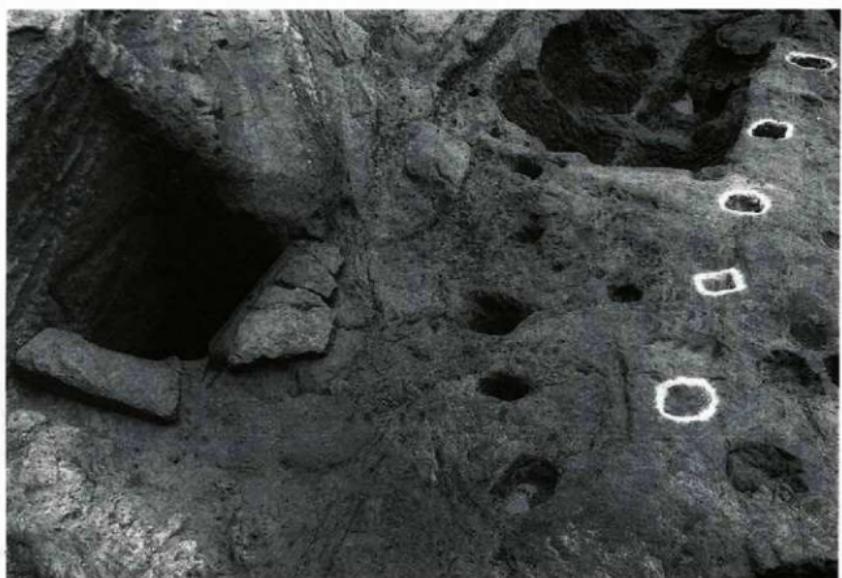
▲ A. やぐら 4 床面近景曲物（東から）



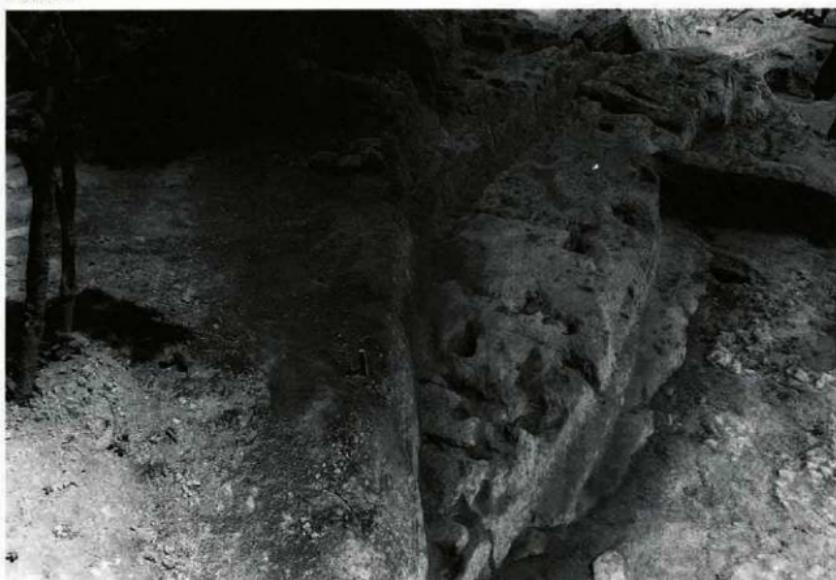
▲ B. 同上曲物内覆土除去後（東から）



▲ A. 建物1・柵列1（南から）



▲ B. 柵列1（西から）



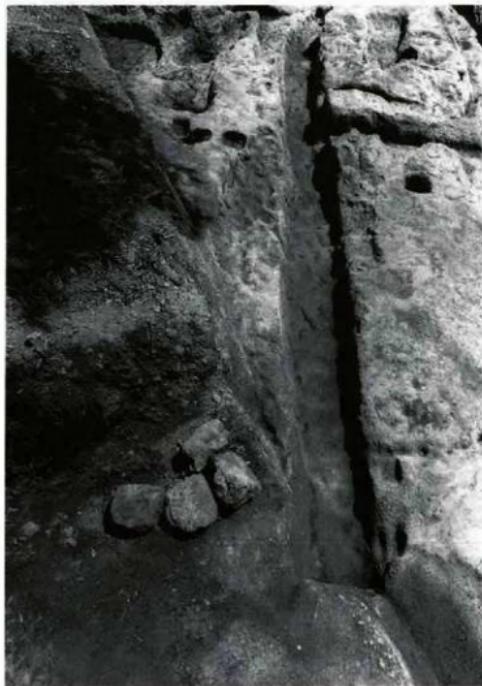
▲ A. 岩盤上検出北西部遺構群（西から）



▲ B. 同上（東から）

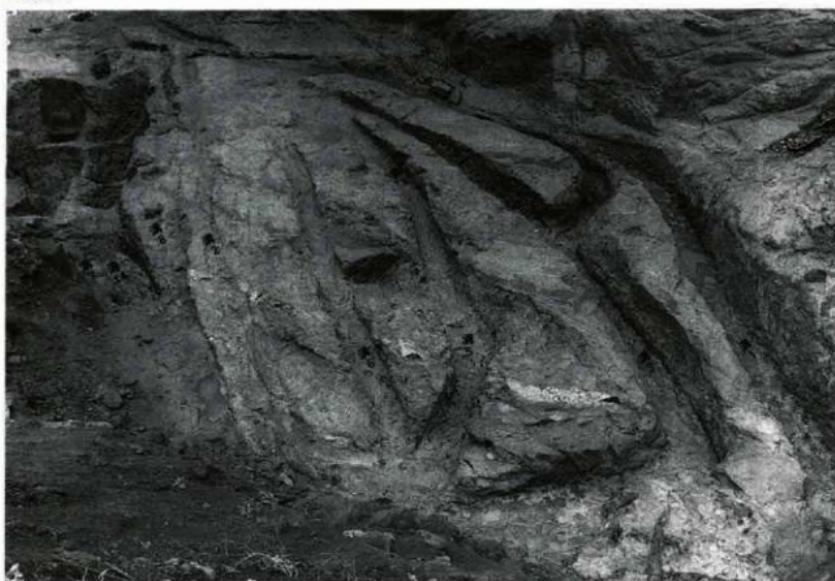


▲ A. 满11・12方形土壙 1・2 (北から)



▲ B. 满10 (北西から)

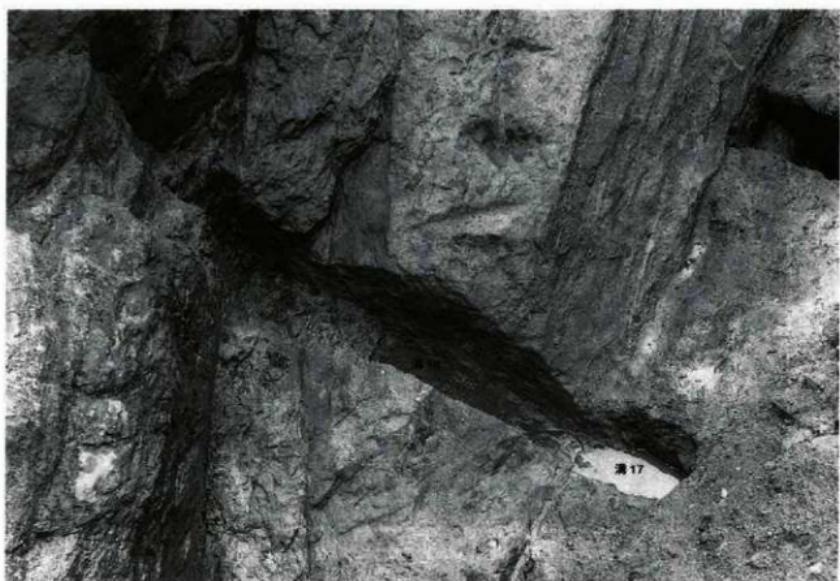
図版21



▲ A. 溝1~8・14(南から)



▲ B. 同上遠景(南東から)



▲ A. 溝16・17（西から）



▲ B. 土壌8～11・17・18（南から）

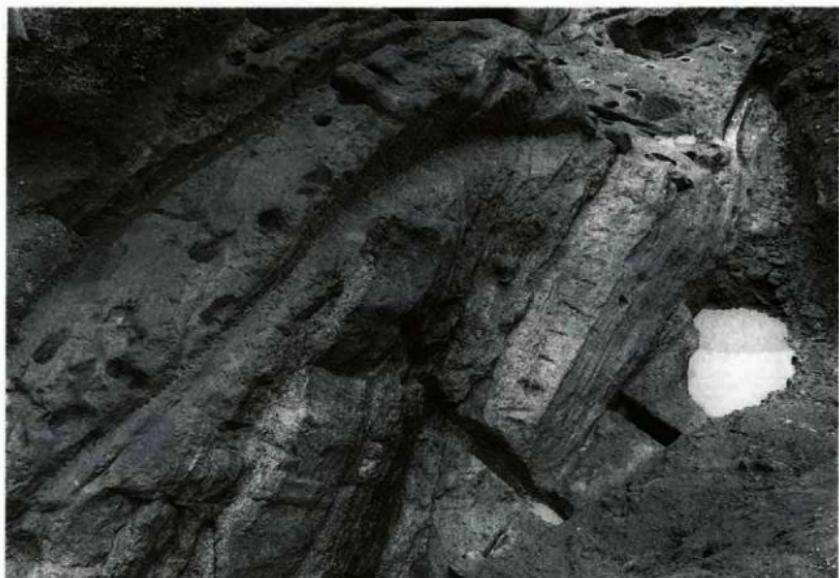
図版23



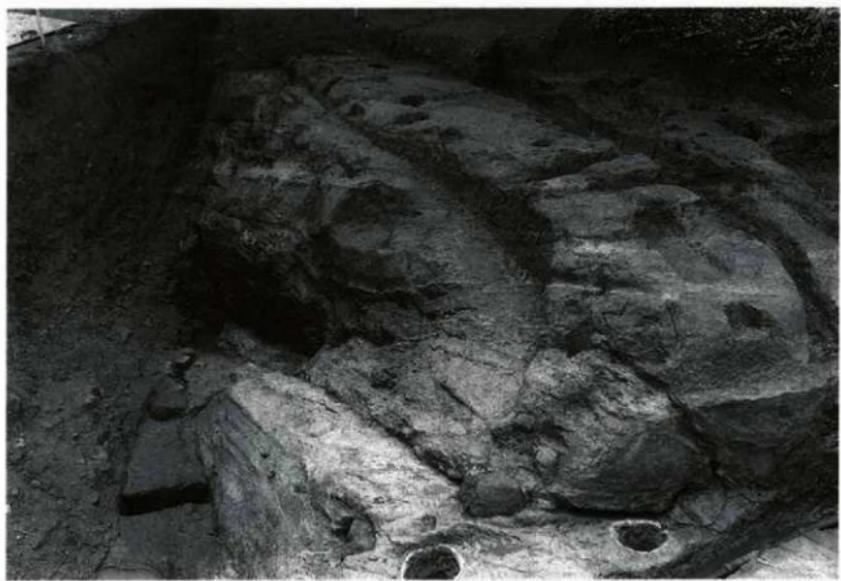
▲ A. 岩盤上検出東部遺構群（西から）



▲ B. 道路状遺構・溝16・17（西から）



▲ A. 道路状遺構（西から）



▲ B. 同上（南東から）

図版25



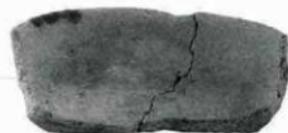
6-1



6-18



6-40



6-3



6-22



6-42



6-4



6-34



6-43



6-6



6-35



6-44



6-8



6-39

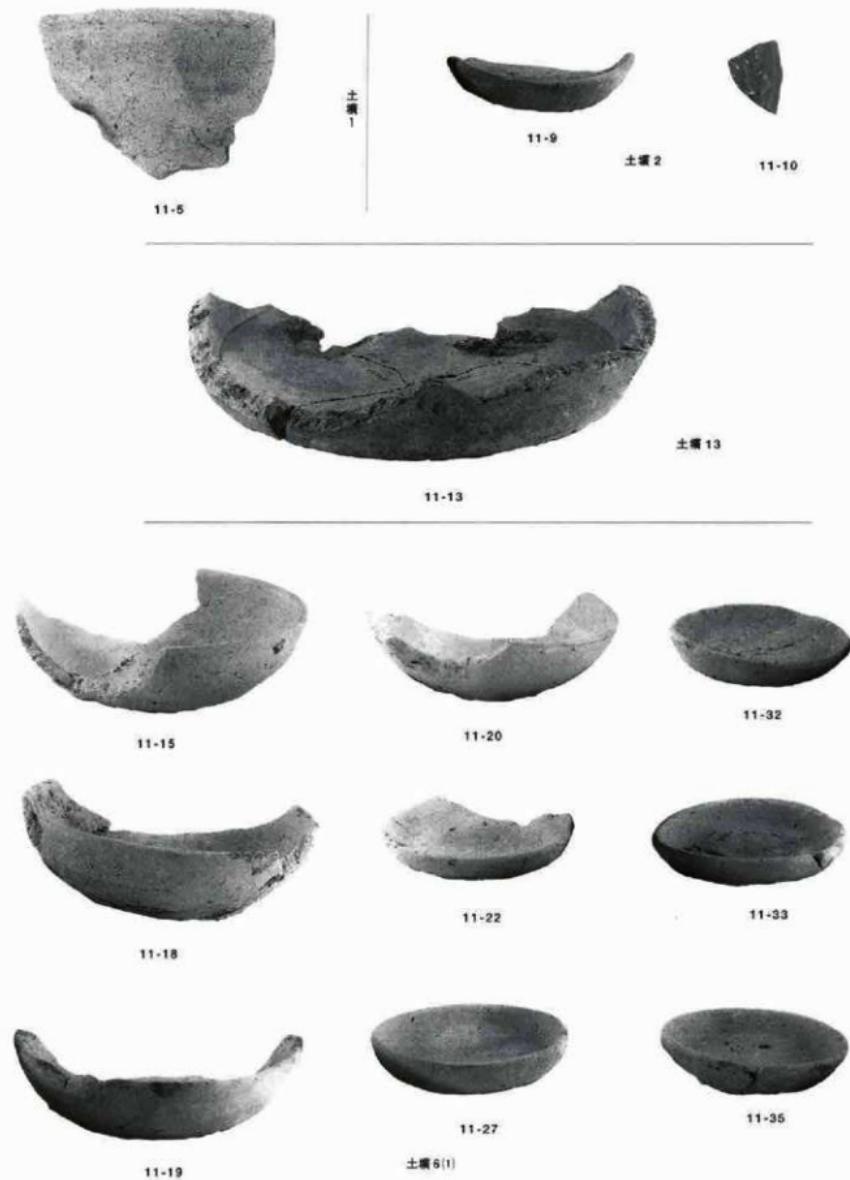


6-9



9-5

出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

図版27



11-38



11-39



11-40

土
器
6
(2)



11-42



11-47



11-44



11-50



11-55



11-45



11-53

土
器
6
内
一括
投棄



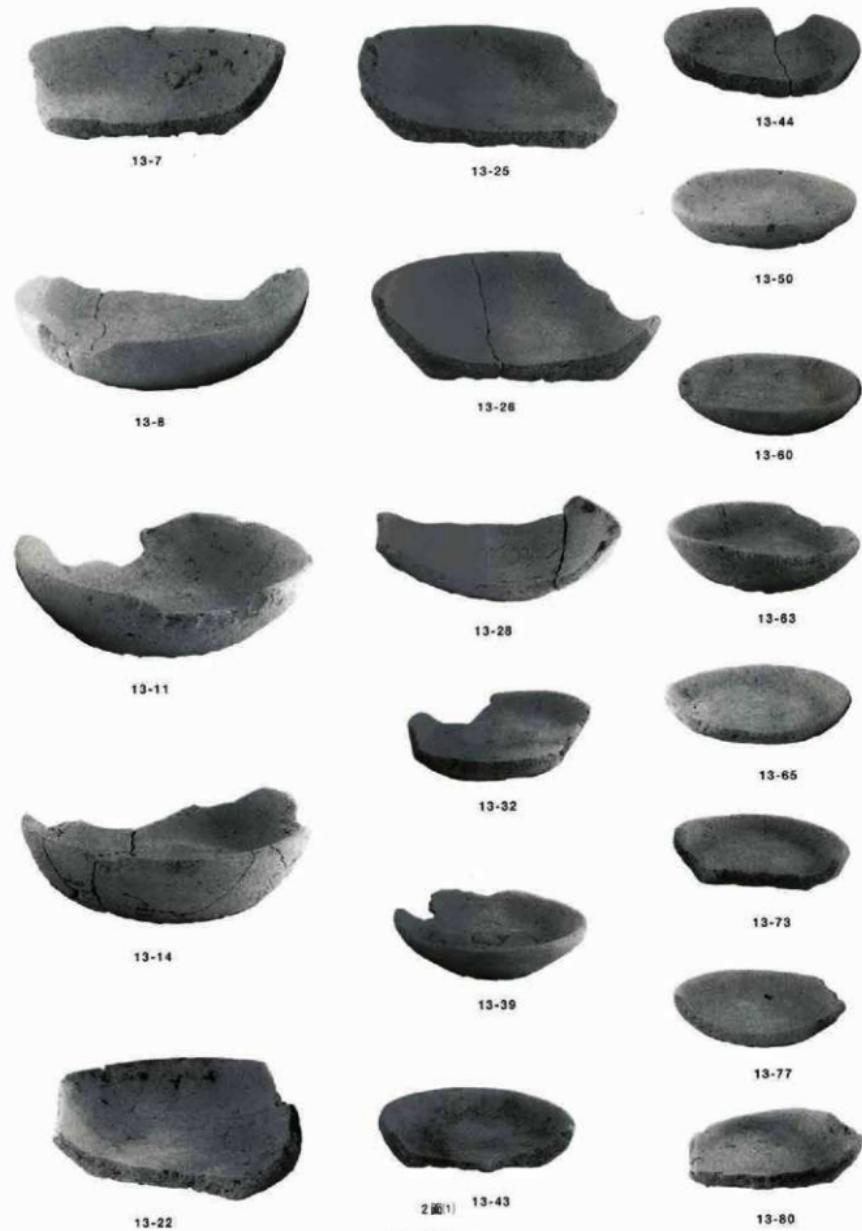
11-61



11-60

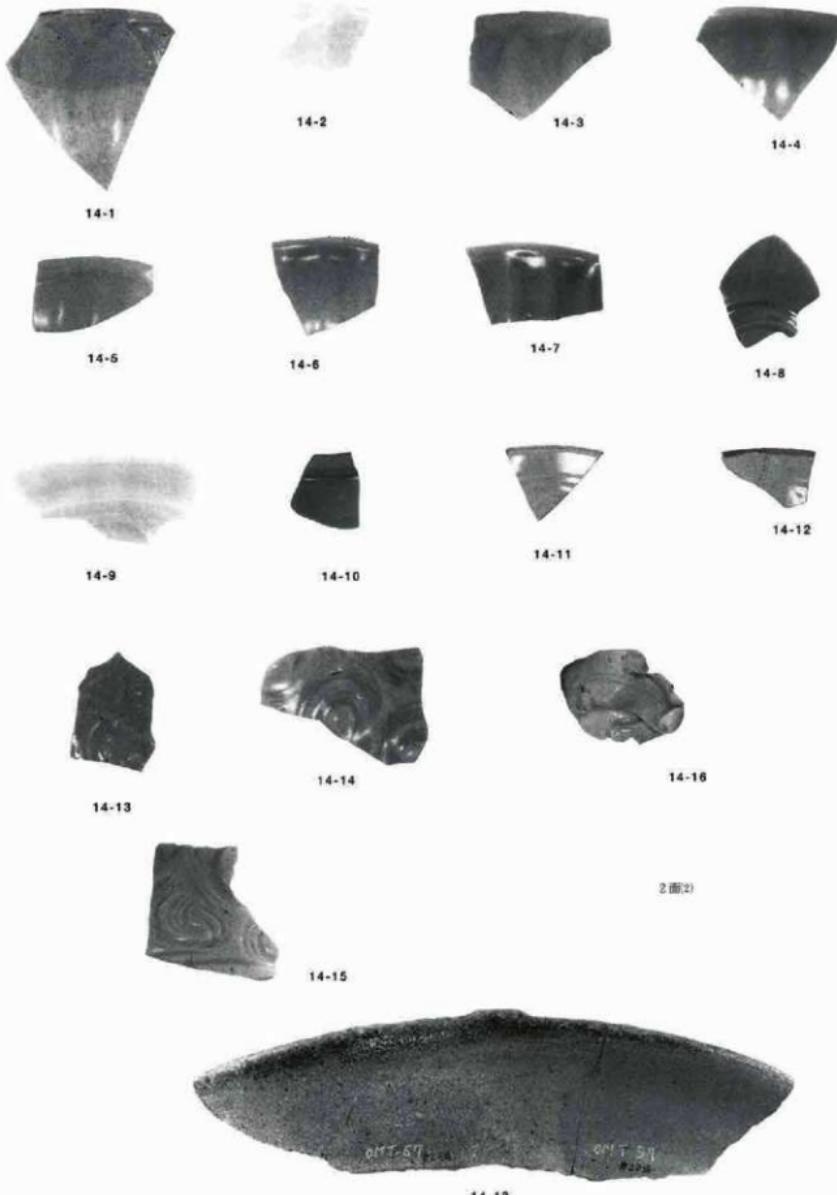
土
器
13

出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

図版29



出土遺物 (5)



14-22



14-23



14-24



14-25

2面3



17-1

17-14

やぐら2

出土遺物 (6)



19-1



19-2

やぐら3

図版31



21-2



21-16



21-3



21-7



21-8



21-19

やぐり



24-3

上



24-4

下



24-5

やぐら4内井戸

出土遺物 (7)



24-15



24-16



24-19



24-23



24-25



24-26

空
火
窓
縁



24-28



30-4

溝
2
3



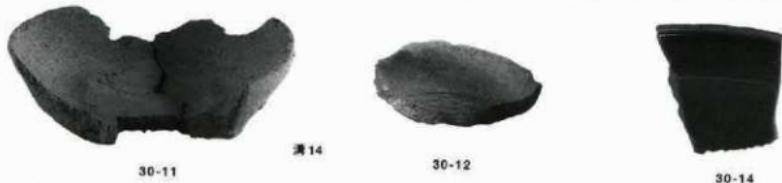
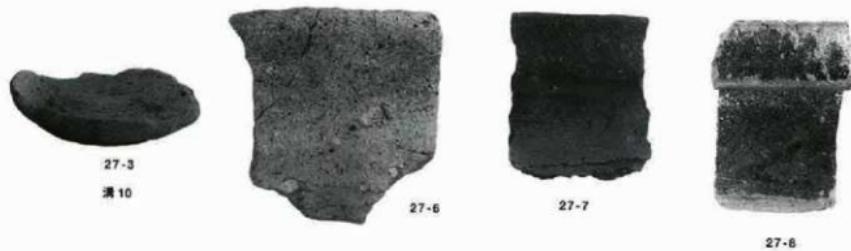
溝
2

30-1

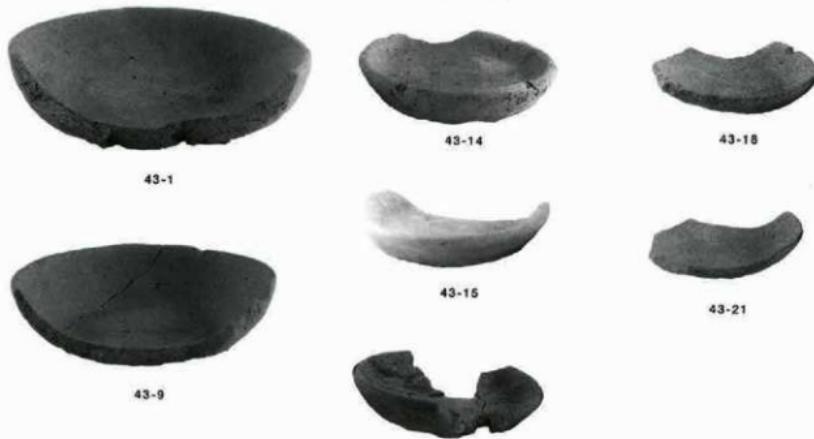


30-5

图版33



包含层出土遗物(1)



出土遗物 (9)



43-25



43-26



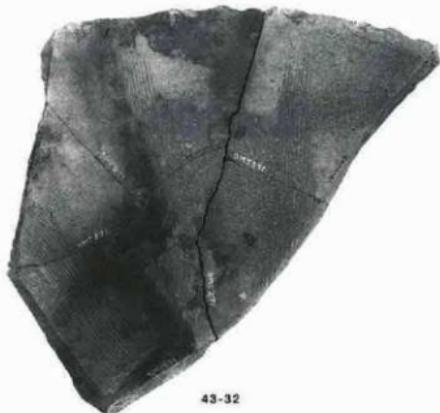
43-30



43-28



43-31



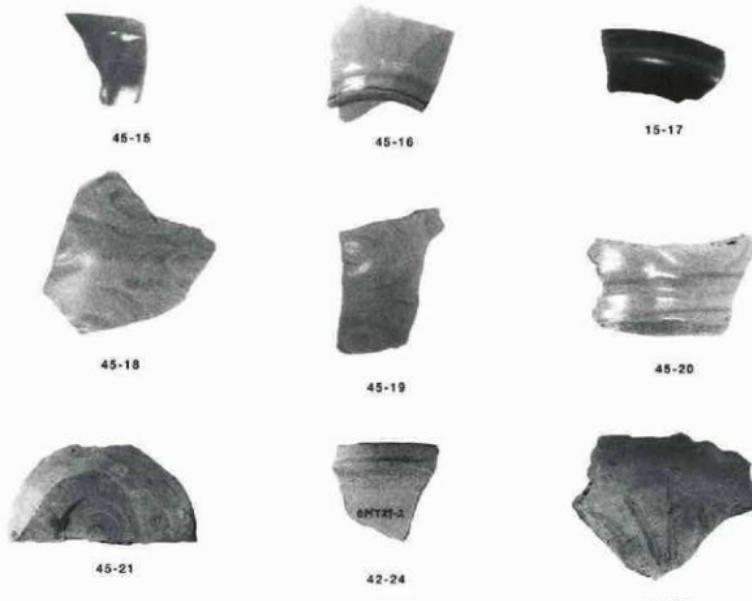
43-32



44-1

出土遺物 (10)

図版35



46-16

表土層・搅乱層



46-23

出土遺物 (1)

たまなわじょうあと
玉縄城跡 (No.63)

植木字相模陣425番 3外

例　　言

1. 本報は鎌倉市植木字相模陣425番3外に所在する玉繩城跡の発掘調査報告である。
2. 調査は個人事業として実施された宅地造成工事に先立って実施された。調査面積は160m²である。
3. 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成14年7月15日から同年8月14日まで行った。
4. 調査体制は以下の通りである。
調査担当者 継 実
調査員 根本志保
調査補助員 町井俊逸 岩崎卓治
調査協力 (社) 鎌倉市シルバー人材センター
5. 本報の執筆は第3章第2節を宗基富貴子が、その他を継 実が担当した。資料整理作業は、執筆者の他に宗基秀明が行った。
6. 本報に掲載した挿図の縮尺については、挿図名の脇に明記した。また、図中にある標高数値はすべて海拔高である。
7. 発掘調査における出土遺物、図面、写真などの資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 調査地点の諸環境	201
1. 地理的・歴史的環境	201
2. 周辺の調査例	201
第2章 調査の概要	203
1. 調査経過	203
2. 基本層序	203
第3章 調査成果	203
1. 地業面と検出遺構	203
2. 出土遺物	212
第4章 まとめ	213

挿図目次

図1 玉潤城範囲と既調査地点	200
図2 玉潤城中心部と調査地点	202
図3 土壁と地業面の土層堆積状況	204
図4 3面遺構配置図	205
図5 2面遺構配置図	208
図6 道路状地業とピット	210
図7 1面遺構配置図	211
図8 出土遺物	212
図9 地業面変遷図	214

図版目次

図版1	215
図版2	216
図版3	217

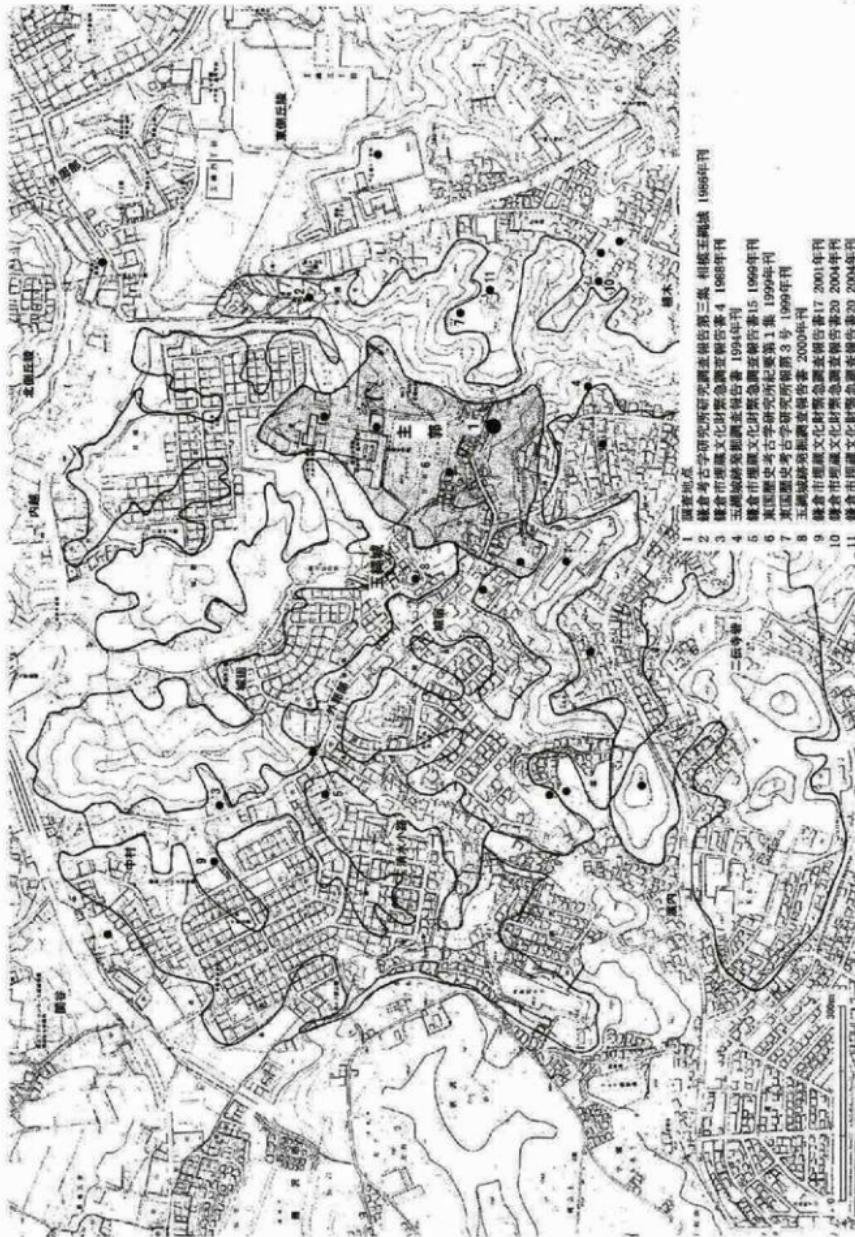


図1 玉环城範囲と既調査地点

第1章 調査地点の諸環境

1. 地理的・歴史的環境

本調査地点はJR東海道線大船駅の西方約1.5kmに位置する。遺跡地一帯は標高50~80mの山々の間に複雑に発達した大小さまざまな谷が樹枝状に入り組んだ地形を呈している。このような天然の要害たる地形故か、戦国時代には後北条氏によって城郭（玉繩城）が築かれている。玉繩城は三浦氏制圧のため、永正9（1512）年、北条早雲により築城された城郭である。三浦氏を討った後、後北条氏は関東一円に支配域を拡大し、四代目の氏政と次の氏直の代には関東の大半を掌握するに至っている。天正18（1590）年には徳川家康を先鋒とする豊臣秀吉の軍勢による小田原攻めにより玉繩城も開城を余儀なくされるが、その間、房州の里見氏、越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄などが相次いで攻め入るもこれによく耐え、江戸城・川越城とともに関東の三名城と呼ばれるような難攻不落な名城であったらしい。玉繩城の本丸はいくつもの丘陵が集結する中心部に設けられ（現、清泉女学院校地）、その周囲を堀と土塁によって囲まれている。昭和30年代頃まで、城郭形態はあまり損なわれることなく旧状をよく残していたようであるが、その後の度重なる開発によって地形そのものが大きく変貌してしまい、現在では往時の姿をおおよそ窺い知ることはできなくなってしまった。今回の調査地点は本丸の表口直下、「御殿曲輪」と呼ばれる1)曲輪の南東隅に位置する。この曲輪は「七曲坂」によって「植谷戸」と呼ばれる谷底低地と通じている。植谷戸は本丸直近の外郭部として家臣や職人の居住域の一つとして機能していたものと考えられており2)、今回の調査地点は本丸と居住域を結ぶ、防衛上、大変重要な地点であるといえよう。

2. 周辺の調査例

玉繩城本丸及びその外郭域ではこれまでに20ヶ所に近い地点で発掘調査が実施されている（図1）。これらは主に学校や住宅の建設に伴って実施され、堀・土塁・切岸状造構といった城郭の防衛造構の他に、掘立柱建物址・溝・土壌・井戸などの生活造構などが発見、調査された。調査はこれまで丘陵部に集中し、谷部を主とする周辺低地部の状況は明らかではなかったが、この数年は植谷戸内で相次いで発掘調査が実施され、低地部の状況も次第に明らかとなりつつある。特に平成11年に実施された七曲坂下の調査では、掘立柱建物址・井戸・土壌・溝・やぐらなどの造構群が発見され、小谷内を造成して生活あるいは寺院空間として利用している状況が確認されている（大畠1999）。

註

- 1)「御殿曲輪」との名称は『風土記稿』によるが、『鎌倉市史・考古編』ではここを「七曲の曲輪」と称している。
- 2)「風土記稿」によると、北条氏繁の室が住んだことから、七曲殿と称されたと記されている。

参考文献

- 赤星直忠 1959 「鎌倉市史・考古編」吉川弘文館。
大河内勉・菊川英政 1994 「玉繩城跡発掘調査報告書」玉繩城跡発掘調査団。
大畠明子 1999 「玉繩城址(No.63)植谷戸地点発掘調査概報」『東国歴史考古学研究所報』第3号 p.5-6。

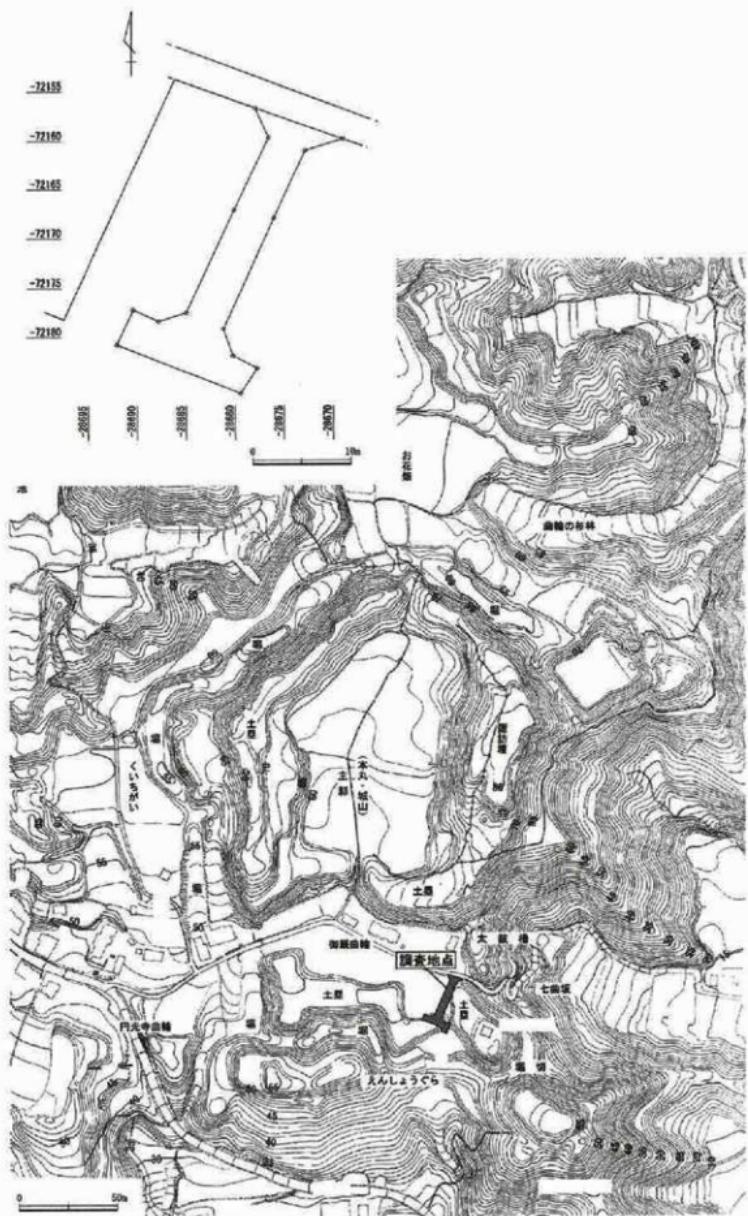


図2 玉綺城中心部と調査地点 ($S = 1 : 2500$)

玉綺城跡発掘調査報告書（1994年刊）より転載・加筆

第2章 調査の概要

1. 調査経過

発掘調査は平成14（2002）年7月15日より開始され、同年8月14日に終了した。調査に当たっては、事前に行われた確認調査の成果に基づき、現地表下30~40cmまでは重機（バック・ホー）を用いて近世以降の耕作土や盛土の大半を除去した。近世耕作土の直下には地業面が確認されていたので、耕作土の最下位は人力によって掘削を行い第1面を検出した。地業面は合計3面が調査で検出され、これに伴う土壘、ピット、溝といった遺構が各面で少數確認された。また遺物の出土については、図8に図示したとおり、若干量にとどまった。

2. 基本層序（図3）

遺跡の堆積土層は図3に示すとおりである。最終地業面を覆う堆積土（I層）には宝永スコリアが含まれ、かかる地業面が中世末か近世前期まで機能していた様子が窺える。II層には宝永スコリアは含まれない。泥岩の小塊や粒子が多く含まれており、堆積地点からみると地業の積み増しかも知れない。III~V層は地業土である。泥岩小塊を少量含む暗褐色粘質土を用いる点は各土層に共通しており、地業面にあたる部分には粉碎泥岩が敷かれる箇所がみられる。なお、本調査地点の基盤層は泥岩、ローム土、暗褐色土となっている。

第3章 調査成果

1. 地業面と検出遺構

ここでは調査において検出された3期にわたる地業面とそれに付随する遺構群について、時期的に古いものから順に説明する。

第3面（図4）

概要

基盤層の削平により平場が形成される段階である。地業面の標高は50.9~51.0mで、本丸（標高約60m）の平場とは約10mの比高差を有する。基盤層がロームまたは泥岩の部分はそのまま削平面が使用されるが、調査区南西隅に一部みられる暗褐色土が基盤層となる部分では粉碎泥岩が表面に薄く敷かれている。調査区北東側では土壘の縁に沿ってテラス状に面が設けられる。そこから更に10~20cm下がって平場となるが、その境には排水溝と思しき溝が設けられている。なお、土壘上（約2.5m上方）には平場が展開しており、現在は煙地となっている。

一方、調査区南側でも壇状に小規模の平坦面が形成される。平場との比高差は約150cmを測り、面上は遺構もなく平坦である。また、調査区南東端部では平場から更に60cmほど低く面が形成される。堆積土層を観察した限りでは、近世以降に新たに形成された可能性が窺える。

平場では、建物の可能性が窺われるピットなどの遺構群が検出されたが、このうち、調査区南側では、

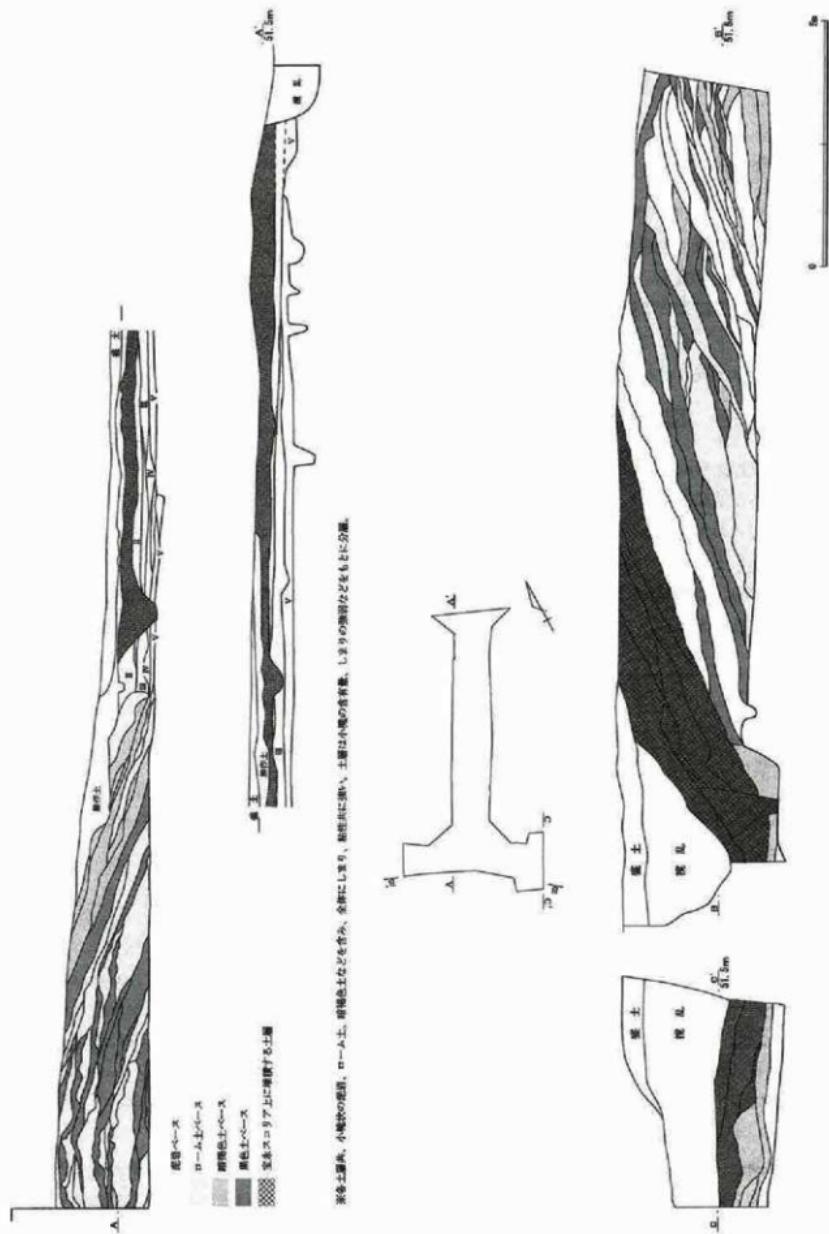


図3 土壌と地表面の土層堆積状況 ($S = 1/80$)

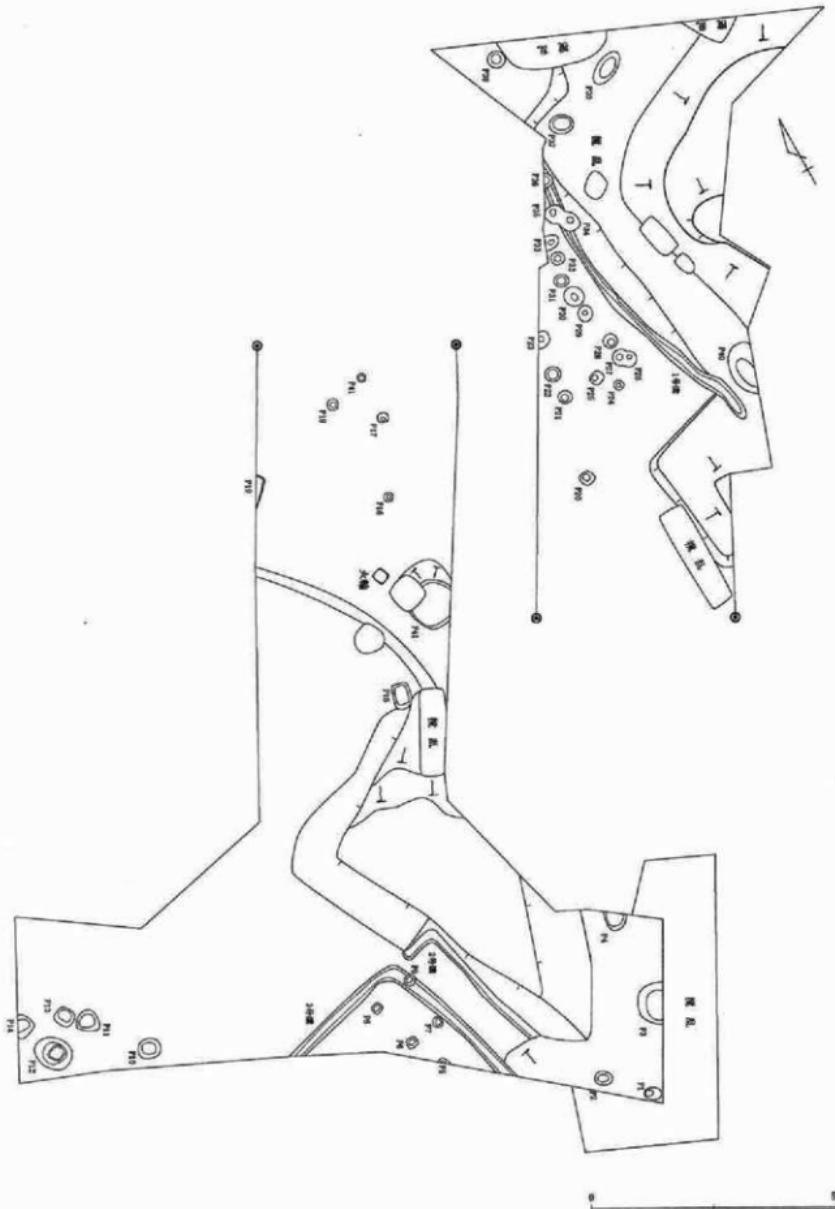


図4 3面造構配置図 ($S = 1 : 100$)

途中で遺構が廃絶し、地表面上に土壘が設けられる。土壘は平場とその前面（南側）にある丘陵崖面との間に形成され、少なくとも、次の第2面でも引き続き機能するようである。

検出遺構

平場上には数多くの遺構が設けられる。以下、遺構種別に詳述する。なお、土壘については第2面の項で詳述する。

溝状遺構

1号溝

調査区北東端で検出された。テラス面と平場の境に設けられ、排水溝と考えられる。規模は横幅が15～20cmを測り、深さは5cm未満と浅い。

2号溝

調査区南端で検出された。壇状の平坦面とほぼ平行するかたちで設けられる。平坦面を一部削平するような位置にある事から、当初は存在しなかったのかも知れない。東側が近世以降と思しき削平によつて失われているため、平面形は不明であるが、現状ではL字形を呈する。溝の規模は、平面が東西約80cm、南北160cm以上を測り、横幅、深さについては共に約20cmを測る。覆土は土壘構成土であり、土壘構築まで溝が機能していたものと思われる。

3号溝

調査区南端、2号溝の南側で検出された。遺構の大半は調査区外にあり平面形は不明であるが、溝に囲まれた内側で検出されたピットのいくつかが掘立柱建物のものと仮定すれば、建物に付帯する雨落ち溝となろう。

その場合、2号溝も同様の性格を有していたものと思われるが、同時に存在したものか、時期差があるのかについては、両者に直接の切り合い関係がなく不明である。

溝の規模は、平面が東西300cm以上、南北350cm以上、横幅約20cm、深さは約5cmと浅い。覆土は2号溝同様、土壘構成土と同じローム土を基本とするものである。

ピット

面上で合計41口のピット（Pit）を検出した。この中で、調査区南端部分では3号溝との関連、あるいはピットの形態や規模といった点から掘立柱建物に伴う可能性が窺われるピット群が2箇所で検出された。また、調査区北側でも1号溝の前面（西側）にピット群が検出され、こちらも何らかの建物に伴う可能性が考えられる。このほかには、調査区中央部で井戸の可能性が考えられる円形の掘り込み（Pit41）が1基検出された。以下、これらについて詳述する。なお、検出されたピットの規模については計測表を参照されたい。

Pit 5～9

3号溝に囲まれた内側でPit 5～8が、3号溝調査中に溝中でPit 9を検出した。このうちPit 6と8は溝と平行に設けられており、掘立柱建物に伴うピットである可能性がある。ちなみに両者の柱間はほぼ1mである。平面形はすべて方形を呈し、Pit 5以外はいずれも一辺が2cm、深さ40cm弱とほぼ同じ規模を有する。覆土はすべて粘土化した泥岩で、暗褐色土やローム土がわずかに混入する。非常によくしまっており、基盤の泥岩と識別が困難なものも存在する。

Pit 10～14

ピット計測表

No.	平面形	直 径	深さ	底面標高	No.	平面形	直 径	深さ	底面標高
Pit 1	円 形	35×26cm	28 cm	50.14m	Pit 22	円 形	30cm	50 cm	50.48m
Pit 2	円 形	30×24cm	10 cm	50.41m	Pit 23	楕円形	40×22+cm	50 cm	50.48m
Pit 3	円 形	80cm	85 cm	49.66m	Pit 24	方 形	15×15cm	30 cm	50.67m
Pit 4	円 形	44×40+cm	30 cm	50.17m	Pit 25	方 形	20×20cm	30 cm	50.56m
Pit 5	方 形	30×30+cm	35 cm	50.70m	Pit 26	円 形	36×30cm	32 cm	50.61m
Pit 6	方 形	20×20cm	32 cm	50.69m	Pit 27	円 形	30×20cm	28 cm	50.63m
Pit 7	方 形	22×18cm	36 cm	50.69m	Pit 28	円 形	26cm	53 cm	50.40m
Pit 8	方 形	18×18cm	20 cm	50.71m	Pit 29	円 形	30×26cm	47 cm	50.45m
Pit 9	方 形	20×20cm	20 cm	50.74m	Pit 30	円 形	40×36cm	24 cm	50.60m
Pit 10	円 形	44×40cm	40 cm	50.41m	Pit 31	円 形	26cm	20 cm	50.75m
Pit 11	円 形	50×35cm	40 cm	50.35m	Pit 32	円 形	26cm	20 cm	50.53m
Pit 12	円 形	78×60cm	53 cm	50.19m	Pit 33	円 形	30×25+cm	23 cm	50.73m
Pit 13	方 形	36×32cm	36 cm	50.34m	Pit 34	円 形	40×36cm	30 cm	50.69m
Pit 14	方 形	46×40cm	43 cm	50.24m	Pit 35	円 形	36cm	20 cm	50.77m
Pit 15	長方形	48×32cm	10 cm	50.78m	Pit 36	円 形	26cm	15 cm	50.81m
Pit 16	円 形	18cm	32 cm	50.62m	Pit 37	楕円形	46×38cm	18 cm	50.97m
Pit 17	円 形	18cm	20 cm	50.75m	Pit 38	円 形	38×35cm	40 cm	50.94m
Pit 18	円 形	22×18cm	20 cm	50.70m	Pit 39	長円形	74×35cm	52 cm	50.52m
Pit 19	方 形	60+×20+cm	15 cm	50.77m	Pit 40	楕円形	100+×80+cm	10 cm	51.18m
Pit 20	円 形	20×20cm	12 cm	50.82m	Pit 41	円 形	18cm	18 cm	50.77m
Pit 21	円 形	17cm	42 cm	50.54m					

調査区南西端部で検出された。平面形は基本的に方形を呈するものと思われる。平面規模はいずれも一辺約40cmを測るが、Pit12は直径約70cmの円形の掘り込みの下に設けられている。地表面からの深さは、Pit10・11・13が35cm前後を測るのに対し、Pit12・14は45~50cmと、前者よりも深く掘り込まれている。覆土はすべて暗褐色粘質土で、ローム土の小塊を少量含むものである。しまりはいずれも強い。

Pit21~36

調査区北西端、テラスに平行する形で検出された。1号溝の約40cm前面（西側）にPit26~36が、更に約1mの間隔をおいた西側でPit21~23がそれぞれ検出された。前者は10~20cmと短い間隔でピットが設けられるのに対し、後者の間隔は40cm前後とやや広い。前者に関しては、Pit28と29の間がちょうどピット1つ分抜けたような配置を呈する。

両ピット列の南端に位置するPit21とPit26の中間にPit25が設けられている。これが上記ピット群に伴うものと仮定すれば、柱間の一定しない粗末な掘立柱建物との解釈が可能となるが、Pit25のみ平面形が方形を呈しており、周辺で検出されたPit20・24との関連の可能性も窺われる事を考えると断定はし得ない。なお、覆土はすべて暗褐色粘質土で、ローム土の粒子や小塊を含むものである。しまりはいずれも強い。

Pit41

調査区中央部で検出された。基本形態は円形を呈し、北側では上部が漏斗状に広がる。形態的には單純で壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦に掘り上げられる。構造規模は基本部分が直径約90cm、深さ約140cm、前述の漏斗部分は40cmほど張り出す形で設けられる。覆土は粉碎され粘土状になった泥岩で、一見、岩盤と見紛うほどよくしまっている。

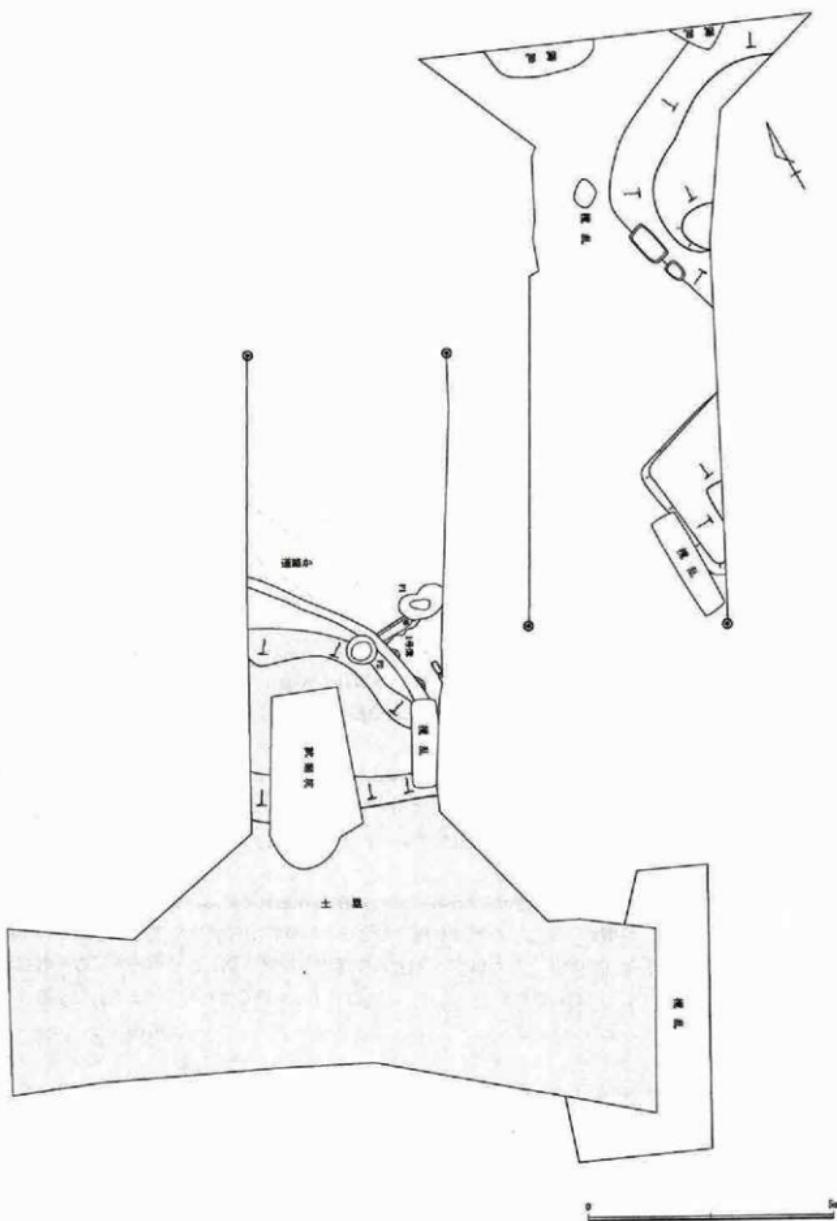


図5 2面造構配図 ($S = 1 : 100$)

概要

3面上に10cmほどの厚さで盛土され、標高51.0～51.1mに設けられる。地業土には泥岩小塊を多く含む暗褐色土が用いられるが、調査区南半では特に泥岩塊が多く含まれ、一見、岩盤面のような様子を呈する。3面に於いて形成されていた調査区北東側のテラス面は埋められ、その南側にせり出す斜面のみ残される。

本地業面では調査区南側に土壘が新設されている。土壘は3面上に直接盛土して構築されているので、3面使用時には既に機能していた可能性がある。

検出遺構

発見された遺構は、調査区中央で検出された土壘の縁辺に沿う通路や、これに付随する可能性が窺えるピット(Pit)、溝のみである。通路に関しては泥岩小塊を敷いているようであるが、地業との境を識別し得ず、調査区西壁の土層観察時に発見した。

通路状遺構

後に築かれる土壘の縁に沿う形で検出され、また、調査区中央部ではこれに伴う可能性が高いピット2口(Pit 1・2)と溝を検出した。

通路面には粉碎泥岩あるいは泥岩小塊が用いられ、規模は横幅約150cm、厚さ約10cmを測る。Pit 1・2共に平面形は円形を呈する。前者はピット2口が重複したような形を呈するが、その形跡は確認し得なかった。1号溝はこれらを連結する形で設けられる。ピットに関しては、地業面からの深さが約1mと非常に深く掘り込まれているのが特徴的で、1号溝の存在と共に、門あるいは扉に伴う施設を連想させる構造を呈する。

遺構の規模はPit 1が長軸約100cm、短軸約60cm、深さ約105cmを測る。Pit 2は直径約60cm、深さ約90cmを測る。1号溝は横幅、深さ共に約20cmを測る。ピット、溝共に覆土はⅣ層で、地業の際に埋められた事がわかる。よってピットに関しては柱痕や根固めの痕跡は確認し得なかった。

土壘

調査区南側で検出された。前述のとおり3面上に構築され、3面使用時の途中か2面の地業段階で新設されたものと考えられる。

土壘は10～50cmの厚さで細かく盛土をして構築されている。上部の削平や、調査範囲の制約などによって、輪方位をはじめ不詳な点が多いが、断面の観察から調査したのは恐らく土壘の北縁部分と考えられる。

盛土は4種類、すなわち、泥岩を主体とするもの、ローム土を主体とするもの、暗褐色土を主体とするもの、黒色土を主体とするものに大別される。なお、泥岩やローム土は量の多少はあれ、すべての土層に含まれる。いずれの土層もよくしまっているが、突き固めたようなしまりをもつのは泥岩を主体とするもののみである。土層を観察した限りでは、下層は泥岩を主体とするものが主に用いられるのに対し、上層はローム土が主に用いられるが、こういった状況が構造的な要因によるものなのか、土壘の積み増しといった時期的な要因によるもののかは判別し得なかった。なお、図中最も濃いトーンで示した部分は宝永スコリア上に堆積する事が確認され、18世紀以降、すなわち土壘が廃絶した後に堆積した事が判明している。

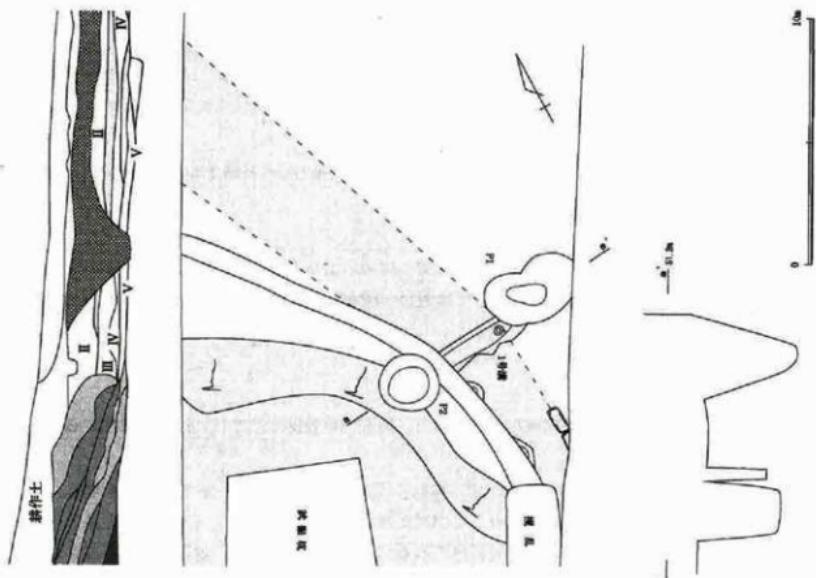


図6 道路状地業とピット ($S=1:50$)

第1面 (図7)

概要

標高51.2—51.3mに設けられる。本調査地点に於ける最終地業面であり、宝永スコリアを含む近世の堆積土によって埋没する。

本地業面は2面上に20~30cmほどの厚さで盛土され、地業土には近世耕作土に近似するⅢ層と、泥岩やローム土小塊を少量含む暗褐色土(Ⅳ層)が用いられる。また、調査区北側では粉碎泥岩による地業もみられる。本期に至り、調査区北東側のテラス面やその南側の斜面は1面に合わせて完全に埋められる。また、上段の平場(土壌)からの斜面には新たに泥岩塊や暗褐色土が盛られ、傾斜が緩やかになる。特に図中、トーンで示した部分は直径40cm前後の泥岩塊が用いられる。

検出遺構

面上では礎石が全部で7基検出されたが、調査範囲が狭く、礎石のみから建物配置は復元し得なかった。また、礎石自体が原位置を維持しているのか否かも不明である。石材はすべて安山岩で、直径20cm程度の平面規模を有する。

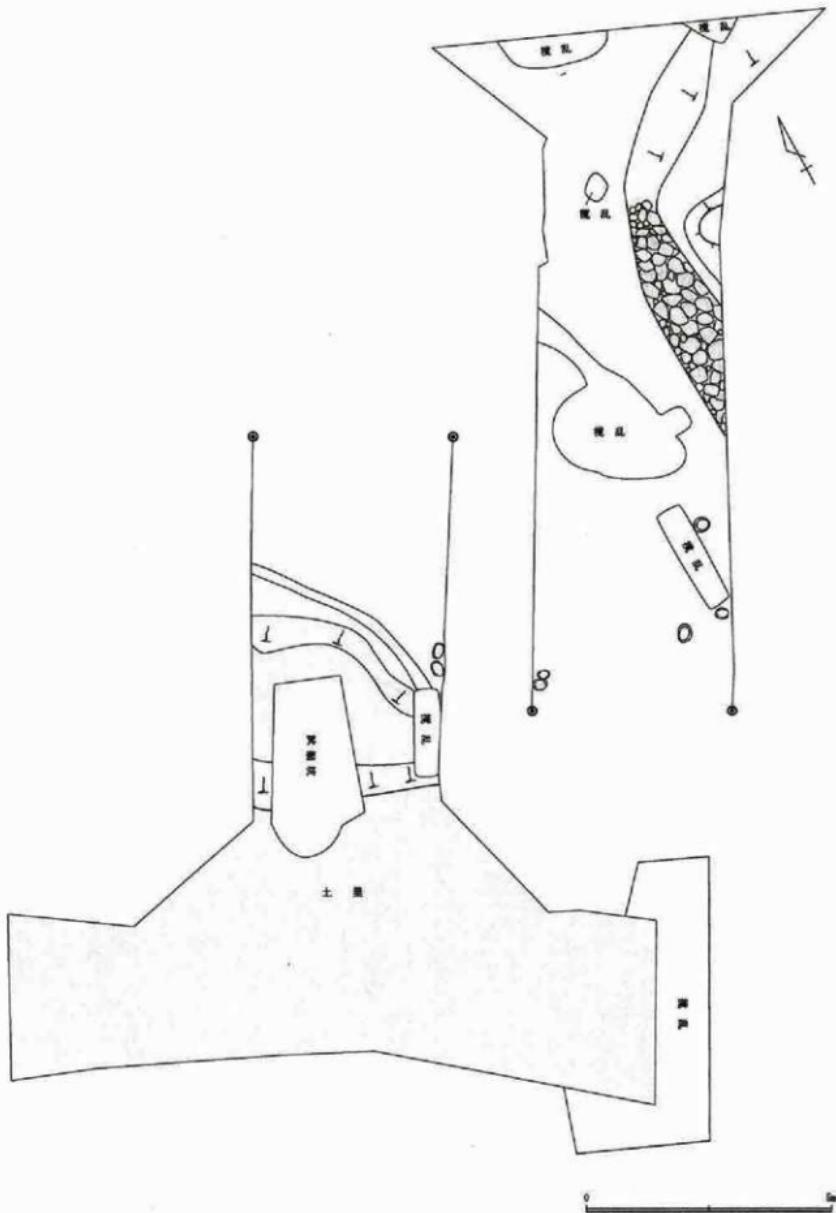


図7 1面造構配置図 ($S = 1 : 100$)

2. 出土遺物 (図 8)

出土した遺物は微量であり、その主体を小片が占める事もあって、図示できた遺物はわずかである。これらを図 8 に一括掲載した。以下、挿図に掲載したものについて若干の説明を記す。

1、6 は第 3 面 Pit41 より出土した。1 は覆土最下層より出土したかわらけである。胎土は黒色微砂、白色微粒、雲母片を多く混じえる淡橙色粉質土。器壁は厚く、体部中位付近より先端を尖らせ気味に大きく外反する。体部内画面とともに煤が付着し、体部外面下位より底部にかけての器表は強い被熱により剥離している。口径 9.9cm、底径 6.9cm、器高は 3.2cm を測る。6 は覆土中より出土した 15 世紀前半頃の常滑窯の口縁部片である。胎土は白色小石を多めに混じえる灰色土。縁帯部は胴部にすっかり接している。2 は第 3 面 Pit32 より出土した 15 世紀後半の瀬戸・美濃鉛釉擂鉢の口縁部片である。胎土は濃黄色弱粘質緻密土、釉は暗茶褐色を呈する。小片のため、遺存部には使用による摩滅痕を確認できなかったが、口縁部周辺と破損断面の一部に横方向の著しい研磨痕が残ることから、破損後に研削材に転用されたものである。

3 は第 1 面直上より出土した 16 世紀前半の常滑窯の口縁部片である。胎土は粗めの暗灰色土。体部内面上位付近は著しい指頭押さえによる調整が見られる。4～5 は第 1 面直上より出土した遺物である。4 は不明鉄製品。器形から鉄鑄の可能性があるが、鋳による腐食が著しく詳細は不明である。全長 5.2cm、最大幅 1.8cm を測る。5 は上野産中砥。緑味灰白色を呈する細粒凝灰岩製である。上小口には縱方向のゴザ目痕、左右側面と裏面はゴザ目状工具痕がわずかに残るが、砥面として使用しているため詳細は不明瞭である。表面は砥面として平らかに使用している。遺存長 10.5cm、最大幅 2.4cm、厚さ 1.7cm を測る。7 は第 3 面直上より出土した明灰色安山岩製の火輪である。軒部が高く、最大で 8.2cm、最小で 7.6cm を計る。空風輪を差し込む径 7.4cm を測るホゾ穴は粗いノミ状工具痕が多く残る。

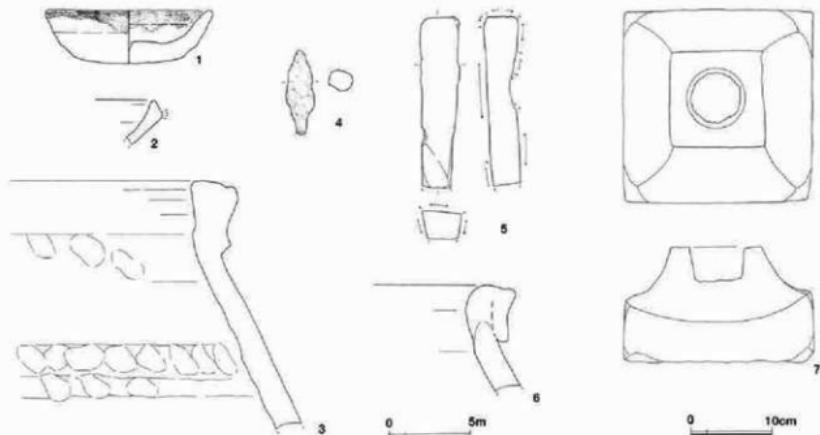


図 8 出土遺物 (S=1:3、1:6)

第4章 まとめ

今回の調査では土壘に囲まれた地業面とそれに伴う諸遺構を検出した（次頁図9）。地業面は最初、自然地形を開削して設けられ、その後、盛土によって2度にわたる改新を受けている。土壘に関しては、調査区北東側のものは平場の開削前から存在したことが第1面の状況から窺い知れる。一方、調査区南側で検出された土壘に関しては、平場開削当時には存在せず、3面が機能していた途中か2面地業段階で構築されたものと考えられる。かかる土壘は最終的に地業面が廃絶して近世またはそれ以降の耕作土が堆積する段階で埋没するが、調査区北東側のものに関しては現在に至るも原形をほとんど失うことなく存在する。出土遺物はほとんどなきに等しく、それらから地業の時期を窺い知ることはできなかった。一応、遺物の時期は15世紀から16世紀前半と、玉繩城の築城に前後する時期のもので占められている。

図2には、平成6（1994）年に刊行された「玉繩城跡発掘調査報告書」から引用した玉繩城中心部の地形図を掲載したが、今回の調査地点をこれに当てはめてみると、御厩曲輪の東端、七曲坂の降り口近くに位置することがわかる。調査で検出された南側の土壘は御厩曲輪と「えんしょうぐら」を画する土壘の一部であろう。この土壘に関しては調査区の位置関係からみて、引用した地形図の原図が作成された昭和29（1954）年以後、その上部が削平されている可能性が高い。御厩曲輪は四方を土壘で囲まれているが、四隅には切れ目があって、その一つ、東南の切れ目は「えんしょうぐら」に通じている。第2面で検出された道路状の地業は、図面上で比較する限りその「えんしょうぐら」方面に通じている可能性が高いとみて差し支えなかろう。

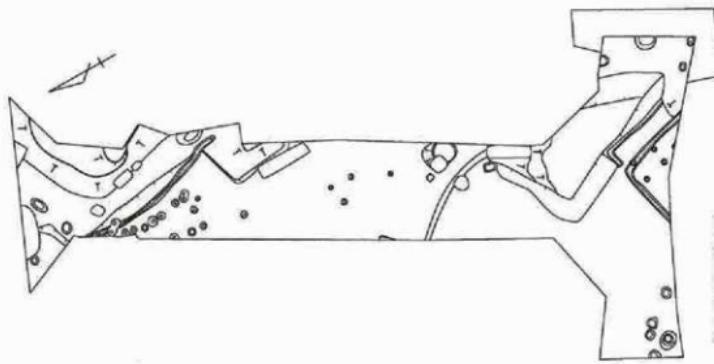
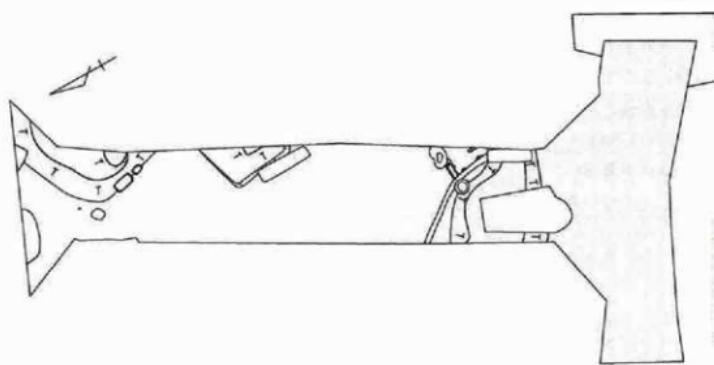
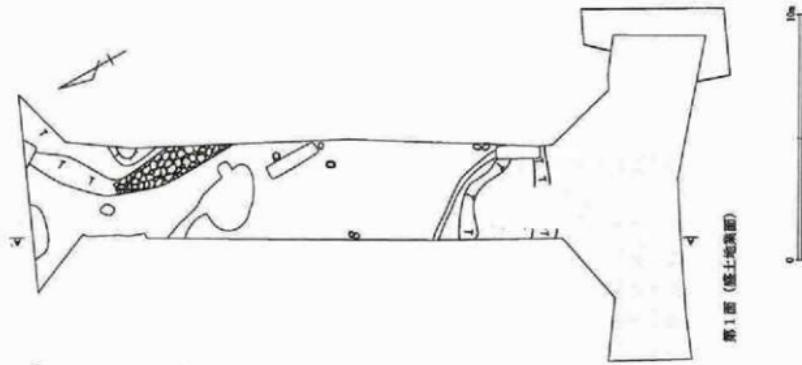
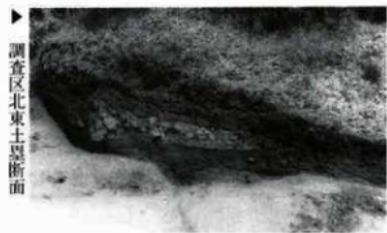
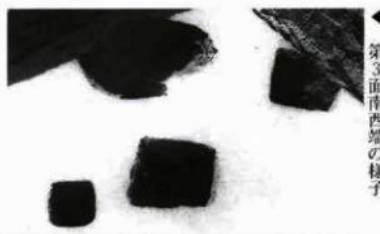
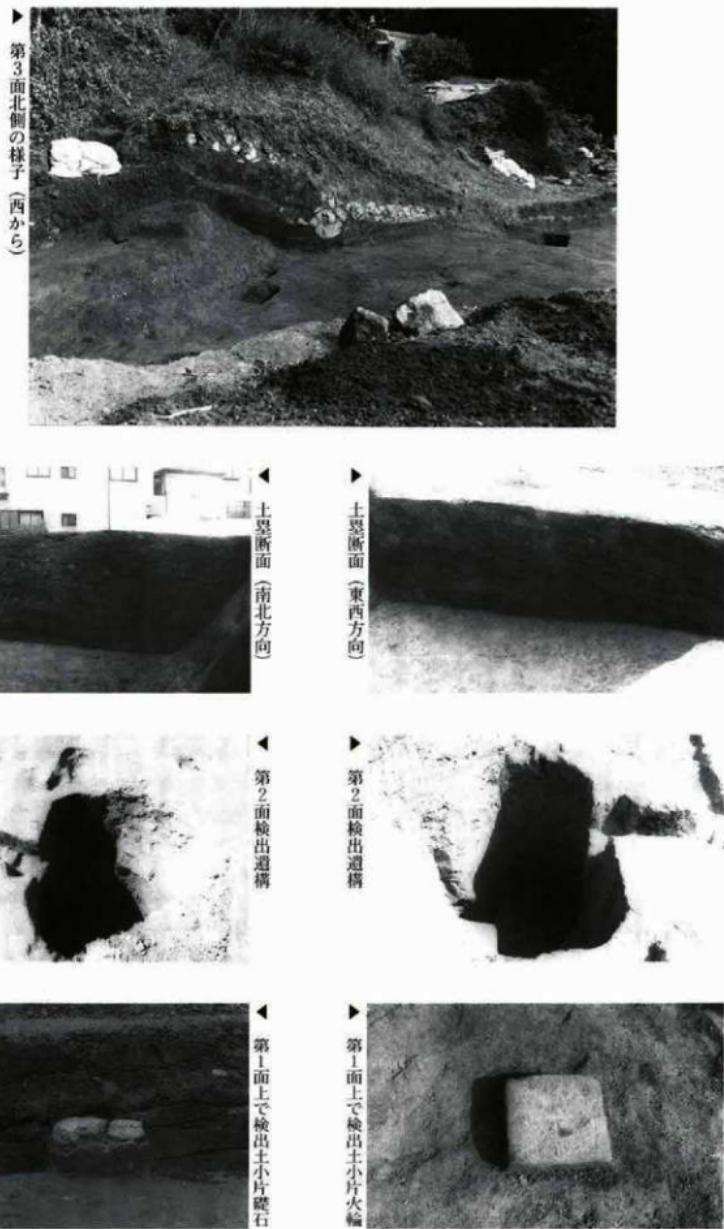


図9 地盤面変遷図 ($S = 1 : 200$)



図版 2





▲ 第1面の様子（南から）

▼ 同北から



てんじんやまじょう
天神山城 (No.384)

山崎字宮廻747番 3 地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市山崎字宮廻747番3に所在する天神山城（鎌倉市No.384遺跡）の発掘調査報告である。
2. 調査は店舗併用住宅建築に先立って実施された。調査面積は28m²である。
3. 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成14年9月11日から平成14年9月26日まで行った。
4. 調査体制は以下の通りである。
調査担当者　田代郁夫
調　　査　員　轍実、土屋浩美
調査協力　（社）鎌倉市シルバー人材センター
5. 本報の執筆は第3章2、出土遺物を宗臺富貴子が、その他の轍実が担当した。資料整理作業は、執筆者の他に宗臺秀明が行った。
6. 本報に掲載した挿図の縮尺については、挿図名の脇に明記した。また、図中にある標高数値はすべて海拔高である。
7. 発掘調査における出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

第1章	遺跡位置と環境	223
第2章	調査の概要	224
1.	調査経過	224
2.	調査方法	224
第3章	調査成果	224
1.	調査地点の土層堆積	224
2.	検出遺構	226
3.	出土遺物	226
第4章	まとめ	229

挿 図 目 次

図1	遺跡位置図	222
図2	調査区座標位置図	223
図3	調査区土層堆積図	225
図4	第XV～XVI層、第XIV層、第VII～XIII層出土遺物	226
図5	第VII～IX層出土遺物	228
図6	表探遺物	229

写真図版目次

図版1	調査区土層堆積状況及び遺物出土状況	230
-----	-------------------	-----

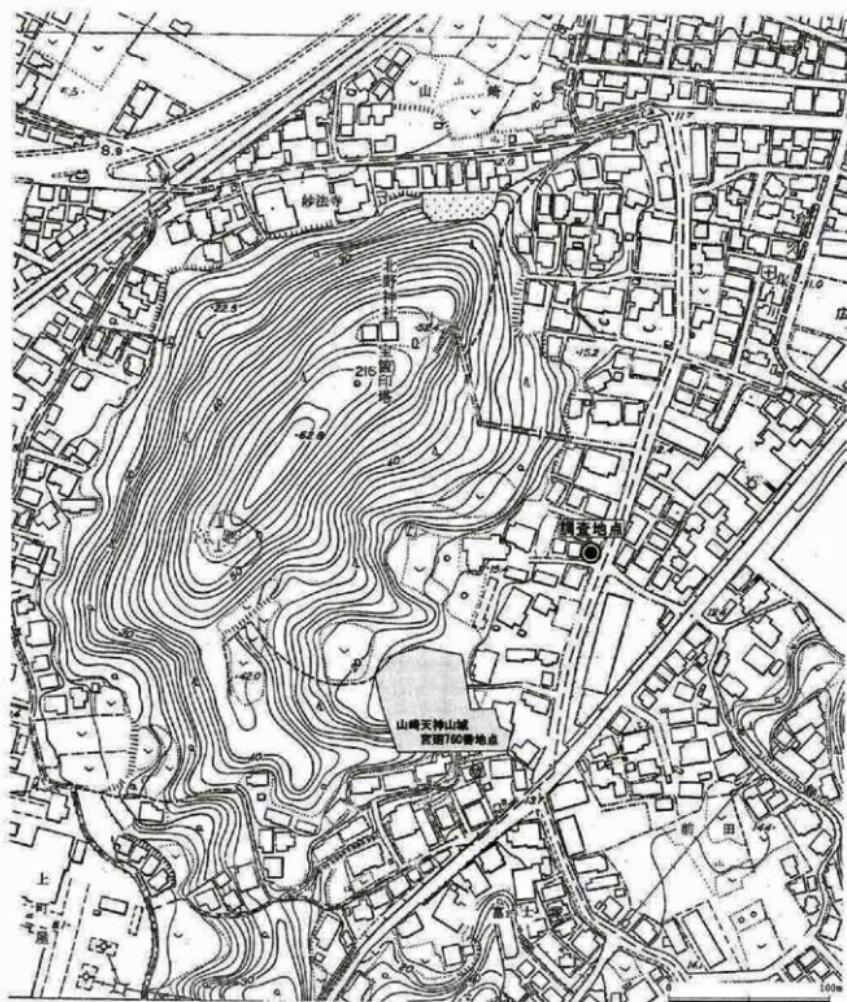


図1 遺跡位置図 (S=1:2500)

第1章 遺跡の位置と環境

本調査地点は鎌倉市北西部、JR大船駅の南東約1.5kmの地点に位置する。地番は鎌倉市山崎字宮廻747番3。地勢的には天神山と呼ばれる丘陵の裾部にある。天神山（標高63m）は鎌倉市中央部を占める丘陵地帯から北西に派生する尾根の西端に位置し、西側には柏尾川の沖積低地を、東側には北向きに開口する谷底低地を望む。現在では道路やモノレールといった交通網の整備による開削によって尾根は分断され、天神山は独立丘のごとき景観を呈する。

天神山周辺の本格的な発掘調査としては平成7年に実施された東側山裾で実施されたもの1件があるのみだが^①、この調査では、古墳時代前期、後期、古代、中世にわたる遺構群が多数発見され、古墳時代前期では装飾器台やS字口縁甕などを含む土器集中の検出、平安時代では寺院の存在を窺わせる瓦の出土といった、通常の集落とは異なる性格の遺構や遺物の存在が特徴的である。このほかには山頂で縄文時代早期の土器が、北東側山麓では古墳時代後期の祭祀に関連するとみられる遺物群が検出されている^②。近隣に目を移すと、水道山や台といった地区では谷に面した斜面に古墳時代前期から古代にかけての住居が多数発見され、相当規模の集落が存在した事が明かとなっている。また、今ではそのほとんどが消滅してしまったが、古墳時代後期の横穴墓も盛んに造営されている。

註

- 1) 松山敬一朗 1996「山崎天神山
倉市埋蔵文化財緊急調査報告」13
- 2) 赤星直忠 1959「鎌倉市史・考古
川弘文館
菊川英政 1995「天神山採集の古
後期土器」「鎌倉考古」No.33

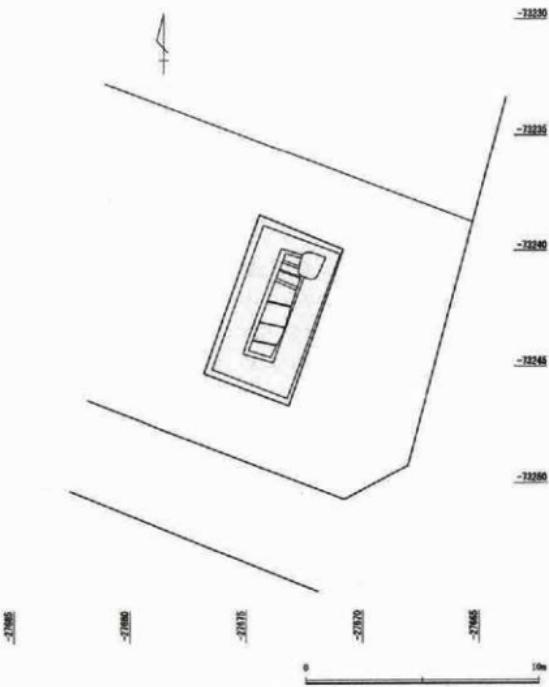


図2 調査区座標位置図 (S=1:100)

第2章 調査の概要

1. 調査経過

調査に先立って平成14年9月10日から表土層（近・現代の盛土）の除去作業を、施工業者の労務提供による小型重機（バック・ホー）を用いて実施した後に、翌11日から発掘調査を開始した。堆積土は沖積地通有のしまりの弱い粘質土を基本とするものであること、また、調査区目前まで住宅が迫っていることなどの条件から、安全に対しては細心の注意を払いながらの調査となった。

調査は9月25日まで行われ、遺構としては近世の溝状遺構1基を検出するにとどまったが、土層中からは古墳時代後期から中世に至る時代の土器が得られた。9月26日には調査機材を撤収し、調査を完了した。

2. 調査方法

堆積土の掘削は、近・現代のものについては小型重機を用い、それ以後の掘り下げは人力で行った。調査区の地理的位置把握については、調査地近隣の3級基準点を基に座標計算の可能な光波式測量器（トランシット）を用いて計測し、座標上の位置を特定した。

第3章 調査成果

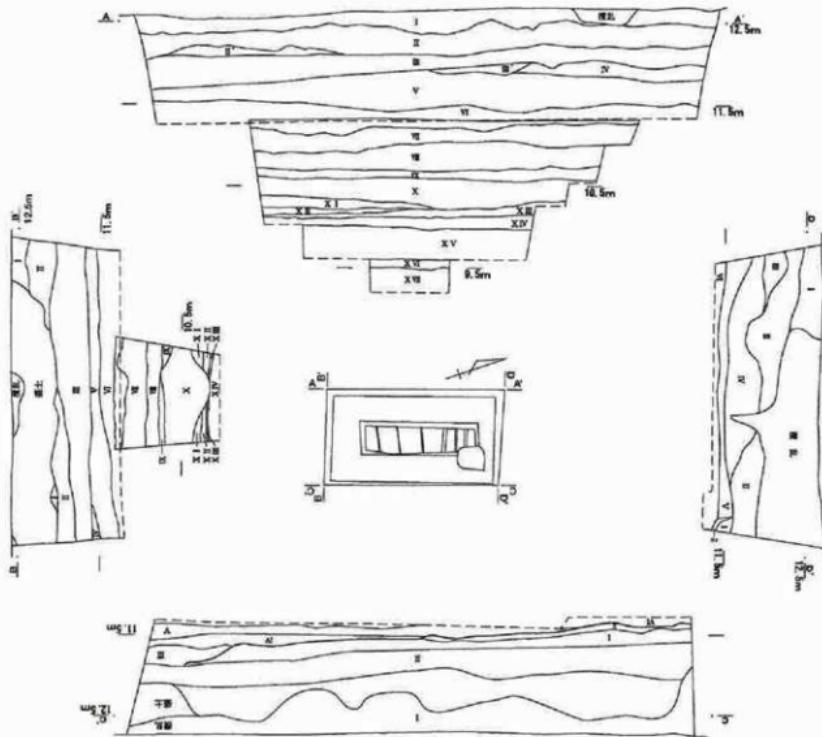
1. 調査地点の土層堆積（図3）

調査では、現地表下320cmまで堆積土を掘り下げた。調査区壁面が崩落する危険が考えられたため、表土下約1mで段を設け、それ以下については階段状に調査区を狭めながら調査にあたった。

I・II層は近・現代の盛土である。II層下で現地表から50cm程度の深さである。III・IV層は近世の堆積土である。IV層下で現地表から90～110cmの深さである。土質は砂分の多い粘質土である。鉄分のおおいのが特徴的で、V層表面の状況からみて田圃であった可能性がある。V～X層は中世の堆積土である。IX層下で現地表から280cm程度の深さである。近世以降の堆積土とは違い、各層ともしまりの弱い粘質土で、砂はほとんど含まれない。V・VI層は現在、湧水層となっており、土色は還元し青灰色を呈する。

X I～X VI層は古墳時代～古代の堆積土である。X VI層下で現地表から320cm程度の深さである。出土遺物の主体は古墳時代後期以降の土師器や須恵器片で、古墳時代前期のものはわずかである。X I～X IV層はいわゆる「マグソ」と呼ばれる暗黄褐色植物腐蝕土と暗黒色粘質土が細かく互層堆積する土層で、常に水に浸って弱い水流があるような地理的環境にあったことを窺わせる。X VII層はやはり「マグソ層」と灰色粘質土が細かく互層堆積を形成する土層である。無遺物層であり、堆積土の時期は古墳時代であろうという以外、よくわからない。

土層の堆積状況は、概ね平坦である。調査区南壁ではX層が落ち込む状況が確認できるが、人为的所為の痕跡は確認できなかった。下層の土質からみて自然の起伏であろうと思われる。



- 1 喀茶褐色粘質土と黒灰色砂との互層堆積。室永スコリアを多量含む。しまり、粘性共に弱。
 2 喀褐色粘質土。灰白色バミス、室永スコリアを多量含む。しまり、粘性共に弱。
- I 喀茶褐色粘質土。直徑5ミリ以下の礫状岩をやや多く含む。しまり強、粘性やや強。近・現代の底土。
 II 喀茶褐色粘質土。I層より礫状岩の含有量最少。しまり強、粘性やや強。近・現代の底土。
 III 喀褐色粘質土。II層と比ベシトト質地まる。しまり、粘性共に強。
 IV 喀褐色粘質土。直徑5ミリ以下の小石、シルト粒、粒子状褐泥炭などを多く含む。しまり、粘性共に強。
 V 喀褐色粘質土。直徑5ミリ以下の小石、シルト粒、粒子状褐泥炭などを多量含む。しまりやや強、粘性強。
 VI 喀灰色粘質土。小石、粒子状褐泥炭、砂などを少々含む。上面は礫状岩の小塊が多く含まれるほか、軟分の軟化→硬化がみられる。しまり有り、粘性やや強。
 VII 黒褐色粘質土。部分的に礫状岩小塊を含む。砂分多し。しまり弱、粘性やや強。古代～中世の遺物包含層。
 VIII 黑褐色粘質土。礫状岩小塊をわずかに含む。しまり弱、粘性やや強。古代～中世の遺物包含層。
 IX 喀褐色粘質土。砂分多し。しまり弱、粘性やや強。古代～中世の遺物包含層。
 X 喀褐色粘質土。粘土分強。しまりなし、粘性強。古代～中世の遺物包含層。
 XI 黑色土+暗黃褐色植物腐敗土。しまりなし、粘性強。古墳時代～古代の遺物包含層。
 XII 喀褐色粘質土。砂分多し。しまり弱、粘性強。古墳時代～古代の遺物包含層。
 XIII 黑色土+暗黃褐色植物腐敗土。しまりなし、粘性強。古墳時代～古代の遺物包含層。
 XIV 喀褐色粘質土。粘土分強。しまりなし、粘性強。古墳時代～古代の遺物包含層。
 XV 喀褐色粘質土。粘土分多し。しまり弱、粘性強。古墳時代～古墳時代の遺物包含層。
 XVI 喀褐色粘質土。暗黃褐色植物腐敗土をわずかに含む。しまりなし、粘性強。古墳時代～古代の遺物包含層。
 XVII 黑色土+暗黃褐色植物腐敗土。植物組織を多量含む。しまりなし、粘性強。無遺物層。

図3 調査区土層堆積図 (S=1/60)

2. 検出遺構（図3）

検出した遺構は近世の溝状遺構1条のみである。溝状遺構は調査区東壁沿い、すなわち目前の道路とほぼ平行する形で南北方向に走る。中世の遺物包含層であるV層を切り込む形で設けられており、深さは25cm前後を測る。覆土には宝永スコリアが多量に含まれ、主に粒径のやや大きめな灰白色のものが2層に、黒鉄色の微粒子状のものが1層に堆積する。覆土の様子を観察する限り、宝永山の噴火によって降下した火山灰を溝に埋けて処理した様子が窺われるが、その後も微弱な水流があったことを物語る細かな互層堆積も一部で確認されている。調査し得たのが遺構の西側立ち上がり部分のみであり、このほかは不明である。

3. 出土遺物（図4～6）

調査では、土器、石製品、木製品などの遺物が出土した。遺物の大半は古墳時代から中世の土器類で占められ、特に古墳時代末～奈良時代の土師器壺が目立つ。ここでは、図版に掲載したものについて、下層のものから順に説明する。

第XV～XVI層出土遺物（図4-1～6）

図4-1は土師器壺の口縁部片である。胎土は白色、および黒色粗砂を多く混じえる淡茶褐色土。口縁部付近はヨコナデ、外面脚部上位より下方はナデ調整される。焼成は良好である。2は土師器高壺である。胎土は白色砂を多く混じえる淡橙～肌色粉質土。外面はヨコナデ→ヘラミガキ調整の後、赤彩される。内面は強い被火を受け器表がはせており、器面の様子は観察し得なかった。脚部はいわゆる柱状脚であろう。3は6世紀後半頃の土師器壺。胎土は黒色粗砂と白色微砂を混じえる暗黄色土。口縁部と底部の境に強い棱を持ち、口縁部はヨコナデ、底部は器表が摩耗しているため不明瞭だが、ヘラケズリにより調整されている。また、内外面ともに赤彩が施される。口径は11.8cmを測る。焼成良好。4～6は古墳時代末～奈良時代前半の土師器壺である。4の胎土は白色微砂を混じえる暗黄色土である。外面口縁部から内面にかけてはヨコナデ調整される。外面底部はヘラケズリにより調整された後に赤彩が

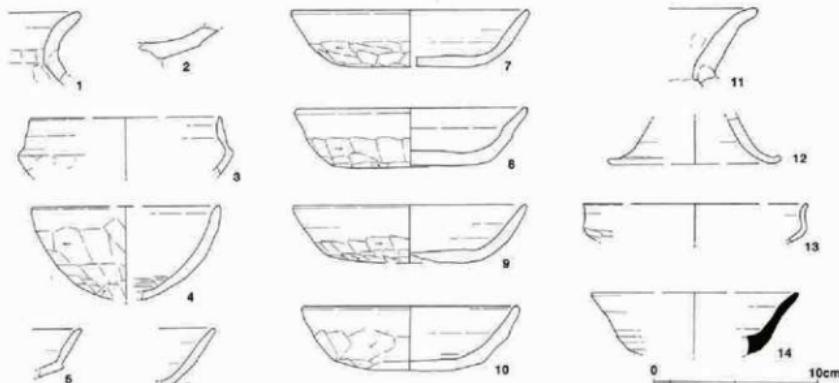


図4 第XV～XVI層、第XVI層、第VII～XVII層出土遺物 (S=1:3)

施されるが、摩耗により薄くなる。口径11.6cm、器高は推定で5.8~7.0cmほどを測る。5の胎土は白色微砂と白針を混じえる淡茶色粉質土である。口縁部と底部の境には強い棱を持ち、外面底部はヘラケズリにより調整される。6の胎土は黒色粗砂と白色砂を混じえる淡橙色土である。器壁は大きく開く。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面底部はヘラケズリ調整される。

第 XIV 層出土遺物（図 4-7~10）

図 4-7~10 は 8 世紀中頃～後半の相模型壺である。7 の胎土は黒色、および白色微砂を混じえる暗橙色粉質土である。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 2 段のヘラケズリにより調整される。口径14.5cm、底径9.2cm、器高3.5cmを測る。8 の胎土は黒色砂と泥粒を多く混じえる暗茶黄色土である。口縁部は大きく屈曲し、内巻しながら立ち上がる。全体に大きく歪む。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 1 ~ 2 段のヘラケズリにより調整される。口径14.3cm、底径9.8cm、器高3.6cmを測る。9 の胎土は白色、および黒色砂を混じえる淡茶色精良緻密土である。器壁はわずかに屈曲気味である。外面口縁部から内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 1 ~ 2 段のヘラケズリにより調整される。口径は14.4cm、底径は9.4cm、器高は3.6cmを測る。10 の胎土は黒色、および白色微砂をわずかに混じえる暗橙色粉質土である。器壁は体部中位付近より屈曲する。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 1 段のヘラケズリにより調整される。口径13.1cm、底径9.2cm、器高4.0cmを測る。

第 VII~XIV 層出土遺物（図 4-11~14）

図 4-11 は土師器壺の口縁部である。胎土は白色、および黒色砂を多く混じえる黒褐色粗土である。口縁部付近は内外面ともに指頭押さえの後、粗くヨコナデ調整される。焼き上がりは重い。12 は古墳時代後期の土師器高壺脚部である。胎土は白色砂を多く混じえる淡黄色精良土である。内面はナデ調整、外面は器面調整の後、赤彩が施される。脚径は10.7cmを測る。13 はいわゆる比企型壺である。胎土は白色微砂を混じえる暗赤色土である。器壁は薄く、口唇部は強く屈曲する。外面底部はヘラケズリ調整される。体部内外面ともに赤彩が施される。口径は14.0cmを測るが、小片のため不安である。14 は須恵器壺である。胎土は白色微砂と白針を混じえる灰色土である。体部上位付近より先端を尖らせながら大きく外反する。口径は12.9cmを測る。

第 VII~IX 層出土遺物（図 5）

図 5-1~3 は古墳時代末～奈良時代の土師器壺（相模型壺）である。1 の胎土は白色砂を混じえる淡黄色土である。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 1 段のヘラケズリにより調整される。器高は推定で4.1cmを測る。2 の胎土は多量の黒色粗砂と少量の白色砂を混じえる淡黄色土である。器壁は口縁部がわずかに外反する。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 1 段のヘラケズリにより調整される。口径14.0cm、底径9.4cm、器高3.8cmを測る。3 の胎土は白色砂を少量混じえる淡橙色精良緻密土である。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は 1 ~ 2 段のヘラケズリにより調整される。4 は 9 世紀前半の相模型壺である。胎土は白色、および黑色砂を混じえる橙色精良緻密土である。器壁は口縁部が屈曲し、器高が高い。外面口縁部より内面にかけてはヨコナデ、外面体部は摩耗により不明瞭だが、1 段のヘラケズリ調整が確認できる。5 は 11 世紀頃のロクロ土師器の壺であろうか。胎土は黒色砂を少量混じえる肌色粉質土である。器壁は薄く成形される。底径は6.3cm

を測る。6は8世紀後半～9世紀前半頃の南比金の坏である。胎土は黒色粗砂と白針を混じえる灰色土である。外底面中央は糸切り痕、外周は回転ヘラケズリ痕が残る。また、ヘラ搔きにより「十」字状の沈線が彫られる。底径は6.4cmを測る。7は8世紀頃の須恵器坏身の小片である。胎土は白色粗砂を多く混じえる暗灰色土である。8と9は10世紀代と思われる瓶。8の胎土は白色粗砂を多く混じえる暗灰色土である。体部外面には降灰が付着する。9の胎土は黒色、および白色砂を混じえる灰色緻密土である。肩部より上方は降灰が付着する。10は須恵器壺の胴部片である。胎土は白色微砂を混じえる暗灰色緻密土である。体部外面には叩き目痕が明瞭に残る。11は瀬戸入子。胎土は明灰色弱粘質緻密土である。外底部は糸切り痕が残る。遺存部には使用による摩滅は見られない。底径4.2cmを測る。12は15世紀末～16世紀初頭の瀬戸・美濃鍋袖擂鉢である。胎土は灰白色弱粉質緻密土である。釉は暗茶褐色を呈する。条線は12条1単位で単位同士では重ならない。体部内面から内底面にかけては使用による著しい摩滅痕、外底面外周は一部、著しい研磨痕が残る。また、体部内面は強い二次焼成を受け、器表がはぜる。底径9.2cmを測る。13は白磁口兀皿の口縁部片である。素地は白色弱粘質緻密土。釉は綠味乳白色を呈する。

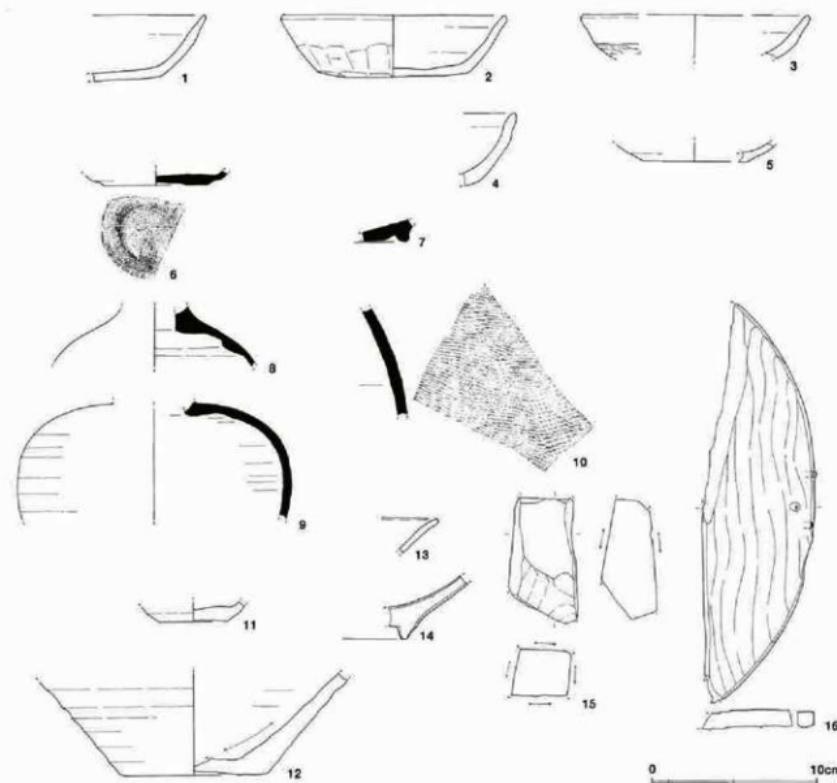


図5 第VII～IX層出土遺物 (S=1:3)

内外面ともに使用によるキズがわずかに残る。14は青磁大皿の底部片である。素地は明灰色粘質密土である。釉は破片の状態で強い二次焼成を受け、白濁する。体部内面にわずかに型押し蓮弁文が見られる。破損断面には漆巻きが残る。15は白色細粒凝灰岩製の中砥である。表裏、左右側面とともに砥面が残る。遺存長7.6cm、幅4.2cm、厚2.9cmを測る。16は曲物の底板である。右側面に2箇所の木釘穴が穿たれ、そのうち1箇所に木釘が遺存する。裏面には線状の細かい刀状痕が多く残り、中位付近には穿孔が見られることから転用されたものと思われる。遺存長19.3cm、厚1.1cmを測る。

表探遺物（図6）

図6-1は土師器坏である。胎土は白色砂を混じえる淡黄灰色土である。器壁は体部中位付近より屈曲する。外面口縁部より内面はヨコナデ、外面底部は2段のヘラケズリにより調整される。口径は14.8cmを測る。2は14世紀末～15世紀代の東海系土師質鍋。胎土は黄灰色粘質密土である。器壁は薄く、口縁部は内側に大きく傾き、端部を面取した頸部は大きく張らないものと思われる。縁部下内面は指頭による押さえ、その下方はハケによる調整痕がわずかに残る。頸部上方より下方は使用による煤が付着する。3は13世紀中頃の常滑窯の口縁部片である。胎土は粗めの灰色土である。4は14世紀末以降の瀬戸綠釉小皿である。胎土は灰白色土である。遺存部に施釉は見られない。

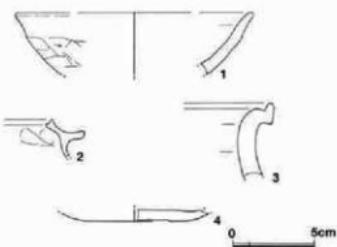


図6 表探遺物 (S=1:3)

第4章 まとめ

今回の調査では、遺構は近世の溝状遺構1条を調査区東壁沿いに検出するに留まったが、古墳時代以降、中世に至る幅広い時期の遺物が出土した。これらをもとに土層の堆積時期を大まかに述べると、現地表下50cmまでが近・現代の盛土、50～80cmまでが近世～近代（水田か？）、80～260cmまでが中世、280～330cmまでが古墳時代（後期）、古代、330cm以下は無遺物層で時期不明ということになる。これらのうち、近世以降は水田が営まれていた可能性が窺われ、古代では、有機質に富む土層と粘質土が細かく互層堆積する部分が見られることから、一定の水流がある場所であった可能性が窺われる。いずれも調査者の主觀に基づくものであり、土壤や植物遺存などを対象に科学的な分析をかけた場合、調査者の所見と異なる結果が生ずる可能性は否定できないが、いずれにせよ建物を構築するに適した地盤とは考えにくい。古墳時代から中世にかかる集落あるいは寺院といった遺構群が発見された山崎天神山城宮廻760番地点では、山裾の比較的安定した地盤、標高にして14mを越える位置に遺跡が立地している。今回の調査で古墳時代～古代の遺物を包含する堆積土は標高10m以下に形成されており、地形的には適地とはいえない脆弱地盤でも、当該地一帯では標高10～14mを境に地盤の安定が見込めるようである。

写真図版



▲ 調査区北壁土層堆積状況(1)



▲ 調査区北壁土層堆積状況(2)



▲ 遺物出土状況（土師器）

かんのうじあと
感應寺跡 (No.225)

材木座六丁目722番1地点

例　　言

1. 本報文は、感應寺跡（神奈川県遺跡台帳No225）内、鎌倉市材木座六丁目722番1地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、個人専用住宅の建設に先立ち平成14年11月13日から12月25日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
調査面積は54m²。
3. 調査体制は以下の通り。
調査員 沙見一夫 伊丹 まさか
調査協力者 倉澤六郎 清水光一 箕田孝善 渡邊輝彦
4. 本報文は、遺構に係わる整理作業を主に沙見が、遺物に係わる整理作業を小泉衣理が行なった。原稿執筆は第1章の2・第2章・第3章の遺構を沙見が、第1章の1・第3章の遺物を小泉が、第4章は両名討議の上沙見が文責を負い、全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を沙見と伊丹が、遺物を小泉が撮影した。
5. 発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。
既鎌倉市シルバー人材センター 鎌倉考古学研究所 東国歴史考古学研究所
6. 本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

本文目次

第1章 環境と立地	234
第1節 環境	234
第2節 周辺の調査	235
第2章 調査の概要	236
第1節 調査経緯・経過及び結果に至る概要	236
第2節 グリッド配置と国土座標	236
第3節 堆積土層	236
第3章 遺構と遺物	238
第1節 2面の遺構と遺物	238
第2節 1面の遺構と遺物	243
第3節 その他の出土遺物	248
第4章 調査成果	254

挿図・表目次

図1 感應寺跡の範囲と調査地点	234	図12 1面の遺構と出土遺物（3）.....	247
図2 国土座標とグリッド配置	237	図13 Ⅲ層中出土遺物	248
図3 グリッド配置と堆積土層	237	図14 Ⅱ層中出土遺物	249
図4 2面遺構全測図	238	図15 採集遺物	250
図5 2面の遺構と出土遺物（1）.....	239	図16 中世以前の出土遺物	250
図6 2面の遺構と出土遺物（2）.....	240	図17 出土常滑窯押印文拓影	253
図7 2面の遺構と出土遺物（3）.....	241		
図8 Ⅳ層中出土遺物	242	表1 出土遺物計測表	251
図9 1面遺構全測図	243	表2 出土遺物数	252
図10 1面の遺構と出土遺物（1）.....	244	表3 出土貝分類表	252
図11 1面の遺構と出土遺物（2）.....	245	表4 常滑窯押印文様と出土遺構・層位	253

写真図版目次

図版1	257	図版2	258
1. 調査区東半掘乱掘り上げ後の状況（南から）		4. 2面建物3・4・5・土坑36・37・40（北から）	
2. 1面建物1（南から）		5. 2面東半北側遺構群（東から）	
3. 1面建物2（北から）		6. 2面ピット10・11・土坑29（南から）	
4. 1面土坑1～3・5（東から）		図版3	259
5. 調査区の移行状況（北東から）		1. 調査区東半最終状況（南西から）	
図版2	258	2. 調査区東壁土層堆積（部分・西から）	
1. 2面西半全景（南から）		3. 調査区北壁土層堆積（部分・南から）	
2. 2面東半全景（南から）		図版4	260
3. 2面建物5・土坑37・39・42（東から）		出土遺物	

第1章 環境と立地

第1節 環境

本調査地点は鎌倉市材木座に位置し、神奈川県道跡舟便によれば感応寺跡(No.225)となる。調査地点の西側30mを南北に通る道路は、北西約90mに位置する九品寺前を経て鶴岡八幡宮の東南にある宝成寺前に至る。『鎌倉市史 総説編』に依ると、小町大路は海岸に近い九品寺あたりまでの呼称と想定しており、材木座付近での道路呼称は不明だが、小町大路という範囲の南の限界付近に位置している。

遺跡名の感應寺は廻寺で、「新編相模國風土記稿」に「由比山宝輪院ト号ス、真言宗京都三宝院末不動ヲ本尊トシ、神変菩薩、理源大師ノ像アリ、中興ヲ養源ト云フ、境内ニ俱利迦羅龍王ノ古碑アリ」と記している。真言宗醍醐三宝院末とある以外、感應寺についての詳細は不明であるが、「風土記稿」でいうこの古碑は五所神社に現存している。

五所神社は来迎寺の東南、低丘陵の西麓に位置する。前身は乱橋村の鎮守三島神社で、明治四十一年(1913)7月、乱橋・材木座両村合併の際、乱橋の八雲神社・金毘羅宮および材木座の源詠訪神社・見日社の社と合祀し、同11月現在名に改称している。五所神社境内にある弘長二年銘の板碑は、多くの板碑が



図1 感應寺跡の範囲と調査地点

秩父片岩であるのに、これは灰黒色粘板岩でできた整形常総型板碑で、図柄は篆研彫りで刻まれている。昭和初年迄は下方の銘文全体が読める程度に立っていたが、現在は銘文の下半部までを別に持ってきた台石中に埋め込んである。現在の高さ134.3cm、幅上部42.8cm、下部44.5cm。碑面は二重線刻で枠取りされ、頭部との間は二条線で画される。上部に蓮華形の天蓋と、これから垂れた幡の様な形に環珞があり、中央に大日如来を表わす種子「バン」が劍にまきついた龍になぞらえて蓮座上に直立している。この図柄は感応寺の本尊である不動信仰を表し、「大日変じて不動となる」の意を表現したものであるという。下方の銘文は下半部が土中に埋れ読めないが、

一見率都婆 永離三悪道、

何況造立者 必生安楽園

右志者為……

父母ニ親往生……

とある。最後の二行の下部は風化が酷く判読できない。中央に「弘長二年十一月廿日」とある。この銘文は造立趣旨を記したもので、両親の極楽往生を願って造立されたものであろう。この板碑は昭和十六年7月重要美術品として指定された。また近在の光明寺には一対をなすのではないかと思われる弘長銘の常総方板碑がある。これらの板碑についての詳細は馬淵和雄氏(1995)の論文を参照して頂きたい。

第2節 周辺の調査

標記遺跡名感応寺跡内の調査は本調査が初めてだが、西側一帯に隣接し「吾妻鏡」に商業地として定められた「大町」「米町(穀町)」「魚町」を内包する材木座町屋造跡(№261)内では、これまでに15カ所で発掘調査、20カ所以上で確認調査が行われている。発掘調査の成果を観ると、中世期では何れの地点でも堆積土層から基盤層に至るまで砂層上に立地し、市街地の様に広範な地業・整地は殆ど行われず、遺構の主体である方形堅穴建物と土坑群が繰り返し構築している。出土遺物も舶載陶磁器は破片では出土するものの、日常雑器や土製・石製の道具類が多く出土し庶民生活域と考えられよう。一方で、遺構と遺物の在り方に共通点もあり、当該遺跡の西の限界である滑川対岸の由比ガ浜中世集団墓地遺跡(№372)や由比ガ浜南遺跡(№315)の様に、生活域内に人骨が埋葬・遭棄される状況はこれまでの所顕著ではない。地点5～地点15より西側、地点3～7より南側一帯では、中世期の遺物は出土するものの生活址を顯す遺構はこれまでの所発見されていない。この範囲内は現況の海拔が地点3・7付近で海拔5m前後、南へ向って低くなり地点14周辺では海拔3m程、東西現況道路を境に海拔5m前後、国道134号近くでは7m以上で場所に依っては10mを測る。海拔が低い確認調査地点で出土する遺物は、殆どが小破片で水磨しており、古代の土器片と瀬戸窯後期の破片が同層位から出土することも希ではない。明治期の地図には「河」「川」といった簡易な記述で表現された範囲があり、それと今日の路地が重なるところも一、二カ所に留まらない。逆に海岸線に近く海拔の高い確認調査地点では、出土遺物は皆無に等しい。これまでにも論じられているところではあるが、現況で海拔が低い一帯は中世以来居住には適さない土地、若しくは近世以降の流路に因り中世期の堆積土が流されて顯著な遺構が希薄で、海拔の高い一帯は海岸からの飛砂が堆積した上に近世以降造成され、造っているとしても確認調査の深度が中世層に達していないと思われる。現況海拔5m前後の地点8では海拔3m前後で中世期の遺構と遺物が発見されている。この様に本調査地点は、中世から近世を経て現在に至るまで、自然に或は人為的にも地形が大きく変わった地域の西端に位置する。

尚、本章に係わる引用・参考文献及び図1の各調査地点については、本報文末に纏めて記した。また、確認調査地点の詳細については地点9報告書を参照されたい。

第2章 調査の概要

第1節 調査経緯・経過及び結果に至る概要

本調査は個人専用住宅の建設に先立ち、確認調査の結果に基づく諸協議を経て実施された。調査区は、北側隣地境界の既存塀から安全な後退距離を、南側も通路を確保した上で建設予定範囲内に設定した。調査に伴う残土を敷地内で処理する必要から調査区を二分し、東側をI区、西側をII区とした。東側I区から重機に依り、建物基礎等近現代に搅乱されていると判断した客土を掘り上げながら表土を掘削し、調査開始とした。I区の調査では、確認調査及び周辺の調査成果から面的な整地層の抵がりを捉え難く、各層位から大小深浅の遺構が重複することが予想された為、層位を観ながら遺構の重複を判断し順次遺構を掘り上げ、図面・写真撮影等記録保存を行った。最終的には、これまでの調査成果から無遺物層と思われる砂層を、湧水直前の海拔4.0m前後までトレンチに掘り下げ、遺構と出土遺物がトレンチ範囲内では無いことを確認し、記録保存の後にI区の埋め戻しとII区の表土掘削に移行した。II区の調査では、I区・II区の境に位置する遺構を把握する為に、I区の西端調査終了範囲を再度露出する方法を採った。為に、本報文ではI区・II区区別する事無く発見した遺構と出土した遺物を報告している。II区でもI区と同様に、調査区南半が著しく擾乱されていたが、重複する多くの遺構と多量の出土遺物を発見し、要所で記録保存を行った。I区のトレンチ調査の結果無遺物層と判断された砂層までII区全体を掘り下げた段階で、更なるトレンチ調査の必要はないとの判断し、関係各方面に連絡の上器材を撤収し調査終了とした。調査終了時点で発見された遺構は建物遺構5基・土坑40基・ピット11口、出土遺物は整理箱12箱である。

第2節 グリッド配置と国土座標（図2）

調査開始にあたり、付近の国土座標C007（X:-77 148.759 Y:-25 248.417）とC101（X:-77 199.600 Y:-25 270.239）を基に調査区を囲む様に方眼グリッドを設定した。現況の道路にはほぼ平行する2点、C007とC101の直線をそのまま延長し、C007から117.65m（C101から62.32m）の仮任意点をPとし、PからC007・C101を見通して東に90°振り調査区II区の南西隅付近の25.40mを方眼グリッドの南西隅とした。この点と90°北に振った8mの2点を基本軸として、調査区の北西隅から東へ算用数字を、南へアルファベットを付した。南北基本軸は磁北より東へ28°10'00"振れている。

第3節 堆積土層（図3）

調査地点は現況で海拔6.5m前後を測る。I層は近現代以降の堆積土。調査区全体に層厚約70cm、部分的にはかなり深くまで搅乱している。搅乱2はほぼIV層上面までだが搅乱1・3・4はV層まで達し、特に搅乱3はV層をも深く掘り込んでいる。搅乱の北壁は脆く調査区際ということもあり、堀り上げを断念して同範囲を調査区外と見なした。II層は中世遺物包含層。しまりのない茶褐色砂質土で、出土遺物量もそう多くはない。III層はやや土壤化した暗茶褐色砂質土で、この層位上面から掘り込まれた遺構群を1面とした。IV層はしまりの良い茶褐色砂質土で、砂粒が細かく密で砂層に近い。密に重複した遺構群の間で尾根状に確認し、この層位上面から掘り込まれた遺構群を2面とした。III層・IV層は、調査区壁で観察されたレベルを単純に比較すると西側で高く東側は低い。V層は暗灰色乃至灰黄色の細砂で風成砂層と思われる。層厚40~50cmと厚く堆積し、希に軽石粒や骨片が混じるが焼物は一片も出土しなかった。I区の部分的なトレンチに掘り確認したVI層は、不規則に貝粒子が粗い部分もあるが夾雜物を含まない白黄色の單一砂層で、付近の調査例から観ても基盤となる自然堆積層であろう。

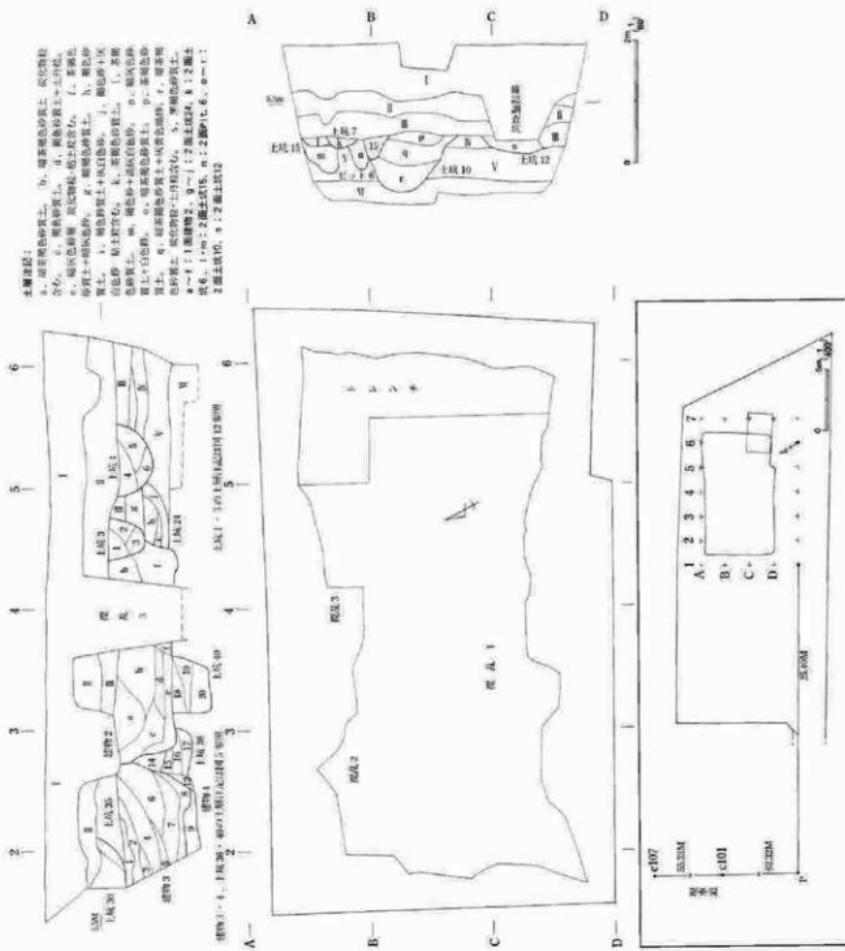


図2 國土座標とグリッド記置

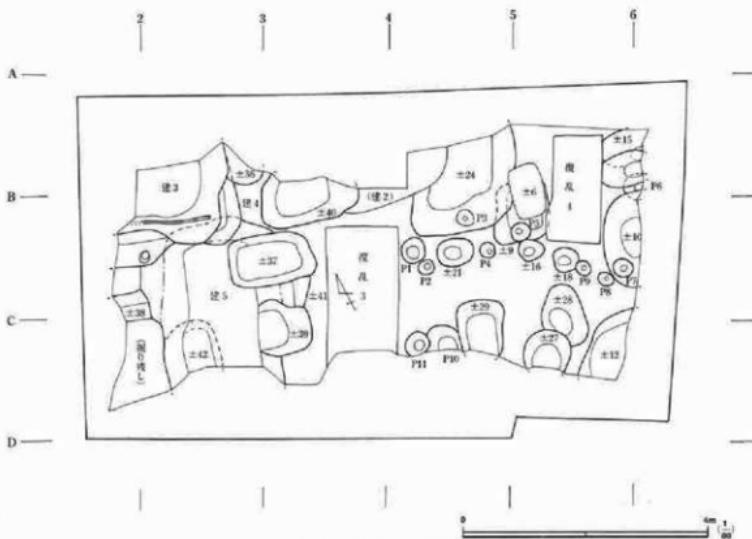
図3 グリッド配置と堆積土層

第3章 発見された遺構と遺物

本章では発見された遺構と出土した遺物について述べる。前章でも触れた様に、本調査ではⅠ区からⅡ区へ調査区が移行する際に、Ⅰ区西端を再度露出し両区に跨る遺構の整合を行っている為、本報文では遺構・遺物共にⅠ区・Ⅱ区に拘らずに報告する。遺構番号は、基本的には現地調査時に付したものそのまま使用し、全測図は縮尺1/80、各遺構個別図は縮尺1/60、断面図の基準高は海拔(m)で、出土遺物は1/3で示している。出土遺物の内、常滑窯窓の副部に押印文の拓影は、本報文末図17に縮尺1/2にて纏めて図示している。以下の文章中では、図3に示した調査に共通する基本土層Ⅰ～Ⅵをそのまま使用し、遺構規模は上幅の最大値を東西×南北で、深さは掘り込みレベルからの平均値を、単位cmで示した。図示した遺物の計測値及び各遺構・層位毎の出土遺物数は、第4章末の表に纏めた。

第1節 2面の遺構と遺物（図4～8）

図4は調査2面の全測図。2面は、IV層上面からの遺構群だが、攪乱や上層の遺構群に因り層の遺存範囲が極めて乏しい為、調査時には概ねV層上面で遺構確認を行っている。発見された遺構は、建物3基・土坑19基・ピット11基である。遺構の重複が甚だしく直上まで攪乱されていたこともあり、2面の遺構群完掘後は調査区全体にV層が露出し、遺構間の僅かな尾根を遺して平らに近い状況に至った。調査区西半に建物や方形土坑が繰返し構成し、東半の不規則なピットや小土坑列を境に南北で遺構の様相が異なっている。遺構群の掘り込みレベルは海拔5.0m前後、建物と方形土坑を基に遺構軸方向を測るとN=10°～14°～E内外。以下、個別の遺構と出土遺物について述べていく。



建物3・4、土坑36~41(図5)

図5は調査区北西端で発見された建物と、ほぼ同様の規模で垂直に近い掘り込み壁の方形土坑群。

建物3は確認規模205×155cm、深さ135cm程の方形窓穴で、建物4・土坑36より新しい。底面から40cm程上方に浮いた南壁の東西方向に、幅4~6cmの木本柱痕らしきものを確認しているが、狭小な確認範囲の為構造等関わるものかは不明。建物4は確認規模220×170cm、深さ75cmの方形窓穴で土坑36・建物5より新しい。南壁上方に構造に係わるものであろうか、径15cm内外の小ビットを伴う。

土坑37は140×80cm、底面は平坦で深さ45cm程の方形土坑で、建物5・土坑41より新しい。覆土は上層が黒褐色粘質土、下層は暗黄褐色弱粘質土で、人為的に埋められている。土坑40は確認規模160×90cm、底面は平坦で深さ65cmの方形土坑。土坑36は、上場南端を調査区内に微かに発見し得ただけで、殆どが調査区北壁での確認の為規模は不明。

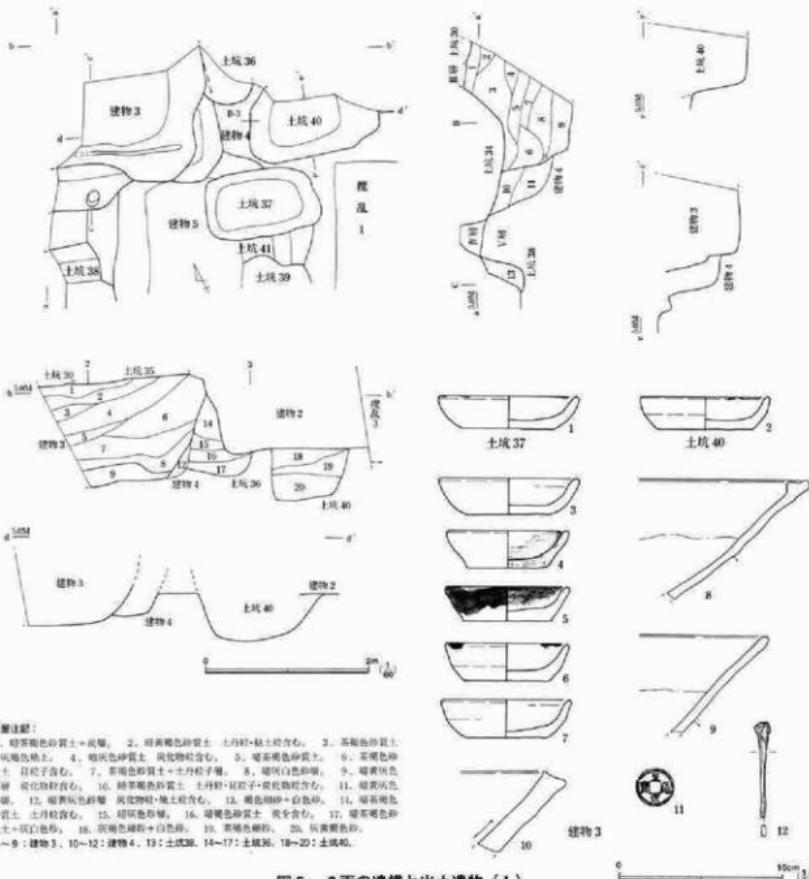


図5 2面の構造と出土遺物(1)

出土遺物(図5)

1は土坑37、2は土坑40出土の小型糸切り底かわらけ。共に背低気味で底径口徑比が小さく、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がる。胎土は淡橙色弱粉質土で、灯明皿として使用。

3～12は建物3の出土遺物。3～7は小型糸切り底かわらけ。概ね背高で器壁は開きながら立ち上るものが多いが、5は器壁が薄く内弯し口縁部付近で外反する。胎土は概ね肌色～淡橙色弱粉質土で、4・6・7は灯明皿として使用。6は断面に煤が付着し、破損後に被焼している。8は瀬戸窯卸目付大皿口縁部片。胎土は粘性にやや欠ける淡黄味灰色土で、暗灰緑色の施釉は厚く釉垂れが多い。後期II～IIIの製品。9は瀬戸窯直線大皿口縁部片。胎土は粘性にやや欠ける淡黄味灰白色土で、施釉は黄色味淡灰緑色で薄く刷毛塗り。後期IIの製品。10は常滑窯片口鉢II類口縁部片。胎土は夾雜物を含む灰黒色土、器表は茶褐色で、内面は使用に因り磨滅する。第8型式の製品。11は銅錢。北宋の皇宋通寶で、初鈔年1039年、楷書。12は鉄釘。

建物5、土坑37～42(図6)

図6は調査区の南西で発見された建物と土坑群。一部土坑は図5と重複して図示している。この付近は平面精査の怠りから、新旧逆に掘り上げたり建物5の上層に別の建物が在ったのを見逃している。

建物5は確認規模280×205cm、深さ50cm程の方形堅穴で、土坑37・42より古く、土坑39・41より新しい。覆土は白黄色砂・黄褐色砂の混じる暗褐色砂質土で、底面直上には炭を含むやや粘性のある黒褐色土が堆積していた。

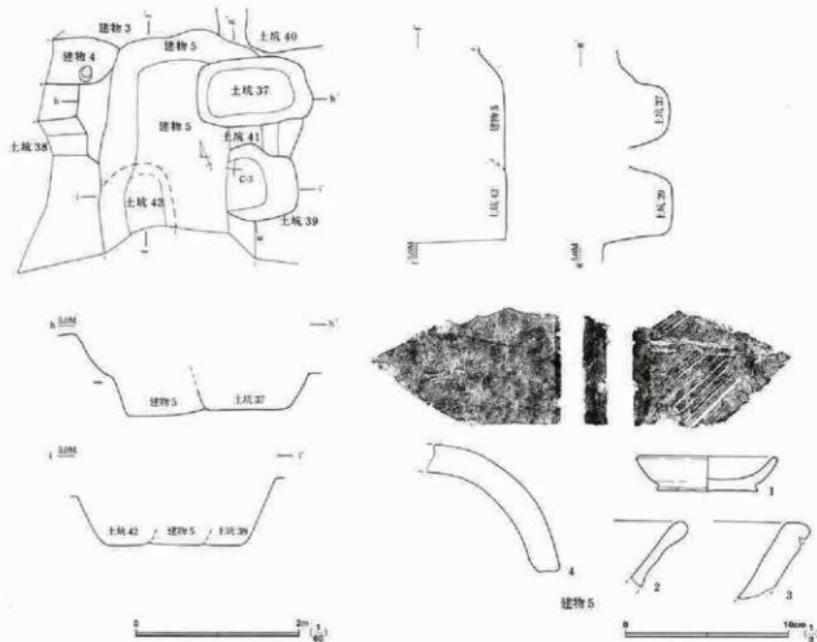


図6 2面の遺構と出土遺物(2)

土坑42は建物5完掘後に調査区南壁土層断面からそれと分り、建物5下場の不自然な弯曲と検討し推定線で図示した。推定規模は100×95cm、底面は平坦で深さ55cm程、恐らくは長軸が南北の方形土坑と思われる。覆土は白色砂の混じる暗黃褐色砂単層。土坑39は建物5より古いのに先に掘り上げてしまった。90cm×100cm、底面は平坦で深さ90cm程の方形土坑。覆土は炭・白色砂の混じる暗茶褐色砂質土で、人為的に埋められている様子が窺える。土坑38は擾乱や他の遺構に切られて60×45cm、深さ50cm程の範囲を確認したにすぎない。土坑41は、確認規模75×40cm、深さ45cm程で、建物5・土坑37・39より古い。遺存する東側掘り込み壁と覆土の様相から方形土坑かもしれない。

これらの遺構群を掘り上げた後に、建物5西壁上半と土坑41の東壁の不自然にも観える立上がりと、調査区南壁擾乱下の土層を検討した所、全ての遺構より新しく建物3・4よりも古い遺構が建物5の上位に在ったのを検出し損っている可能性が出てきた。その範囲を推定すると北側は建物3・4に因り不明、西は建物4に切られ土坑38を切っているあたり、東は土坑41の東外側、南は調査区外と思われ、規模は南北は不明で東西270cm前後、深さ50cm程の方形竖穴であろうか。

出土遺物（図6）

1～4は建物5出土遺物。1は小型糸切り底かわらけ。背低気味で、器壁は厚く開きながら立ち上がる。外面の強いナデ調整により底部脇が外側に突出する。灯明皿として使用。胎土は暗肌色弱粉質土。2は常滑窯片口I類口縁部片。胎土は夾雜物を多く含む黄色味灰色土。内面の磨耗は小破片の為不明。第6型式の製品。3は土器質浅鉢型火鉢の口縁部片。胎土は砂粒子を多く含み、軟質でもろい。胎土と

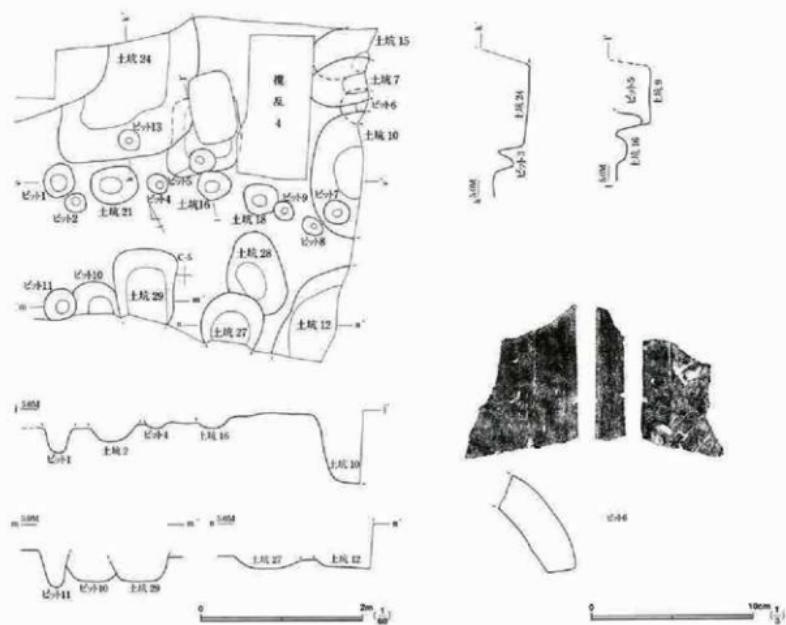


図7 2面の遺構と出土遺物（3）

器表共に暗肌色、胎芯は灰黒色。胴部は外面が剥落し、内面は横方向の繊かいナデ、指頭痕はわずかに残る。口縁下の穿孔は貫通していない。I B類(河野 1993)の製品。4は丸瓦。胎土は黑色粗砂を多く混じえる明灰色土で、凸面は継位の輪目叩き後、継位のナデ調整、凹面は布目痕、糸切り痕をヘラ削りとナデにより叩き目を消去している。

調査区東半土坑・ピット群(図7)

図7は調査区東半で発見された遺構群。上層の遺構や搅乱に因り、また、遺構精査のミスも手伝って、全体的に遺構本来の深さを失う検出結果となってしまった。調査区壁際の遺構群の堆積土層は図3に示している。土坑10と土坑24は2面構成土V層上面で確認し損い、V層まで掘り下げた時に発見した。調査区壁の土層断面から2面の帰属と判断し、新旧関係を修整の上図示している。

土坑24は確認規模175×155cm、深さ60cm程の方形堅穴と思われ、土坑9より新しい。南壁上位の径・深さ25cmのピット3は、土坑24に係わるものか単独のピットかは不明。土坑9は90~95cm四方、底面は平坦で深さ50cm程の方形土坑。覆土は灰や炭化物を含む暗褐色砂質土。この上層に単独で掘り込まれたピット5は、径・深さ25cm前後で、覆土は褐色細砂。土坑7・15・ピット6は長軸が東西の楕円形で、南北の短軸は60cm前後、深さは土坑7が15cm程と浅く、他は70cm程、ピット6は平面円形かもしれない。土坑10は確認規模で65×150cmの円形であろう、深さは95cm程。南壁上位に単独で掘り込まれたピット7は径30cm前後で、深さ15cm程、覆土は褐色細砂。このピット7から西へ、建物や方形土坑の遺構軸方向とは合わないものの小土坑とピットが連続して発見されている。形状は概ね不整円形で径25~50cm内外、深さはピット1が40cm程で他は10~20cm程、覆土は概ね褐色細砂乃至暗褐色砂質土の单層。この小土坑・ピットが連続する範囲より南では、北側の整然とも観える遺構配置と異なり、不整形な窪みとともにつかぬ浅い土坑が不規則に発見され、その範囲内からの出土遺物も少なかった。ピット11は径40cm内外、深さ50cm程で西の限界を示唆する。土坑29は確認規模80×95cm、底面は平坦で深さ30cm程、覆土は茶褐色細砂。西半の方形土坑群に類するものかもしれない。

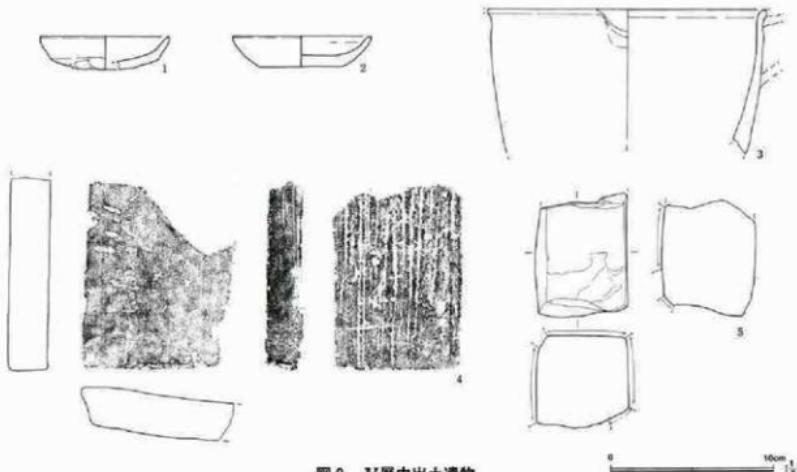


図8 IV層中出土遺物

出土遺物（図7）

1はピット6出土の丸瓦。胎土は黒色粗砂を多く混じえる明灰色土で、凸面は繩目叩きの後、ナデ調整、凹面は布目痕とナデが残る。

IV層中出土遺物（図8）

図8には2面を構成する茶褐色砂質土IV層からの出土遺物を図示しているが、先に述べた建物5上層の遺構・土坑10・土坑24の上層の出土遺物が、報文末の破片数と図8に混在している可能性がある。

1～2は小型かわらけ。1は手捏ね底。背低気味の平底状で、体部外側中位に窪みが残る。胎土は肌色弱粉質土。2は糸切り底。背低気味で内底面が広く、器壁は大きき開きながら立ち上がる。胎土は橙色弱粉質土。3は瀬戸窯柄付片口口縁部片。胎土は粘性に欠ける淡灰色土で、施釉は淡灰緑色に薄く刷毛塗りしている。全体的に二次焼成を受ける。後期の製品。4は平瓦。胎土は白色小石粒などの夾雜物を多く含む淡黄色粉質土で、凸面は繩目叩き痕、凹面は布目痕と指頭によるナデ調整する。5は流紋岩質凝灰岩製で伊予産の中底。砥面は3面、裏面は剥離・破損面だが部分的に平盤状の工具痕がある。

第2節 1面の遺構と遺物

図9は調査1面の全測図。1面の遺構は近現代の掘り込みに因る擾乱が甚だしい事に加え、表土掘削時の擾乱掘り上げの際に脆い砂層が崩れて遺構の形状が崩れた箇所もあり、良好な検出状況とは言い難い。発見された遺構は建物2基・土坑8基である。調査区中央から西に建物や土坑が重複するが、東半擾乱や確認調査 sondageでⅢ層が検出されなかったといえやや遺構が希薄な印象を受ける。遺構群の掘り込みレベルは海拔5.4m前後、建物と方形土坑を基に遺構軸方向を測るとN—12°～16°—E内外。以下、個別の遺構と出土遺物について述べていく。

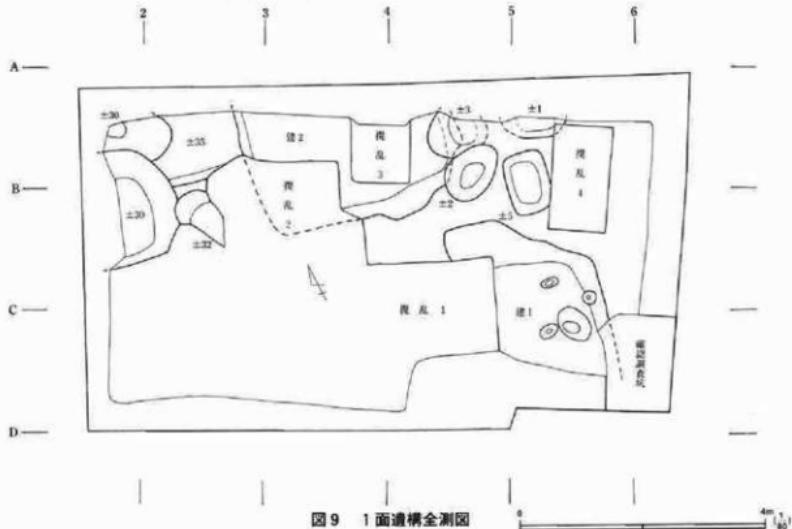


図9 1面遺構全測図

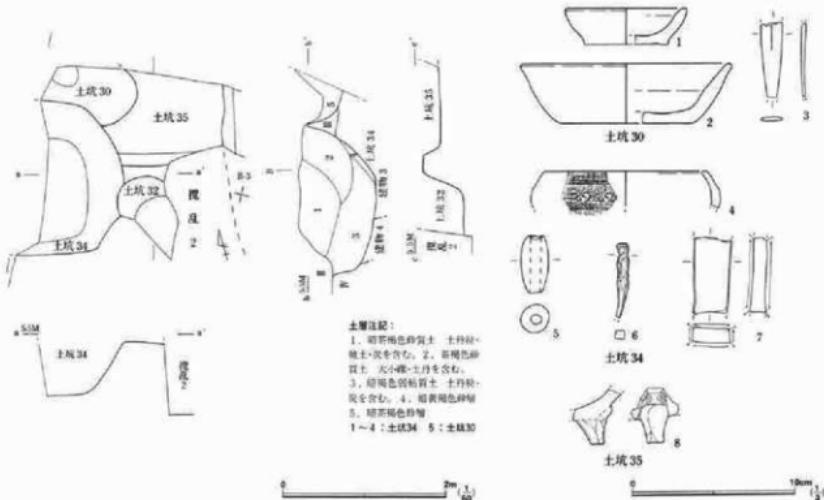


図10 1面の遺構と出土遺物（1）

土坑30・32・34・35（図10）

図10は調査区北西隅で発見された土坑群。何れもⅢ層の上面精査と擾乱坑断面から検出した。

土坑30は確認規模 $115 \times 70\text{cm}$ 内外、深さ55cm程、平面形は楕円形と思われ下場は極一部しか検出しえなかった。土坑35より新しく、土坑34より古い。土坑32は、検出中に擾乱の壁が崩壊した範囲しか記録できなかった。確認規模は $70 \times 95\text{cm}$ 内外、深さ50cm程、元は南北が長軸の楕円形で、覆土は上層が暗茶褐色砂質土、下層が炭の混じる茶褐色砂層乃至砂質土。土坑34との新旧は不明。土坑34は確認規模 $130 \times 185\text{cm}$ 、深さ95cm程、不整円形或は不整方形で、土坑35より新しい。掘り込み壁はなだらかで、底面も平坦ではない。土坑35は北壁は調査区外、東西は他の遺構に切られ南壁の一部を発見したにすぎない。確認規模は $145 \times 115\text{cm}$ 、深さは25cm程。覆土は部分的に白色砂の混じる暗茶褐色砂質土で、かなり土壤化している。底面は平坦で方形プランを想定し得るが、上層をⅡ層が覆い掘り込み壁高以上遺構の深さが考えられない為土坑とした。

出土遺物（図10）

1～3は土坑30の出土遺物。1～2は糸切り底かわらけ。1は背高で、やや厚みのある器壁は開きながら立ち上がる。胎土は淡橙色弱粉質土。2は大型で器壁は大きく開きながら立ち上がり、口縁付近で外反する。胎土は橙色弱粉質土。3は骨角製品の笄。全面によく研磨された薄板状の片面に、溝状とまではいえないが、刃物で削り出した痕がある。

4～7は土坑34の出土遺物。4は瓦質小型香炉。胎土は夾雜物を含む赤褐色、全体的な被熱により内面は黒く煤け、外面の器表は剥離している。口縁端部はヘラ状工具によるミガキが顕著、外面中位に菊花文スタンプを押印。5は土鍤。胎土は黒色微砂、雲母を含む暗茶褐色弱粉質土。6は鉄釘。7は流紋岩質凝灰岩製で天草産の中砥。砥面は4面、仕上砥にも使い得る良質な石目だが表裏砥面は歪む。

8は土坑35出土の瓦質香炉脚部。胎土は夾雜物を含む灰白色土で、菱形文スタンプを押印。

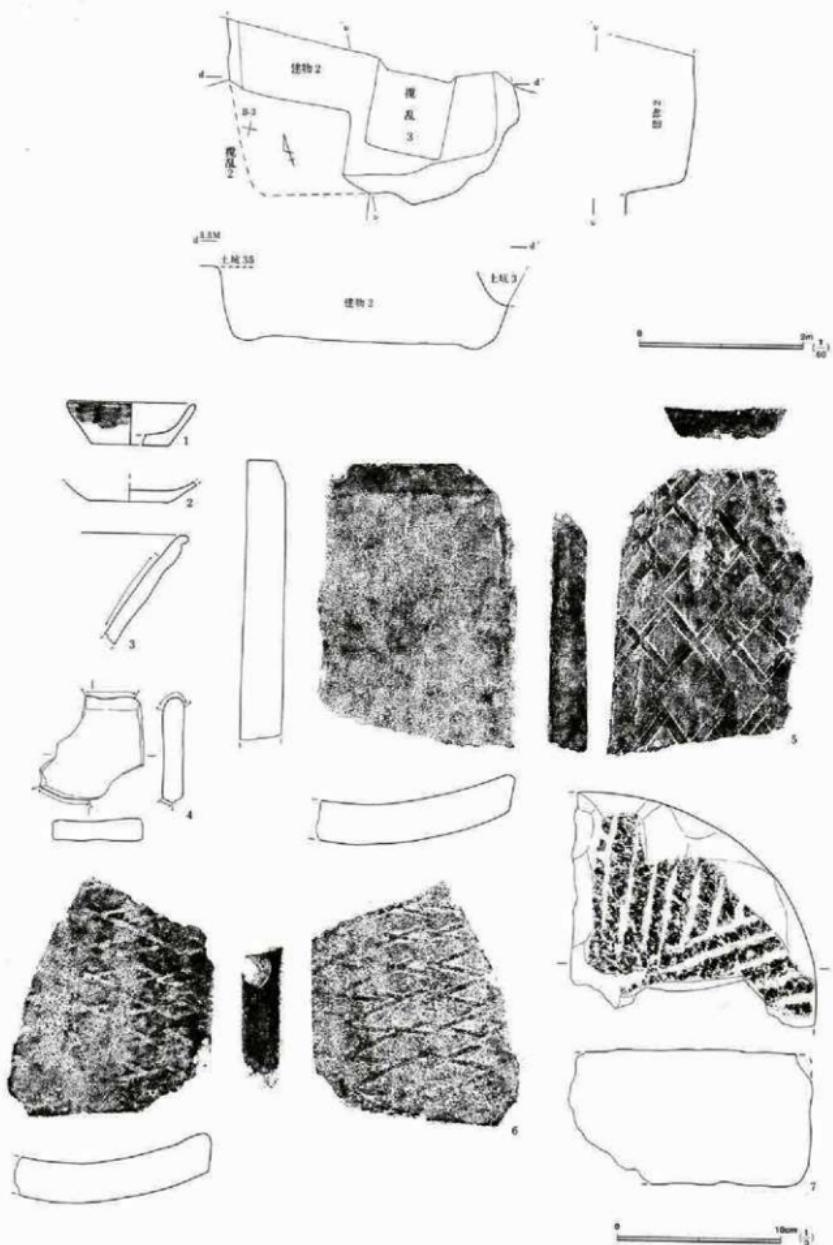


図11 1面の遺構と出土遺物（2）

建物2（図11）

図11は調査区中央北端で発見された建物2。大部分を擾乱され現地では調査I・II区に跨る遺構であったが、I区調査終了後に擾乱3の西半と遺構上場に土壌を積み、II区表土掘削の際には擾乱3を部分的に露出させた為、調査区北壁と擾乱2・3の壁面で土層が繋がる事を確認し、さらに南東一角は擾乱2の底面が建物2の底面より微かに高いのにV層を確認した事で、他の遺構が重複する可能性を低いことから図示した同一の遺構と判断している。確認規模は345×205cm、深さ105cmの方形堅穴。底面は平坦且つほぼ水平だが、東西壁下は5~10cm程微かに窪み根太木や板状の石等構造に関わるもののが敷設されていたのである。尚、西壁直下の窪み上層には、5~10cm大の拳状の土丹が径30~45cm程の円形に固まる様に置かれ、その中央にアワビと観られる貝が内面を上にして置かれていた。貝の遺存状況が悪く採り上げることができなかった上に、発見後の雨天で擾乱3の壁が崩れ記録を探る前に埋没してしまった。本文のみにて報告する。

出土遺物（図11）

1~7は建物2の出土遺物。1は小型糸切り底かわらけ。背高で、器壁が直線的に立ち上がる。断面には煤が付着し、破損後に被熱している。2は瀬戸窯縁軸小皿底部片。胎土は黒色砂粒子を若干含み粘性にやや欠ける灰白色土。後期III~15世紀中頃の製品。3は常滑窯片口鉢II類の口縁部片。胎土・器表共に灰雜物を含む茶褐色土。口唇部のナデが強く、体部内面使用による摩滅痕が残る。4は常滑窯窓を転用した擦り窓のある陶片。5~6は平瓦。5は黒色粗砂を多く混じえる明灰色土で、凸面に縱長の斜格子叩き目を施し、主に縱方向のナデで調整。凹面には砂・布目痕が残る。6は淡黄灰色の胎土を呈し、凹凸面とも砂・横長の斜格子叩き目を施す。7は安山岩製の下臼。

建物1・土坑1~5（図12）

図12は調査区東半で発見された遺構群。土坑1は調査区北壁土層断面から修整して図示している。確認規模は105×35cmで、直線的な掘り込み壁で深さは65cm程。土坑2は75×105cm内外の楕円形で、深さは35cm程、覆土は拳大の土丹を含む暗茶褐色砂質土。建物2・土坑3より新しい。土坑3は70~90cmの不整円形で、深さは60cm程、建物2より新しい。土坑5は70×100cmの方形、掘り込み壁はほぼ垂直で深さは85cm、覆土は炭の混じる茶褐色細砂乃至砂質土ではなく単層。土坑5は規模は小さく多種の遺物が出土しているが、その形状と覆土の様相から2面の方形土坑群に類するものかもしれない。尚、土坑4は土坑1・3の間に付されていたが、再検討の結果2面土坑24の最上層堆積土と判断した。

建物1は調査区の南東で発見された。掘り込み壁の北西が擾乱に因り元のレベルが失われているが、平面方形で底面にピットを伴う建物遺構とした。然し乍、掘り込み壁はなだらかで底面を平坦とは言い難く、遺構軸方向にも違和感があることから建物ではなく土坑かもしれない。確認規模は280×220cm内外、深さは50cm前後。底面に発見されたピットは1つが60×45cm、他は径20~30cm内外、何れも不整円形で深さは20cm程。

出土遺物（図12）

1~3は土坑5の出土遺物。1は鉄釘。2は骨角製用途不明品。横須賀市の夢原東遺跡(1995)他で出土している類似品は、上の穴に釣り糸を通して下端部の穴に鉄製の釣針を装着する擬釣針とされているが、本例は下端部は穴ではなく切り込まれている。3は流紋岩質凝灰岩製で上野産中砥。砥面は鎌研ぎに使用したのである、4面共に歪みが著しい。

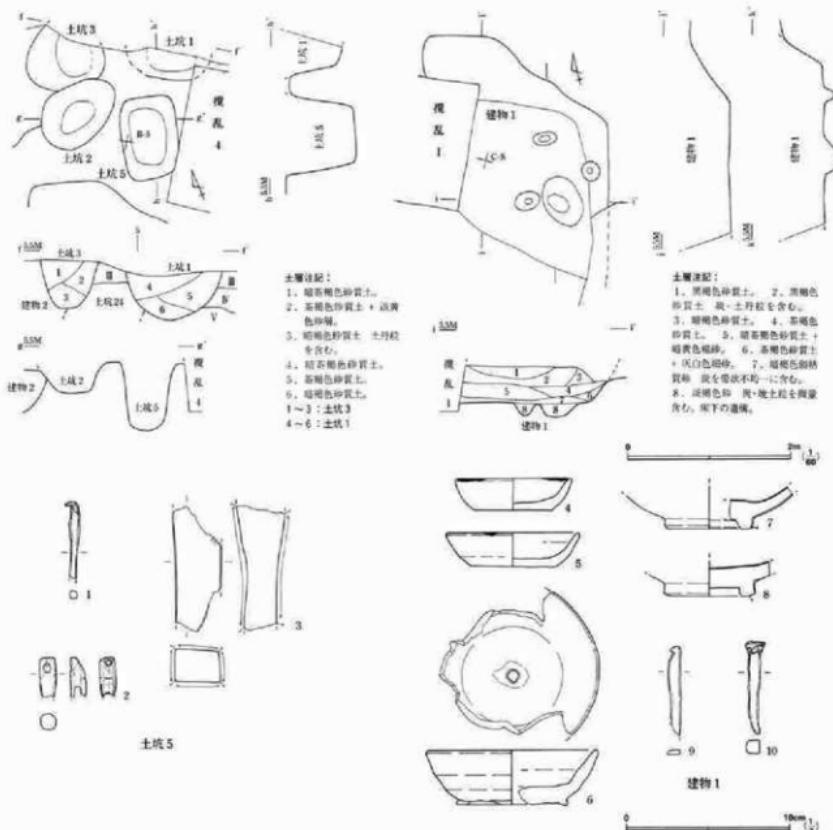


図12 1面の遺構と出土遺物（3）

4～10は建物1の出土遺物。4～5は小型糸切り底かわらけ。やや背高で、器壁は開きながら立ち上がる。特に4は内外面とも表面に鉄分が付着し、外底面のスノコ痕が顕著。共に胎土は夾雜物が多く含む肌色～暗肌色弱粉質土。灯明皿として使用。6は穿孔大型糸切り底かわらけ。全体的に厚ぼったく、焼成後の底面に7mmの孔を穿けられている。体部外面はナデ調整により明確な棱があり、特に底部脇は外側に突出する。また内底面も全体的にナデが強い。胎土は夾雜物を含む淡橙色弱粉質土。7～8は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の底部片。素地は黒色砂粒子を含むやや粘性の欠ける灰白色土で、施釉は透明な暗灰緑色を呈し、7は高台脇まで掛けられる。8の高台内はヘラ削り。9～10は鉄釘。

尚、本章冒頭にも触れているが、2面遺構内外・1面遺構内・後述する上層遺構出土遺物の内、押印文の捺された常滑窯青銅片の拓影は、出土遺構・層位を表に記し第4章末に縮めて図示している。

第3節 その他の出土遺物

Ⅲ層中出土遺物(図13)

図13は1面の遺構群を掘り上げた後に、下層2面の遺構精査までの出土遺物。1・2は小型糸切り底かわらけ。背高で器壁は直線的に立ち上がり、口縁部付近でやや内湾する。胎土は淡橙色弱粉質土。1は内外面ともに表面が剥げ、灯明皿としても使用。

3は瀬戸窯折縁深皿。胎土は粘性の少ない淡黄色土、施釉は灰緑色で漬け掛け。後期I～IIの製品。4は胎土・器表の観察から常滑窯の製品と思われるが、形状は硯様。硯の表現を借りれば、前縁の無く硯頭が幅狭になる台形硯で、硯裏は覆手状に微かに窪む。両側面は常滑窯窯の器表に良く似た茶褐色で、稚拙だが沈線状に細く2本線刻。縁頂部にも稚拙な線刻が2本観られ、暗灰緑色の降灰が掛る。硯面は滑らかとは言えないが唐硯彫り状で暗灰緑色の降灰が掛り、縁側面には微かに窪む。硯面中央上半は摩滅しているが墨痕は観られない。5は常滑窯の転用品で擦り陶片。6は備前窯摺鉢口縁部片。胎土・器表共に暗茶褐色。条線は4本以上。

7は平瓦。胎土は淡灰茶色で、凸面は斜格子・繩目の叩き痕、凹面は布目痕が残るがナデ調整。

8～10は銅鏡。8は北宋の天聖元寶で、初鑄年1023年の楷書。9は北宋の天祐通寶で、初鑄年1086年の行書。10は南宋の開禧通寶で、初鑄年1205年の楷書。11は鉄釘。

12は黒色頁岩で、やや軟質で全体に薄く均等に鉄分を含浸する特徴から鞍馬石と思われ、硯の転用品と思われる。右側面には硯の加工時に観察される切断痕があり、他の角は丁寧に面取りされている。圓上下端は同方向に何度も丁寧に加工し、尖端を削り出している。この削り出しの加工痕が明瞭に観察されることから、何かを研磨した様な痕跡は見えない。13は不明骨角製品。

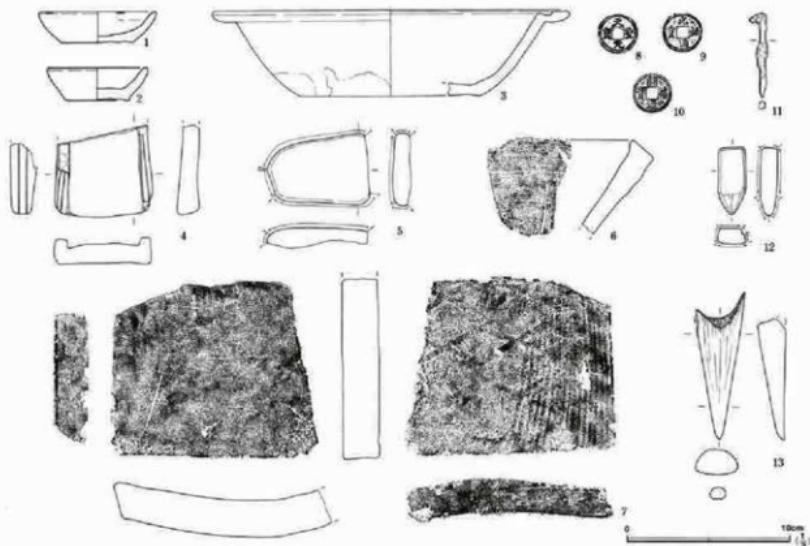


図13 Ⅲ層中出土遺物

Ⅱ層中遺物（図14）

図14は表土掘削終了後に1面の遺構を精査までの出土遺物。1～2は糸切り底かわらけ。1は背高で全体的に厚ぼったく、ナデによる体部外面の稜が強い。2は体部が直線的に開きながら立ち上がり、口縁部付近で外反する。共に夾雜物を含む肌色弱粉質土。

3は龍泉窯系割花文碗底部片。素地は黒色粒子を含んだ粘性にやや欠ける堅緻な灰色土、施釉は透明な青緑色で高台畳付を除いた外底面まで掛けられる。高台内はヘラ削り。13世紀中～14世紀前の中品。4は瀬戸窯柄付片口口縁部片。胎土は粘性にやや欠ける淡黄味灰白色土で、施釉は淡灰緑色で薄く刷毛塗り。後期Iの製品。5は瀬戸窯折縁深皿底部片。胎土は灰黄色土で、外底面ヘラ削りの底部に脚がつく。後期の製品。6は瀬戸窯濃窯長石釉皿。胎土は夾雜物を含む粘性のやや欠けた淡黄色土で、施釉は乳白濁色で全体的に厚く掛けているが、口唇部は部分的に露胎し釉斑が多い。16世紀末～17世紀初頭の製品。

7・8は砥石。7は頁岩製鳴滝産の仕上砥。淡黄色で硬質、砥面は表面で裏面は剥離、両側面には生産地鋸痕が遺る。8は頁岩製の仕上砥。暗黄色乃至淡肌色で、淡赤橙色の石紋が縱方向に不規則に何条も貫入する。砥面は表面で裏面は剥離、小口には横方向の鋸痕が微かに観られるが、遺存する両側面に工具痕は観察できない。石質と生産地加工痕から出羽産かもしれない。

採集遺物（図15）

図15は確認調査時や表土掘削時等帰属する層位・遺構が不明の出土遺物。1～3は糸切り底かわらけ。1～2は小型。共に背高で器壁が薄く、内寄気味に立ち上がる。胎土は橙色で、2は粉質精良胎土の「薄手丸深」型。3は大型で全体的に厚ぼったく、体部外面中位にはナデ調整により明確な稜があり、特に底部脇は外側に突出する。内底面も強いナデ調整。胎土は橙色で粉質土。

4は龍泉窯系青磁蓮弁文碗底部。素地は粘性のある堅密な灰色土、施釉は透明な灰緑色の釉を高台畠付を除いた外底面まで掛けれる。高台内はヘラ削り。見込みには方形区画中に「金玉満堂」の文字スタンプがある。5～7は瀬戸窯縁袖小皿。5の胎土は粘性にやや欠ける黄味灰色土、施釉は淡緑色。後期Iの製品。6は胎土が粘性にやや欠ける淡黄色土、施釉は黄色味淡灰緑色。内底面に若干重ね焼き痕が残る。後期I～IIの製品。7は胎土が粘性にやや欠ける灰白色土、施釉は暗灰緑色。後期IVの製品。8は瀬戸窯卸皿口縁部片。胎土が粘性にやや欠ける黄味灰色土、施釉は暗灰緑色。全体的に二次焼成を受けており、使用痕はみられない。後期III～IVの製品。9は瀬戸窯折縁深皿。胎土が粘性に欠ける淡黄色土、施釉は黄色味淡灰緑色で薄く刷毛塗り。中期後半の製品。10は常滑窯捏鉢II類口縁部片。胎土・器表共に夾雜物を含む暗茶褐色土、断面には麻が付着し、破損後に被熱している。

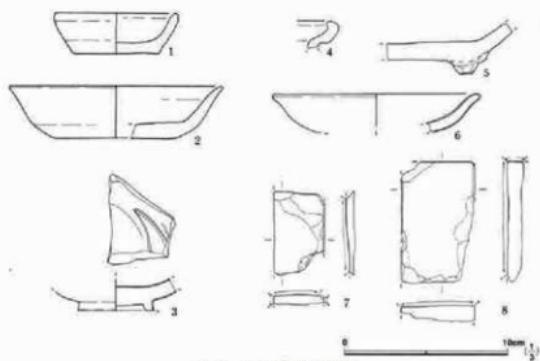


図14 Ⅱ層中出土遺物

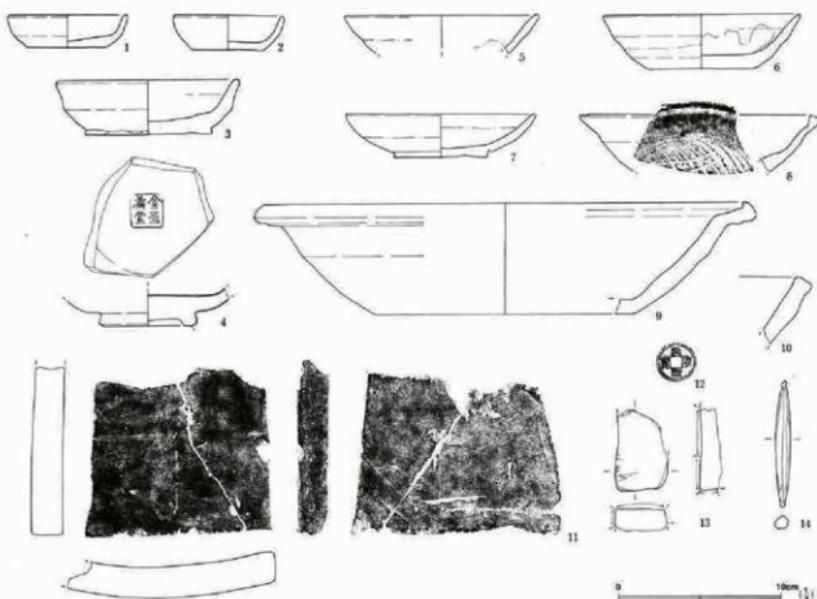


図15 採集遺物

11は平瓦。胎土は黒色粗砂を多く混じえる灰色瓦質土で、凹凸面共に叩き目とナデ調整。12は銅銭。北宋の天聖通寶で、初鑄年1023年の篆書。13は流紋岩質凝灰岩製で天草産の中砥。砥面は表面と左側面が顯著、裏面は剥離・破損。小口は摩耗しているが使用時の形状は遺存している。14は骨角製品の釣り鉤。

中世以前出土遺物（図16）

本調査では中世以前の遺構は発見されず層位も確認していないが、出土遺物には破片数で土師器269点・須恵器19点が含まれる。土妙の移動に伴い当地で出土した可能性はあるが、各遺物片は水磨している様には観察されず、中世以前の付近の環境は既にある程度居住可能であり、何らかの生活が営まれていたことを十分に窺わせる。遺物年代は古墳期の須恵器が少量含まれるが、奈良・平安時代の土器類が多い。在地産の短頸甕で「三浦型」と通称する甕も含まれている。

図16の1は土師器壺の口縁部片。2は北武藏窯土師器甕の口縁部片。3は須恵器碗の底部。胎土は砂質で粗い灰褐色土。高台内底面は回転糸切り痕が顯著に残る。これら中世以前の出土遺物については鎌倉遺跡調査会 押木弘巳氏にご助言頂いた。

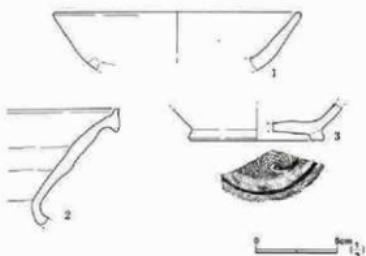


図16 中世以前の出土遺物

表1 出土遺物計測表

図 No.	遺構名	種別	計 単位: cm ()=腹元積 []=残存	図12	金 屬 製 品			
					1	2	3	4
図5	1 土塊37	土 器 かわらけ・角	口径 (8.4) 底径 (5.6) 高さ 2.0	1 土塊5	金 屬 製 品 石製品 上野産 中級	長さ [4.7]	幅 [0.4]	厚さ [0.45]
	2 土塊40	土 器 かわらけ・角	口径 (7.8) 底径 (5.8) 高さ 2.0	2 土塊5	骨製品	長さ 2.5	幅 1.0	厚さ 0.95
	3 遺物3	土 器 かわらけ・角	口径 (8.4) 底径 (5.0) 高さ 2.2	3 土塊5	石製品 上野産 中級	長さ [7.7]	幅 2.8	厚さ 2.8
	4 遺物3	土 器 かわらけ・角	口径 (7.4) 底径 (5.3) 高さ 2.3	4 建物1	土器 かわらけ・角	口径 (7.0)	底径 (4.8)	高さ 2.0
	5 遺物3	土 器 かわらけ・角	口径 (7.4) 底径 (5.4) 高さ 2.1	5 建物1	土器 かわらけ・角	口径 8.0	底径 5.2	高さ 2.1
	6 遺物3	土 器 かわらけ・角	口径 (7.4) 底径 (5.2) 高さ 2.3	6 建物1	土器 かわらけ・角	口径 (10.4)	底径 (6.8)	高さ 3.2
	7 遺物3	土 器 かわらけ・角	口径 (8.0) 底径 (5.0) 高さ 2.3	7 建物1	土器 底盤 素面 青磁造文鏡	口径 一	底径 (5.4)	高さ 一
	8 遺物3	土 器 加目村 大皿	口径 一 底径 一 高さ 一	8 遺物1	土器 青磁造文鏡	口径 一	底径 (5.6)	高さ 一
	9 遺物3	土 器 血縁 大皿	口径 一 底径 一 高さ 一	9 遺物1	金屬製品 鐵	長さ [5.6]	幅 [0.8]	厚さ [0.3]
	10 遺物3	土 器 口掛 直盤	口径 一 底径 一 高さ 一	10 遺物1	金屬製品 鐵	長さ [5.8]	幅 [0.8]	厚さ [0.8]
	11 遺物3	銅 鏡 化宋 皇宋通寶	径 2.4 初鑄 1039年 稲葉	1 Ⅲ層中 かわらけ・角	土器 底盤 素面?	口径 (7.0)	底径 (4.4)	器高 1.9
	12 遺物3	金 屬 製 品 鐵 打	長さ [5.9] 幅 [0.3] 厚さ [0.6]	2 Ⅲ層中 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 一	底径 5.6	高さ 2.0
図6	1 建物5	土 器 かわらけ・角	口径 8.5 底径 6.2 高さ 2.1	3 Ⅲ層中 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 (22.0)	底径 (11.2)	高さ 5.3
	2 遺物5	土 器 常滑 丹波	口径 一 底径 一 高さ 一	4 Ⅲ層中 規様 製品	長さ 3.5	幅 1.7	厚さ 1.2	
	3 遺物5	土 器 直鉢型 大鉢	口径 一 底径 一 高さ 一	5 Ⅲ層中 常滑 丹波 製品	長さ [4.5]	幅 [6.2]	厚さ [1.2]	
	4 建物5	丸 瓦	長さ [7.1] 幅 [8.4] 厚さ [1.75]	6 Ⅲ層中 常滑 丹波 前室	口径 一	底径 一	器高 一	
	5 建物5	丸 瓦	長さ [9.5] 幅 [6.9] 厚さ [1.8]	7 Ⅲ層中 女 瓦	長さ [10.9]	幅 [12.8]	厚さ [2.3]	
図7	1 P6	丸 瓦	長さ [9.5] 幅 [6.9] 厚さ [1.8]	8 Ⅲ層中 北京 天聖元寶	径 2.4	初鑄 1023年 稲葉		
図8	1 IV層中 かわらけ・手	土 器	口径 (7.8) 底径 (6.6) 高さ 2.0	9 Ⅲ層中 北京 元祐通寶	径 2.5	初鑄 1066年 行善		
	2 IV層中 かわらけ・角	土 器	口径 (8.4) 底径 (5.0) 高さ 1.9	10 Ⅲ層中 南宋 周祐通寶	径 2.4	初鑄 1205年 行善		
	3 IV層中 かわらけ・角	土 器 片 口	口径 一 底径 一 高さ 一	11 Ⅲ層中 金 屬 製 品 鐵 打	長さ [5.1]	幅 [0.4]	厚さ [0.4]	
	4 IV層中 女 瓦	女 瓦	長さ [11.4] 幅 [4.8] 厚さ [2.45]	12 Ⅲ層中 石 製 品 鐵 打	長さ 3.5	幅 1.7	厚さ 1.1	
	5 V層中 伊予產 中級	石 製 品 鐵 打	長さ [7.2] 幅 5.8 厚さ [5.6]	13 Ⅲ層中 不 明	長さ 9.5	幅 2.9	厚さ 1.6	
図10	1 土塊30	土 器 かわらけ・角	口径 (6.4) 底径 (5.2) 高さ 2.2	1 Ⅱ層中 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 (7.4)	底径 (5.4)	器高 2.5
	2 土塊30	土 器 かわらけ・角	口径 (12.8) 底径 (8.0) 高さ 3.65	2 Ⅱ層中 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 (13.0)	底径 (7.6)	器高 3.2
	3 土塊30	土 器 かわらけ・角	長さ [4.6] 幅 1.3 厚さ 0.3	3 Ⅱ層中 龍泉窯 青磁造文鏡	土器 底盤 素面?	口径 一	底径 (4.6)	器高 一
	4 土塊34	良 質 香炉	口径 (10.0) 底径 一 高さ 一	4 Ⅱ層中 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	口径 一	底径 一	器高 一
	5 土塊34	土 製 品 上 陶	長さ 3.5 径 1.76 ~1.8 孔径 1.6 ~1.7	5 Ⅱ層中 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	口径 一	底径 一	器高 一
	6 七塊34	金 屬 製 品 鐵 打	長さ [4.6] 幅 [0.55] 厚さ [0.5]	6 Ⅱ層中 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	口径 (12.6)	底径 一	器高 一
	7 上塊34	石 製 品 天草 產 中級	長さ [4.5] 幅 2.3 厚さ 1.0	7 Ⅱ層中 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	長さ [5.0]	幅 3.0	厚さ [0.6]
	8 土塊35	良 質 香炉	口径 一 底径 一 高さ 一	8 Ⅱ層中 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	長さ [7.4]	幅 4.4	厚さ [1.1]
図11	1 遺物2	かわらけ・角	口径 (7.8) 底径 (4.8) 高さ 2.6	1 表 採 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 (7.2)	底径 (5.0)	器高 2.0
	2 遺物2	湖戸 片 口	口径 一 底径 (5.0) 高さ 一	2 表 採 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 (6.6)	底径 (4.4)	器高 2.1
	3 遺物2	片 口	口径 一 底径 一 高さ 一	3 表 採 かわらけ・角	土器 底盤 素面	口径 (11.0)	底径 (7.4)	器高 3.3
	4 遺物2	良 質 香炉	長さ [6.5] 幅 [6.4] 厚さ [1.4]	4 表 採 青磁造文鏡	土器 底盤 素面	口径 一	底径 6.0	器高 一
	5 遺物1	女 瓦	長さ [17.5] 幅 [12.1] 厚さ [2.5]	5 表 採 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	口径 (12.0)	底径 一	器高 一
	6 遺物1	女 瓦	長さ [14.6] 幅 [12.5] 厚さ [2.5]	6 表 採 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	口径 12.0	底径 6.6	器高 3.3
	7 遺物2	石 製 品 片 口	満7本以上	7 表 採 湖戸 片 口	土器 底盤 素面	口径 (11.6)	底径 (5.6)	器高 2.6
図12								
図13								
図14								
図15								

図15	8 表 摂	浦 戸 宮 天草 領	口径 (13.0) 底径 一 距高 一	図15	13 表 摂	石 製 品 天草 製 品 骨 製 品 薬 り 鋼	長さ [4.9]	幅 3.2	厚さ [1.4]
	9 表 摶	浦 戸 宮 折 線 漢 領	口径 (29.4) 底径 (16.0) 高さ 6.8		14 表 摶	天草 製 品 土 飾 器	長さ 7.7	幅 8.5	厚さ 0.8
	10 表 摶	常 游 宽 片 口 林 且 領	口径 一 底径 一 距高 一		16 1	目 展 中 北 武 露 葉 裏 壁 器	口径 (15.0) 底径 一 高さ 一		
	11 表 摶	女 玄	長さ [10.4] 幅 [11.6] 厚さ [2.0]		2	目 展 中	口径 一 底径 一 高さ 一		
	12 表 摶	全 國 製 品 組	径 2.4 初 調 1040 年 経 告		3	目 展 中 須 志 器	口径 一 底径 (8.2) 高さ 一		

表2 出土遺物数

	か わ ら け	船 社 品				国 内 產 国 器 集				土 器 集	
		手づくね	糸 切り	青 磁	白 磁	青白 磁	褐 磁	浦 戸	雪 清	湯 美	備 前
2 面 遺 構		2	171	3		2	1	12	108		1
1 面 遺 構		6	285	7	1	1		23	144	1	5
IV 層 中			38	3				2	22		
III 層 中		3	126	3		1		8	97		2
II 層 中			42	4	2	2		13	81	1	4
採 集			69	8	1			17	132	1	1
計		11	751	28	7	6	1	75	581	2	11
%		0.5%	37.0%	1.1%	0.3%	0.3%	0.0%	3.7%	28.8%	0.1%	0.1%
土 製 品	瓦 製 品	火 舐 (香 炉)	瓦	石 製 品	金 屬 品	骨 角 品	自 然 物	中 世 以 前	近 現 代	計	%
			4	2	2	4	20	6	85	3	426 21.0%
I	3	6	6	3	10	3	13	7	61	6	596 29.5%
			1	1			4	2	11		84 4.1%
			2	2	3	11	2	7	80	6	358 17.6%
			1				0	1	2	1	72 3.5%
			3	3	1	1	11	15	30	3	331 16.3%
1	6	16	14	12	26	6	55	39	269	19	80 2028
0.0%	0.3%	0.8%	0.7%	0.6%	1.2%	0.3%	2.7%	1.9%	13.3%	0.9%	3.9% 100.0%

表3 出土貝分類表

		干 潟 群 集				内 湾 砂 底 群 集				計	%
		ア キ リ	シオ フ キ カ	イ カ カ	ミ カ カ	イ マ カ カ	キ	ハ マ ク	リ	サ ル カ	ウ カ
2 面 遺 構		3				1		2	4		2
1 面 遺 構		1			1					1	
IV 層 中									2		
III 層 中				1							2
II 層 中										2	2
採 集		4	1	1	1	1	1	4	7	6	
計		7.3%	1.8%	1.8%	1.8%	1.8%	1.8%	7.3%	12.7%	10.9%	
内 湾 泥 底 群 集		湾 外 砂 底 群 集	沿 岸 砂 底 群 集			岩 礁					
ア カ ニ シ ハ イ カ イ	チ ヨ ウ セ ハ マ グ ク リ	キ サ コ	サ シ	エ	ハ テ イ ラ	イ ワ カ カ	キ				
1	2	1	1	1	1	1	1	20	36.4%		
3	3		2	2				13	23.6%		
1				1				4	7.3%		
	1		1	1	1	1	1	7	12.7%		
	2				2	2	1	11	20.0%		
7	6	1	4	7	4	2	2	55			
12.7%	10.9%	1.8%	7.3%	12.7%	7.3%	3.6%			100.0%		

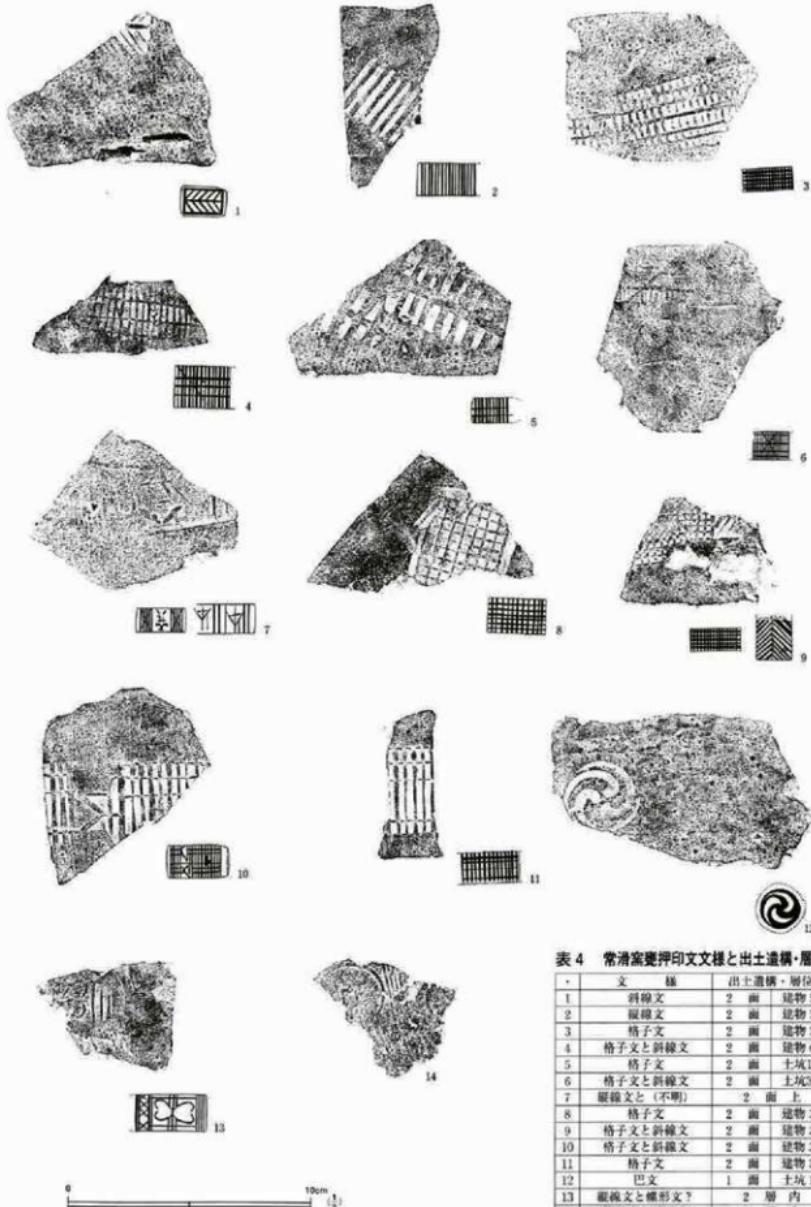


図17 出土常滑窯押印文拓影

表4 常滑窑押印文様と出土遺構・層位

	文様	出土遺構・層位
1	斜線文	2面 建物5
2	縱線文	2面 建物5
3	格子文	2面 建物5
4	格子文と斜線文	2面 建物6
5	格子文	2面 土坑17
6	格子文と斜線文	2面 土坑37
7	縱線文(不明)	2面 上
8	格子文	2面 建物3
9	格子文と斜線文	2面 建物3
10	格子文と斜線文	2面 建物3
11	格子文	2面 建物3
12	巴文	1面 土坑1
13	縱線文と幾形文?	2層 内
14	縱線文と幾形文	2層 内

第4章 調査成果

本調査では限られた範囲と期間の中とはいえ、一定の成果を得ることができた。第1章で述べた如く、本調査地点より西側一帯の滑川に至る範囲では、生活址足る遺構と遺物の発見は殆ど例がない。又、現況の海拔高度を併せ観た時に、流路や飛砂といった自然が由来の遺因で中世期の顯著な遺構が発見されない事も既に述べた。本調査では、海拔5.3m前後から生活遺物を伴う遺構が数多く発見され、明らかに人の手に依って掘られた遺構（土坑40）が海拔4.3m程度で発見されているし、調査区内で水が流れたり被ったりした様な痕跡は調査者としては確認できなかった。本地点西前を南北に通る現況車道の西側で九品寺のすぐ南側では、海拔10mを測る。その付近の堆積土がどの様で在るのかは想像だに及ばず、飛砂についての言及は避け、少なくとも先に述べた現車道付近より東側には流路は及んでいないと言えよう。これは本地点より北の車道沿いの各調査地点を観ても既知の事ではある。

本地点で発見された遺構は、方形堅穴・土坑・ピットであり付近の調査或は海岸地域の調査を併せ観ても特に目新しい様相は無い。ただ、本報文で方形土坑とした遺構について若干触れる。土坑5・11・37・39・40・41・42は、掘り込み壁がほぼ垂直、底面は平坦で幅50cm内外、同規模の方形、人為的に埋められている、出土遺物が極めて少ない等の共通点が多い。周囲の遺構の重複関係や出土遺物の年代から推して、これらの土坑は何らかの目的で掘られ極めて短期間で埋められたと考えられる。方形堅穴との関係或は逆に方形堅穴が構築されない空間との関係が考えられようが、本地点では方形堅穴1基さえ四辺周発見・検出もし得ず、言及を避け類例の増加を持ちたい。

本調査地より出土した遺物は糸切りかわらけが最も多く、常滑窯・瀬戸窯と統一（表2参照）、周辺の調査地点と出土遺物の種類・多寡・年代観共に大きな差は観られない。1面と2面でも出土遺物の年代観はあまり差ではなく、下層のかわらけと後期が主体の瀬戸窯の年代、消極的乍後述する常滑窯押印文の年代も考慮して、概ね13世紀末～15世紀中頃の年代と考えている。2面遺構内出土遺物から観て、建物や土坑が繰返し興廢し付近が活況を呈するのは14世紀前半以降であろう。

本調査で出土した常滑窯発片に押印文が観察された破片は28点有り、内、文様が明瞭な破片の拓影を、生産地資料から類する押印文種と併せて縮尺1/2にてまとめて図示した（図17）。

押印文の種類としては格子文が多く、次に縦線文と斜線文を組み合わせた文様が多い。これらの文様は、生産窯址での第一段階（12世紀前半）から第四段階（13世紀後半～14世紀前半）に至るまで頻繁に用いられる保守的なモチーフであることを反映している（中野 1992）。また、12の巴文や7・13のように文様の構成が複雑化し、細密な浅い彫り込みの装飾的な要素の強い文様も出土している。14の錢形の文様は、市内遺跡の出土例として、弁ヶ谷東やぐら群第1号やぐら内埋葬遺構中に据えられていた常滑大甕がある。生産地編年の7型式（1300～1350）で、縁部の垂下が進んでいることからより新しい要素を示している（中野 1994）。ここでみられる常滑大甕の押印文は「①横長の方形区画中央に錢形文、その左右に三本の縱方向の細線が配されるもの、②横長方形区画に錢形文が二つ配され、その中央が三本の縱方向の細線で区切られるもの」（鈴木 他 2000）の2種類があった。今回は小破片のため①・②の判別は難しいが、錢形の錢径は2.6～2.7cm、錢孔6.5mm、「大」と言う錢文が認められ、縱方向の細線は四本であった。錢形文は窯跡での出土例はないものの、このように文様の構成が複雑化し細密な浅い彫り込みの装飾的要素の強い文様は、窯跡では第四段階（13世紀後半～14世紀前半）以降にみられるモチーフである。同じ層から出土した13の蝶形文は窯跡では第四段階後半（14世紀前半～14世紀後半）の常滑市高坂第1号窯より出土している（中野 1994）、錢型文も同じ時期頃の文様であろう。

本遺跡から出土した常滑窯の押印文様は、第一段階から続く保守的な文様と装飾的要素の強い文様が両立する第四段階ごとのものと思われる。本地点出土遺物の年代は13世紀末～15世紀中頃としたが、常滑窯押印文の文様からもその年代を後押しできると考えている。以前報文中で触れた(田畠他2002)こともあり蛇足ではあるが、鎌倉市内で出土した常滑窯片口鉢の内面に押印されている例が、何れも破片ではあるが10数例ある。全て片口鉢Ⅱ類で体部内面上方に単独で捺され、文様種は壺とほぼ共通で斜格子・縱線と斜格子・格子と斜線等で、中には菊花陰刻・竹管状のものも観られる。出土地点や層位に偏りではなく、常滑窯の生産地編年(中野1994)で5～7型式、併存するかわらけは概ね13世紀後半～14世紀代である。この年代は、中世鎌倉には多方面から多くの物資が搬入され、都市内で大量に消費・廃棄された時期でもある。

【引用・参考文献】

- 白井永二 1976年『鎌倉事典』東京堂出版
高柳光寿 1959年『鎌倉市史 著述編』吉川弘文館
高柳光寿・貫道人他 1959年『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
貫道人・川副武胤 1980年『鎌倉廢寺事典』有斐閣
馬渕和康 1995年『能成寺跡 - 材木座五所社境内遺跡の発掘調査 -』能成寺発掘調査団／鎌倉市教育委員会
高橋一郎 1995年『中世鎌倉における淨土宗西山義の空間』『中世の空間を読む』吉川弘文館
齊藤直子 1999年『13～19世紀鎌倉海岸部における湯浴の変容』『国立歴史民俗博物館研究報告第81集』国立歴史民俗博物館
齋木秀雄 1989年『鎌倉の地形を復元する』『よみがえる中世【3】 武士の都鎌倉』平凡社
松尾宣方 1989年『中世の浜と海岸線』『よみがえる中世【3】 武士の都鎌倉』平凡社
河野貴知郎 1993年『中世鎌倉火葬跡 - 東国との関連において -』『考古論叢 神奈川』第2集 神奈川県考古学会
水井久美男 1996年『日本出土銭銅鑄造』 兵庫県埋蔵銭銅調査会
中野晴久 1992年『中世知多古墳群の押印文 - ミクロ流通史のための予備的研究 -』『知多半島の歴史と現在・4』 日本福祉大学知多半島総合研究所
中野晴久 1994年『赤羽・中野・生産地における編年について -』『中世常滑焼きをオット』シンポジウム資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所
鈴木康一郎他 2000年『かながわ考古学財団調査報告94 弁ヶ谷東やぐら群 平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策 工事に伴う発掘調査』かながわ考古学財团
田畠衣里他 2002年『下馬周辺遺跡(No.200)由比ガ浜二丁目106番6,7地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 18 平成13年度発掘調査報告(第1分冊)』

【調査地点掲載報告書】

感応寺跡 (No. 225)

1. 本調査地点

材木座町屋遺跡 (No.261)

- 材木座四丁目260番1地点 1988年調査「材木座町屋遺跡 (No.261) - 材木座四曲260番1外 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』1990年3月 鎌倉市教育委員会
- 材木座一丁目144番3地点 1990年調査「材木座町屋遺跡 (No.261) - 材木座一丁目144番3 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』1991年3月 鎌倉市教育委員会
- 材木座二丁目217番6地点 1993年調査「材木座町屋遺跡 (No.261) - 材木座二丁目217番6地点 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第2分冊)』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 材木座三丁目364番1外地点 1995年調査「材木座町屋遺跡 (No.261) - 材木座三丁目364番1外地点 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第1分冊)』1997年3月 鎌倉市教育委員会
- 材木座一丁目890番7地点 1998年調査「材木座町屋遺跡 (No.261) - 材木座一丁目890番7地点 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』2000年3月 鎌倉市教育委員会
- 材木座一丁目910番地点 2000年調査「材木座町屋遺跡発掘調査報告書 一錦倉市材木座一丁目910番 -」2001年9月 材木座町屋遺跡発掘調査団
- 材木座六丁目760番1地点 2000年調査「材木座町屋遺跡 (No.261) - 材木座六丁目760番1地点 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』2001年3月 鎌倉市教育委員会

9. 材木座四丁目256番1地点 2000年調査「材木座町屋遺跡（No.261）－材木座四丁目256番1地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告（第2分冊）』2002年3月 鎌倉市教育委員会
10. 材木座六丁目647番15地点 2002年調査
11. 材木座六丁目647番10地点 2002年調査
12. 材木座六丁目647番8外地点 2002年調査
13. 材木座六丁目647番9地点 2002年調査
14. 材木座一丁目921番5外地点 2003年調査
15. 材木座三丁目83番地点 2003年調査
- 能藏寺跡（No.314）**
16. 材木座二丁目303番地点 1971年調査「来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983年3月 鎌倉市教育委員会
17. 材木座二丁目274番4地点 1993年調査「能藏寺跡－材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査－」1995年7月 能藏寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
18. 材木座二丁目297番1地点 2001年調査「能藏寺（No.314）－材木座二丁目297番1地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』2003年3月 鎌倉市教育委員会
19. 材木座四丁目274番2の一部 2003年調査
- 長勝寺遺跡（No.313）**
20. 材木座二丁目12番7地点 1976年調査「長勝寺遺跡－中世鎌倉の民衆生活を探る－」1978年10月 長勝寺遺跡発掘調査団
21. 材木座二丁目2168番3地点 1997年調査「長勝寺遺跡（No.313）－材木座二丁目2168番3地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告（第2分冊）』1999年3月 鎌倉市教育委員会
- 井ヶ谷遺跡（No.249）**
22. 井が谷やぐら群
23. 材木座四丁目336番7地点 1999年調査「井ヶ谷遺跡（No.249）－材木座四丁目336番7地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第1分冊）』2001年3月 鎌倉市教育委員会
24. 材木座六丁目643番7地点 2003年調査
25. 材木座六丁目336番7地点 2003年調査
- 光明寺旧境内遺跡（No.316）**
26. 材木座六丁目854番 1977年調査「光明寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983年3月 鎌倉市教育委員会
27. 材木座六丁目846番1地点 1978年調査「光明寺裏遺跡－鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書－」1980年3月 北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団／東京都北区教育委員会
28. 材木座六丁目846番1地点 1984年調査「淨土宗大本山天照院光明寺－開山記主良忠上人700年遠忌記念事業に伴う埋蔵文化財の調査－」1986年3月 光明寺境内遺跡発掘調査団・大本山光明寺
29. 材木座六丁目855番21地点 2003年調査



1. 調査区東半掻乱掘り上げ後の状況（南から）



2. 1面建物 1 (南から)



3. 1面建物 2 (北から)



4. 1面土坑 1～3・5 (東から)

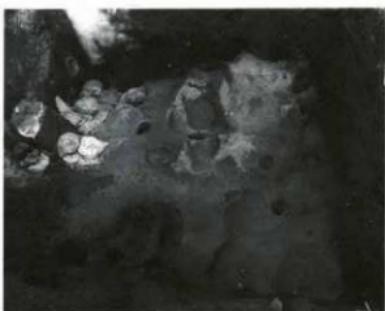


5. 調査区の移行状況 (北東から)

図版2



1. 2面西半全景（南から）



2. 2面東半全景（南から）



3. 2面建物5・土坑37・39・42（東から）



5. 2面東半北側遺構群（東から）



4. 2面建物3・4・5・土坑36・37・40（北から）



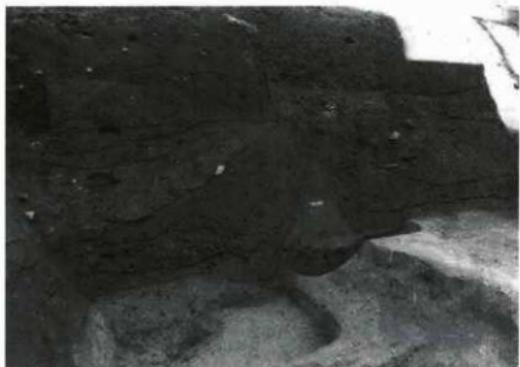
6. 2面ピット10・11・土坑29（南から）



1. 調査区東半最終状況（南西から）

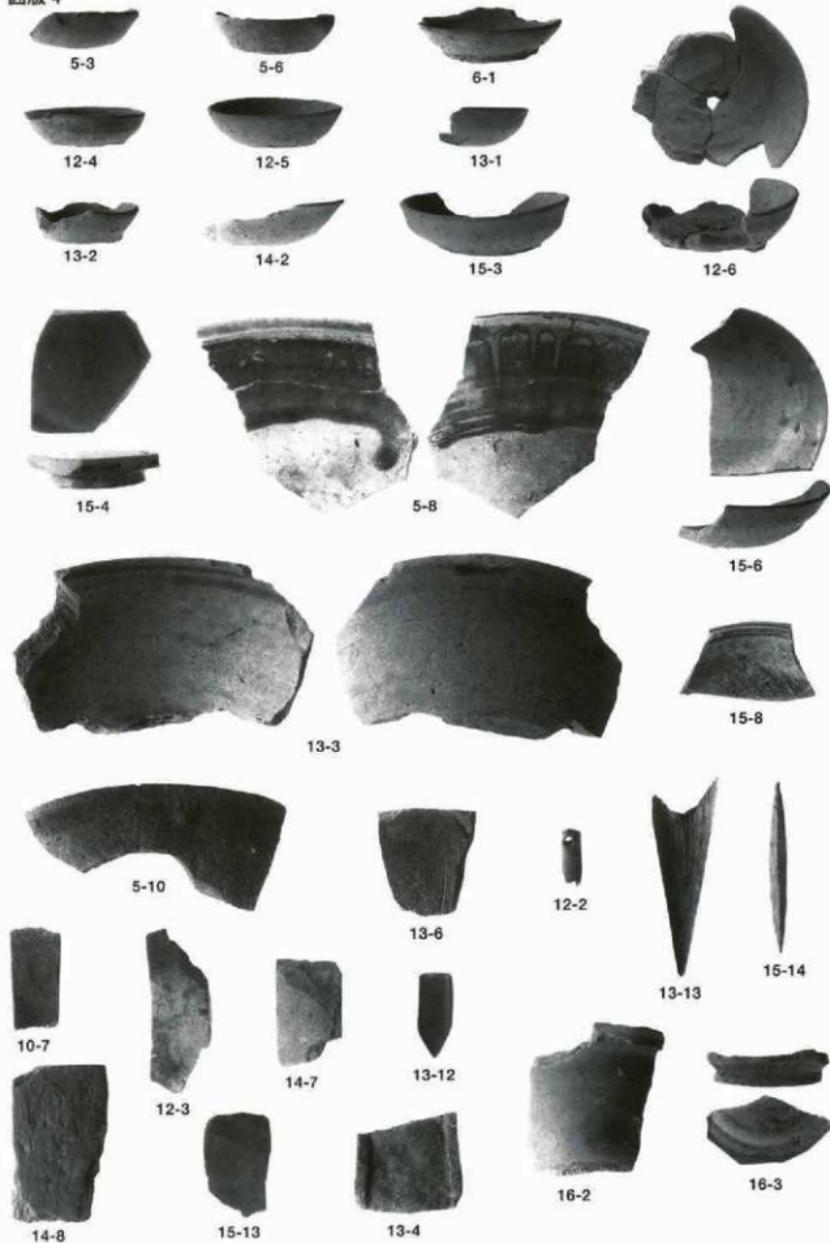


2. 調査区東壁土層堆積（部分・西から）



3. 調査区北壁土層堆積（部分・南から）

図版 4



ほうじょうこまちていあと
北条小町邸跡 (No.282)

雪ノ下一丁目407番3の一部地点

例　　言

1. 本報文は、北条小町邸跡（No282）の所在する遺跡内、雪ノ下一丁目 407番3 の一部地点における個人専用住宅（表層地盤改良）建設に伴う緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、平成14年11月25日から平成15年1月25日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3. 調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原 廣志

調査員：須佐直子、太田美智子、須佐仁和、早坂伸市、中川建二、梅岡溪音

調査補助員：宇都洋平、高橋拓也、野崎美帆、山口正紀（鶴見大学生）、銘苅春也、橋本和之、原 考史（国士館大学生）

調査作業員：荻野 熊・奥山利平、山崎一男（社）鎌倉市シルバー人材センター

協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所

4. 本報の執筆は、第1・3章を原、第2章を須佐直子がそれぞれ分担執筆し、第5章については調査員協議のもと原が稿を草した。挿図作成には太田、早坂、中川、梅岡、宇都、野崎、山口、原(考)、橋本が行い、法量表作成を須佐(仁)が行った。

5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を原・須佐(仁)、出土遺物を須佐(仁)が撮影した。

6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7. 本報の凡例は、以下の通りである。

・図版縮尺　全測図：1／50

　遺構図：1／20, 1／40

　遺物図：1／3, 1／4 (木製品の一部)、1／6 (常滑窯の一部)

・遺構図版　遺構のレベルは海拔標高の数値を示している。

・遺物図版　- - - - は釉薬の範囲を示す。黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤を表現している。

手控かわらけ底径の法量は外底指頭痕と口縁部との接部の数値を表わしている。

8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。

秋山晋雄、大三輪龍彦、岡 陽一郎、小野正敏、河野眞知郎、菊川 泉、小林康幸、斎藤慎一、佐藤仁彦、汐見一夫、塩田明弘、宗臺秀明、宗臺富貴子、田代部夫、玉林美男、塚本和弘、継 実、手塚直樹、福田 誠、松尾宣方、馬淵和雄

目 次

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	265
1. 遺跡の位置	265
2. 歴史的環境	265
第2章 調査の概要	269
1. 調査の経緯と経過	269
2. 測量軸の設定	271
3. 層序と生活面	271
第3章 検出遺構と出土遺物	275
1. 第1面の遺構・遺物	275
2. 第2面の遺構・遺物	282
3. 第3面の遺構・遺物	290
第4章 まとめ	302

挿図目次

図1 調査地点と周辺遺跡	266
図2 グリッド設定・配置図	270
図3 調査区南・東壁堆積土層図	272
図4 第1面全測図	274
図5 土壌11(かわらけ溜り)	275
図6 土壌・柱穴(1)	276
図7 土壌・柱穴(2)	277
図8 かわらけ溜り・土壌出土遺物	278
図9 柱穴(ピット)出土遺物	279
図10 第1面上出土遺物	279
図11 第2面全測図	281
図12 土壌・井戸・柱穴	283
図13 土壌・溝1・柱穴	284
図14 土壌・井戸・柱穴出土遺物	286
図15 溝1出土遺物	287
図16 第1面下～第2面出土遺物	288
図17 第3面全測図	289
図18 土壌・柱穴(1)	291
図19 土壌・柱穴(2)	292
図20 土壌出土遺物	293
図21 かわらけ溜り出土遺物	295
図22 溝2・柱穴45	296
図23 溝2出土遺物	296
図24 柱穴出土遺物(1)	298
図25 柱穴出土遺物(2)	299
図26 第2面下～第3面出土遺物	300

出土遺物観察表

表1. 出土遺物法量表(1)	304
表2. 出土遺物法量表(2)	305
表3. 出土遺物法量表(3)	306
表4. 出土遺物法量表(4)	307
表5. 出土遺物法量表(5)	308
表6. 出土遺物法量表(6)	309
表7. 出土遺物法量表(7)	310
表8. 出土遺物法量表(8)	311
表9. 出土遺物法量表(9)	312

写真図版目次

図版1-a. I区第1面全景 b. II区第1面全景 c. 土壌11(かわらけ溜り) d. 土壌5検出状況 e. 土壌5完掘状況 f. 土壌10半截状況 g. 土壌10完掘状況	313
図版2-a. I区第2面全景 b. 第2面上検出の土丹面範囲 c. II区第2面全景	314
図版3-a. 第2面土壌1 b. 土壌3 c. 土壌2検出状況 d. 土壌2完掘状況 e. 土壌4 f. 土壌10 g. 溝1 h. 井戸1	315

図版4 - a, I区第3面全景	316
図版4 - b, II区第3面全景	
図版5 - a, 土壙2	
b, 土壙4~9・柱穴15~17	
c, 土壙12・13	
d, 土壙12鉄鍋出土状況	317
e, 土壙18	
f, 柱穴45	
g, 溝2	
h, 溝2東端土層堆積	317
図版6 - a, 調査区東壁土層堆積	
b, 調査区西壁土層堆積	
c, 調査区南壁土層堆積(I区)	
d, 調査区南壁土層堆積(II区)	318
図版7 - a, 第1面土壙11(かわらけ溜り)	
b, 第1面土壙2・4・5~7・9・10	319
図版8 - a, 第2面溝1	
b, 第1面柱穴1・2・5・8・17・20・21	320
図版9 - a, 第1面上	
b, 第2面土壙2~5・7~9	321
図版10 - a, 第2面土壙10~12・井戸1・柱穴3・9	
b, 第1面下~第2面	322
図版11 - a, 第3面かわらけ溜り1	
b, 第3面土壙2・4・7・9・10	323
図版12 - a, 第3面土壙12~15	
b, 土壙12出土鉄鍋	324
図版13 - a, 第3面土壙16~18	
b, 第3面溝2	325
図版14 - a, 第3面柱穴1・10・15・17・20・21	
b, 第3面柱穴25・30・32・33・36・38・39	326
図版15 - a, 第3面柱穴45 碓板1・2	
b, 柱穴45 碓板3	327
図版16 - a, 第3面柱穴45 碓板4	
b, 柱穴45 碓板5	328
図版17 - a, 第2面下~第3面	
	329

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

鶴岡八幡宮から南方の海に向かって一直線に通る若宮大路は、今も鎌倉のメイン・ストリートであり基軸としての幹線道路である。その東側と西側をほぼ平行して走る小町大路や今小路をはじめ、大町大路、車大路など何本かの平行・直交した大路（小路）により区画されていた。本調査地点は、JR鎌倉駅から北東に約700m程のところに位置している（図1）。鶴岡八幡宮前面の若宮大路東側に当る一帯は、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市No282）として登録されている（以下の各遺跡名はすべて遺跡台帳による）。図1の太線で囲った部分が、その範囲で西辺を若宮大路、北辺を横大路、東辺を小町大路に囲まれ、南限については清川病院の北側を東西に走り、若宮大路と小町大路を結ぶ路地を当ており、一辺約200mの方形状の区画である。本遺跡の南側には宇都宮辻子幕府跡、北側には横大路を挟んで鶴岡八幡宮と政所跡、小町大路を挟む向かい側の宝戒寺はもと執権邸が所在したと云われる地域であり（北条高時邸跡）、さらに小町大路東方で滑川の左岸に位置した葛西ケ谷には鎌倉幕府終焉の地として知られている東勝寺跡がある。このように本遺跡周辺は、執権北条泰時・時頼らの正邸の置かれた地とも、將軍御所が所在した若宮大路幕府が置かれた場所ともいわれており、鎌倉時代中～後期にわたり鎌倉の中枢地域であった。

図1のように鶴岡八幡宮の東門から土塁石垣に沿って南へ伸びる路地と、若宮大路の社頭から東進する県道（横大路）とが交差しており、県道を挟んで本遺跡側にも八幡宮東辺とほぼ延長線上にあたる路地があり、この路地を南へ75mほど進んだ西側が今回の調査地点である。本遺跡の中央でやや北東寄りの一角に位置しており、現在の地番は鎌倉市雪ノ下一丁目407番3に所在する。

2. 歴史的環境

治承四年（1180）十月、鎌倉に入つてから源頼朝の下に東国政権の拠点都市としての鎌倉が形成された。政治的中心としての將軍の御所（頼朝居館）、宗教的中心とした八幡宮を据え、その周辺の要所々に重臣たちの屋敷をおき、それらを結ぶ道路計画も実行されていった。「吾妻鏡」によれば、若宮大路は寿永元年（1183）三月、妻政子の安産祈願に際し、頼朝のかねての計画を実行に移したもので、頼朝自ら監督・指揮し、北条時政らの重臣もみな土石を運んで八幡宮若宮へのまっすぐな参詣道を作成したことが知られる。

頼朝以来、將軍の御所は鶴岡八幡宮の東側で六浦道沿いあたる大倉の地に置かれて半世紀近く続いた。承久三年（1221）に起った承久の乱で京都朝廷方の軍に勝利した幕府側はその力が強盛となると、執権北条泰時の下で嘉祐元年（1225）に従来の大倉郷から若宮大路の東側、宇都宮辻子の北側に「新御所」（若宮大路の幕府又は宇都宮辻子の幕府という）の移転が行なわれ、これによって政治的中心が八幡宮の東域から若宮大路一帯へと移行したのである。「吾妻鏡」によれば、11年後の嘉祐二年（1236）幕府と持佛堂などを「若宮大路東頼」に新造するとあり、さらに移動していることが知られる。

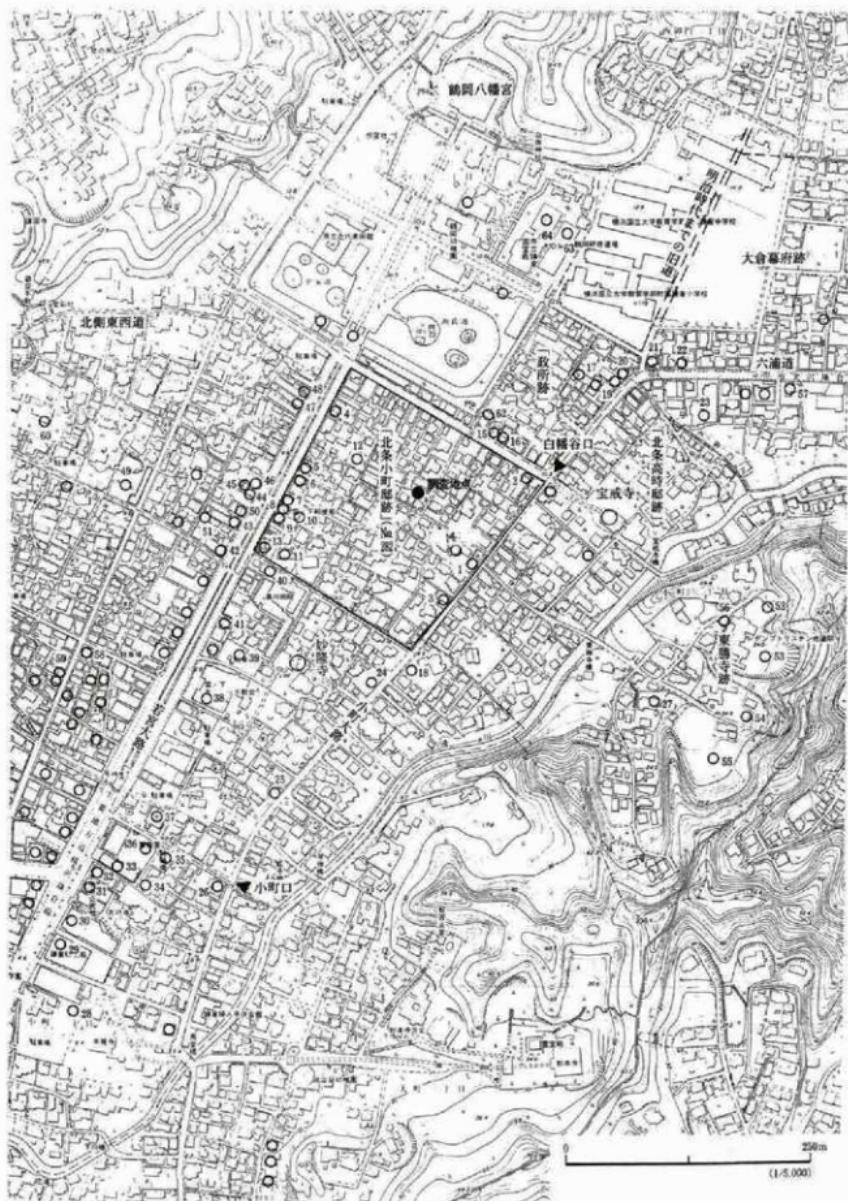


図1 調査地点と周辺遺跡

▽遺跡周辺の主な調査地点

※図1の各調査地点と周辺遺跡一覧であり、遺跡名称の「地点」「用地」は省略した。

1. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目400番1
2. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目395番外
3. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目432番2
4. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目377番7
5. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目372番7
6. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目371番1
7. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目370番1
8. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目369番1
9. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目369番1
10. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目370番外
11. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目419番3
12. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目374番2
13. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目367・368番1
14. 北条小町邸跡：雪ノ下一丁目401番5外
15. 政所跡：雪ノ下三丁目988番
16. 政所跡：雪ノ下三丁目987番1・2
17. 政所跡：雪ノ下三丁目970番外
18. 若宮大路周辺遺跡：小町二丁目420番5外
19. 政所跡：雪ノ下三丁目966番1
20. 政所跡：雪ノ下三丁目965番
21. 大倉幕府周辺遺跡：雪ノ下三丁目606番1
22. 大倉幕府周辺遺跡：雪ノ下三丁目607番外
23. 大倉南御門遺跡：雪ノ下三丁目610番
24. 宇津宮辻子幕府跡：小町二丁目374番1
25. 若宮大路周辺遺跡：小町二丁目389番1
26. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目325番イ外
27. 東勝寺跡：小町三丁目468番2外
28. 本覚寺旧境内遺跡：小町一丁目325番
29. 藤内定員邸跡：鎌倉中央郵便局
30. 藤内定員邸跡：鎌倉生涯学習センター
31. 藤内定員邸跡：島森書店
32. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目309番5
33. 若宮大路周辺遺跡：鎌倉スイミングスクール
34. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目322番
35. 若宮大路周辺遺跡：鎌倉市裏駅駐輪場
36. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目321番1
37. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目345番2
38. 若宮大路周辺遺跡：雪ノ下カトリック教会
39. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目354番12
40. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目366番外
41. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目361番1
42. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目274番2
43. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目273番口
44. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目271番4
45. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目271番3
46. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目271番1
47. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目265番3
48. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目293番1
49. 若宮大路周辺遺跡：雪ノ下一丁目198番6
50. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目272番
51. 北条時房・顕時邸跡：雪ノ下一丁目273番イ
52. 東勝寺跡：小町三丁目 第3・4次調査
53. 東勝寺跡：小町三丁目 //
54. 東勝寺跡：小町三丁目 //
55. 東勝寺跡：小町三丁目 第1・2次調査
56. 東勝寺跡：小町三丁目523番14
57. 大倉幕府周辺遺跡：雪ノ下四丁目620番5
58. 若宮大路周辺遺跡：小町二丁目325番
59. 若宮大路周辺遺跡：小町一丁目12番18
60. 若宮大路周辺遺跡：雪ノ下一丁目210番
61. 若宮大路周辺遺跡：小町二丁目39番6外
62. 政所跡：雪ノ下三丁目989番4
63. 鶴岡八幡宮境内：研修道場
64. 鶴岡八幡宮境内：鎌倉国宝館

ところで本遺跡における発掘調査事例は、図1に示したとおり、現在までところ若宮大路沿い及びその近隣で10例（地点4～13）、小町大路沿い及びその近隣で3例（地点1・3・14）、横大路沿いの1例（地点2）があり、本報告を含めて15地点の事例が知られている。若宮大路に面した各調査地点では、何度も改修が行なわれた大路東側溝が発見されており、鎌倉時代前期が断面V字形や逆台形の素掘りや薙研堀形の溝、中期以降が箱形木組による構築方法をもつ溝に変化している。さらに若宮大路の両側溝よりも小規模ながら同じ構造による箱形の木組や素掘りや薙研堀形の側溝が小町大路と横大路でも検出されている。このように近年、本遺跡及びその周辺の調査成果によって各大路側溝の規模や変遷により中世都市鎌倉の様子を具体的に把握することが可能になってきている。

【引用・参考文献】

- 秋山哲雄 1996「御所と北条氏亭」（特論）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成4年度発掘調査報告書（第2分冊）』鎌倉市教育委員会
- 秋山哲雄 1997「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編 第9号 東京大学史学会
- 石井 遼 1981「都市鎌倉における『地獄』の風景」『御家人制の研究』吉川弘文館
- 石井 遼 1988「中世都市・鎌倉—歴史の原風景を求めて」『週刊朝日百科 日本の歴史・別冊 歴史の読み方2 都市の景観の読み方』朝日新聞社
- 石井 遼 1999「〔もののふの都〕鎌倉と北条氏」石井 遼編 新人物往来社
- 石丸 1993「都市鎌倉の武士たち」新人物往来社岡 嘉一朗 1995「中世居館再考—その性格をめぐってー」「中世の空間を読む」五味文彦編 吉川弘文館
- 大三輪龍彦 1989「鎌倉の都市計画—政治都市として、軍事都市として」「よみがえる中世3 武士の都鎌倉」平凡社
- 河野直知郎 1995「中世都市鎌倉—遺跡が語る武士の都ー」講談社選書メチエ49
- 菊川英政 1989a「北条泰時・時頼邸跡（No.282）雪ノ下一丁目395番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 菊川英政 1989b「北条泰時・時頼邸跡（No.282）雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 瀬田晋夫 1991「北条泰時・時頼邸跡（No.282）雪ノ下一丁目369番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 眞 達人 1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究』第8号 神奈川県立金沢文庫
- 松尾剛次 1993「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館
- 馬淵和雄ほか 1985a「北条泰時・時頼邸跡（No.282）雪ノ下一丁目372番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1985b「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地点調査報告書」同調査団・鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1994「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐってー」「都市鎌倉と坂東の海に暮らす 中世の風景を読む2」石井 遼・網野善彦編 新人物往来社
- 馬淵和雄 1996「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）（No.282）雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2002「北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2003「北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目401番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

第2章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

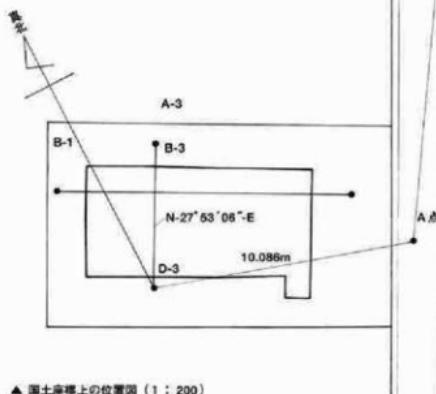
本調査地点は、鶴岡八幡宮前面の東側にある北条小町邸跡（県遺跡台帳No282）の一角に位置しており、若宮大路と小町大路の中間で横大路から路地を南へ75m程入った西側に位置した鎌倉市雪ノ下丁目407番3の一部に所在している。今回の現地調査に先立ち、平成14年9月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎工事にともなって表層地盤の改良を含んで実施する計画があったため、工事の実施により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのあることが予想された。このため確認調査を実施したところ現地表下40cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため事業者との協議を行なったところ、当初の計画に基づき工事を実施したいとの意向が示されたので、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、施工者との調査実施による工程・方法調整の協議及び発掘調査の準備が整った後、平成14年11月25日から2カ月の予定で調査面積54.49m²を対象として発掘調査を開始する運びとなった。

調査地は、残土の場外搬出が困難であり、さらに狭い敷地であるため表土の重機掘削による排土及び調査で発生する排土処理の問題から調査区を東西二区に分割して残土置場を確保した。まずI区（西半部）の調査を終了した後、残土を移動してからII区（東半部）の調査を行なった。平成14年11月25日にI区の表土を重機による掘削除去したのち、人力により掘り下げて調査を実施した。その結果、鎌倉時代を中心とした3時期の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。歳を越した平成15年1月25日までの間に緊急調査に必要な記録保存を行ない現地調査を無事終了した。その間の調査経過については、調査日誌の抜粋を記すことにする。

【日誌抄】

- 11月25日 I区調査開始。調査区を設定し、重機による表土掘削。
28日 機材搬入してテント設営。鎌倉市4級基準点を基にして敷地内に測量用基準点を設定、海拔標高を市三級水準点から移動。I区第1面の調査開始。
- 12月3日 I区第1面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第1面全測図作成。
11日 I区第2面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第2面全測図作成。
19日 I区第3面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第3面全測図作成。
24日 I区に戻り後、II区の重機による表土掘削。第1面検出作業開始。
- 1月8日 II区第1面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第1面全測図作成。
14日 II区第2面の全景及び個別遺構の写真撮影。第2面全測図作成。
22日 II区第3面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第3面全測図作成。
25日 現地調査終了。関係各方面に発掘調査を終了した旨を連絡して機材撤収。

国土座標値		T079まで (市4級基準点) 30.917m
T079	X-75456.406 Y-24906.202	
T080	X-75785.087 Y-24917.737	T080 (市4級基準点)
A点	X-75497.362 Y-24925.742	
D-3	X-75494.378 Y-24935.376	
A-3	X-75489.077 Y-24932.570	
B-1	X-75489.437 Y-24936.147	



▲ 国土座標上の位置図 (1 : 200)
▼ グリッド配置図 (1 : 100)

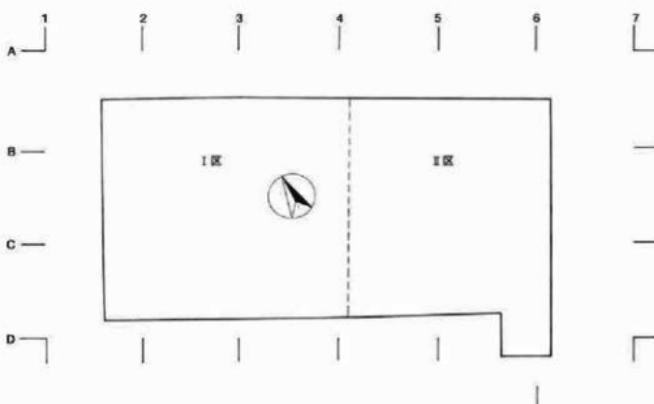


図2 グリッド設定・配置図

2. 測量軸の設定

測量軸のためのグリット設定は、調査地東側の位置で南北に走る路地上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級都市基準点のT079とE080を確認することができた。この両基準点の国土座標から敷地外の路地上に任意の測量A点を設け、そこから西へ10.086mの位置でD-3杭を基準杭として、図2のように国土座標の数値を求めて東西軸と南北軸をそれぞれ2m方眼により軸線を配し、東西軸線にはアルファベットの名称を付し、南北軸には算用数字をそれぞれ付してグリット設定を行なった。各グリットの名称は北西角の軸交点により呼称される。なお測量に用いたグリットは敷地の範囲や測量の際の利便性を優先させたため国土座標には一致していない。

以下に市4級基準点(T079・T080)と測量A点、グリット杭のB-1・A-3・D-3の国土座標数値を記すことにする。

[AREA 9]

T079 [X - 75456.406 : Y - 24906.202] B-1 杭 [X - 75489.437 : Y - 24936.147]

T080 [X - 75485.087 : Y - 24917.737] A-3 杭 [X - 75489.077 : Y - 24932.570]

A点 [X - 75497.362 : Y - 24925.742] D-3 杭 [X - 75494.378 : Y - 24935.376]

図中の方位はすべて真北を採用し、グリット方眼の南北軸線は真北よりやや北に振れている。南北軸と真北との偏差及び調査地点の経緯は次のとおりである。

南北軸線 [N - 27° 53' 06" - E]

調査地点 [北緯35° 18' 42" : 東経139° 32' 56"]

水準原点の移動については、調査地東北側にあたり県道金沢鎌倉線(横大路)と小町大路とが交差する地点で宝戒寺の参道入口に設置された鎌倉市三級水準点の標高を調査地内のD-3杭上に仮水準点として移動した。従って、文章中及び挿図に使用記載された数値はすべてこれを基準とした海拔標高を示している。

鎌倉市三級水準点〔海拔標高9.925m〕 D-3 杭〔海拔標高9.850m〕

3. 層序と生活面

調査地点は、現地表の海拔標高が9.85m前後に位置した平坦な宅地となっている。調査で確認された堆積土層は概ね6層に区分されたがその中で少なくとも3時期の生活面が検出されている。堆積土層の状況は図3の調査区南壁・東壁土層堆積に示したとおりである。表土は厚さ30~40cm程と薄いものであったが、調査区全体の範囲で近・現代に掘られたゴミ穴や植木伐根の際にできた擾乱が認められ、深いものは現地表下1mまで及んでいた。

表土を除去すると、茶褐色砂質土の厚さ約20cm程の土丹粒・砂粒・かわらけ小片を多く含んだ締まりのない中世遺物包含層の第1層が認められた。中世遺物包含層を取り除くと、暗茶褐色弱粘質土で大小土丹塊や1~2cmの土丹角・かわらけ小片を多く混入して突き固めた堅牢な地業層(第2層)にあたる第1面を検出した。海拔標高は9.30m前後を計る。先述したように擾乱層が調査区内に拡がり、生活面は良好な状況ではなかったが土壌・かわらけ滲り・柱穴などの遺構を確認している。

第1面を構築する地業層を除去すると、間層を挟まずに砂や砂利を多く含んだ締まりのある暗茶褐色砂質土を基盤とした生活面の第4層が検出された。この土層上位及び上面には、調査区中央で小土丹塊

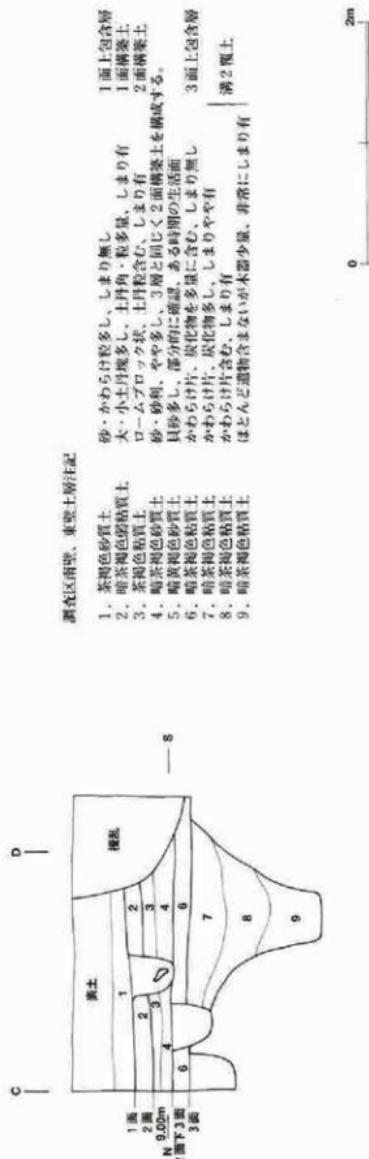
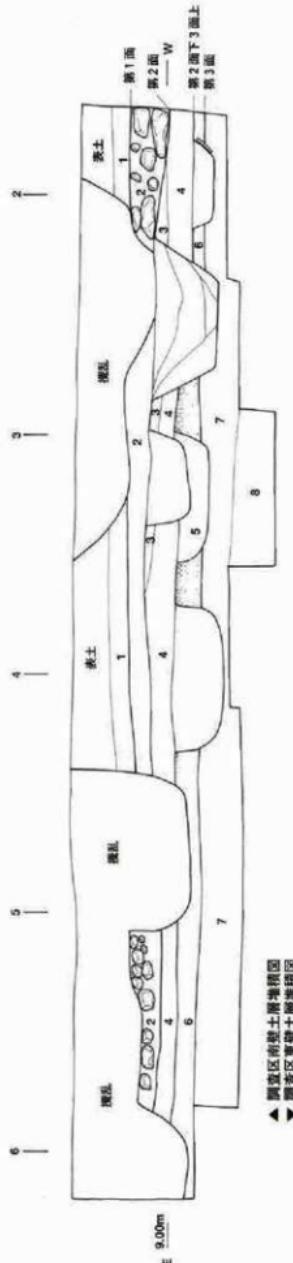


図3 調査区南・東盤堆積土層区

を敷きつめた範囲が認められ、また西城の溝1周辺の範囲からは厚さ10cm前後の茶褐色粘質土（関東ローム層に類似したもの）を貼り付けた地業層の堆積が確認された（第3層）。従って、両層を一連の地業層による生活面と認識して第2面の調査を実施した。海拔標高は9.00～9.15mで北東城は南西城に比べて少し高めの整地を施している。この面で検出した遺構は、井戸・土壙・溝・柱穴などである。

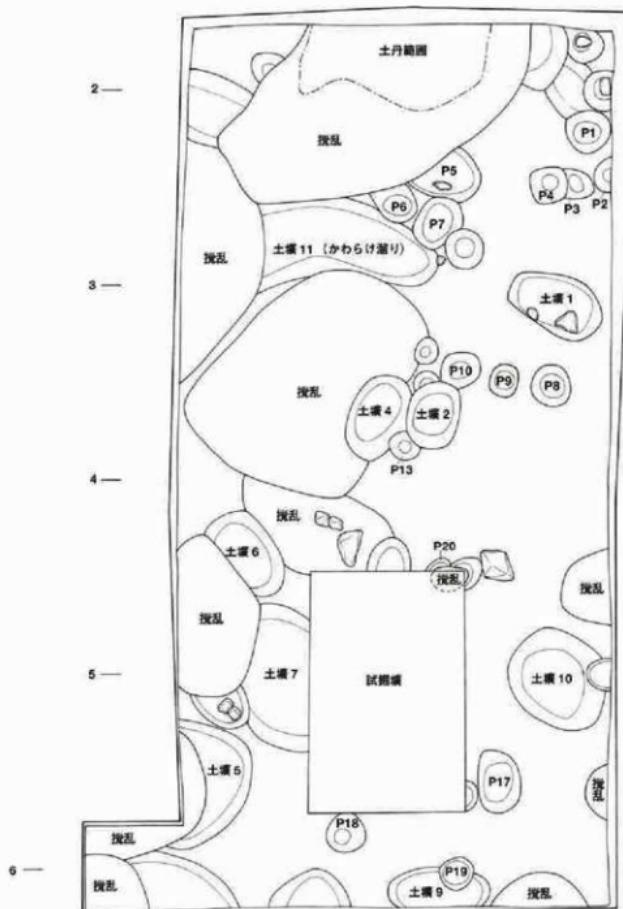
第2面を構築土していた厚さ20cm前後の第4層を掘り下げたところ、調査区南西城を中心に暗黄褐色砂質土の第5層が表出した（図中の第2面下3面上）。この層の上部は海拔標高8.90m前後で暗黄灰色の貝砂を撒いた平坦な面の括がりをみせており精査を実施すると、土壙や柱穴などの遺構を確認することができた。この貝砂層以外の整地面はかなり軟弱な堆積土で遺構の確認が難しいものと判断されたので貝砂面で検出した遺構を平面図に納めた後、第5・6層を掘り下げると下から暗茶褐色粘質土の中世基礎層が認められた。上面の海拔標高は8.80m前後である。図17の第3面遺構の溝・土壙・柱穴などは、貝砂面と中世地山上面で検出したものを含めて図示している。

D

C

B

A



0 2m

図4 第1面全測図

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

検出した遺構は、土壤がかわらけ溜りの様相を呈したものを含む土壤11基、柱穴約30口などが確認された。出土遺物には、かわらけ、船載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦類、土器・瓦質製品、金属製品、石製品などがみられた。

a. 土壤 (図4～8、図版1・7)

土壤1：B-3グリット杭の位置で検出された。平面形状は長楕円形を呈し、規模は南北径105cm、東西径63cm、確認面からの深さ20cmを測る。掘り方は断面が浅い皿状を呈しており、覆土は砂粒・炭化物を多めに含む締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-31・32でロクロ成形のかわらけ大小皿である。

土壤2：C-3グリットの位置で土壤4の一部を壊して検出された。平面形状は楕円形を呈し、規模は東西径70cm、南北径53cm、確認面からの深さ33cmを測り、断面が逆台形の掘り方を呈している。覆土は砂粒・かわらけ粒を多めに含む締まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-33～37のロクロ成形のかわらけ大小皿である。かわらけは器壁が比較的薄手で器高が高めの特徴を有する。

土壤4：C-4グリット杭の北隣、土壤2と新旧関係にある。平面形状は楕円形を呈し、規模は東西

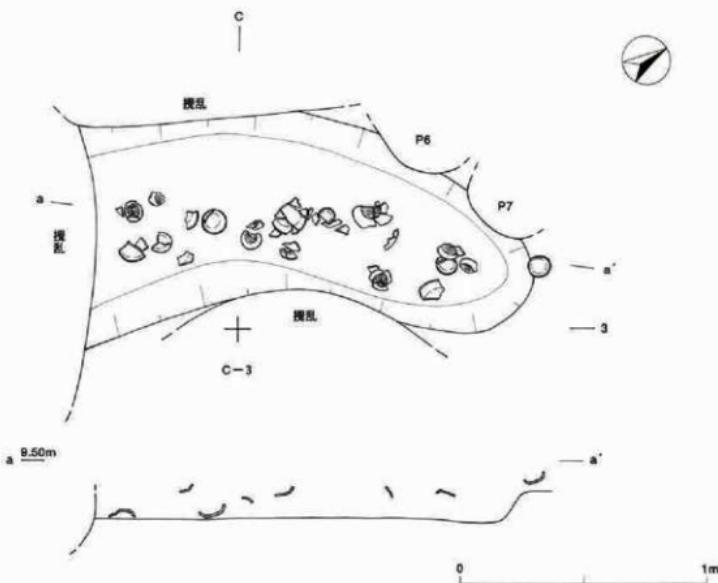


図5 土壤11（かわらけ溜り）

径92cm、南北径63cm、確認面からの深さ30cmを測り、掘り方の断面が逆台形を呈する。覆土は砂粒・炭化物を含む縮まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-38のロクロ成形かわらけの中皿である。

土壤5：調査区南西隅、D-5グリットの位置で検出された。西侧は調査区外に拡っているが大半を現代ゴミ穴の搅乱で壊されている。掘り方は不整円形と思われ、規模が南北径132cm、東西径90cm以上、深さ25cmを測り、断面が浅い皿状を呈する。覆土は炭化物を多めに含む縮まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-39~41がロクロ成形かわらけの小皿、42が常滑窯窯の口縁片である。

土壤6：C-4杭の南隣に位置しており、南端は現代ゴミ穴の搅乱で壊されている。掘り方は梢円形を呈し、規模は東西径98cm、南北径50cm以上、深さが20cmを測り、断面が浅い皿状を呈している。覆土は炭化物・かわらけ小片が多く縮まりのない暗茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図8-43・44のロクロ成形かわらけの小皿である。

土壤7：C-5杭の位置で検出された。南西側が搅乱、北東側が試掘 sondageに壊されている。掘り方は梢

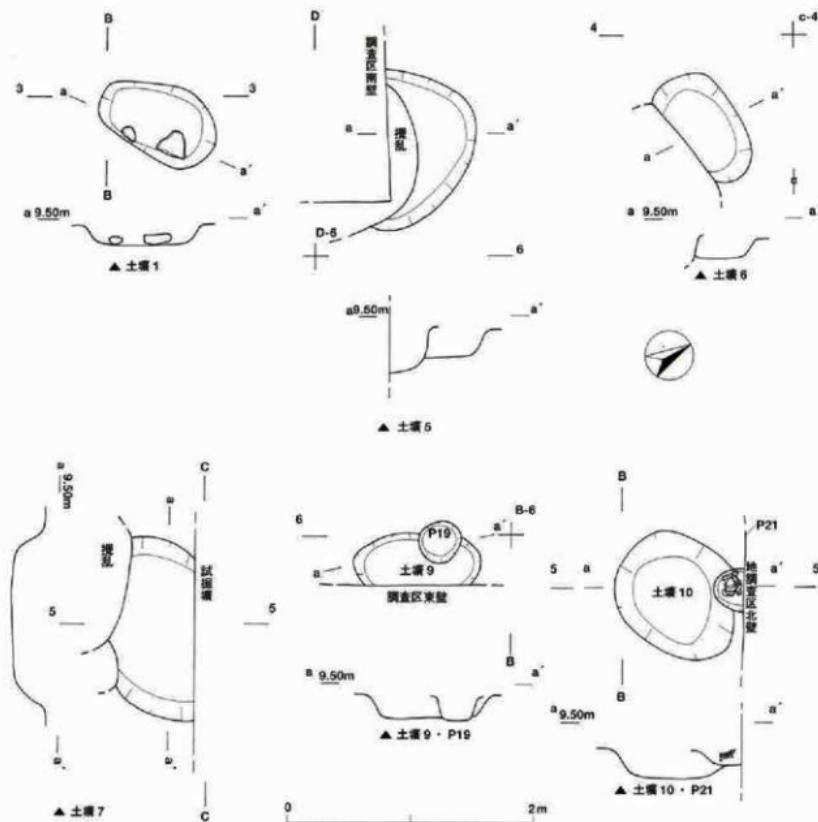


図6 土壌・柱穴(1)

円形を呈し、規模は東西径 143cm、南北径70cm以上、深さ35cmを測り、断面が逆台形を呈する。覆土は炭化物を多めに含む縫まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-45~48がクロコ成形かわらけの小・大皿であり、48の底部には焼成後の穿孔が認められる。

土壤9：調査区南端北寄りに位置し調査区外に拡がっており、P19に掘り方一部が壊されている。梢円形を呈し、規模は東西径88cm、南北径70cm、深さが42cmを測り、断面が逆台形形状を呈している。覆土は砂・炭化物・かわらけ小片を多く含み縫まりのない暗茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-49がクロコ成形のかわらけ大皿、50が青磁碗底部片、51が土器質火鉢である。

土壤10：調査区北壁際のB-5杭の位置で検出された。P21に一部が壊される。掘り方は不整円形を呈し、規模は東西径110cm、南北70cm以上、深さ25cmを測り、断面が浅い摺鉢状を呈している。覆土炭

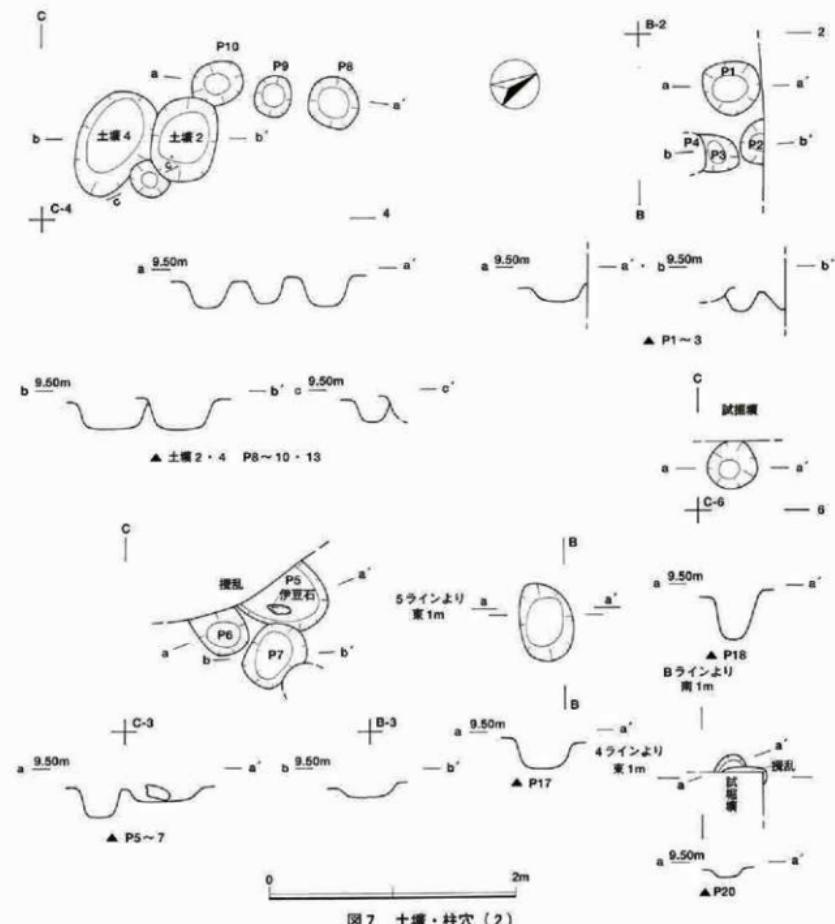
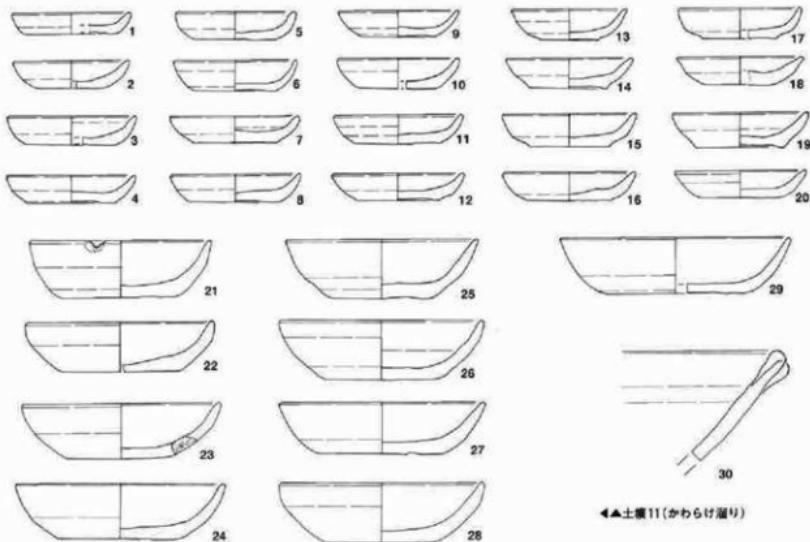


図7 土壌・柱穴(2)



▲ 土壌 11 (かわらけ層)

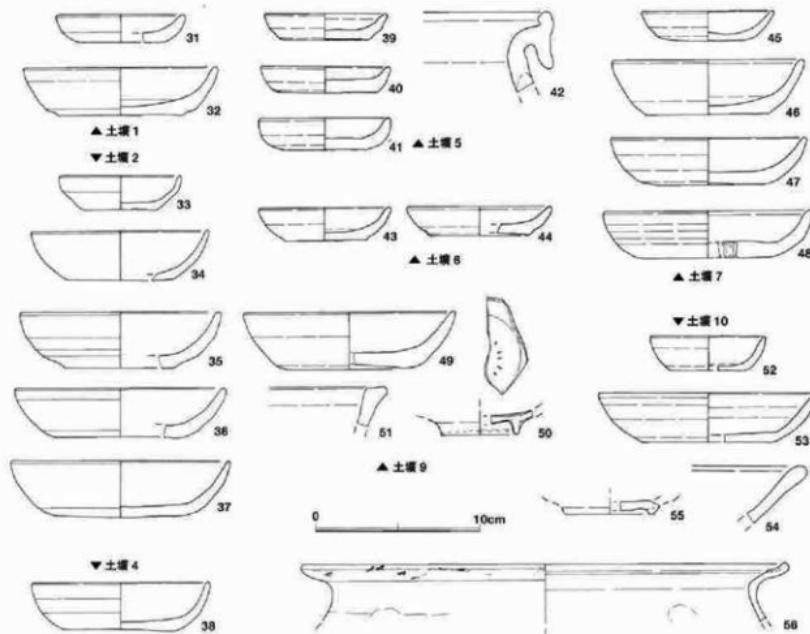


図 8 土壌出土遺物

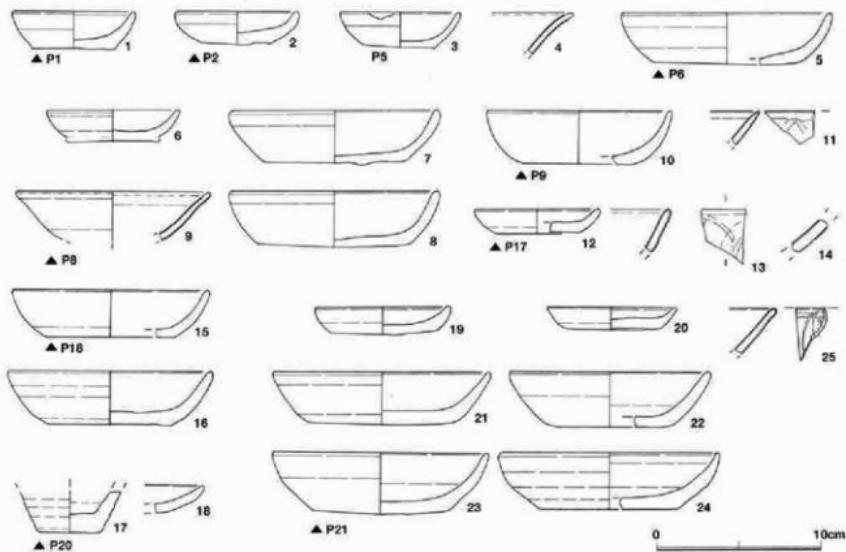


図9 柱穴(ピット)出土遺物

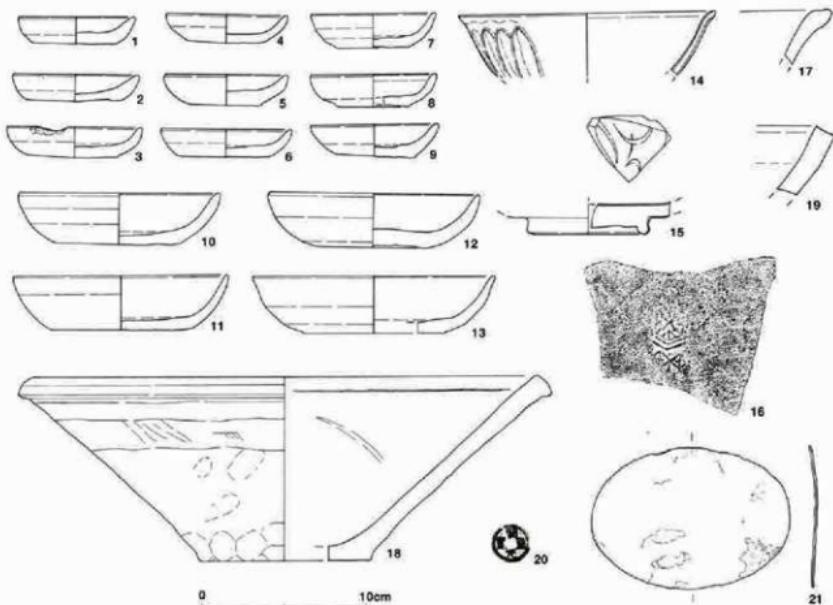


図10 第1面上～包含層出土遺物

化物を多めに含む縮まりのない茶褐色砂質土である。出土遺物は図8-52・53がロクロ成形のかわらけ大小皿、54が常滑片口鉢、55が底部に貼り付け高台をもつ吉備系土器碗、56が伊勢系土鍋である。

土壤11：調査区西城、C・B-2グリットに位置した多量のかわらけを伴う土壤である。現代攪乱のゴミ穴により壊され全体像は不明である。しかし、図5で示したように覆土中からはかわらけ30個体以上が出土しており、一括廃棄されたかわらけ溢りでゴミ穴土壤の様相をみせている。

掘り方は東西に長い梢円形を呈しており、確認された規模は東西径185cm以上、南北径65~90cm、確認面からの深さが15cm前後を測り、断面が浅い皿状を呈している。覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含む縮まりのない暗茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図8-1~29がすべてロクロ成形のかわらけである。かわらけ法量の口径をみると、小皿が口径7.5cm以下と7.7cm以上に大別され、中皿が口径11cm大、大皿が口径12cm大が主体をなしている。29のかわらけだけは口径14cm近く、底径8cm以上と大型で薄手の器壁もち、他の大皿かわらけとは異なる特徴を有している。また21が口縁部の1ヶ所を打ち欠き加工しており、23が体部下位の1ヶ所に焼成後の穿孔加工が施されている。30が常滑片口鉢である。

b. 柱穴（図4・5・7・9、図版8）

検出した各柱穴（ピット）は掘立柱建物を構成するような配置は認められなかった。各掘り方は平面形状が円形または梢円形を呈しており、規模は径30~50cm、確認面からの深さ15~30cmである。以下、図9-1~24に示した柱穴出土の遺物について簡単に触れることにする（図番号省略）。

各柱穴の出土遺物は（かわらけはすべてロクロ成形）、P 1-1がかわらけ小皿、P 2-2がかわらけ小皿、P 5-3がかわらけ小皿・4が白磁口兀皿、P 6-5がかわらけ大皿、P 8-6がかわらけ小皿で7・8が大皿・9が白磁口兀皿、P 9-10がかわらけ中皿・11が青磁蓮弁文碗、P 17-12がかわらけ小皿・13が青磁蓮弁文碗、14が瀬戸天目茶碗、P 18-15がかわらけ大皿、P 20-16がかわらけ大皿・17がかわらけ質小壺・18が手捏ねの白かわらけ、P 21-19・20がかわらけの小皿で21~24が大皿・25が青磁蓮弁文碗である。

c. 遺構外出土遺物（図10、図版9）

ここでは、第1面の面上及びその包含層に伴って出土したもので遺構に共伴しない遺物を一括して述べることにする。図10-1~13がロクロ成形の回転糸切底によるかわらけである。かわらけ法量の口径をみると、小皿が口径7.5cm以下（1・4・5）と、7.6cm以上（2・3・6~9）に概ね大別され、大皿が口径12.3~13.1cm（10~12）である。13のかわらけだけは口径14.7cm、底径8.7cmと大型で薄手の器壁もつもので他の大皿かわらけとは異なる特徴を有している。また3の口縁部には打ち欠き加工の痕跡が認められた。14は青磁蓮弁文碗、15は青磁劃花文碗の底部片、16は常滑窯堀の叩き目拓影、17~19は常滑片口鉢のI・II類、20は銅錢の「開元通宝」（唐 初鑄621年）、21が銅製品で薄板の卵型に加工されたもので用途不明である。

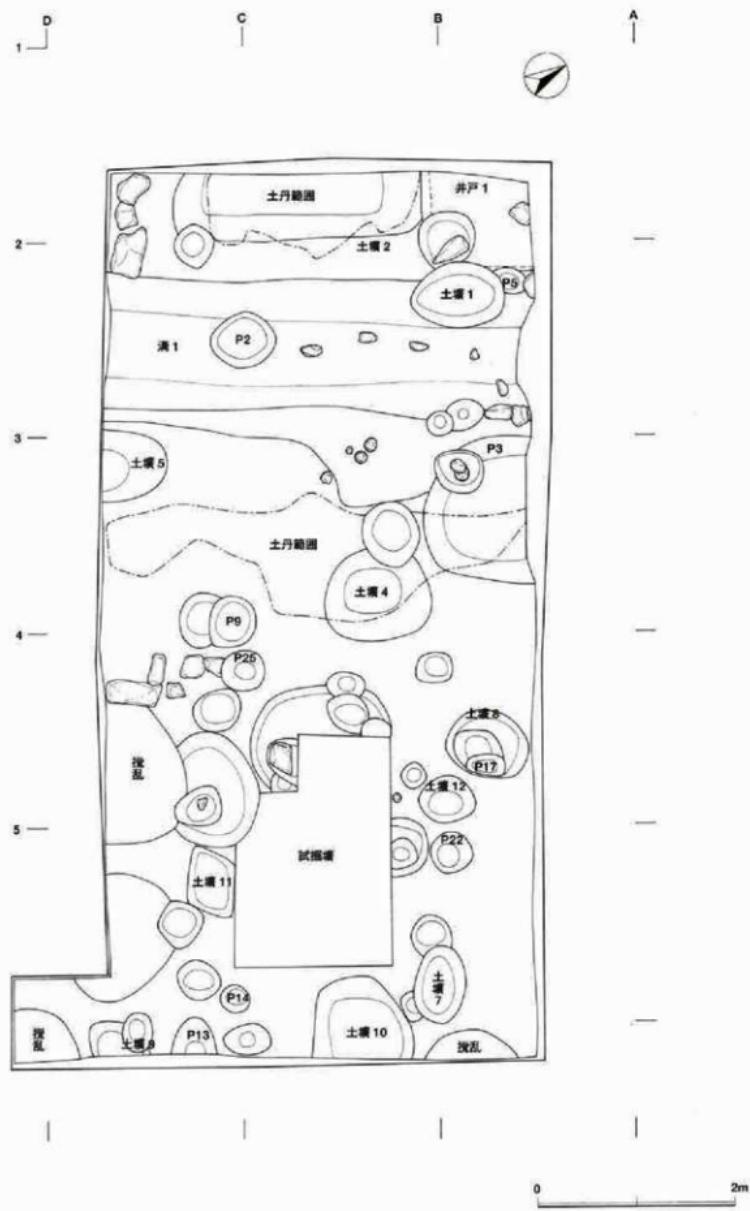


図11 第2面全側図

2. 第2面の遺構・遺物

この面で検出した遺構は、土壙16基、井戸1基、溝1条、柱穴約44口などである。出土遺物にはかわらけ、船載陶磁器、瀬戸・常滑・渥美窯製品、瓦類、瓦質製品、石製品などが認められた。

a. 土壙 (図11~14、図版2・3・9・10)

土壙1：調査区北西隅に位置しており、溝1・井戸1・P5の一部を壊している。掘り方の規模は南北径98cm、東西径65cm、深さが28cmを測る。形状は梢円形を呈し、断面が逆台形である。覆土は炭化物・小土丹塊と、ローム状のブロックを少量含む締まりのない茶褐色粘質土である。かわらけ小片だけで図示可能な遺物は出土していない。

土壙2：調査区西隅に位置し、西側は調査区外に拡がった大型の土壙である。井戸1により掘り方の東端部が壊されている。平面形状は隅丸方形と推定され、規模は南北長263cm、東西長80cm以上、深さは60cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は上層に人頭・拳大の土丹塊が多く混入した締まりの強い茶褐色粘質土、中層は2~5cm角の土丹塊・炭化物を多めに含んだ締まりのややある暗茶褐色粘質土、下層は炭化物・土丹粒・かわらけ片を多く含んだ締まりのない暗茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図14-1・2がロクロ成形かわらけの大小皿、3が巴文鏡瓦(軒丸瓦)、4が女瓦(平瓦)で凸面に「×」状の斜格子叩き目を施すものである。

土壙3：A-3・4グリットに位置し、北側は調査区外に拡がっている。規模は東西径153cm、南北径116cm以上、深さが36cmを測り、掘り方の断面が皿形状になる。覆土は人頭・拳大土丹塊が少量、炭化物・かわらけ小片をやや多く含む締まりのない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図14-5がロクロ成形のかわらけ大皿、6が常滑窯の壺である。

土壙4：調査区中央の土壙3に近接した位置にあたり、P4に壊されている。平面形状は梢円形を呈し、規模は南北径115cm、東西径95cm、深さ30cmを測る。掘り方は断面が逆台形状を呈しており、覆土は上層が炭化物、土丹粒を多く含んだ締まりのない茶褐色弱粘質土、下層が締まりのない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図14-7がロクロ成形のかわらけ小皿、8が手捏ね成形のかわらけ小皿、22が青白磁の印花文小皿である。

土壙5：3ライン南端域に位置しており、北側は調査区外に拡がっている。平面形状は梢円形を呈したものと考えられ、規模は南北径73cm以上、東西径76cm、深さ48cmを測り、断面逆台形の掘り方である。覆土は炭化物・土丹粒を多く含む締まりのない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図15-9・10とともにロクロ成形のかわらけ小・大皿であるが、小皿の口縁部には煤が付着した燈明皿である。

土壙6：C-5杭に位置し、南側をゴミ穴の現代攪乱、中央をP10により壊されている。平面形状は梢円形を呈し、規模は南北径121cm、東西径85cm以上、深さ15cmで断面浅い皿状の掘り方である。覆土は炭化物・土丹粒を多く含む締まりのない茶褐色弱粘質土である。遺物は小片かわらけのみで図示できるものは出土していない。

土壙7：B-6杭の西側に接した位置である。P15・21と新旧関係にあり両遺構よりも新しい。平面形状は梢円形を呈し、規模は東西径82cm、南北径53cm、深さ25cm程を測る。掘り方は断面が浅い逆台形状を呈しており、覆土は上層が炭化物・土丹粒を多く含む締まりのない茶褐色弱粘質土、下層が火雜物の少ない茶褐色弱粘質土である。出土遺物の中で図示できたのは、図14-11の刃物の研磨痕をもつ軽石だけである。

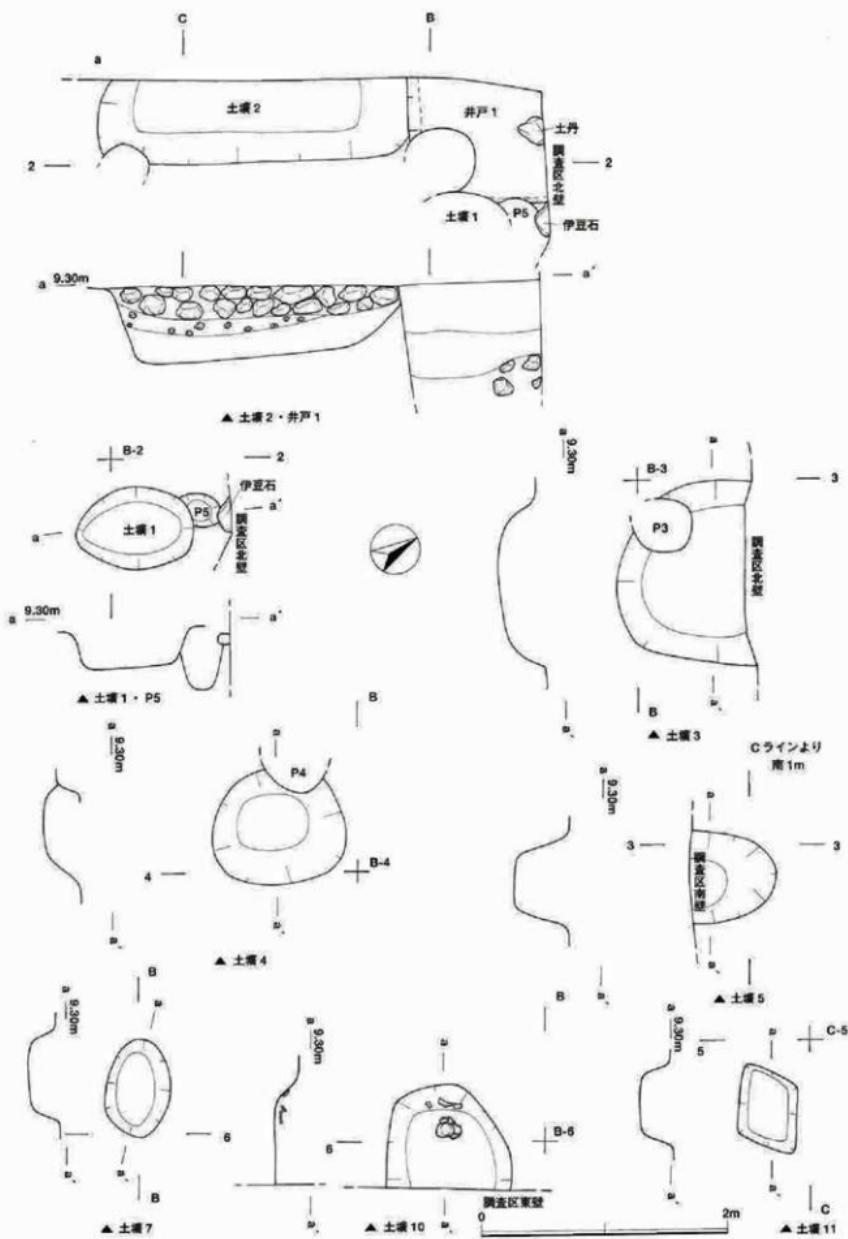


図12 土壌・井戸・柱穴

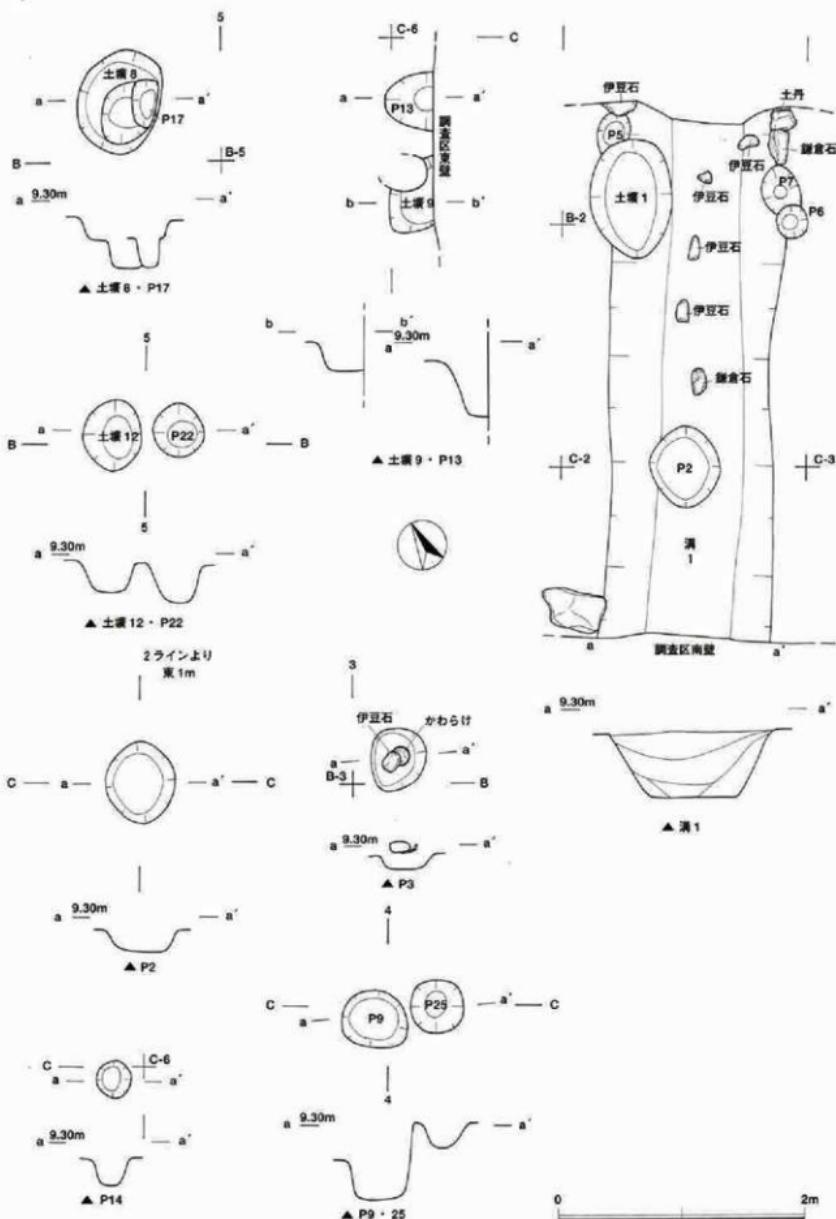


図13 土壤・満1・柱穴

土壤8：調査区中央北端に位置し、P17を壊すものである。規模は南北径85cm、東西径67cm、深さ30cmを測り、掘り方は梢円形、断面が浅い逆台形状を呈する。覆土は小土丹塊と炭化物・かわらけ小片が多く縮まりのない暗茶褐色弱粘質土である。この遺構に伴う遺物は図14-12の京都楠葉産の瓦器碗である。

土壤9：調査区南東隅に位置し、東壁外に伸びている。平面形状は不整円形を呈すると考えられ、規模は南北径60cm、南北径40cm以上、深さ25cmと浅い掘り方を有する。覆土は炭化物を多量に含む茶褐色弱粘質土である。図示可能な出土遺物は図14-13の手捏ね成形のかわらけ小皿だけである。

土壤10：調査区東端北寄りに位置しており、東壁外に伸びて全体像は不明である。平面形状は梢円形と推定され、規模が東西径90cm以上、南北径106cm、深さ20cm程と浅い掘り方の土壤である。覆土は炭化物を多量に含む縮まりのない茶褐色弱粘質土であり、底面付近にかわらけを中心に遺物がまとまって出土している。遺物は図14-14がロクロ成形のかわらけ小皿、15～17が手捏ね成形のかわらけ小皿である。19が龍泉州窯系の割花文碗の底部片、18が渥美の壺、20が内面に暗文のもつ京都楠葉系の瓦器碗である。

土壤11：C-5杭と土壤6の東隣に位置している。規模は東西長65cm、南北長48cm、深さ25cmを測り、平面形状は隅丸の菱形状を呈し、覆土は炭化物を多めに含む縮まりのない茶褐色粘質土である。出土遺物は図14-21が手捏ね成形のかわらけ中皿、22が渥美の壺である。22は土壤10出土の渥美壺（18）と接合しないが同一個体の可能性が高い。

土壤12：B-5杭と土壤8とに挟まれた位置にあたる。規模は南北径65cm、東西径48cm、深さ32cmを測り、平面形状は梢円形を呈している。覆土は炭化物とかわらけ細片を多めに含む縮まりのない茶褐色粘質土である。出土遺物は図14-23の青白磁の印花文小皿である。

b. 井戸（図11・12・14、図版3・10）

井戸は上面の覆土上層が土丹小塊を多く混入して突き固めた状況で埋め戻されたために地業層と思われたので第2面では検出することできなかった。しかし第3面へ向けての掘り下げを実施していた最中に遺構の拡がりと落ち込みが確認できたものである。調査区北西隅の位置で検出され、西・北壁外にそれぞれ拡がりを見せており全容は不明である。さらに調査中多量の涌水が認められ調査壁崩落の危険があると判断され、住宅基礎杭の安定と安全対策を優先したので深さ150cm程まで掘り下げた状態で断念したので完掘していない。

掘り方は南北長110cm以上、東西105cm以上、確認面からの深さは135cm以上の規模である。掘り下げた確認底面の深さまでに井戸枠を確認することはできなかったが、それ以下をボーリング棒により探査を行なったところ、掘り方の南・東壁に沿った約40cm内側で深さ60～70cm程の位置に木と思しき感触が確認されたので井戸枠の構造の可能性が推定される。覆土は上層が厚さ40cm前後の土丹小塊を多く混入した縮まり強い茶褐色粘質土、中層の堆積土は厚さ20～35cm程の縮まりのやや弱い暗茶褐色粘質土で黒褐色土と褐鉄分を多く含む粘土ブロックを混入したものなり、その下は大小土丹塊を含む縮まり弱い暗茶褐色弱粘質土が認められた。図示可能な遺物は図14-24の男瓦（丸瓦）だけである。

c. 溝1（図13・15、図版2・3・8）

調査区西側でA-C-2・3ライン間に位置した南北位の溝であり、北・南側は調査区外に伸びている。掘り方の断面は逆台形を呈する。規模は確認できた長さ450cm程、上幅140cm前後、下幅60cm前後、

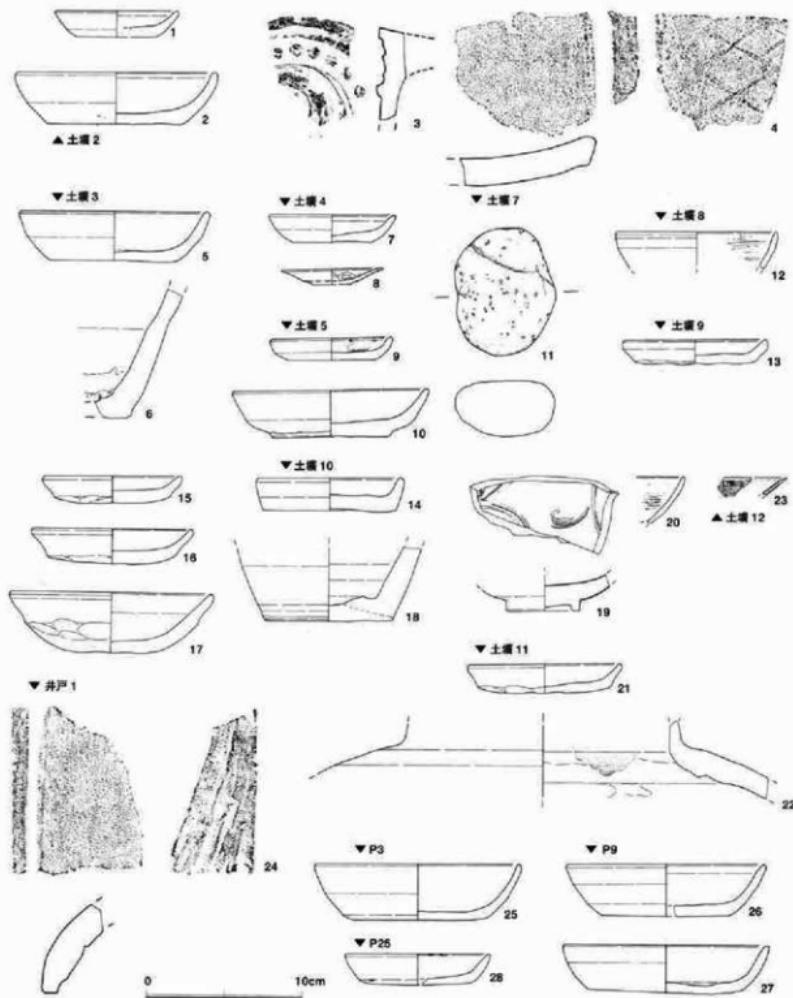


図14 土壌・井戸・柱穴出土遺物

確認面からの深さ約50cmで底面は平らに掘られている。なお掘り方内からは土台材や杭穴などの木組部材を示す痕跡は発見されていない。この溝はグリット方眼の南北軸ラインと平行関係にあり、軸線方位はN-28°-Eをほぼ示している。遺物はロクロ・手捏ね成形のかわらけ小片と獸骨が少量出土したが、図示し得るものでは無かった。

d. 柱穴 (図12~14、図版2・10)

この面で検出した各柱穴(ピット)は掘立柱建物を構成するような柱穴配置は認めることができなか

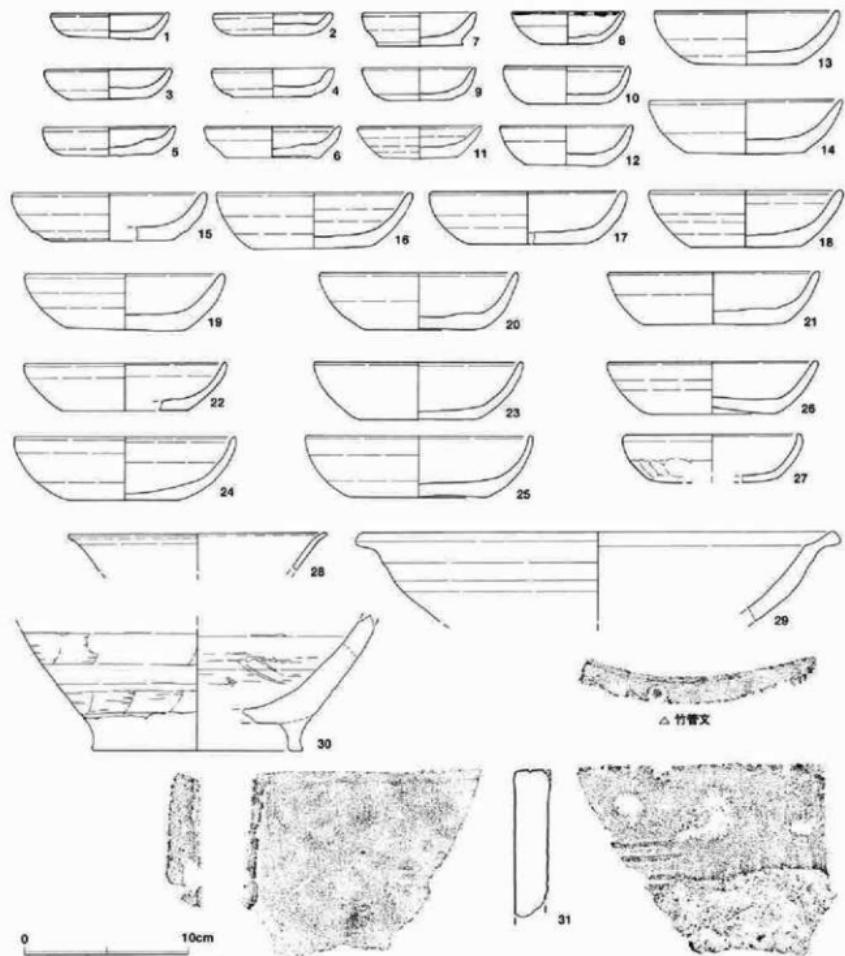


図15 满1出土遺物

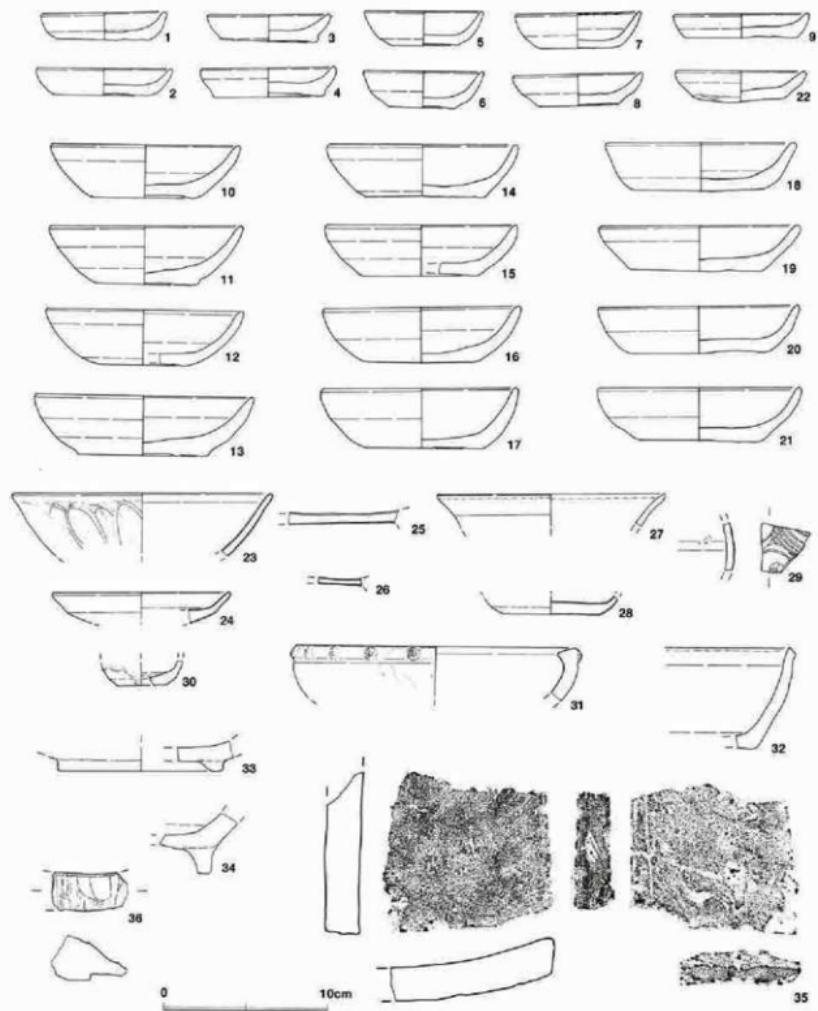


図16 第1面下～第2面出土遺物

った。掘り方は平面形状が円形または梢円形を呈し、規模は径30～50cm、確認面からの深さ25～50cmである。柱穴底面にはP.5・P.9・P.13に腐蝕の進んだ礎板の痕跡がみられ、P.10が伊豆石片、P.19が偏平な鎌倉石が柱受けの根石が据えられていた。

各柱穴の出土遺物（図14～25～28）は、P.3：25がクロ成形かわらけの大皿、P.9：26・27がロクロ成形のかわらけ大皿、P.25：28が手捏ね成形のかわらけ小皿で口縁部に煤が付着した證明皿である。

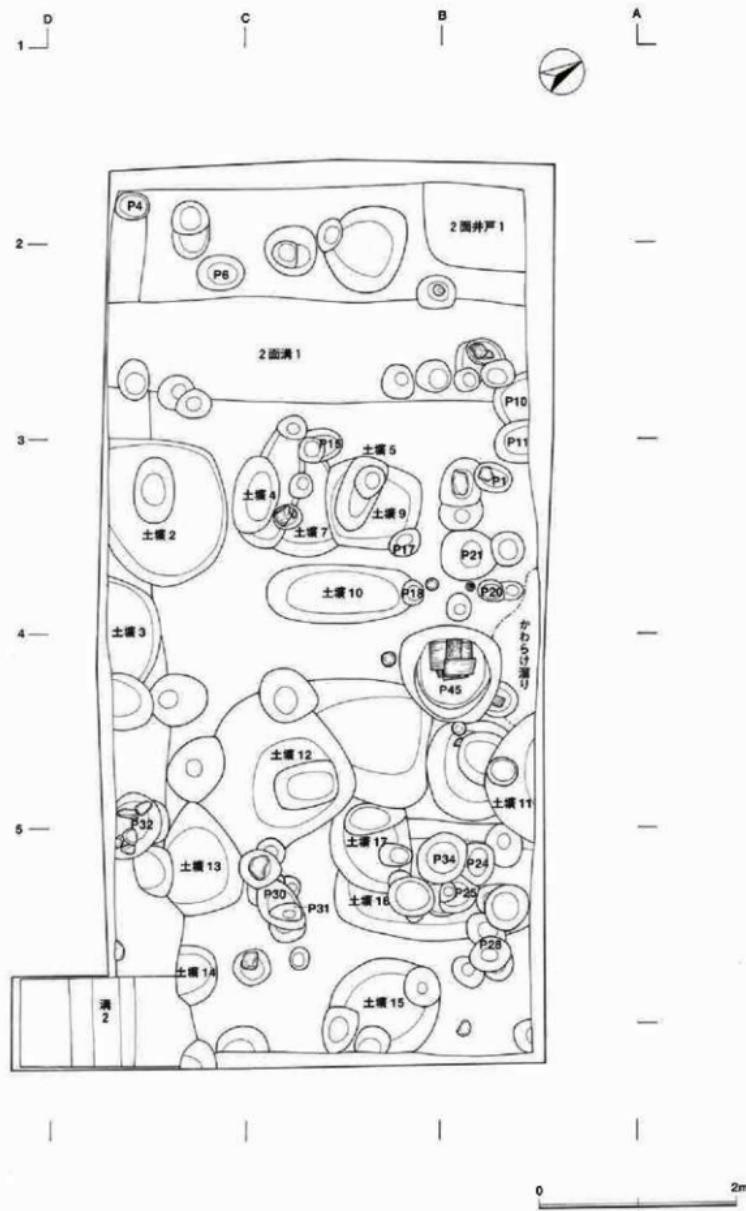


図17 第3面全測図

e. 遺構外出土遺物（図16-1～36、図版10）

ここでは、第1面下～第2面の地業層および包含層に伴って出土したもので遺構に共伴しない遺物を一括して述べる。かわらけは1～21がロクロ成形・22が手捏ね成形のものである。23～26は龍泉窯系の青磁で23が鎌運弁文碗、24が皿、25・26が折縁盤である。27・28は白磁の口兀碗・皿、29が青白磁の梅瓶である。30～32は瀬戸窯製品の小壺と洗、33・34は常滑窯の捏鉢である。35は凹凸面に離れ砂が付着した女瓦、36は滑石製鍋を再加工したしたもので用途不明。

3. 第3面の遺構・遺物

第3面は暗茶褐色粘質土の中世地山上面で検出された生活面である。現地表下約1.0m、海拔標高は8.70～8.80mを測る。この面で検出した遺構には、土壤22基、かわらけ溜り1ヶ所、溝1条、柱穴55口などが確認された。

これらに伴う出土遺物は、多量のかわらけ、船載陶器、瀬戸・常滑・渥美窯製品、瓦質製品、瓦類、石製品、鉄製品、木製品などがみられた。

a. 土壤（図17～19・21、図版4～6・11～14）

土壤1：調査区西端、B-2杭南接した位置にあたる。平面形状は不整円形を呈しており、規模は南北径85cm、東西径83cm、深さ15cmを測り、断面が浅い皿状である。覆土は炭化物の多い締まりの弱い茶褐色粘質土である。遺物は手捏ねかわらけの小片で図示し得るものはなかった。

土壤2：調査区中央南端、C-3グリットに位置し、南側一部は調査区外に拡がっている。溝2を壊して掘られている。平面形状は梢円形を呈し、東西径152cm、南北径123cm以上、深さ15cmを測り、断面が浅い皿状である。覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含むやや締まりのある暗茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-1～6がかわらけで1・2・5・6・8がロクロ成形、3・4が手捏ね成形である。7は同安窯系の描文碗、8が女瓦（平瓦）で凸面に斜格子叩き目を施す。

土壤3：土壤2の東隣に位置し、調査区外の南側に拡がっている。P33に一部が削平されている。平面形状は円形状、規模は東西径120cm、南北径63cm以上、深さ20cmほどの断面浅い皿状である。覆土は炭化物・土丹粒のやや多い締まりない茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-9・10が掲軸壺の胴部片で接合しないが同一個体、11が常滑窯の捏鉢である。

土壤4：土壤2の北隣に位置し、土壤8を壊して掘り込まれている。平面形状は梢円形を呈し、東西径82cm、南北径50cm、深さ45cmを測り、断面逆台形の掘り方をもつ。覆土は上層に厚さ10cmほどの炭化物と焼土を多く含む暗褐色弱粘質土、下層が締まりのない暗茶褐色弱粘質土である。遺物はかわらけ細片が少量あるが図示可能なものは出土していない。

土壤5：調査区中央西寄りに位置し、土壤9の一部を削平する。平面形状は長円形を呈し、東西径80cm、南北径45cm、深さ35cmを測る。覆土は炭化物・かわらけ小片を多く含む締まりのない暗茶褐色粘質土である。図示できる遺物は出土していない。

土壤7：調査区中央西寄りに位置し、土壤5・8・9とP15により激しく削平を受けて全容は不明である。規模は東西110cm以上、南北70cm以上、深さ20cmほどの断面浅い皿状である。覆土は炭化物・土丹粒のやや多い締まりない茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-12・13のロクロ成形のかわらけ小皿である。

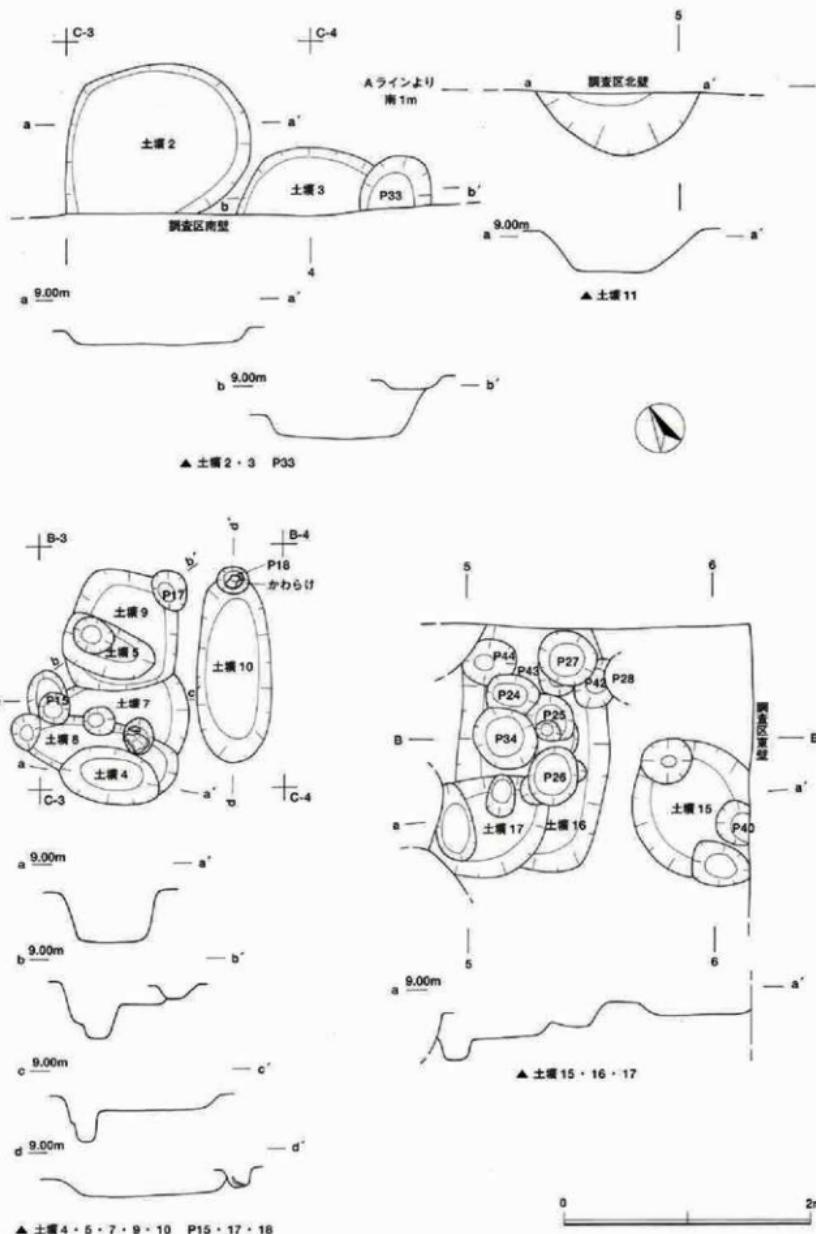


図18 土壠・柱穴(1)

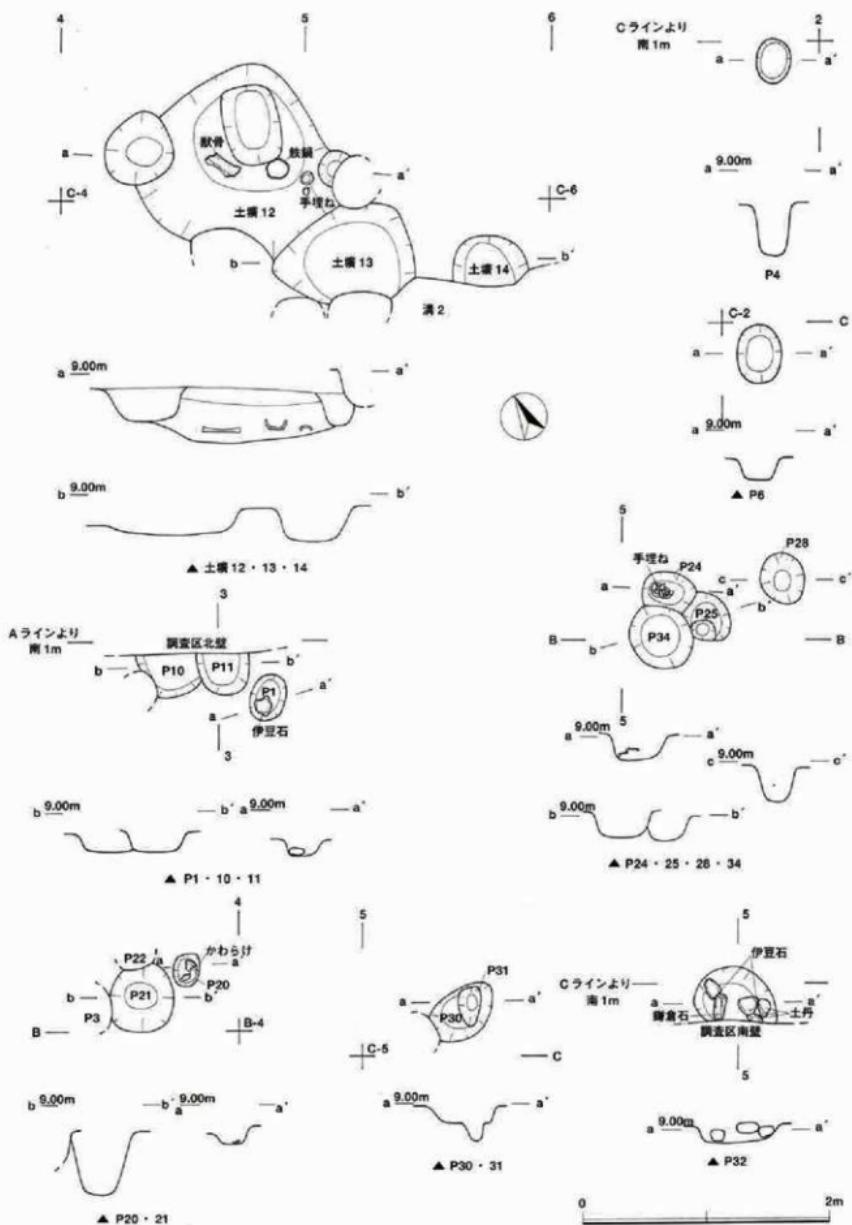


図19 土壌・柱穴 (2)

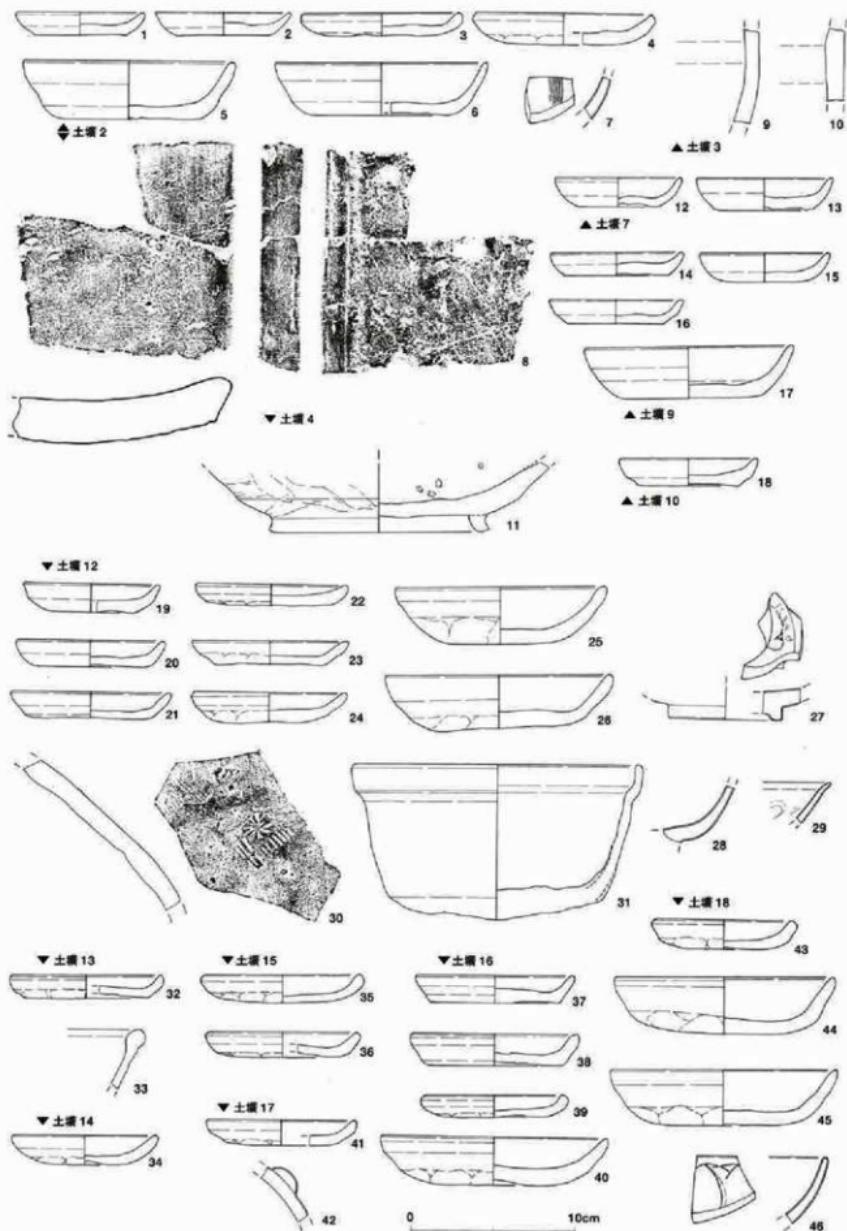


图20 土壤出土遗物

土壤8：C-3杭の北東隣に位置している。掘り方は土壤5とピットに一部を壊されており、土壤7を削平している。規模は東西径125cm、南北径60cmの楕円形を呈しており、深さ17cmと浅い皿状の断面をもつ掘り方である。覆土は炭化物のやや多い縮まりない暗茶褐色弱粘質土である。遺物はかわらけ細片だけで図示可能なものはない。

土壤9：B-3グリッドに位置する。掘り方は土壤5とP17により掘削され、土壤7の一部を壊して掘り込んでいる。平面形状は不整円形を呈しており、規模は南北径98cm、東西径90cm、深さ20cmを測る。断面が浅い皿状である。覆土は炭化物の多い縮まりの弱い茶褐色粘質土である。出土遺物は底面から図20-14~17のロクロ成形のかわらけ大小皿がみられた。

土壤10：調査区ほぼ中央、4ライン西側に位置し、P18により掘り方の北端一部が掘削されている。平面形状は長円形を呈し、南北径155cm、東西径60cm、深さ15cmを測る。掘り方は底面が平らで断面が浅い皿状である。覆土は炭化物・かわらけ細片を含む縮まりのある暗茶褐色粘質土である。図示可能な出土遺物は図20-18のロクロ成形かわらけ小皿だけである。

土壤11：調査区北端の東寄りに位置し、調査区外の北側に拡がっている。P23により一部が壊されている。規模は東西径130cm以上、南北径55cm以上、深さ40cmを測り、断面が逆「ハ」の字の台形状である。覆土は炭化物のやや多い縮まりある暗茶褐色粘質土である。図示可能な遺物は見られなかった。

土壤12：調査区東側でC-5杭付近に位置している。土壤13により掘り方の南東側の一部が壊され、また土壤17を削平して掘り込んでいる。平面形状は東西に長軸をもつ不整円形を呈し、東西径172cm、南北径145cm、深さ45cmを測る。掘り方は断面が深めの皿状である。覆土は上層が炭化物・かわらけ小片を含む暗茶褐色弱粘質土、下層が炭化物・褐鉄分を含んだ粘土ブロックを多く含む茶褐色粘質土であり、掘り方の底面付近からは馬骨片と共に鉄鍋が上向きの状態で出土している。出土遺物は図20-19~21がロクロ成形のかわらけ小皿、22~26が手捏ね成形のかわらけ大小皿である。27~29が龍泉窯系の青磁碗で27・29が内面に劃花文、28が無文のもの、30が常滑の堀肩部片である。31は腐触が進んでいるが鉄鍋のほぼ完形品で口径17.2cm・底径13.0cm・器高9.5cmの法量を示している。屈曲した口縁部の内側には吊り耳と思しき突起が認められ、外底部が丸味をもつ形式のもので内耳鍋と推測される。

土壤13：調査区東側の南寄りに位置する。溝2の上幅を壊して掘り込んでいる。平面形状は不整円形を呈し、規模が東西径115cm、南北径85cm以上、深さ20cmほどの断面浅い皿状である。覆土は土丹粒とかわらけ細片のやや多い縮まりない茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-32が手捏ね成形のかわらけ小皿、33が泉州窯系の綠釉盤である。

土壤14：土壤13の東隣に位置し、溝2の上幅を壊して掘り込んでいる。平面形状は椭円形状を呈し、規模は東西径60cm、南北径73cm、深さ30cmを測り、断面が逆台形の掘り方である。覆土は炭化物・土丹粒の多い縮まりない茶褐色弱粘質土である。出土遺物は図20-34の手捏ね成形のかわらけ小皿である。

土壤15：調査区北東域に位置し、調査区外の東側に拡がっている。P40などのピットに一部が掘削されている。平面形状は楕円形を呈し、南北径120cm以上、東西径105cm、深さ10cmを測る。掘り方は底面が平らで断面が浅い皿状である。覆土は炭化物・かわらけ細片を含む縮まりのある暗茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-35・36の手捏ね成形のかわらけ小皿である。

土壤16：土壤15の西隣に位置し、北側は調査区外へ拡がっている。土壤17により掘り方の南西一部が削平されている。平面形状は長椭円形状を呈し、規模は東西径125cm、南北径210cm以上、深さ20cmを測る。断面は浅い皿状であり、覆土は炭化物のやや多い縮まりない茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-37・38が口径9cmを越えるロクロ成形のかわらけ小皿、39・40が手捏ね成形のかわらけ大小皿であ

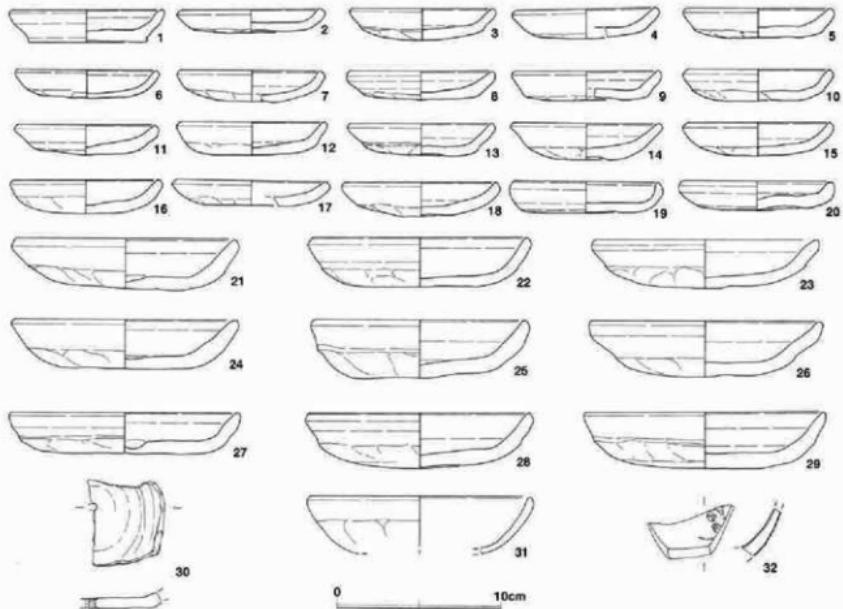


図21 かわらけ溜り出土遺物

る。

土壤17：土壤16と重複した位置にあたり、土壤12により掘り方一部が削平されている。平面形状は梢円形状を呈し、規模は東西径105cm以上、南北径85cm、深さ30cmを測り、断面は逆台形状である。覆土は炭化物・かわらけ細片の少ない縮まりの強い暗茶褐色粘質土である。出土遺物は図20-41が手捏ね成形のかわらけ小皿、42が白磁の四耳壺である。

土壤18：土壤16の西隣に位置している。土壤11により掘り方南端が削平されており、P45の一部を壊して掘り込んでいる。平面形状はほぼ円形を呈しており、規模は径105cm、深さ30cmを測り、断面が逆台形状である。覆土は炭化物を少量含む縮まりのある暗茶褐色粘質土で上層から上向きの状態でかわらけ3点が出土している。図20-43～45が手捏ね成形のかわらけ大小皿、46が龍泉窯系青磁の割花文碗である。

b. かわらけ溜り（図17・20、図版4・11）

調査区中央北壁沿いにおいて、中世地山の面上から40個体以上を包含するかわらけを中心と分布したかわらけ溜りが検出された。確認された海拔標高は8.90m前後であり、かわらけ小片や炭化物を多く含んだ暗茶褐色粘質土であり、第3面上に堆積していた包含層に混入した状態で検出された。かわらけ溜

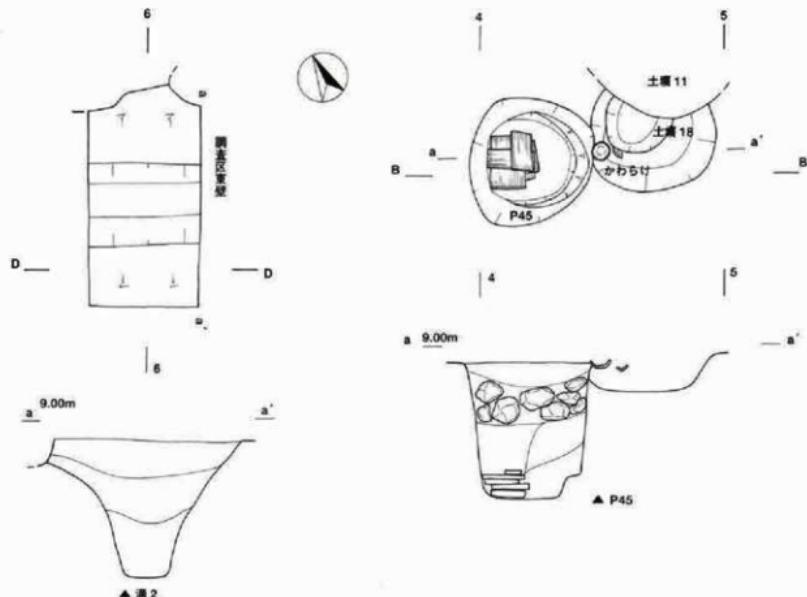


図22 満2・柱穴45

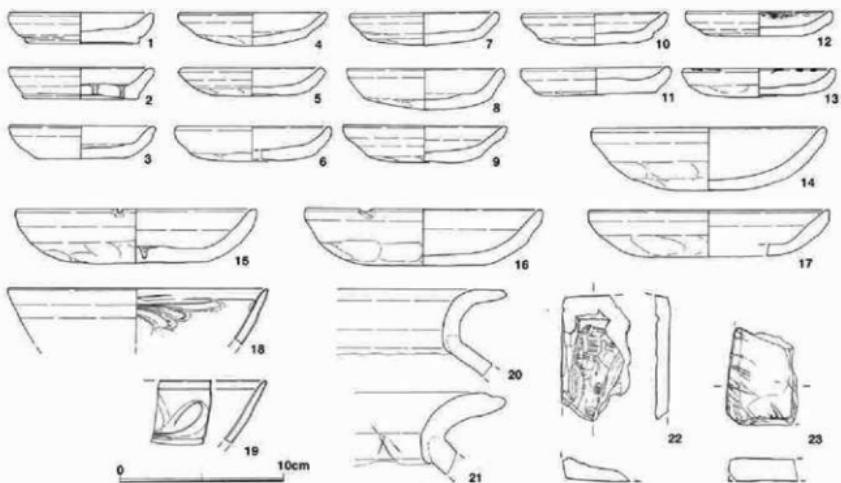


図23 満2出土遺物

りの調査区内の範囲は東西1.8m、南北70cm程であったが北壁の土層観察から主体は調査区外に拡がりをみせており全体の規模は不明である。この遺構は明確な掘り込みはもっておらず、面上に一括あるいは短期間に投棄されたとものと考えられる。

出土遺物は図21-1~30がかわらけであり、1は口径9cmを越えるロクロ成形の小皿である。2~20の手捏ね成形による小皿は、口径平均が8.9cm前後、器高平均が1.9cm前後であり、21~28の手捏ね成形の大皿は口径平均が13.5cm前後・器高平均が3.2cm前後であるが、29だけは他に比べて口径14.7cmと大型なものある。30はロクロ成形のかわらけ底部で焼成後に内外面から先端の尖った工具で穿孔されたものである。31は白かわらけで手捏ね成形の大皿、32は龍泉窯系青磁の割花文碗である。

C. 溝2(図5、図版7・13)

溝2は調査区南壁にはば沿った位置で検出された東西方に向う素掘り溝で調査区外にそれぞれ伸びている。この遺構は調査区南壁から50cm程のところで落ち込み肩部にあたる北側の上幅が確認されただけで建物範囲の規定があり、全体を検出することは不可能であった。しかしこの溝は堆積土層や出土遺物から判断して少なくとも鎌倉時代前期まで遡る遺構で屋敷の区画溝の可能性が推定された。そこで施主と施工業者のご了解を頂いて調査区南東隅、東壁際に最小限度に留めた幅・長さ約1mのトレーニチを設定して掘り下げ調査を実施した。その結果、規模は上幅が約180cm、下幅が35cm、深さ110cmを測り、掘り方は調査区東壁の堆積土層に認められるように断面が「V字形」に近い薬研堀形の様相を示した東西大溝である。溝底の海拔標高は約7.7mである。覆土は大別して3層からなり、上層(7層)がかわらけ細片・炭化物の多いやや縮まりのある暗茶褐色粘質土、中層(8層)がかわらけ小片を含む縮まりのある暗茶褐色粘質土、下層(9層)が遺物を殆ど含まない縮まりの強い暗茶褐色粘質土であり最下部に砂粒と木ノ葉・木枝の混じる有機物腐蝕土の薄い堆積が認められた。溝からの出土遺物は殆んどが上層から中層上部にかけての覆土に伴うものであった。

出土遺物は、図23-1~3がロクロ成形のかわらけ小皿、4~13が手捏ね成形のかわらけ小皿、14~17が口径が14cmを越える手捏ね成形のかわらけ大皿である。18・19は龍泉窯系の青磁碗で内面に篦描き割花文を施し、20・21が渥美の壺の口縁部片、22・23が石製品の長方鏡と京都鳴滝産の砥石である。

d. 柱穴(図18・19・22・24・25、図版14~16)

この面で検出した柱穴(ピット)は掘立柱建物を構成するような配置は認められなかった。各掘り方は平面形状が円形または楕円形を呈し、規模は径20~45cm、確認面からの深さ20~45cmである。柱穴の底面には、P1・2・29・32などの例に柱の沈下防止の目的で柱受けとして敷込まれた伊豆石や偏平な土丹塊が据えられていたが、底面に礎板を据えた例は深い掘り方をもつP45だけであった。これは調査地点における地下水位の低さの影響により礎板が腐蝕して消失した可能性が考えられ、本来は多くの例に柱受けとして礎板が据えられていたと想像される。この他、P24の柱穴からはかわらけ2点が伏せた状態で埋納されていた。次に調査区中央北壁寄りで検出した大型の掘り方を有したP45について少し触ることにする。掘り方は平面形がやや楕円形を呈し、規模は上幅が長軸径110cm・短軸径103cm、下幅がほぼ円形で径約70cm、確認面からの深さ115cmを測り、底面の西寄りには5枚重ねの礎板を据えていた。各礎板は長さが32~42cm、幅が14.8cmと27.7cm、厚さが1.4~3.9cmの大型のものを用いている。

柱穴出土の遺物について簡単に触れる(図24-1~29)。各柱穴の出土遺物は、P1:1がロクロ成形のかわらけ小皿、P6:2が同安窯系青磁の橢描文皿、P10:3が手捏ね成形のかわらけ小皿、4が青白磁皿、P11:5・6が手捏ね成形のかわらけ大皿、7が褐釉壺である。P15:8・9が手捏ね成形の

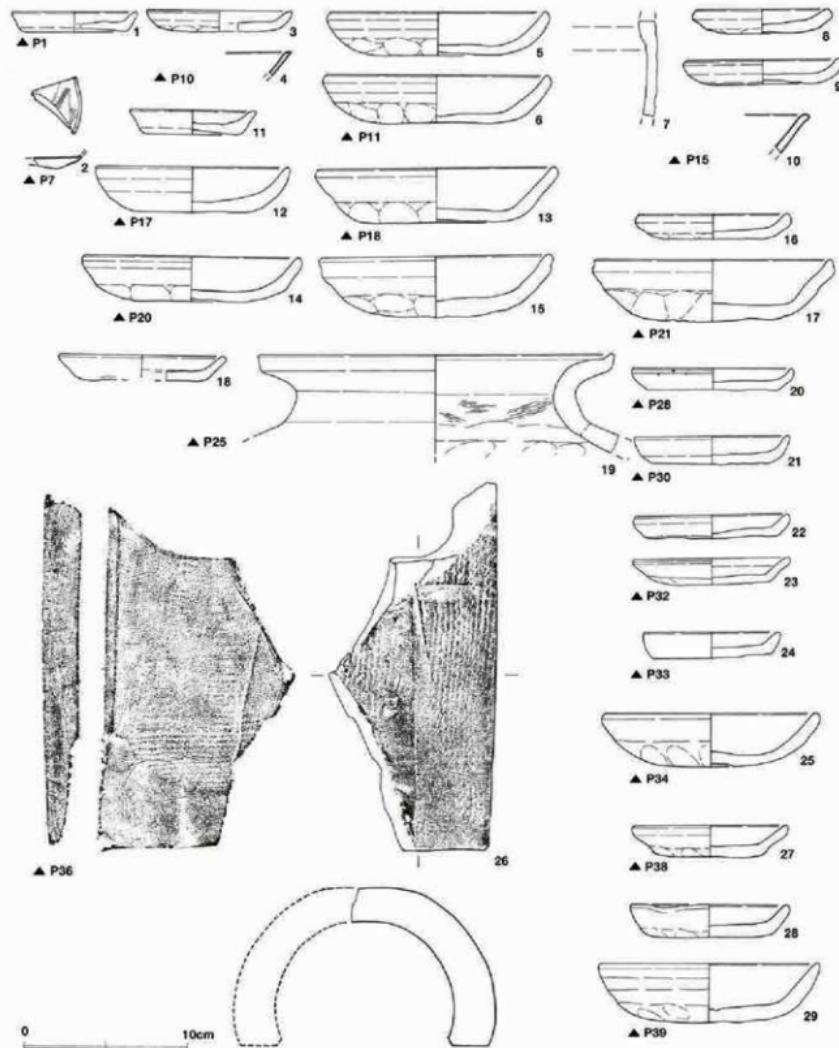


图24 柱穴出土遗物（1）

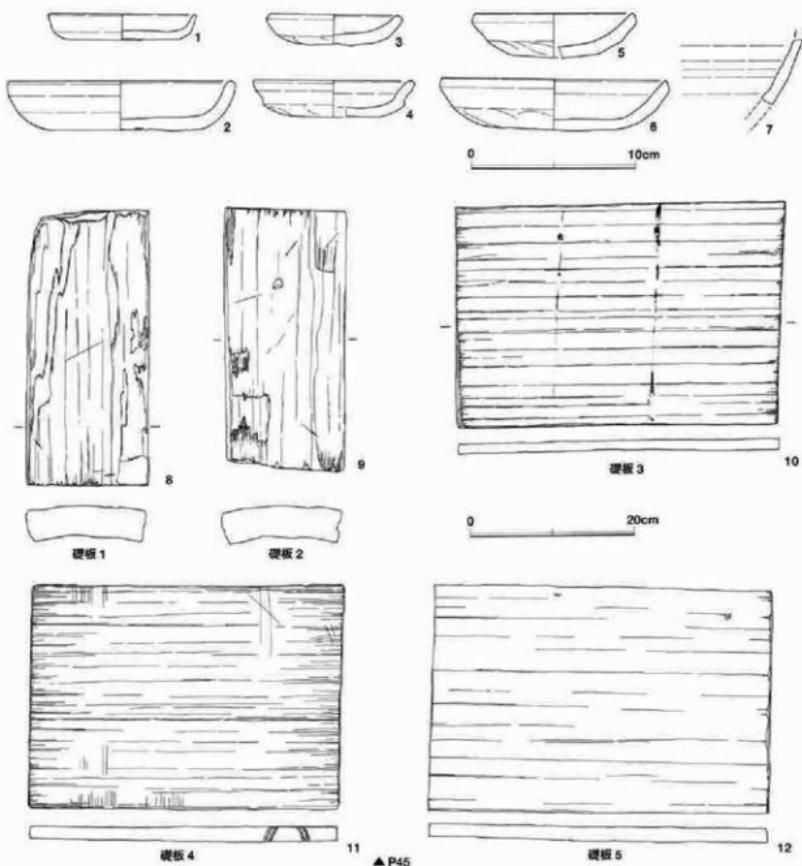


図25 柱穴出土遺物（2）

かわらけ小皿・10が白磁の端反碗である。P 17 : 11・12がロクロ成形のかわらけ大小皿であり11は口縁内外面に煤が付着した燈明皿、P 18 : 13が手捏ね成形のかわらけ大皿である。P 21 : 16・17が手捏ね成形のかわらけ大小皿、P 24 : 14・15が手捏ね成形のかわらけ大皿、P 25 : 18が手捏ね成形のかわらけ小皿・19が常滑窯の口縁部、P 28 : 20がロクロ成形のかわらけ小皿であり内外面に煤の付着した燈明皿である。P 30 : 21がロクロ成形のかわらけ小皿、P 32 : 22・23が手捏ね成形のかわらけ小皿、P 33 : 24がロクロ成形のかわらけ小皿、P 34 : 25が手捏ね成形のかわらけ大皿、P 36 : 26が男瓦（丸瓦）で永福寺創建期瓦と同類、P 38 : 27が手捏ね成形のかわらけ小皿、P 39 : 28・29が手捏ね成形のかわらけ大小皿である。

P 45 : 図25 - 1・2はロクロ成形のかわらけ大小皿、3～6が手捏ね成形のかわらけ大小皿、7が

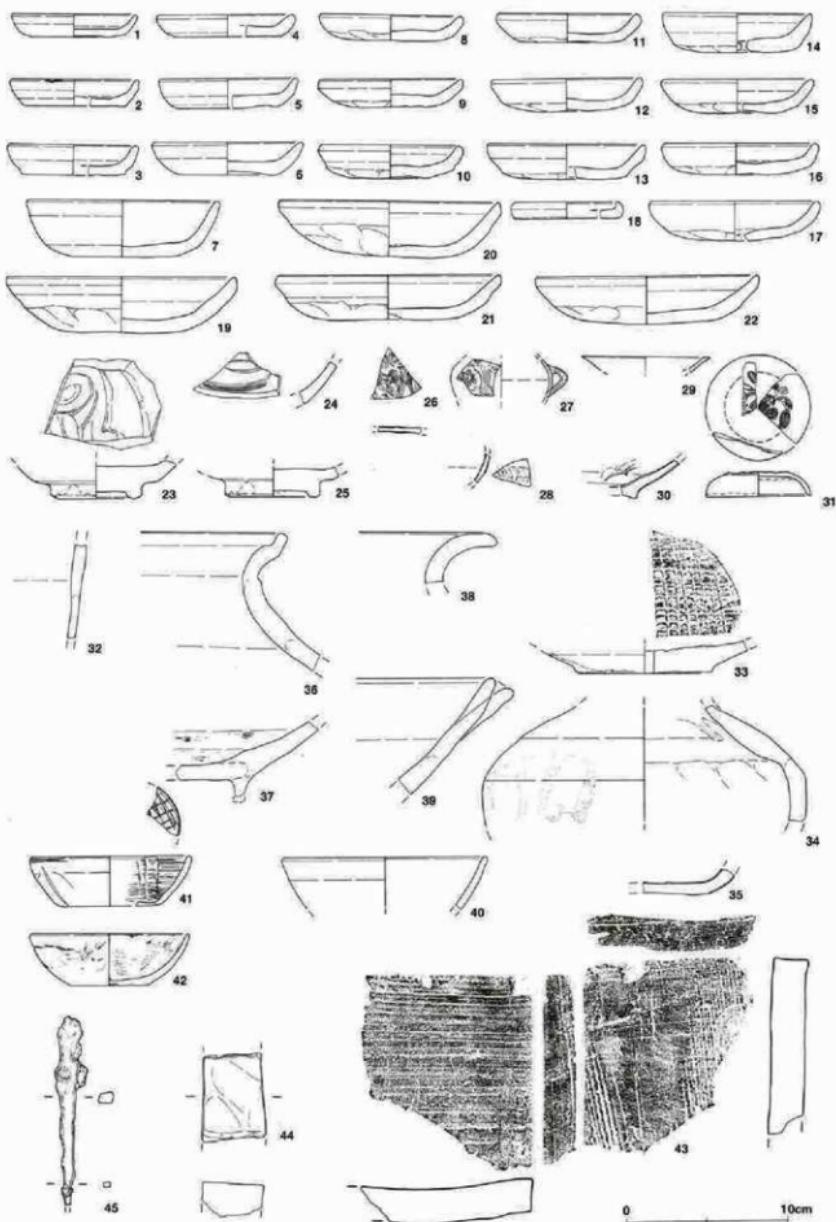


図26 第2面下～第3面出土遺物

白磁の壺、8～12が礎板である。

e. 遺構外出土遺物（図26、図版17）

ここでは、第2面構築土中及び第3面の遺構確認時の掘り下げに伴って出土したものでかわらけ溜りなどの遺構に共伴しない遺物を一括して述べることにする。

かわらけは1～7のロクロ成形タイプの一群と、8～22の手捏ね成形タイプの一群に大別される。さらにロクロ成形は1～6の小皿と7の大皿に分けられ、1～5が口径7.7～8.4cm、底径5.9～6.9cm、器高1.4～1.8cmの法量を示し、6が口径が9cmを越える資料である。

手捏ね成形のかわらけには、8～17の小皿と19～22の大皿にわけられる。小皿の8～16は口径8.5～9.5cm、器高1.5～2.5cmの法量を示し、17が口径10cmを越える資料である。大皿の19～22が口径13.7～13.9cm、器高2.9～3.5cmの法量を示したものである。18は白かわらけで手捏ね成形の内折れコースター状の資料である。

23～32は舶載陶磁器類である。23～25は龍泉窯系青磁の劃花文碗である。26～29は白磁類である。26が合子蓋で外面に鳳凰文、27が小把手付きの小型水滴で外面に蓮華文を施す。28が外型作りの小壺と思われ、29が器壁の薄い小皿ある。30・31は青白磁で前者が無文碗、後者が合子蓋で外面に蓮華文を施している。32は褐釉壺の胴部小片である。

33～40は国産陶器類である。33～35は瀬戸窯の製品で鉢皿・瓶子・折縁深皿である。36・37は常滑窯の製品で壺と捏鉢、38・39は渥美窯の製品で壺と捏鉢である。40は北部系山茶碗である。

41は瓦器碗で見込みと内壁に暗文を施した京都檍葉産のもの、42は瓦器質碗で外底に糸切痕を残し外面に煤が付着する。43は女瓦（平瓦）で凸面縦目叩きを施した永福寺創建期瓦と同類のものである。44は砥石で天草産と考えられるもの。45は鉄釘である。

第4章　まとめ

本調査地点は、「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（神奈川県遺跡台帳No282）の範囲内的一角にあたり、鎌倉時代中～後期に幕府の所在した場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正亭が置かれていた場所とも云われている。横大路を挟んだ北側には鶴岡八幡宮と政所跡比定地があり、南側には宇津宮辻子幕府跡（嘉禄元年：1225年以降）、東側には執権邸の旧跡とも伝える宝戒寺や北条氏終焉の地として知られる東勝寺跡があり、この地一帯は鎌倉時代に幕府の政治的な中枢域であったことが知られる。

今回の調査では3時期の生活面が確認されており、各生活面で検出した遺構や遺物からその年代観と調査で得られた幾つかの成果を若干述べる。第3面を構成する中世地山面（中世基盤層上面）から掘り込まれた溝2（東西溝＝薬研堀）に関しては、調査区内で溝の北側肩と拡張トレンドで溝底と南側肩の一部を確認したに過ぎなかったが、層位的には第3面（中世地山面）で検出した遺構中の最も古い一群に属するものである。出土のかわらけからみても12世紀末葉～13世紀前葉までの時期に想定される資料であり、この時期の地割の一端を知ることができた。またP45は掘り方の大きさ・深さが共に1mを超えるもので底面に礎板5枚を据えた大型の柱穴であった。これらの遺構を含めた生活面の時期は、出土遺物から概ね13世紀前半までの年代観が与えられる。

第2面の時期になると、土壙・井戸や南北方向の溝などを確認したが、前代の遺構密度に比べまばらな展開を示していた。溝1は調査地点から75m北、現在八幡宮社頭を東西に走る横小路に直交する位置関係にあたり、若宮大路主軸に平行した軸方位であった。第2面の時期は出土遺物から概ね13世紀中～後葉と考えたいところである。第1面の時期になると、近・現代ゴミ穴の搅乱により生活面が削平されていたが、遺構はさらに疎となりゴミ穴と思しき土壙を中心とした遺構に占められる。出土遺物から概ね13世紀末～14世紀前葉頃までの年代観が与えられよう。これらのことから今回の調査地点の様相は、鎌倉時代初期から開発がはじまり、場の性格からみてもほぼ鎌倉時代いっぱいまでは生活が営まれていた痕跡を認めることができた。

【参考文献】

- 秋山哲夫 1997 「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編第9号 東京大学史学会
大三輪龍彦 1986 「中世都市鎌倉の地割制試論」「仏教芸術」164号 毎日新聞社
菊川英政 1989 a 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
菊川英政 1989 b 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目395番地」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
宗臺秀明 1998 「中世都市鎌倉の初期かわらけ」「中近世土器の基礎的研究」日本中世土器研究会編
宗臺秀明ほか 2001 「政所跡 雪ノ下三丁目989番4地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成13年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
手塚直樹ほか 1993 「政所跡 雪ノ下三丁目988番地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成5年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
馬渕和雄 1985 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地点」同調査団
馬渕和雄 1994 「武士の都 鎌倉～その成立と構想をめぐって」「都市鎌倉と坂東の海に暮らす(「中世の風景を読む2」)」新人物往来社
馬渕和雄ほか 1996 「北条小町邸跡(泰時・時頼邸) 雪ノ下一丁目377番地7点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成8年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会
馬渕和雄 2002 「貿易陶磁器と国産陶器」「かながわの中世～鎌倉から小田原へ～－土器様相を中心として－」神奈川考古学会
馬渕和雄ほか 2002 「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目400番1地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告」

告】鎌倉市教育委員会
馬道和雄ほか 2003
「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目401番5ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘
査報告』鎌倉市教育委員会

表1 出土遺物観察表(1)

団番号	種類	法規 (a:上径 b:下径 c:高)	成形・特徴 (文様・彫象・胎土・基底・焼成など)	備考 (道場・その他)
8-1	かわらけ	a:7.1cm b:5.8cm c:1.3cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	かわらけ道場 1
2	かわらけ	a:7.1cm b:4.1cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
3	かわらけ	a:7.9cm b:5.8cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
4	かわらけ	a:7.8cm b:5.4cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
5	かわらけ	a:7.2cm b:5.6cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
6	かわらけ	a:7.3cm b:4.8cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 棕色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
7	かわらけ	a:7.8cm b:4.6cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
8	かわらけ	a:7.8cm b:5.7cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
9	かわらけ	a:7.4cm b:4.5cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉 やや不良	*
10	かわらけ	a:7.4cm b:4.9cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
11	かわらけ	a:7.8cm b:5.4cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
12	かわらけ	a:7.8cm b:5.1cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
13	かわらけ	a:7.1cm b:3.6cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細 赤色粒・白粉 良好	*
14	かわらけ	a:7.6cm b:4.4cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黒色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	*
15	かわらけ	a:7.8cm b:5.0cm c:2.0cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉 やや不良	*
16	かわらけ	a:7.9cm b:5.1cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 棕色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
17	かわらけ	a:7.4cm b:4.6cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	*
18	かわらけ	a:7.7cm b:4.3cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	*
19	かわらけ	a:8.1cm b:5.4cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 不良	*
20	かわらけ	a:8.0cm b:5.5cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 良好	*
21	かわらけ	a:11.0cm b:7.0cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 良好	*
22	かわらけ	a:11.4cm b:7.1cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	*
23	かわらけ	a:12.1cm b:6.5cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
24	かわらけ	a:12.8cm b:7.5cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 良好	*
25	かわらけ	a:11.4cm b:6.4cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 棕色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
26	かわらけ	a:12.5cm b:6.8cm c:3.6cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 やや不良	*
27	かわらけ	a:12.5cm b:7.7cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・小石粒 良好	*
28	かわらけ	a:12.4cm b:7.0cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	*
29	かわらけ	a:13.9cm b:8.3cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 小石粒 良好	*
30	常滑 横跡	口縁～腹部 片口	輪積技法 口縁端部や脛厚し丸角あり 灰色 硬質 石長多く粗粒 良好	* 常滑片口跡 1期
31	かわらけ	a:7.3cm b:5.2cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄色 黑色微細 赤色粒・白粉 やや不良	土壤 1
32	かわらけ	a:11.8cm b:7.7cm c:3.0cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
33	かわらけ	a:7.4cm b:4.6cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉 良好	土壤 2
34	かわらけ	a:10.9cm b:6.6cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉 良好	*
35	かわらけ	a:12.3cm b:6.8cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 棕色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
36	かわらけ	a:12.6cm b:7.9cm c:3.0cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉 良好	*
37	かわらけ	a:13.2cm b:8.0cm c:3.6cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉 良好	*
38	かわらけ	a:10.7cm b:7.0cm c:2.9cm	ロクロ 外底赤切削 棕色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	土壤 4
39	かわらけ	a:7.4cm b:5.0cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 やや不良	土壤 5
40	かわらけ	a:7.8cm b:6.4cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・小石粒 良好	*
41	かわらけ	a:8.0cm b:5.0cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	*
42	常滑 覆	口縁部	輪積技法 覆縁部輪郭い折返し 口縁に灰綠色自然縫 細胞 硬質 石粒	*
43	かわらけ	a:8.0cm b:3.2cm c:2.0cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白粉・土丹粒 良好	土壤 6

表2 出土遺物観察表(2)

団番号	種類	法量(a:口径 b:底径 c:髙さ)	成形・特徴(文様・施薬・胎土・壊成など)	備考(遺構・その他の)
8-44	かわらけ	a:8.6cm b:5.9cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細・赤色粒・白針・良好	土壤6
45	かわらけ	a:8.1cm b:5.7cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細・赤色粒・白針・良好	土壤7
46	かわらけ	a:11.4cm b:7.5cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
47	かわらけ	a:11.8cm b:6.4cm c:2.8cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
48	かわらけ	a:12.7cm b:8.0cm c:2.9cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	土壤8或後の穿孔
49	かわらけ	a:12.9cm b:7.5cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	土壤9
50	青磁 瓢	b:4.8cm	三角高台 灰綠色半透明 高台内施薬 受付露點 灰白色堅板	能登窯系
51	土器質 火鉢	口縁部	輪横枝法 口縁部厚壁 灰黑色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
52	かわらけ	a:7.1cm b:4.5cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針 やや不良	土壤10
53	かわらけ	a:13.4cm b:8.1cm c:3.0cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 やや不良	+
54	青磁 瓢	口縁	輪横枝法 口縁部厚壁や内肥厚り丸味あり 灰色 施薬・石粒多く粗土・良好	常滑片口跡1期
55	吉備系土器碗	b:5.4cm	尾付高台 白色 黃褐色含むが粗土・空や不良	+
56	伊勢系土器	a:29.8cm	輪横枝法 口縁部厚口内へ折り返す薄・厚壁 灰褐色 粗移や多い 苦面復付看	+
15-1	かわらけ	a:7.1cm b:5.5cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒・良好	調1
2	かわらけ	a:7.1cm b:4.6cm c:1.4cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
3	かわらけ	a:7.6cm b:4.9cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
4	かわらけ	a:7.4cm b:4.7cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
5	かわらけ	a:8.0cm b:5.9cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒 不良	+
6	かわらけ	a:8.3cm b:5.6cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針 不良	+
7	かわらけ	a:7.1cm b:5.4cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
8	かわらけ	a:7.0cm b:5.4cm c:2.0cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・良好 口縁部に保付看 塗明里	+
9	かわらけ	a:7.0cm b:5.6cm c:2.0cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
10	かわらけ	a:7.6cm b:4.8cm c:2.2cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
11	かわらけ	a:7.6cm b:4.7cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
12	かわらけ	a:8.0cm b:4.8cm c:2.6cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
13	かわらけ	a:11.2cm b:6.4cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
14	かわらけ	a:11.7cm b:7.1cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒・良好	+
15	かわらけ	a:11.7cm b:7.2cm c:3.6cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・空や不良	+
16	かわらけ	a:11.8cm b:7.4cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
17	かわらけ	a:11.9cm b:7.3cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
18	かわらけ	a:11.7cm b:6.9cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
19	かわらけ	a:12.0cm b:7.4cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
20	かわらけ	a:12.0cm b:7.3cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
21	かわらけ	a:12.8cm b:8.4cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
22	かわらけ	a:12.4cm b:7.8cm c:3.0cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
23	かわらけ	a:12.8cm b:7.0cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
24	かわらけ	a:13.4cm b:6.7cm c:3.9cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・良好	+
25	かわらけ	a:13.8cm b:8.1cm c:3.7cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
26	かわらけ	a:12.8cm b:7.6cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・良好	+
27	白磁	a:10.6cm c:3.0cm	手捏ね 体部中位～外底削頭直痕 白色・良好	+
28	白磁 口元輪	a:15.7cm	口縁外反 輪底灰白色 手透明 口部露胎部 白色 施薬含む少做窓 磁質良好	+
29	瓶	口縁部	。口縁部倒伏し 黄褐色半透明の灰釉 灰白色 施薬含みが粗且・良好	+
30	常滑 瓢	b:12.6cm	輪横枝法 略有高台 内面施薬 灰色 施薬・粗土・良好	常滑片口跡1期

表3 出土遺物観察表(3)

団・番号	種類	法量(a:12径 b:汎径 c:基高)	成形・特徴(文様・施装・施土・素地・焼成など)	備考(造様・その他)
9-31	女瓦	厚さ18cm	凸面平頂状き口 斜面腰版ナメ 口面腰版斜面面(△) 斧背文 黑色微細・石粒・粗土	満1 永福寺里期と同一
9-1	かわらけ	a:73cm b:49cm c:23cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針 良好	P 1
2	かわらけ	a:73cm b:44cm c:20cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 やや不良	P 2
3	かわらけ	a:73cm b:44cm c:22cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・白針 良好 口縁一ト所を打ち欠く	P 5
4	白磁 口元直	口縁~背部	口縁外反 黑白色透明 口唇露胎 黑白色 微細含むが精良 硬質良好	*
5	かわらけ	a:127cm b:88cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好	P 6
6	かわらけ	a:79cm b:55cm c:19cm	ロクロ 外底赤切削 明黃褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 やや不良	P 8
7	かわらけ	a:126cm b:82cm c:33cm	ロクロ 外底赤切削 明黃褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 やや不良	*
8	かわらけ	a:122cm b:91cm c:34cm	ロクロ 外底赤切削 明黃褐色 黑色微細・赤色粒・白針 やや不良	*
9	白磁 口元直	口縁~全体	口縁外反気味 黑白色透明 口唇露胎 黑白色 微細含むが精良 硬質良好	*
10	かわらけ	a:112cm b:68cm c:32cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒 やや不良	P 9
11	青磁 梱	口縁部小片	外面施薙文層 明緑色透明 手厚に施釉 黑色微細化合が堅緻	*
12	かわらけ	a:7.6cm b:5.1cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好	P 17
13	青磁 梱	口縁部小片	外面施薙文層 明緑色透明 手厚に施釉 黑色微細化合が堅緻	*
14	瓶口 天目窓	侈部下端小片	茶褐色施釉を内面と外縁まで施釉 施釉部微細	*
15	かわらけ	a:12.6cm b:79cm c:29cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針 良好	P 18
16	かわらけ	a:12.4cm b:77cm c:32cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 良好 内外面端行着帶明確	P 20
17	かわらけ質直	b:37cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒 良好	*
18	白かわらけ	口縁~底部小片	手捏ね 外面指摩痕 黑白色 微細 精良 良好	*
19	かわらけ	a:8.1cm b:60cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 やや不良	P 21
20	かわらけ	a:8.0cm b:60cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 やや不良	*
21	かわらけ	a:13.2cm b:8.8cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒 やや不良	*
22	かわらけ	a:12.2cm b:63cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 やや不良	*
23	かわらけ	a:13.2cm b:8.2cm c:3.7cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 良好	*
24	かわらけ	a:13.3cm b:8.4cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 良好	*
25	青磁 梱	口縁~背部小片	外面施薙文層 緑灰色半透明 手厚の施釉 微細含むが堅緻	*
30-1	かわらけ	a:7.3cm b:52cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好	包含解-第1面
2	かわらけ	a:7.6cm b:59cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 やや不良	*
3	かわらけ	a:8.1cm b:55cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好 口縁部一ト所打欠き 施釉粗	*
4	かわらけ	a:7.5cm b:48cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好	*
5	かわらけ	a:7.5cm b:46cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好	*
6	かわらけ	a:8.0cm b:57cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒 良好	*
7	かわらけ	a:7.6cm b:45cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針 良好	*
8	かわらけ	a:7.7cm b:59cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針 やや不良	*
9	かわらけ	a:7.9cm b:50cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒 良好	*
10	かわらけ	a:12.3cm b:7.7cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針 やや良	*
11	かわらけ	a:13.1cm b:8.4cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白針・小石粒 良好	*
12	かわらけ	a:12.8cm b:6.7cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針・土丹粒・小石粒 良好	*
13	かわらけ	a:14.7cm b:8.7cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色粒・白針 良好	*
14	青磁 梱	a:15.7cm	外面施薙文層 緑灰色不透明 手厚施釉 黑白色 微細含む 精良堅緻	龍泉窯系
15	青磁 梱	b:7.2cm	施釉尚未高台 施釉色透明 手厚施釉 長段~高台内落部 黑色 微細含む 坚良堅緻	龍泉窯系
16	常滑 車	肩部品	輪幅桂法 刹部に亀甲文様の印押 施釉色 褐色 施土・粗土	*
17	常滑 指跡	口縁部小片	輪幅桂法 内面底座 黑白色半透明 黑色 微細・粗土・粗土 硬質良好	常滑片口跡 類

表4 出土遺物観察表(4)

団・番号	種類	法算(木口様・木底様・e.器高)	成形・特徴(文様・織糸・粘土・素地・焼成など)	備考(造情・その他)
10-18	常滑・涅託	a:31.0cm b:10.7cm c:11.5cm	輪積技法 番口平底ノ織部微張・横ナタ口唇部角張る 内面素地 硬色 砂粒・石粒 粘土 焼成良好	* 常滑片口林上層
19	常滑・涅託	口縁部小片	輪積技法口唇部強い・横ナタ口唇部角張る 硬色 砂粒・石粒 粘土 焼成良好	* 常滑片口林上層
20	陶瓶	開光通室	樹 樹脂年 621年	*
21	銅製品	長押12.1cm 短押8.6cm 厚さ1mm	箱内模の小判形を呈した薄い銅板 焼金具の可能性もあるが打穴等皆無で用途不明	*
14-1	かわらけ	a:7.8cm b:5.3cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	土壤2
2	かわらけ	a:13.0cm b:8.7cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	*
3	瓦瓦(軒丸瓦)	瓦舟部片	内底三巴文 外底内縁に連珠文 瓦底部瓦舟部の尾足残す 瓦ズレ有 灰色 砂粒・石粒 粘土 焼成良好	*
4	瓦瓦(平瓦)	厚さ1.8cm	瓦底布有 黄褐色脱化ナラ 古窓「×」款の消費字印有 灰色 砂粒・石粒・白色絞・石粒 良好	*
5	かわらけ	a:12.0cm b:8.2cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	*
6	雲滑・壺	底部~胴部下位	輪積技法 番口平底 表面暗色 底色 砂粒・石粒・白色絞・石粒 粘土 烧成良好	*
7	かわらけ	a:8.0cm b:5.2cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 やや良	土壤4
8	青白磁小皿	a:6.5cm b:2.5cm c:1.6cm	内底作り 内面凸状の連珠文 明モリーパー灰白色透明 灰白色 砂粒含むが精良堅密	*
9	かわらけ	a:7.8cm b:5.6cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好 内面燒付着帯明瞭	土壤5
10	かわらけ	a:12.6cm b:7.4cm c:3.6cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 やや不良	*
11	軽石	長押8.1cm 短押6.5cm 厚さ3.6cm	箱内形 多孔の泥状石質 両面刃物の加工・研削痕あり	土壤7
12	瓦器碗	a:10.2cm	口縁模ナガリ 内面模倣の輪底 文面黒褐色 志部灰白色 砂粒 精良 良好	土壤8 京都橿葉系
13	かわらけ	a:9.1cm b:7.8cm c:1.5cm	手捏ね 内型作り 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	土壤9
14	かわらけ	a:9.0cm b:8.6cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞・白絞 良好	土壤10
15	かわらけ	a:8.7cm b:7.4cm c:1.7cm	手捏ね 内型作り 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	*
16	かわらけ	a:10.1cm b:8.2cm c:2.2cm	手捏ね 内型作り 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 やや良	*
17	かわらけ	a:12.9cm b:11.2cm c:3.8cm	手捏ね 内型作り 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	*
18	陶美・壺	b:8.2cm	輪積技法 外吹抜口破 表面暗灰色 志部灰白色 砂粒 精良 焼成良好	*
19	青磁・碗	b:4.7cm	削面削面高台 内面刻花文 明モリーパー灰白色清い 削面高台内底斜 灰白色 粘土堅密	*
20	瓦器碗	口縁部片	口縁模ナガリ 内面模倣の輪底 文面灰黑色 志部灰白色 砂粒 精良 良好	*
21	かわらけ	a:9.7cm b:8.6cm c:1.9cm	手捏ね 内型作り 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	土壤11
22	陶美・壺	器口~肩部片	輪積技法 延~朝鮮オリ~延吉色の模様 表面暗灰色 志部灰白色 砂粒 精良 良好焼成	* 国15-18同一個体か
23	青白磁小皿	口縁部片	内底作り 内面青文・印花文 本色青色透明 口部輪郭捺する口元 灰白色 精良堅密	土壤12
24	瓦瓦(丸瓦)	厚さ1.9cm	凸面彫り押す模様ナラ 丹頂斑目灰 四凸側面へ張り 表面暗灰色 志部灰白色 黑色微細・石粒	井戸
25	かわらけ	a:13.1cm b:8.3cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	P 3
26	かわらけ	a:12.8cm b:8.3cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	P 9
27	かわらけ	a:13.1cm b:9.8cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	*
28	かわらけ	a:9.1cm b:7.5cm c:2.0cm	手捏ね 内型作り 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好 口縁部・外表面焼付着 帯明瞭	P 23
16-1	かわらけ	a:7.5cm b:5.7cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 やや不良	第1面下~第2面
2	かわらけ	a:8.2cm b:5.6cm c:1.6cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	*
3	かわらけ	a:7.2cm b:6.1cm c:1.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 やや良	*
4	かわらけ	a:8.3cm b:6.8cm c:1.8cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	*
5	かわらけ	a:7.2cm b:4.1cm c:2.1cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	*
6	かわらけ	a:7.2cm b:4.0cm c:2.2cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好	*
7	かわらけ	a:7.4cm b:4.6cm c:2.2cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞 良好 口縁部保有 帯明瞭	*
8	かわらけ	a:7.8cm b:5.0cm c:1.9cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 良好	*
9	かわらけ	a:8.1cm b:6.9cm c:1.5cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 不良	*
10	かわらけ	a:11.4cm b:6.2cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒 やや不良	*
11	かわらけ	a:11.7cm b:6.3cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細・赤色絞・白絞・土丹粒・小石粒 良好	*

表5 出土遺物観察表(5)

団・番号	種類	法量(a:幅径 b:底径 c:髙さ)	成形・特徴(文様・釉薬・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
16-12	かわらけ	a:11.9cm b:5.4cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細 赤色粒・白針 やや不良	第1面下～第2面
13	かわらけ	a:12.4cm b:8.0cm c:3.7cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細 赤色粒・白針・土月粒 良好	*
14	かわらけ	a:11.4cm b:7.3cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黒色微細 赤色粒・白針 良好	*
15	かわらけ	a:11.8cm b:7.0cm c:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細 赤色粒・白針・土月粒・小石粒 良好	*
16	かわらけ	a:11.8cm b:7.1cm c:3.3cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細 赤色粒・白針・土月粒 良好	*
17	かわらけ	a:11.9cm b:7.1cm c:3.5cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細 赤色粒・白針・土月粒 良好	*
18	かわらけ	a:11.6cm b:8.0cm c:2.9cm	ロクロ 5底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白針 やや不良	*
19	かわらけ	a:12.1cm b:8.1cm c:2.9cm	ロクロ 外底赤切削 橙色 黑色微細 赤色粒・白針・土月粒 良好	*
20	かわらけ	a:12.2cm b:8.4cm c:2.9cm	ロクロ 外底赤切削 黄褐色 黑色微細 赤色粒・白針・土月粒 やや不良	*
21	かわらけ	a:12.3cm b:7.4cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細 赤色粒・白針・土月粒 やや不良	*
22	かわらけ	a:7.9cm b:5.7cm c:1.9cm	手捏ね 外底切削頭 開黄褐色 黑色微細 赤色粒・白針 やや不良	*
23	青磁 瓢	a:15.7cm	外面開口部面 明緑灰褐色半透明 花多い薄手胎體 淡白色 黑色微細 精良堅緻	* 龍泉窯系窯工-5類
24	青磁 盆	a:10.8cm	平底 侈唇中抜き底直 見足外端切端 オーリップ底色透明 淡手胎體 淡白色 黑色微細 精良堅緻	* 龍泉窯系窯工-2類
25	青磁 折腰盤	底部片	明緑灰褐色透明 厚い胎體 高台内施釉 斜白色 黑色微細 精良堅緻	* 龍泉窯系
26	青磁 扇葉盤	扇部片	緑灰色 不透明 厚い胎體 高台内施釉 灰白色 黑色微細 精良堅緻	*
27	白磁 口1周	a:13.8cm	口縁外仄 口底白色半透明 薄い胎體 口部露胎 斜白色 黑色微細 精良堅緻	*
28	白磁 口1周	b:6.0cm	手捏 見足外端切端 白色半透明 口部露胎 五筋輪郭 扇葉輪郭取り足 米白色 黑色微細 精良堅緻	*
29	青白磁 梅瓶	頸部	外面開口部 文牡丹水 水着色透明 厚い胎體 灰白色 精良堅緻	*
30	瓶口 小壺	b:3.1cm	ロクロ 外底赤切削 外面に明灰褐色灰釉 扇目輪郭 灰黄色 微細 精良	*
31	瓶口 洗	a:15.0cm	外瓶口線上に菊花文捺印 黄灰～褐色釉 扇手輪郭 再火気認 灰色 灰土 硬質	*
32	瓶口 洗	口縁一小部片 c:6.2cm	外底赤切削 内外面灰褐色施釉 外面再火白瀬し部分剥離 微細 灰土 硬質	*
33	常滑 楠鉢	a:10.0cm	輪投技法 端台高台 内面摩擦 灰色 粉砂・石粒 粗土 硬質良好	* 常滑片口跡工類
34	常滑 楠鉢	底部小片	輪投技法 端台高台 内面摩擦 灰色 粉砂・石粒 粗土 硬質良好	* 常滑片口跡工類
35	女兒(平足)	厚さ2.1cm	四面削起子ナギ 口面彫刻唇 蔵板ナギで毎日不明 表面灰褐色 底部灰白色 精緻・小石粒 粗土	*
36	滑石製品	長さ2.3cm 幅4.7cm 厚さ2.8cm	滑石鏡を刃物で所加工したものと想定不明	*
21-1	かわらけ	a:9.2cm b:7.3cm c:2.0cm	ロクロ 外底赤切削 明黄褐色 黑色微細 赤色粒・白針 やや不良	第3面 かわらけ蓋り
2	かわらけ	a:8.6cm b:7.2cm c:1.4cm	手捏ね 外面切削頭 灰色 黑色微細・白針 精良	*
3	かわらけ	a:8.6cm b:7.6cm c:1.9cm	手捏ね 外面切削頭 灰色 黑色微細・白針 精良	*
4	かわらけ	a:8.6cm b:7.1cm c:1.8cm	手捏ね 外面切削頭 灰色 黑色微細・白針 精良	*
5	かわらけ	a:8.7cm b:7.9cm c:1.8cm	手捏ね 外面切削頭 黄褐色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
6	かわらけ	a:8.8cm b:7.2cm c:1.8cm	手捏ね 外面切削頭 橙色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
7	かわらけ	a:8.6cm b:7.9cm c:1.9cm	手捏ね 外面切削頭 黄褐色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
8	かわらけ	a:8.8cm b:7.3cm c:1.7cm	手捏ね 外面切削頭 橙色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
9	かわらけ	a:8.8cm b:7.6cm c:1.8cm	手捏ね 外面切削頭 橙色 黑色微細・白針 やや妙質 やや良好	*
10	かわらけ	a:8.8cm b:8.1cm c:1.9cm	手捏ね 外面切削頭 黄褐色 黑色微細・白針 精良	*
11	かわらけ	a:8.5cm b:6.6cm c:1.8cm	手捏ね 外面切削頭 橙色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
12	かわらけ	a:8.9cm b:8.1cm c:2.0cm	手捏ね 外面切削頭 橙色 黑色微細・白針 精良	*
13	かわらけ	a:8.9cm b:7.2cm c:1.9cm	手捏ね 外面切削頭 橙色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
14	かわらけ	a:8.9cm b:7.3cm c:2.2cm	手捏ね 外面切削頭 黄褐色 黑色微細・白針・赤色粒 やや粗土 精良	*
15	かわらけ	a:8.9cm b:7.3cm c:2.0cm	手捏ね 外面切削頭 明黄褐色 黑色微細・白針 やや粗質 やや不良	*
16	かわらけ	a:8.9cm b:8.6cm c:2.0cm	手捏ね 外面切削頭 黄褐色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
17	かわらけ	a:9.1cm b:8.0cm c:1.6cm	手捏ね 外面切削頭 黄褐色 黑色微細・白針 やや妙質 精良	*
18	かわらけ	a:9.3cm b:7.8cm c:2.1cm	手捏ね 外面切削頭 灰色 黑色微細・白針 やや粗土 精良	*

表 6 土遺物觀察表 (6)

図・番号	種類	法量 (a: 横径 b: 垂直径 c: 高さ)	成形・特徴 (文様・輪裏・粒土・実地・施塗など)	備考 (遺構・その他の)
21-19	かわらけ	a: 8.9cm b: 8.0cm c: 2.0cm	手捏ね 外面指頭痕 口縁内折れ気味 桜色 黒色微細・白針 やや粉質 良好	第3面 かわらけ置り
20	かわらけ	a: 9.0cm b: 7.5cm c: 1.8cm	手捏ね 外面指頭痕 黄褐色 黑色微細・白針 やや粉質 良好	*
21	かわらけ	a: 13.4cm b: 12.0cm c: 3.1cm	手捏ね 外面指頭痕 黄褐色 黑色微細・白針 粒土 良好	*
22	かわらけ	a: 13.3cm b: 12.0cm c: 3.1cm	手捏ね 外面指頭痕 白色 黑色微細・白針 粒土 良好	*
23	かわらけ	a: 13.6cm b: 12.3cm c: 3.0cm	手捏ね 外面指頭痕 黄褐色 黑色微細・白针 やや粉質 良好	*
24	かわらけ	a: 13.6cm b: 12.0cm c: 3.0cm	手捏ね 外面指頭痕 白色 黑色微細・白针 やや粉質 良好	*
25	かわらけ	a: 13.1cm b: 12.5cm c: 3.2cm	手捏ね 外面指頭痕 桜色 黑色微細・白针 やや粉質 良好	*
26	かわらけ	a: 13.9cm b: 11.0cm c: 3.4cm	手捏ね 外面指頭痕 白色 黑色微細・白针 土丹粒 やや粗土 良好	*
27	かわらけ	a: 13.9cm b: 12.8cm c: 2.6cm	手捏ね 外面指頭痕 黄褐色 黑色微細・白针 良好	*
28	かわらけ	a: 13.8cm b: 12.4cm c: 3.3cm	手捏ね 外面指頭痕 黄褐色 黑色微細・白针 やや粗土 粉質 良好	*
29	かわらけ	a: 14.7cm b: 13.5cm c: 3.5cm	手捏ね 外面指頭痕 桜色 黑色微細・白针 やや粉質 土土 良好	*
30	穿孔かわらけ	底部片	ロクロ 外底素切痕 中央に横5mm穿孔 桜色 黑色微細・赤色粒・白针・土丹粒 良好	*
31	白かわらけ	a: 13.4cm	手捏ね 外面指頭痕 白桃色 精良粉質 良好	*
32	青磁 瓶	体部下半片	内面刻花 文 黄灰褐色透明 厚手追削 黄灰色 微細 精良堅致	龍泉窯系Ⅰ～2期
33-1	かわらけ	a: 7.5cm b: 5.7cm c: 1.1cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	上層 2
2	かわらけ	a: 8.2cm b: 5.8cm c: 1.4cm	ロクロ 外底素切痕 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 やや不良	*
3	かわらけ	a: 9.5cm b: 7.2cm c: 1.4cm	手捏ね 外底指頭痕 桜色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	*
4	かわらけ	a: 10.7cm b: 8.3cm c: 1.9cm	手捏ね 外底指頭痕 桜色 黑色微細・赤色粒・白针 やや良土 良好	*
5	かわらけ	a: 12.8cm b: 8.7cm c: 3.5cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 やや不良	*
6	かわらけ	a: 13.0cm b: 8.7cm c: 3.2cm	ロクロ 外底素切痕 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针・土丹粒 やや不良	*
7	青磁 瓶	体部下半片	内面模様文 オリエ黄色透明 やや薄手の施釉 施入あり 微細含むが精良堅致	同安窯系
8	灰瓦	厚2.6cm	表面切削 鹿の脚 凸面切口字明き目蓋に移る 明灰褐色 粗粒化・赤色・小石粒 やや粗粘 良好	*
9	褐釉 瓷	瓶底小片	ロクロ 外面赤茶褐色 手の施釉 明褐褐色 精良細面 微細・石粒少量 精良	上層 3
10	褐釉 瓷	瓶底小片	ロクロ 亜赤茶褐色 手の施釉 明褐褐色 精良細面 微細・石粒少量 精良	*
11	常滑 指跡	b: 13.5cm	施墨技法 直身高台 内底内凹部下端へ張り立 内底堅致 灰色・静柱・石粒 粗土 良好	常滑器口跡 I期
12	かわらけ	a: 7.7cm b: 5.2cm c: 1.8cm	ロクロ 外底素切痕 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 やや不良	土壤 7
13	かわらけ	a: 8.2cm b: 6.2cm c: 1.9cm	ロクロ 外底素切痕 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 やや不良	*
14	かわらけ	a: 8.8cm b: 6.4cm c: 1.4cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	上層 9
15	かわらけ	a: 7.9cm b: 5.9cm c: 1.7cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针・土丹粒 良好	*
16	かわらけ	a: 8.1cm b: 6.0cm c: 1.5cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・白针・土丹粒 良好	*
17	かわらけ	a: 12.9cm b: 8.5cm c: 3.1cm	ロクロ 外底素切痕 桜色 黑色微細・赤色粒・白针・小石粒 良好	*
18	かわらけ	a: 8.3cm b: 6.0cm c: 1.7cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・白针・小石粒 良好	土壤 10
19	かわらけ	a: 8.3cm b: 5.4cm c: 1.7cm	ロクロ 外底素切痕 桜色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	土壤 12
20	かわらけ	a: 8.8cm b: 6.5cm c: 1.6cm	ロクロ 外底素切痕 黄褐色 黑色微細・白针 やや不良	*
21	かわらけ	a: 9.4cm b: 7.1cm c: 1.7cm	ロクロ 外底素切痕 桜色 黑色微細・白针 良好	*
22	かわらけ	a: 8.0cm b: 7.2cm c: 1.3cm	手捏ね 外底指頭痕 桜色 黑色微細・白针 土土 良好	*
23	かわらけ	a: 9.3cm b: 7.7cm c: 1.4cm	手捏ね 外底指頭痕 明黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 やや不良	*
24	かわらけ	a: 9.3cm b: 8.3cm c: 1.9cm	手捏ね 外底指頭痕 桜色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	*
25	かわらけ	a: 12.8cm b: 11.2cm c: 3.4cm	手捏ね 外底指頭痕 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	*
26	かわらけ	a: 13.7cm b: 10.7cm c: 3.4cm	手捏ね 外底指頭痕 黄褐色 黑色微細・赤色粒・白针 良好	*
27	青磁 瓶	b: 6.8cm	内面刻花 文面四高台 鹿の脚平滑用薄手施釉 蛙足～高台内露胎 从色・墨渦含む 精良堅致	龍泉窯系Ⅰ～2期
28	青磁 瓶	体部下半片	瓶底では内面無文 灰褐色透明 手の施釉 在い貫入り 灰白色 墨渦含む 精良堅致	龍泉窯系
29	青磁 瓶	口縁端片	内面刻花 文 黄灰褐色透明 手の施釉 軸綫内小気泡 白底色 墨渦含む 精良堅致	龍泉窯系Ⅰ～2期

表7 出土遺物観察表(7)

団番号	種類	法量 (a:口徑 b:底径 c:高さ)	成形・特徴 (文様・釉薬・胎土・素地・焼成など)	備考 (造構・その他)
ZI-30	雷渦 壺	肩部片	輪積法: 楢子・花葉文組合せた町口 直自然降灰 黒褐色 脱胎 石灰 土質 良好	土塚12
31	瓦鍋	a: 17.2cm b: 13.0cm c: 9.5cm	口縁部屈曲 底部中央や突出 鋼壁厚 2.45mm 成型組付着で厚さ不明	*
32	かわらけ	a: 9.2cm b: 7.5cm c: 14cm	手捏ね 外底指痕板 横色、黒色微移・白針 良好	土塹13
33	経緯 瓢	口縁部片	口縁部直線状に肥厚 釉薬再火で黒化し剥落多し、麗灰色 石粒多く纏土 種質良好	*
34	かわらけ	a: 9.0cm b: 6.9cm c: 19cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好	土塹14
35	かわらけ	a: 9.4cm b: 8.8cm c: 17cm	手捏ね 外底指痕板 横色、黒色微移・白針 良好	土塹15
36	かわらけ	a: 9.0cm b: 7.8cm c: 16cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好	*
37	かわらけ	a: 9.6cm b: 7.8cm c: 17cm	ロクロ 外底系切痕 黄褐色 黑色微移・白針 良好	土塹16
38	かわらけ	a: 9.9cm b: 8.4cm c: 19cm	ロクロ 外底系切痕 黄褐色 黑色微移・白針 良好	*
39	かわらけ	a: 8.5cm b: 7.1cm c: 15cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	*
40	かわらけ	a: 13.8cm b: 10.5cm c: 30cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好	*
41	かわらけ	a: 8.0cm b: 7.3cm c: 16cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	土塹17
42	白磁 四耳壺	肩部片	耳部斜付 明灰色不透明 灰白色 微妙含むが精良堅致	*
43	かわらけ	a: 8.5cm b: 7.9cm c: 17cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	土塹18
44	かわらけ	a: 13.4cm b: 11.8cm c: 35cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	*
45	かわらけ	a: 13.8cm b: 11.7cm c: 32cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好	*
46	青磁 瓢	口縁・体部片	内面ハラ模様刻花文 灰オリーブ色不透明 微妙含むが精良堅致	龍泉窯青磁碗1-2類
ZI-1	かわらけ	a: 8.3cm b: 7.1cm c: 19cm	ロクロ 外底系切痕 横色 黑色微移・赤色斑・白針 砂質 良好	溝2
2	かわらけ	a: 8.8cm b: 6.5cm c: 19cm	ロクロ 外底系切痕 斜底足2カ所の穿孔 横色 黑色微移・赤色斑・白針 砂質 良好	*
3	かわらけ	a: 8.8cm b: 5.8cm c: 20cm	ロクロ 外底系切痕 黄褐色 黑色微移・白針 砂質 やや不良	*
4	かわらけ	a: 8.9cm b: 6.8cm c: 20cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好	*
5	かわらけ	a: 8.7cm b: 7.0cm c: 17cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好	*
6	かわらけ	a: 9.1cm b: 7.6cm c: 21cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 やや不良	*
7	かわらけ	a: 9.1cm b: 7.6cm c: 20cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	*
8	かわらけ	a: 9.3cm b: 7.8cm c: 25cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・赤色斑・白針 良好	*
9	かわらけ	a: 9.6cm b: 7.1cm c: 22cm	手捏ね 外底指痕板 明黄色 黑色微移・白針 やや砂質 やや不良	*
10	かわらけ	a: 9.1cm b: 7.6cm c: 18cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・赤色斑・白針 良好	*
11	かわらけ	a: 9.1cm b: 7.6cm c: 17cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 やや砂質 良好	*
12	かわらけ	a: 8.9cm b: 7.0cm c: 16cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好 付着焼明度	*
13	かわらけ	a: 9.0cm b: 8.5cm c: 17cm	手捏ね 外底指痕板 黄褐色 黑色微移・白針 良好 塗付着焼明度	*
14	かわらけ	a: 14.2cm b: 12.2cm c: 3.7cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	*
15	かわらけ	a: 14.5cm b: 13.0cm c: 3.4cm	手捏ね 外底指痕板 内底面穿孔 明黄色 黑色微移・白針 やや不良	*
16	かわらけ	a: 14.5cm b: 12.9cm c: 3.4cm	手捏ね 外底指痕板 口縁部1カ所打丸き 横色 黑色微移・白針 良好	*
17	かわらけ	a: 14.6cm b: 13.2cm c: 3.0cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 やや砂質 良好	*
18	青磁 瓢	a: 15.8cm	内面豊巻き刻花文 灰褐色透明や厚手施釉 灰白色 微妙含むが精良	龍泉窯青磁碗1-2類
19	青磁 瓢	口縁・体部片	内面口縁下一条沈縫 豊巻き刻花文 灰褐色透明や厚手施釉 灰白色 微妙含むが精良	龍泉窯青磁碗1-2類
20	深美 瓢	口縁部片	輪積法: 肩部灰緑色の灰釉崩毛疊り 灰褐色 微移・良好 砂質	*
21	深美 瓢	口縁部片	輪積法: 灰褐色を薄く刷毛疊り 灰褐色 微移・良好 砂質	*
22	石製品 瓢	残長7.8cm 残幅4.6cm 高さ13cm	上面削による再加工痕あり 灰褐色 硬岩質	*
23	石製品 瓢	残長6.0cm 残幅4.2cm 高さ14cm	上下面が砥面 物理傷跡 京都鳴滝産系のもの	*
ZI-1	かわらけ	a: 7.5cm b: 6.2cm c: 13cm	ロクロ 外底系切痕 黄褐色 黑色微移・白針 良好	P 1
2	青磁 瓢	底部片	内面備文 灰オリーブ不透明 外底以外厚手施釉 灰白色 微移 精良 砂質	P 6
3	かわらけ	a: 8.8cm b: 6.7cm c: 13cm	手捏ね 外底指痕板 横色 黑色微移・白針 良好	P 10

表8 出土遺物観察表(8)

図-番号	種類 法量(a:口徑 b:底径 c:器高)	形態・特徴(文様・軸巻・施土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
24-4	青白磁 瓶 口縁部小片	口縁部反気味。本青色透明。微砂含むが精良堅緻。	P10
5	a:13.3cm b:12.1cm c:2.7cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黒色微砂、白針 良好	P11
6	a:13.6cm b:12.3cm c:2.9cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黒色微砂、白針 良好	*
7	褐釉 壺 制部片	外面茶褐色の薄い施釉。闊灰色 施砂、白色石粒 細質堅緻	*
8	a:8.1cm b:7.3cm c:1.5cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 良好	P15
9	a:9.5cm b:7.3cm c:1.5cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黑色微砂、白針 良好	*
10	白磁 瓶 口縁部片	雄反側 淡黃色不透明 手捏痕痕 白色 微砂 粗且堅緻	*
11	a:7.9cm b:5.7cm c:1.6cm	ロクロ 外底系切痕 黄褐色 黑色微砂、白針 良好 口縁部内側付着 磨削痕	P17
12	a:12.0cm b:7.4cm c:2.7cm	ロクロ 外底系切痕 橙色 黑色微砂、白針 施質 良好	*
13	a:14.3cm b:12.4cm c:3.3cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黑色微砂、白針 良好	P18
14	a:13.3cm b:11.7cm c:2.9cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黑色微砂、白針 不全不良	P20
15	a:14.9cm b:11.8cm c:3.7cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黑色微砂、白針 良好	*
16	a:9.1cm b:6.2cm c:1.6cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 良好	P21
17	a:14.3cm b:12.8cm c:3.7cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 良好	*
18	a:9.9cm b:7.9cm c:1.7cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白针 やや粉質 良好	P25
19	常滑 瓢 a:21.8cm	口縁部外反 瓢部上方に引上げ 風呂底色 石粒・砂粒多い 良好	*
20	a:9.7cm b:8.0cm c:1.3cm	ロクロ 外底系切痕 桃色 黑色微砂、白針・赤色粒 施質上 良好 内外面窯付着 磨削痕	P26
21	a:9.2cm b:7.4cm c:1.7cm	ロクロ 外底系切痕 明黄褐色 黑色微砂、白針・赤色粒 やや良好	P30
22	a:9.3cm b:8.3cm c:1.5cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 良好	P32
23	a:9.5cm b:7.6cm c:1.6cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 良好	*
24	a:8.5cm b:7.4cm c:1.6cm	ロクロ 外底系切痕 黄褐色 黑色微砂、白針・赤色粒 やや良好	P33
25	b:13.0cm b:11.8cm c:3.3cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 不全粉質 良好	P34
26	男瓦(丸瓦)	筒瓦型 15.3cm 厚さ:2.6cm 古瀬戸印字「百面瓦目」 蔵合せ粗面織目取り 黄色 微砂・土粒 良好 木屋下蔵瓦と同類	P36
27	a:9.4cm b:7.1cm c:1.9cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針・赤色粒 やや粗上 良好	P38
28	a:9.6cm b:7.9cm c:2.0cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 やや粉質 良好	P39
29	a:13.3cm b:11.3cm c:3.6cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 良好	*
25-1	a:8.9cm b:7.6cm c:1.6cm	ロクロ 外底系切痕 体部中位後 橙色 黑色微砂・赤色粒、白針 良好	P45
2	a:13.6cm b:9.4cm c:3.0cm	ロクロ 外底系切痕 橙色 黑色微砂・赤色粒、白針 良好	*
3	a:7.9cm b:7.0cm c:1.8cm	手捏ね 外底指痕痕 橙色 黑色微砂、白針 不全粉質 良好	*
4	a:9.8cm b:8.6cm c:2.2cm	手捏ね 外底指痕痕 口縁部外反気味 明黄褐色 黑色微砂、白針 やや不良	*
5	a:9.7cm b:8.4cm c:2.7cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黑色微砂、白針 やや粉質 良好	*
6	a:13.7cm b:12.3cm c:3.1cm	手捏ね 外底指痕痕 黄褐色 黑色微砂・赤色粒、白針 やや粗土 良好	*
7	白磁 壺 制部片	ロクロ 緑味明灰色透明 内外面薄い施釉 つやあり 微砂含むが精良堅緻	*
8	縫板1	長:33.8cm 幅:14.8cm 厚:3.9cm 角柱の両頭を鋸切削 木目に沿い斜削りした縫板 納材	*
9	縫板2	長:31.8cm 幅:14.8cm 厚:3.9cm 角柱の両頭を鋸切削 木目に沿い斜削りした縫板 下面に縫板2上端の切削面接合 納材	*
10	縫板3	長:40.2cm 幅:27.7cm 厚:1.4cm 板材の両頭は駆カナ加工後両端を鋸切削 中央部幅は5cm程の広板 板材の裏面か 納材	*
11	縫板4	長:38.1cm 幅:27.7cm 厚:1.8cm 板材の下面は駆カナ加工後両端を鋸切削 片側面右端に二重「ハ」字状の焼跡あり 納材	*
12	縫板5	長:41.7cm 幅:27.5cm 厚:1.7cm 板材の上面は木目が顯著 下面は駆カナ加工後両端を鋸切削 右上付近に孔打が残る 納材	*
26-1	a:7.7cm b:5.9cm c:1.5cm	ロクロ 外底系切痕 体部下位後 黄褐色 黑色微砂、白針 やや粉質 良好 第2面下～第3面	
2	a:7.8cm b:6.5cm c:1.6cm	ロクロ 外底系切痕 体部上位後 明黄褐色 黑色微砂、白針 良好 外面標付着 磨削痕	*
3	a:8.0cm b:6.9cm c:1.8cm	ロクロ 外底系切痕 体部中位後 黄褐色 黑色微砂・赤色粒 やや粗土 良好	*
4	a:8.3cm b:6.8cm c:1.4cm	ロクロ 外底系切痕 橙色 黑色微砂・赤色粒、白針 やや粗土 良好	*
5	a:8.4cm b:6.3cm c:1.8cm	ロクロ 外底系切痕 体部中位後 黄褐色 黑色微砂・赤色粒、白針 やや粗土 良好	*

表9 出土遺物観察表(9)

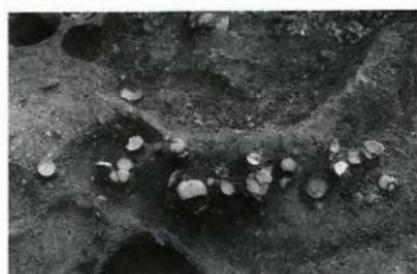
図・番号	種類	法量(a:口徑 b:底径 c:器高)	成形・特徴(文様・施薬・胎土・素地・焼成など)	備考(遺構・その他)
26-6	かわらけ	a:9.0cm b:6.1cm c:2.0cm	ロクロ 外底赤切痕 棕色 黒色微細・白封 やや砂質 真好	第2面下～第3面
7	かわらけ	a:12.0cm b:7.1cm c:3.4cm	ロクロ 外底赤切痕 棕色 黒色微細・赤褐色・白封 良好	*
8	かわらけ	a:8.0cm b:7.8cm c:1.5cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・赤褐色・白封 やや粗土 真好	*
9	かわらけ	a:8.6cm b:7.0cm c:1.7cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・赤褐色・白封 やや砂質 真好	*
10	かわらけ	a:8.6cm b:7.9cm c:1.9cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・赤褐色・白封 やや粗土 真好	*
11	かわらけ	a:8.6cm b:7.0cm c:1.8cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・赤褐色・白封 やや砂質 真好	*
12	かわらけ	a:8.8cm b:7.8cm c:2.0cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・白封 やや粉質 真好	*
13	かわらけ	a:9.5cm b:7.8cm c:2.1cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・白封 真土 真好	*
14	かわらけ	a:9.0cm b:7.8cm c:2.5cm	手捏ね 外面指痕痕 瓶底を焼成時に穿孔 棕色 黑色微細・白封 真土 真好	*
15	かわらけ	a:9.0cm b:7.8cm c:2.1cm	手捏ね 外面指痕痕 黄褐色 黑色微細・白封 やや粉質 真好	*
16	かわらけ	a:9.3cm b:8.4cm c:1.9cm	手捏ね 外面指痕痕 黄褐色 黑色微細・白封 真土 真好	*
17	かわらけ	a:10.3cm b:8.4cm c:2.5cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・白封 やや砂質 真好	*
18	白かわらけ	a:6.4cm b:6.5cm c:1.0cm	手捏ね 内外折れ小道 外面指痕痕 白桃色 精良粉質 真好	*
19	かわらけ	a:13.0cm b:12.0cm c:3.5cm	手捏ね 外面指痕痕 明黄褐色 黑色微細・赤褐色・白封 やや粉質 不良	*
20	かわらけ	a:13.2cm b:12.2cm c:3.4cm	手捏ね 外面指痕痕 棕色 黑色微細・白封 真土 真好	*
21	かわらけ	a:13.2cm b:12.2cm c:2.9cm	手捏ね 外面指痕痕 黄褐色 黑色微細・白封 やや粉質 真好	*
22	かわらけ	a:13.8cm b:11.7cm c:3.1cm	手捏ね 外面指痕痕 黄褐色 黑色微細・白封 真土 真好	*
23	吉備 瓢	b:5.7cm	内面刻花文 斜面四角の高台削出し 底緑色透明 手の施釉 微砂含むが精良堅緻	龍泉窯系鏡I-2類
24	吉備 瓢	全体下平片	内面刻花文 灰綠色透明 厚手の施釉 微砂含むが精良堅緻	龍泉窯系鏡I-2類
25	吉備 瓢	b:5.7cm	内面刻花文 斜面四角の高台削出し 底緑色透明 厚手の施釉 微砂含むが精良堅緻	龍泉窯系鏡I-2類
26	白磁 合子蓋	蓋の面部片	外面風紋の型押しし施釉 底白色半透明 薄手の施釉 つやあり 精良堅緻	*
27	白磁 水滴	小型水滴の面部片	上・下面部を削りの外型作り 小手取付 外面進掌清文 灰白色半透明 白色 精良堅緻	*
28	白磁 小豆か	脚部小片	外型作り 外面下部込込みの施釉 底白色半透明 斧手の追跡 内外面下部底 底白色 精良堅緻	*
29	白磁 小豆	a:7.0cm	口端外反気味 底白色半透明 薄手の施釉 白色 精良堅緻	*
30	青白磁 瓢	底部～体部小片	内面刻花文 本青色透明 つやあり 信付～高台内露底 白色 精良堅緻	*
31	青白合子蓋	a:6.4cm c:1.5cm	外面進掌清文の型抜し施釉 本青色透明 薄手の施釉 つやあり 白色 精良堅緻	*
32	楕円 瓢	脚部小片	外面部褐色 薄手の施釉 底色 施釉・石粉 脚部に熱土焼り跡あり 精良堅緻	*
33	楕円 瓢	b:8.4cm	見込みにヘラ削き跡を留め底部絞り 热土焼り跡毛焼きり 明青褐色 施釉・白色粒 精良堅緻	*
34	楕円 瓢	肩部～脚部片 最大径19.6cm	輪轉技法 底緑色灰釉 肩部に厚手施釉 脚部に施釉 底白地 微妙・白色粒 精良堅緻	*
35	楕円折縁罐	底部片	底部へラ削り 底緑色灰釉を刷毛焼り 明青褐色 施釉・白色粒 精良堅緻	*
36	常滑 瓢	口縁～頭部片	輪轉技法 口縁～頭部自然縮の隣面 底褐色 砂粒・石粒 硬質	常滑編年5型式
37	常滑 瓢	底部～体部片	輪轉技法 脚付高台 内面摩耗 灰色 施釉・石粒多い粗土 硬質	常滑片口縁I類
38	深美 瓢	口縁部小片	輪轉技法 口縁部側く斧刃 口縁～頭部に灰黒色の青い施釉 底色 施釉・白色粒 硬質	*
39	深美 瓢	口縁～体部片	外方へ押す片口 口縁部薄い自然縮 灰黒色の薄い施釉 底色 施釉・白色粒 硬質	*
40	北部系山茶碗	a:12.5cm	ロクロ 薄い塑形 口縁部自然縮 白色 微妙 精良土	*
41	瓦器 瓢	a:9.8cm b:6.0cm c:3.1cm	外表面へ押す輪花状 外面中腹～底面に指擦ナカ前見凹・内側に端文 底面灰褐色 灰色 微妙 粘質	京都植葉系
42	瓦器質	a:9.8cm b:4.8cm c:3.2cm	ロクロ 外底赤切痕 棕色 微妙・白色粒 精良土・内外側焼付着	*
43	灰瓦(平瓦)	厚さ2.1cm	表面端面平行の未切痕 凸面周目印 底色 微妙・雪舟 真土 やや粉質 水屋寺創建瓦と同様	*
44	砥石	純長5.4cm 幅3.7cm 厚2.2cm以上	表面焼残する3面 桃味市規格灰泥別 二次焼成受けた 天草産か	*
45	鉄釘	純長11.6cm 幅4~9mm 厚3~8mm	断面長方形の和釘 先端部決失	*



▲ a. I区第1面全景（東から）



▲ b. II区第1面全景（東から）



▲ c. 土壌11（かわらけ溜り、西から）



▲ d. 土壌5 埋め戻し状況（南から）



▲ e. 土壌5 完掘状況（南から）



▲ f. 土壌10 半裁状況（北から）



▲ g. 土壌10 完掘状況（北から）

図版 2



▲ a. I区第2面全景（東から）



▲ b. I区第2面上検出土丹範囲（東から）



▲ c. II区第2面全景（西から）



▲ a. 第2面 土壌1（北から）



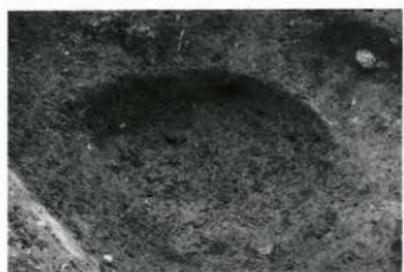
▲ b. 土壌3（北から）



▲ c. 土壌2 埋め戻し状況（南から）



▲ d. 土壌2 完掘状況（南から）



▲ e. 土壌4（北東から）



▲ f. 土壌10（東から）



▲ g. 溝1（南から）



▲ h. 井戸1（西から）

図版 4

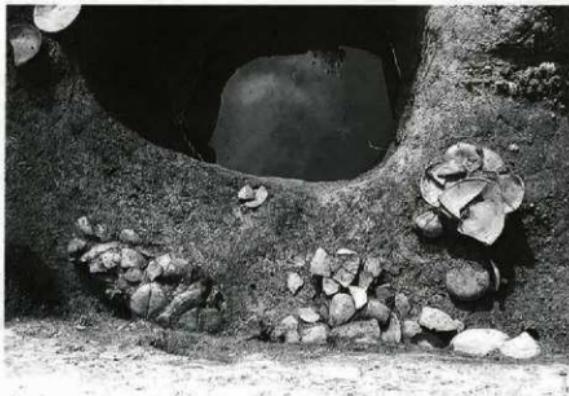


◀ a. I区第3面全景
(東から)

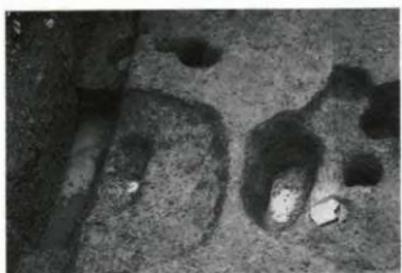
▲ 溝2肩



b. II区第3面全景▶
(西から)



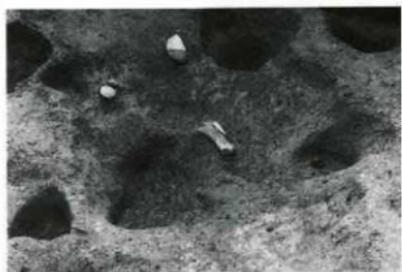
◀ c. かわらけ溜り1
(北から)



▲ a. 第3面 土壌2（東から）



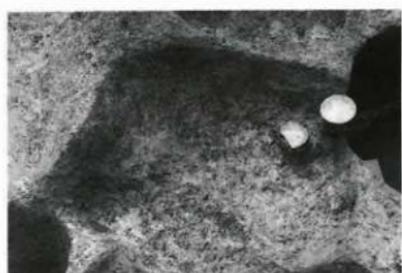
▲ b. 土壌4～9・P15～17（東から）



▲ c. 土壌12・13（東から）



▲ d. 土壌12 鉄鍋出土状況（東から）



▲ e. 土壌18（北から）



▲ f. P45（東から）



▲ g. 溝1（東から）



▲ h. 溝2 東端土層堆積

図版 6



◀ a. 調査区東壁土層堆積



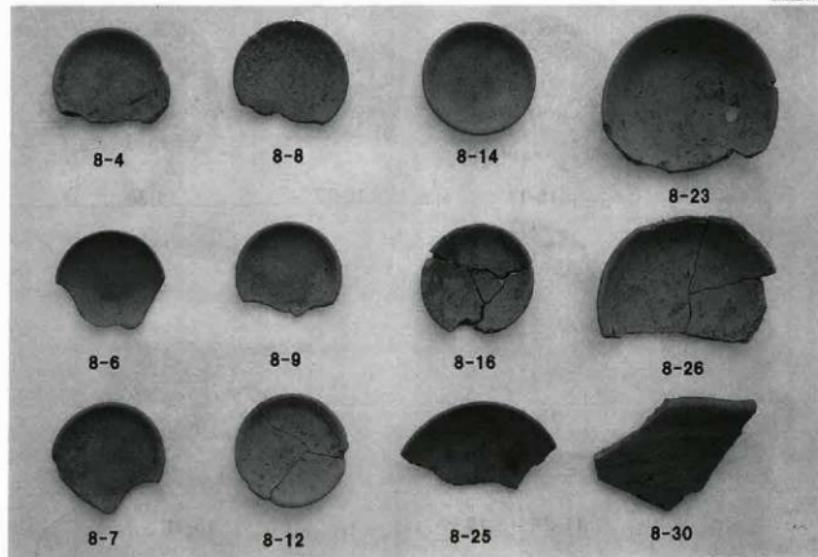
▶ b. 調査区西壁土層堆積



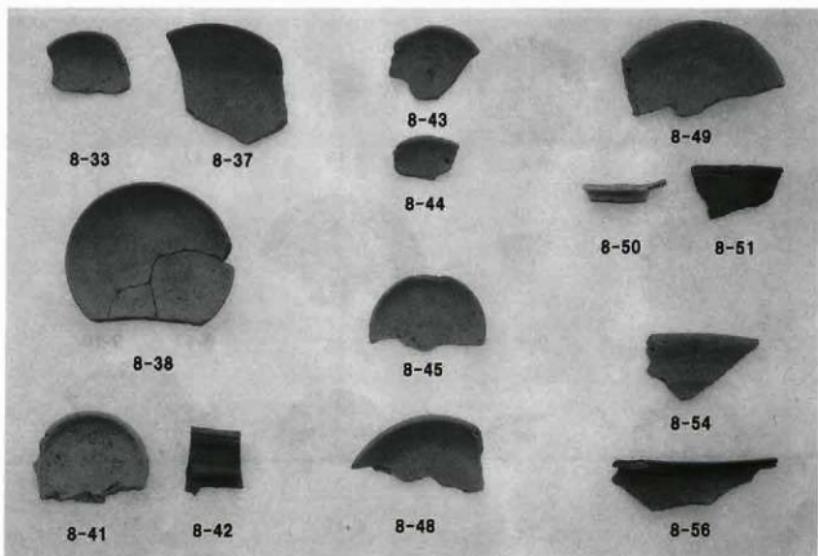
◀ c. 調査区南壁土層堆積（I区）



▶ d. 調査区南壁土層堆積（II区）

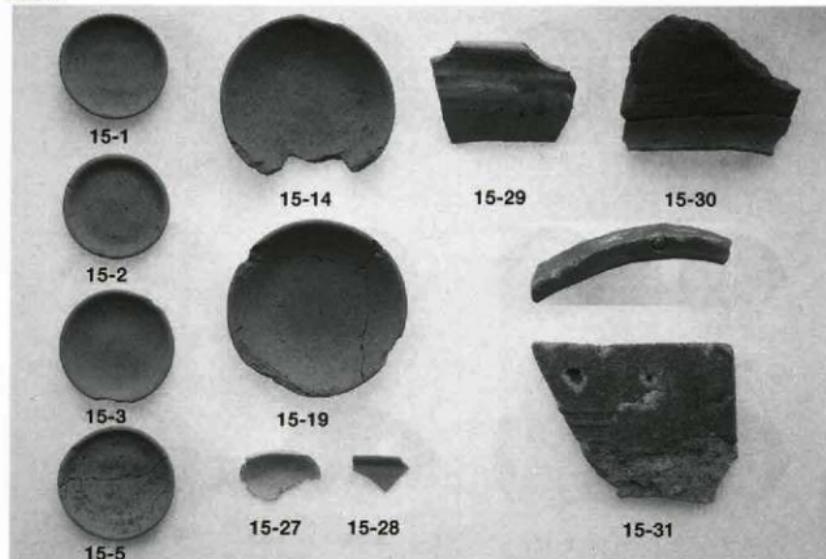


▲ a. 第1面 土壌11 (からわけ溜り)

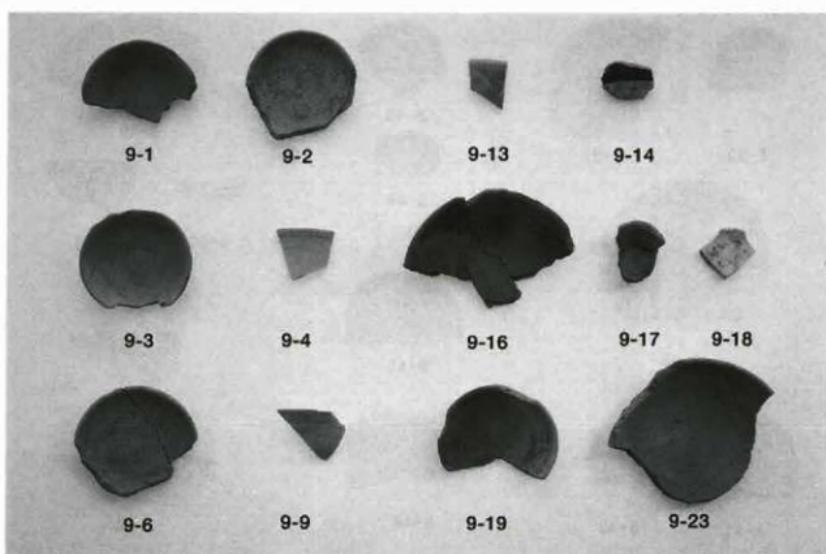


▲ b. 第1面 土壌2・4・5~7・9・10

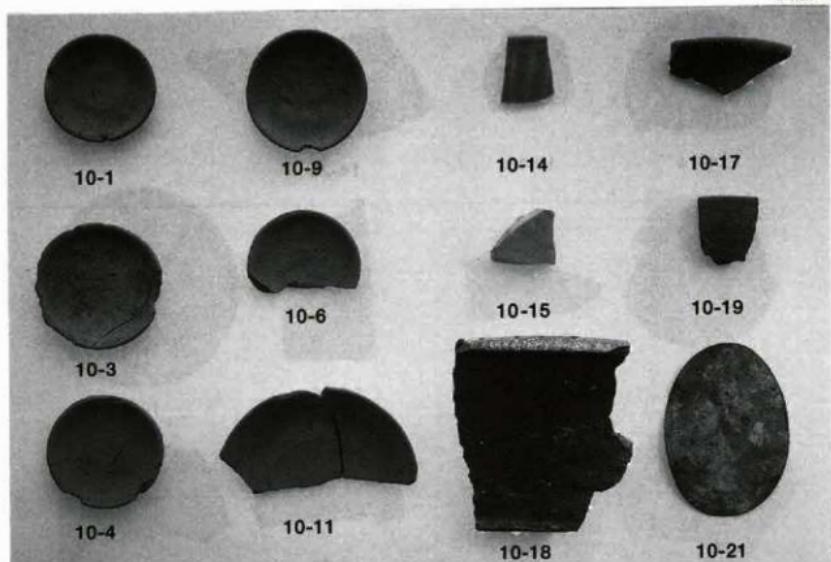
図版 8



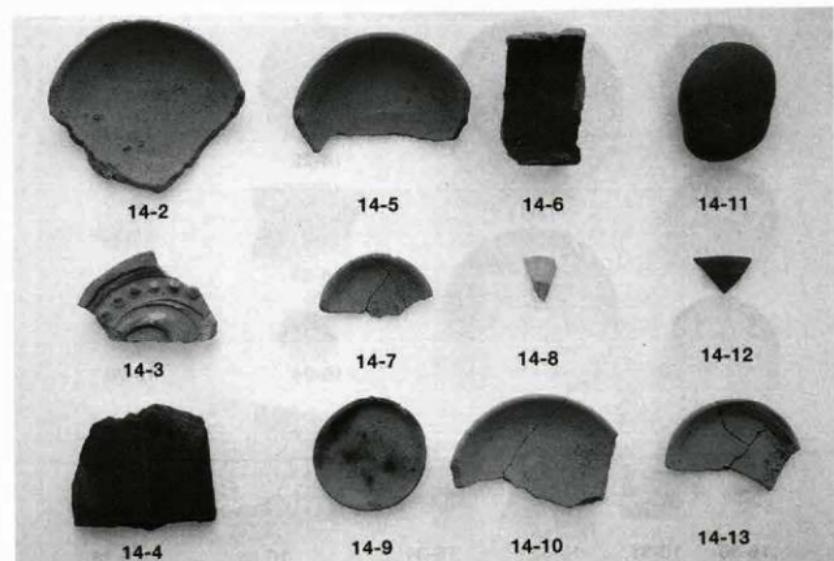
▲ a. 第2面 溝1



▲ b. 第1面 柱穴1・2・5・8・17・20・21

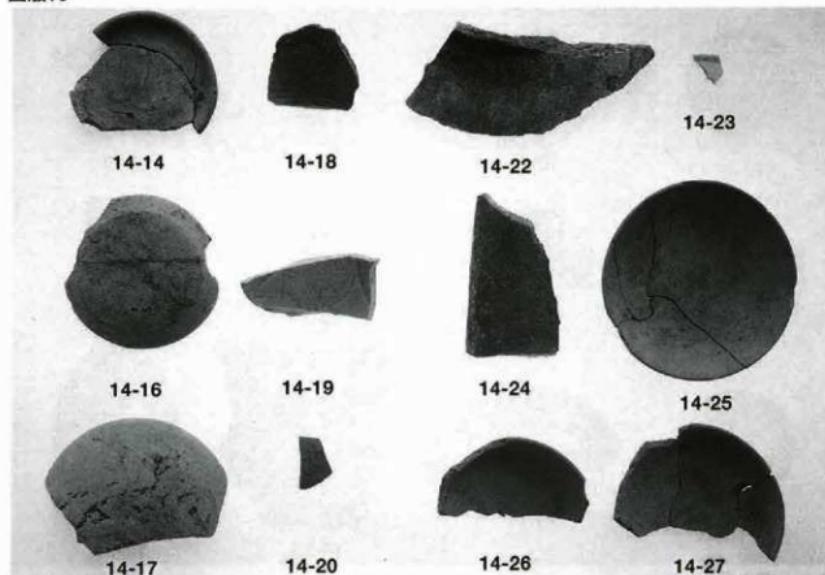


▲ a. 第1面上

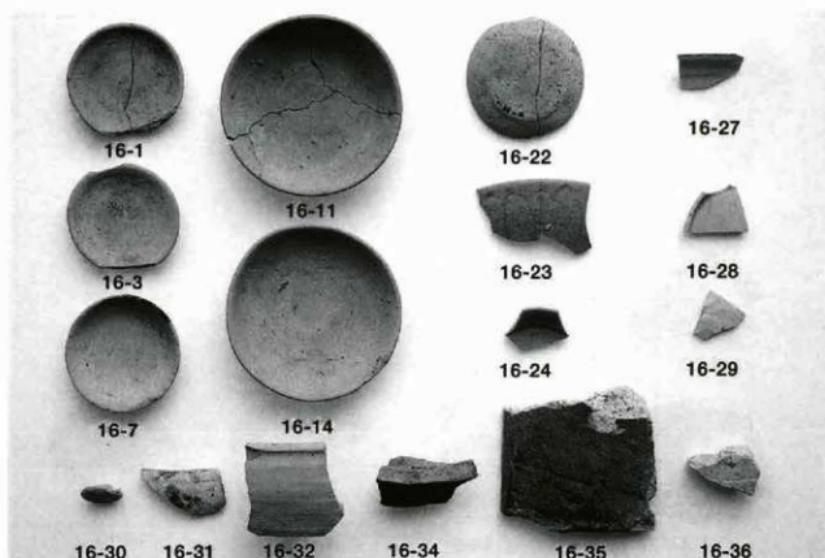


▲ b. 第2面 土壌 2~5・7~9

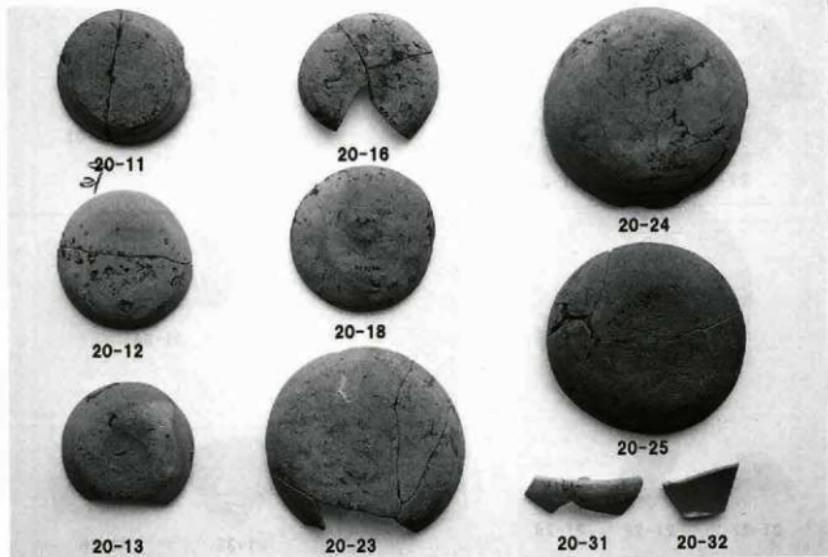
図版10



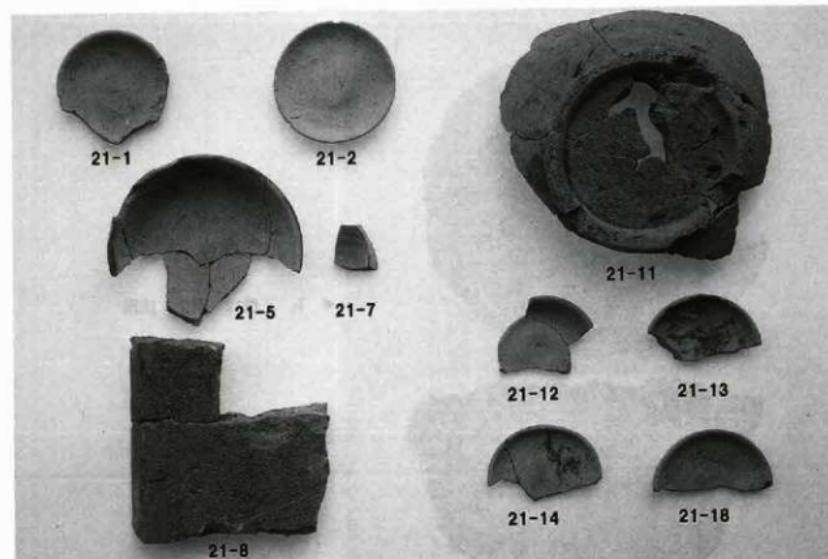
▲ a. 第2面 土壌10~12・井戸1・柱穴3・9



▲ b. 第1面下~第2面

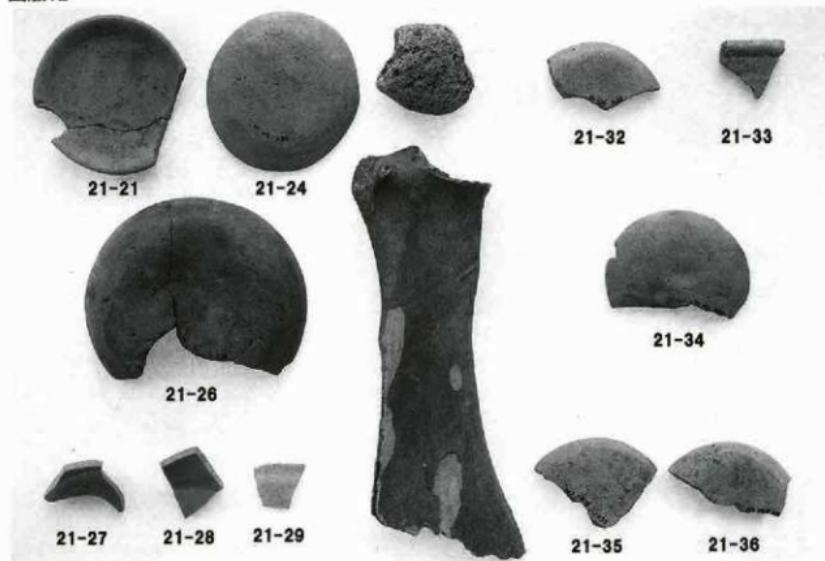


▲ a. 第3面 からわけ濁り1



▲ b. 第3面 土壌2・4・7・9・10

圖版12

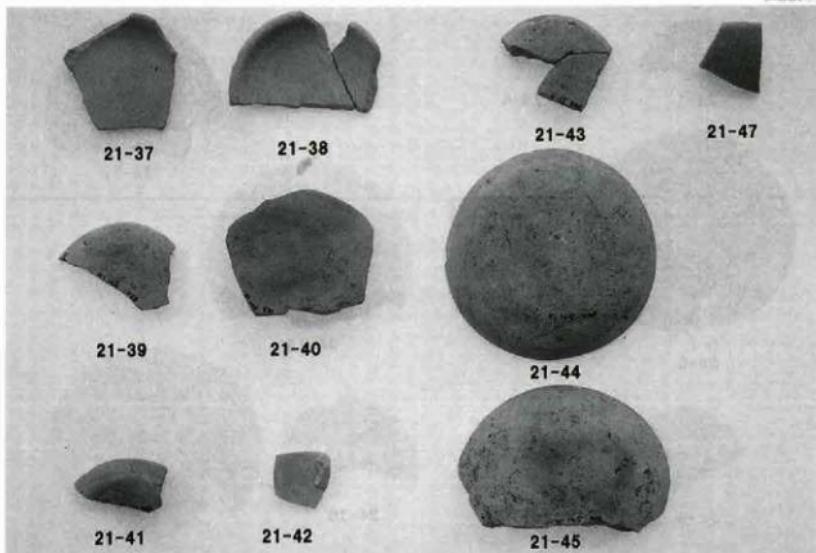


▲ a. 第3面 土壤12~15

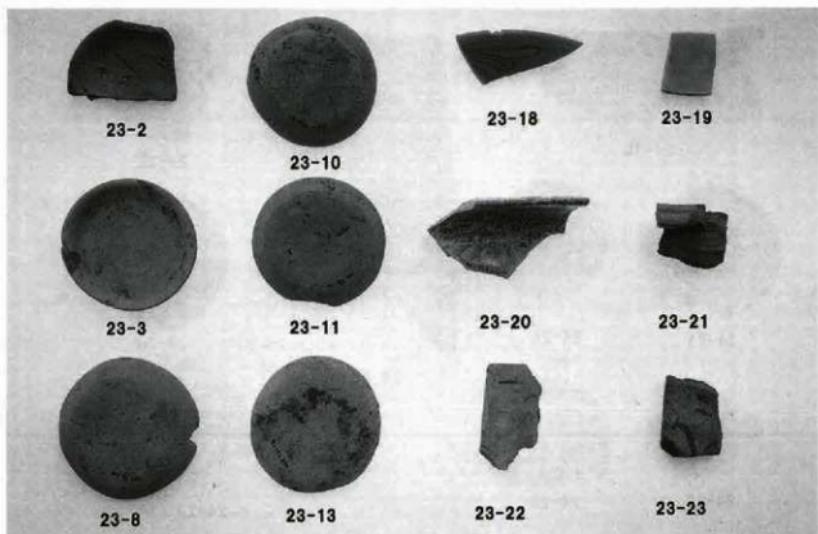


◀ b. 土壤12 出土 鐵鍋



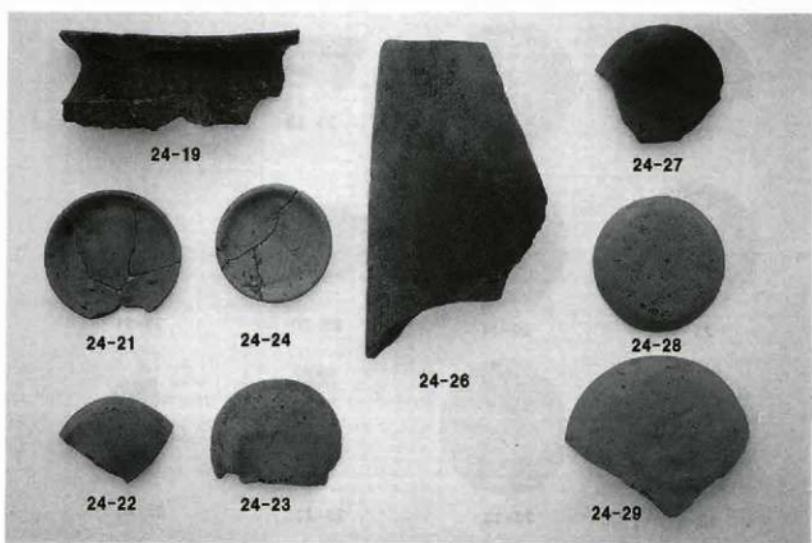
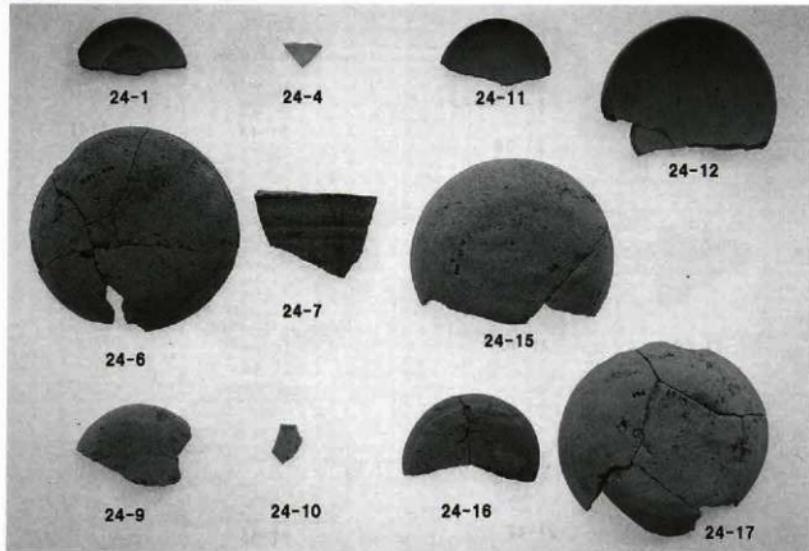


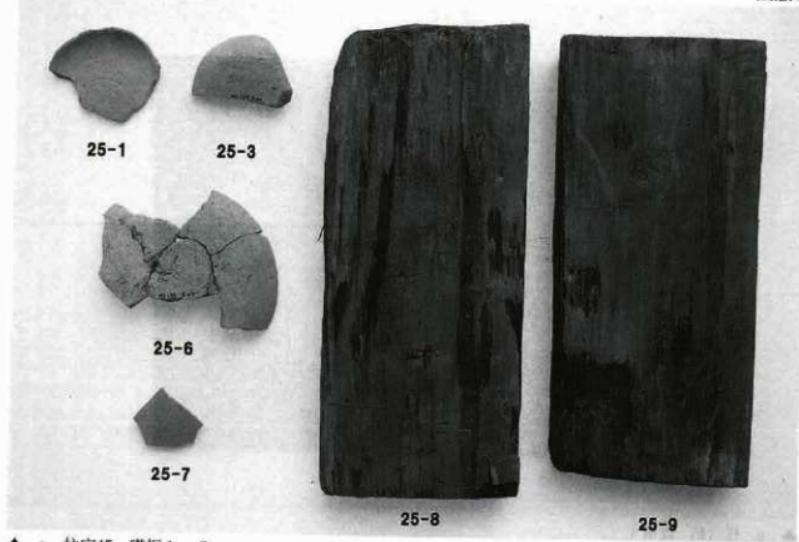
▲ a. 第3面 土壌16~18



▲ b. 第3面 溝2

図版14





▲ a. 柱穴45 碕板1・2



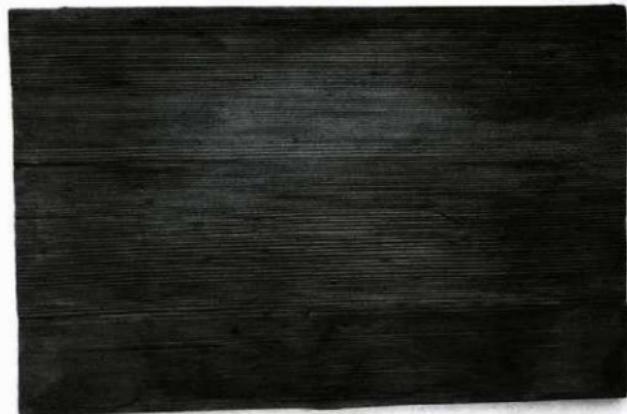
25-10

▲ b. 柱穴45 碕板3



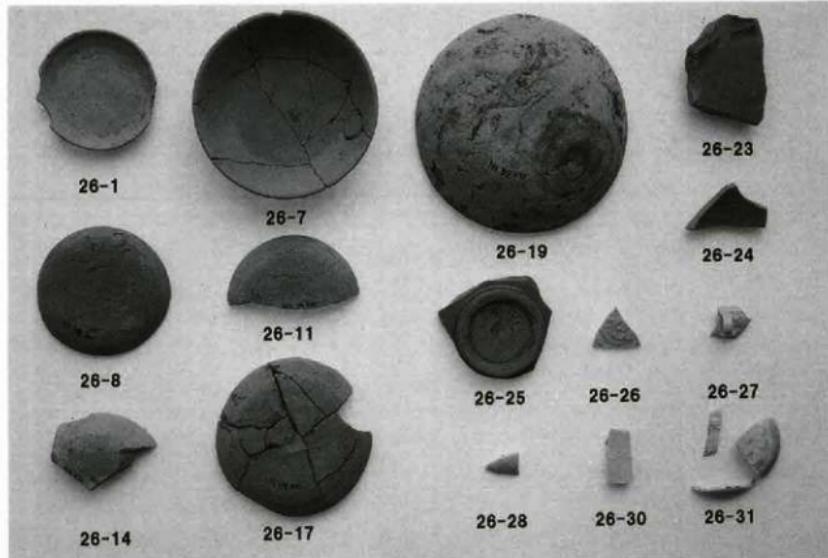
25-11

▲ a. 柱穴45 磁板4

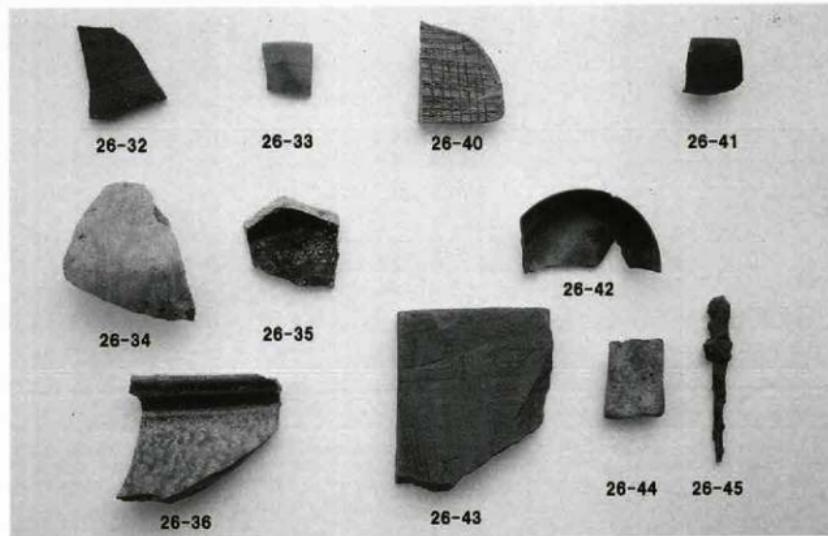


25-12

▲ b. 柱穴45 磁板5



a. 第2面下～第3面
▼



坂ノ下遺跡 (No.217)

坂ノ下53番3の一部地点

例　　言

1. 本報文は、坂ノ下遺跡(神奈川県遺跡台帳No217)内、鎌倉市坂ノ下53番3の一部地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、個人専用住宅の建設に先立ち平成15年1月10日から2月13日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は54m²。
3. 調査体制は以下の通り。
調査員 汐見一夫 伊丹まさか 小泉衣理
調査協力者 倉澤六郎 清水光一 柴崎栄輔
4. 本報文は、遺構に係わる整理作業を主に汐見が、遺物に係わる整理作業を小泉衣理が行なった。原稿執筆は第2章・第3章の遺構を汐見が、第1章と第3章の遺物を小泉が、第4章は両名討議の上汐見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を汐見と伊丹が、遺物を小泉が撮影した。
5. 発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。
北鎌倉市シルバー人材センター 鎌倉考古学研究所 東国歴史考古学研究所
6. 本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本文目次

第1章 環境と立地	333
第2章 調査の概要	334
第3章 遺構と遺物	334
第4章 調査成果	338

挿図・表目次

図1 坂ノ下遺跡の範囲と調査地点	333
図2 国土座標とグリッド配置	335
図3 遺構全測図と堆積土層	335
図4 出土遺物	337
表1 出土遺物数	338
表2 出土遺物計測表	339

写真図版目次

図版1 1. 西半遺構面(南から)	341
2. 東半遺構面(南から)	341
3. 図4-30出土状況(南から)	341
4. 東半宝永層確認状況(南から)	341
5. 東半調査区南壁(北西から)	341
6. 東半北側調査区東壁(南西から)	341
図版2 出土遺物	342

第1章 環境と立地

本調査地点は鎌倉市坂ノ下8-13に所在する。北に極楽寺坂切通に通じる極楽寺の谷から坂ノ下へ越える坂道と南に海岸線を走る国道134号線に挟まれて位置し、遺跡台帳では坂ノ下遺跡(No.217)内に在る。坂ノ下遺跡は、極楽寺坂切通の東、靈山山の東麓、由比ヶ浜に沿って北東は長谷、西は極楽寺に接する。坂ノ下の地名は極楽寺坂の下に位置するので、その名が起きたとされている。「忍性菩薩行状略領」には、永仁六年(1298)に「建立坂下馬病屋」とあり、元徳元年(1329)作という「極楽寺縁起」にも「講毎置追於前浜坂ノ下村之前也而飼養老之病之牛馬」と記されていることから、この頃にはすでに坂ノ下の地名があり、極楽寺坂切通が開かれ、西から海岸沿いに鎌倉に入る際の重要な入り口の一部を担っていたと考えられる。現在の切通道は近世以降に開闢された道路で道幅も広く勾配も緩やかであるが、本来の切通は現在の道路の北側にあり、高さも現在の切通の南側にある成就院の門前を通過するほどで幅も非常にせまかったと云われている。

近世に於いて坂ノ下は幕府直轄領であった。江戸初期の『十二所村等鎌倉中幕領寺社領相給村総高帳』



図1 坂ノ下遺跡の範囲と調査地点

(県史6)には「一永七貫三百文 坂下舟役」と記すが、正保国絵図には村名がない。寛文九年(1669)の『鎌倉中田畠勘定小割帳』(鎌倉近世史料)にはほかの諸村と並んで「坂下」がみえ、この頃には独立の村として扱われていたことがわかる。「風土記稿」に掲げば畠のみで、海辺には漁獵を業とする者が多いという。万治二年(1659)の『金兼蔵』には「坂下 山海村里之商賈、成市地也日極樂寺市、以有易無皆利奔、山王海産市声喧、若教孟母居斯處、樵叟漁翁豈耐煩」と当時の坂ノ下村の繁栄ぶりを述べている。

坂ノ下遺跡内では本地点が初めての調査となる。平成11年度以降の本調査地点を除く3地点で行われた確認調査では、上層に堆積する近現代の擾乱層が、地点に依り深くまで及んでいる。中世期の生活址が確認できたのは地点Aで、地表から約50cm前後から170cm前後の中世基盤層までに2~3時期の遺構面が確認され、かわらけ・常滑窯・瀬戸窯など14世紀代を中心とした遺物が出土している。他の地点では遺物が殆ど出土せず、坂ノ下遺跡の考古学的な様相は未だ明らかではない。

第2章 調査の概要

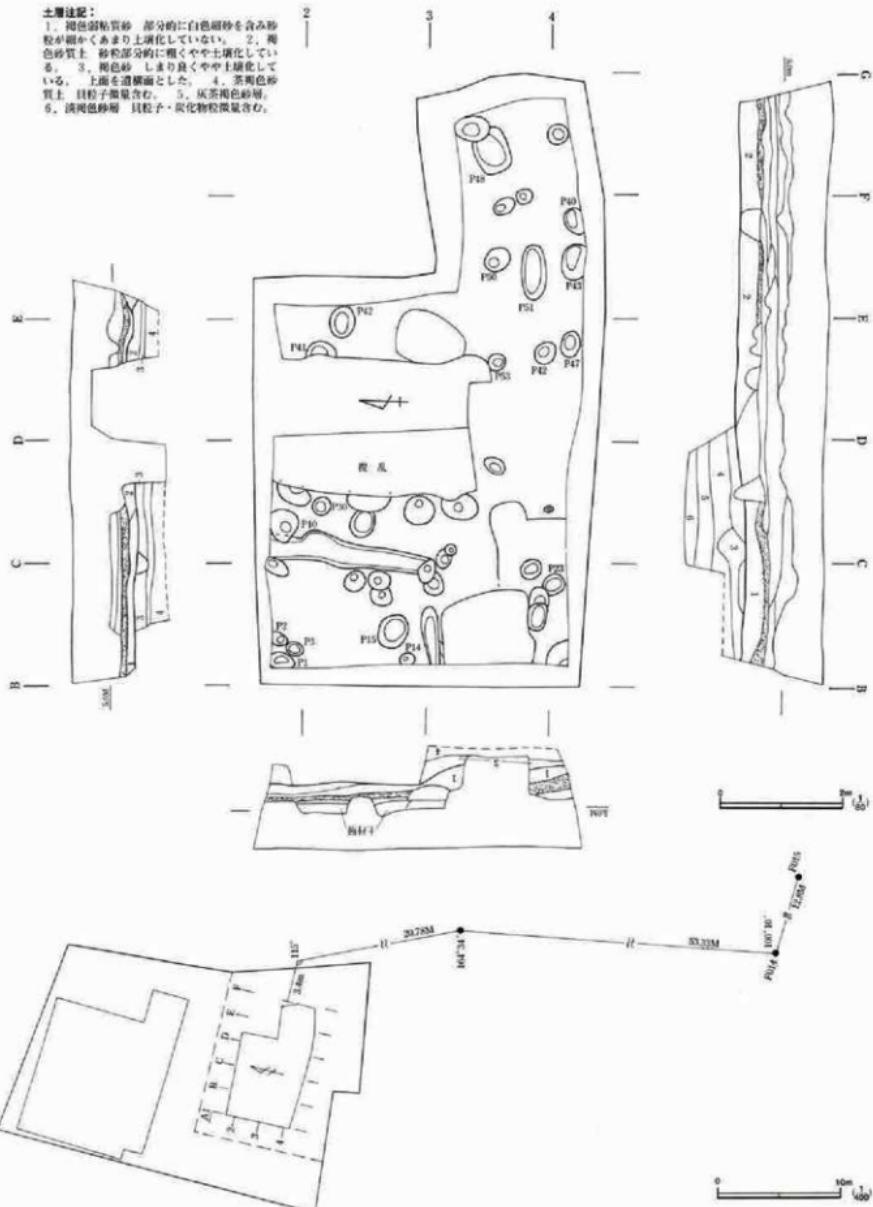
本調査は個人専用住宅の建設の先立ち、確認調査と諸協議を経て実施された。調査区は、残土を敷地内で処理する必要から調査区を東西に二分し、南側既存ブロック塀から安全な後退距離を確保し設定された。調査にあたり調査区の範囲と形状に合わせて任意に方眼グリッドを設定し、北東隅を起点として東西方向にアルファベットを、南北方向に算用数字を付した。グリッド軸は磁北に対し2°西に振れている。国土座標との関係は付近の4級基準点F104(X:-76 958.112 Y:-26 871.075)とF015(X:-76 954.691 Y:-26 858.742)から番号不明の4級基準点Pを経由し、調査グリッドG-3までの距離と角度は図2に示した。確認調査の結果から、現況地表下約50cmのかわらけが出土した土層まで表土掘削を行い調査を開始した。調査区を二分した境のDライン付近には、調査規定深度の150cm以上に及ぶ深い擾乱があり、掘り上げる残土量を考慮し西半の調査では掘り遣して調査区外と見なした。東半を規定深度まで調査し、部分的に下層の堆積土と出土遺物を観察する為にトレンチを設定し記録保存終了後に埋め戻した後、重機に依り調査区を移行し、西半の調査区を規定深度まで調査を行った。結果として遺構面は一時期を調査したものの、発見した遺構群は出土遺物の年代から殆どが近世以降と判断された。全ての記録保存終了後、関係各方面に調査終了の旨伝え、器材を撤収し調査終了とした。

第3章 遺構と遺物

表土掘削終了後、調査区西半で現地表下50cmの海拔5.0m前後を精査した所、近現代遺物が多量に出土した。表土掘削の際に掘り上げたDライン付近擾乱坑壁面から堆積土層を観察し、2~3ライン沿いに観察された強固な土丹地業面まで直ちに掘り下げた。海拔4.7~4.8mで再度精査を試みたが、土丹層中に中世の遺物は殆ど無く、土丹地業の範囲が跨て敷地内に在った建物の範囲と一致していた為、近代建物基礎と判断し更に20cm程掘り下げた所、宝永スコリアの堆積を発見した。層厚10~30cmで、上面は緩やかに波打ち整地されている様子はなく、東半では面的な括りがりは把え難く砂質土中に散財する程度で東端の北側壁には殆ど観察されない。この宝永スコリア層は本地点が更地の状態で降り積ったものではなく、土砂の移動に伴い堆積したものと思われる。出土遺物を層位毎に分ける為土層の異なる範囲

土壤注記：

1. 棕褐色粘質砂、部分的に白色細砂を含み砂粒が細かくあまり土壤化していない。
2. 浅色砂質土、砂粒部分的に粗くや土壤化している。
3. 棕色砂、しらべ良くや土壤化している。上面を道耕面とした。
4. 茶褐色砂質土、目粉子微量含む。
5. 从茶褐色砂層。
6. 淡褐色砂層、貝殻少、炭化物微量含む。



を全て掘り上げて遺構番号を付し、覆土や出土遺物を記録して、下層へと調査を進めた。遺構番号は本報文でもそのまま使用している。現地表下1.1m前後で、やや土壤化した褐色砂(図3-3層)が海拔4.3~4.7mで調査区全体に拡がり、地業・整地された様子もないが遺構の如く土層が異なる範囲もあり、全体精査を試み遺構と思しき堆積土は全て掘り上げた。東半の調査ではこの3層上面が規定深度まで達している。

図3は遺構確認面で掘り上げたものを全て図示したが、近代以降の遺物を含む遺構や宝永火山灰が覆土中に堆積しているものは、上層からの掘り込みと判断し遺構番号と個別の説明は割愛している。

調査区西半のPit.1~3・10-14-15-23-30は、覆土は茶褐色砂質土で貝粒子・土丹粒を含む。遺物は貝片以外は何も出土していない。Pit.2・3・10-23の覆土中位~上位には白色砂が薄く堆積する。Pit.10-15は径50cm内外の不整円形で深さ20cm前後、他は径15~30cm内外の不整円形で深さ10~20cm前後。

調査区東半のPit.40~43・47-50-52-53は、覆土は茶褐色乃至暗茶褐色砂質土で貝粒子・土丹粒又は粘土粒を含む。径30~50cm内外の不整円形で深さ20~40cm前後。Pit.48・51は、覆土は黒褐色砂質土で土丹粒・焼土・炭を含む。Pit.48は70×50cmの不整方形で深さ40cm程、Pit.51は長さ85cmで最大幅40cmの長楕円形で深さは40cm程。遺物は図4に示したものに貝以外では、Pit.41-44-47-52-53からはかわらけが出土しているが何れも小片で摩耗しているものが多い。これら遺構群の覆土や出土遺物に然したる特徴や規則的な配置も求め難い。中世期の遺物のみが出土した遺構も在ったが、東半の下層堆積土確認トレンチからは近世所産の遺物が出土しており、層位として掘り込み面3層より下位となる。

尚、図3では調査経緯に従って表土からの堆積土層を示したが、土層注記は宝永スコリア層以下に留めている。表1・2中の「上層」とはこの宝永スコリア層より上位の堆積土中から出土したものを、「採集」には確認調査時や表土掘削時等に出土した遺物を含めた。それ以外は基本的には出土した層位を図3の土層番号で記し、表1では図3の遺構群検出時又は遺構内出土遺物を「遺構面」として纏め、同様に東半調査区のトレンチ内出土遺物や、図3の遺構を掘り過ぎて出土したものは下層の項に纏めている。

出土遺物（図4）

本調査地点より出土した遺物は近世遺物を中心に870点を数えるが、その殆どが小破片であり、計測し得る遺物は41点と非常に少なかった。

1~4は小型糸切り底かわらけ。器壁は体部・底部ともに厚く、内湾気味に立ち上がり、体部中位から口唇部付近では外反傾向になる。1・2は強いナデ調整により底部脇が外側に突出する。4は灯明皿として使用。

5~26は土錘。総計62点出土した内21点を図示した。全て、丸棒にかわらけと同質の粘土を巻き付け、手で握る・ヘラで磨くなどして整形し、棒を抜き取った管状土錘である。形状・大きさ・孔径・胎土・調整などがそれぞれ異なる。概ね俵型で丸味を帯びているもの（9・12~15・18・20~23・26）、やや丸味を帯び長めのもの（7・8・11・16・19・24・25）、胎土精良で細長く調整が顕著なもの（5・6・10・17）の3種類に分けられる。

27は志戸呂錆軸灯明下皿。体部外面と内底面に使用による煤が付着。灯明皿として使用した後に体部に穴を開けている。17世紀後半の製品。28~29は瀬戸美濃錆軸摺鉢口縁部片。共に底裏は露胎。28は小片のため使用による摩減痕は確認できない。1610年以降の製品。29の条線は13本以上。使用による摩減痕はみられない。18世紀初頭の製品。30は瀬戸美濃菊皿。割れ口に煤が付着していることから一部を欠損したのちに灯明皿として使用していたと考えられる。内底面に残る重ね焼き痕と疊付は表面を擦つ

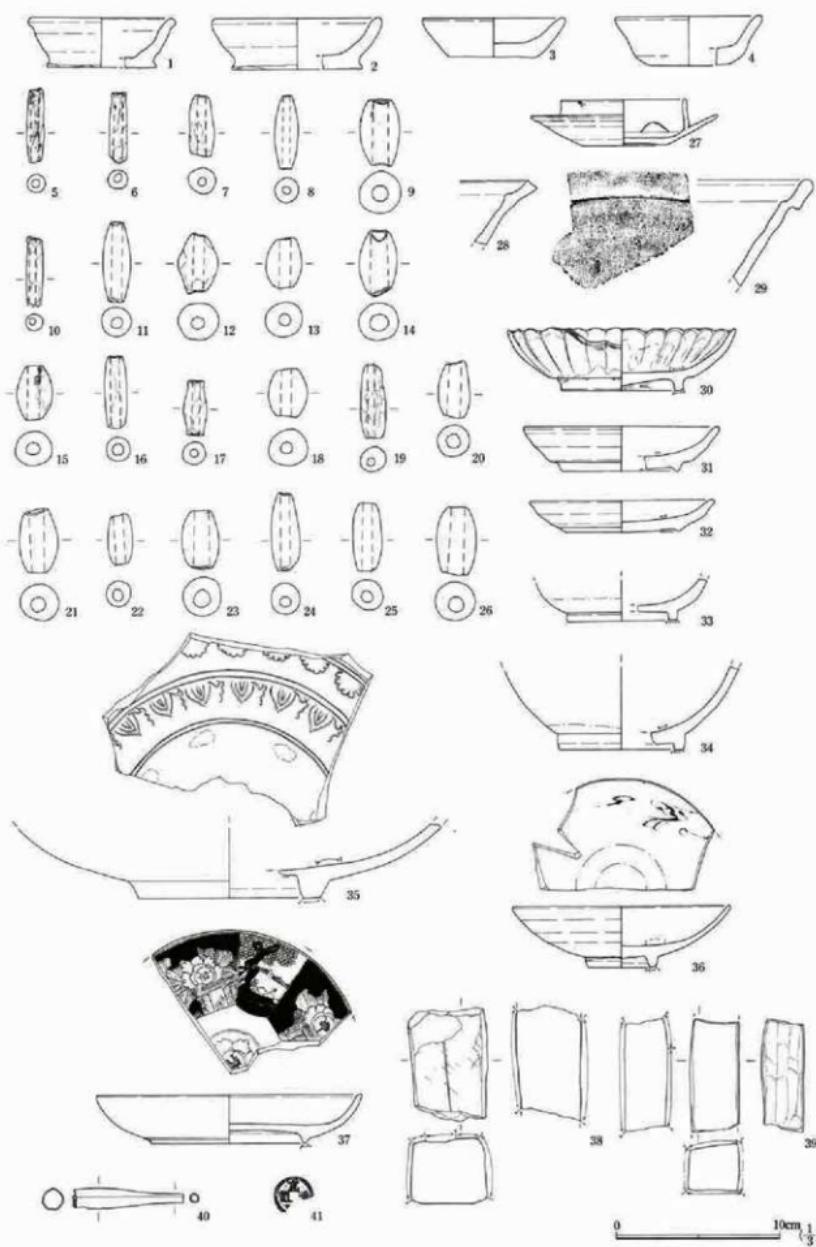


図4 出土遺物

て平らに調整し、口唇部先端は全体的に擦れている。17世紀初頭の製品。31・32は瀬戸美濃長石釉皿。共に外底面を除き乳白湯色の釉を厚く漬け掛け、内底面に残る重ね焼き痕は表面を擦って平らに調整している。17世紀後半の製品。33は瀬戸鉄釉鉢類の底部片。黒茶褐色の釉は内面～外面体部中位にかけてハケ塗り。疊付は擦って平らに調整している。18世紀代の製品。34は美濃片口鉢底部片。削りだし高台をのぞき、暗黄緑色の釉を漬け掛け。内底面に残る重ね焼き痕と疊付は表面を擦って平らに調整している。35は唐津鉄釉鉢底部片。内底面に残る重ね焼き痕は表面を擦って平らに調整し、スタンプ文が施される。17世紀後半の製品。36は肥前蛇ノ目釉剥ぎ染付皿。内底面には使用によるキズがみられる。内面に植物文または草花文が手描きされる。18世紀代の製品。37は19世紀前半の肥前染付皿。内面に牡丹と城郭山水図の文様が手描きされる。

38・39は石製品で砥石。38は流紋岩質凝灰岩製で天草産の中砥。砥面は3面、表面は刃物を縦ではなく両側面から中央に動かす妙な使い方をしている。裏面は砥石台に載せていたのであろう、石目が擦れている。39は流紋岩質凝灰岩製で上野肥沃産の中砥。砥面は表裏2面で、鎌研ぎに使用したのであろう、中央に稜がある。両側面は摩耗しているが生産地工具と思われる櫛刃壓痕が遺る。40・41は銅製品。40は真鍮性の煙管の吸口。土圧の為歪み、銷びて脆くなっている。41は銅錢で寛永通寶。

第4章 調査成果

本調査は坂ノ下遺跡内で最初の平面的な本調査ではあったが、中世の様相を少しでも採り得たか心許ない。本調査地点から最も近い由比ガ浜南遺跡内地点3では、海拔2.3mの砂層で中世遺物のみを伴う土坑や木材構造の遺存する井戸が発見され、土坑・井戸を覆う風成砂層中から多くの中世遺物が出土している。やや内陸になるが坂ノ下遺跡内確認調査地点Aでも、中世期の生活址が近世以降の遺物の混在無しに確認されている。本地点では調査深度の規制もあり、最深部で海拔3.5mまでの調査ではあったが、顯著な中世遺構面或は遺構を発見することはできなかった。これが調査深度が中世期まで達しなかったのか、近世以降の所作に因り中世期の堆積土が失われた事に起るのか、別の事由に依るのかは今後の確認調査を含めた細かな事例を待たねばならない。

本調査地点で出土した遺物は表1に示した様に870点を数えるが、半数以上が自然遺物である貝(240点)と骨(292点)である。これら以外の出土遺物は、小破片の糸切り底かわらけが136点、近世近代陶磁器類は106点、土製品64点を数えるが、大多数が小破片であり計測しえる遺物は非常に少なかった。遺物から観ると、近世を中心として15世紀後半～19世紀前半と年代幅広く出土しているが、遺構面の年代は4層中の出土遺物28・31から近世を遡るものではない。坂ノ下という地域を踏まえ出土遺物で注目

表1 出土遺物数

分類	かわらけ （廻り）	鉱石品	国内産諸窯・製品類			W	土 製 品		石製品	鉄製品	自 然 遺 物		計	%	
			窓口丸窓	常滑窓	肥前等他		土錐	その他			貝	骨			
採集	211(2)		11	2	13	1	13	1			4	13	290	379	45.0%
上層	3(1)	1	6	5	22		5	1			4	25		72	85%
遺構面(3層/3・4層)	72(15)	2	15	7	9	2	26		2	4	130	2	271		32.1%
下層	30(1)		9	3	1		18					60		121	14.4%
計	136(19)	3	41	17	45	3	62	2	2	12	238	292	843		
%	36.1(22.2)%	0.4%	4.9%	2.0%	5.2%	0.4%	7.4%	6.2%	0.2%	1.4%	27.0%	34.5%			100.0%

表2 出土遺物計測表

図4 No.	遺物名	種別	計測値		備考
			単位: cm	() = 拡元値 [] = 残存値	
1	4層 かわらけ・系	上器	口径 (8.8)	底径 (6.7)	器高 3.0 物は黒色微砂・雲母・白針を混じえる淡褐色弱質土 焼成良好
2	採集 かわらけ・系	上器	口径 (10.2)	底径 (8.0)	器高 3.1 物は黒色微砂・雲母・白針を混じる黑色弱質土 焼成良好
3	採集 かわらけ・系	上器	口径 (8.8)	底径 (5.4)	器高 2.4 物は黒色微砂・雲母・白針を混じる黑色弱質土 焼成良好
4	採集 かわらけ・系	上器	口径 (9.0)	底径 (5.2)	器高 3.0 物は黒色微砂・雲母・白針を混じる黑色弱質土 焼成良好 磁付着
5	5・6層 土製品 土師	全長	4.5	径 1.1	孔径 0.5 物は黒色微砂・雲母を混じえる暗褐色弱質土 磁が付着 両端面取り・孔内面には抜き取りの際の擦痕明瞭
6	5・6層 土製品 土師	全長	4.4	径 1.1~1.2	孔径 0.5 物は黒色微砂・雲母を混じる褐色弱質土 磁が付着 両端面取りヨリスラ一端にのみ剥離
7	5・6層 土製品 土師	全長	3.8	径 1.6~1.7	孔径 0.5 物は黒色微砂・雲母を混じる褐色弱質土 物は黒色を呈する 一端無調整 表面・部分的に剥離
8	4層 土製品 土師	全長	4.5	径 1.5	孔径 0.45~0.5 物は黒色微砂・雲母を混じる褐色弱質土 物は黒色無調整
9	4層 土製品 土師	全長	4.0	径 2.5~2.6	孔径 1.0 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 磁が付着 両端無調整 表面部分に剥離
10	3・4層 土製品 土師	全長	4.7	径 1.0	孔径 0.4 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
11	3・4層 土製品 土師	全長	4.9	径 1.8	孔径 0.65~0.7 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整 孔内面には抜き取りの際の擦痕明瞭
12	3・4層 土製品 土師	全長	3.6	径 2.3~2.5	孔径 0.75~0.8 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
13	3層 土製品 土師	全長	3.1	径 2.15~2.3	孔径 0.8~0.75 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
14	3層 土製品 土師	全長	4.0	径 2.3~2.4	孔径 1.0~1.2 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整 孔内面には抜き取りの際の擦痕明瞭
15	3層 土製品 土師	全長	3.0	径 2.1~2.3	孔径 0.7~0.85 物は黒色微砂・雲母を混じる褐色弱質土 磁が付着 両端面取り・穴内面には抜き取りの際の擦痕明瞭
16	3層 土製品 土師	全長	4.5	径 1.45	孔径 0.7 物は黒色微砂・雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
17	3層 土製品 土師	全長	3.4	径 1.4	孔径 0.5 物は黒色微砂・雲母・白針を混じる褐色弱質土 両端無調整
18	3層 土製品 土師	全長	3.4	径 2.2~2.4	孔径 0.7 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
19	Pit.50	全長	4.5	径 1.5~1.6	孔径 0.5~0.55 物は黒色微砂・雲母を混じる褐色弱質土 磁が付着 両端面取り・部分的に剥離
20	Pit.51	全長	3.5	径 1.9~2	孔径 0.9 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
21	Pit.51	全長	3.9	径 2.3~2.4	孔径 0.9 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整
22	Pit.51	全長	3.1	径 1.5~1.6	孔径 0.6~0.8 物は黒色微砂を混じる褐色弱質土 両端面取り
23	3・4層 土製品 土師	全長	3.5	径 2.3~2.4	孔径 1.0~1.1 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 磁が付着 両端無調整
24	上層 土製品 土師	全長	4.8	径 1.7~1.9	孔径 0.6~0.7 物は黒色微砂・雲母を混じる淡褐色弱質土 両端無調整 孔内面には抜き取りの際の擦痕明瞭
25	上層 土製品 土師	全長	4.2	径 1.8~1.9	孔径 0.7 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる淡茶色弱質土 両端面取り・表裏盛りの剥離
26	採集 土師	全長	4.2	径 2.4~2.5	孔径 0.9 物は黒色微砂を多く含み雲母を混じる褐色弱質土 両端無調整 孔内面には抜き取りの際の擦痕明瞭 直径 7.8cm 色は棕赤褐色弱質土 帯は茶色を呈する
27	上層 火打用下皿 瀬戸美濃 青釉滑鉢	口径	11.4	底径 5.0	器高 2.8 物は淡黄色弱質土 帯は暗茶色を呈する
28	4層 瀬戸美濃 青釉滑鉢	口径	—	底径 —	物は淡黄色弱質土 帯は暗茶色を呈する
29	3層 瀬戸美濃 青釉滑鉢	口径	—	底径 —	物は淡黄色弱質土 帯は暗茶色を呈する
30	1層 瀬戸美濃 青釉滑鉢	口径	14.0	底径 7.4	器高 3.9 物は黄味白色弱質土 帯は黄褐色のあと緑縞をかける
31	4層 瀬戸美濃 長石釉組 青釉滑鉢	口径	(12.0)	底径 7.2	器高 2.7 物は黄褐色弱質土 帯は黄味乳白色を呈する
32	上層 瀬戸美濃 長石釉組 青釉滑鉢	口径	11.2	底径 7.0	器高 2.0 物は黄褐色弱質土 帯は黄味乳白色を呈する
33	3層 越後外縁?	口径	—	底径 (6.8)	器高 — 物は明灰色弱質土 帯は墨茶色を呈する
34	採集 美濃 片口鉢	口径	—	底径 (7.6)	物は灰褐色弱質土 帯は暗茶色を呈する
35	3層 吉津 灰釉鉢	口径	—	底径 (11.2)	物は暗茶色弱質土 帯は茶~明茶色を呈する
36	上層 蛇ノ目巻き 肥前奈良	口径	(13.3)	底径 4.2	器高 3.8 素地は白色弱質土 奈良は淡蓝色を呈する
37	上層 奈良 白釉鉢	口径	(16.2)	底径 9.6	器高 3.0 素地は白色弱質土 奈良は蓝色を呈する
38	3層 天草産? 中低 石製品	長さ	[6.8]	幅 4.7	厚さ [4.0]
39	3層 上野作中低 石製品	長さ	[7.0]	幅 3.1	厚さ [2.6]
40	3層 運管の吸口 銅管	全长	6.8	径 1.3~0.6	材質は真鍮
41	採集 窓水通販	初期年1635年の「古窓水」	書		

きるのは、62点出土した土錐である。土錐等の漁撈具は由比ヶ浜地域や長谷小路周辺遺跡群などの海岸域でより多く出土する。土錐は沈子網に通して網に装着されるものであり、沈子網の太さによって孔径が決定される。その孔径もある程度のばらつきがあり、大きさや形状との相関関係で土錐の装着される沈子網とそれが取り付けられる網の相違を現しているという。野内(1995)は民俗資料の管状土錐の計測値から、中世鎌倉の光明寺裏遺跡出土の土錐を分類し、刺し網・織建て網、さらに袋網に用いられた形態があるとしている。本報文では出土した62点の土錐のうち、ほぼ完形22点のみを図示している。図示し得なかったものを含めて観察したが、網の想定をし得る程顯著には細かい出土傾向は把み難いが、光明寺裏遺跡とそう大差はない出土傾向と思われる。

【引用・参考文献】

- 白井水二 1976年『鎌倉事典』東京堂出版
高柳光寿 1959年『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
高柳光寿・貴達人他 1959年『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
貴達人・川副武風 1980年『鎌倉寺寺事典』有斐閣
『神奈川県の地名』『日本歴史地名体系14』1984年 平凡社
『鎌倉近世史料 長谷・坂ノ下編』1975年 鎌倉市教育委員会
宗泰秀明 2003年『中世の鎌倉と三浦半島周辺の漁撈具』『物質文化』
野内秀明 1995年『漁具について』『蓼原東遺跡 久里浜テクノパーク用地造成に伴う事前調査』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第5集 横須賀市教育委員会

【調査地点掲載報告書】

坂ノ下遺跡 (No.217)

1. 調査地点

長谷小路周辺遺跡 (No.236)

2. 長谷一丁目33番3地点 1997年調査 「長谷小路周辺遺跡(No.236) - 長谷一丁目33番3地点 -」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告(第2分冊)』1999年3月 鎌倉市教育委員会 / 「長谷小路周辺遺跡13 長谷1-33-3 地点発掘調査報告書』 1998年8月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会

由比ガ浜南遺跡 (No.315)

3. 長谷二丁目85番1地点 2002~03年調査 『かながわ考古学財団調査報告164 由比ガ浜南遺跡 都市計画道路長谷常磐線街路整備事業に伴う発掘調査』 2004年3月 財団法人 かながわ考古学財団

長谷觀音堂周辺遺跡 (No.296)

4. 長谷三丁目65番1地点 1984年調査 『海光山惠照院長谷寺 観音堂新築に際する埋蔵文化財の調査』 1985年3月 長谷寺 観音堂改修工事出土文化財調査団
5. 長谷三丁目41番イ地点 1992年調査 『長谷觀音堂周辺遺跡(No.296) - 長谷三丁目41番イ地点 -』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第2分冊)』1994年3月 鎌倉市教育委員会
6. 長谷三丁目97番4地点 1993年調査 『長谷觀音堂周辺遺跡 - 長谷三丁目97番4地点 -』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第2分冊)』1995年3月 鎌倉市教育委員会
7. 長谷三丁目81番(1次・2次)1995年調査 未報告

西方寺跡 (No.219)

8. 楠葉寺二丁目18番外地點 1998年調査 『西方寺跡(No.219) - 鎌倉市楠葉寺二丁目18番外 -』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』2000年3月 鎌倉市教育委員会

五合樹遺跡 (No.292)

9. 御成町18番10地点 2002年調査 『五合樹遺跡(仏法寺跡)発掘調査報告書』 2003年3月 鎌倉市教育委員会

楠葉寺中心伽藍跡 (No.296)

10. 楠葉寺二丁目10番5地点・三丁目2番3地点 1977-79年調査 『楠葉寺境内遺跡』 1980年3月 楠葉寺旧境内道路発掘調査団・鎌倉市教育委員会
11. 楠葉寺三丁目298番1地点 1992年調査 『東国歴史考古学研究所調査研究報告第25集 楠葉寺中心伽藍跡群遺跡 - 楠葉寺三丁目298番1外地点 -』 1999年9月 楠葉寺中心伽藍跡群遺跡発掘調査団・東国歴史考古学研究所

極楽寺旧境内遺跡 (No.296)

12. 楠葉寺三丁目298番1地点 1994年調査 『極楽寺旧境内遺跡 - 江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告書 -』 1998年6月 楠葉寺中心伽藍跡群発掘調査団



1. 西半遺構面（南から）



2. 東半遺構面（南から）



3. 図4-30出土状況（南から）



4. 東半宝永層確認状況（南から）

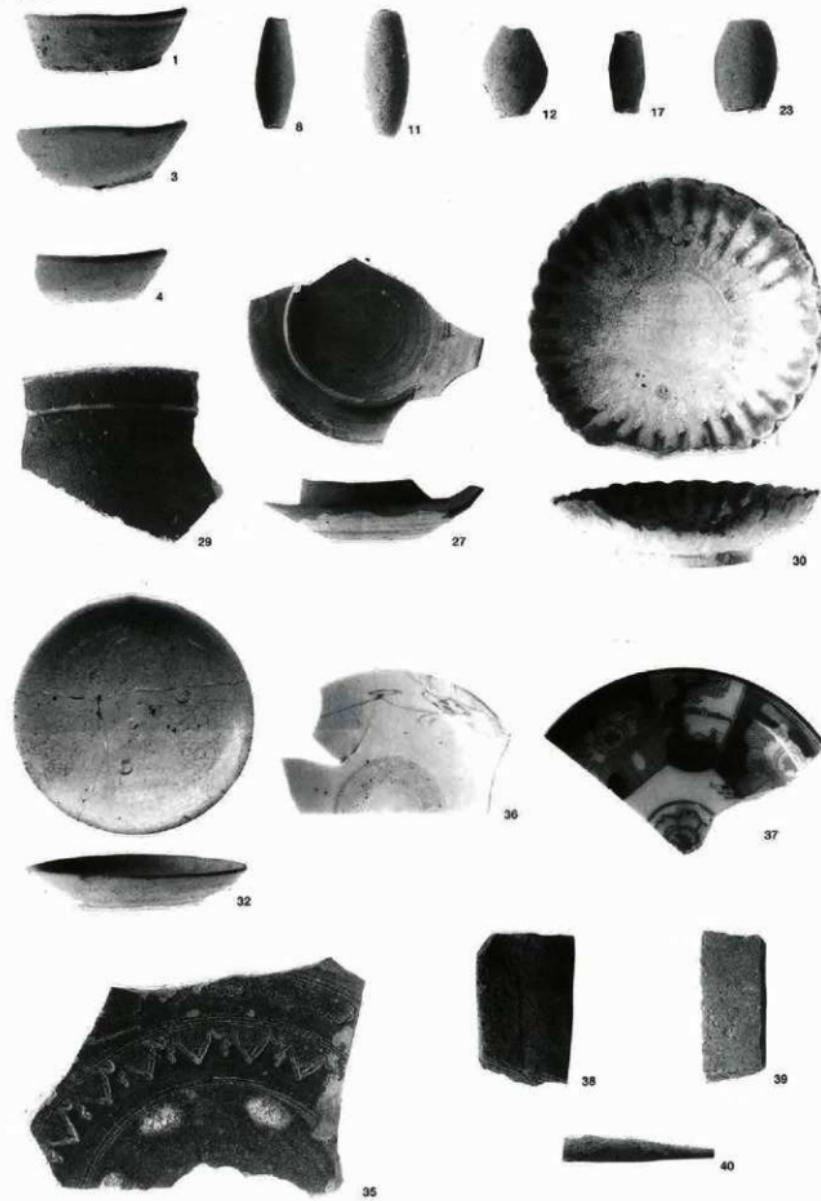


5. 東半調査区南壁（北西から）



6. 東半北側調査区東壁（南西から）

図版2



えんかくじもんぜんいせき
円覚寺門前遺跡 (No.287)

山ノ内字松岡1344番地点

例　　言

1. 本報は、円覚寺門前遺跡(No287)内に所在する鎌倉市山ノ内字松岡1344地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、平成15年6月13日～同年7月18日にかけて実施された。調査面積は37.80m²である。ただし、ほぼ半分の20m²は最上層造構面までの調査にとどめた。
3. 現地での調査体制は、以下の通りである。

担当者：宗基秀明(立教大学講師)

調査員：伊丹まどか(鎌倉考古学研究所員)、宗基富貴子(東国歴史考古学研究所主任研究員)、
　　鎌治屋勝二

調査補助員：松原康子、鈴木弘太(鶴見大学院生)、沖元道(明治大学生)、吉田智哉(大正大学生)

調査作業員：渡辺輝彦・山本記康・中路正明(以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター)

協力機関：社団法人鎌倉市シルバー人材センター、株式会社京藤建設

その他：鶴見大学文化財学科1年生実習

4. 造構図面合成・トレース、遺物実測・トレース、出土遺物写真撮影、版下作成、本文執筆の調査結果整理作業および報告書作成は、以下の人員で行った(現地での造構写真撮影は伊丹まどかが行った)。

主任：宗基秀明

調査員：宗基富貴子

5. 本文中に掲げた挿図は、基本的に造構を1/60、出土遺物を1/3で示した。これ以外の挿図においても、各挿図には縮尺率を示した。
6. 出土遺物のうち、木偶については加納克己氏(人形芸能史研究所)より多大のご教示と資料を賜った。なお、本報告書中の第三章第7節に加納氏による木偶についての考察を載せて掲載した。
7. ここに掲げた挿図、写真を含む発掘調査に関する出土品等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	347
第二章 調査の概要	350
第1節 調査の経緯	350
第2節 測量基準点の設置	351
第3節 堆積土層と発見された生活面	352
第4節 調査の成果	353
第三章 発見された遺構と遺物	355
第1節 第6面	355
第2節 第5面	355
第3節 第4面	357
第4節 第3面	360
第5節 第2面	365
第6節 第1面	370
第7節 第1面出土の操り人形「山猫」木偶について	393
第四章 まとめ	398

挿図目次

図1 円覚寺境内絵図	347	図23 第2面下出土遺物	369
図2 十七世紀後半頃の下馬門と周辺	348	図24 調査区第1面全測図	371
図3 調査地点位置図	349	図25 第1面路盤中出土銭と水晶製小型五輪塔	372
図4 調査範囲と測量基準点設定図	351	図26 第1面路盤出土遺物（1）	373
図5 堆積土層確認トレンチと堆積層	352	図27 第1面路盤出土遺物（2）	374
図6 調査区全測図と堆積土層	353	図28 第1面溝1a出土遺物	377
図7 第5面全測図	355	図29 第1面溝7出土遺物	377
図8 第5面遺構出土遺物	356	図30 第1面溝1b出土遺物（1）	378
図9 第5面下出土遺物	356	図31 第1面溝1b出土遺物（2）	379
図10 第4面全測図	357	図32 第1面溝1b出土遺物（3）	380
図11 第4面遺構出土遺物	358	図33 第1面溝1c出土遺物（1）	382
図12 第4面下出土遺物	359	図34 第1面溝1c出土遺物（2）	383
図13 第3面全測図	360	図35 第1面溝1c出土遺物（3）	384
図14 第3面溝4出土遺物（1）	361	図36 第1面溝1c出土遺物（4）	385
図15 第3面溝4出土遺物（2）	362	図37 第1面溝8出土遺物	387
図16 第3面遺構出土遺物	363	図38 第1面溝2出土遺物	387
図17 第3面下出土遺物（1）	364	図39 第1面土壤1、ピット13出土遺物	387
図18 第3面下出土遺物（2）	365	図40 第1面直上出土遺物	388
図19 第2面全測図	366	図41 第1面下出土遺物	389
図20 第2面溝3出土遺物	367	図42 第1面上出土遺物（1）	390
図21 第2面遺構出土遺物	368	図43 第1面上出土遺物（2）	391
図22 第2面直上出土遺物	368		

図44 表面採集遺物	392	図51 ほとけまわし『家忠日記』	
図45 確認調査土層図	392	天正十五年（1587）の条	394
図46 確認調査中出土遺物	392	図52 山猫廻「江戸名所図屏風」	
図47 傀儡師「淡路国名所図絵」		明暦大火（1657年）以前頃	394
嘉永四年（1851）刊	393	図53 円覚寺門前遺跡の山猫木偶	
図48 あひすまひ『人倫訓蒙図彙』		14世紀第2四半期	395
元禄三年（1690）刊	393	図54 山猫木偶の操作棒	395
図49 傀儡師「絵本御伽品鏡」		図55 盛岡・鈴江家のキツネの人形	
享保十五年（1730）刊	393	寛永十八年（1641）頃か	396
図50 首掛け箱廻し「町田家本洛中洛外図」		図56 鈴江家のキツネ（齊藤徹氏作図）	396
大永三年（1523）前後頃	394		

表 目 次

表 1 第5面遺構規模法量表	355	表 5 第1面縁錢状銭一覧(1)・(2)	375～376
表 2 第4面遺構規模法量表	359	表 6 第1面遺構規模法量表	387
表 3 第3面遺構規模法量表	363	表 7 遺物観察表(1)～(13)	399～411
表 4 第2面遺構規模法量表	368		

写真図版目次

図版 1 a. 調査地点近景 b. 調査終了時全景 c. 調査区壁土層堆積状況 d. 第1面全景	412
図版 2 a. 第1面馬道路盤 b. 同左第一区馬道路盤と溝1a c. 同上路盤中の銭と小型五輪塔 d. 同左近景 e. 溝1c側板 f. 溝2側板 g. 溝1b側板 h. 溝1b内出土形代	413
図版 3 a. 第2～3面全景 b. 同左 c. 溝3 d. 溝3 e. 溝4 f. 溝4 g. 第2面出土鉄錠壺	414
図版 4 a. 溝4裏込め掘上げ後 b. 溝3～5内土層堆積状況 c. ピット90内折敷とかわらけ d. 第4面全景 e. 溝5 f. 路盤出土五輪塔	415
図版 5 出土遺物 かららけ 白かわらけ 瓦器質白かわらけ 瓦器壺 火鉢	416
図版 6 出土遺物 瓦と磚 国産陶・炻器	417
図版 7 出土遺物 国産陶器 搬入磁器 石鍋 滑石スタンプ 骨製笄 金属製品 赤間石残片	418
図版 8 出土遺物 木製品	419

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡は、鎌倉の旧市内から小袋坂を北へ超えたJR横須賀線北鎌倉駅の西方一帯を指す。JR北鎌倉駅は、弘安五（1282）年に無学祖元を開山とし、北条時宗が創建した瑞鹿山円覺興聖禪寺（円覚寺）の境内内にある。北鎌倉駅のすぐ東方には、円覚寺総門前の白鷺池がある。この白鷺池は貞治二（1363）年以前、おそらくは鎌倉末期頃に作成された円覚寺境内絵図に、形こそ異なるものの描かれている。絵図によれば、白鷺池の西方前面を鎌倉から武藏へと向かう山ノ内道が南北に延びる。この円覚寺門前を抜ける山ノ内道に対して、総門前面から白鷺池を取り囲みつつ、山ノ内道を西方へと越えて囲い込んだ下馬門とされる木戸が設けられている。円覚寺参詣者は、この下馬門より徒にて境内へと進んだのであろう。他方、騎乗にて山ノ内道を進むには、下馬門を西に迂回する馬道を通ることになる。円覚寺の境内を定めた貞治二年以前の絵図は、境内地と隣接地との境に記入された上杉重能の花押が、馬道を越えた西方の丘陵地になされている。鎌倉末期の円覚寺境内は、山ノ内道のはるか西方にまで広がっていたことがわかる。よって、当時の円覚寺旧境内はかなり広かった。

こうした円覚寺一帯を現在の埋蔵文化財行政では、山ノ内道を下敷きにしたと考えられている円覚寺白鷺池前を通る県道横浜鎌倉線の東方を円覚寺旧境内遺跡として、県道より西方を円覚寺門前遺跡としている。これは、鎌倉末期に描かれたと思われる円覚寺境内絵図とは多少異なるが、絵図の山ノ内道西方に描かれている町屋らしき地域を門前町と捉えることによるものであろう。

さて、今回調査を行った地点は円覚寺門前遺跡内で、白鷺池の北西にJR北鎌倉駅舎に相対しながら、山ノ内道と思われる県道に面して位置する。絵図からすれば、白鷺池の前面に山ノ内道の南北二

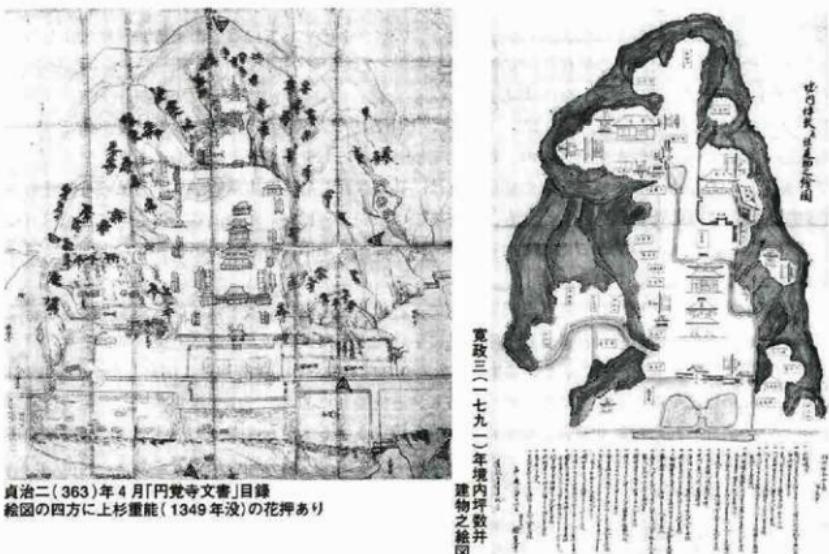


図1 円覚寺境内絵図

十王堂橋の存在によって、
1651～1685年の間に描
かれたと考えられる。

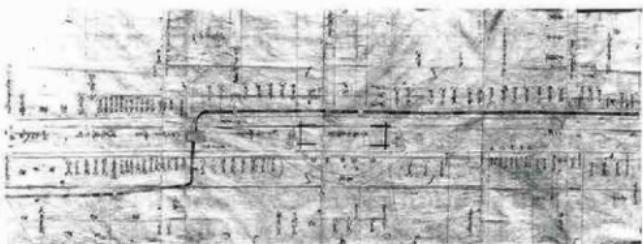


図2 十七世紀後半頃の下馬門と周辺

ヶ所に設けられた木戸の北側下馬門の北西辺りに相当する。下馬門は寛政三(1791)年作成の円覚寺境内坪敷并諸建物之絵図や1651年から1685年の間に描かれた円覚寺門前町図にも見えるが、明治期には廃された。しかしながら、円覚寺門前町図に示された下馬門の西方を弧状に迂回する馬道は、現在も県道を弧状に迂回して残されている。調査地点は、この馬道が北側で県道と合流する北西隅である。鎌倉末期の円覚寺境内絵図に描かれたコの字状の馬道がいつ、どのようにして門前町図に描かれた弧状の馬道になったのかは定かでなく、また共に正確な形態を写しているとも断じがたいが、現在の馬道が円覚寺門前町図の馬道と同一地点にあるのであれば、調査地点には、当時の下馬門付近の様子が残されていることになる。また下馬門自体が鎌倉末期以降に移動していないとも限らない。下馬門の移動と馬道の変遷も想定しておく必要もある。そうであれば、いっそ調査地点に下馬門や鎌倉末期の馬道が残されている可能性が高い。

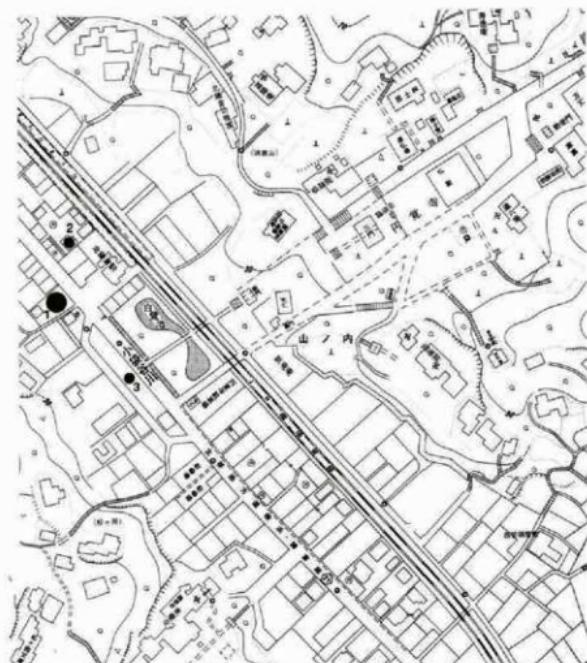
今回の調査地点の周囲では、これまでに主に2地点で発掘調査が行われている(図3)。挿図3中の2番地点(円覚寺旧境内遺跡、山ノ内瑞鹿山509番1)では、13世紀後半から末までの火災面が4枚発見され、出土遺物の多くは火災面に挟まれた3つの層から出土している。出土遺物の年代観をもとに、それぞれの火災面の年代を円覚寺年譜を参考として、弘安四(1281)年、弘安五(1282)年、弘安十(1287)年、正応三(1290)年としている。ただ、円覚寺の火災は、この後も正和五(1316)年、文保二(1318)年、応安六(1373)年と続いているので、発見された4つの火災面が弘安四年から正応三年までの可能性が高いものの、年代比定根拠となった資料が最上層火災面上から出土した常滑の甕であったため、甕の使用年限を想定すれば、発見された最後の火災層が正和五年の可能性も残されている。こうした留保を残しつつも、調査成果は弘安元(1278)年の円覚寺の選地と起工以前の調査地周辺が、水田面の広がる地域であり、境内絵図は弘安十年、もしくは正応三年の火災の後に描かれたものであろうとしている。

挿図3中の3番は、現在の馬道と県道との間に、石組みと土壙状に残されている高まりでの遺構確認調査地点である。2001年11月より2002年3月にかけて土壙に縦長の穴を幾本も開けて、土壙の構築年代と下馬門との関連を探った。その結果は、公表されていないが、調査途上に実見したかぎりでは、この土壙は中世まで遡るものではなさそうであり、近世後期以前の土層は平坦であったと見受けられた。また、調査されたかぎりでの土層中に下馬門を想定させる遺構もなかった。円覚寺門前町図の山ノ内道と馬道の間に記入された墓地も現在見られるような土壙ではなかったのである。また、同図の馬道と山ノ内道が北側で交わる位置に描かれた石塔は、現在も調査地点南方の、やはり県道と馬道の合流地点に位置している。

これらの調査成果を勘案すれば、今回の調査地点にも円覚寺創建前までは水田などの湿地であり、

円覚寺開山に伴って整地作業が行われ、そして調査地点付近には下馬門設置に伴って山ノ内道を開んだ施設や馬道があつた可能性が高い。

菊川英政 1997 「円覚寺旧境内遺跡（No434）山ノ内字瑞鹿山509番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度
発掘調査報告』第1分冊、317~410頁。



1. 今回調査地点
2. 円覚寺旧境内道路・瑞鹿山509番1地点
3. 円覚寺前馬道土堤地点

図3 調査地点位置図

第二章 調査の概要

第1節 調査の経緯

調査地点となった鎌倉市山ノ内字松岡1344番地における個人専用住宅の建築計画が提出され、そこでは建築予定範囲内で現地表面下800cmにおよぶ基礎柱状改良が予定されていた。これを受け、鎌倉市教育委員会は、同地が円覚寺門前遺跡に該当することから、平成15年2月27日から28日にかけて建築予定範囲内の地下に中世遺構存在の有無とその深さを確認する調査を実施した。その結果、現地表面から45cmより下方に5ないし6枚の中世の生活面の存在が認められた。鎌倉市教育委員会は、住宅建築に伴う基礎工事で遺存する遺構が壊されるとの認識に基づいて、建築工事に先立って同年6月13日より現地での発掘調査を開始した。

調査は、発掘によって掘り上げた土の置場や調査用テントと仮設トイレなどの空間を確保するため、建築予定範囲全域を対象とせず、37.80m²について行うこととなった。

発掘調査は、発掘による土置場確保のために調査範囲を南北に二分して、第一区と第二区として、第一区とした北側より始めた。以下、調査経過をまとめる。

6月12日 調査予定範囲全体の7割の表土を重機にて取り除く。

6月13日 調査機材の搬入とテント設営。午後より測量用基準杭の設置と敷地の実測。翌日より手掘りによる調査を開始する。

同月19日 最上層の第1面に東西に延びる道路の北半分とその北側側溝を確認する。

同月30日 道路が赤松の丸太を並べた路盤の上に路面を設置される構造であることを認める。造りの堅固さから、中世の馬道ではないかと考える。

7月2日 下層の第2面へと調査を進めるが、丸太敷きの道路は、南側の第二区での広がりを確認してから掘り下げることとし、第一区では丸太敷き道路を避けて下方への調査を進めた。

同月4日 第1面にて不明瞭であった調査区西端に南北の溝を確認。土層壁を再度調査することで、第1面においても、ここに南北の溝があったこと確認する。道路が北と西でL字状に囲まれていたことがわかる。馬道の可能性が高まる。

同月7日 第3面へ掘り下げ、10日までに3面の調査を終了する。

同月11日 第4面へ向けて調査を進める。第4面では第一区内に南北と東西の溝が同時に発見される。

同月14日 第5面へ調査を進める。同時に、第二区の第1面の調査を併行して行う。第二区第1面上に丸太敷き道路路盤の南部が発見される。路盤の丸太上に多数の中国銭と水晶製五輪塔が出土する。道路造りの際に地鎮のために埋められたものか?

同月16日 第二区の道路の南方に南北側溝を発見し、丸太敷き道路の規模を確定する。第一区では、さらに下層に向けて、自然堆積層確認のために縦長の範囲で塹壕（トレンチ）状に掘り下げる。古代の土師器や須恵器の破片が散発的に出土するが、人為的遺構は確認されなかった。

同月17日 第二区での調査を第1面までとして、調査を終了する。遺物出土総量は、隙間なく詰め込んだ遺物箱に25箱であった。

同月18日 機材撤収

例年になく雨の多い冷夏であったため、作業実働日数が減少し、調査区全域にわたって中世地山に至るまでの調査を行え得なかつたが、調査地施主の方にはひとかたならぬ便宜を払っていただいた。

ここに御礼申し上げます。

第2節 測量基準点の設置（図4）

発掘調査で発見された遺構を國土座標に位置づけるための測量基準点を調査地内に移動させ、それを用いて、発見された造構や調査範囲を隨時記録した。調査地に設けた基準点は、調査区の東端、第一区と第二区の境付近に打ち込んだ杭の上に設けた。設置した基準点の國土座標地は、次のとおりである。 $X = -73861.564$ $Y = -25904.388$



図4 調査範囲と測量基準点設定図

第3節 堆積土層と発見された生活面（図5）

本調査に先立って行なわれた確認調査の結果、調査地点には、現地表下45cm以下から110cmまでに中世の生活面が5枚が残されており、さらに135cm辺りにも生活面らしき土層があるとされていた。これを参考に本調査では、第一区において上層より下層に向けて順次調査を行い、中世に帰属する5枚の生活面と、その下方に平安時代と思われる1枚の生活面を確認した。さらに、本調査においては平安時代以前の生活面の有無と当地の地形形成を探るための自然堆積層確認を第一区の北端に設定したトレンチ内に限定して行った。以下は、調査地点の主に第一区北辺の土層堆積に観察できた土層堆積状況である。挿図5に調査区北辺に観察できた土層を、細線で示した自然堆積層と太線で示した人為的造成による生活面を簡便に示した。詳細な観察による人為的な文化層の堆積状況は挿図6に示した。

観察した自然堆積層は、現地表下130cmから245cmまでの、海拔18.90から17.75mまでの範囲であるが、全体に東から西へ向けて下がる傾斜を示している。とくに、下層ほどその傾向は強い。第6層の堆積以後、その傾斜は緩やかになるが、全体としての傾斜は、調査できた限りでは一貫している。現在の調査地点周辺の地形は、調査地点が面する県道を挟んで東西にある丘陵の間に広がった谷地形である。この谷地形の底部になる県道の東に沿って小袋谷川が北方へ向けて流下している。当然、県道付近の標高が19m前後と周辺標高では最も低くなっている。

調査地点に観察できた西方へ向けた傾斜を形成する各土層は、砂粒や砂質凝灰岩礫を交えた粘質土と木片を含有する有機質土からなり、それらが交互に重なりあるように堆積している。この内、砂質土は上流からの流下を、砂質凝灰岩礫は丘陵地からの崩落土とその流下を想定できる。これら流下土による谷の埋没によって小袋谷川の氾濫と流路の移動が有機質土の堆積をもたらしているのだろう。こうした埋没と氾濫を繰り返す中で、小袋谷川の流路が次第に東へと移動したと考えられる。実際に、観察した自然堆積土が上層に向かって、次第に緩やかに傾斜する様子を看守できた。

砂層と粘質土が互層して堅く絞まる第10層の上面を今回の調査では第6面とした。ある時期の生活面と断定する確かな根拠はない。第10層が堅緻であること、また第10層上に堆積する土層に炭化物が混入し、またそこから土師器と須恵器が出土した程度の理由である。土師器と須恵器はいずれも、割れ口が丸みを帯びた小さな破片であり、調査地点で捨てられたものではなく、丘陵上の居住域から流れ落ちてきたものであろう。しかしながら、炭化物の残留は、第10層上面が一定の期間、河川流域や

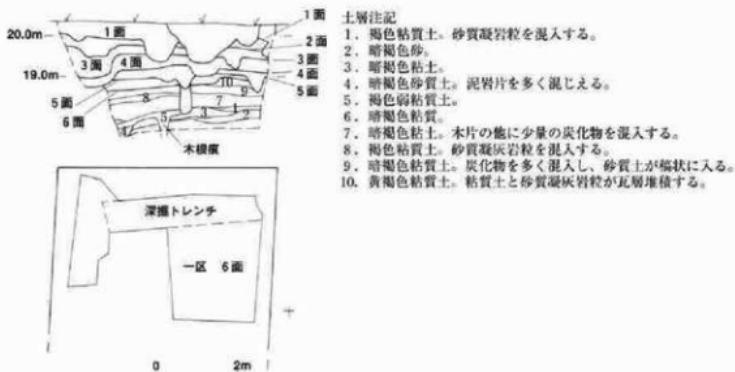


図5 堆積土層確認トレンチと堆積土層

耕作地としてではなく、空閑地として扱われ、近辺に居住域があったであろう可能性を示している。

第10層の上に堅緻に版築された砂質土によって第5面が作出されている。この第5面からは底面に礎板を設置した柱穴や寺院建築などに用いられる磚を内包したピットも掘り込まれて、何らかの建物が建てられていたと同時に、近隣に磚を用いた寺院が存在していたことを想定できる。

第5面上には、弱粘質土が堆積し、さらにその上に砂質凝灰岩を破碎しながら突き固めて造られた第4面が残されている。第4面からは溝や土壤、柱穴も掘り込まれて、活発な人の活動を知ることができる。調査は狭小な範囲で行われたが、部分的に生活面が積み増しで更新されている。また、第4面上の一部には炭層が発見されているため、調査地点を含んだ周辺で火災のあった可能性を窺える。

第4面上に、砂質凝灰岩を交えた粘質土を4層にわたりて版築して作出された第3面が残る。突き固められた土層の枚数は異なるが、第4面と第3面の地業の様子は基本的に同様のものである。生活面の更新を行った地業および版築地業の行為主体、もしくは地業土の獲得が同一の権益保持者の認可のもとでなされたことを想定できる。

次の第2面も第3面と同様の砂質凝灰岩を破碎した砂質土を用いて地業が行われているが、明瞭な版築を示さず、砂粒と粘質土が互層をなす。そして、地業土中の泥岩の割合が増加しているのが特徴である。この傾向は今回確認できた生活面の最上位にある第1面に顕著となり、砂粒と粘質土を地業土の主体とするものの、破碎された泥岩粒子が多くなる。また、第1面の時期に掘り込まれた溝は、泥岩塊によって埋め尽くされる。第2面から第1面に向けて、砂質凝灰岩をたんねんに破碎して版築する造成が、次第に泥岩を多用する地業へと移り変わっていく様を見て取ることができる。これが、調査地点における地業主体の移動、もしくは地業主体の関わりかたの強弱に起因するものであるかは、即断できない。

第1面の直上には、寛永通寶を出土する江戸時代と思われる土層の一部が残されていたが、非常に狭小な範囲であり、また非常に薄かった。

その江戸時代の土層をほとんど失わせてしまったのが現況建物が乗る現表土を盛り上げる際に行われた地ならしの削平と、ライフライン埋設の掘り込みであった。他方、この江戸時代の生活面作りにあたって、中世期の土層を削り取っていたことも第1面の溝覆土が道路面上と全く異なる土で覆われていることから窺われる。すなわち、第1面の溝の覆土は、今回発見された第1面より上層にあったであろう生活面時のものである可能性が高い。

第4節 調査の成果

狭小な範囲の上、上述の理由によって第二区では第1面のみの調査しか行い得なかつたが、一定の成果を得ることができた。第一区の第5面と第一・二区の第

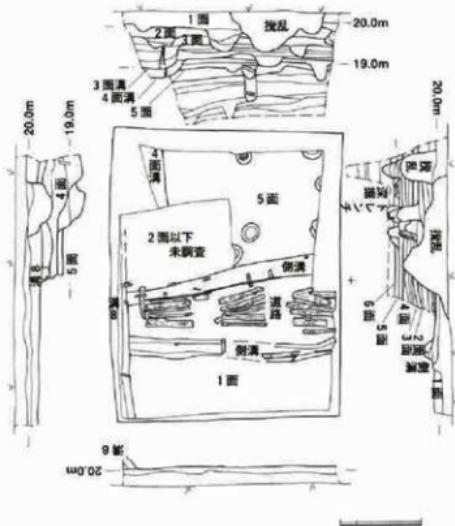


図6 調査区全測図と堆積土層

1面に発見された遺構を図6に合成して示した。同時に調査区四周の土層堆積と、下層確認調査域の南北方向土層図も合わせて掲載した。

土層堆積図からは頻繁な盛り土造成と、そこに掘り込まれた南北と東西の溝を確認できる。盛り土造成は、上述のように砂質凝灰岩を破碎した砂を主体とするものであったが、それらは溝に囲まれた道路遺構であったことが確認された。それを顯著に示すのが、調査区全域を調査した第1面での成果である。調査区のはば中央を東西に延びる道路は、路盤に長さ110cm前後の赤松の丸太を5ないし6本を1組にして並べたものを一定間隔を置いて東西に配置し、その上に砂を突き固めて路面としている。道路の南北両側には幅30cmに満たない細いながらも側溝を配置して、路面の乾燥を図っている。道路面は調査区の東外へと続くことは丸太の残り方からして確実である。道路の西方への延伸を、調査区内に確認できなかったが、調査区西端に道路を走るように南北方向の溝が発見されている。道路がこの溝を越えて伸びているのか、または溝を越えたところで、道路が曲がる、もしくは三差路になっているのか判断できない状況である。

しかし、路盤に腐りにくい赤松の丸太を規則正しく敷き詰める道路造りは、中世鎌倉の一般道路には見られないものである。律令制期の幹道にしばしば見られるこうした道路造りは、車馬の通行を想定したものであった可能性を考えても良いであろう。そうであれば、調査地点が円覚寺門前に設けられた下馬門と馬道に近接している状況から、円覚寺の総門に直交する方位の東西に延びるこの道路がかつての馬道であった蓋然性は高く、調査区西端の南北溝の西方には南北、とくに南に向いた馬道が想定できるかもしれない。

第2面以下においては、第1面のような堅固な路盤を確認しなかったが、調査区内には南北と東西の溝が発見され、他の平坦面は砂粒を多く交えた地業や砂と粘質土による版築地業による路面を確認した。調査地点は、確認できた生活面全般が道路とその側溝という組み合わせであり、円覚寺と深く関わりのある馬道を第5面から第1面に至るまで残していると考えられる。溝以外にも柱穴や土壙を発見しているが、いずれも馬道と下馬門を囲う柵列と考えたい。

第三章 発見された遺構と遺物

以下には、調査によって発見された遺構と遺物を、下層より順次報告する。遺構の発見されなかつた第6面と、遺構の発見された第5面から第2面までは第一区のみでの調査であったことを確認しておく。よって、各面発見遺構と遺物を報告する以下の各節において改めて記述しないが、第2面以下は第一区のみの調査結果である。

第1節 第6面

前章に記した理由により生活面と捉えたが、遺構、遺物ともに何ら発見されなかつた。

第2節 第5面

次第に深くなる調査区内での作業の安全確保のために、調査区の南西部を階段状に掘り残して調査を行つたため、調査範囲は非常に狭くなつた。また、第4面の溝5と6によって調査範囲の西端と北部が東西に長く本来の生活面を失つてゐる。当然ながら、そこに掘り込まれた遺構があつたとしても、第4面の溝によつて壊されてゐることになる。

面上から発見された遺構は、柱穴が8口あつた。その内のp94と101の底面に礎板が遺存してゐた。p94、p86、p101およびp102とp88は矩形に並んでゐる。芯々での間隔は南北で190cm、東西で165cmを測る。底面海拔高はそれぞれに異なる。底面に設置された礎板での柱の高さ調整を想定できるが、これだけの柱穴の数から、建物であったと想定することは避けたい。東西南向、または南北方向の柱穴列と捉えておく。また、p94に壊されて、その直下にp100が、おそらくは深さ96cmに掘り込まれて、底面に2枚重ねられた礎板が設置されていた。挿図には同位置にあるp94ではなく、このp100を示してゐる。

なお、p94とp103、p88の内部からは、礎板に転用された磚が出土している。寺院建築の基壇に用いられたと思われる磚の出土は第5面の柱穴が掘り込まれるまでに、おそらくは円覚寺から不要の磚が持ち出されてゐたと考えられ、それが円覚寺境内における火災を要因とするものかは、出土した磚が二次的に加熱を受けた痕跡を残していないため、判断しがたい。

図8は第5面に帰属する遺構より出土した遺物である。

1はピット86より出土した平瓦。四面にへ

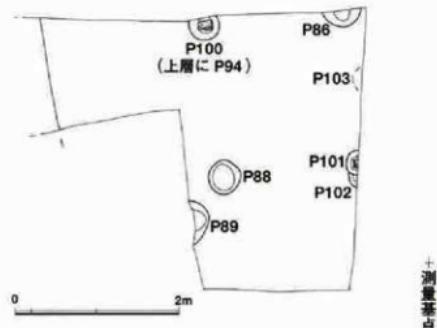


図7 第5面全測図

表1 第5面遺構規模法量表

遺構名	規模cm	上場径／辺	下場径／辺	深さ	礎板など
p 86		48	29	41	
p 88		43	32	19	磚遺存
p 89		54	26	9	
p 94		40	18	36	礎板(磚)
p 100		24	23	96	礎板
p 101		31	18	23	礎板
p 102	/	/	/	20	
p 103				開査区東壁にのみ確認	礎板(磚)

ラナデ、凸面に砂目痕が残る。

2～3はピット94より出土した。2は糸切りかわらけ。内底面は無調整で、指頭ナデが見られない。3は磚。ピット94から出土した3枚のうち、完形の1枚を図示した。同様の磚はピット88より4枚出土し、うち1枚には煤が付着していた。また、4面下より磚の小片が3点出土している。

第5面下出土遺物

図9-1は土師器壺の頸部片。遺存部の上方はナデとヨコナデ、下方は横方向のヘラナデ調整がなされる。2は土師器高壺の坏部と脚部の接合部分である。外面はヘラケズリ、内面はミガキに近いヘラケズリにより調整される。

3は平瓦。凹面に布目痕とヘラ痕、凸面にヘラによる調整痕が残る。なお、端部にはヘラ切りの後、折り取ったような痕跡が残る。

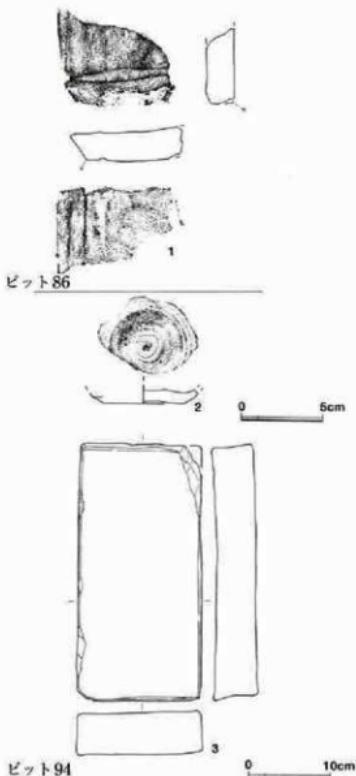


図8 第5面遺構出土遺物

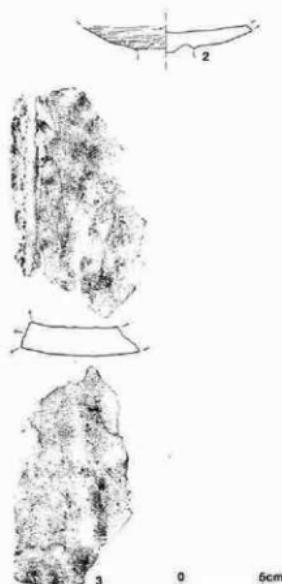


図9 第5面下出土遺物

第3節 第4面

南北方向の溝5と東西方向の溝6の他に、柱穴や小型のピットと土壙が発見された。

溝6

調査区の北端近くに東西に発見された。西方では後述の溝5に阻まれながらも、調査区西壁にその断面を確認できるため、より西へ続いていると判断できる。東方へは確実に調査区外へと延伸する様子を調査区東壁の土層に認められる。調査区内では長さ375cmに及んでその規模を確認できた。上場幅77~88cm、下場幅20~41cmと、下場は東方に向けて狹まる。深さは40cm程であるが、その海拔高は西端の18.69mから東端の18.63mと小袋川のある東へ6cm下る緩い勾配を示す。溝の南北壁面と底面に、溝護岸施設と底面施設は発見されず、その痕跡も確認できなかった。素掘りの溝である。

覆土地積を見るかぎり、浚渫などは行われておらず、溝底の埋没は速かったようだ。

図11-3~4は平瓦。いずれも凹面に布目痕とヘラ調整、凸面にヘラ調整痕が残る。4の端部はヘラ切り後、折り取りされる。

溝5

調査区の西端に南北に発見された。溝の西側上場が調査区の西外にまで広がっており、全体像は確認できなかった。調査区内に認められた南北の長さは209cmで、南北それぞれが調査区外にまで伸びている。調査区北壁と西壁の土層観察からは、上場から下場まで緩やかに落ち込み、深さは43cmを測る。東側下場際に溝の側板が残されている。幅23cmの板を芯にして、幅12~13cmの板を重ねた側板は幅6~8cmの板状の杭で東西から挟まれるようにして止められている。溝6と交わる地点にも側板が遺存しており、溝6より新しく造られた溝であることがわかる。調査区西壁の土層観察でも、その新旧関係を確認できる。西側の下場を調査区の西端に発見したが、溝の側板を確認できなかった。ただし、側板を止めた一本の杭が溝の北端に残っていることから、西側にも側板が設置されていたものと考えられるが、一本の杭だけから西側全体の側板の位置を確実に捉えることはできない。溝底面規模で測れば、側板の設置された溝幅は65cm程と想定できる。

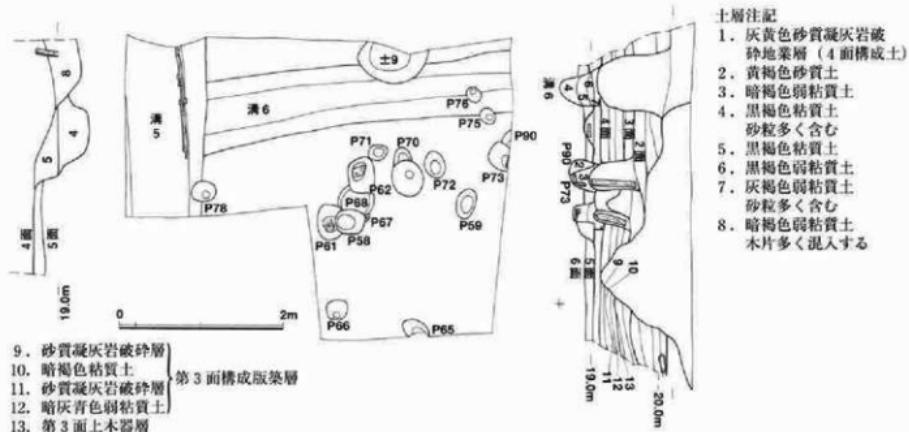


図10 第4面全測図

溝底面に底板は残されていない。また、東側の側板の外側は裏込め土が入れられており、溝掘り方より溝自体は狭くなる。溝底面の海拔高は、北端で18.84m、南端で18.81mとほぼ平坦である。

本溝の上方には第3面の南北溝が掘り込まれて、本溝内覆土の上方が失われている。残された溝内覆土は1層のみで、溝が機能していた期間中は溝浚いが行われて、上方生活面での溝の作り替えの際に一気に埋め戻されたようである。

図11-1 はかわらけ。背低で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がり口縁部付近より外反する。煤が付着する。2は箸。

柱穴およびピットと土壤

柱穴、またはピットは都合17ヶ所が発見された。底面に側板が残るのは、p73とp62の2ヶ所、また柱根の残る例はp61である。各柱穴とピットの配置に明瞭な相関関係を見出せない。敢て関連を見出そうとすれば、溝6に沿うように柱穴やピットが位置しているだろうか。

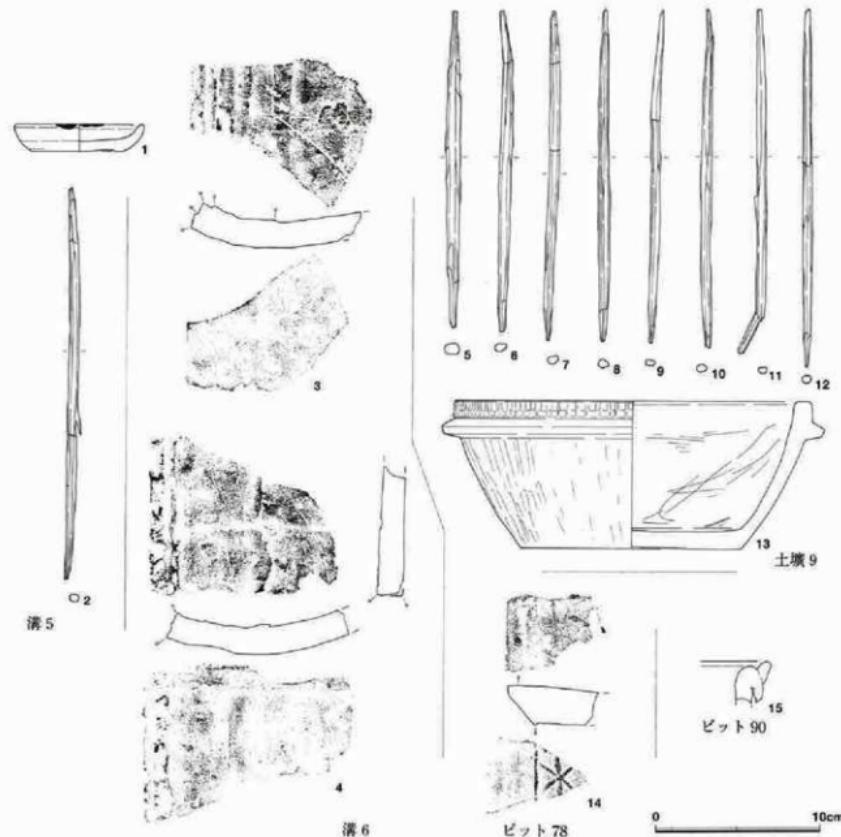


図11 第4面遺構出土遺物

表2 第4面遺構規模法量表

遺構名	上場径/辺	下場径/辺	深さ	磚板など
p58	35×31	22×18	19	
p59	38×21	22×13	16	
p61	44	18	38	柱根
p62	43×32	20×17	30	磚板
p65	30	13	25	
p66	35	7	31	
p67	13	5	9	
p68	43	33	15	
p69	42	9	57	
p70	23	12	12	
p71	22×17	15×11	13	
p72	39×25	19×10	18	
p73	34	14	39	磚板
p75	18	7	19	
p76	17	6	25	
p78	29×24	11	25	
p90	/	/	39	
土壤9	72	50	20	

図11—14はピット78より出土した平瓦。凹面に布目痕、凸面に格子叩き目痕が残る。

図11—15はピット90より出土した13世紀後半の常滑窯の口縁部片である。

土壌は1基が溝6を埋すようにして調査区北壁際に発見された（土壤9）。第4面構成土の上に一部積み増しをした土層から掘り込まれているため、第4面でも後半の時期に掘り込まれ、その時期には溝6は埋没していたであろう。覆土内にごみが捨てられたような有機質土はない。

図11—5～13は土壤9より出土した。5～12は箸。いずれも20cm前後を測り、両端が細く削られる。

13は滑石鍋。内外面ともに煤が付着する。体部内面上位から内底面にかけて細い線状の引抜きキズが多く残る。

自然遺物はヒト肋骨が1点出土した。

第4面下出土遺物

図12—1は手づくねかわらけ。平底で、指頭痕は不明瞭であることから、手づくねかわらけの中でも年代的に下った製品と考える。なお、本遺跡地から出土した手づくね成形によるかわらけは本品だけであった。

2は常滑片口鉢I類の口縁部片である。遺存部には、使用による摩滅痕を確認できなかった。3は13世紀中頃の常滑窯の口縁部片。

4は青磁蓮弁文碗。蓮弁文はヘラ状工具によって施文される。内外面ともに使用によるキズは見られない。5は青磁碗。内外面ともに使用によるキズがわずかに残る。

6～7は平瓦。いずれも凹面に布目痕とヘラ調整、凸面にヘラ調整痕が残る。また、端部はヘラ切り後、折り取られる。

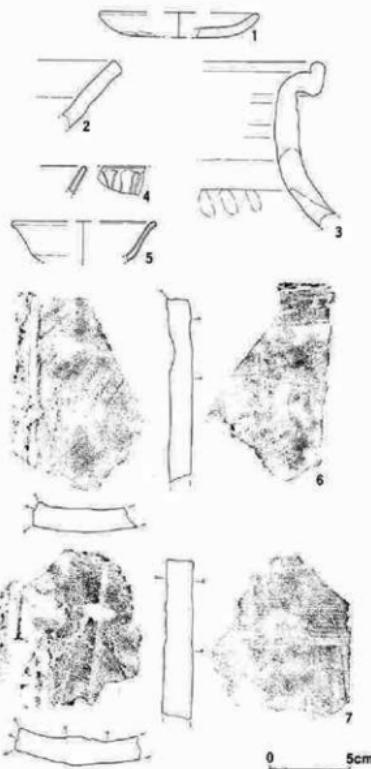


図12 第4面下出土遺物

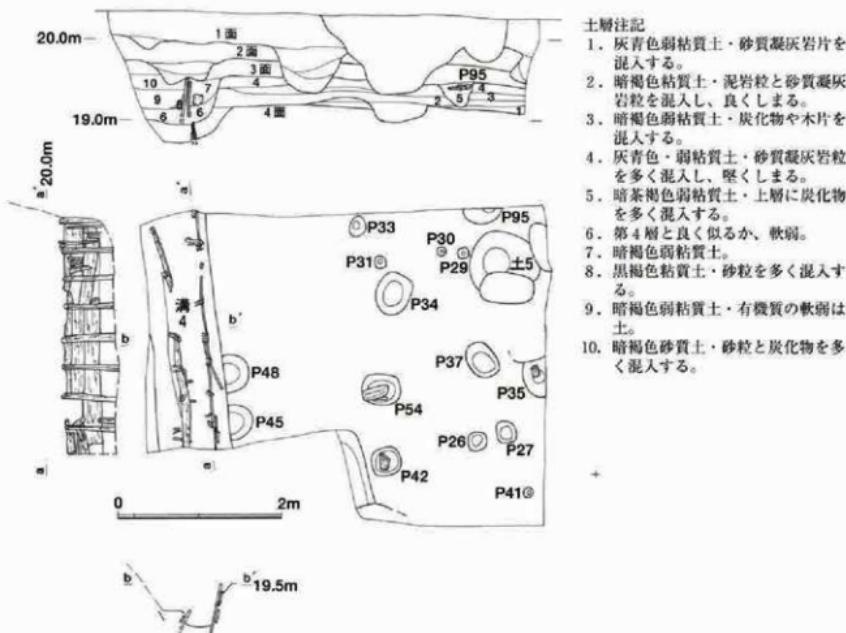
第4節 第3面

第3面は、砂粒と粘質土を用いて版築した地業層が、調査区の東壁の土層に見られる生活面である。最上層の版築層は調査区の全域に渡って残されているが、とくに後述のピット35を境にする辺りまでの調査区の南半分には幾度にもわたる版築が顕著に重ねられている。この版築地業面上から柱穴およびピットが都合18口、土壤1基が掘り込まれている。また、第4面にて溝5の遺存した調査区の西端には、南北方向の溝4が側板を良好に残して発見された。

溝4

長さ290cmに渡って調査区内に発見され、南北両方向は調査区外に延伸する。一部で溝掘り方の東西上場を確認できた。上場幅160cm、下場幅80cm、深さ60cmを測る掘り方内に、溝側板を設置している。側板は、幅25cmと17cmの最長175cmの板を3段に重ね、それらを長さ80cmの杭が側板の内倒れを防ぐように打ち込まれている。また、側板の外側は裏込め土で押さえられるが、所々に裏込め土の側にも杭が打ち込まれて側板を挟み込んでいる個所も見られる。また、溝底面は掘り方から上方20cmにまで裏込めと同じ土が入れられて、溝の底面が設定されている。そのため、側板を設置した時点での溝の深さは40cmである。東西の側板間の幅は38cmを測る。溝底面の海拔高は、北端で19.33m、南端で19.31mとはば平坦である。

溝内覆土は、側板底面に堆積した後、すぐに下方半分ほどが埋まってしまったような状況を示し



土層注記

1. 灰青色弱粘質土・砂質凝灰岩片を混入する。
2. 暗褐色粘質土・泥岩紋と砂質凝灰岩粒を混入し、良くしまる。
3. 暗褐色弱粘質土・炭化物や木片を混入する。
4. 灰青色・弱粘質土・砂質凝灰岩粒を多く混入し、堅くしまる。
5. 暗茶褐色弱粘質土・上層に炭化物を多く混入する。
6. 第4層と良く似るか、軟弱。
7. 暗褐色弱粘質土。
8. 黒褐色粘質土・砂粒を多く混入する。
9. 暗褐色弱粘質土・有機質の軟弱は土。
10. 暗褐色砂質土・砂粒と炭化物を多く混入する。

ている。

図14-1～3に溝4の裏込めより出土した遺物を図示した。1～2はかわらけ。1は背高気味で、器壁は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近より外反する。2は背高で、器壁が厚く、わずかに内湾しながら立ち上がり、体部上位付近より強く外反する。また、口縁部に打ち欠き痕が見られ、煤が付着する。

3は1034年初鋸の「景祐元寶」、背面に文字などは見られない。

4～23に溝4下層より出土した遺物を図示した。4は須恵器坏の口縁部片。

5～7はかわらけ。5は背低気味で、内底面が広く、器壁は大きく開きながら立ち上がる。6は背高で、内底面が広く、器壁は内湾しながら立ち上がり、体部中位付近より外反する。7は背高で、器壁は薄く、大きく開きながら立ち上がり、体部上位付近より外反する。8～9は白かわらけ。いずれも外底部に指頭痕が明瞭に残る。10は瓦質火鉢の口縁部片。小片のため、傾きに不安がある。

11は白磁口元皿。外底部の釉は拭い取られる。内外面ともに使用によるキズは見られない。

12～13は曲物の蓋か。13の表面に刃状痕が多く残る。14はヘラ状木製品。15～23は箸。最短は18.1cm、最長は23.8cmを測る。いずれも両端とともに細く削られる。

図15は溝4上層より出土した遺物を図示した。24～28はかわらけ。24～26はいずれも背低気味で、内底面が広く、器壁は内湾、あるいは内湾気味に立ち上がり、口縁部付近より外反する。27は背高で、器壁は大きく開きながら立ち上がる。28は淡橙色粉質精良胎土で、器壁は薄く、内湾しながら立ち上

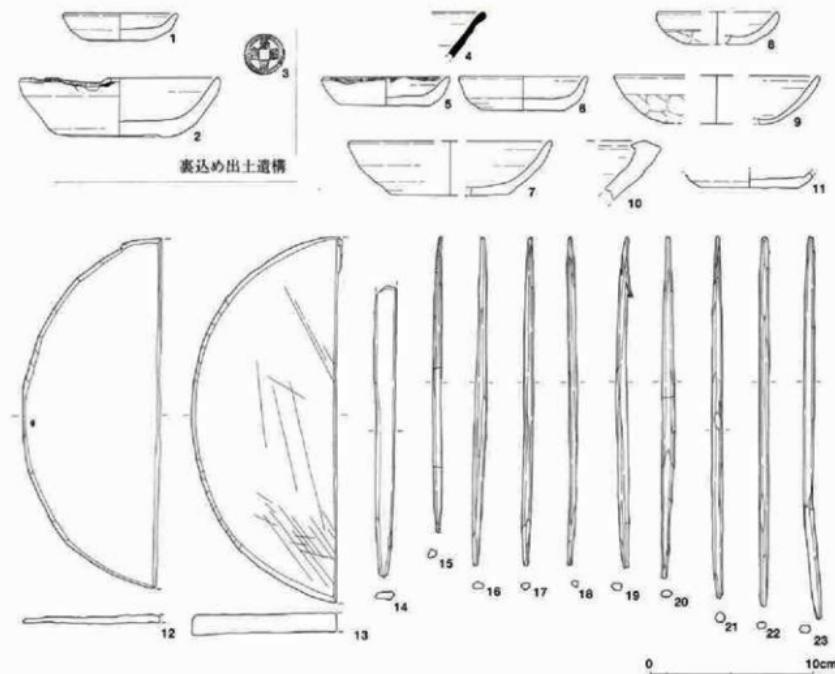


図14 第3面溝4出土遺物(1)

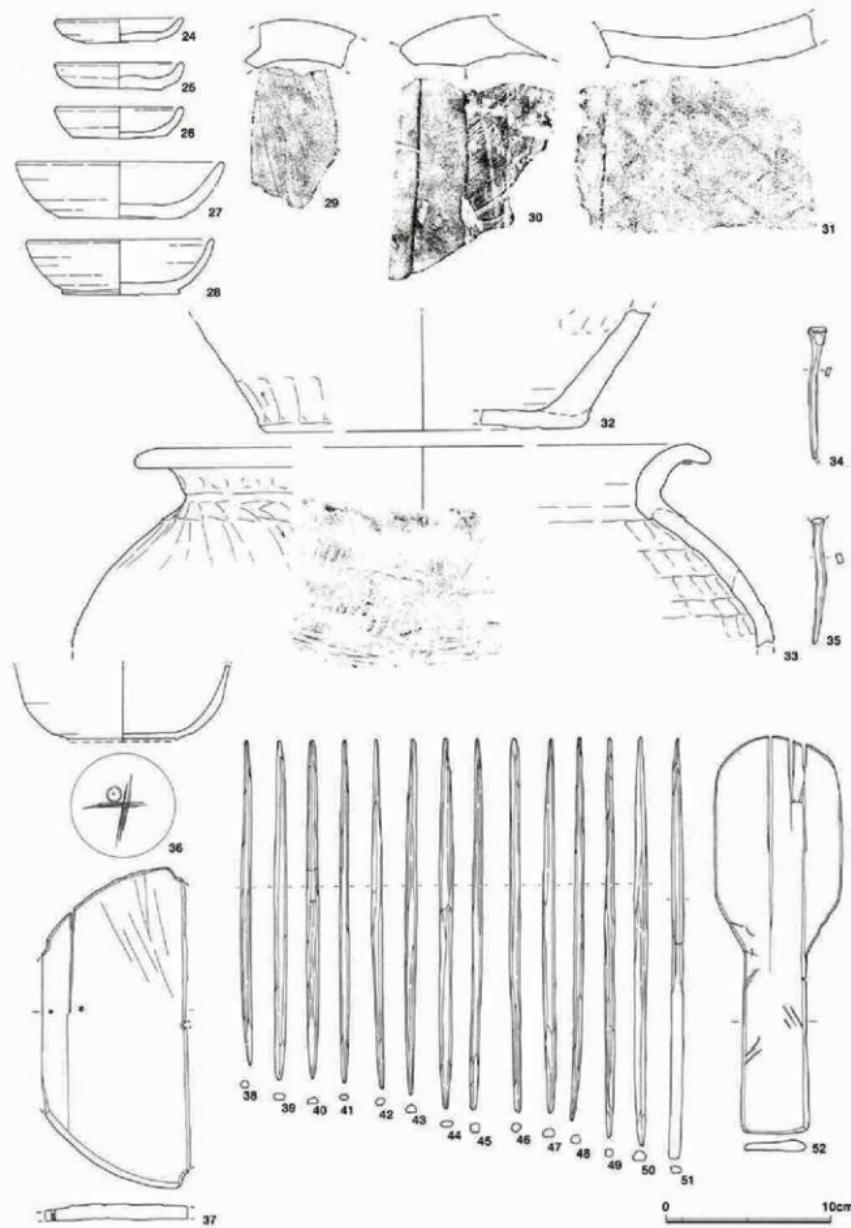


図15 第3面溝4出土遺物（2）

がる薄手丸深型である。29は丸瓦。凹面に布目痕が残る。30は斐斗瓦か。凹面に布目痕とヘラ調整、凸面の一部に布目痕を残すヘラ調整がなされる。29と30は同一個体の可能性がある。31は平瓦。凹面に離れ砂、凸面に格子目叩き痕が残る。

32~33は常滑甕。33は13世紀初頭の所産と思われる。

34~35は釘。

36は漆椀。表裏面ともに黒色漆が塗られる。底裏にはツメ痕と線刻が残る。37は蓋の転用品と思われる。遺存部の3箇所に木釘孔が見られ、そのうち2箇所には木釘が遺存する。また、表面には刃状痕が残ることから転用品と考えられる。38~51は箸。最短は19.9cm、25.8cmを測り、長めの箸が多い。38~50は両端ともに細く削られるが、51は上端のみが削られ、下端は無調整である。52は杓子。表面には線刻が残る。

自然遺物はクルミ1点、オニグルミ2点、イルカ頸椎1点が出土した。

柱穴およびビットと土壤

都合18口の柱穴とビットが発見されたうち、礎板を遺存していたのは2例のみであった。他方、ビット内に砂質凝灰岩切石が残されている例もあるが、その用途は判然としない。これらのビットや柱穴の配置に関連性を読み取れないが、p 45とp 48は東西溝に併行して南北方向に連なるようにも見受けられる。また、10cm強の径を持つビットは杭を打ち込んだ跡と思われる。

図16-2~3はビット35より出土した箸。いずれも19cm台を測り、両端ともに細く削られる。

1基が発見された土壤は、断面が鐘鉢状を呈するもので、還元した青灰色弱粘土を覆土として、内部からは木片および木器片が多数出土した（土壤5）。

図16-1は土壤5より出土したかわらけ。背高気味で、内底面が広めで、器壁はわずかに内湾しながら立ち上がり、体部上位より外反する。内外面ともに煤が付着する。

第3面下出土遺物

図17-1~5はかわらけ。1は背低で、内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がる。2は背低気味で、器壁はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。煤が付着する。3は底径口径比が大きく、薄い器壁は大きく開きながら立ち上がる。4は背高気味で、器壁は内湾気味に立ち上がり、体部上位より直立する。口縁部付近は鉄分が溶解している。とりべとして使用されたものと思われる。5は口径18.6cmを測る超特大かわらけ。器壁はとても厚く、重い焼き上がりである。6~

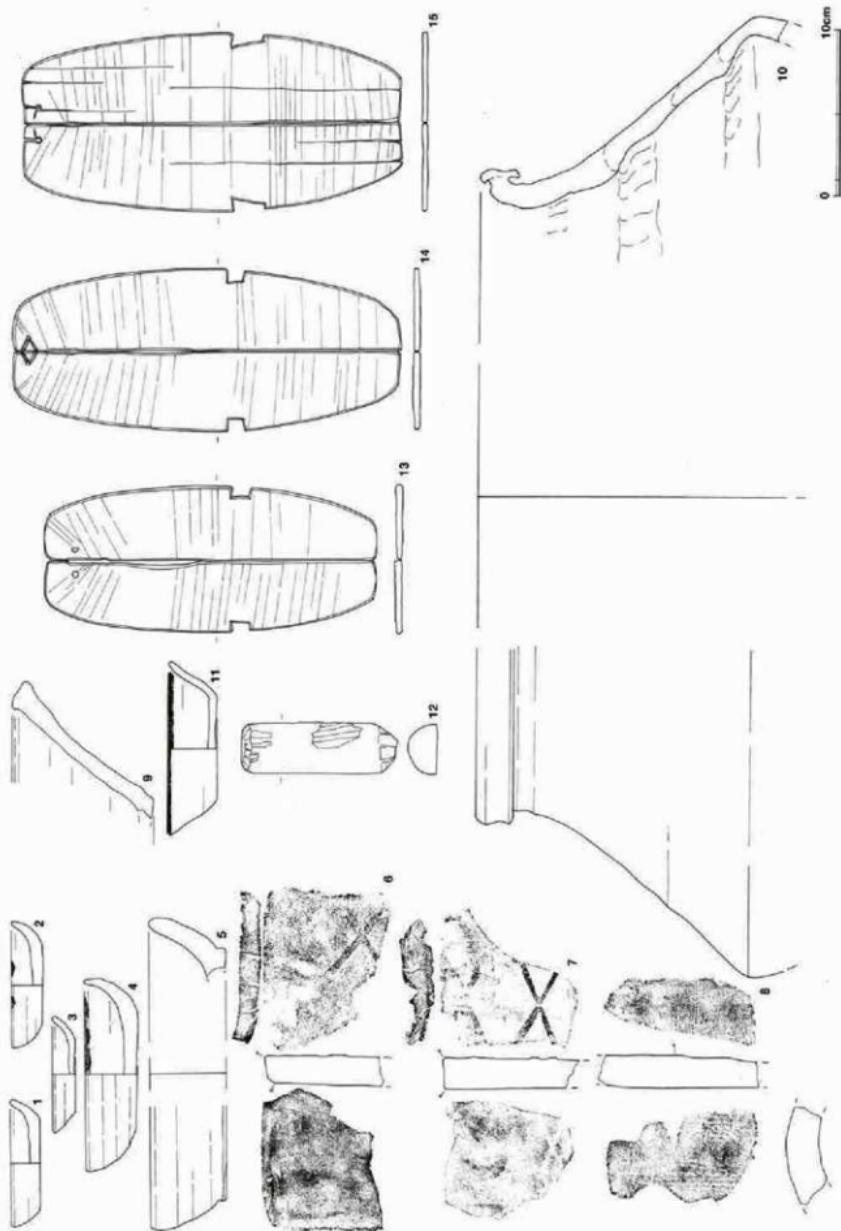
表3 第3面遺構規模法量表

遺構名	規模cm	上場径/辺	下場径/辺	深さ	礎板など
p26		23	11	4	
p27		23	13	15	
p29		13	4	14	
p30		11	4	8	
p31		15	6	10	
p33	26×19		19	8	
p34	51×41	32×23		18	
p35	/	/		42	礎板
p37	45×33	27×21		30	
p41		13	6	5	
p42		37	28	39	礎板
p43	/	/		25	複数ビットの可能性
p45		43	29	28	
p48		49	27	11	
p54	48×37	34×26		20	凝灰岩切石
p95		42	30	30	
p103	/	/		24	
p104	/		16	43	
土壤5	86×65		31	34	



図16 第3面遺構出土遺物

圖17 第3面下出土遺物(1)



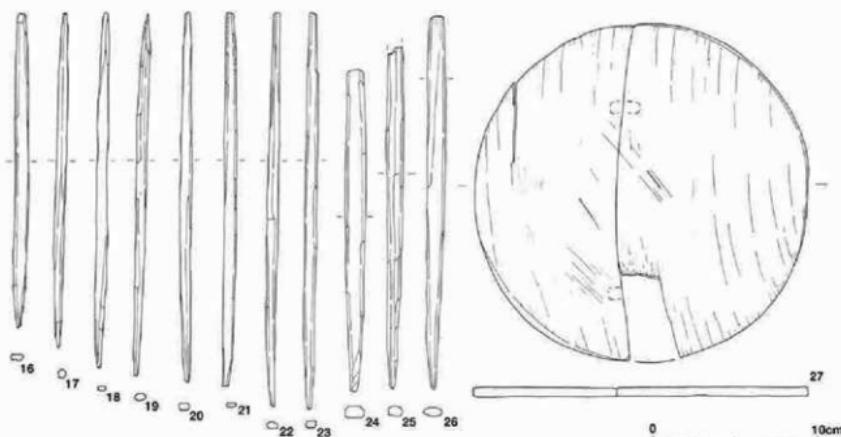


図18 第3面下出土遺物（2）

7は平瓦。いずれも凹面に布目痕、凸面に格子目叩きが残る。6の凹には布目痕の上に×印が残る。

8は丸瓦。凸面に繩目叩き、凹面に布目痕が明瞭に残る。9は瓦質火鉢の小片。

10は13世紀後半の常滑窯。

11は白磁口兀皿。外底部の軸は拭い取られる。口元部分周辺にキズが著しく残る。

12は用途不明木製品。断面は半月形を呈し、上端は丁寧な削り、下端は細く削られる。製作途上品の可能性がある。13～15は草履芯。13は全長20.3cmと、14と15より小さめである。14と15の上方穿孔部には細い紐痕が残る。図18-16～23は箸。最短は19.1cm、最長は24.2cmを測り、いずれも両端は細く削られるが、18や21のように側面の削りの少ないものが見られる。24～26はヘラ状木製品。27は曲物の底板か。表面に焦げた痕跡と刃状痕が残る。

自然遺物はモモが1点、クルミが2点、アカニシが2点出土している。

第5節 第2面

第3面の周到な版築地業面から比べると、第2面生活面の構成土は1層のみからなり、版築が行なわれない簡易な地業によるものと言える。調査区西方部に、やはり南北方向の溝1条が発見された。また、平坦面からは柱穴およびピットが25口と、土壙が2基発見された。

溝3

第3面溝4の上方に掘り込まれた南北方向の溝である。掘り方内に木組みの側板が設置されている。確認できた長さ283cmで、南北ともに調査区外へと延伸する。上場幅90cm、下場幅50cm、深さ22から28cmを測る掘り方内に、東西両側に側板を設置する。側板は、幅12cmに長さ95cm以上の板が1段設置される。それを長さ30cmの杭で両側から押さえるようにして固定されている。東西側板間の幅は26cmと狭いが、側板の裏側に裏込め土を確認できない。おそらくは、一時的にも当初は下面の溝4の東側板を援用していたようと思われる。溝底面の海拔高は、北端で19.47m、南端で19.48mと、やはりほぼ平坦である。

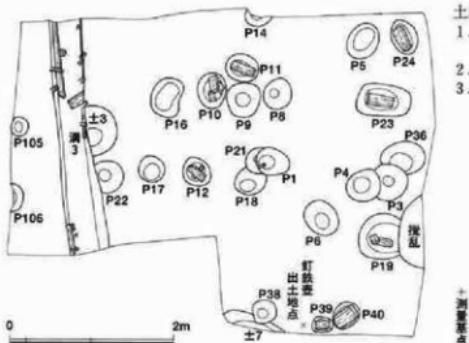
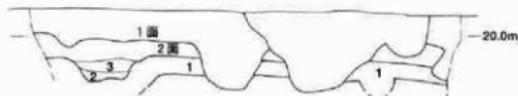


図19 第2面全測図

図20—1は瓦器質胎土の白かわらけ口縁部片である。体部外面下方はヘラケズリにより調整される。2～3はかわらけ。2は背低気味で、器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近より大きく外反する。3は背低気味で、器壁は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部付近よりわずかに外反する。口縁部の一部に研磨痕が残る。

4は常滑片口鉢I類の底部片である。体部内面最下位より内底面にかけて使用による摩滅痕が残る。6は白磁碗の体部片。素地は淡黄色弱粘質土で、釉は淡黄色を呈する。内外面ともに使用によるキズは見られない。7は白磁鉄絵小壺の胴部片。鉄絵は暗茶褐色に発色する。内外面ともに使用によるキズは見られない。

8～10は釘。11は1078年初鋸の「元豊通寶」。背面に文字などは見られない。12～13は製作途上木製品と思われる。12は径0.4～0.2cmほどの中空になっている。表裏面ともに粗い削り調整痕が多く残る。13は左側面と右側面下方に面取り状の丁寧な削り調整痕が見られるが、表面には刃状痕が残る。14は木栓か。15は錐のような金属工具の柄と思われる。差し込み部周辺は丁寧な削り調整がなされる。16～33は箸。最短は18.7cm、最長は24.0cmを測る。ほとんどが両先端ともに細く削られるが、19～22のように無調整、あるいはおざなりな削りのものも見られる。

自然遺物はクルミが1点、オニグルミが2点、モモが1点出土している。

柱穴およびピットと土壤

都合25口の柱穴およびピットを発見した。これらのうち、柱穴であったことを明示する柱根や礎板を残すものは8例で、このほかに杭を残す例が1例ある。南北溝を越えた調査区西端にもピットが位置する。柱穴およびピットの配置に明瞭な相関関係を見い出せないが、南北溝に対して直交方向に少なくとも2列に並んでいるようにも見受けられる。ただし、その2列がそれぞれに有機的関連を持っているとは考えられない。

柱穴内に残されていた礎板は、従前の生活面の例と比べて大型であることが認められる。多くは直方体である。礎板が水平に遺存する例は少なく、傾いている例が多いものの、およそその高さは推し

土層注記

1. 暗褐色弱粘質土。粘質土と砂が互層状に版築される。全体に炭化物、泥岩粒を混入する。第2面構成土。
2. 暗褐色弱粘質土・軟弱。溝3覆土
3. 黒褐色弱粘質土。

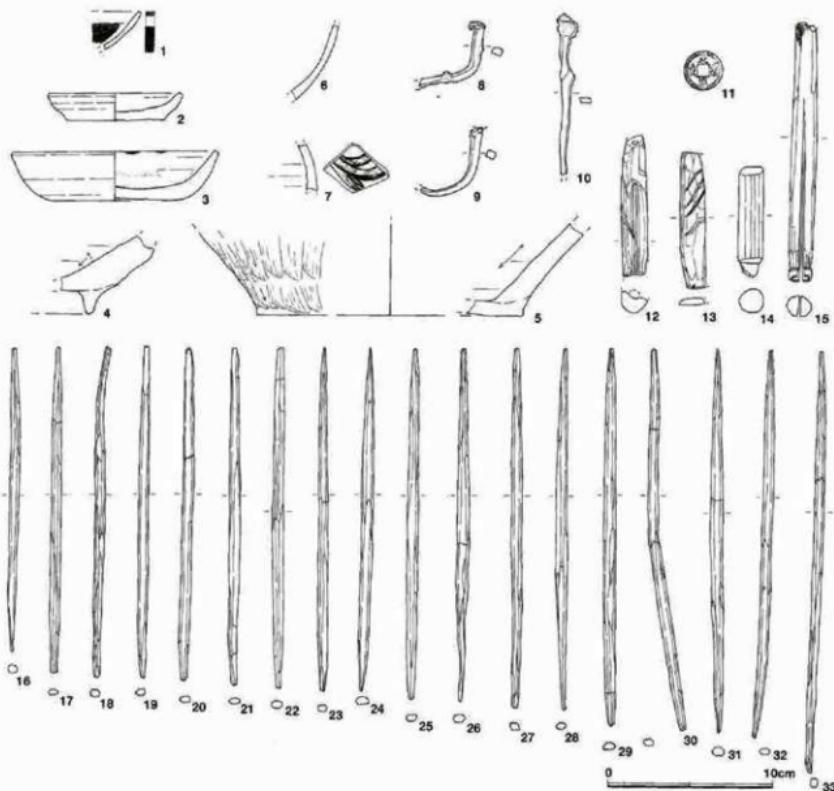


図20 第2面溝3出土遺物

量れるであろう。それぞれの檻板の規模と檻板上面の海拔高は、p 10が $17 \times 9 \times 3$ で19.5m、p 11が $28 \times 12 \times 4$ で海拔高不明、p 12が $25 \times 9 \times 5$ で19.26m、p 19が $18 \times 8 \times 6$ で19.35m、p 23で $31 \times 10 \times 3$ で19.12m、p 24で $28 \times 11 \times 4$ で19.27m、p 39で $14 \times 8 \times 3$ で19.44m、p 40で $25 \times 15 \times 5$ で19.42mであった。

檻板上面の海拔高は、19.3m弱と19.4~19.5mのグループがあるが、海拔高で分類しても、それらの間に有機的関連を見い出せなかった。柱穴とピット内の覆土でも分類してみたが、やはりこれらの遺構間の関連を把握できなかった。

図21-1は土壙7より出土したかわらけ。背低で、器壁は大きく開きながら立ち上がる。

図21-2~3はピット3より出土した13世紀後半から14世紀初頭にかけての東濃型山茶碗である。2は体部内面に煤が付着し、両者ともに造存部には使用による摩滅痕を確認できなかった。

図21-4~5はピット5より出土した銭。4は1017年初鑄の「天禧通寶」、5は1038年初鑄の「皇宋通寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

図21-6はピット9より出土した瓦器壺。内外面ともに暗文は不明瞭である。

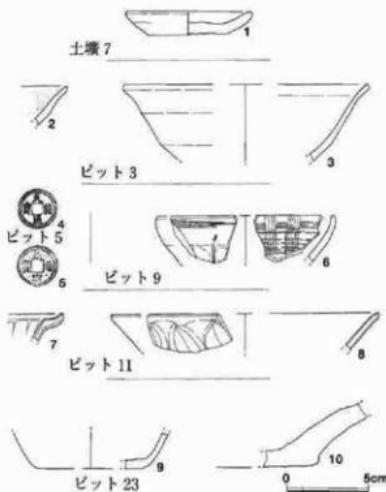


図21 第2面遺構出土遺物

図7～8はピット11より出土した船載器である。7は青磁折縁鉢。内面にヘラ状工具による蓮弁文が施文される。8は青磁蓮弁文碗。いずれも内外面に使用によるキズは見られない。

図21-9～10はピット23より出土した。9は白磁口元皿。外底部の釉は拭い取られる。内外面ともに使用によるキズは見られない。

10は常滑窯の底部片である。

第2面直上出土遺物

図22-1は鋳鉄小壺。第2面へ向けて掘り下げる作業中に、第2面にへばりつくような状態で発見された。成形は体部中位付近の突帶部分で上部分と下部分の型を合わせた可能性がある。また、発見当初は錆による腐食が著しく、体部外面に施された施文の確認をすることはできなかつたが、鶴見大学文学部文化財学科の永田勝久教授の御好意により念入りな鏡落とし後にソフトエックス線の照射を行ったところ、体部外面に文様のないことを確認した。

第2面下出土遺物

図23-1～4はかわらけ。1は背低で、内底面が広く、薄い器壁は直立気味に開きながら立ち上がり口縁部付近より外反する。2は背低気味で、内底面が広く、器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。3は背高で、器壁は大きく開きながら立ち上がり、体部上位より外反する。口縁部の一部に研磨痕が残る。4はいわゆる薄手丸深型。口縁部の一部に打ち欠き痕が残る。5は瓦

表4 第2面遺構規模法量表

遺構名	規模cm	上場径/辺	下場径/辺	深さ	壁板など
p1	47×28	22×18	20	桃	
p3	45		12	32	
p4	41		23	16	
p5	46×35	36×19	19		
p6	47×38	22×16	11		
p8	41×35		10	24	
p9	44		17	17	
p10	43×34	29×20	22	壁板	
p11	39×33	29×17	26	壁板	
p12	38×32		22	32 壁板	
p14	32	/		12	
p16	48×43	36×28	18		
p17	34		20	14	
p18	36		16	28	
p19	55		37	10 壁板	
p21	/	/		10	
p22	38		15	24	
p23	67×44	42×30	40	壁板	
p24	43×28	32×29	22	壁板	
p36	55×40	28×22	27		
p38	29		15	37	
p39	27×18	19×13	10 壁板		
p40	34×29	28×20	15 壁板		
p105	23×20	18×8	15		
p106	33		17	12	
土壌3	67		25	21	
土壌7	/	/		19	



図22 第2面直上出土遺物

器焼。わずかに遺存する内底面には菊花暗文が見られる。6は瓦質火鉢の口縁部片。7は平瓦。凹面は布目痕が残る。

8～9は13世紀後半から14世紀前半にかけて生産された常滑窯の口縁部片である。

10は白磁口元皿。外底部の釉は拭い取られる。内外面ともに使用によるキズを認められないが、口元部分に煤が付着し、体部外面の釉は二次焼成を受けて失透気味である。部分的にわずかに煤が付着することから灯明皿に使用されたものと思われる。

11は黒色頁岩製の硯。上側面とフチに黒色漆が残る。

12は木製把手か。左右の上側面は面取りされるが、左右対称になっていない。13は漆皿。黒色漆を塗った後に、赤色漆によるラフな扇が手描きされる。14は横櫛。1cm当たりの歯数は3枚と粗い。漆は塗されていない。15～16は箸。16の上端部は無調整である。17～18は用途不明木製品。17の表面は丁寧な削り調整がなされ、上部から中部にかけて中空になっている。脚の可能性がある。18は一見、自在鉤のように見えるが、中心から上方と下方とで切れ込みの方向が違っていることから、機械の部品とも考えられる。全体に丁寧な削り調整がなされ、左側面には浅い溝状の掘り込みが見られる。

自然遺物はイノシシの左尺骨(p)が1点と肋骨が1点、ウサギ左寛骨が1点、ヒシクイの橈骨が1点出土している。

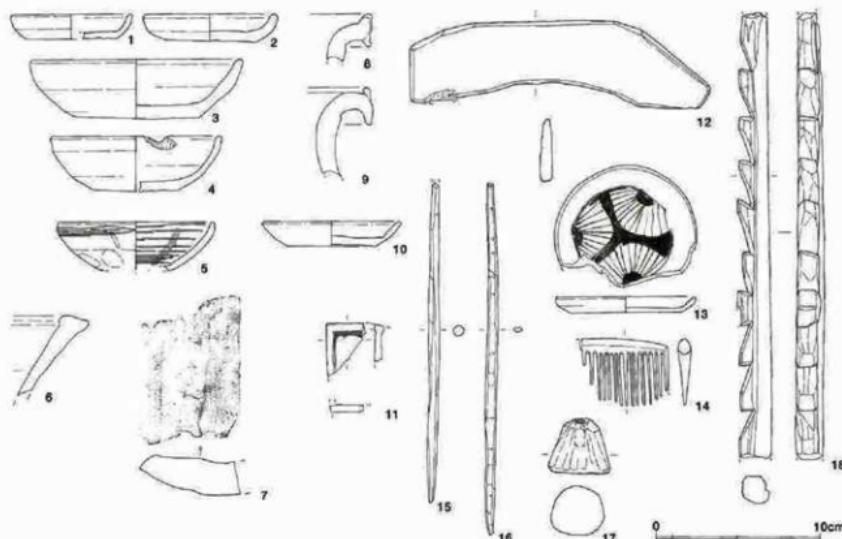


図23 第2面下出土遺物

第6節 第1面

第一区と第二区にわたって調査区全域を唯一調査できた生活面である。調査区全域であっても40m²に満たない広さであるが、第一区にのみしか調査できなかった下層生活面での成果に比べて、第1面では造構相互の関係を明確に把握することができた。下層生活面の成果も第1面での造構関係を前提に考察すべきものとなる。

第1面に発見された遺構は、道路と道路側溝、それに道路に対して直交する溝、さらに2基の土壙である。調査区壁面の土層堆積を見ても、道路面と溝の掘り込まれなかつ平坦面の面構成土に明らかな相違を見ることができる。

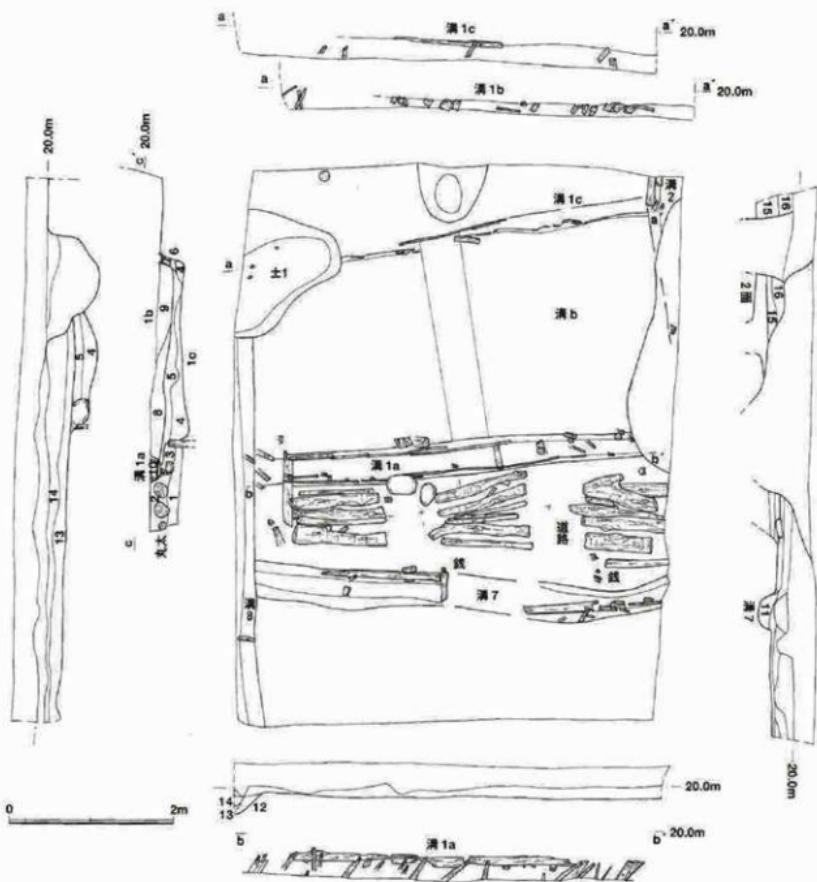
道路

調査区のほぼ中央を東西に延びて発見された。路面は砂質凝灰岩を破碎した砂を一面に敷き詰めて造られ、一部に上面の平らな安山岩礫が顔を覗かせている。砂面上に轍などの痕跡を見ることはなかったが、南北両端に砂とは異なる堆積土が認められたため、道路面と判断した。路面である砂を剥ぎ取ると、赤松の丸太が表皮を残しながら枝を払い落とされ、ほぼまっすぐな状態のものばかり3本が併行に並べられて発見された。発見状況から、これらが意図的に据え置かれたものと判断し、丸太材が据え置かれた高さで路面の砂を全体に剥ぎ取ったところ、長さ110cm前後の赤松の丸太を5ないし6本を一組にして並べ、それらを5ないし60cmの間隔を置いて東西に配置し、その上に砂を突き固めていることがわかった。また、丸太材はより下層の砂を多く交えながらも泥岩粒や粘質土交えた道路基盤層の上に置かれていることも窺うことができた。こうした状況から、丸太材は基盤層上面に据えられて、路面を支える路盤を構成する路盤材であることを確認した。

5ないし6本を一組とする丸太材は都合三列が調査区内に残されていた。両端までの長さは、453cmを測る。丸太材は調査区東壁の中へと続いているため、路面は調査区の東外へは確實に延伸する。他方、丸太列の西端から調査区の西壁までは55cmを残しているが、後述の溝8との関係から西方への延伸は判然としない。また、路面に顔をのぞかせていた安山岩礫は、丸太列の間に位置しており、部分的な路面保持のために挿入されたものと考えらる。さらに、この安山岩は、本来建物礎石に用いられたものであろうから、礎石建物の存置した場所から持ち込まれたものであり、近隣の円覚寺との関連が想定される。

路盤調査の際には、沈み込んでいた安山岩礫の上面およびその周囲より、銭と水晶製小型五輪塔が発見された。調査途上に1点ずつ出土した銭のなかには、出土地点を押さえずに取り上げてしまったものもあるが、出土地点を確認できたものは図24と図25にその地点を示している。なかでも図25に示した地点からは、銭13枚がまとまって発見され、その傍らから水晶製の小型五輪塔が発見された。13枚の銭は沈み込んだ安山岩礫の縁に少しずつ重なって並ぶように位置し、おそらくは紐に通された縁の状態であったものが紐の腐食とともにいずれ落ちたと考えられる。傍らには空風輪を欠いた水晶五輪塔が横倒しの状況で出土した。五輪塔の火輪の上面から水輪の中央に向けて穴が開いており、本来は舍利を収めたものだが、内部に水晶などの舍利は残されていなかった。また、この穴は空風輪下端のホゾで塞がれたものであろう。

丸太列の間に据えられた安山岩礫の脇に発見されたこれら銭と五輪塔は、単に路面に落ちたままに忘れ去られたものとは考え難い。路面の比較的軟弱な丸太列のない部分に据えられた安山岩礫は、道路の全体構成からみて、当初から置かれたものではなく、部分的な補修のためと考えられる。であれば、この比較的軟弱な部位で起きた事故を弔うために、路面補強の際に安山岩礫とともに銭と五輪塔が路



土層注記

- | | |
|-------------------------------|----------------------|
| 1. 黄灰色粘質土・粗砂・泥岩粒を多く混入する。 | 12. 灰色粘質土・砂粒を多く混入する。 |
| 2. 黄褐色砂質土。 | 13. 暗褐色弱粘質土・炭化物多く。 |
| 3. 茶褐色砂質土・粗砂と泥岩塊を多く混入し、堅くしまる。 | 14. ◇ ◇ ◇ |
| 4. 黒褐色弱粘質土。 | 15. ◇ ◇ ◇ |
| 5. ◇ ◇ ◇ 泥岩塊多し。 | 16. 茶褐色砂色質土。 } 溝 2 |
| 6. 棕色粘土。 | |
| 7. 棕色弱粘質土。 | |
| 8. 黑褐色弱粘質土。 } 溝 1b | |
| 9. 泥岩塊。 } 溝 1a | |
| 10. 暗褐色砂質土。 溝 1a | |
| 11. 暗灰色粘質土。 溝 7 | |

図24 調査区第1面全測図

面の中に埋め置かれたのでは、との想像は突飛だろうか。

道路脇の側溝の位置から判断した場合の道路幅は、調査区東端で161cm、調査区西端で93cmを測る。路面の海拔高は、東端で19.04m、西端で20.04mを測る。東へ向けて10cm下っている。この海拔高は、調査区の東に面する現況の県道よりも10cm程高い位置にある。

道路面直上より出土した遺物は、細破片を含めてまったくなかった。図26と27、および、表6に図示した遺物は路面を支える路盤より出土した。

図26—1～2はかわらけ。1は背低気味で、器壁は大きく開きながら立ち上がる。2は背低気味で、内底面が広く、器壁は内湾しながら立ち上がり、体部上位付近よりわずかに外反する。3～4は瓦器質胎土の白かわらけ。3の外面は煤が付着する。5は丸瓦。凸面に繩目叩きの後に、ヘラ調整、凹面に布目痕が明瞭に残る。6は土錘。表面には指頭痕が明瞭に残る。

7は13世紀初頭の瀬戸灰釉鉢皿。外底部はヘラ調整の後、中心付近は指頭による調整がなされる。8は常滑洗の口縁部片。内底面は沈線の痕跡がわずかに見られる。9は常滑片口鉢I類。遺存部には使用による摩滅痕は見られない。10～11は常滑片口鉢II類。10の体部外面上位より下方に指頭押さえが残る。10の遺存部には使用による摩滅痕は見られないが、11の体部内面中位より下方に摩滅痕が残る。

12は青磁盤類。破片の状態で強い二次焼成を受け、釉表が荒れている。13は青磁双魚文鉢。内底面には使用によるキズがわずかに残る。また、破損断面には漆縫ぎ跡が残る。

14～17は用途不明木製品。側面形は船型を呈する。上面は四角形に浅い溝が巡るものと思われ、その溝に穿孔を通る細紐が遺存する。溝の内側や下面、さらに側面には木釘孔が見られる。15は円板状木製品。16は周囲を八角形に丁寧に面取りする。裏面には直径3cmほどに渡って摩滅痕が残ることから、何らかの台板に使用された可能性がある。17は全体に丁寧な削り調整がなされ、上部の出っ張り部には穿孔が残るが、木釘などは見られなかった。16は脚。差し込み部を除いて黒色漆が塗られる。19は製作途上木製品。全体に粗い削り痕が残る。20は木栓か。21～31は箸。最短は19.9cm、最長は22.4cmを測る。両先端ともに細く削られる。32は曲物の側板か。表面には墨書による半菊文が手書きされる。33は曲物底板。側面には木釘孔が4箇所残り、また、表面のみに黒色漆が塗られる。34は雑などの工具の柄と思われる。下部は5cm程の長さの浅い溝が遺存していた。

図27～35は水晶製の五輪塔。出土状況は前述の通りである。火輪、水輪、地輪が一体になっており、その内部に舍利を収めるタイプである。空風輪が蓋替わりになっているが、内部に舍利は遺存しておらず、また空風輪も発見できなかった。36は淡紅緑色細粒泥岩製の鳴滝産土石。左右、および上側面に生産地加工痕、表面に砥面が残る。37は淡灰色緻密砂質凝灰岩製の中砥か。左右、および表面に砥面が残る。38は滑石鍋転用のスタンプ。ラフな藤文が彫りだされる。39は安山岩製の碁石か。

40は用途不明骨製品。表面は磨かれ、裏面に粗い削り痕が残る。また、中央に穿孔が見られる。

41は釘。42～56は銭。水晶製五輪塔とともに出土した13枚の銭の周辺に散乱していたことから、それらと同時に埋納された可能性がある。42～43は唐銭の「開元通寶」。背面に文字や月・星・甲文などは見られない。43の銭径は小さく、薄い。44は976年初鋤の「太平通寶」、45は998年初鋤の「咸平元寶」、46は1034年初鋤の「景祐元寶」、47は1038年初鋤の「皇宋通寶」、48は1064年初鋤の「治平元寶」、49～51は1068年初鋤の「熙寧元寶」、52は1094年初鋤の「紹聖元寶」、53は1101年初鋤の「聖宋



図25 第1面路盤中出土銭と水晶製小型五輪塔

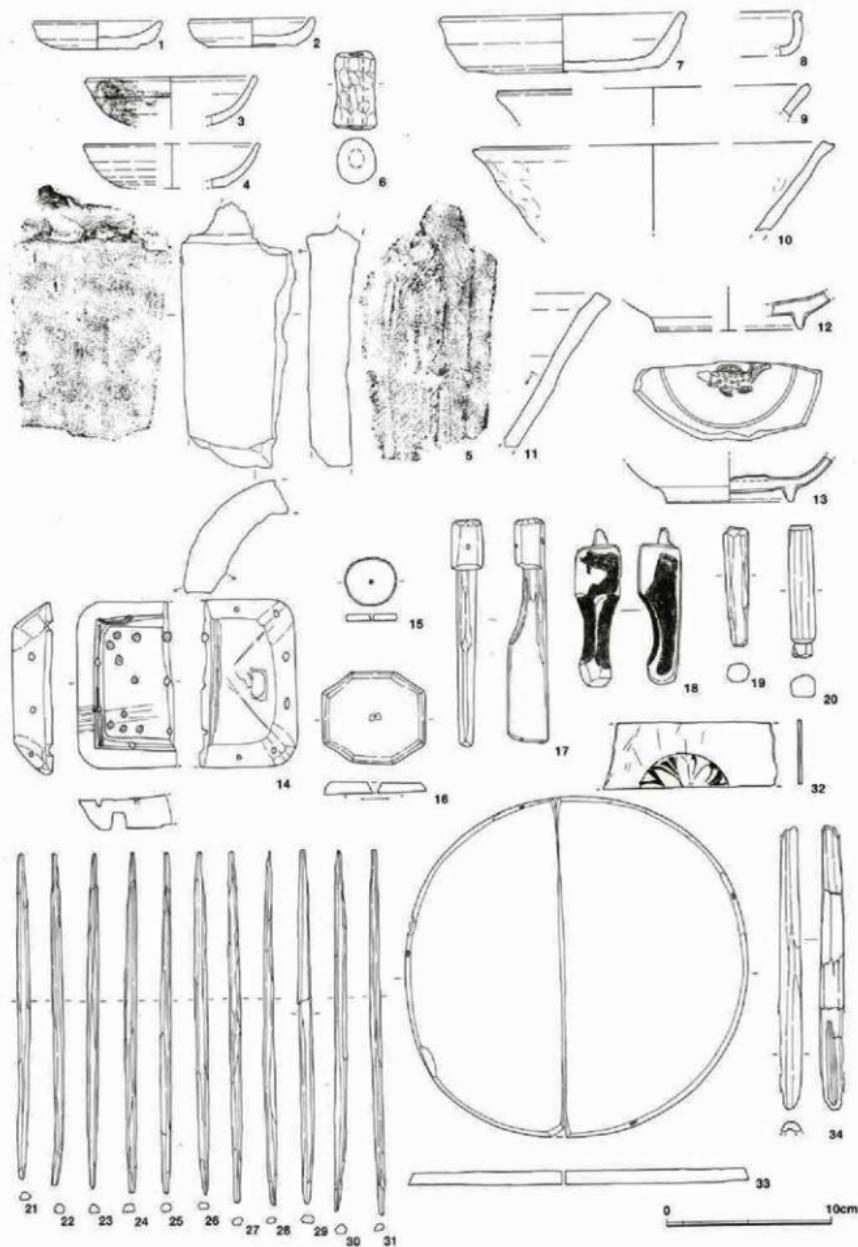


图26 第1面路馆出土遗物（1）

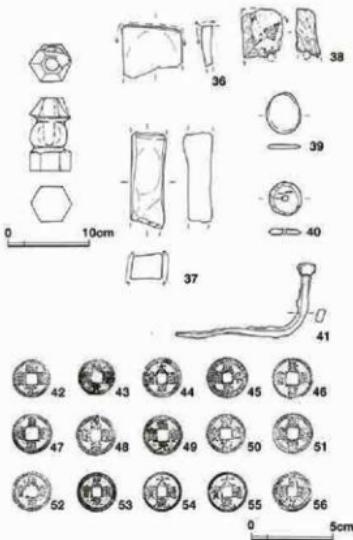


図27 第1面路盤出土遺物（2）

元寶」、54～55は1107年初鋤の「大觀通寶」、56は錯による腐食のため、錢種を特定できなかった。いずれも背面に文字などは見られなかった。表6は水晶製五輪塔の周辺より重なるように出土したため、錢縁であったことが予測できたことから、その順番と表裏を確認しながら取り上げを行った。表6－1は1038年初鋤の「皇宋通寶」、2は1107年初鋤の「大觀通寶」、3～4は1023年初鋤の「天聖元寶」、5は1205年初鋤の「開禧通寶」、背面には「二」。6は1086年初鋤の「元祐通寶」、7は1064年初鋤の「治平元寶」、8は1078年初鋤の「元豐通寶」、9は1068年初鋤の「熙寧通寶」、10は1086年初鋤の「元祐通寶」、11は前1118年初鋤の「五銖」銭。12は1004年初鋤の「景德元寶」、13は右半分が欠損しており、錢種を特定できなかった。5以外の背面に文字などは見られない。

自然遺物はマツカサガ1点、クルミが2点、モモが1点、ハマグリが2点出土している。

道路側溝

道路の南北両側には側溝を配置して、路面の乾燥を図っている。側溝は、道路の北側で3条、南側に1条を確認した。北側の3条は、作り替えによるもので、機能は同じである。南側の溝も北側と同様に作り替えが行なわれていたことは、調査区外南方に設定された確認調査埴土層堆積に認められた東西方向の溝の存在から推定できる。ただし、本調査においては、上述の調査期間短縮の事由により道路南側での側溝作り替えを確認できなかった。

溝1a

北側の最新の道路側溝である。同時期の南道路側溝は溝7である。この南北両側溝は、掘り方内に側板を設置して杭で押さえる木組みを備える。

上場32cm、下場30cm、深さ13cmの掘り方の内法いっぱいに木組みを設置する。幅12cmを基本として長さ48cmから192cmまでのまちまちの長さの板材を掘り方の壁に横たえている。板材のそれぞれに端

表5 第1面繪錢状錢一覽 (1)

道路路盤中出土錢						
番号	表裏	錢種	裏面	初鑄年	備考	拓本
1	裏	皇宋通寶		1038		
2	裏	大觀通寶		1107		
3	表	天聖元寶		1023		
4	裏	天聖元寶		1023		
5	表	開禧通寶	二	1205		 
6	裏	元祐通寶		1086		
7	表	治平元寶		1064	6の下から出土	

表5 第1面鋸銭状錢一覧(2)

総番号	表裏	銭種	裏面	初鑄年	備考	拓本
8	裏	元豐通寶		1078		
9	表	熙寧通寶		1068		
10	表	元祐通寶		1086		
11	裏	五銖		前118	珍しい前漢のものと思われるが、やや薄い。	
12	裏	景德元寶		1004		
13		□□元寶			2の下から滑り落ちて、石の脇から出土	

部を重ね合わせて隙間を塞ぎ、時に幅の狭い板材で補強している。板材を溝の内側から押さえつける杭は、様々で幅3cmに満たないものから4×6cmの角材、横板と同じ幅の板材まで多様である。溝の底面に底板はなく、掘り方底面が溝底とされている。溝は調査区東端では搅乱層によって失われているが、道路面と同様に調査区東外まで延伸すると考えられる。他方、調査区西端では掘り方が不明瞭となり、木組みの横板がなくなって杭のみが4本打ち込まれて後述の溝8によって壊されている。た

だし、単に壊されているのか、溝8と連結するのかを調査では確かめられなかった。溝底面の海拔高は、東端で19.75m、西端で19.71mとはほぼ平坦である。

図28—1～4はかわらけ。1は背低で、内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。2～4は背高気味で、器壁は内湾気味に立ち上がり、体部上位付近より外反する。

5は木製盆の軒用品。表面は黒色漆が漆刷毛痕が残るようならフに塗られた後、朱色を呈する赤色漆による植物文が押印される。側面から外底面にかけては漆が塗られない。穿孔は黒色漆を施して後に開けられている。

溝7

上場48cm、下場29cm、深さ17cmの掘り方内に木組みを設置する。木組みの遺存状況は悪い。第1面の直上には現在のライフライン付設の壙や、わずかに残されている江戸時代に行なわれた地業の際に持ち込まれた泥岩で大方の木組みが壊されていたためである。木組みの様子を窺うことのできる部位は、溝の東南端にわずかに残されている。横板は12cm幅の板材が用いられ、それを押された杭はやはり多様で板材までもが使われている。溝中央付近に板材が底面付近から発見されているが、木組み溝の底板ではなく、道路版築の際に水平を保つために挿入されたものであって、板材は溝底面幅より長い。

溝の西端は、後述の溝8によって壊されている。溝底面の海拔高は、溝8の方が3cm低い。

図29—1は14世紀代の常滑片口鉢Ⅱ類。体部内面中位より下方に使用による摩滅痕が残る。

溝1b

溝1aの前身の道路側溝である。溝幅がかなり広く、掘り方規模で240cmを超える。溝の南肩を溝1aに壊されて、そこから北側に広がる幅広の溝となる。北側の立ち上がり壁に幅3cmから12cmのさまざまな幅の板材が差し立て掛けられている。板材の押さえに長手の板材が溝の内側から渡されているが、それらを止めた杭などは見当たらなかった。掘り方内いっぱいに設置された板組みを持つ本溝の深さは、16cmと浅い。溝内からは木器が多数出土したが、大小の泥岩塊でぎっしりと埋め立てられているため、出土した木器も大半は潰されてしまっていた。溝底面の海拔高は、東端で19.7m、西端近くで19.86mを測る。東へ向けて下る。

図30—1～14はかわらけ。1は背低気味で、器壁は大きく開きながら立ち上がる。内外面ともに煤

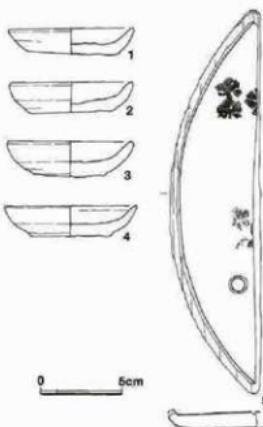


図28 第1面溝1a出土遺物

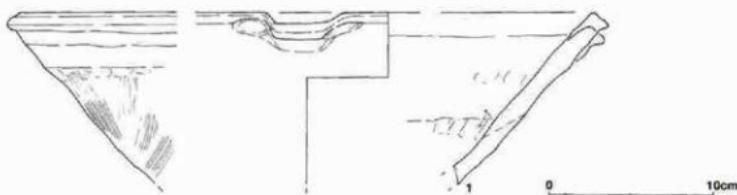
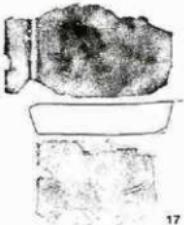
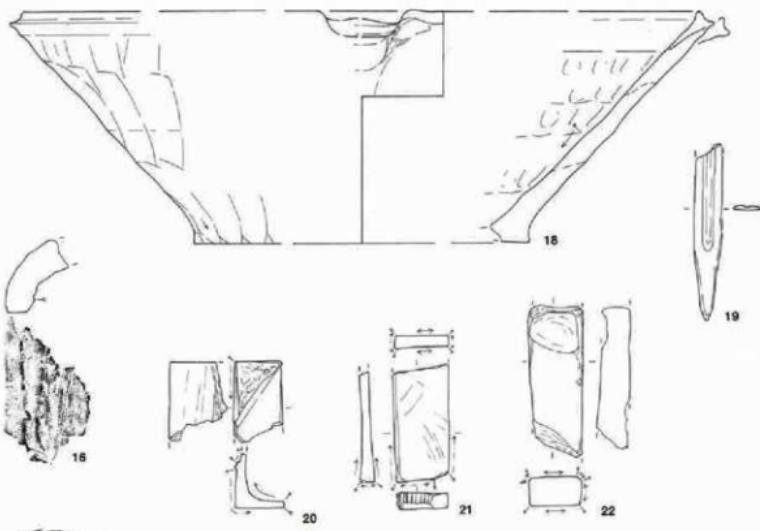
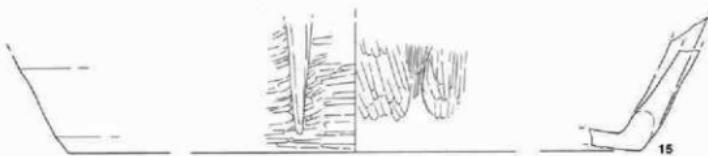
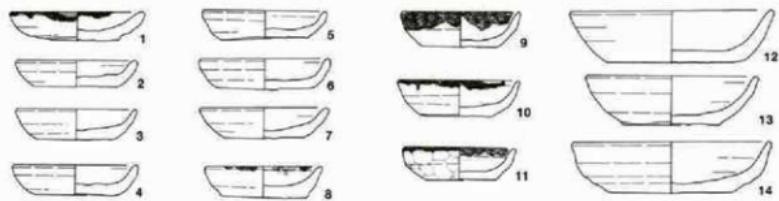


図29 第1面溝7出土遺物



0 10cm

図30 第1面溝1b出土遺物(1)

が付着し、内底面の器表は熱により剥離する。2～7は背低か、背低気味で、内底面が広く、器壁は内弯氣味に立ち上がり、体部上位付近より外反する。8は背高気味で、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がり、口縁部付近より大きく外反する。煤が付着する。9～11は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部上位付近より強く外反し、側面觀境型を呈する。いずれも煤が付着する。また、11の体部外面は溶融した鉄分が付着することから、とりべとして使用されたものと思われる。12は背高で、内底面が広く、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。13～14は背高で、器壁は内弯しながら立ち上がり、体部中位付近より外反する。15は瓦質輪花型火鉢。体部外面

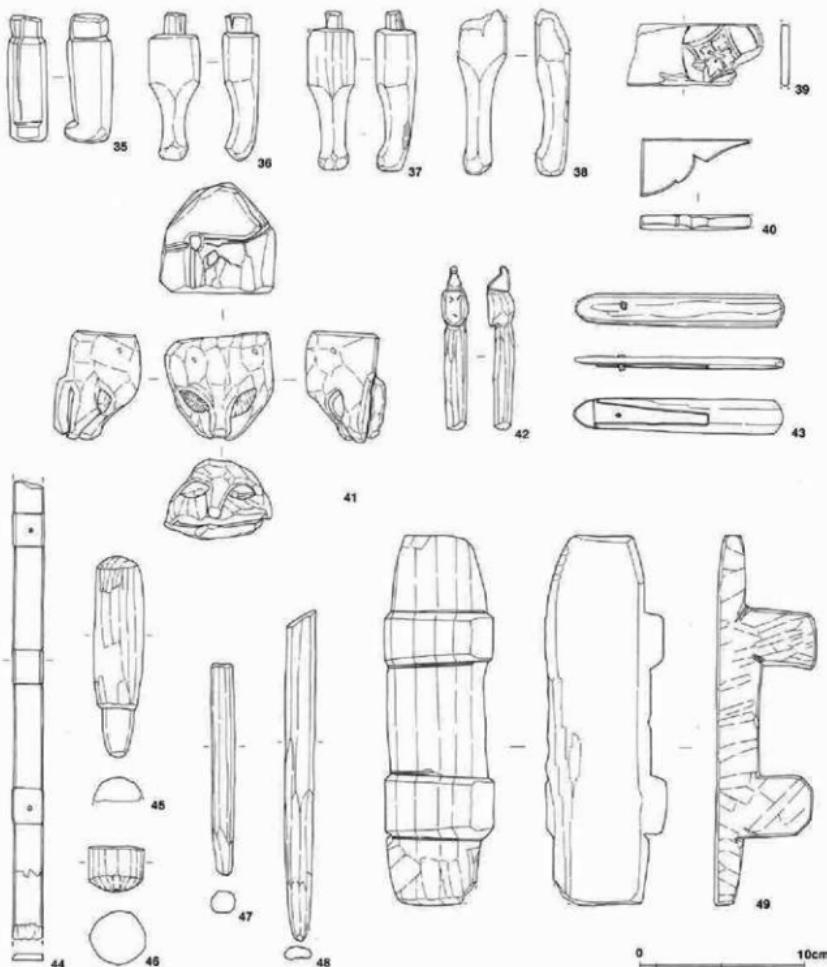


図31 第1面満1b出土遺物（2）

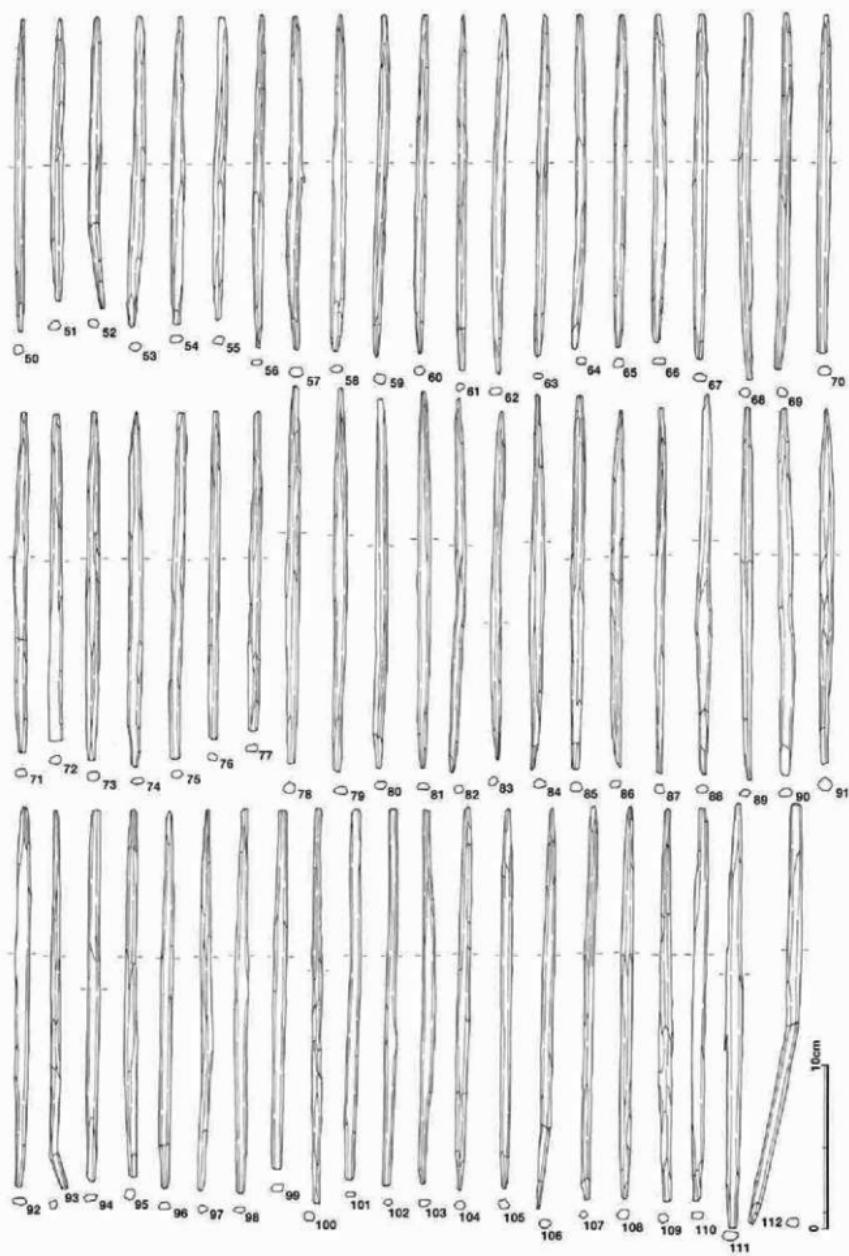


図32 第1面溝1b出土遺物（3）

と内面最下位まではヘラミガキにより調整される。16は丸瓦。凸面にヘラ調整、凹面に布目痕が明瞭に残る。17は平瓦。凹・凸面ともにヘラ調整がなされる。

18は14~15世紀にかけての常滑片口鉢Ⅱ類。体部内面中位より下方は使用による摩滅痕が残る。土層説明で記したように、発見された第1面より新しい時期の堆積層の失われてしまった生活面に帰属するものと考えられる。19は笄。

20は暗赤褐色頁岩製の用途不明石製品か。表面は二方向からの擦り切り痕、左側面に研磨、あるいは摩滅痕が残る。21~22はともに鳴滝産の淡黄色細粒泥岩製の仕上砥である。21は左右、および下側面に生産地における成形痕、表裏面には砥面が残る。22は右側面と左側面上部に生産地における成形痕、表裏面とともに砥面が残る。

23~34は銭。23は唐銭の「開元通寶」。「元」と「通」の間に孔が見られる。また、銭厚は薄い。24は1023年初鋤の「天聖元寶」。25は1038年初鋤の「皇宋通寶」。「宋」と「通」の間に小孔が見られる。26は1054年初鋤の「至和元寶」。27は1056年初鋤の「嘉祐元寶」。28は1068年初鋤の「熙寧元寶」。29は1078年初鋤の「元豐通寶」。30~31は1094年初鋤の「紹聖元寶」。32は1098年初鋤の「元符通寶」。33は1101年初鋤の「聖宋元寶」。34は1111年初鋤の「政和通寶」である。いずれも背面に文字などは見られない。

図31~35~38は脚。35は製作途上品。粗い削り段階で廃棄されたものと考えられる。36と37はほぞを除く全面に、また38は遺存部全面に黒色漆が塗られる。36のほぞの頂部には赤色漆が塗られる。39は盆か。表裏面ともに黒色漆を塗った後、表面に朱色を呈する赤色漆による唐花が手描きされる。40は調度飾り。上面、および左側面を除き、黒色漆が塗られる。41はヤマネコの木偶。下面と上面を除き、丁寧な削りによる調整がなされる。右目にあたる部分は下面まで突き抜けて穿孔されているため、この部分に細い棒を差し込み動かしたものと考えられる。また、顔の上方には貫通しない小孔が1箇所ずつ見られるが、胸部となる「かぶせ」を留めた痕跡の可能性がある。42は人形。全体に細い削り調整がなされ、鳥帽子や目と口も表現されている。43は刀子の柄。裏面には刀子を固定するための浅い削りが彫られ、目釘孔には木釘が遺存する。44は格子の部材。上下端に木釘孔が残る。45~48は用途不明木製品。46は下端に径0.3cm、長さ0.9cmの差し込みが彫られる。独楽の製作途上品の可能性がある。47~48は下端を細く削り出そうとしている様子が見て取れることから、製作途上品の可能性がある。49は幅が7.2cmほどしかなく、左側面上方と右側面に明瞭な工具痕が残ることから、連歛下駄の再加工途上品と思われる。図32は箸。最短は17.2cm、最長は26.2cmを測る。両端を細く削るものが多いが、雑な削りのものが多い。また、上方のみを削り、他方は無調整のものが見られる。

自然遺物は炭化したクルミが8点、炭化したオニグルミが9点、モモが5点、アカニシが2点、ハマグリが2点、サルボウが1点出土している。

溝1c

溝1bの前身の道路側溝である。やはり幅広で、南北幅228cmの掘り方規模を持つ。掘り方の北側壁にのみ横板を杭で押さえる木組みを残している。板材の腐食が激しく不明瞭であるが、長さ132cm、幅6cmの横板を杭や板で内側から押さえている。掘り方南側での立ち上がりは、道路作成の土留めを利用している。本溝は第1面道路に取りつく最古の側溝であるが、溝の調査によって、道路の造作過程も判明した。

溝1aが機能した時期の道路面は、砂面が広がるのみであったが、道路面は本来、砂の路面脇に泥岩塊が顔を出す路肩があったようだ。道路は泥岩と砂と粘質土を敷いた上に先の丸太を内包した路盤を作って、最上面の路面が砂質凝灰岩を碎いた砂で平坦面を作り出されていた。しかし路盤脇は、よ

り大きな泥岩を含ませて突き固め、これをもって丸太を含む路盤の流れ出しを防ぎ、さらに路肩となつた泥岩を突き固めた層自身の流れ出しを防ぐために幅9cmの杭が打ち込まれた。溝1cはこの打ち込まれた杭を溝肩に利用している。

溝底面に板組みなどではなく、掘り方底面を溝底としている。底面の海拔高は、東端で19.57m、西端近くで19.58mで、ほぼ平坦である。

図33-1~10はかわらけ。1~3は背低か、背低気味で、内底面が広く、器壁はわずかに内弯気味に立ち上がり、口縁部付近より外反する。4は背低気味で、内底面が広く、器壁は大きく開きながら立ち上がる。5は背低気味で、底径口径比が大きく、厚い器壁は大きく開きながら立ち上がる。6は精良胎土のいわゆる薄手丸深型である。7~9は背高気味で、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がり、体部上位付近より外反する。8と9の器壁は薄い。10は体部内外面に墨書きの残るかわらけである。11は軒丸瓦。小型製品の可能性がある。瓦当は型作りにより成形され、全体にヘラナデにより調整される。

12は常滑片口鉢I類。体部内上面より下方にかけて煤が付着し、内面中位より下方は使用による摩滅痕が残る。13~14は14世紀前後の常滑片口鉢II類。13は体部内面中位より下方に使用による摩滅痕が残る。15は13世紀後半から14世紀後半にかけての瀬戸灰釉鉢皿。

16は青磁碗。内外面ともに使用によるキズは見られない。17は青磁鑄蓮弁文碗。内外面ともに使用によるキズが残る。

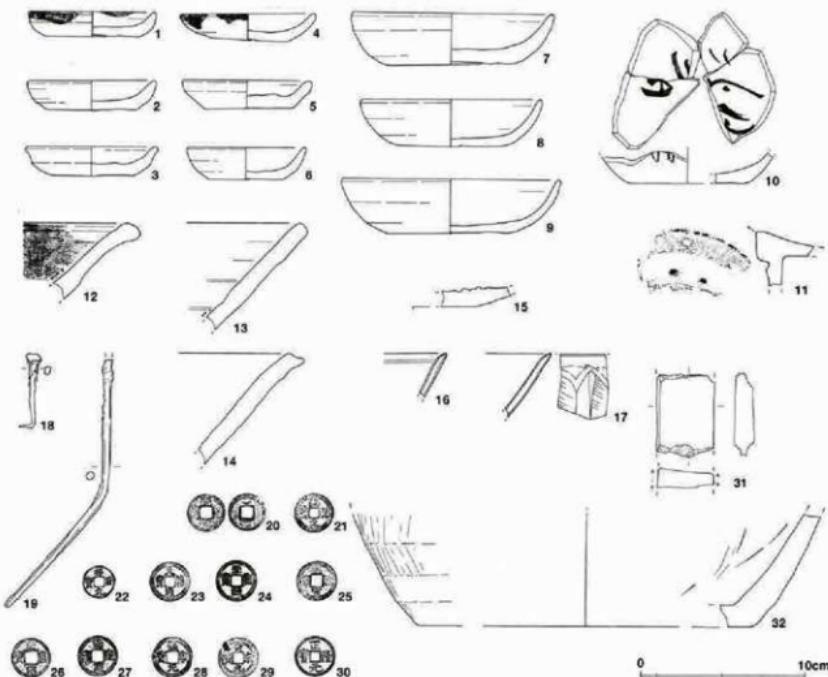


図33 第1面溝1c出土遺物(1)

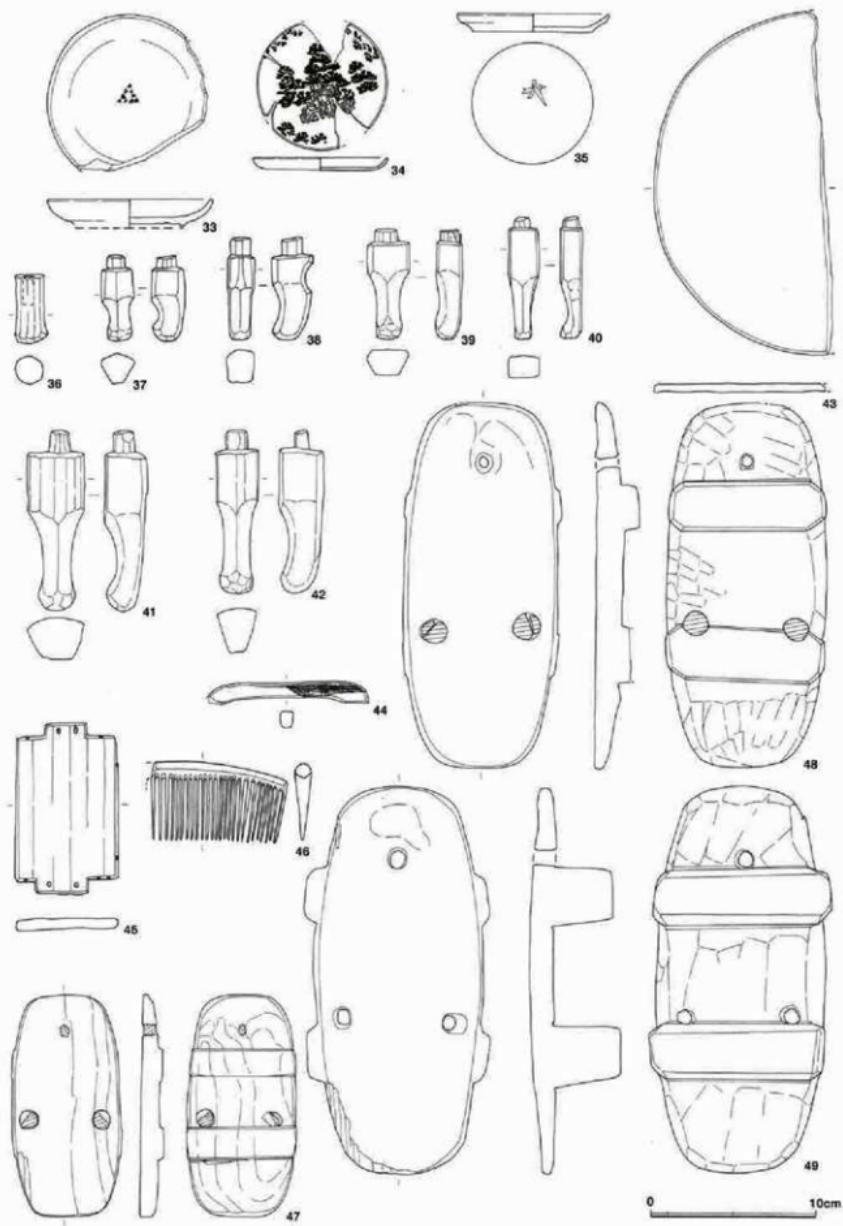


図34 第1面満1c出土遺物（2）

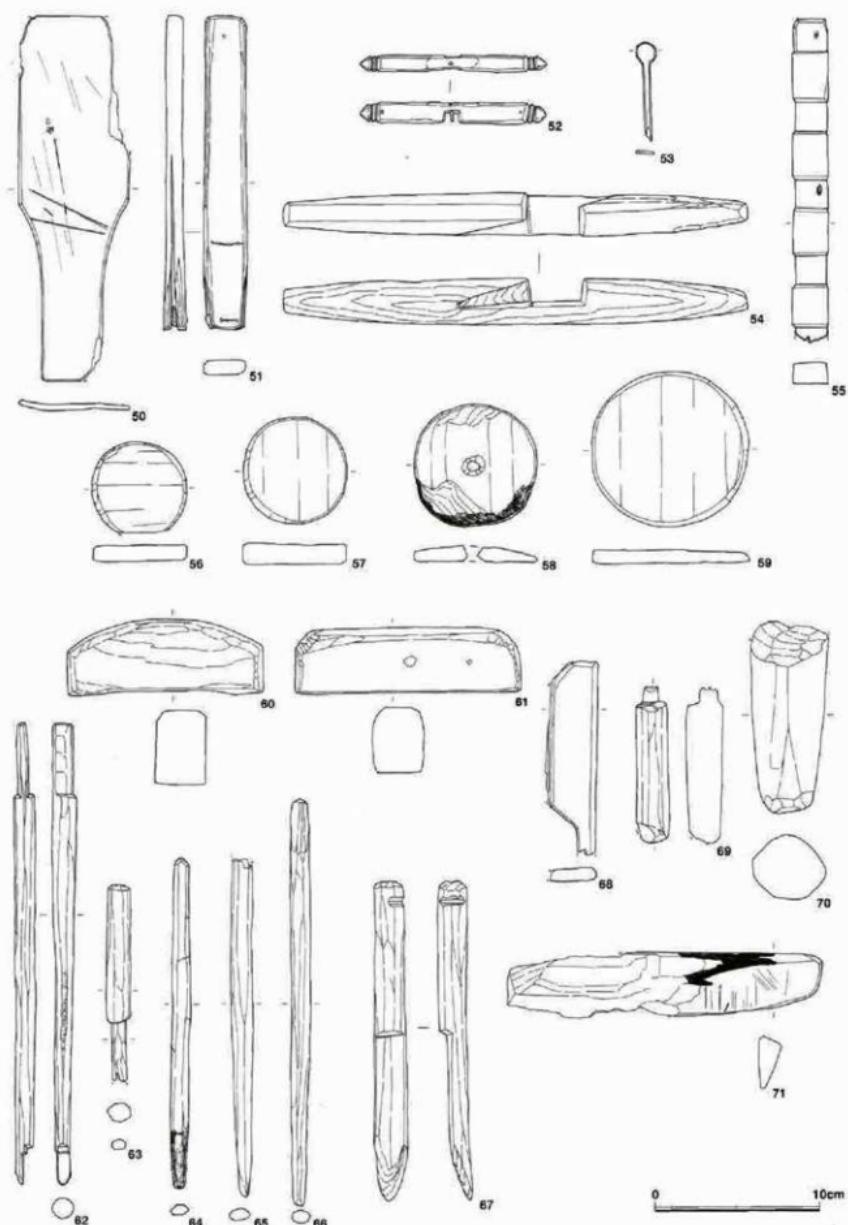


图35 第1面溝1c出土遺物（3）

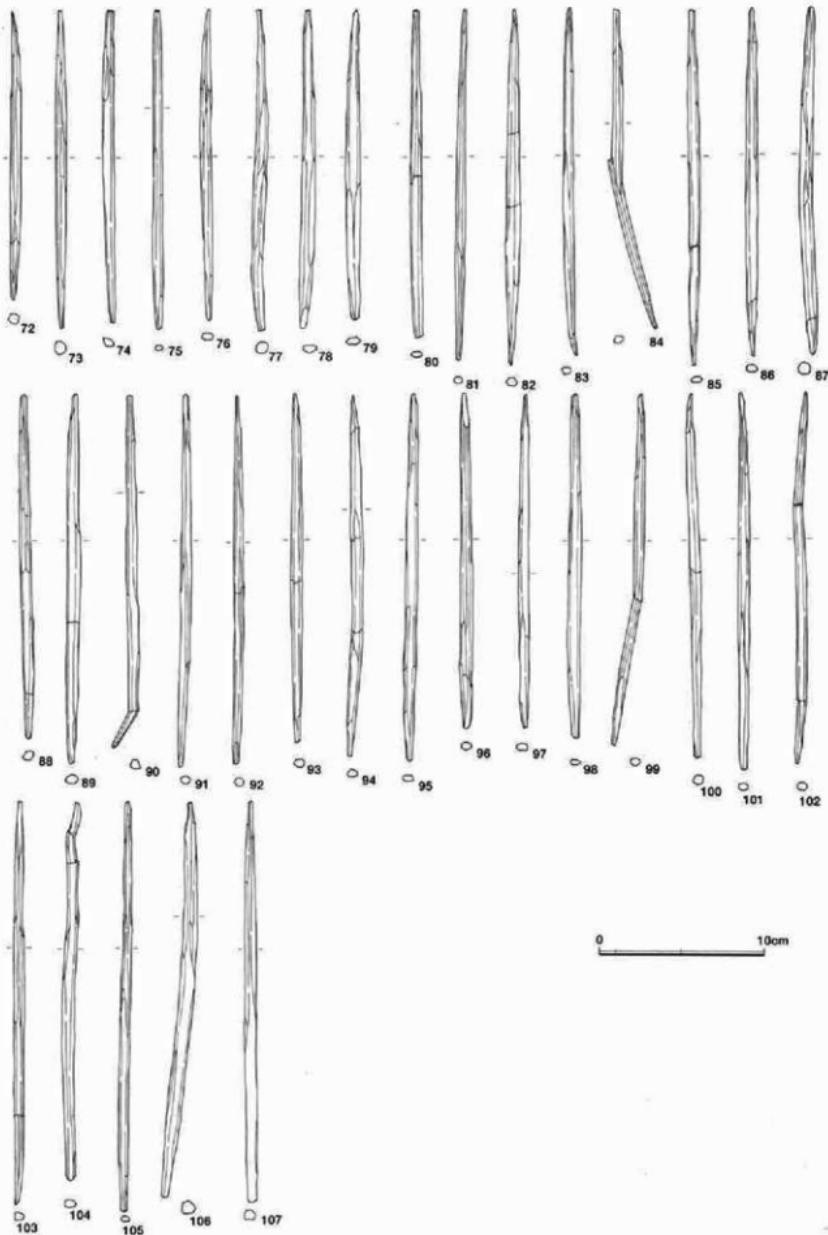


図36 第1面溝1c出土遺物(4)

18は釘、19は鉄製署である。20は唐銭の「開元通寶」。背面上に「月」が見られ、銭厚が薄い。21は990年初鑄の「淳化元寶」。22は1009年初鑄の「祥符元寶」。輪擦りにより銭径が小さくなっている。23は1017年初鑄の「天禧通寶」。24は1023年初鑄の「天聖元寶」。25～26は1038年初鑄の「皇宋通寶」。27～28は1068年初鑄の「熙寧元寶」。29は1101年初鑄の「聖宋元寶」。30は1157年初鑄の金朝の「正隆元寶」。

31は淡灰緑色細粒泥岩製の仕上砥。左右側面には生産地における成形痕が残る。32は滑石鍋。内外面ともに煤が付着する。体部内面には線状の引抜きキズが残る。

図34～33～35は漆皿。33は全面を黒色漆を塗った後、内面のみを暗赤色を呈する赤色漆を塗り、見込みに黒色漆による「三ツ鱗」が手描きされる。34の口径は8.15cmとやや小振りの皿である。全面に黒色漆を塗った後、朱色を呈する赤色漆により「花文」と「幾何学文」の組み合わせが押印される。35は全面に黒色漆が塗られる。施文は見られないが、外底面には刃状工具による切り込みが見られる。36～42は脚。36は小型で、ほぞのないタイプの脚である。表面に粗い削り調整痕が残る。施漆は見られない。37はほぞを除く全面に黒色漆が塗られ、ほぞの頂部には暗朱色を呈する赤色漆が塗られる。38は裏面にも大きな切れ込みが入る。施漆の痕跡はない。39～42はほぞを除く全面に黒色漆が塗られる。40と41はわずかに赤色漆が付着している。43は蓋か。表面は煤ける。44は把手。表面と上面は丁寧な削りにより調整される。表面は一部被火により炭化する。45は用途不明木製品。左側面をのぞいた側面とほぞ状部分に木釘孔が残ることから箱物の可能性がある。46は横櫛。全面に黒色漆が塗られる。1cmあたりの歯数は4枚。47～49は連歯下駄。47は全長が13.7cmしかないことから子供用の下駄であろう。1面上から全長13.9cmの下駄が出土しており、対になるものと考えられる。48～49の裏側は削り調整痕が明瞭に残る。図35～50は杓子状木製品。表面中央付近には何かに打ち付けたような痕跡が残る。51は刷毛の柄。板を裂いた部分に毛を挟み込み、下位付近と最下位で糸により留めて毛を固定している。裂いた板の間に炭化物が遺存していたが、炭化は著しく、刷毛の確認はできなかった。52は糸車。両端は宝珠形を呈する。中央には木釘が遺存していた。53は用途不明木製品。54は矢柄調整器の可能性がある。55は格子の部材。上位と中位に木釘が遺存している。56～59は円盤状木製品。いずれも側面は粗い削りにより調整される。58には穿孔が残る。60～61は用途不明木製品。いずれも細い削り調整がなされる。61の表面には何かに打ち付けたような痕跡が残る。62は部材と思われる。上端は左右からの、下端は右方向から2段の段状に切れ込みが入る。63は堅件の形代。64～66はヘラ状木製品。64の下端は炭化する。66は上端に細い削りが入ることから製作途上品の可能性がある。67は用途不明木製品。上端の丁寧な削りに比べ、下端はヘラ状にラフに成形されていることから、製作途上品の可能性がある。上位には切れ込みが見られる。68は用途不明木製品。刀形の可能性がある。69は脚の製作途中品か。ほぞにあたる部分を粗く削りだした段階で廃棄されたものと思われる。70は杵と思われる。下端は使用により擦り減っている。71は織具。断面形三角形を呈し、表裏面ともに縦方向に線状のキズが残ることから杼と思われる。図36は箸。最短は17.6cm、最長は25.3cmを測る。両端とともに細く削られるもの、両端ともに粗く削られるものと、下半分から下端は無調整のものが見られる。

自然遺物はマツカサガ2点、モモが2点、炭化したクルミが3点、炭化したオニグルミが1点、アカニシが2点、ツメタガイが1点、コシダカガングラが1点、ダンベイキサゴが1点、ハマグリが4点、イガイが2点、マダカアワビが1点出土している。

溝8

調査区の西端に南北方向に延伸して発見され。他の東西方向に伸びる溝を全て堵すように掘り込まれている。発見された落ち込みは、溝の東側上場のみで、溝の大方は調査区西外に広がっている。溝

底面も発見されていないため、深さも不明であるが、第1面の他の溝の規模から判断して、それほど深い溝とは思えない。溝内に横板を発見しなかったが、所々に杭の遺存を認めた。また、溝1aの掘り込みが不明瞭になり、4本の杭が打ち込まれた付近が溝8の掘り込み肩の位置と一致する。調査では、これらの杭が溝1aと溝8のどちらに帰属するのか判断できなかったが、溝8の底面を調査した限りでの海拔高が19.75mと、溝1a西端底面海拔高とほぼ一致することから、帰属不明の杭は両溝で共有するものであり、両溝は交差・連結していた可能性がある。また溝7と溝8も同様であろう。調査区西壁が溝8内に位置するために、調査区壁に残された土層が溝8の覆土であっただけで、上述のように溝8と東西溝の溝7・1a・1b・1cとの新旧関係を示すものではないかもしれない。

図37-1は白磁口兀皿。内外面ともに使用によるキズが著しく残る。

2は木製脚。上端に径0.8cm、深さ1.5cmほどの孔が開けられる。3は用途不明木製品。上～左側面は丁寧な面取り風の調整がなされる。4～5は格子。いずれも木釘が残る。

溝2

調査区の北東隅に発見された。溝1cを壊して南北に延伸する溝であるが、ほとんどが現代の配管埋設穴の搅乱によって失われている。本溝の規模は、深さのみが確認でき、46cmを測る。溝は木組みで護岸されるが、遺存状態は悪い。幅12cmあまりの横板を丸杭や板杭で押さえている。

溝1cを壊しているため、おそらくは溝1bも壊して南進するのであろうが、溝1aや丸太路盤の道路との関係は不明である。

図38-1はかわらけ。背低気味で、器壁は内弯気味に立ち上がり、上位付近よりわずかに外反する。煤が付着する。

2は1009年初鋤の「祥符通寶」。背面に文字などは見られない。輪擦りにより錢径が小さくなっている。

土壤1出土遺物

図39-1はかわらけ。背高気味で、薄い器壁は内弯しながら立ち上がり、口縁部下より強く外反する。2は平瓦。四面に布目痕、凸面に砂目とナデ調整か。

土壤10出土遺物

クルミが1点出土している。

ピット13出土遺物

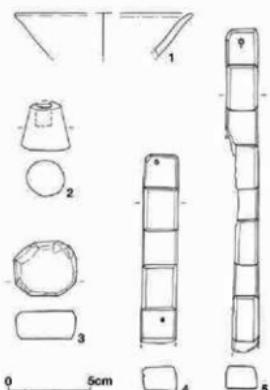


図37 第1面溝8出土遺物

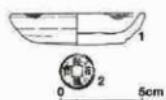


図38 第1面溝2出土遺物

表6 第1面遺構規模法量表

遺構名	規模(cm)	上場径/辺	下場径/辺	深さ	縦板など
土壤1		158	135	64	
土壤10		83	32	68	

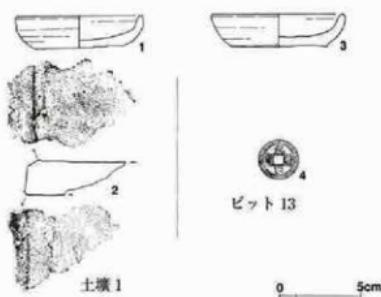
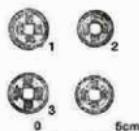


図39 第1面土壤1、ピット13出土遺物

図39—3 はかわらけ。背高気味で、薄い器壁は内弯しながら立ち上がり、口縁部付近より強く外反する。

4は1098年初鋤の「元符通寶」。背面に文字などは見られない。



第1面直上遺物

図40—1は995年初鋤の「至道元寶」。2は1038年初鋤の「皇宋通寶」。銭厚が薄く、銭径が小さい。3は1078年初鋤の「元豐通寶」。4は1101年初鋤の「聖宋元寶」。孔は加工されている。いずれも背面に文字などは見られない。

図40 第1面直上出土遺物

第1面下出土遺物

これら遺物群のうちの最新時期に帰属する遺物が、第1面の構築時を示している。図41—1は常滑片口鉢I類。口径が21.2cmと小振りである。貼付け高台は欠落する。体部内面下位から内底面にかけては使用による著しい摩滅痕が残る。2～3は14世紀代の常滑片口鉢II類。2は小片のため、傾きに不安がある。3の体部内面下位より下方に使用による摩滅痕が残る。

4は淡紅色細粒泥岩製の仕上砥。表裏面ともに砥面が残る。

5～6は銭。いずれも1078年初鋤の「元豐通寶」で、背面に文字などは見られない。

7は漆皿。全面に黒色漆を塗った後、朱色を呈する赤色漆により右回りの巴文が手描きされる。8は脚飾り。左、および上面を除いて黒色漆が塗られる。9～12は箸。最短は18.5cm、最長は22.3cmを測る。いずれも両端ともに細く削られる。13は錐。金属部分と柄が一体の状態で出土した。14は片口の形代。全体に細い削り痕が明瞭に残る。外底部は貫通しない孔が見られる。15は板草履の芯。全長が15.8cmと小さいことから子供用のものと考えられる。

自然遺物はモモが2点出土している。

第1面上出土遺物

ここからは、第1面使用時の遺物の他、失われてしまった中世上層生活面と大方が失われた江戸時代の遺物が混じりあって出土している。

図42—1～15はかわらけ。1は極小かわらけ。内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がり、口縁部付近は外反する。2～10は背低、あるいは背低気味で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近より外反する。11～12は背低気味で、器壁は大きく開きながら立ち上がる。13は背高で、薄い器壁は直立気味に立ち上がり、口縁部付近より外反する。14は精良胎土の、いわゆる薄手丸深型である。15は背高で、器壁はわずかに内弯しながら立ち上がる。

17～18は14世紀前半所産の瀬戸灰釉卸皿。19は14世紀前半所産の瀬戸灰釉小壺。体部内面は露胎。20～21は輪花型入子。外底部には糸切り痕が残る。20の体部外面には煤が付着し、内底面に使用による摩滅痕が残る。22～23は14世紀代所産の常滑片口鉢II類。遺存部には使用による摩滅痕が見られないが、23の体部内面には摩滅痕が残る。24は無高台であることから14世紀中頃所産の常滑山茶碗と思われる。体部内面下位より内底面にかけては使用による摩滅痕がわずかに残る。

25は18世紀代所産の肥前染付小碗。有田の製品と思われる。体部外面に「濃筆」という萬唐草文による手描きされる。内外面ともに使用によるキズは見られない。26は船載青磁籠運弁文鏡。体部外面に擣目のない細蓮弁、内面に割花文が描かれる。体部内外面ともに使用によるキズがわずかに残る。

27は淡緑色細粒泥岩製の鳴滝産仕上砥。上、および右側面は生産地成形痕、表裏面には砥面が残る。

28は白色粗粒凝灰岩製の中砥。左右側面に生産地成形痕、表裏面に砥面が残る。

29は釘。30は釘釘か。八角形を呈する釘頭は少し潰れている。31は釘隠しか。32~63は錢。32~34は唐錢の「開元通寶」、35は南唐錢の「開元通寶」である。36は990年初鑄の「淳化元寶」。方孔に加工が見られる。37は998年初鑄の「咸平元寶」。38は1009年初鑄の「祥符元寶」。39は1017年初鑄の「天禧通寶」。40~41は1023年初鑄の「天聖元寶」。42~43は1038年初鑄の「皇宋通寶」。44~45は1056年初鑄の「嘉祐元寶」。46は1064年初鑄の「治平元寶」。47~49は1068年初鑄の「熙寧元寶」。49は輪擦りにより錢径が小さくなっている。50~51は1078年初鑄の「元豐通寶」。52は1086年初鑄の「元祐通寶」。方孔は加工される。53は1094年初鑄の「紹聖元寶」。54は1098年初鑄の「元符通寶」。方孔は加工される。55は1107年初鑄の「大觀通寶」。56~58は1101年初鑄の「聖宋元寶」。56は方孔が加工される。59は1111年初鑄の「政和通寶」。60は1174年初鑄の「淳熙元寶」。背面は「月」。61は1195年初鑄の「慶元通寶」。背面は「三」か。62は寛永通寶。63は古寛永の可能性がある。

図43~64~66は漆皿。いずれも全面に黒色漆を塗った後、64は朱色を呈する赤色漆による手描きの菊文、65は朱色を呈する赤色漆による手描きのススキ、66は朱色を呈する赤色漆によるラフな手描きの車輪が描かれる。67は脚。施漆の痕跡は見られない。68~70は曲物の底板か。71は用途不明木製品。右上、および左上側面は面取り風に調整される。表面は刃状線と何かに打ち付けたような痕跡が残る。

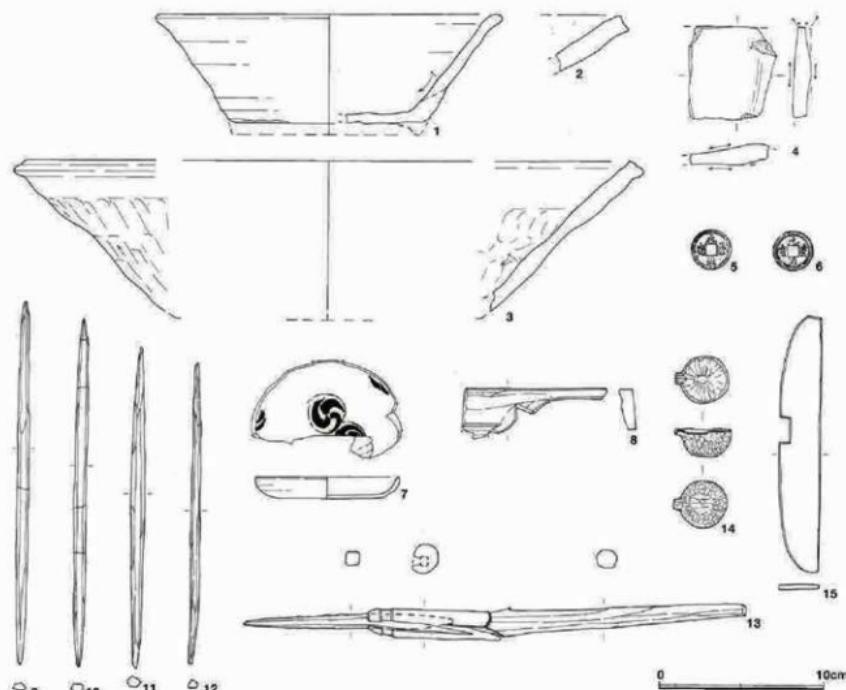


図41 第1面下出土遺物

72は連歯下駄。全長が13.9cmと小さいことから子供用の製品で、溝1cより出土した連歯下駄と対になるものと思われる。73は用途不明木製品。上部は人間の顔のように丁寧に削り調整が入れられる。左右側面に大きな切れ込みが見られることから部材の可能性がある。74は刀形か。切っ先部分は深く面取りして強調している。75～81は箸。最短は20.5cm、最長は25.0cmを測り、両先端ともに細く削られる。82は用途不明軸用木製品。表面裏面ともに黒色漆が塗られる。表面は何かに打ち付けたような痕跡が残る。83～84は木栓か。85は用途不明木製品。円盤状になる可能性がある。中央部は0.5cmほどの高まりがあり、その中央に穿孔が見られる。86は円盤状木製品。表面は丁寧な削り調整がなされるが、裏面は無調整である。

自然遺物はクルミが2点、アカニシが2点、ダイベイキサゴが1点、マグロ類椎体が4点、幼イヌの頭骨が1点、幼イヌの右下顎(per)が1点、ウサギの右脛骨(per)が1点出土している。

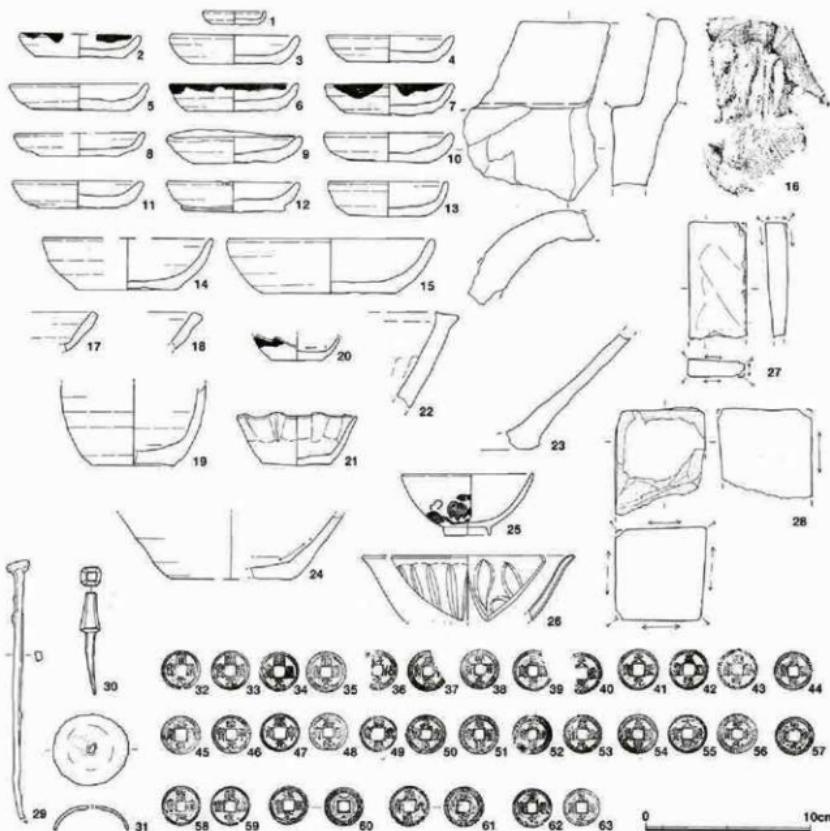


図42 第1面上出土遺物（1）

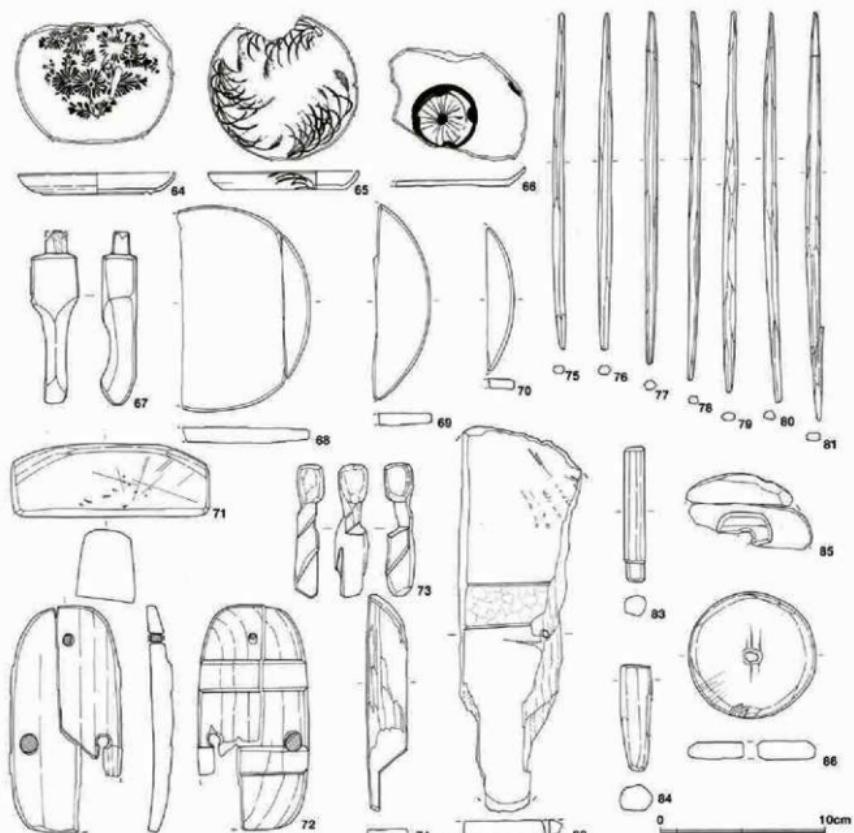


図43 第1面上出土遺物（2）

表探遺物

図44—1は14世紀代所産の常滑片口鉢Ⅱ類。遺存部に使用による摩滅痕は見られない。

2は青磁皿か。体部内面にヘラ状工具による蓮弁文と割花文の組み合わせが施文される。体部内面に使用によるキズが残る。

3は刀子。4は「寛永通寶」の真鍮四文銭。背面は11波の波文が描かれる。

確認調査中出土遺物

図46は確認調査中に出土した遺物である。なお、取り上げた遺物の出土層の記載がなかったため、図示した遺物の出土層位は不明である。

1は14世紀中頃、2は14世紀中過ぎから15世紀初頭にかけて作られた瀬戸灰釉折縁深皿である。3

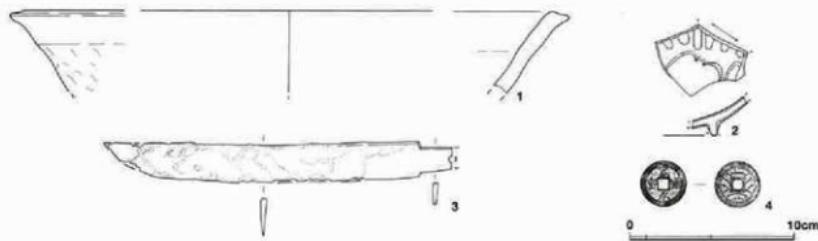


図44 表面採集遺物

は14世紀代の瀬戸灰釉平碗。内外面ともに二次焼成を受ける。4は14世紀末頃所産の瀬戸灰釉柄付片口。

5は漆皿。全面に黒色漆を塗った後、朱色を呈する赤色漆により内底面に「石」、外底面に「一」と手描きされる。6は曲物か柄杓。7は刀子鞘の製作途上品。裏面には刀子の切っ先に合わせて浅いへこみが見られる。表裏面ともに粗い削り調整痕が残る。

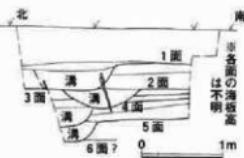


図45 確認調査土層図

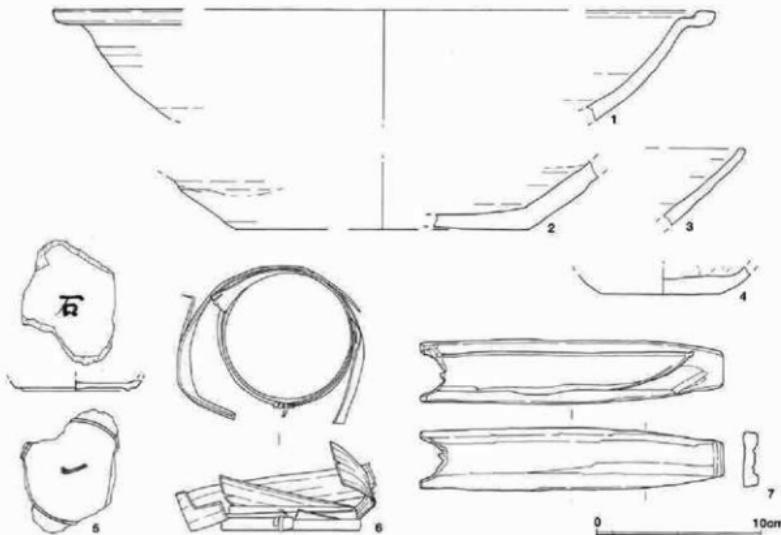


図46 確認調査中出土遺物

第7節 第1面出土の操り人形「山猫」木偶について

1. 山猫木偶 「山猫廻し」(首掛けの箱廻し)とは

伝統的な操り人形の代表と言えば、「文楽」等の3人遣いの人形淨瑠璃を思い出すであろう。これらは、都市の興行として、或いは祭礼の神輿わいとして「座組み」して、専業者や農民等の手によって常設舞台や小屋掛けの舞台で行われてきた。現在残る文楽は一体の人形を3人で遣う三人遣い人形であるが、これは上方においては享保十九年（1734）以降のことであり、それ以前は一人遣いであった。

しかし、今までに分かっているところでは、中世末から近世には、大道芸・門付け芸として、1人で（古くは2、3人組みもあった）首から箱を掛け、その箱の上部から操り人形を出して上演して歩く「傀儡師」と呼ばれる一派がいた（図47）。現代、人形芸能史においては、それらを「首掛けの箱廻し」とも呼んでいる。近世に



図47 傀儡師「淡路国名所図絵」嘉永四年（1851）刊



図48 あひすまひ「人倫訓蒙図彙」元禄三年（1690）刊



図49 傀儡師「繪本御伽品鏡」享保十五年（1730）刊

おいては、西宮がひとつの中心地で、「西宮」とか「えびすまわし」と呼ばれていた（図48）。江戸においては、「山猫廻し」と言われ、上演の最後に「山猫」の人形を出した（図49）。「絵本御伽品鏡」は享保十五年（1730）の刊行であるが、挿絵に添えられている詞章には、「どのやうなあやつりじゃやら 古（いにし）へは東（あづま）の野上 今 西宮」とある。西宮とは、兵庫県の西宮のことであり、「野上」とは、平安後期から鎌倉時代初期、傀儡の里として有名な岐阜県大垣市「青墓」に近く、中世から「傀儡」の宿として有名であった。「西宮」は、すでに中世末には有名であったようだから、「古」「野上」となれば、「どのやうなあやつりじゃやら」と首掛けの箱廻しであったかどうかは分明でないが、「西宮」と同じように各地を巡遊して歩いた点は、同様であったようで、中世に遡る注目される伝承である。ただし、中世における人形操りの史料は大変少なく、その実態は未だわからないのが実情であるが、「首掛けの箱廻し」の一種類ではなく、様々な形態の操りがあったことは、弥生時代から、平安朝頃までの遺跡出土の操り人形に色々な操作構造のものがあることから言えることである。

首掛けの箱廻しの管見の範囲でもっとも古い資料は、大永元年（1521）～五年（1525）頃に描かれた『洛中洛外図町田家本』（歴博甲本・国立歴史民俗博物館所蔵）に見られるのだが、胸の前の箱の上部に立像のように描かれた人形がいくつも見える（図50）。様々な演目が上演されたことがまず言える。この『洛中洛外図町田家本』に描かれている首掛けの箱廻しについて言えば、箱の上部に天板があり、彫像式の操り人形か、串人形（かしらから下に、かしらを操作する棒〈胴串〉が付いている人形）を突き立てて、道行く人々の興味をかき立てたようである（これ以後の画証にはこうした図は見られず、人形は箱の中にしまわれているか、箱の中から人形を操っている図である）。この『町田家本』について言えば、箱の中に手を入れて人形を出して廻したと言うこと



図50 首掛け箱廻し
『町田家本洛中洛外図』
大永三年（1523）前後頃



図51 ほとけまわし『家忠日記』
天正十五年（1587）の条



図52 山猫廻『江戸名所図屏風』
明暦大火（1657年）以前頃

も考えられるし、「家忠日記」の「仏まわし」(図51)のように、上演する時は、箱を脇に置いて(箱は描かれていないが)、人形だけを取り出して操ったのかも知れない。山猫は描かれてないが、山猫は、最後に突然出して、びっくりさせるものであるから、当然、所持していたとしても、箱の底に隠し持ち、描かれていないのであろう。

山猫の人形の初見は、管見の範囲では、明暦大火(1657年)以前成立と考えられる『江戸名所圖屏風』(出光美術館所蔵)である(図52)。丁度、首掛けの箱廻しが、橋の上で倒れかかり、箱の中の人形が飛び出しているところが描かれていて、画面左の傀儡師の箱からこぼれ落ちたその中に山猫らしきものが描かれる。偶然にしても、箱の中が分かる大変珍しい場面が描かれている。江戸後期の愛知県の知多半島の半田市龜崎に残る山車からくりの「傀儡師(首掛けの箱廻し)」は、最後に「イタチ」が飛び出す。傀儡師の最後の出し物は、山猫に限らず、鈴江家(図55)のようにキツネであったり、「絵本御伽品鏡」(図49)の貉であったり、龜崎のイタチであったりもしたようである。上演の最後に「ヤンマンネコにカンマンショ」等と突然、箱の中から山猫等の人形を飛び出させ、子供を驚かせていたようだ。そもそも「山猫」とは、関東方面では、野良猫の方言であった。この猫については、よく知られた話で、「猫股」という年老いた猫で、尾は二股に分かれ、よく化け、人を殺すというもので、古くは藤原定家の『明月記』の天福元年(1233)八月二日の条に奈良に出た猫股のことが記録されており、鶴長明(1151~1213年)の『四季物語』には「此国にともすれば。老たるねこま、野らにすむなどは、人の子をばひ。あるは人の妻をかどはしてむくつけきものなり」²⁾とあって、老猫、野猫とともに人に害するものとしている(『猫の歴史と奇話』平岩米吉著1985年刊より)。つまり、鎌倉時代のはじめ頃にはこうした話が巷間にもおこなわれ、「徒然草」(1331年頃)にも、「奥山に、猫股といふものありて、人を食らふなると人のいひけるに」³⁾と山に棲む猫股をあげた後、「山ならぬども、これらにも、猫の經上りて」と、剣い猫も却を経て、同じように猫股になるという事を語っている。操り人形にこの「山猫」が出てきて、「山猫にカマショ」と子ども等を驚かすといった演目が存在して不思議はない土壤はすでに鎌倉時代初期にはあったのである。

2. 山猫木偶の伝世品と出土品(その構造と操り方)

ところで、盛岡市の鈴江家に、円覚寺門前遺跡出土の「山猫」(図53・54)と同様の構造のキツネの人形かしらが残る(図55・56)。鈴江家は、寛永十八年(1648)頃に淡路から盛岡へ移住・定着し



図53 円覚寺門前遺跡の山猫木偶14世紀第2四半期

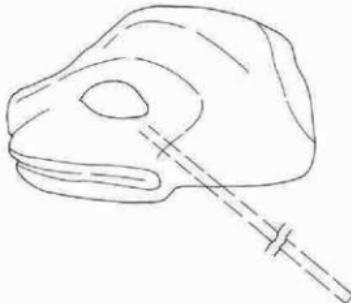


図54 山猫木偶の操作棒



図55 盛岡・鈴江家のキツネの人形
寛永十八年（1641）頃か

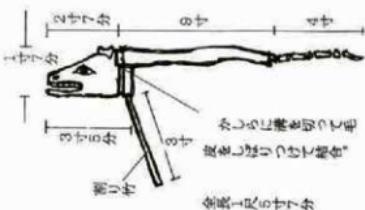


図56 鈴江家のキツネ（齋藤徹氏作図）

た専業の操り人形造りの家柄である。慶長頃に淡路（西宮とも）の人形造りと組んで操り淨瑠璃が始まったとされるが、淡路も昔は首掛けの箱廻しから始まつたのであり、近世初頭、いち早く座組みして、淨瑠璃操りへと変遷したのであるが、鈴江家はその両方を盛岡へ運載したようである。というのも、首掛けの箱廻しが造つたと思われる「キツネ」の人形や、首管に入差し指を差し、親指と小指を人形の両手とする、いわゆるギニヨール式の人形（左右の手に1体づつ持つて1人で2体違うこともある）等、箱廻しにびったりの大きさと、操法のもので、他に三人造りにつながる一体一人造りの舞台用と思われる、文楽人形よりやや小さめの串人形も残つてゐるからである。

鈴江家のキツネの人形かしらは、円覚寺門前遺跡出土の山猫同様、首の所で切られ、置物のかしらにはならない。鈴江家のキツネは、図55・56に見られるように首の周りに溝が彫られ、その胴体が溝に巻き付けられている。胴体の現状は、毛が抜けて、皮だけになつてゐる（尾の骨が付随）。また、背中にしか胴体（毛皮）が無いが、元來は図49のように、体躯はぬいぐるみのような、毛皮で覆われていたのであろう。古くなつたので、胴体が手直しされたのが現状の鈴江家のキツネの人形であらう。文化九年（1812）瀬川如皋著『只今御笑草』に「援例の山猫てふものは、いたちやらんむじやらん、毛皮にてこしらへたる小猫程の異物を箱の底より出し、ヤンマンネツコにカンマンシヨと子供を追ひあるき、興ずることにぞ有ける。」とあって、毛皮にてこしらえたものであることが、江戸時代の文献であるが、記されている。円覚寺門前遺跡出土の山猫かしらも、鈴江家と同じように、首の所できらされている。頭の大きさは、ほぼ同じようであり、溝は見あたらないが、代わりに毛皮を止めたと思われる穴が2カ所ほど首の上部に見られる。かしらの下部には斜めの穴があり、鈴江家のキツネのかしらと同様に、操作棒を挿入したと思われる穴である。操り人形の操作構造としては、このかしら下部から斜め下に突き出た棒は、箱廻しの箱の中から、ひょっこりと飛び出させるには丁度良い。劇人形としては、かしらから垂直に下部に伸びた操作棒と、胴体の尻の部分から真下に伸びた操作棒の2本の棒があれば、胴体をくねらせるような演技もできるが、突然、箱の中から飛び出させるような演技（つまり箱廻しの）には、かしら下部の斜めの1本棒の方が向いてゐるのである。

なお、操り人形としては、あまり主要な問題ではないが、目が深く抉られているのは、玉眼が入れられてゐたのであらう。胴体も毛皮で造られ、その故に腐敗し、残存しなかつたのであらう。

画証に残る資料より、200年ほども遡り、その間、何の史料もないが、出土の山猫の木偶の操作構造は、鈴江家のキツネの人形かしらと全く同一操作構造（かしら下部に斜めに操作棒がついていた穴が残る。多少角度が違うが、あまり深い意味は無い）の操り人形の頭部と考えられ、操作構造から見て、首掛けの箱廻しの「山猫」としか考えられない。しかも、円覚寺門前遺跡出土の山猫の操作棒用の穴は、2つ開けられている。一本が折れ、穴を開け直して、もう一本、入れ直している（操作棒は

出土していないが）。つまりそれだけ長く使用されていたものと推察されるのである。従って、伝世期間が、50年から100年近くあったと考えられる。考古学的に見て14世紀の第2四半期頃の出土ということであるから、それに伝世期間を考慮に入れると、それより遡る可能性が高いのである。従って、この山猫の木偶は、鎌倉時代末とも考えられる。遡くとも南北朝時代であることは、出土の側溝の遺物からみて、間違の無いところであり、首掛けの箱廻しの歴史が一挙に200年ほども遡ることになり、大変貴重な史料と言わねばならない。一挙に200年も遡ることに疑問を呈する向きもあるかもしれないが、操作構造は、近世のものと全く同じと思われるから、「物（操作構造）」そのものを素直に見れば、首掛けしていただけでであろう。加えて例をあげれば、2001年に鎌倉市米町から出土した鎌倉時代⁴⁾の「鏡面可動式」の板人形は、私の調べたところでは、飛鳥時代から南北朝時代までの約700年間という歴史を持つ。或いは、文楽人形につながる、頭と首に、胴串（どぐし）と言うかしらを操作する棒が付いた形式は、平安末か、鎌倉時代初期から現在までの約800年という歴史を持っているのである。そうした歴史的尺度から言えば、500年前からと思われていたものが、700年前となることに大きな矛盾はないと思われるが、いかがであろう。先述の猫股伝承が鎌倉時代初期から史料に現れることも併せて考えてみたい。

中世室町時代の公家日記等に散見される「手傀儡（てくぐつ）」の芸態ははっきりしていないが、この山猫の木偶といい、各地の中世遺跡から出土の操り人形も小さなものが多いためからは、「手傀儡」は、首掛けの箱廻しであった可能性も想定されるが、現在のところ確証は無い。もっとも、中世の人形には、田楽系の等身大くらいの大きな操り人形もあったようであり、彫像型の操り人形もあり、糸操り人形等様々な操作構造の操り人形があった。首掛けの箱廻しのような操り人形しかなかつたということでは無いことに重ねて留意していただきたい。

円覚寺門前遺跡からの出土ということから、下級宗教者=念仏聖=念仏者が鉢叩きのような者が住んでいて、そうした者が芸能に関わり持ち歩いたものとも、考えられるが、これも未だ確証は無い。しかし、それにしても、14世紀前半という古い時代の山猫の木偶が出土したということは、奇跡とも言いたい感がある。

註

- 1) 首掛けの箱廻しの人形にも色々な操作構造のものがあり、単一なものだけを持ち歩いたのではなく、複数の操作構造のものを持ち歩いたことは、近世史料から言えるので、注意が必要である。
- 2) 「続群書類從第三十二編上」（三訂版）1958年、続群書類從刊行会刊。
- 3) 「日本古典文学大系30」1957年、岩波書店
- 4) 神奈川新聞2001年6月2日、調査をお願いした時点では、保存処理中に調査不能であった。

第四章 まとめ

調査区全域を調査できた第1面で発見された赤松の丸太を路盤とした道路が、調査区の位置などから、かつての円覚寺門前の下馬門を西に迂回する馬道である可能性が高いと考えられた。設定された調査区の位置と狭小な範囲であった制限があったものの、道路に沿う側溝とそれに直交する溝の一部を発見したことで、矩形の地割とともに、調査区西外に丸太道路からし字に曲がる道路の存在を想定できるからである。

下層の生活面においても東西に延伸するであろう版築層と東西溝を発見しており、下層面においても第1面と同様の道路配置を想定できるであろう。第二区での下層面を調査期間の短縮によって調査できなかつたことが悔やまれる。

なお、本調査区の南西に設定された確認調査域内の第1面から第5面に掘り込まれたことを確認できる東西溝と本調査で発見された丸太敷き道路や版築面との関係を確認できなかつた。おそらくは、中世期の馬道に関連するものであろうが、今後に残された問題である。

第6面からは遺構も遺物も発見されず、その上層である第5～4面にかけては遺物量が非常に少ないことから、本遺跡地周辺の鎌倉時代初頭は過疎地帯であったことが推測される。しかしながら、第3面以降の出土遺物は徐々に産地、器種も多岐にわたりはじめ、第1面期には諸々の工芸に係る製作や加工用具や機織り具などの道具類が出土し、また木製品に製作途中品や再加工品を多数確認できるため、調査地一帯は多くの職能民が住み着いた地域であったと考えられる。その職能民達は必ずや円覚寺の営みとかかわりを持っていたものと想定できる。また、操り人形史研究において、貴重な発見となったヤマネコ木偶の出土に見られるように、傀儡師などの芸能職能民も集う活気のある門前町であったと思われる。

本遺跡地からは手づくねかわらけの破片が1点しか出土していない。また、第3面以降ではいわゆる薄手丸深型と称されるかわらけに中型が存在し、小型かわらけに薄手丸深型が少ないものの、大中小のセットが確立していると考えられる。第4面については遺物量が少なく、この生活面を第3面以降の生活面と同時期に比定することはいささか躊躇するが、少なくとも第3面が13世紀末葉あたりに比定でき、その後に大きな年代差なく次々と生活面が更新されたものと考えられる。

表7 遺物観察表(1)

辨別番号	出土 地	種 別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
6 1	第5面ピット86	平瓦				胎土は白鉄と石英微鉱を含む暗灰色土。器表は黒色。
8 2	第5面ピット94	かわらけ		5.10		胎土は白色砂を微量含む淡黄色土。内底面にナデは施されない。
6 3	第5面ピット94	鐘	全長31.4×幅15.05×厚5.15			鐘縁を多く溉じる粉質泥質土。
8 1	第5面下	土師器裏				胎土は黑色砂、雲母片を多く含む黄茶色土。
9 2	第5面下	土師器高杯				胎土は白鉄、雲母微鉱片を含む淡黄色粉質密土。
9 3	第5面下	平瓦				胎土は白色小石、赤褐色泥粒を含む淡赤色土器質土。
11 1	第4面講5	かわらけ	7.65	4.60	1.70	胎土は白色砂、白色泥粒、白鉄、雲母片、泥岩粗粒を含む暗淡茶色弱砂質土。
11 2	第4面講5	箸		全長24.0×幅0.5×厚0.5		
11 3	第4面講6	平瓦				胎土は白色小石、赤褐色泥粒を含む淡赤色土器質土。
11 4	第4面講6	平瓦				胎土は白色小石、赤褐色泥粒を含む淡赤色土器質土。
11 5	第4面土壤9	箸	全長19.6×幅0.9×厚0.7			
11 6	第4面土壤9	箸	全長19.8×幅0.8×厚0.45			
11 7	第4面土壤9	箸	全長20.3×幅0.6×厚0.45			
11 8	第4面土壤9	箸	全長20.4×幅0.6×厚0.5			
11 9	第4面土壤9	箸	全長20.5×幅0.55×厚0.35			
11 10	第4面土壤9	箸	全長20.5×幅0.7×厚0.5			
11 11	第4面土壤9	箸	全長21.2×幅0.6×厚0.5			
11 12	第4面土壤9	箸	全長21.9×幅0.6×厚0.45			
11 13	第4面土壤9	滑石鍋	21.80	13.40	10.10	外面共に儀が付着するが、外面の器より下方に強しく付着する。
11 14	第4面ピット78	平瓦				胎土は白色微鉱を少量含む灰茶色土。器表は黒色。
11 15	第4面ピット90	愈合型				胎土は白色微鉱～小石を少量含む黄味灰茶色密土。
12 1	第4面下	手づくねわらけ	(9.60)	(7.60)	(1.60)	胎土は黑色砂、雲母片を含む橙色弱粉質土。
12 2	第4面下	常滑片口鉢 I 級				胎土は白色泥粒～小石を少量含む暗灰色密土。
12 3	第4面下	常滑型				胎土は白色微鉱～小石を含む暗褐色密土。
12 4	第4面下	青磁蓮弁文鏡				素地は灰白色弱粘質密土。胎は半透明の淡翠緑色。
12 5	第4面下	青磁鏡	8.70			素地は灰白色弱粘質土。胎は不透明灰綠色。
12 6	第4面下	平瓦				胎土は白色小石と赤褐色泥粒を含む淡赤色土器質土。
12 7	第4面下	平瓦				胎土は白色小石と赤褐色泥粒を含む淡赤色土器質土。
14 1	第3面講4裏込	かわらけ	6.80	4.40	1.75	胎土は黒色砂、白色泥粒、白鉄と多くの雲母片を含む赤褐色弱砂質土。内底面にナデ。
14 2	第3面講4裏込	かわらけ	12.10	7.30	3.60	胎土は黒色砂、白色泥粒、白鉄、雲母片と泥岩粗粒を含む暗褐色弱砂質土。
14 3	第3面講4裏込	瓶				「景祐元寶」 初騎1034年 寶書
14 4	第3面講4下刷	須恵器坏				胎土は白色微鉱～散石を多く含む暗灰色密土。
14 5	第3面講4下刷	かわらけ	7.70	5.70	1.75	胎土は黒色砂、白色泥粒、白鉄と泥岩粗粒を含む暗褐色弱砂質土。口部に焼付着。スノコ有り。
14 6	第3面講4下刷	かわらけ	(7.80)	(5.10)	(2.30)	胎土は多くの黒色砂、白鉄、多量の雲母片を含む暗褐色砂質土。スノコ痕不明。
14 7	第3面講4下刷	かわらけ	(12.30)	(7.20)	(3.40)	胎土は黒色砂、白鉄と多くの白色泥粒を含む暗褐色砂質土。スノコ痕不明。
14 8	第3面講4下刷	白かわらけ	(7.30)	(6.60)	(2.00)	胎土は白色砂、雲母片と少量の白色泥粒を含む白色粉質土。
14 9	第3面講4下刷	白かわらけ	(12.50)	(6.50)	(3.00)	胎土は白色砂、雲母片を含む白色弱粉質土。
14 10	第3面講4下刷	瓦質火鉢				胎土は白色砂を少量含む灰茶色土。
14 11	第3面講4下刷	白相口元皿		6.10		素地は白色弱粘質密土。胎は細味乳白色。
14 12	第3面講4下刷	曲物蓋か	全長21.8×幅8.5×厚0.55			外底面は細かいケズリ調整。
14 13	第3面講4下刷	曲物蓋か	全長22.7×幅9.0×厚1.2			
14 14	第3面講4下刷	ヘラ状木製品	遺存長18.1×幅1.4×厚0.5			粗い調整。
14 15	第3面講4下刷	箸	全長18.4×幅0.5×厚0.45			
14 16	第3面講4下刷	箸	全長20.4×幅0.8×厚0.4			
14 17	第3面講4下刷	箸	全長20.4×幅0.6×厚0.4			
14 18	第3面講4下刷	箸	全長20.4×幅0.45×厚0.4			
14 19	第3面講4下刷	箸	全長20.7×幅0.7×厚0.4			

表7 遺物觀察表(2)

辨識番号	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
14 20	第3面溝4下層	箸		全長21.3×幅0.8×厚0.45		
14 21	第3面溝4下層	箸		全長22.5×幅0.6×厚0.6		
14 22	第3面溝4下層	箸		全長23.0×幅0.55×厚0.4		
14 23	第3面溝4下層	箸		全長23.8×幅0.65×厚0.45		
15 24	第3面溝4上層	かわらけ	7.70	4.30	1.45	胎土は黒色砂、白針を多く含む淡褐色粉質土。
15 25	第3面溝4上層	かわらけ	7.70	5.20	1.60	胎土は黒色砂、白針、雲母片を含む淡褐色粉質土。
15 26	第3面溝4上層	かわらけ	7.60	5.70	1.90	胎土は黒色砂、白針、多含心筋淡茶色粉質土。
15 27	第3面溝4上層	かわらけ	(12.50)	(7.20)	(3.45)	胎土は黒色砂、白針、泥岩粒と多くの雲母片を含む細い淡褐色質土。外底面のスノコ痕は不明瞭。
15 28	第3面溝4上層	かわらけ	(11.30)	(6.80)	(3.40)	胎土は黒色砂を少量含む灰白色土。外底面にスノコ痕なし。
15 29	第3面溝4上層	丸瓦	/	/	/	胎土は黒色砂を少量含む灰白色土。
15 30	第3面溝4上層	契斗瓦?	/	/	/	胎土は黒色砂を少量含む灰白色粘質土。
15 31	第3面溝4上層	平瓦	/	/	/	胎土は白色礫石を多く含む暗灰色質土。
15 32	第3面溝4上層	常滑甕		(20.40)	/	胎土は混入物をわずかに含む暗灰色粘質土。
15 33	第3面溝4上層	常滑甕	35.40	/	/	胎土は白色小石を少量含む繊維質灰土。胎芯は黒色、器表は暗色系を呈する。
15 34	第3面溝4上層	鉄釘		遺存長8.15×幅0.55×厚0.25		
15 35	第3面溝4上層	鉄釘		遺存長7.7×幅0.55×厚0.35		
15 36	第3面溝4上層	漆椀		6.65		
15 37	第3面溝4上層	木製蓋軸用品?		遺存長19.7×幅0.9×厚0.9		
15 38	第3面溝4上層	箸		全長19.9×幅0.6×厚0.45		
15 39	第3面溝4上層	箸		全長20.8×幅0.7×厚0.4		
15 40	第3面溝4上層	箸		全長20.3×幅0.7×厚0.35		
15 41	第3面溝4上層	箸		全長21.1×幅0.6×厚0.35		
15 42	第3面溝4上層	箸		全長21.4×幅0.7×厚0.45		
15 43	第3面溝4上層	箸		全長21.8×幅0.7×厚0.45		
15 44	第3面溝4上層	箸		全長22.7×幅0.7×厚0.35		
15 45	第3面溝4上層	箸		全長22.8×幅0.6×厚0.45		
15 46	第3面溝4上層	箸		全長22.9×幅0.6×厚0.55		
15 47	第3面溝4上層	箸		全長23.3×幅0.6×厚0.45		
15 48	第3面溝4上層	箸		全長22.5×幅0.6×厚0.45		
15 49	第3面溝4上層	箸		全長24.5×幅0.6×厚0.45		
15 50	第3面溝4上層	箸		全長25.2×幅0.8×厚0.6		
15 51	第3面溝4上層	箸		全長25.8×幅0.7×厚0.45	図上の下半は無調査。	
15 52	第3面溝4上層	杓子		全長24.4×幅7.9×厚0.5		
16 1	第3面土壤5	かわらけ	(11.50)	(6.80)	(3.10)	胎土は白針、白色泥粒、雲母片を多く含む暗褐色粉質土。スノコ痕不明瞭。外底面堅壁に堆付着。
16 1	第3面ビット35	箸		全長19.2×幅0.6×厚0.55		
16 2	第3面ビット35	箸		全長19.3×幅0.7×厚0.45		
17 1	第3面下	かわらけ	7.50	5.70	1.80	胎土は黒色砂、白針、雲母片を含む淡茶色粉質土。スノコ痕不明瞭。
17 2	第3面下	かわらけ	(7.50)	(4.80)	(1.90)	胎土は黒色砂、白針、雲母片を含む暗茶色粉質土。口唇の一部に堆付着。スノコ痕不明瞭。
17 3	第3面下	かわらけ	6.90	4.50	1.45	胎土は黒色砂、雲母片と少量の白色泥粒を含む褐色粉質土。スノコ痕がつかず。
17 4	第3面下	かわらけ	11.60	7.20	3.20	胎土は黒色砂、白針を含む灰茶色粉質土。
17 5	第3面下	かわらけ	(18.60)	(15.70)	(4.70)	胎土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片を含む淡茶色粉質土。胎状のスノコ痕。
17 6	第3面下	平瓦	/	/	/	胎土は白針、雲母片を含む黑色軟質土。
17 7	第3面下	平瓦	/	/	/	胎土は白色微砂を少量含む黑色土。
17 8	第3面下	丸瓦	/	/	/	胎土は白色小石と多量の雲母片を含む黑色軟質土。
17 9	第3面下	瓦質火鉢			8.65	胎土は白色砂、雲母微片を少量含む暗褐色粉質土。

表7 遺物観察表(3)

拂団番号	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
17	10 第3面下	雷滑壺	39.60	/	/	胎土は多量の白色砂を含む黒色で、重く焼き上がる。 口縁から肩にかけて隆状がかかる。
17	11 第3面下	白磁口元壺	(10.40)	(6.00)	(3.00)	素地は白色弱質密土。釉は緑味乳白色。
17	12 第3面下	用途不明木製品	全長9.6×幅3.1×厚1.75			
17	13 第3面下	草履芯	全長20.3×幅9.0×厚0.4			表面にともに墨経圧痕が残る。
17	14 第3面下	草履芯	全長23.8×幅10.0×厚0.4			鼻端に墨経痕跡あり。
17	15 第3面下	草履芯	全長23.3×幅10.9×厚0.3			表面に墨経圧痕。
18	16 第3面下	著	全長19.1×幅0.7×厚0.5			
18	17 第3面下	著	全長20.75×幅0.5×厚0.8			
18	18 第3面下	著	全長1.6×幅0.5×厚0.25			
18	19 第3面下	著	全長22.0×幅0.65×厚0.6			
18	20 第3面下	著	全長22.5×幅0.65×厚0.5			
18	21 第3面下	著	全長22.85×幅0.95×厚0.25			
18	22 第3面下	著	全長24.1×幅0.7×厚0.45			
18	23 第3面下	著	全長31.3×幅0.75×厚0.5			
18	24 第3面下	ヘラ状木製品	全長19.1×幅1.2×厚0.85			
18	25 第3面下	ヘラ状木製品	遺存長20.85×幅1.0×厚0.8			
18	26 第3面下	ヘラ状木製品	全長22.70×幅1.05×厚1.0			
18	27 第3面下	曲物底板?	遺存21.35×厚0.6			園上の表面に焦げ跡と刃物キズが残る。
20	1 第2面溝3	瓦器質白かわらけ	/	/		胎土は雲母微片を少量含む暗灰色鐵質土。
20	2 第2面溝3	かわらけ	(7.90)	(5.40)	(1.65)	胎土は白色砂、雲母片を含む淡茶色弱質土。
20	3 第2面溝3	かわらけ	(12.30)	(7.80)	(3.00)	胎土は黑色砂、雲母片を含む暗褐色砂質土。
20	4 第2面溝3	雷滑片口鉢1類	/	/		胎土は白色小石を含む灰褐色土。
20	5 第2面溝3	雷滑片口鉢II類	/	(16.35)	/	胎土は白色細石を多く含む暗黃茶色粘質土。
20	6 第2面溝3	白磁碗	/	/	/	素地は淡黃色弱粘質密土。釉は薄く施釉され貰入の入る黄味乳白色。
20	7 第2面溝3	白磁鉢給盤	/	/	/	素地は明灰色弱粘質密土。釉は青乳白色。鉢給は暗茶褐色に発色。
20	8 第2面溝3	鉄釘	遺存長6.65×幅0.6×厚0.45			
20	9 第2面溝3	鉄釘	遺存長6.0×幅0.55×厚0.45			
20	10 第2面溝3	鉄釘	遺存長9.65×幅0.65×厚0.3			
20	11 第2面溝3	鉄				「元豐通寶」 刻銘1078年 行書
20	12 第2面溝3	製作途上木製品	遺存長8.7×幅1.60×厚1.1			
20	13 第2面溝3	製作途上木製品	全長8.3×遺存幅1.5×厚0.4			
20	14 第2面溝3	木栓	全長6.7×徑1.4			
20	15 第2面溝3	用途不明木製品	遺存長15.8×幅1.5×厚1.3			園中下端部を製いて金属工具を差し入れたものか?
20	16 第2面溝3	著	全長18.7×幅0.6×厚0.45			
20	17 第2面溝3	著	全長20.0×幅0.5×厚0.4			
20	18 第2面溝3	著	全長20.3×幅0.6×厚0.45			
20	19 第2面溝3	著	全長20.3×幅0.55×厚0.5			
20	20 第2面溝3	著	全長20.4×幅0.6×厚0.4			
20	21 第2面溝3	著	全長20.7×幅0.6×厚0.4			
20	22 第2面溝3	著	全長20.9×幅0.7×厚0.45			
20	23 第2面溝3	著	全長21.1×幅0.5×厚0.35			
20	24 第2面溝3	著	全長21.1×幅0.7×厚0.45			
20	25 第2面溝3	著	全長21.6×幅0.65×厚0.45			
20	26 第2面溝3	著	全長21.7×幅0.7×厚0.5			
20	27 第2面溝3	著	全長22.1×幅0.6×厚0.45			
20	28 第2面溝3	著	全長22.2×幅0.65×厚0.4			
20	29 第2面溝3	著	全長23.2×幅0.7×厚0.45			
20	30 第2面溝3	著	全長23.4×幅0.6×厚0.4			
20	31 第2面溝3	著	全長23.6×幅0.7×厚0.5			
20	32 第2面溝3	著	全長23.9×幅0.6×厚0.35			
20	33 第2面溝3	著	全長26.0×幅0.5×厚0.55			

表7 遺物觀察表(4)

掉片番号	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
21 1	第2面土壇7	かわらけ	7.40	4.80	1.40	粘土は多量の黒色砂、白針と大量の雲母片を含む淡色砂質土。スノコ痕不明瞭。
21 2	第2面ビット3	東濃型山茶鏡	/	/	/	粘土は灰色弱粘質土。
21 3	第2面ビット3	東濃型山茶鏡	(14.90)	/	/	粘土は明灰色弱粘質密土。
21 4	第2面ビット5	鏡	/	/	/	「天祐通寶」初鑄1017年 真書
21 5	第2面ビット5	鏡	/	/	/	「皇宋通寶」初鑄1038年 真書
21 6	第2面ビット9	瓦器碗	(10.70)	/	/	粘土は雲母片を多く含む白色粘良土。
21 7	第2面ビット11	吉瑞折縁鉢	/	/	/	素地は灰褐色粘質土。釉は不透明オリーブ色。
21 8	第2面ビット11	青磁罐蓋弁文鏡	16.30	/	/	素地は灰褐色粘質密土。釉は不透明淡草緑色。
21 9	第2面ビット23	白磁口元皿	/	(6.40)	/	素地は灰白色弱粘質密土。釉は綠味乳白色。
21 10	第2面ビット23	常滑甕	/	/	/	釉は暗灰色。
22 1	第2面直上	跨造小壺	4.15	4.45	6.75	鏡による発光が美しい。突唇部で上下の型を合わせているか?
23 1	第2面下	かわらけ	(7.20)	(5.60)	(1.50)	粘土は黒色砂、雲母片と多くの白色泥粒を含む淡色砂質土。
23 2	第2面下	かわらけ	7.80	5.45	1.65	粘土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片と多くの泥粒を含む黑色砂質土。
23 3	第2面下	かわらけ	12.70	7.50	3.60	粘土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片と多くの泥粒を含む暗色弱粘質土。スノコ痕不明瞭。
23 4	第2面下	かわらけ	(10.20)	(5.10)	(3.40)	粘土は黒色砂、白色泥粒とわずかな雲母片を含む淡褐色粉質粘良土。薄手丸深型。
23 5	第2面下	瓦器碗	(9.50)	/	/	粘土は白色陶泥粒をわずかに含む明灰色~灰褐色良土。
23 6	第2面下	瓦貢火鉢	/	/	/	粘土は白色砂を多く含む暗灰色。
23 7	第2面下	平皿	/	/	/	粘土は白色小石を含む暗灰色微密土。焼きは堅緻。
23 8	第2面下	常滑甕	/	/	/	粘土は白色微粒~小石を多く含む灰色。内外面ともに自然降灰がかかる。
23 9	第2面下	常滑甕	/	/	/	粘土は黒色砂、白色微粒を少暈合する黄味灰褐色密土。
23 10	第2面下	白磁口元皿	8.40	5.40	1.50	素地は白色弱粘質密土。釉は綠味乳白色。
23 11	第2面下	瓶	遺存長3.3×遺存幅2.4×遺存厚0.55			黑色質岩。
23 12	第2面下	木製把手?	全長18.4×幅3.8×厚0.7			
23 13	第2面下	漆皿	(8.40)	(6.90)	(0.90)	黒色漆を塗った後、暗朱色を呈する赤色漆によるラフな刷文が手描きされる。
23 14	第2面下	漆器	遺存長5.4×幅4.1×厚1.0			施錠を認められない。
23 15	第2面下	署	遺存長19.5×幅6.6×厚0.7			
23 16	第2面下	署	全長21.5×幅6.55×厚0.25			
23 17	第2面下	木製用金不明品	3.70	0.95	3.30	脚か?
23 18	第2面下	木製用金不明品	遺存長27.3×幅1.6×厚1.7			何らかの機械的部品か?
26 1	第1面路盤	かわらけ	7.70	4.80	1.75	粘土は黒色砂、白針、雲母片を含む淡茶色弱粘質土。
26 2	第1面路盤	かわらけ	(7.40)	(5.20)	(1.70)	粘土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片を含む淡褐色弱粘質土。スノコ痕不明瞭。
26 3	第1面路盤	瓦器白かわらけ	(10.10)	/	/	粘土は白色泥粒を含む暗灰色粉質粘良土。
26 4	第1面路盤	瓦器白かわらけ	(10.60)	(6.60)	(2.70)	粘土は白色泥粒を多く含む暗灰白色~白色土。
26 5	第1面路盤	丸瓦	/	/	/	粘土は黒色砂を含む灰白色土。
26 6	第1面路盤	土鍤	全長4.8×幅2.4×厚1.7			粘土は白色砂、雲母を多く含む暗褐色弱粘質土。
26 7	第1面路盤	圓口灰釉卸皿	(14.60)	(11.80)	(3.50)	粘土は明灰色弱粘質密土。釉は半透明の灰緑色。
26 8	第1面路盤	常滑洗	/	/	/	粘土は暗灰色。内外底面を除いて自然降灰がかかる。
26 9	第1面路盤	常滑片口鉢	(18.90)	/	/	粘土は暗灰色。
26 10	第1面路盤	常滑片口鉢Ⅱ類	22.20	/	/	粘土は白色小石を含む暗褐色土。器表は赤褐色。
26 11	第1面路盤	常滑片口鉢Ⅲ類	/	/	/	粘土は白色小石を多く含む黒灰色土。器表は暗褐色。
26 12	第1面路盤	青磁盤	/	9.10	/	素地は明灰色粘質密土。釉は青緑色。
26 13	第1面路盤	青磁双魚文鉢	/	7.80	/	素地は明灰色粘質密土。釉は不透明暗緑色。
26 14	第1面路盤	用迄不明木製品				
26 15	第1面路盤	用迄不明木製品		径3.1×厚0.4		
26 16	第1面路盤	用迄不明木製品	全長6.3×幅5.7×厚0.75			
26 17	第1面路盤	用迄不明木製品	全長13.85			
26 18	第1面路盤	木製箋	全長9.7×幅2.8×厚2.3			表面に黒色漆が塗布される。
26 19	第1面路盤	製作途上木製品	全長7.35×幅1.4×厚1.1			

表7 遺物観察表(5)

標識番号	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
26 20	第1面路盤	木栓			全長8.1×幅1.5×厚1.25	
26 21	第1面路盤	箸			全長19.9×幅0.7×厚0.45	
26 22	第1面路盤	箸			全長20.3×幅0.7×厚0.6	
26 23	第1面路盤	箸			全長20.5×幅0.7×厚0.55	
26 24	第1面路盤	箸			全長20.8×幅0.7×厚0.55	
26 25	第1面路盤	箸			全長20.9×幅0.7×厚0.5	
26 26	第1面路盤	箸			全長21.0×幅0.7×厚0.4	
26 27	第1面路盤	箸			全長21.6×幅0.7×厚0.45	
26 28	第1面路盤	箸			全長21.7×幅0.7×厚0.35	
26 29	第1面路盤	箸			全長21.7×幅0.7×厚0.55	
26 30	第1面路盤	箸			全長22.1×幅0.7×厚0.55	
26 31	第1面路盤	箸			全長22.4×幅0.7×厚0.5	
26 32	第1面路盤	曲物面板?			遺存長10.5×幅4.0×厚0.2	手書き墨文様と刃物痕跡が残る。
26 33	第1面路盤	曲物面板			径20.8×厚0.8	上面のみに黒色漆が塗布される。
26 34	路盤	木製柄(錐?)			遺存長17.4×幅1.3×厚0.55	
27 35	第1面路盤	水晶製五輪塔			遺存高2.15×地輪径1.2	
27 36	第1面路盤	砥石			遺存長3.25×幅2.35×遺存厚0.75	淡紅色細粒泥岩。鳴尾。
27 37	第1面路盤	砥石			遺存長6.9×幅2.15×厚1.8	淡灰褐色緻密砂質灰岩。
27 38	第1面路盤	滑石調軸用スランプ			遺存長2.9×幅2.05×厚0.25	鞍山岩經。
27 39	第1面路盤	碁石?			全長2.45×幅2.05×厚0.25	
27 40	第1面路盤	用途不明骨製品			徑1.95×厚0.35	表面は磨かれて、裏面は補は調整。
27 41	第1面路盤	鉄釘			全長11.1×幅0.8×厚0.4	
27 42	第1面路盤	鉄				「開元通寶」唐銭
27 43	第1面路盤	鉄				「開元通寶」小さい(径2.15)、薄い、欠け。模彷銭か。
27 44	第1面路盤	鉄				「太平通寶」初鑄976年 真書
27 45	第1面路盤	鉄				「咸平元宝」初鑄998年 真書
27 46	第1面路盤	鉄				「景德元宝」初鑄1004年 真書
27 47	第1面路盤	鉄				「皇宋通寶」初鑄1038年 真書
27 48	第1面路盤	鉄				「治平元宝」孔加工 初鑄1061年 真書
27 49	第1面路盤	鉄				「熙寧元宝」初鑄1068年 真書
27 50	第1面路盤	鉄				「熙寧元宝」初鑄1068年 真書
27 51	第1面路盤	鉄				「熙寧元宝」初鑄1068年 真書
27 52	第1面路盤	鉄				「朝聖元宝」削れ、孔加工 初鑄1094年 真書
27 53	第1面路盤	鉄				「聖宋元宝」初鑄1101年 真書
27 54	第1面路盤	鉄				「大觀通寶」初鑄1107年
27 55	第1面路盤	鉄				「大觀通寶」初鑄1107年
27 56	第1面路盤	鉄				銘名不明
表5 1	第1面路盤	鉄				「皇宋通寶」初鑄1038年 真書
表5 1	第1面路盤	鉄				「大觀通寶」初鑄1107年
表5 3	第1面路盤	鉄				「天聖元宝」初鑄1023年 真書
表5 4	第1面路盤	鉄				「天聖元宝」初鑄1023年 真書
表5 5	第1面路盤	鉄				「開禧通寶」背文「丁」若詩1205年
表5 6	第1面路盤	鉄				「元祐通寶」初鑄1086年 行書
表5 7	第1面路盤	鉄				「治平元宝」初鑄1064年 真書
表5 8	第1面路盤	鉄				「元祐通寶」孔加工 初鑄1078年 真書
表5 9	第1面路盤	鉄				「熙寧元宝」初鑄1068年 真書
表5 10	第1面路盤	鉄				「大祐通寶」初鑄1086年 真書
表5 11	第1面路盤	鉄				「五銖」初鑄前118年 薄い
表5 12	第1面路盤	鉄				「熙德元宝」初鑄1004年 真書
表5 13	第1面路盤	鉄				銘種不明 「□□元寶」
28 1	第1面渾1a	かわらけ	7.40	5.50	1.55	胎土は黑色砂、白針、雲母片と少量の泥岩粒を含む淡茶色弱彩質土。
28 2	第1面渾1a	かわらけ	7.30	4.90	1.80	胎土は黑色砂、白針、雲母片と少量の泥岩粒を含む淡茶色弱彩質土。
28 3	第1面渾1a	かわらけ	7.50	4.35	2.10	胎土は多くの黑色砂、白針、雲母片、泥岩粒を含む淡茶色弱彩質土。

表7 遺物観察表(6)

辨認番号	出土地	種類	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
28 4	第1面溝1a	かわらけ	(7.90)	(4.80)	(1.90)	胎土は黒色砂、白針、雲母片と多くの泥岩粒を含む肌色砂質土。スノコ痕不明瞭。
28 5	第1面溝1a	木製塗転用品	遺存長23.4×幅9.5×厚0.9			黒色漆塗後に朱色を呈する赤色漆スタンプ文。
29 1	第1面溝7	常滑片口鉢Ⅱ類	36.90	/	/	胎土は白色小石を多く含む黒色土。器表は褐色。
30 1	第1面溝1b	かわらけ	8.00	5.00	1.70	遺存片は全体に擲けた灰黒色弱砂質土。
30 2	第1面溝1b	かわらけ	(7.70)	(5.20)	(1.65)	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片を含む淡茶～暗肌色弱砂質土。スノコ痕かすか。
30 3	第1面溝1b	かわらけ	7.20	4.80	1.85	胎土は黒色砂、白針、雲母片、泥岩粗粒を含む肌色弱砂質土。
30 4	第1面溝1b	かわらけ	(7.40)	(5.00)	(1.80)	胎土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片を含む淡茶色弱砂質土。スノコ痕不明瞭。
30 5	第1面溝1b	かわらけ	7.40	5.40	1.70	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片、泥岩小塊を含む淡茶色弱砂質土。
30 6	第1面溝1b	かわらけ	(7.70)	(5.60)	(1.90)	胎土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片、泥岩粒を含む肌色弱砂質土。
30 7	第1面溝1b	かわらけ	7.60	4.90	1.85	胎土は黒色砂、雲母片、白色泥粒、泥岩粗粒を含む暗橙色弱砂質土。
30 8	第1面溝1b	かわらけ	7.00	5.15	1.90	胎土は黒色砂、白針、泥岩粗粒を含む暗肌色弱砂質土。スノコ痕不明瞭。
30 9	第1面溝1b	かわらけ	7.10	4.70	2.15	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片と泥岩小塊を含む橙色弱砂質土。
30 10	第1面溝1b	かわらけ	7.30	4.40	2.20	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片を含む暗肌色弱砂質土。スノコ痕かすか。
30 11	第1面溝1b	かわらけ	6.70	4.20	1.95	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片を含む淡橙色弱砂質土。
30 12	第1面溝1b	かわらけ	12.00	8.40	2.90	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片と泥岩粗粒を多く含む暗橙色砂質土。
30 13	第1面溝1b	かわらけ	10.30	(5.70)	(3.00)	胎土は黒色砂、白色泥粒、雲母片を少量含む淡橙色弱砂質土。スノコ痕不明瞭。
30 14	第1面溝1b	かわらけ	(11.90)	(7.20)	(3.10)	胎土は黒色砂、白針、白色泥粒、雲母片と多くの泥岩粗粒を含む暗橙色砂質土。スノコ痕不明瞭。
30 15	第1面溝1b	瓦質火鉢	/	37.00	/	胎土は白色砂を含む淡黄～灰色。焼成良好。
30 16	第1面溝1b	丸瓦	/	/	/	胎土は灰褐色質土。器表は黒色。
30 17	第1面溝1b	半瓦	/	/	/	胎土は白針を含む灰褐色質土。胎芯と器表は黒色。
30 18	第1面溝1b	常滑片口鉢Ⅲ類	43.20	20.60	19.30	胎土は多くの白色小石を含む淡茶色。器表は赤褐色を呈する。焼成はやや甘い。
30 19	第1面溝1b	骨製笄	遺存長10.95×幅1.65×厚0.25			
30 20	第1面溝1b	用途不明石製品	遺存長L9.9×幅3.0			暗赤褐色質岩。
30 21	第1面溝1b	砥石	遺存長7.15×幅3.3×厚0.85			淡黄色細粒泥岩。鳴律。
30 22	第1面溝1b	砥石	遺存長9.15×幅3.15×厚1.85			淡黄色細粒泥岩。鳴律。
30 23	第1面溝1b	鍼				「開元通寶」薄い、穴あり。唐錢
30 24	第1面溝1b	鍼				「天聖元寶」神符1023年 葉書
30 25	第1面溝1b	鍼				「皇宋通寶」穴あり。初符1038年 葉書
30 26	第1面溝1b	鍼				「至和元寶」神符1054年 葉書
30 27	第1面溝1b	鍼				「嘉祐元寶」神符1065年 行書
30 28	第1面溝1b	鍼				「熙寧元寶」神符1068年 葉書
30 29	第1面溝1b	鍼				「元豐通寶」神符1078年 葉書
30 30	第1面溝1b	鍼				「紹聖元寶」神符1094年 行書
30 31	第1面溝1b	鍼				「紹聖元寶」神符1094年 葉書
30 32	第1面溝1b	鍼				「元符通寶」神符1098年 行書
30 33	第1面溝1b	鍼				「聖宋元寶」神符1101年 行書
30 34	第1面溝1b	鍼				「政和通寶」初符1111年 錄書
31 35	第1面溝1b	木製鋤加工達上品	全長7.7×幅2.4×厚2.8			
31 36	第1面溝1b	木製鋤	全長9.0×幅3.1×厚2.2			
31 37	第1面溝1b	木製鋤	全長9.7×幅2.9×厚2.45			
31 38	第1面溝1b	木製鋤	遺存長10.2×幅3.0×厚2.1			
31 39	第1面溝1b	木製盆	遺存長3.8×幅2.7×厚0.5			
31 40	第1面溝1b	木製調度施り	長3.5×遺存幅6.6×厚1.0			
31 41	第1面溝1b	ヤマネコ木偶	/	/	/	
31 42	第1面溝1b	形代(人形)	全長10.0×幅(頭部)0.85			
31 43	第1面溝1b	刀子柄	全長12.85×幅2.1×厚0.65			

表7 遺物観察表(7)

件目番号	出 土 地	種 別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
31 44	第1面溝1b	用途不明木製品	全長20.4×幅1.8×厚0.8			
31 45	第1面溝1b	用途不明木製品	全長12.3×幅3.05×厚1.5			
31 46	第1面溝1b	用途不明木製品	全長2.85×径3.35			図中下端中央に本釘が残る。
31 47	第1面溝1b	梢子	全長28.1×幅1.8×厚0.35			
31 48	第1面溝1b	用途不明木製品	全長13.0×幅1.4×厚1.3			加工途上の可能性大きい。
31 49	第1面溝1b	追削下駄	全長22.7×幅7.2×厚5.9			製作途中品か再加工品
32 50	第1面溝1b	著	全長19.1×幅0.6×厚0.45			
32 51	第1面溝1b	著	全長17.2×幅0.75×厚0.5			
32 52	第1面溝1b	著	全長17.8×幅0.65×厚0.45			
32 53	第1面溝1b	著	全長19.0×幅0.75×厚0.45			
32 54	第1面溝1b	著	全長18.8×幅0.8×厚0.4			
32 55	第1面溝1b	著	全長18.5×幅0.65×厚0.5			
32 56	第1面溝1b	著	全長20.3×幅0.7×厚0.35			
32 57	第1面溝1b	著	全長20.4×幅0.8×厚0.6			
32 58	第1面溝1b	著	全長20.6×幅0.8×厚0.45			
32 59	第1面溝1b	著	全長20.9×幅0.5×厚0.6			
32 60	第1面溝1b	著	全長20.7×幅0.7×厚0.55			
32 61	第1面溝1b	著	全長20.7×幅0.5×厚0.45			
32 62	第1面溝1b	著	全長21.1×幅0.75×厚0.35			
32 63	第1面溝1b	著	全長20.9×幅0.6×厚0.3			
32 64	第1面溝1b	著	全長20.4×幅0.6×厚0.5			
32 65	第1面溝1b	著	全長20.3×幅0.7×厚0.55			
32 66	第1面溝1b	著	全長20.1×幅0.75×厚0.4			
32 67	第1面溝1b	著	全長21.1×幅0.8×厚0.45			
32 68	第1面溝1b	著	全長22.5×幅0.7×厚0.5			
32 69	第1面溝1b	著	全長21.9×幅0.7×厚0.55			
32 70	第1面溝1b	著	全長20.7×幅0.7×厚0.55			図上の下端は無調整。
32 71	第1面溝1b	著	全長21.1×幅0.8×厚0.5			
32 72	第1面溝1b	著	全長20.5×幅0.9×厚0.5			図上の下端は全く無調整。
32 73	第1面溝1b	著	全長21.4×幅0.8×厚0.6			
32 74	第1面溝1b	著	全長21.8×幅0.8×厚0.4			
32 75	第1面溝1b	著	全長21.3×幅0.7×厚0.45			
32 76	第1面溝1b	著	全長20.2×幅0.6×厚0.45			図上の下端は実らない。
32 77	第1面溝1b	著	全長19.7×幅0.7×厚0.45			上下端に細なケズりなし。
32 78	第1面溝1b	著	全長23.2×幅0.7×厚0.65			
32 79	第1面溝1b	著	全長23.6×幅0.8×厚0.45			
32 80	第1面溝1b	著	全長22.7×幅0.7×厚0.5			
32 81	第1面溝1b	著	全長23.1×幅0.8×厚0.4			
32 82	第1面溝1b	著	全長23.0×幅0.7×厚0.45			
32 83	第1面溝1b	著	全長21.5×幅0.65×厚0.55			
32 84	第1面溝1b	著	全長23.0×幅0.9×厚0.5			
32 85	第1面溝1b	著	全長23.0×幅0.8×厚0.55			
32 86	第1面溝1b	著	全長22.0×幅0.6×厚0.4			
32 87	第1面溝1b	著	全長22.5×幅0.5×厚0.5			
32 88	第1面溝1b	著	全長23.5×幅0.9×厚0.45			
32 89	第1面溝1b	著	全長22.9×幅0.7×厚0.4			
32 90	第1面溝1b	著	全長22.6×幅0.8×厚0.45			
32 91	第1面溝1b	著	全長21.9×幅0.8×厚0.9			
32 92	第1面溝1b	著	全長23.3×幅0.8×厚0.4			
32 93	第1面溝1b	著	全長23.3×幅0.6×厚0.5			
32 94	第1面溝1b	著	全長22.9×幅0.8×厚0.45			図上の裏面は無調整。上下端も実らない。
32 95	第1面溝1b	著	全長22.5×幅0.8×厚0.7			
32 96	第1面溝1b	著	全長23.3×幅0.8×厚0.45			

表7 遺物観察表(8)

件名	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
32 97 第1面溝1b	著		全長23.4×幅0.7×厚0.45			
32 98 第1面溝1b	著		全長23.5×幅0.7×厚0.35			
32 99 第1面溝1b	著		全長22.1×幅0.8×厚0.45			図上の裏面は無調整。上下端も尖らない。
32 100 第1面溝1b	著		全長23.3×幅0.6×厚0.6			
32 101 第1面溝1b	著		全長22.8×幅0.65×厚0.3			ケズリは両端のみ。
32 102 第1面溝1b	著		全長23.3×幅0.7×厚0.35			上下端にケズリなし。
32 103 第1面溝1b	著		全長23.1×幅0.8×厚0.45			
32 104 第1面溝1b	著		全長23.5×幅0.7×厚0.5			
32 105 第1面溝1b	著		全長23.3×幅0.7×厚0.5			
32 106 第1面溝1b	著		全長24.7×幅0.7×厚0.5			
32 107 第1面溝1b	著		全長24.2×幅0.6×厚0.45			
32 108 第1面溝1b	著		全長24.1×幅0.7×厚0.5			
32 109 第1面溝1b	著		全長24.2×幅0.8×厚0.5			
32 110 第1面溝1b	著		全長24.1×幅0.7×厚0.4			
32 111 第1面溝1b	著		全長25.2×幅1.0×厚0.45			
32 112 第1面溝1b	著		全長25.8×幅0.8×厚0.5			
33 1 第1面溝1c	かわらけ	(7.50)	(5.80)	(1.50)		胎土は白色泥状、雲母片を含む灰黑色弱塑質土。口唇から口縁に焼付着。スノコ痕不明瞭。
33 2 第1面溝1c	かわらけ	(7.60)	(5.40)	(1.80)		胎土は黒色砂、白封、白色泥状と多くの雲母片を含む淡茶色弱塑質土。スノコ痕不明瞭。
33 3 第1面溝1c	かわらけ	(7.80)	(4.60)	(1.65)		胎土は黒色砂、白色泥状、雲母片と多くの泥岩小塊を含む淡茶色弱塑質土。
33 4 第1面溝1c	かわらけ	8.00	4.70	1.55		胎土は黒色砂、白色泥状と多くの泥岩小塊を含む淡茶色弱塑質土。
33 5 第1面溝1c	かわらけ	7.60	5.40	1.75		胎土は黒色砂、白色泥状と多くの白封を含む暗褐色弱塑質土。スノコ痕不明瞭。
33 6 第1面溝1c	かわらけ	(7.10)	(4.60)	(2.05)		胎土は黒色、雲母片と少量の白色泥状を含む淡茶色弱塑質土。舟手丸深型。
33 7 第1面溝1c	かわらけ	12.10	8.00	3.15		胎土は黒色砂、白色泥状と多くの泥岩小塊を含む暗褐色弱塑質土。スノコ痕不明瞭。
33 8 第1面溝1c	かわらけ	(10.90)	(6.50)	(2.90)		胎土は黒色砂、白色泥状と少量の泥岩小塊を含む淡茶色弱塑質土。破片の一部に研磨痕あり。
33 9 第1面溝1c	かわらけ	13.25	7.60	3.35		胎土は黒色砂と少量の白色泥状を含む淡茶色弱塑質土。
33 10 第1面溝1c	かわらけ	/	(7.30)	/		胎土は黒色砂、白色泥状、雲母片を含む暗褐色弱塑質土。内外面に墨書き。
33 11 第1面溝1c	軒丸瓦	/	/	/		胎土は雲母繊片を少量含む暗灰色弱塑質土。
33 12 第1面溝1c	常滑片口鉢丁類	/	/	/		胎土は白色微粒～小石を多く含む明灰色土。
33 13 第1面溝1c	常滑片口鉢丁類	/	/	/		胎土は白色微粒～小石を多く含む橙～暗褐色土。
33 14 第1面溝1c	常滑片口鉢丁類	/	/	/		胎土は白色微粒～小石を多く含む灰土。外面口縁以下は自然隕灰が激しく調整痕不明瞭。
33 15 第1面溝1c	瀬戸灰釉鉢皿	/	/	/		胎土は淡黄色弱塑質土。釉は不透明の淡黄緑色。外底面は露胎。
33 16 第1面溝1c	青磁碗	/	/	/		胎土は明灰色弱塑質鐵緑色。釉は不透明翠緑色で貫入あり。
33 17 第1面溝1c	青磁鍋蓋弁文鏡	/	/	/		胎土は明灰色弱塑質鐵緑色。釉は半透明淡緑色。
33 18 第1面溝1c	鉄釘	全長5.4×幅0.45×厚0.35				
33 19 第1面溝1c	鉄箸	遺存長17.3×径0.45				
33 20 第1面溝1c	銭					「開元油寶」背文「月」。薄い。唐錢
33 21 第1面溝1c	銭					「淳化元寶」。初鑄990年 行書
33 22 第1面溝1c	銭					「祥符元寶」。輪轍・初鑄1009年
33 23 第1面溝1c	銭					「天禧通寶」。初鑄1017年
33 24 第1面溝1c	銭					「聖宋元寶」。初鑄1023年 菱書
33 25 第1面溝1c	銭					「皇宋通寶」。初鑄1038年 真書
33 26 第1面溝1c	銭					「皇宋通寶」。初鑄1038年 真書
33 27 第1面溝1c	銭					「熙寧元寶」。初鑄1068年 菱書
33 28 第1面溝1c	銭					「熙寧元寶」。初鑄1068年 真書

表7 遺物観察表(9)

排列番号	出 土 地	種 別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
33 29	第1面溝1c	鉢				「聖宋元寶」 初鑄1101年 行書
33 30	第1面溝1c	鉢				「正隆元寶」 初鑄1157年 金朝
33 31	第1面溝1c	鐵石	遺存長5.1×幅3.45×厚0.15			淡灰綠色織紋泥岩。
33 32	第1面溝1c	滑石鑑		(20.60)		内外面共に傷が付着するが、外側の跡より下方に激しく付着する。
34 33	第1面溝1c	漆皿	9.90	6.70	1.75	全面に黒色漆を施し、内面のみに赤色漆を塗した上に黒色漆で文様を手描きする。
34 34	第1面溝1c	漆皿	(8.15)	(6.50)	(0.75)	黒色の施漆後に朱色を呈する赤色漆でスタンプ文。
34 35	第1面溝1c	漆皿	9.20	7.40	1.10	黒色漆のみ。外表面に削りあり。
34 36	第1面溝1c	木製脚	全長4.25×幅1.7			粗い削り調整。
34 37	第1面溝1c	木製脚	全長5.3×幅2.0×厚1.85			はぞを除いた全面に黒色漆塗布。
34 38	第1面溝1c	木製脚	全長6.35×幅1.7×厚2.0			施漆の痕跡なし。
34 39	第1面溝1c	木製脚	全長6.8×幅2.6×厚1.5			はぞを除いて全面に黒色漆が塗りされる。
34 40	第1面溝1c	木製脚	全長7.55×幅1.9×厚1.4			はぞを除いて全面に黒色漆が塗りされる。 一部に朱色を呈する赤色漆が残る。
34 41	第1面溝1c	木製脚	全長11.4×幅3.4×厚2.5			はぞを除いて全面に黒色漆塗布される。 一部に赤色漆が残る。
34 42	第1面溝1c	木製脚	全長10.0×幅2.6×厚2.9			はぞを除いて黒色漆が塗りされる。
34 43	第1面溝1c	曲物蓋?	径22.3×厚0.5			
34 44	第1面溝1c	木製把手	遺存長9.8×幅1.0×厚0.8			
34 45	第1面溝1c	用途不明木製品	全長10.6×幅6.3×厚0.75			
34 46	第1面溝1c	押	遺存長8.3×幅4.8×厚1.0			全面に黒色漆塗布。
34 47	第1面溝1c	子供用連座下駄	全長13.7×幅6.7×厚1.4			
34 48	第1面溝1c	連座下駄	全長22.4×幅7.4×厚2.6			
34 49	第1面溝1c	連座下駄	全長23.5×幅10.3×厚5.45			裏面に削り痕がわずかに残る。
35 50	第1面溝1c	杓子状木製品	全長22.3×幅6.7×厚0.35			
35 51	第1面溝1c	研玉柄	全長19.2×幅2.6×厚0.9			
35 52	第1面溝1c	糸巻き	長11.6×幅0.95×厚1.25			
35 53	第1面溝1c	用途不明木製品	遺存長5.95×幅3.0×厚0.15			
35 54	第1面溝1c	矢柄調整器	全長28.35×幅2.55×厚2.85			
35 55	第1面溝1c	扇子部材	遺存長19.8×幅2.2×厚1.3			
35 56	第1面溝1c	円盤状木製品	径5.80×厚1.0			
35 57	第1面溝1c	円盤状木製品	径6.3×厚1.2			
35 58	第1面溝1c	円盤状木製品	径2.6×厚1.0			
35 59	第1面溝1c	円盤状木製品	径9.6×厚0.8			
35 60	第1面溝1c	用途不明木製品	全長12.1×幅1.4×厚3.0			
35 61	第1面溝1c	用途不明木製品	全長13.9×幅4.0×厚3.1			
35 62	第1面溝1c	組み合わせ部材	全長28.1×幅1.2			
35 63	第1面溝1c	製作形代	遺存長12.1×幅1.45			
35 64	第1面溝1c	ヘラ状木製品	全長20.4×幅1.1×厚0.6			先端部が焦げている
35 65	第1面溝1c	ヘラ状木製品	遺存長20.8×幅1.3×厚0.7			
35 66	第1面溝1c	ヘラ状木製品	全長26.0×幅1.2×厚0.8			
35 67	第1面溝1c	用途不明木製品	全長19.7×幅1.8×厚1.8			全体に丁寧な削り調整を残す。加工途上品の転用か?
35 68	第1面溝1c	用途不明木製品	遺存長12.0×幅3.15×厚0.8			
35 69	第1面溝1c	木製脚加工途上品	全長9.7×幅1.9×厚2.2			
35 70	第1面溝1c	杵?	遺存長11.8×幅4.6×厚3.9			
35 71	第1面溝1c	職具	遺存長19.3×幅3.8×厚1.4			
36 72	第1面溝1c	箸	全長17.6×幅0.6			
36 73	第1面溝1c	箸	全長19.4×幅0.7			
36 74	第1面溝1c	箸	全長19.1×幅0.7×厚0.5			
36 75	第1面溝1c	箸	全長19.5×幅0.5×厚0.3			
36 76	第1面溝1c	箸	全長19.0×幅0.7×厚0.4			
36 77	第1面溝1c	箸	全長19.6×幅0.75×厚0.7			
36 78	第1面溝1c	箸	全長19.5×幅0.5			
36 79	第1面溝1c	箸	全長18.9×幅0.9×厚0.45			

表7 遺物観察表(10)

辨別番号	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
36 80	第1面溝1c	箸			全長20.0×幅0.7×厚0.4	
36 81	第1面溝1c	箸			全長21.4×幅0.4	
36 82	第1面溝1c	箸			全長21.8×幅0.9×厚0.5	
36 83	第1面溝1c	箸			全長21.3×幅0.6×厚0.4	
36 84	第1面溝1c	箸			全長20.6×幅0.5	
36 85	第1面溝1c	箸			全長21.8×幅0.7×厚0.35	
36 86	第1面溝1c	箸			全長21.3×幅0.7×厚0.4	
36 87	第1面溝1c	箸			全長21.2×幅0.8×厚0.75	
36 88	第1面溝1c	箸			全長22.0×幅0.7×厚0.55	
36 89	第1面溝1c	箸			全長22.8×幅0.8×厚0.5	
36 90	第1面溝1c	箸			全長21.7×幅0.7×厚0.55	
36 91	第1面溝1c	箸			全長22.9×幅0.4	
36 92	第1面溝1c	箸			全長22.7×幅0.6×厚0.5	
36 93	第1面溝1c	箸			全長21.5×幅0.7×厚0.5	
36 94	第1面溝1c	箸			全長22.2×幅0.7×厚0.5	
36 95	第1面溝1c	箸			全長22.6×幅0.7×厚0.45	
36 96	第1面溝1c	箸			全長20.7×幅0.8×厚0.5	
36 97	第1面溝1c	箸			全長20.5×幅0.6×厚0.4	
36 98	第1面溝1c	箸			全長21.2×幅0.8×厚0.3	
36 99	第1面溝1c	箸			全長21.7×幅0.6×厚0.5	
36 100	第1面溝1c	箸			全長22.4×幅0.7×厚0.6	
36 101	第1面溝1c	箸			全長23.2×幅0.7×厚0.45	
36 102	第1面溝1c	箸			全長22.9×幅0.6×厚0.5	
36 103	第1面溝1c	箸			全長24.8×幅0.6×厚0.45	
36 104	第1面溝1c	箸			全長23.3×幅0.7×厚0.5	
36 105	第1面溝1c	箸			全長25.3×幅0.6×厚0.45	
36 106	第1面溝1c	箸			全長24.3×幅0.8×厚0.8	
36 107	第1面溝1c	箸			全長24.6×幅0.7×厚0.65	図上の下半は未調整。
37 1	第1面溝8	白船口瓦瓶	10.80			素地は白色弱粘質緻密土。釉は緑味乳白色。
37 2	第1面溝8	木製櫛			全長3.0×幅2.15	
37 3	第1面溝8	用途不明木製品			全長3.4×幅0.8×厚1.7	面取加工が粗い。
37 4	第1面溝8	格子			遺存長11.7×幅2.1×厚1.85	木釘跡が2ヶ所に残る。
37 5	第1面溝8	格子			遺存長19.5×幅1.8×厚1.4	
38 1	第1面溝2	かわらけ	8.00	5.45	1.95	胎土は黒色砂、白粉を含む暗淡茶色鉢形質土。
38 2	第1面溝2	鏡				「祥符通寶」輪abr 初鑄1009年
39 1	第1面土壤1	かわらけ	7.50	5.40	1.95	胎土は黒色砂、白粉、白色泥紋と混岩粒を含む淡茶色鉢形質土。
39 2	第1面土壤1	平足				胎土は黒色粗砂を多く含む灰砂質土。器表は黒色。
39 3	第1面ビット13	かわらけ	8.00	5.90	2.00	胎土は黒色砂、白粉をわずかに含む淡茶色弱粘質土。
39 4	第1面ビット13	鉢				「元符通寶」初鑄1098年 紙書
40 1	第1面直上	鉢				「至道通寶」初鑄995年 紙書
40 2	第1面直上	鏡			径2.15	「皇宋通寶」薄い 小さい楕圓か? 初鑄1038年 真書
40 3	第1面直上	鏡				「元豐通寶」初鑄1078年 紙書
40 4	第1面直上	鏡				「聖宋元宝」孔加工 初鑄1101年 紙書
41 1	第1面下	常滑片口鉢Ⅰ類	21.20	12.40	(6.65)	胎土は白色細石を含む灰色土。器表は暗灰色。
41 2	第1面下	常滑片口鉢Ⅱ類	(28.80)			胎土は白色微石を含む灰褐色緻密土。器表は赤褐色。実測図の傾きは不安。
41 3	第1面下	常滑片口鉢Ⅲ類	(38.80)			胎土は白色小石を多く含む黑色土。器表は暗赤色。
41 4	第1面下	磁石				淡紅色緻密泥岩。
41 5	第1面下	鏡				「元符通寶」初鑄1078年 行書
41 6	第1面下	鏡				「元豐通寶」初鑄1078年 行書
41 7	第1面下	漆器	(8.70)	(7.00)	(1.35)	黒色の施漆後に朱色を呈する赤色漆で手描き巴文。
41 8	第1面下	木製櫛身				図上の上方と左側面を隠して黒色漆塗がされる。
41 9	第1面下	箸				全長22.3×幅0.7×厚0.35
41 10	第1面下	箸				全長21.4×幅0.7×厚0.4

表7 遺物観察表(II)

拂田番号	出 土 場	種 別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
41 11	第1面下	箸		全長19.8×幅0.8×厚0.65		
41 12	第1面下	箸		全長18.5×幅0.6×厚0.5		
41 13	第1面下	鍤		全長30.9		木部と金属部が一体のまま出土。
41 14	第1面下	形代(片口)	3.85	2.45	1.55	
41 15	第1面下	板草瓶芯		全長15.8×厚0.3		蓋の圧痕が残されていない。
42 1	第1面上	かわらけ	3.70	2.80	0.80	胎土は黒色砂。白色泥粒をわずかに含む帶色粉質精良土。スノコ痕なし。
42 2	第1面上	かわらけ	(7.20)	(5.40)	(1.40)	胎土は黒色砂、白鉢、白色泥粒、雲母片を含む淡色弱粉質土。口唇から口縁にかけて煤付着。
42 3	第1面上	かわらけ	7.70	5.50	1.75	胎土は黒色砂。雲母片、白色泥粒、泥岩粗粒を含む淡色弱粉質土。
42 4	第1面上	かわらけ	7.50	5.60	1.60	胎土は黒色砂。白色泥粒。雲母片と泥岩粗粒を含む肌色弱粉質土。スノコ痕不明瞭。
42 5	第1面上	かわらけ	8.30	6.20	1.60	胎土は黒色砂。白鉢。泥岩粗粒を含む淡色弱粉質土。
42 6	第1面上	かわらけ	7.70	5.65	1.70	胎土は黒色砂。白鉢。雲母片と多くの泥岩粗粒を含む肌色粉質土。口唇部に煤付着。スノコ痕不明瞭。
42 7	第1面上	かわらけ	7.65	5.30	1.90	胎土は黒色砂。雲母片、白色泥粒と多くの泥岩粗粒を含む肌色弱粉質土。口唇から口縁にかけて煤付着。
42 8	第1面上	かわらけ	(7.80)	(4.80)	(1.40)	胎土は黒色砂。白鉢、雲母片、白色泥粒。
42 9	第1面上	かわらけ	8.00	5.00	2.00	胎土は多くの黒色砂、雲母片、白色泥粒を含む淡色弱粉質土。
42 10	第1面上	かわらけ	7.60	5.10	1.75	胎土は黒色砂、雲母片、白色泥粒と泥岩粗粒を含む淡色弱粉質土。
42 11	第1面上	かわらけ	(7.70)	(4.70)	(1.60)	胎土は黒色砂、白鉢、雲母片と多くの泥岩粗粒を含む淡色弱粉質土。
42 12	第1面上	かわらけ	(7.90)	(5.90)	(1.85)	胎土は黒色砂、白色泥粒、白鉢と泥岩粗粒を含む淡色弱粉質土。口縁部と遺存部の一部に研磨痕あり。
42 13	第1面上	かわらけ	(7.10)	(4.60)	(2.20)	胎土は黒色砂、雲母片に少量の白色泥粒を含む帶色粉質土。薄手丸底型。
42 14	第1面上	かわらけ	(10.25)	(6.00)	(3.15)	胎土は黒色砂、雲母片とわずかな白色泥粒を含む淡色弱粉質良土。薄手丸底型。スノコ痕かすか。
42 15	第1面上	かわらけ	12.40	8.20	3.30	胎土は黒色砂、白鉢、雲母片、泥岩粗粒を含む暗色弱粉質土。スノコ痕かすか。
42 16	第1面上	丸瓦	/	/	/	胎土は黒色、白色砂を含む灰白色土。器表は黒色。軽く焼き上がる。踏盤の丸瓦と同形か?
42 17	第1面上	瀬戸灰釉鉢皿	/	/	/	胎土は灰色一端淡橙色。胎は半透明な淡緑色。
42 18	第1面上	瀬戸灰釉鉢皿	/	/	/	胎土は淡黃色弱粉質土。胎は不透明な淡黃緑色。
42 19	第1面上	瀬戸灰釉小壺		5.10	/	胎土は灰色一端淡橙色で、胎は不透明な淡緑色。
42 20	第1面上	瀬戸輪花壓入子	/	3.20	/	胎土は灰褐色弱粉質土。
42 21	第1面上	瀬戸入子	(7.30)	4.20	3.20	胎土は灰白色弱粉質土。
42 22	第1面上	常滑片口鉢Ⅱ類			/	胎土は白色細粒を含む黒色微密土。器表は黒赤色。
42 23	第1面上	常滑片口鉢Ⅱ類			/	胎土は白色細粒を多量に含む淡茶色土。
42 24	第1面上	常滑山系碗		7.20	/	胎土は白色微粒一一小石を多く含む暗灰色一暗褐色微密土。
42 25	第1面上	肥前染付小碗	(7.90)	2.80	3.80	胎土は白色弱粉質密土。染付は藍色。
42 26	第1面上	青磁龍蓮弁文碗	12.90	/	/	素地は灰色弱粉質密土。胎は不透明な暗緑色。
42 27	第1面上	砥石	遺存長7.15×幅0.5×厚1.1			淡緑色細粒泥岩。鳴尾。
42 28	第1面上	砥石	遺存長6.65×幅0.55×厚5.7			白色粗粒灰岩。
42 29	第1面上	鉄釘	遺存長15.9×幅0.55×厚0.4			
42 30	第1面上	鉄釘		全長6.2×径1.2		
42 31	第1面上	鉄釘隠し?		径4.45		諸が若しいが、古く還元している。
42 32	第1面上	鉄				「開元通寶」欠け、穴あり。唐錢
42 33	第1面上	鉄				「開元通寶」唐錢
42 34	第1面上	鉄				「開元通寶」唐錢
42 35	第1面上	鉄				「開元通寶」南朝 初唐960年 茶書
42 36	第1面上	鉄				「淳化元寶」孔加工 初唐960年 草書
42 37	第1面上	鉄				「咸平元宝」初唐998年 真書
42 38	第1面上	鉄				「祥符元宝」初唐1008年 行書
42 39	第1面上	鉄				「天禧通寶」初唐1017年 行書
42 40	第1面上	鉄				「天聖元宝」初唐1023年 真書

表7 遺物観察表(12)

辨別番号	出土地	種別	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
42 41	第1面上	鉢				「聖元寶」 初跡1023年 真書
42 42	第1面上	鉢				「皇宋通寶」 初跡1038年 真書
42 43	第1面上	鉢				「皇宋通寶」 初跡1038年 葉書
42 44	第1面上	鉢				「嘉祐通寶」 初跡1056年 真書
42 45	第1面上	鉢				「嘉祐通寶」 初跡1056年 真書
42 46	第1面上	鉢				「治平元寶」 初跡1064年 真書
42 47	第1面上	鉢				「熙寧元寶」 穴あり。 初跡1068年 真書
42 48	第1面上	鉢				「熙寧元寶」 初跡1068年 真書
42 49	第1面上	鉢				「熙寧元寶」 穴あり、薄い、輪擦り 初跡1068年 葉書
42 50	第1面上	鉢				「元豐通寶」 初跡1078年 行書
42 51	第1面上	鉢				「元豐通寶」 初跡1078年 葉書
42 52	第1面上	鉢				「元祐通寶」 孔加工 初跡1086年 葉書
42 53	第1面上	鉢				「哲聖元寶」 初跡1094年 行書
42 54	第1面上	鉢				「元符通寶」 初跡1096年 行書
42 55	第1面上	鉢				「大觀通寶」 初跡1107年
42 56	第1面上	鉢				「聖宋元寶」 孔加工 初跡1101年 行書
42 57	第1面上	鉢				「聖宋元寶」 初跡1101年 行書
42 58	第1面上	鉢				「聖宋元寶」 初跡1101年 葉書
42 59	第1面上	鉢				「政和通寶」 初跡1111年 葉書
42 60	第1面上	鉢				「淳熙元寶」 背文「月」 初跡1174年 真書
42 61	第1面上	鉢				「慶元通寶」 背文「三」? 初跡1195年
42 62	第1面上	鉢				「寛永通寶」
42 63	第1面上	鉢				「寛永通寶」
43 64	第1面上	漆皿	9.50	6.70	1.30	全面に黒色漆塗後、赤色漆による手描きで菊を描く。
43 65	第1面上	漆皿	9.35	7.45	1.10	内外両共に黒色漆の上から赤色漆でススキを描く。
43 66	第1面上	漆皿	/	/	/	全面に黒色漆塗後、赤色漆で車輪が手描きされる。 施塗は観察できない。
43 67	第1面上	木製脚	全長10.5×幅2.9×厚2.1			
43 68	第1面上	曲物底板	径(12.6)×厚0.8			
43 69	第1面上	曲物底板	遺存長12.0×幅3.3×厚0.75			
43 70	第1面上	曲物底板	遺存長8.8×幅1.6×厚0.65			
43 71	第1面上	木製用迄不明品	全長12.1×幅4.5×厚3.5			
43 72	第1面上	子供用達函下駄	全長13.5×幅6.8×厚1.3			
43 73	第1面上	部材?	全長8.2×幅1.5			
43 74	第1面上	刀形	全長13.4×幅2.45×厚0.55			
43 75	第1面上	箸	全長20.5×幅0.6×厚0.45			
43 76	第1面上	箸	全長20.5×幅0.7×厚0.6			
43 77	第1面上	箸	全長21.5×幅0.6×厚0.55			
43 78	第1面上	箸	全長22.5×幅0.6×厚0.45			
43 79	第1面上	箸	全長23.5×幅0.8×厚0.5			
43 80	第1面上	箸	全长23.9×幅0.7×厚0.5			
43 81	第1面上	箸	全長25.0×幅0.8×厚0.25			上下端が折れる。
43 82	第1面上	粗造不明軸用木製品	長23.4×遺存幅7.3×厚1.75			裏面に黒色漆。
43 83	第1面上	木栓?	全長8.3×幅1.3×厚0.8			
43 84	第1面上	木栓	全長6.5×幅1.9×厚1.6			
43 85	第1面上	木製用迄不明品	遺存長4.2×遺存幅7.5×厚1.5			
43 86	第1面上	円盤状木製品	径7.8×厚1.55			
44 1	表面探査	常滑片口鉢II期	(34.40)			胎土は白色小石を含む黒色土。器表は赤褐色。
44 2	表面探査	青磁瓶?	/	/	/	素地は灰色弱粘質土。釉は淡緑色で貫入り。
44 3	表面探査	刀子	遺存長20.1×幅2.25×厚0.4			刀身の長さは18cm程度か。
44 4	表面探査	鉢				「寛永通寶」
46 1	確認調査中	廻戸折縁深皿	(40.80)	/	/	胎土は白色砂を多量含む明灰色土。釉は淡緑色。
46 2	確認調査中	廻戸盤	/	(18.00)	/	胎土は淡黄色粉質土。釉は暗緑色。

表7 遺物観察表(13)

検査番号	出土 地	種 別	口径(cm)	底径(cm)	厚高(cm)	備 考
46 3	確認調査中	瀬戸平窓	/	/	/	粘土は混入物の少ない淡黄色和質粘土。釉は灰青色に発色する。 二次焼成か?
46 4	確認調査中	瀬戸柄付片口	/	7.65	/	粘土は白色砂を少量含む黄白色和質土。釉は緑色。
46 5	確認調査中	漆皿	/	6.40	/	底裏まで施漆。黒色漆の上から赤色漆で文字を手書きする。
46 6	確認調査中	曲物または柄杓		外径8.2		
46 7	確認調査中	刀子柄		全長17.5×幅3.9×厚0.9		製作途上品。

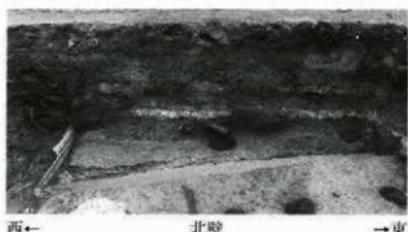
図版 1



a. 調査地点近景、左上方に北鎌倉駅



b. 調査終了時全景（西から）



西← 北壁 →東



北← 東壁 →南

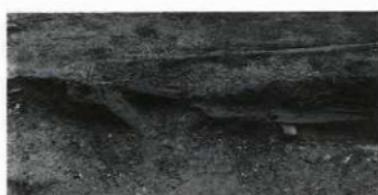


南← 西壁 →北

c. 調査区壁土層堆積状況



d. 第1面全景（西から）



図版 3



a. 第2～3面全景（西から）



b. 同左



e. 溝4（西から）



c. 溝3
(南から)



f. 溝4（南から）



d. 溝3（西から）



g. 第2面出土銅壺



a. 溝4裏込掘り上げ後（西から）



b. 溝3～5内土層堆積状況



c. ピット90内折敷とかわらけ



d. 第4面全景（西から）

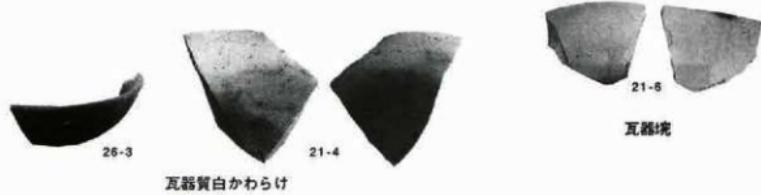
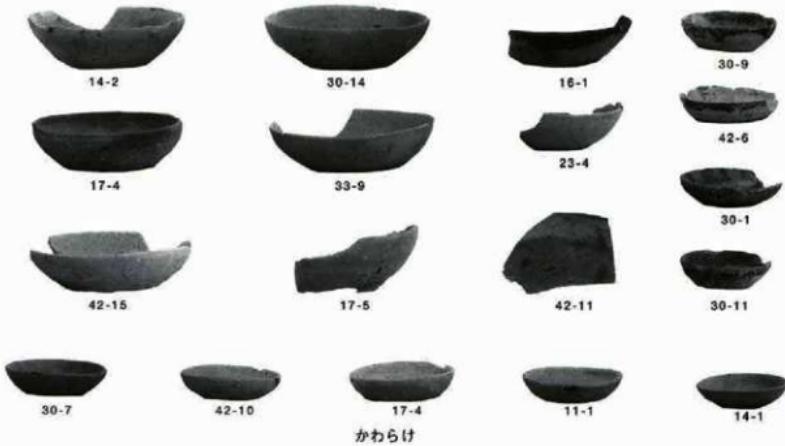


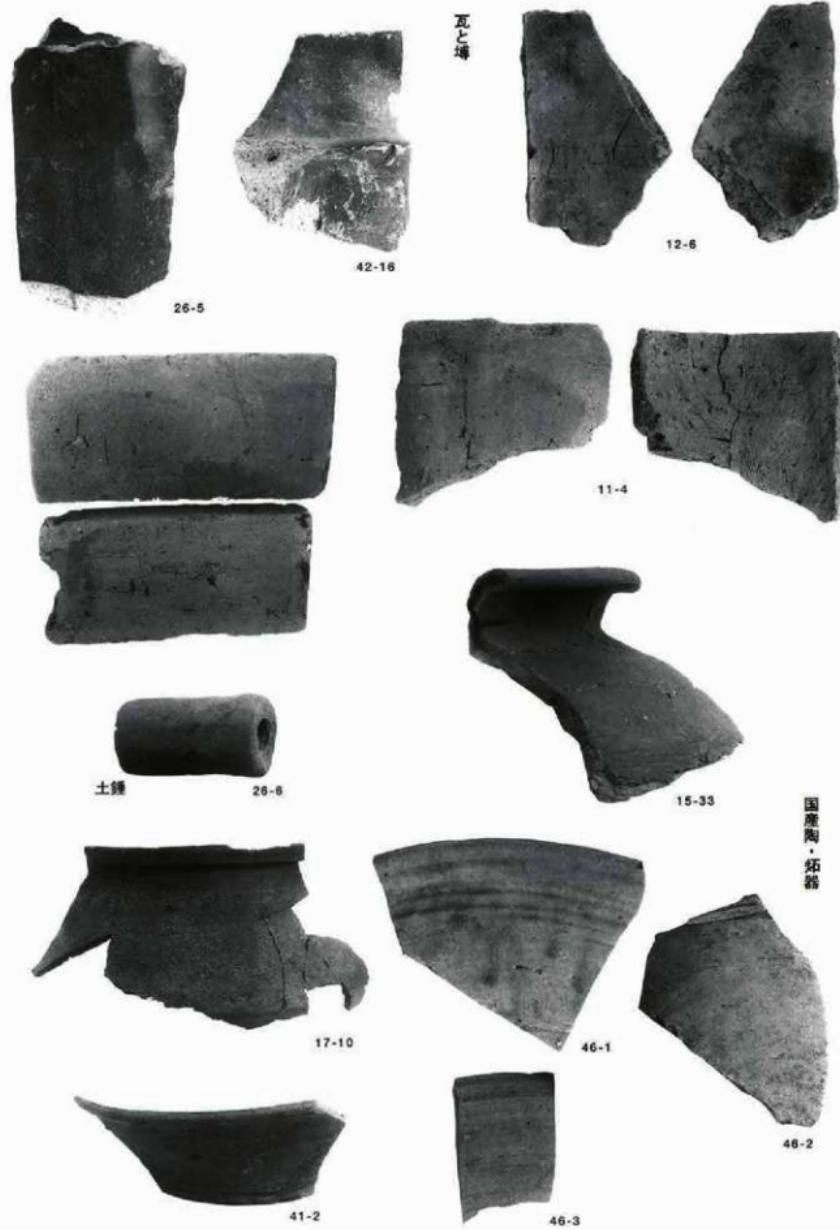
e. 溝5（南から）



f. 路盤出土五輪塔

図版5





図版 7





41-14



31-41

木製品



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名	平成16年度調査報告						
卷次	21(第2分冊)						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者	原廣志・須佐直子・鈴木茂・宮田慎・森孝子・継実・宗臺富貴子・継実・宗臺富貴子・沙見一夫・小泉衣理/原廣志・須佐直子・沙見一夫・小泉衣理/宗臺秀明・宗臺富貴子・加納克己						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦2005年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査面積 (m ²)	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村(番号)					
淨妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市淨明寺三丁目126番	14204	408	35°19'7"	139°34'30"	20020115 ~ 20020306	85.05 個人専用住宅 (地下室)
無量寺跡	神奈川県鎌倉市扇ガ谷一丁目26番27外	14204	196	35°19'8"	139°33'2"	20020715 ~ 20020913	360.00 個人専用住宅 (杭基礎構造)
玉籠城跡	神奈川県鎌倉市植木字相模陣425番3外	14204	63	35°20'56"	139°31'3"	20020715 ~ 20020814	160.00 宅地造成
天神山城	神奈川県鎌倉市山崎字宮廻747番3	14204	384	35°20'21"	139°31'43"	20020911 ~ 20020926	28.00 個人専用住宅 (杭基礎構造)
感應寺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目722番1	14204	225	35°18'11"	139°33'19"	20021113 ~ 20021225	54.00 個人専用住宅 (杭基礎構造)
北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目407番3の一部	14204	282	35°19'9"	139°33'32"	20021125 ~ 20030125	54.49 個人専用住宅 (表層地盤改良)
坂之下遺跡	神奈川県鎌倉市坂之下53番3の一部	14204	217	35°18'23"	139°32'14"	20030110 ~ 20030213	54.15 個人専用住宅 (杭基礎構造)
円覚寺門前遺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内字松岡1344番	14204	287	35°20'1"	139°32'52"	20030613 ~ 20030718	37.80 個人専用住宅 (地盤の柱状改良)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
淨妙寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代 室町時代	上塙、溝跡 井戸跡、柱穴	かわらけ、瓦、舶載陶磁器、国産陶器			
無量寺跡	社寺	鎌倉時代 室町時代	やぐら、道路状遺構、方形土塙、溝跡、土壤等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品金銅製品、石製品			
玉籠城跡	城館	戦国時代	土塁、溝状遺構、柱穴等	かわらけ、国産陶器、金属製品、石製品			
天神山城	城館	古墳時代、奈良平家時代、朝代時代	溝状遺構	土師器、須恵器、かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品			
感應寺跡	社寺	鎌倉時代 室町時代	方形竪穴建築址、土壤	かわらけ、国産陶器、土製品、木製品、金属製品、石製品			
北条小町邸跡	城館	鎌倉時代 室町時代	土壤、柱穴、溝跡、井戸跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品、金属製品、石製品			
坂之下遺跡	都市	室町時代 江戸時代	土壤、柱穴等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品			
円覚寺門前遺跡	都市	鎌倉時代 室町時代	道路状遺構、柱穴、土壤、溝跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品、金属製品、石製品	操り人形(山猫) が出土		

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21

平成16年度 発掘調査報告（第2分冊）

発行日 平成17年3月31日

編集 鎌倉市教育委員会
発行

印刷 グランド印刷株式会社